

浅見山 I 遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次) A 1 ・ B 1 地点・

北堀久下塚北遺跡

—本庄早稻田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2—

2009

本庄市教育委員会

浅見山 I 遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次) A 1・B 1 地点・

北堀久下塚北遺跡

—本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2—

2 0 0 9

本 庄 市 教 育 委 員 会



浅見山 I 遺跡（Ⅲ次）遠景（南東より）



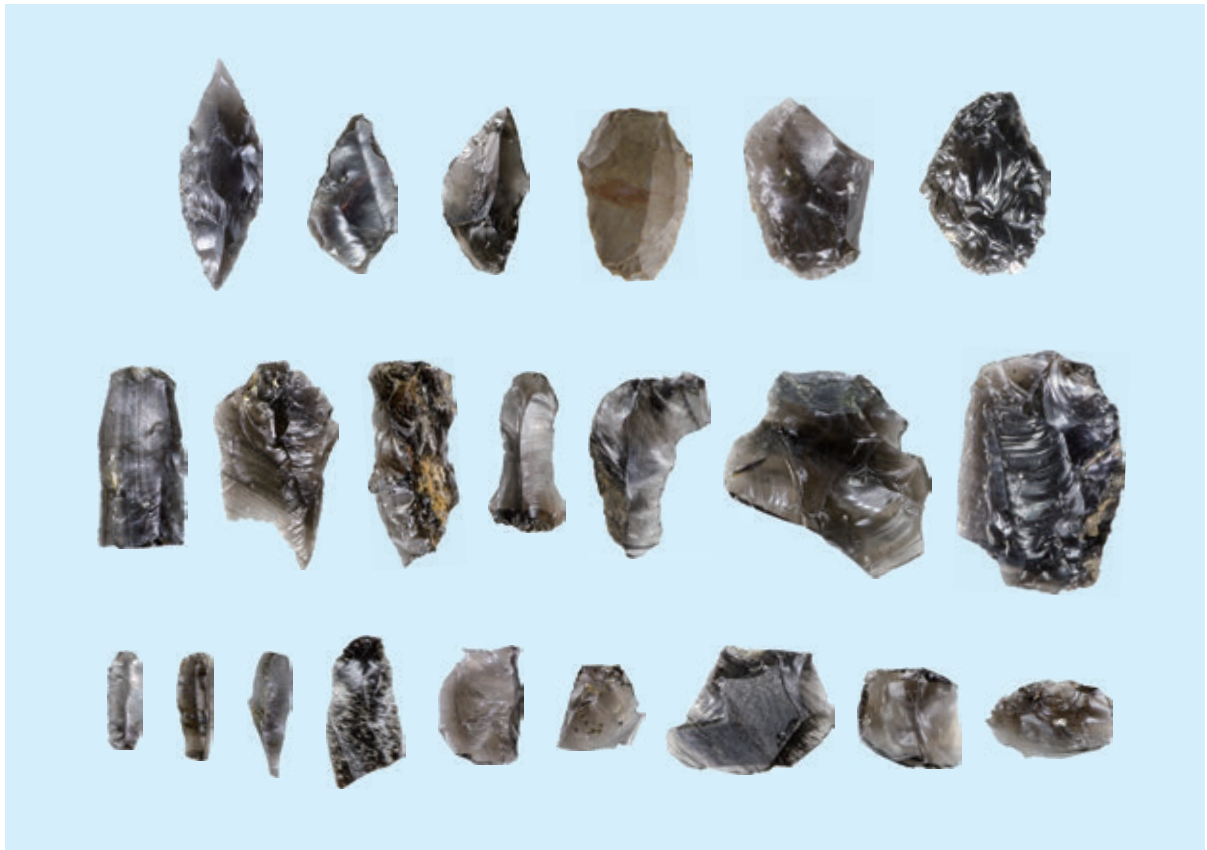
浅見山 I 遺跡（Ⅲ次）東半全景（上空より）



旧石器時代調査トレンチ6全景（北より）



旧石器時代調査トレンチ6石器出土状態（南東より）



旧石器時代の石器



縄文時代およびそれ以降の石器



2・3号方形周溝墓（上空より）



7～10号方形周溝墓（上空より）



6・7号方形周溝墓（上空より）



8号方形周溝墓南西溝土器出土状態（南東より）



久下東遺跡（Ⅲ次）B地点遠景（南より）



久下東遺跡（Ⅲ次）B地点全景（上空より）

序

本庄市は、埼玉県の北の玄関とも呼ばれ、県北の中心都市としての躍進が期待されています。そうした新たな地域拠点形成の一貫として、新幹線本庄早稲田駅の開設、早稲田リサーチパーク地区の整備や土地区画整理事業を進めてまいりました。とくに新幹線本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業は、広大な事業予定地を対象として住宅地、商・産業用地、公共施設用地、道路、公園・緑地などを整備する大規模な街づくりの事業であります。しかし、事業予定地は、本庄市域でも埋蔵文化財の大変多い一帯でもありますので、計画当初より多くの関係機関を含めて協議を重ね、埋蔵文化財の保護と開発事業の調整を慎重に行ってまいりました。

本書は、この土地区画整理事業地内の都市計画道路および産業拠点用地建設に先立ち、平成19年度に実施した浅見山Ⅰ遺跡と久下東遺跡A1・B1地点、北堀久下塚北遺跡の記録保存を目的とした発掘調査の報告書であります。

浅見山Ⅰ遺跡では、周辺地域では大変珍しい旧石器時代の黒曜石の石器や、多数の縄文土器・石器が出土し、四周を溝で囲った方形の墓からなる古墳時代の古い時期の丘陵上に並ぶ墳墓群を調査しました。久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡では、古墳時代から平安時代にかけての多数の竪穴住居跡を調査しました。

また、久下東遺跡では、中世の堀跡や井戸跡などの遺構とともに数多くの遺物が出土し、中には「天文二」年の銘文の刻まれた五輪塔などが見られました。これらの遺物は、文書に残された記録だけでは判らない、この地の歴史を物語る貴重な資料であろうかと思えます。

この報告書が、埋蔵文化財についての理解と郷土の歴史についての関心をより一層深めるための基礎資料として、多くの方々にご活用いただければ何よりの幸いと存じます。

末筆ながら、発掘調査から報告書作成にあたり、多大なご協力を賜った独立行政法人都市再生機構本庄都市開発事務所をはじめ、様々なご尽力、ご教示を賜った関係諸機関並びに各位に対して、心から御礼申し上げます。

平成21年 3 月

本庄市教育委員会
教育長 茂 木 孝 彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市西富田字大久保山1011-9他に所在する浅見山I遺跡のⅢ次調査、同本庄市北堀1293他に所在する久下東遺跡Ⅲ次調査A1・B1地点、同本庄市北堀1280に所在する北堀久下塚北遺跡I次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う都市計画道路の新駅南通り線・中央通り線および新駅南口産業業務拠点用地（浅見山I遺跡Ⅲ次調査）、中央通り線（久下東遺跡Ⅲ次調査B1地点）、新都心環状線（久下東遺跡Ⅲ次調査A地点、北堀久下塚北遺跡）の建設に先立ち実施した。発掘調査期間は、平成19年8月20日から平成20年3月14日までである。
3. 発掘調査は、本庄市教育委員会が行い、現地調査に関しては、浅見山I遺跡を松本 完が、久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡を大熊季広が担当した。
4. 発掘調査から報告書刊行に要した経費は、浅見山I遺跡都市計画道路部分および久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡に関しては、独立行政法人都市再生機構本庄都市開発事務所の委託金であり、浅見山I遺跡の産業業務拠点用地に関しては、まちづくり交付金等の補助金および市費を充てた。
5. 本書で使用した地図の内、第2図は、国土地理院発行の1/50,000地形図（「本庄」）、第4・5・137図は、1/2,500都市計画図をもとに作成した。
6. 本書で用いたXY座標値は、世界測地系による新座標値である。
7. 浅見山I遺跡I次調査の成果および今回の調査範囲に係る試掘調査の情報に関しては、昆 彭生氏（早稲田大学）に図面類等参照させて頂き、ご教示を賜った。なお、第5・6図の遺跡位置図、全体図に関しては、早稲田大学が実施したI次調査の遺跡全体図の一部を修正し、利用させて頂いた。
8. 土層および遺物の色調表現は、『新編標準土色帳』を基準とした。
9. 遺構平面図中のNo.付き番号は、挿図中の番号に一致する。
10. 旧石器・縄文時代の遺物観察表、石器観察表には、住居跡：SI、方形周溝墓：SZ、円墳：ST、土坑：SK、溝：SD、不明遺構：SX（包含層として遺構から除く）等の略号を用いた。
11. 写真図版中の遺物番号は、挿図中の遺物番号と同一である。写真図版中の遺物の縮尺は、原則として挿図中の遺物の縮尺とほぼ同じとした。
12. 遺跡上空からの写真撮影は、株式会社測研に委託した。遺跡全景写真などの写真図版は、その成果に基づくものである。
13. 丘陵の地形、地質、とくにローム層の層序、テフラの観察に関しては、現地調査時より中村正芳氏（本庄高等学校）に様々なご教示を賜った。
14. 本書に関わる自然科学分析に関しては、株式会社パレオ・ラボに委託した。
15. 本書で用いた全体図、遺構図面に関しては、現地作業時の図化作業および報告書作成段階の製図作業の一部を、株式会社測研に委託した。
16. 浅見山I遺跡、久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡の出土土器・土製品、陶磁器類、石製品の一部に関しては、整理作業の一部と写真撮影を、有限会社毛野考古学研究所に委託した。浅見山I遺跡の旧石器～弥生時代の石器類に関しては、整理作業の一部と写真撮影を、有限会社アルケーリサーチ

に委託した。

17. 本書の執筆は、第IV章第2節4・6を大熊が行い、第III章第2節8の縄文時代の石器・石製品の分類、記載および第VII章第1節(2)については、藤波啓容氏(アルケーリサーチ)が行った。第VII章については、藤根久、米田恭子、伊藤茂、丹生越子、廣田正史、瀬谷薫、小林紘一、Zaur Lomtadidze、Ineza Jorjoliani、竹原弘展の各氏(パレオ・ラボ)の報告を編集し、掲載した。なお、第III章第2節(3)の旧石器時代の石器の記載および第VII章第1節(1)については、亀田直美氏(西東京市教育委員会)の玉稿を賜った。その他を、松本が執筆した。

18. 本書の編集は、松本が行った。

19. 発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたって、ご協力頂いた方々は、下記のとおりである(敬称略、五十音順)。

青山 力	明戸 広美	新井千都子	新井 正治	池田 一彦	今井 豊和
落合智恵美	亀山 久枝	河田 倫子	川中子浩史	工藤 和美	熊谷由美子
倉林 美紀	黒沢 律子	小暮 悠樹	小林美代子	小松 帝一	斉藤真理子
桜井 明広	塩原 晴幸	篠原 朗	渋谷 裕子	城田 恵一	菅野 裕子
高井 武一	高田 和正	高橋 愛子	高橋 辰馬	高橋 好男	高柳とみ子
田口 照代	竹内しま子	立川 経子	塚越 金作	出牛 稔	土屋 牧子
戸沢ミチ子	戸谷佐知子	中川 秀宣	中島 保明	中原 好子	野本ミチ子
原口 真一	福島 礼子	藤重千恵子	逸見百合子	細谷 悟	槇島 直樹
町田 泰三	三木きよ子	宮部しずえ	茂木 久幸	最能 秀行	山口 哲
山口真利子	山口美智子	山崎 和子	山田マサミ	山本 勇	吉田 耕作
吉田 重政	吉田 只良	吉田真由美	渡辺 典子	渡辺 裕子	

(1週間以上の参加者に限る)

20. 発掘調査および本書の作成に関しては、下記の方々や諸機関からご助言、ご協力を賜った。ここに記し、感謝する次第である(敬称略、五十音順)。

荒川 正夫	有山 径世	石川日出志	石坂 俊郎	市川 修	市毛 勲
井上 裕一	大木紳一郎	大谷 徹	岡内 三眞	尾形 則敏	柿沼 幹夫
加藤 秀之	金子 彰男	亀田 直美	菊池 徹夫	君島 武史	車崎 正彦
小出 輝雄	小林 高	昆 彭生	齋藤 瑞穂	坂本 和俊	佐々木幹雄
篠崎 潔	杉崎 茂樹	鈴木 正博	関 義則	外尾 常人	高橋 清文
高橋龍三郎	高林 真人	田中 正夫	田村 誠	鳥羽 政之	中沢 良一
長井 正欣	中島 宏	長滝 歳康	西井 幸雄	西川 修一	早坂 廣人
日沖 剛史	比田井克仁	福田 聖	藤波 啓容	丸山 修	峰村 篤
宮田 忠洋	宮本 久子	村松 篤	矢内 勲	山本 千春	和久 智裕

埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
早稲田大学本庄考古資料館 株式会社測研 株式会社パレオ・ラボ
有限会社アルケーリサーチ 有限会社毛野考古学研究所

21. 発掘調査および整理作業、報告書の刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は、以下のとおりである。

発掘調査組織（平成19年度）

主体者 本庄市教育委員会

教 育 長 茂木 孝彦

事務局 事 務 局 長 丸山 茂

文化財保護課

課 長 儘田 英夫

課長補佐兼 鈴木 徳雄

文化財保護係長

埋蔵文化財係長 太田 博之（浅見山 I 遺跡）

主 査 恋河内昭彦

主 任 松澤 浩一

担当者 主 任 大熊 季広（久下東・北堀久下塚北遺跡）

〃 主 事 松本 完（浅見山 I 遺跡）

臨 時 職 員 的野 善行（浅見山 I 遺跡）

整理・報告書刊行組織（平成20年度）

主体者 本庄市教育委員会

教 育 長 茂木 孝彦

事務局 事 務 局 長 丸山 茂

文化財保護課

課 長 儘田 英夫

課長補佐兼 鈴木 徳雄

文化財保護係長

埋蔵文化財係長 太田 博之

主 査 恋河内昭彦

主 任 松澤 浩一

担当者 主 任 大熊 季広（久下東・北堀久下塚北遺跡）

〃 主 事 松本 完（浅見山 I 遺跡）

臨 時 職 員 的野 善行

浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) ・ 久下東遺跡 (Ⅲ次) A 1 ・ B 1 地点 ・
北堀久下塚北遺跡

目 次

卷頭図版

序

例 言

第 I 章 調査にいたる経緯	1
第 II 章 遺跡の位置と環境	2
第 1 節 遺跡の位置	2
第 2 節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第 III 章 浅見山 I 遺跡のⅢ次調査	10
第 1 節 遺跡の概要	10
第 2 節 検出された遺構と遺物	13
1 旧石器時代の遺構と遺物	13
(1) 旧石器時代の調査	13
(2) 層 序	15
(3) 旧石器時代の石器	19
2 竪穴住居跡	26
3 方形周溝墓	34
4 円 墳	81
5 土 坑	91
6 焼土跡	128
7 溝 跡	128
8 遺構外出土遺物	131
(1) 土 器	131
(2) 石 器・石製品	147

第Ⅳ章 久下東遺跡（Ⅲ次）A 1・B 1 地点の調査	165
第1節 遺跡の概要	166
第2節 検出された遺構と遺物	169
1 竪穴住居跡	169
2 掘立柱建物跡	192
3 地下式壙	193
4 井戸跡	199
5 土坑	211
6 溝跡	219
第Ⅴ章 北堀久下塚北遺跡の調査	228
第1節 遺跡の概要	228
第2節 検出された遺構と遺物	228
1 竪穴住居跡	228
第Ⅵ章 自然科学分析	232
第1節 浅見山Ⅰ遺跡（Ⅲ次）出土資料の自然科学分析	232
1 テフラ分析	232
2 ローム層中炭化材のAMS放射性炭素年代測定	236
3 旧石器時代の黒曜石製石器の産地推定	239
4 赤色顔料の蛍光X線分析	243
5 炭化材の樹種同定	246
第2節 久下東遺跡（Ⅲ次）B 1 地点出土資料の自然科学分析	247
1 S字状口縁台付甕の胎土材料	247
第Ⅶ章 調査の成果と課題	254
第1節 浅見山Ⅰ遺跡Ⅲ次調査の成果と課題	254
1 旧石器時代の石器について	254
2 縄文時代の石器について	256
3 方形周溝墓について	258
第2節 まとめにかえて	263
引用・参考文献	264

図 版

挿図目次

第1図 埼玉県の地形 …………… 2	第29図 3号方形周溝墓断面図(1) …………… 40
第2図 周辺の主要遺跡(1) …………… 4	第30図 3号方形周溝墓断面図(2) …………… 41
第3図 周辺の主要遺跡(2) …………… 5	第31図 3号方形周溝墓断面図(3) …………… 42
第4図 周辺の主要遺跡(3) …………… 6	第32図 3号方形周溝墓出土遺物 …………… 43
浅見山 I 遺跡	
第5図 浅見山 I 遺跡調査地点位置図 …………… 9	第33図 4号方形周溝墓等高線図 …………… 44
第6図 浅見山 I 遺跡全体図 …………… 10・11	第34図 4号方形周溝墓平面・断面図 …………… 45
第7図 浅見山 I 遺跡(Ⅲ次)全体図 …………… 12	第35図 5号方形周溝墓等高線図 …………… 47
第8図 浅見山 I 遺跡(Ⅲ次)遺構分布図 …………… 12	第36図 5号方形周溝墓平面・断面図 …………… 48
第9図 旧石器時代調査トレンチ位置・発掘深 度図 …………… 13	第37図 6号方形周溝墓等高線図 …………… 49
第10図 旧石器時代調査トレンチ6平面・断面 図 …………… 14	第38図 6号方形周溝墓平面図 …………… 50
第11図 旧石器時代調査トレンチ6遺物分布図 …………… 16	第39図 6号方形周溝墓断面図(1) …………… 51
第12図 旧石器時代調査トレンチ6断面図 (1) …………… 17	第40図 6号方形周溝墓断面図(2) …………… 52
第13図 旧石器時代調査トレンチ6断面図 (2) …………… 18	第41図 6号方形周溝墓平面・断面図(1) …………… 53
第14図 旧石器時代出土遺物(1) …………… 21	第42図 6号方形周溝墓平面・断面図(2) …………… 54
第15図 旧石器時代出土遺物(2) …………… 22	第43図 6号方形周溝墓出土遺物 …………… 55
第16図 旧石器時代出土遺物(3) …………… 24	第44図 7号方形周溝墓等高線図 …………… 56
第17図 1号住居跡平面・断面図(1) …………… 27	第45図 7号方形周溝墓平面・断面図(1) …………… 57
第18図 1号住居跡平面・断面図(2) …………… 28	第46図 7号方形周溝墓断面図(1) …………… 58
第19図 1号住居跡出土遺物 …………… 29	第47図 7号方形周溝墓断面図(2) …………… 59
第20図 2号住居跡平面・断面図 …………… 30	第48図 7号方形周溝墓平面・断面図(2) …………… 60
第21図 2号住居跡断面図 …………… 31	第49図 7号方形周溝墓出土遺物 …………… 61
第22図 3号住居跡平面・断面図 …………… 33	第50図 8号方形周溝墓等高線図 …………… 62
第23図 3号住居跡出土遺物 …………… 34	第51図 8号方形周溝墓平面・断面図(1) …………… 63
第24図 方形周溝墓および関連遺構分布図 …………… 34	第52図 8号方形周溝墓断面図(1) …………… 64
第25図 2号方形周溝墓等高線図 …………… 35	第53図 8号方形周溝墓断面図(2) …………… 65
第26図 2号方形周溝墓平面・断面図 …………… 36	第54図 8号方形周溝墓平面・断面図(2) …………… 66
第27図 3号方形周溝墓等高線図 …………… 38	第55図 8号方形周溝墓断面図(3) …………… 67
第28図 3号方形周溝墓平面図 …………… 39	第56図 8号方形周溝墓出土遺物 …………… 68
	第57図 9号方形周溝墓等高線・平面・断面図 …………… 71
	第58図 9号方形周溝墓断面図 …………… 72
	第59図 9号方形周溝墓平面・断面図 …………… 72
	第60図 9号方形周溝墓出土遺物 …………… 72
	第61図 10号方形周溝墓等高線・平面・断面図 …………… 74

第62図	10号方形周溝墓断面図	75	第97図	28号土坑出土遺物	108
第63図	10号方形周溝墓出土遺物	75	第98図	30号土坑出土遺物	108
第64図	11号方形周溝墓等高線・平面・断面図	76	第99図	29～32号土坑平面・断面図	109
第65図	11号方形周溝墓出土遺物	77	第100図	35号土坑出土遺物	111
第66図	12号方形周溝墓等高線・平面・断面図	78	第101図	33～36号土坑平面・断面図	112
第67図	12号方形周溝墓断面図	79	第102図	39号土坑出土遺物	113
第68図	12号方形周溝墓出土遺物	80	第103図	37～40号土坑平面・断面図	114
第69図	1号円墳等高線・平面・断面図	81	第104図	41～45号土坑平面・断面図	116
第70図	1号円墳出土遺物	82	第105図	46～48号土坑平面・断面図	117
第71図	2号円墳等高線・平面・断面図	83	第106図	49・50号土坑平面・断面図	119
第72図	2号円墳平面・断面図(1)	84	第107図	51～53号土坑平面・断面図	120
第73図	2号円墳断面図	85	第108図	53号土坑出土遺物	121
第74図	2号円墳平面・断面図(2)	85	第109図	54～56号土坑平面・断面図	122
第75図	2号円墳出土遺物(1)	86	第110図	57号土坑平面・断面図	124
第76図	2号円墳出土遺物(2)	87	第111図	57号土坑出土遺物	125
第77図	2号円墳出土遺物(3)	89	第112図	58・59号土坑平面・断面図	125
第78図	2号円墳出土遺物(4)	90	第113図	59号土坑出土遺物	126
第79図	2号土坑出土遺物	91	第114図	60～62号土坑平面・断面図	127
第80図	1～3号土坑平面・断面図	92	第115図	62号土坑出土遺物	127
第81図	4～9号土坑平面・断面図	93	第116図	1・2号焼土跡平面・断面図	128
第82図	4号土坑出土遺物	94	第117図	1～3号溝跡平面・断面図	129
第83図	10号土坑出土遺物	95	第118図	4号溝跡平面・断面図	130
第84図	10・11号土坑平面・断面図	96	第119図	遺構外出土縄文土器(1)	132
第85図	13号土坑出土遺物	97	第120図	遺構外出土縄文土器(2)	134
第86図	12～14号土坑平面・断面図	98	第121図	遺構外出土縄文土器(3)	138
第87図	17号土坑出土遺物	99	第122図	遺構外出土弥生土器	142
第88図	15～17号土坑平面・断面図	100	第123図	遺構外出土弥生土器・土師器・埴輪	145
第89図	18号土坑出土遺物	100	第124図	遺構外出土石器・石製品(1)	148
第90図	19号土坑出土遺物	101	第125図	遺構外出土石器・石製品(2)	150
第91図	18～21号土坑平面・断面図	102	第126図	遺構外出土石器・石製品(3)	151
第92図	21号土坑出土遺物	103	第127図	遺構外出土石器・石製品(4)	152
第93図	22号土坑出土遺物	104	第128図	遺構外出土石器・石製品(5)	154
第94図	22～25号土坑平面・断面図	105	第129図	遺構外出土石器・石製品(6)	155
第95図	25号土坑出土遺物	106	第130図	遺構外出土石器・石製品(7)	156
第96図	26～28号土坑平面・断面図	107	第131図	遺構外出土石器・石製品(8)	157
			第132図	遺構外出土石器・石製品(9)	158

第133図	遺構外出土石器・石製品(10) ……	160	第168図	76号住居跡出土遺物 ……	191
第134図	遺構外出土石器・石製品(11) ……	161	第169図	1号掘立柱建物跡平面・断面図 ……	192
第135図	遺構外出土石器・石製品(12) ……	162	第170図	1号地下式墳平面・断面図 ……	194
第136図	遺構外出土石器・石製品(13) ……	163	第171図	2号地下式墳平面・断面図 ……	195
久下東遺跡			第172図	2号地下式墳出土遺物 ……	196
第137 図	久下東遺跡(Ⅲ次)・北堀久下塚北遺跡調査地点位置図 ……	165	第173図	3号地下式墳平面・断面図 ……	197
第138図	久下東遺跡A・B地点全体図 ……	166	第174図	3号地下式墳出土遺物 ……	198
第139図	久下東遺跡A地点全体図 ……	167	第175図	3号井戸跡平面・断面図 ……	199
第140図	久下東遺跡B地点遺構分布図 ……	168	第176図	4号井戸跡平面・断面図 ……	200
第141図	1号住居跡平面・断面図 ……	169	第177図	4号井戸跡出土遺物(1) ……	201
第142図	31号住居跡平面・断面図(1) ……	171	第178図	4号井戸跡出土遺物(2) ……	203
第143図	31号住居跡平面・断面図(2) ……	172	第179図	4号井戸跡出土遺物(3) ……	204
第144図	31号住居跡出土遺物 ……	172	第180図	4号井戸跡出土遺物(4) ……	205
第145図	43号住居跡平面・断面図(1) ……	174	第181図	4号井戸跡出土遺物(5) ……	206
第146図	43号住居跡平面・断面図(2) ……	175	第182図	4号井戸跡出土遺物(6) ……	207
第147図	43号住居跡出土遺物 ……	176	第183図	4号井戸跡出土遺物(7) ……	208
第148図	45号住居跡平面・断面図 ……	177	第184図	5号井戸跡平面・断面図 ……	210
第149図	45号住居跡出土遺物 ……	177	第185図	5号井戸跡出土遺物 ……	210
第150図	61号住居跡平面・断面図 ……	178	第186図	6号井戸跡平面・断面図 ……	210
第151図	61号住居跡出土遺物 ……	178	第187図	10・16~20号土坑平面・断面図 ……	213
第152図	62号住居跡平面・断面図 ……	179	第188図	21~26号土坑平面・断面図 ……	215
第153図	62号住居跡出土遺物 ……	180	第189図	27・29・30・33・40・41号土坑平面・断面図 ……	217
第154図	65号住居跡平面・断面図 ……	181	第190図	溝跡および関連遺構分布図 ……	218
第155図	65号住居跡出土遺物 ……	181	第191図	1・2号溝跡平面・断面図 ……	220
第156図	66号住居跡平面・断面図 ……	182	第192図	1・2号溝跡断面図 ……	221
第157図	66号住居跡出土遺物 ……	183	第193図	1号溝跡出土遺物 ……	222
第158図	67号住居跡平面・断面図 ……	184	第194図	2号溝跡出土遺物 ……	223
第159図	67号住居跡出土遺物 ……	185	第195図	3・4号溝跡平面・断面図 ……	224
第160図	68号住居跡平面・断面図(1) ……	186	第196図	1・2号溝跡、2~4号溝跡出土遺物 ……	225
第161図	68号住居跡平面・断面図(2) ……	187	第197図	4号溝跡平面・断面図 ……	226
第162図	68号住居跡出土遺物 ……	187	第198図	7・8号溝跡平面・断面図 ……	226
第163図	71~73号住居跡平面・断面図 ……	188	第199図	7号溝跡出土遺物 ……	227
第164図	71~73号住居跡断面図 ……	189	北堀久下塚北遺跡		
第165図	73号住居跡出土遺物 ……	190	第200図	北堀久下塚北遺跡全体図 ……	228
第166図	74号住居跡平面・断面図 ……	191	第201図	1号住居跡平面・断面図(1) ……	229
第167図	76号住居跡平面・断面図 ……	191			

第202図	1号住居跡平面・断面図(2) ……………	230	第207図	長野県の黒曜石産地分布図 ……………	241
第203図	1号住居跡出土遺物 ……………	231	第208図	黒曜石産地推定判別図(1) ……………	242
第204図	各トレンチ堆積物の粒度組成、重鉍物軽鉍物比、火山ガラスの形態分布図 ……………	234	第209図	黒曜石産地推定判別図(2) ……………	242
第205図	試料No.2 (PLD-10335) およびNo.4 (PLD-10960) の暦年較正図 ……………	238	第210図	赤色顔料の蛍光X線分析結果 ……………	244
第206図	黒曜石産地分布図(東日本) ……………	239	第211図	出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 ……………	246
			第212図	胎土材料を検討したS字状口縁台付甕 ……………	247

挿表目次

浅見山I遺跡

第1表	旧石器時代出土遺物観察表 ……………	25	第27表	30号土坑出土遺物観察表 ……………	108
第2表	1号住居跡出土遺物観察表 ……………	29	第28表	35号土坑出土遺物観察表 ……………	111
第3表	3号住居跡出土遺物観察表 ……………	34	第29表	39号土坑出土遺物観察表 ……………	114
第4表	3号方形周溝墓出土遺物観察表 ……………	43	第30表	53号土坑出土遺物観察表 ……………	122
第5表	6号方形周溝墓出土遺物観察表 ……………	55	第31表	57号土坑出土遺物観察表 ……………	125
第6表	7号方形周溝墓出土遺物観察表 ……………	61	第32表	59号土坑出土遺物観察表 ……………	126
第7表	8号方形周溝墓出土遺物観察表 ……………	69	第33表	62号土坑出土遺物観察表 ……………	127
第8表	9号方形周溝墓出土遺物観察表 ……………	73	第34表	遺構外出土縄文土器観察表(1) ……………	133
第9表	10号方形周溝墓出土遺物観察表 ……………	76	第35表	遺構外出土縄文土器観察表(2) ……………	134
第10表	11号方形周溝墓出土遺物観察表 ……………	77	第36表	遺構外出土縄文土器観察表(3) ……………	135
第11表	12号方形周溝墓出土遺物観察表 ……………	80	第37表	遺構外出土縄文土器観察表(4) ……………	136
第12表	1号円墳出土遺物観察表 ……………	82	第38表	遺構外出土縄文土器観察表(5) ……………	137
第13表	2号円墳出土遺物観察表 ……………	86	第39表	遺構外出土縄文土器観察表(6) ……………	139
第14表	2号円墳円筒埴輪観察表(1) ……………	88	第40表	遺構外出土縄文土器観察表(7) ……………	140
第15表	2号円墳円筒埴輪観察表(2) ……………	90	第41表	遺構外出土弥生土器観察表(1) ……………	143
第16表	2号土坑出土遺物観察用 ……………	91	第42表	遺構外出土弥生土器観察表(2) ……………	144
第17表	4号土坑出土遺物観察表 ……………	94	第43表	遺構外出土弥生土器・土師器観察表 ……………	146
第18表	10号土坑出土遺物観察表 ……………	95	第44表	形象埴輪観察表 ……………	146
第19表	13号土坑出土遺物観察表 ……………	97	第45表	遺構外出土石器観察表(1) ……………	153
第20表	17号土坑出土遺物観察表 ……………	99	第46表	遺構外出土石器観察表(2) ……………	164
第21表	18号土坑出土遺物観察表 ……………	100	久下東遺跡		
第22表	19号土坑出土遺物観察表 ……………	101	第47表	31号住居跡出土遺物観察表 ……………	173
第23表	21号土坑出土遺物観察表 ……………	103	第48表	43号住居跡出土遺物観察表 ……………	176
第24表	22号土坑出土遺物観察表 ……………	104	第49表	45号住居跡出土遺物観察表 ……………	177
第25表	25号土坑出土遺物観察表 ……………	106	第50表	61号住居跡出土遺物観察表 ……………	178
第26表	28号土坑出土遺物観察表 ……………	106	第51表	62号住居跡出土遺物観察表 ……………	180

第52表	65号住居跡出土遺物観察表	182	第69表	4号溝跡出土遺物観察表	225
第53表	66号住居跡出土遺物観察表	183	第70表	7号溝跡出土遺物観察表	227
第54表	67号住居跡出土遺物観察表	185	北堀久下塚北遺跡		
第55表	68号住居跡出土遺物観察表	187	第71表	1号住居跡出土遺物観察表	231
第56表	73号住居跡出土遺物観察表	190	自然科学分析		
第57表	76号住居跡出土遺物観察表	192	第72表	測定試料および処理	236
第58表	2号地下式壙出土遺物観察表	196	第73表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	237
第59表	3号地下式壙出土遺物観察表	198	第74表	黒曜石産地（東日本）の判別群名称	240
第60表	4号井戸跡出土遺物観察表(1)	202	第75表	分析対象資料と産地推定結果	241
第61表	4号井戸跡出土遺物観察表(2)	202	第76表	胎土材料を検討した土器試料とその特徴	248
第62表	4号井戸跡出土遺物観察表(3)	209	第77表	S字状口縁台付甕胎土の粘土と砂粒の特徴	251
第63表	5号井戸跡出土遺物観察表	210	第78表	試料中の岩石片の分類と組み合わせ	252
第64表	1号溝跡出土遺物観察表	222			
第65表	2号溝跡出土遺物観察表(1)	222			
第66表	2号溝跡出土遺物観察表(2)	225			
第67表	1・2号溝跡出土遺物観察表	225			
第68表	3号溝跡出土遺物観察表	225			

図版目次

巻頭図版 1	浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景 (南東より)	浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 東半全景 (上空より)	図版 2	浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 調査前遠景 (南より)
	浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 東半全景 (上空より)			浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景 (1) (南西より)
巻頭図版 2	旧石器時代調査トレンチ 6 全景 (北より)	旧石器時代調査トレンチ 6 石器出土状態 (南東より)		浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景 (2) (南より)
	旧石器時代の石器			浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景 (3) (南西より)
	縄文時代およびそれ以降の石器			旧石器時代調査風景 (南より)
巻頭図版 4	2・3号方形周溝墓 (上空より) 7～10号方形周溝墓 (上空より)		図版 3	トレンチ 6 完掘状態 (南西より)
				トレンチ 6 石器出土状態 (北より)
巻頭図版 5	6・7号方形周溝墓 (上空より) 8号方形周溝墓南西溝土器出土状態 (南東より)		図版 4	トレンチ 6 石器出土状態 (1) (北西より)
				トレンチ 6 石器出土状態 (2) (南東より)
巻頭図版 6	久下東遺跡 (Ⅲ次) B 地点遠景 (南より)	久下東遺跡 (Ⅲ次) B 地点全景 (上空より)	図版 5	トレンチ 6 石器出土状態 (北より)
				トレンチ 6 石器出土状態 (東より)
浅見山 I 遺跡				トレンチ 6 サンプルポイント (東より)
図版 1	浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景 (南西より)			トレンチ 6 ナイフ形石器出土状態 (東より)
				トレンチ 6 石器出土状態 (東より)
				トレンチ 6 サブトレンチ 1 (東より)
			図版 6	1・2号住居跡 (上空より)

- 1号住居跡(南より)
1号住居跡紡錘車出土状態(東より)
1号住居跡石鏃出土状態(北より)
- 図版7 2号住居跡(南西より)
2号住居跡土層断面(南東より)
3号住居跡(西より)
3号住居跡土層断面(南より)
3号住居跡炉(西より)
- 図版8 2・3号方形周溝墓(上空より)
2号方形周溝墓(北東より)
2号方形周溝墓(南東より)
2号方形周溝墓B-B'西溝土層断面(南より)
2号方形周溝墓主体部(南より)
- 図版9 3号方形周溝墓(北東より)
3号方形周溝墓陸橋部(東より)
3号方形周溝墓南西隅(南より)
3号方形周溝墓陸橋部(南より)
3号方形周溝墓D-D'東溝土層断面(南より)
- 図版10 3号方形周溝墓土器出土状態(東より)
3号方形周溝墓管玉出土状態(南東より)
4号方形周溝墓(南より)
4号方形周溝墓(北東より)
4号方形周溝墓A-A'東溝土層断面(南より)
- 図版11 4号方形周溝墓主体部土層断面(東より)
4号方形周溝墓主体部(南より)
5~7号方形周溝墓(上空より)
5号方形周溝墓(南より)
5号方形周溝墓A-A'北東溝土層断面(南より)
- 図版12 6号方形周溝墓(南東より)
6号方形周溝墓北西溝(東より)
6号方形周溝墓A-A'北東溝土層断面(北より)
6号方形周溝墓C-C'北西溝土層断面(西より)
- 6号方形周溝墓H-H'北西溝土層断面(北東より)
6号方形周溝墓G-G'北隅土層断面(北西より)
6号方形周溝墓F-F'南東溝土層断面(南西より)
7号方形周溝墓(上空より)
7号方形周溝墓(北より)
7号方形周溝墓北東溝(北より)
7号方形周溝墓北西溝(北より)
7号方形周溝墓A-A'南西溝土層断面(南より)
7号方形周溝墓主体部(南東より)
7号方形周溝墓G-G'北西溝土層断面(南西より)
7号方形周溝墓北西溝遺物出土状態(北西より)
7号方形周溝墓北東溝土層断面(南東より)
7号方形周溝墓A-A'北東溝土層断面(南東より)
- 図版13 8号方形周溝墓(北東より)
8号方形周溝墓(南東より)
8号方形周溝墓A-A'北東溝土層断面(南より)
8号方形周溝墓C-C'北西溝土層断面(東より)
- 図版14 8号方形周溝墓F-F'西隅土層断面(南より)
8号方形周溝墓西隅遺物出土状態(西より)
8号方形周溝墓遺物出土状態(東より)
8号方形周溝墓遺物出土状態(東より)
8号方形周溝墓北西溝(北より)
8号方形周溝墓G-G'南西溝土層断面(南東より)
8号方形周溝墓G-G'南西溝土層断面

- (南東より)
8号方形周溝墓A - A' 南西溝土層断面
(南より)
- 図版17 9号方形周溝墓 (南東より)
9号方形周溝墓北西溝 (東より)
9号方形周溝墓南西溝 (北より)
9号方形周溝墓D - D' 北西溝土層断面 (南
西より)
9号方形周溝墓F - F' 北東溝土層断面 (南
東より)
- 図版18 10号方形周溝墓 (北西より)
10号方形周溝墓 (東より)
- 図版19 10号方形周溝墓A - A' 南西溝土層断面 (南
より)
10号方形周溝墓遺物出土状態 (東より)
11号方形周溝墓 (南西より)
11号方形周溝墓遺物出土状態 (東より)
11号方形周溝墓赤色顔料出土状態 (北より)
- 図版20 12号方形周溝墓 (南より)
12号方形周溝墓A - A' - A'' 北壁土層断面
(南西より)
12号方形周溝墓C - C' 北西溝土層断面 (南
西より)
- 図版21 1号円墳 (東より)
1号円墳周溝 (東より)
- 図版22 2号円墳 (1) (東より)
2号円墳 (2) (東より)
- 図版23 1号土坑 (西より)
2号土坑 (東より)
3・4号土坑 (西より)
3号土坑土層断面 (東より)
4号土坑 (北西より)
5号土坑 (北より)
6号土坑 (北東より)
7号土坑 (北東より)
- 図版24 8号土坑 (南東より)
9号土坑 (南東より)
- 10号土坑 (北東より)
10号土坑土層断面 (東より)
12号土坑 (東より)
13号土坑 (東より)
14号土坑 (北西より)
15号土坑 (南東より)
- 図版25 16号土坑 (南より)
17号土坑 (北東より)
18号土坑 (南より)
19号土坑 (北より)
20号土坑 (東より)
21号土坑 (東より)
22号土坑 (南東より)
22号土坑遺物出土状態 (東より)
- 図版26 23号土坑 (東南より)
24号土坑 (北東より)
25号土坑 (東より)
26号土坑 (東南より)
27号土坑 (南東より)
28号土坑 (南東より)
29号土坑 (南より)
30号土坑 (南東より)
- 図版27 31号土坑 (南東より)
32号土坑 (南西より)
33号土坑 (東より)
34号土坑 (南より)
35号土坑 (東より)
36号土坑 (南より)
37号土坑、1号溝跡土層断面 (西より)
39~44号土坑 (南東より)
- 図版28 45号土坑 (東より)
46号土坑 (南より)
47号土坑 (南東より)
48号土坑 (北より)
49号土坑 (北西より)
50号土坑 (南より)
50号土坑C - C' 土層断面 (南より)

- 51号土坑、3号溝跡（東より）
- 図版29 52号土坑、3号溝跡（南より）
- 53号土坑（東より）
- 54～56号土坑（西より）
- 57号土坑、4号溝跡（北西より）
- 58号土坑（東より）
- 59号土坑（北より）
- 60・61号土坑（東より）
- 62号土坑（南西より）
- 図版30 旧石器時代トレンチ6出土遺物（1）
- 図版31 旧石器時代トレンチ6出土遺物（2）
- 旧石器時代トレンチ外出土遺物
- 図版32 1号住居跡出土遺物
- 3号住居跡出土遺物
- 3号方形周溝墓出土遺物
- 6号方形周溝墓出土遺物
- 7号方形周溝墓出土遺物
- 図版33 8号方形周溝墓出土遺物
- 9号方形周溝墓出土遺物
- 図版34 3号方形周溝墓土器2（口縁部）
- 3号方形周溝墓土器2（胴部）
- 8号方形周溝墓土器1
- 3号方形周溝墓土器3
- 8号方形周溝墓土器4
- 8号方形周溝墓土器6（口縁部外面）
- 8号方形周溝墓土器6（口縁部内面）
- 8号方形周溝墓土器8
- 図版35 10号方形周溝墓出土遺物
- 11号方形周溝墓出土遺物
- 12号方形周溝墓出土遺物
- 1号円墳出土遺物
- 2号円墳出土遺物（1）
- 図版36 2号円墳出土遺物（2）
- 図版37 2号円墳出土遺物（3）
- 図版38 2・4・13・17～19号土坑出土遺物
- 10号土坑出土遺物
- 21号土坑出土遺物
- 22号土坑出土遺物
- 25・28・30・35・39・53号土坑出土遺物
- 57号土坑出土遺物
- 59号土坑出土遺物
- 62号土坑出土遺物
- 図版39 遺構外出土縄文土器（1）
- 図版40 遺構外出土縄文土器（2）
- 図版41 遺構外出土弥生土器
- 図版42 遺構外出土弥生土器・土師器・埴輪
- 図版43 遺構外出土石器・石製品（1）
- 図版44 遺構外出土石器・石製品（2）
- 図版45 遺構外出土石器・石製品（3）
- 図版46 遺構外出土石器・石製品（4）
- 図版47 遺構外出土石器・石製品（5）
- 図版48 遺構外出土石器・石製品（6）
- 図版49 遺構外出土石器・石製品（7）
- 図版50 遺構外出土石器・石製品（8）
- 図版51 遺構外出土石器・石製品（9）
- 久下東遺跡**
- 図版52 久下東遺跡（Ⅲ次）A地点全景（北より）
- 久下東遺跡（Ⅲ次）A地点全景（西より）
- 図版53 1号住居跡（西より）
- 1号住居跡（西より）
- 1号住居跡カマド土層断面（西より）
- 1号住居跡カマド（西より）
- 1号溝（西より）
- 図版54 久下東遺跡（Ⅲ次）B地点南半全景（北より）
- 久下東遺跡（Ⅲ次）B1地点全景（上空より）
- 図版55 31号住居跡（南西より）
- 31号住居跡東西土層断面（南東より）
- 31号住居跡遺物出土状態（南より）
- 31号住居跡カマド土層断面（南西より）
- 31号住居跡貯蔵穴土層断面（南西より）
- 図版56 43号住居跡（西より）
- 43号住居跡遺物出土状態（西より）
- 43号住居跡カマド遺物出土状態（西より）
- 43号住居跡北側貯蔵穴土層断面（西より）

- 43号住居跡掘り方東西土層断面（南より）
- 図版57 45号住居跡（西より）
- 61号住居跡（西より）
- 図版58 62号住居跡（西より）
- 62号住居跡遺物出土状態（西より）
- 62号住居跡カマド土層断面（南より）
- 62号住居跡カマド（西より）
- 62号住居跡掘り方（西より）
- 図版59 65号住居跡（南東より）
- 65号住居跡遺物出土状態（西より）
- 65号住居跡カマド南北土層断面（東より）
- 65号住居跡カマド（南東より）
- 65号住居跡貯蔵穴土層断面（南東より）
- 図版60 66号住居跡（西より）
- 67号住居跡（南西より）
- 図版61 67号住居跡遺物出土状態（南西より）
- 67号住居跡カマド遺物出土状態（南西より）
- 67号住居跡カマド東西土層断面（南西より）
- 67号住居跡カマド遺物出土状態（南西より）
- 68号住居跡（西より）
- 図版62 68号住居跡南北土層断面（西より）
- 68号住居跡カマド南北土層断面（西より）
- 68号住居跡カマド（西より）
- 68号住居跡掘り方東西土層断面（南より）
- 71～73号住居跡（南東より）
- 図版63 74号住居跡掘り方土層断面（北東より）
- 74号住居跡掘り方（西より）
- 76号住居跡（北西より）
- 76号住居跡遺物出土状態（北西より）
- 76号住居跡掘り方（北西より）
- 図版64 1号掘立柱建物跡（西より）
- 1号掘立柱建物跡P1土層断面（西より）
- 1号掘立柱建物跡P2土層断面（北より）
- 1号掘立柱建物跡P3土層断面（南より）
- 1号地下式壙（西より）
- 図版65 1号地下式壙土層断面（西より）
- 2号地下式壙（北より）
- 図版66 2号地下式壙東西土層断面（北より）
- 2号地下式壙南北土層断面（東より）
- 3号地下式壙（北東より）
- 3号地下式壙B-B'土層断面（南東より）
- 3号地下式壙A-A'土層断面（北東より）
- 図版67 3号地下式壙遺物出土状態（北東より）
- 3号地下式壙北西床面（南より）
- 3号井戸跡（北より）
- 3号井戸跡土層断面（南より）
- 4号井戸跡（北東より）
- 図版68 4号井戸跡土層断面（北より）
- 5号井戸跡（南より）
- 6号井戸跡（北より）
- 10号土坑（西より）
- 16号土坑（南より）
- 図版69 17号土坑（南より）
- 18号土坑（北より）
- 19号土坑（西より）
- 20号土坑（北より）
- 21号土坑（北より）
- 22号土坑（西より）
- 23号土坑（北より）
- 24号土坑（北より）
- 図版70 25号土坑（西より）
- 26号土坑（南より）
- 27号土坑（東より）
- 28号土坑（北より）
- 29号土坑（東より）
- 30号土坑（西より）
- 30号土坑土層断面（東より）
- 40号土坑（北東より）
- 図版71 1・2号溝跡（北西より）
- 1・2号溝跡（北より）
- 図版72 1・2号溝跡（北東より）
- 1・2号溝跡（東より）
- 図版73 1号溝跡（西より）
- 1号溝跡礫出土状態（北より）

	1・2号溝跡連結部土層断面（西より）		4号井戸跡出土遺物（1）
	2号溝跡遺物出土状態（北より）	図版79	4号井戸跡出土遺物（2）
	2号溝跡D-D'土層断面（南より）	図版80	4号井戸跡出土遺物（3）
	2号溝跡C-C'土層断面（南より）	図版81	4号井戸跡出土遺物（4）
図版74	3・4号溝跡（南より）		5号井戸跡出土遺物
	3・4号溝跡（東より）	図版82	1号溝跡出土遺物
図版75	3号溝跡土層断面（北より）		2号溝跡出土遺物
	3号溝跡土層断面（北より）	図版83	1・2号溝跡出土遺物
	3号溝跡先端部土層断面（南より）		3号溝跡出土遺物
	3号溝跡先端部（南より）		4号溝跡出土遺物
	8号溝跡（南より）		7号溝跡出土遺物
図版76	31号住居跡出土遺物	北堀久下塚北遺跡	
	43号住居跡出土遺物		1号住居跡（北西より）
	45号住居跡出土遺物	図版84	1号住居跡検出状態（南西より）
	61号住居跡出土遺物		1号住居跡（南西より）
	62号住居跡出土遺物		1号住居跡カマド遺物出土状態（北西より）
	65号住居跡出土遺物		1号住居跡カマド（西北より）
図版77	66号住居跡出土遺物		1号住居跡貯蔵穴（西より）
	67号住居跡出土遺物		1号住居跡掘り方（北西より）
	68号住居跡出土遺物		1号住居跡出土遺物
	73号住居跡出土遺物	自然科学分析	
	76号住居跡出土遺物	図版85	火山ガラス・軽石の顕微鏡写真
図版78	2号地下式竈出土遺物	図版86	赤色顔料および光学顕微鏡写真
	3号地下式竈出土遺物	図版87	土器胎土の偏光顕微鏡写真

第 I 章 調査にいたる経緯

本庄市は、利根川をはさみ群馬県域と隣接する埼玉県北部の中核都市である。その地理的位置から古来より現在の群馬県域と密接な関係を持ち、交通・交流の結節点として、文物が逸早く流入する地域でもあった。そうした地の利を活かし、平成5年8月に地方拠点法に基づく「本庄地方拠点都市地域」の指定を受けてより、埼玉県北部の中心拠点として上越新幹線本庄早稲田駅周辺における「本庄新都心地区」の整備計画を進めてきた。また、平成7年3月の基本計画の承認を経て、平成8年以降、整備事業に係る北堀・栗崎・東富田地区内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、埼玉県教育委員会、本庄市教育委員会と具体的な協議を重ね、平成14年3月20日付で三者による「本庄新都心土地区画整理事業地区内の埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。

平成15年3月の都市計画決定により本庄新都心地区約154ヘクタールが市街化区域に編入され、平成16年3月には、上越新幹線本庄早稲田駅が開業した。平成16年7月、地域振興整備公団から独立行政法人都市再生機構への事業主体の移行を機に、都市再生機構施行地区の区域の約65ヘクタールへの縮小を含めた事業規模の再検討と大幅な見直しが行われた。

平成18年9月6日、「本庄都市計画事業本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業」の施行規定、および事業計画がようやく認可されたことから、都市再生機構本庄都市開発事務所、本庄市、本庄市教育委員会、埼玉県教育委員会の四者により、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の取扱いについて定めた「本庄早稲田駅周辺地区埋蔵文化財に関する協定書」を、平成18年11月10日付で締結した。

事業地内における発掘調査に関しては、平成18年度に東富田の七色塚遺跡（53-071）と北堀の北堀新田前遺跡（53-063）の2遺跡の調査を実施した。平成19年度には、平成19年5、6月に、事業予定地と重複する久下東遺跡（53-064）、北堀久下塚北遺跡（53-066）、および周辺一帯に広範囲にわたる試掘調査を実施し、遺跡範囲の確定作業を進めた。その成果に基づき、平成19年8月20日より、本報告書で報告する浅見山 I 遺跡（53-114）、久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡の3遺跡の発掘調査を順次実施した。

浅見山 I 遺跡のⅢ次調査は、平成19年8月20日から平成20年2月8日まで、久下東遺跡のⅢ次調査 A 地点の調査は、平成19年9月3日から同年11月9日まで、久下東遺跡のⅢ次調査 B 1 地点の調査は、同 B 2 地点の調査と併行して、平成19年10月12日から平成20年3月14日まで、北堀久下塚北遺跡のⅠ次調査は、平成19年9月3日から同年9月28日まで行った。

発掘調査に係る通知は、文化財保護法第99条第1項及び埼玉県埋蔵文化財事務処理要綱第15条に基づき、本庄市から本教文保発第52号（浅見山 I 遺跡Ⅲ次調査地点）、本教文保発第292号（北堀久下塚北遺跡）、本教文保発第293号（久下東遺跡Ⅲ次調査地点）として『埋蔵文化財発掘調査の通知』が、それぞれ埼玉県教育委員会教育長宛てに提出されている。

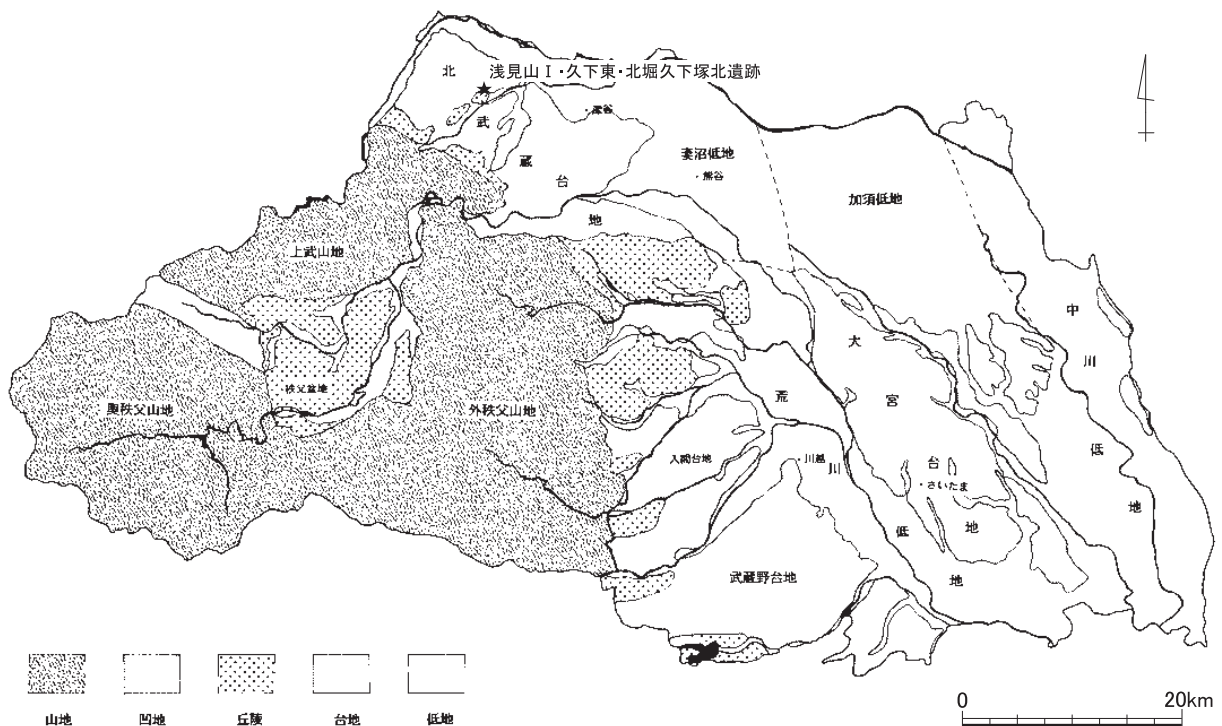
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

浅見山Ⅰ遺跡、久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡は、本庄市域北半のほぼ中央に位置する。浅見山Ⅰ遺跡は、上越新幹線本庄早稲田駅の南西側、間近の丘陵斜面上、久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡は、それぞれ同駅から北に400m、北西に500m前後離れた位置にある。

本庄市は、東西に長い埼玉県の北端、利根川をはさみ群馬県伊勢崎市と境を接し、北関東の入口とも呼ぶべき位置を占めている（第1図）。本庄市、とくに旧本庄市域にあたる本庄市北半の地形は、利根川右岸の低地、沖積地と市街地化の中心をなす台地、微高地、および南縁の丘陵の3つに分けることができる。低地は、利根川や烏川の氾濫原で、下流に広がる妻沼低地、加須低地へと連なる。台地は、いわゆる北武蔵台地の最北の本庄台地であり、主に神流川扇状地と身馴川扇状地の複合扇状地性の台地である。神流川扇状地は、群馬県鬼石町浄法寺付近を扇の要とし、扇の端は、本庄段丘崖を形作っている。身馴川扇状地は、北西側を児玉丘陵、浅見山丘陵に、南東側を松久丘陵、櫛引台地にはさまれた一帯である。市域の最北の丘陵性地形が、残丘性丘陵の浅見山丘陵（大久保山）である。

今回報告する浅見山Ⅰ遺跡Ⅲ次調査地点は、浅見山丘陵の沖積地をのぞむ北縁の丘陵斜面から裾部にかけて位置する。浅見山丘陵の北側には、男堀川の沖積地をはさみ東西に長い微高地が広がる。この微高地は、北側の女堀川と南側の男堀川の間形成された微高地であり、古墳時代前期以降、集落、あるいは墳墓が集中して形成された場所である。久下東遺跡Ⅲ次調査A・B地点は、この微高地の北縁から南縁寄りにかけての範囲であり、北堀久下塚北遺跡は、同じ微高地の北側に女堀川の沖積地をのぞむ北縁に位置する。



第1図 埼玉県の地形

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

本庄市域の北半、とくに浅見山Ⅰ遺跡、久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡周辺を中心に主要な遺跡に限って、簡単に触れることにしたい(第2～4図)(註1)。

旧石器時代の遺跡は、近隣では、大久保山遺跡(4:以下、()内の数字、アルファベットは、第2～4図の遺跡番号、遺跡略号と一致する)、古川端遺跡(43)、旭・小島古墳群内(N)の三空山古墳周辺、城の内遺跡(52)、将監塚遺跡(93)、古井戸遺跡(94)などがあげられるが、いずれも表面採集資料、あるいはそれに類する資料である(増田 1984、神川町教育委員会編 1989他)。周辺地域を含め調査例が大変乏しく、宥勝寺北裏遺跡(6)の明黄褐色ローム層中より出土したとされるチャート製の剥片が、これまでの唯一例となる発掘調査例である(佐々木・橋本・高橋他 1980)。

縄文時代の遺跡も、周辺に限れば、多くはない。とくに遺構の検出された遺跡は、大久保山遺跡(4)、七色塚遺跡(13)、西富田前田遺跡(19)などごく少数である。この傾向は、縄文時代草創期～前期前半までは丘陵、山地が主で、前期後半～中期に丘陵下の台地に集落が造られはじめ、中期後半以降、沖積地内の微高地などに集落が進出するとされる(恋河内 1995・2008)、この一帯の特色を裏付けている。周辺では、ほとんど例を見ない浅見山Ⅰ遺跡の縄文時代早期前葉～前期初頭の一群の資料は、丘陵部に偏在する、この段階の特色を表しているように思われる。なお、浅見山Ⅰ遺跡では、早期前葉～前期初頭の土坑を検出している。早期後半の条痕文系土器、刺突文・圧痕文系土器もかなりの量が出土しているが、多くこの段階に盛行する陥し穴や炉穴が見られないこともこの地域の特色である。

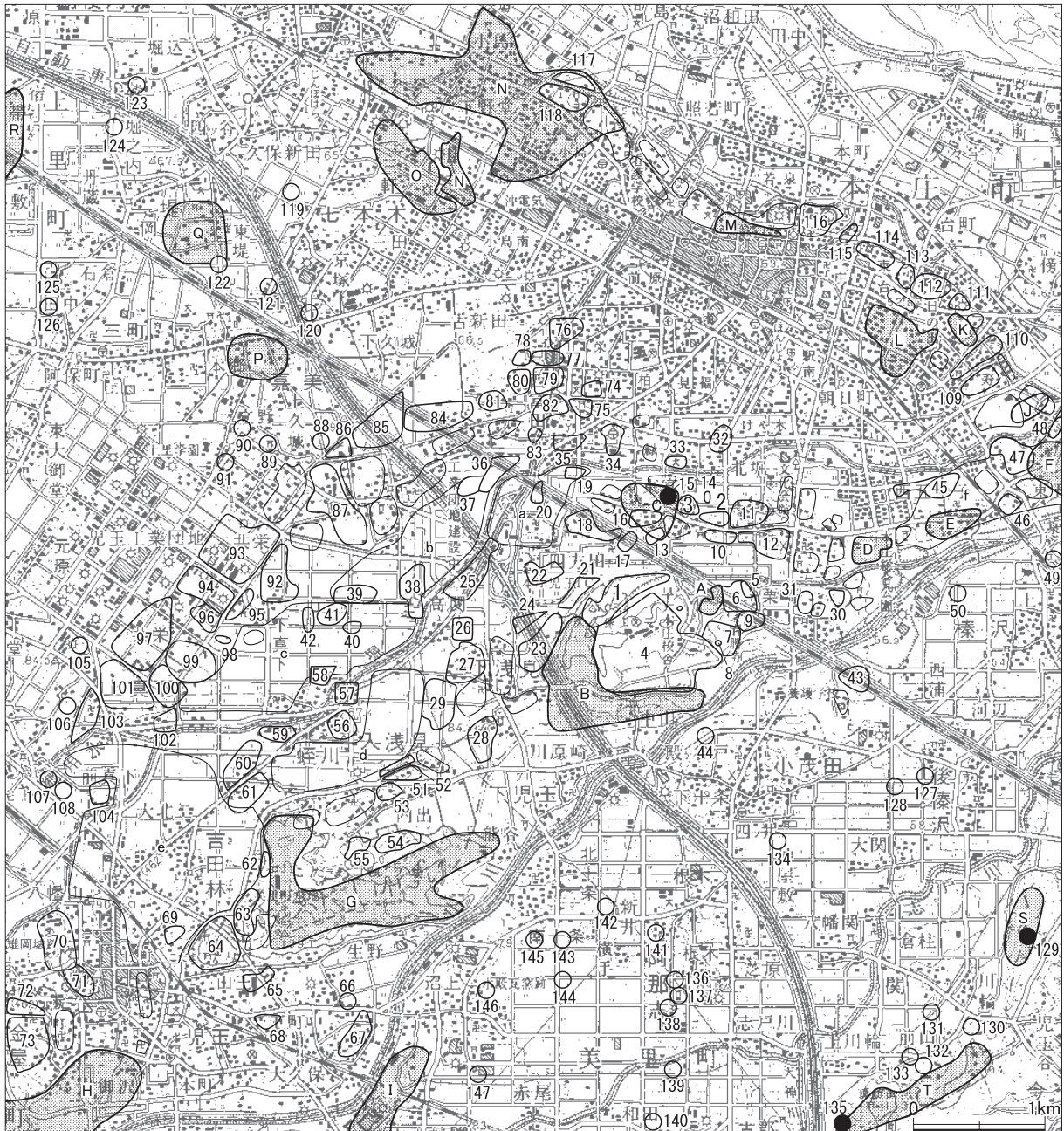
より上流では、縄文時代中期中葉以降、遺構の検出例が増加するとともに、将監塚遺跡(93)、古井戸遺跡(94)、新宮遺跡(100)のような大規模な集落が営まれる端緒が開かれるようである。これらの大規模な集落は、いずれも中期後半に盛期を迎え、中期後半の新しい段階の内に衰微する。七色塚遺跡(13)、西富田前田遺跡(19)などは、この段階に低地内の微高地上に進出した小規模、短期的な集落跡と見られる。

後・晩期の資料は、流域全体で少ないが、古川端遺跡(43)、藤塚遺跡(41)、児玉清水遺跡(65)で、比較的まとまった量の土器が出土していること、散発的ながらも、雌濠遺跡(32)などのように後期中葉の資料が、中・下流域にも見られることにも注意したい。

弥生時代の遺跡は、中期前葉から中葉にかけて、丘陵部の浅見山Ⅰ遺跡(1)の土坑群(註2)をはじめとして、微高地や台地上でも、今井条里遺跡(b)や夏目西遺跡(80)の土坑のように、遺構の検出例が見られるようになる。また、近年、該期の土器片が出土するだけの遺跡も、四方田遺跡(22)、笠ヶ谷戸遺跡(32、未報告)、児玉清水遺跡(65)、小島本伝遺跡(117、未報告)など、確実に増加しており、住居跡は見られないものの、とくに沖積地をめぐる微高地や台地縁辺に、かなりの範囲で該期の人々の営為が及び始めていることを物語っているようである。

弥生時代中期後半～後期前半に関しては、今のところ後期前半代の遺跡が、より上流の一帯でわずかに散見されるのみで(註3)、ほとんど未明の状態であるが、浅見山Ⅰ遺跡の今回の調査では、わずかな量ではあるが、中期末葉から後期初頭に属する土器片が出土している。

後期でも後半代になると、今回3軒の住居跡を報告する浅見山Ⅰ遺跡(1)、大久保山遺跡(4)、山根遺跡(21)、飯玉東遺跡(24)、生野山遺跡(G)、美里町塚本山遺跡(B)と、丘陵上や丘陵裾



〈本庄市〉1. 浅見山 I 2. 久下東 3. 北堀久下塚北 4. 大久保山 5. 宍勝寺裏埴輪窯跡 6. 宍勝寺北裏 7. 大久保山寺院跡 8. 東谷古墳 9. 東谷 10. 久下前 11. 62号 12. 北堀新田前 13. 七色塚 14. 北堀久下東北 15. 公卿塚古墳 16. 元富 17. 下田 18. 観音塚 19. 西富田前田 20. 九反田 21. 山根 22. 四方田 23. 雷電下 24. 飯玉東 25. 後張・川越田 26. 東牧西分 27. 関根氏館 28. 鷺山古墳・鷺山南 29. 浅見境北 30. 東本庄 31. 栗崎館 32. 笠ヶ谷戸 33. 伊丹堂前 34. 雌濠 35. 西富田本郷 36. 地神 37. 塔頭 38. 今井川越田 39. 前田甲 40. 柿島 41. 藤塚 42. 堀向 43. 古川端 〈美里町〉44. 村後 〈本庄市〉45. 田端屋敷 46. 台 47. 西五十子大塚 48. 東五十子赤坂 〈深谷市〉49. 六反田 50. 大寄 〈本庄市〉51. 新屋敷 52. 城の内 53. 金鑽神社古墳 54. 向田 55. 壺丁田 56. 共和小学校校庭 57. 蛭川氏館跡 58. 左口 59. 蛭川坊田 60. 辻堂 61. 南街道 62. 吉田林割山 63. 阿知越 64. 御林下 65. 児玉清水 66. 下町古墳群 67. 大久保 68. 児玉大天白 69. 女池 70. 雉岡城 71. 八幡山 72. 金屋北原 73. 金屋西 74. 薬師 75. 薬師元屋舗 76. 二本松 77. 西富田 78. 弥藤次 79. 夏目 80. 夏目西 81. 西富田新田 82. 社具路 83. 社具路南 84. 今井諏訪 85. 久城前 86. 久城往来北 87. 今井原屋敷 〈上里町〉88. 往来北 89. 熊野太

第2図 周辺の主要遺跡（1）

の微高地などを中心に、小規模で短期的な集落跡が見られるようになる。この特徴的な集落の立地、集落形態から、この時期には、狭小な開析谷を利用した谷戸田の水稻耕作や集落周辺の畑作に生産基盤があったとする推定がなされている（恋河内 1992）。北関東の樽式、赤井戸式、あるいはより東部の二軒屋式など、様々な地域の土器が錯綜して出土することも、この段階に顕著な現象である。

古墳時代前期の遺跡は、丘陵上に散開する弥生時代後期の遺跡の様相から一変し、河川に縁取られた台地縁辺、低地内の自然堤防、微高地上に多数の集落遺跡が形成されることが特徴的である。また、弥生時代後期から古墳時代へと継続する遺跡が、ほとんど見られないことも特色の一つである。

今回報告する久下東遺跡（2）の周辺に限っても、久下前遺跡（10）、北堀新田前遺跡（12）、七色塚遺跡（13）、下田遺跡（17）、地神遺跡（36）、塔頭遺跡（37）、今井条里遺跡（b）と、東から西へ枚挙にいとまがない。中流域でもより上には、後張・川越田遺跡（25）、今井川越田遺跡（38）と有数の遺跡が居並ぶ。この段階に、沖積地の本格的な開発が始まったのであろう。美里町日の森遺跡（134）のように、該期の人工的な大溝が検出された遺跡も見られるようである（菅谷 1978）。ただし、上記した諸遺跡、およびより広い範囲に目を向けても、規模、継続性の点で、拠点集落と言いつける集落が少ないかに見えることも、問題になるかと思う。

古墳時代前期の傾向を引き継ぎ、さらに倍加したのが、古墳時代中期の集落遺跡の様相である。中期、そして中期以降、遺跡の規模、遺跡数、流域内での広がり、いずれをとっても、急激な増加を見ることは間違いない。上記した古墳時代前期の遺跡の多くで、中期以降、竪穴住居跡の数が増すとともに生活域の規模が大きく拡大する。九反田遺跡（20）、笠ヶ谷戸遺跡（32）、雌濠遺跡（34）、弥藤次遺跡（78）、夏目遺跡（79）、夏目西遺跡（80）、西富田新田遺跡（81）など、中期段階より新たに開村したと思われる集落遺跡も多数見られる。この集落の拡大、増加傾向は、7世紀半ば頃まで続くようである。

古墳時代前期から中期にかけての方形周溝墓や古墳に関して、本書で報告する方形周溝墓群を検出した浅見山 I 遺跡（1）を中心に見渡してみたい。

まず、最も間近にあるのは、谷を隔てた東側350m、400m前後離れた位置にある前山1・2号墳（A）である。前山1号墳は、本庄市教育委員会による近年の確認調査により、全長70m前後の前方後円墳

神南 90. 八幡太神南 91. 立野南 〈本庄市〉92. 将監塚東 93. 将監塚 94. 古井戸 95. 内出 96. 古井戸南 97. 南共和 98. 平塚 99. 塚畑 100. 新宮 101. 辻ノ内 102. 上真下東 103. 真下境東 104. 金佐奈 〈神川町〉105. 元屋敷 106. 真下境西 107. 八荒神南 108. 反り町 〈本庄市〉109. 諏訪新田D 110. 諏訪新田A～C 111. 御堂坂 112. 薬師堂東 113. 薬師堂 114. 天神林Ⅱ 115. 天神林 116. 本庄城址 117. 小島本伝 118. 元屋敷 〈上里町〉119. 窪前 120. 本郷東 121. 愛宕 122. 愛宕耕地 123. 耕安地B地点 124. 中堀 125. 田中西 126. 田中前 〈深谷市〉127. 石蒔A 128. 石蒔B 129. 西山5号墳 〈美里町〉130. 川輪聖天塚古墳 131. 石神 132. 長坂 133. 長坂聖天塚古墳 134. 日の森 135. 諏訪山古墳 136. 向居 137. 勝丸稻荷神社古墳 138. 道灌山古墳 139. 志渡川遺跡・志渡川古墳 140. 南志渡川遺跡 141. 堂山古墳 142. 十条条里 143. 新倉館跡 144. 烏森 145. 樋之口 146. 水殿瓦窯跡 147. 宮下 A. 前山古墳群 B. 塚本山古墳群 C. 東富田古墳群 D. 西五十子古墳群（西群） E. 西五十子古墳群（東群） F. 東五十子古墳群 G. 生野山古墳群 H. 長沖古墳群 I. 広木大町古墳群 J. 鶴森古墳群 K. 御堂坂古墳群 L. 塚合古墳群 M. 北原古墳群 N. 旭・小島古墳群 O. 三田古墳群 P. 本郷古墳群 Q. 東堤古墳群 R. 帯刀古墳群 S. 西山古墳群 T. 諏訪山古墳群 a. 西富田・四方田条里 b. 今井条里 c. 児玉条里（児玉北部地区） d. 児玉（蛭川）条里 e. 児玉条里 f. 五十子陣跡

第3図 周辺の主要遺跡（2）



第4図 周辺の主要遺跡 (3)

の可能性が高い古墳であることが判明しており、前山 2 号墳も、従来古墳時代中期の円墳とされてきたが、近年の調査により、長辺の全長が43m余の方墳であることが明らかになった古墳である。前山 1・2 号墳のある丘陵をわずかに下った北側に突き出た痩せ尾根上には、7 基の方形周溝墓が確認されている宍勝寺北裏遺跡（6）がある。宍勝寺北裏遺跡の北東500m前後には、一昨年調査で前方後方墳（前方後方形周溝墓）1 基、方形周溝墓 2 基が検出された北堀新田前遺跡（12、未報告）が、丁度見下ろせる微高地の南端にある。浅見山 I 遺跡に戻り、北側を見下ろすなら、沖積地をはさみ 250mほど離れた微高地上には、古墳時代中期前葉とも目される墳丘径が65m前後の西側に短い造り出しの付いた円墳とされる公卿塚古墳（15）がある。

確認調査のみの遺跡や未報告の遺跡も含まれるため、多く推測を交えざるを得ないが、おおよそ 1 km ほどの範囲内に、古墳時代前期のある段階以降、中期前葉にかけて、時期を違え、種々の立地や墳形、規模の 5 つの墓域が順次形成されたことになる。また、同じ微高地上で隔たった位置にある北堀新田前遺跡（12）の墓域と公卿塚古墳（15）間を除いて、いずれの墓域、墳墓も、相互に見上げ、見下ろすことができる位置にあること、新規に墓域を形成する集団にとって、自ずとそれまでの墓域が視野に入り、意識せざるを得ない位置関係にあることに留意したい。

さらに周辺を俯瞰すると、この一帯の特異性が浮き彫りになる。浅見山 I 遺跡の大久保山を越えた南西側丘陵上には、9 基の方形周溝墓、前方後方墳（前方後方形周溝墓）が報告されている美里町塚本山古墳群（B）があり、塚本山古墳群の北西には、7 基の方形周溝墓が検出された飯玉東遺跡（24）、南西には、全長60mを超える前方後方墳とされる鷺山古墳（28）、南東の微高地上には、やや特異な形態の前方後方墳（前方後方形周溝墓）が検出された美里町村後遺跡（44）がある。これらの墓域や古墳は、浅見山 I 遺跡の南西～南東 1～1.8 kmほど離れた位置にある遺跡である。

村後遺跡（44）のある身馴川（小山川）の扇状地内をさらに下った低位段丘上には、該期の方形周溝墓が 4 基検出されている深谷市大寄 B 遺跡（50）（註 4）、志渡川流域の低位段丘上には、下流から前方後方墳（前方後方形周溝墓）1 基、方形周溝墓 11 基が検出された深谷市石蒔 B 遺跡（128）、前方後方墳（前方後方形周溝墓）1 基、方形周溝墓 9 基が検出された美里町南志渡川遺跡（140）、および同志渡川古墳（139）がある。やや時期的に下るが、南志渡川遺跡の東側、諏訪山丘陵の先端部、西麓裾部には、川輪聖天塚古墳（130）、長坂聖天塚古墳（133）がある。

以上から明らかなように、周辺一帯が、古墳時代前期から中期にかけて、種々の立地、形態、規模の墓域、墳墓の集中地帯であることが判るであろう。今後それぞれの墳墓群の消長を正確に同定、対比した上で、古墳時代前期以降、中期にいたる墓制の地域的な展開過程の一端を解明することが今後の課題となろう。

なお、やや距離的に離れ、流域を異にするが、浅見山 I 遺跡の北西約 2 kmの微高地上には、8 基の方形周溝墓が確認されている今井諏訪遺跡（諏訪遺跡、84）があり、さらに北方、利根川・烏川の沖積地にのぞむ本庄台地の縁辺には、古墳時代前期後葉、あるいは末葉以降、墓域が形成され、大規模な古墳群へと展開する旭・小島古墳群（N）がある。旭・小島古墳群内には、多数群在する方形周溝墓群の初期の調査例として著名な「下野堂方形周溝墓群」が含まれ、また、墳丘長40m弱の円墳である万年寺八幡山古墳、その脇には、精製の石製模造品が多数出土した一辺25m前後の前期末葉～中期初頭の方墳である万年寺つつじ山古墳、周堀に近接して「伊予型」の中期の大型壺が埋置された林 8

浅見山 I 遺跡

号墳（万年寺高山古墳）などがある。この旭・小島古墳群でも、古墳時代前期後葉、あるいは末葉以降、墓域の端緒が開かれ、極めて活発な造墓活動が展開するようであり、浅見山 I 遺跡周辺の墳墓の推移を考える上でも、こうした動向も視野に入れる必要がある。

また、浅見山 I 遺跡では、6 世紀前半代の円墳を 2 基検出しているが、周辺には、塚本山古墳群（B）、東富田古墳群（C）、西五十子古墳群（D・E）、東五十子古墳群（F）、生野山古墳群（G）など、該期の古墳を含む古墳群も多い。また、同遺跡の東側指呼の間の支丘先端の北東斜面には、操業時期が 6 世紀後葉と目される、県内でも稀少な埴輪窯跡である宥勝寺裏埴輪窯跡（5）があることにも注意したい。

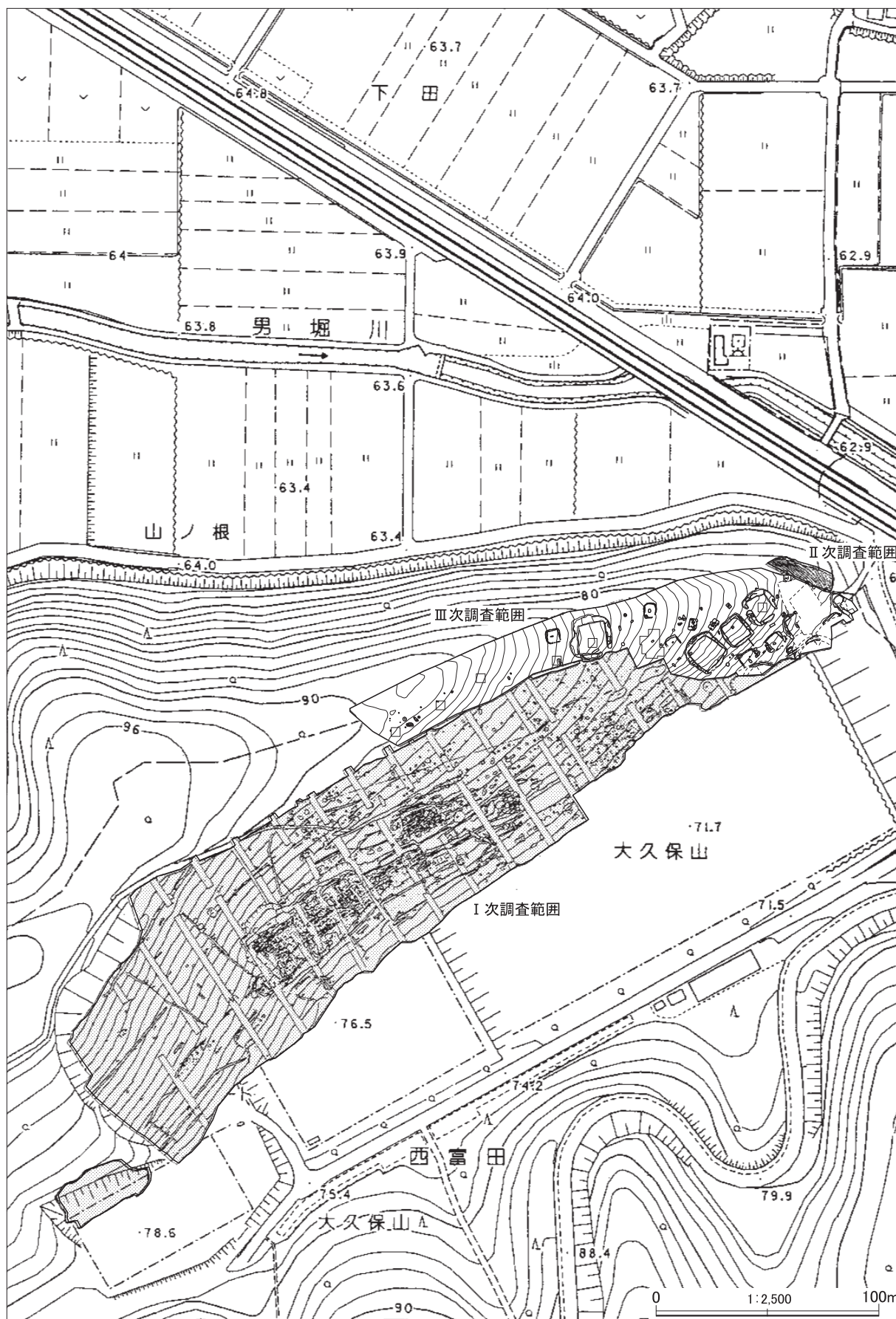
周辺の奈良・平安時代の集落跡に関しては、今回報告する久下東遺跡（2）、北堀久下塚北遺跡（3）をはじめとして、久下前遺跡（10）、北堀新田前遺跡（12）、七色塚遺跡（13）、下田遺跡（17）、観音塚遺跡（18）と沖積地をめぐる微高地や自然堤防上、低位段丘面上に、多数の遺跡が形成されたようである。この段階は、こうした中小河川流域に展開する集落と並んで、利根川や烏川の沖積地にのぞむ本庄台地の縁辺に、ほとんど切れ間がないまでに集落が展開する段階でもある。

本地域が平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した武蔵七党の児玉党の本貫地であり、また中世後期には、関東管領上杉方の防衛線としての五十子陣があったことから、由緒ある地名や時期的に関連する遺跡が多数見られる。

浅見山丘陵には、東谷中世墓群と大久保山寺院跡（7）、大久保山遺跡（4）内の中世後期の屋敷跡や館跡その他の中世遺構群、浅見山 I 遺跡 I 次調査で検出された連珠文軒平瓦や大型格子目文様叩き平瓦を焼成した中世瓦窯跡と、様々な考古学的な情報が得られているとともに、庄（莊）氏の菩提寺とされる西光山宥勝寺、「薊山合戦」の伝承などの中世に関連する口承、記録も少なからず見られる。また、より下流の一带では、東本庄遺跡（30）、栗崎館跡（31）などの館跡や館跡に関わる堀跡、さらに下流の五十子陣に関連する可能性のある諸遺跡と、多数の遺跡、資料が見られるが、中世段階の遺跡で詳細に内容が判明している遺跡は、必ずしも多くない。

註

- (1) 以下、とくに明記しない場合には、各遺跡の報告書および『本庄市史 資料編』、『本庄市史 通史編 I』（本庄市史編集室編 1976・1986）による。なお、第 2・3 図は、遺跡分布の概略図であり、古墳群などに関しては、おおよその範囲を示すにとどまる。
- (2) 今回の調査範囲内では、弥生時代中期前半の土坑は、5、6 基しか検出できなかったが、早稲田大学による I 次調査では、丘陵南斜面に広く展開する、弥生時代中期中葉を中心とする土坑群が調査されており、いわゆる神保富士塚式土器などが出土している。
- (3) 弥生時代後期前半代の遺構・遺物が検出されているのは、赤根川流域の下原北遺跡、塩谷平氏ノ宮遺跡の 2 遺跡のみである。
- (4) 第 2 図の範囲外になるが、大寄遺跡（50）のさらに下、東五十子古墳群（F）の小山川を挟んだ東側の櫛引台地末端には、方形周溝墓 8 基、円形周溝墓 1 基が検出された原ヶ谷戸遺跡、方形周溝墓 5 基、円形周溝墓 1 基、円墳 10 基が検出された四十坂遺跡、時期的に下るが横矧板鋌留短甲が出土したことで特記すべき四十塚古墳などを擁する四十塚古墳群がある。



第5図 浅見山I遺跡調査地点位置図

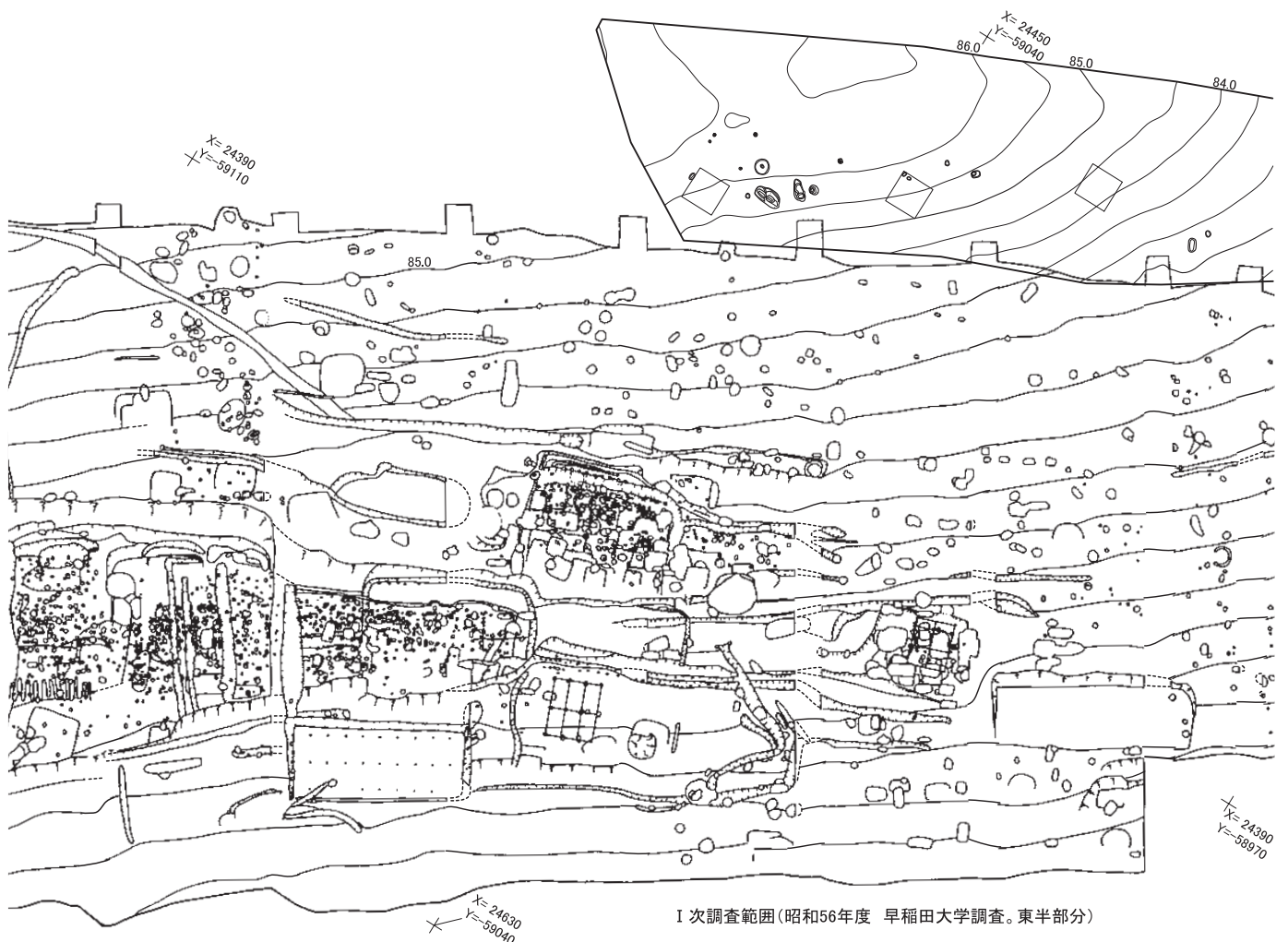
第三章 浅見山 I 遺跡のⅢ次調査

第1節 遺跡の概要

浅見山 I 遺跡は、浅見山丘陵の樹枝上に広がる北端の支丘上に位置する。この南西から北東に向かって細長く伸びた支丘の北斜面は急崖をなし、男堀川により生み出された沖積地に面し、南東向きの斜面は、丘陵中央部をなす大久保山との間の大きな谷部に向かいなだらかな斜面を形作っている。浅見山 I 遺跡は、この支丘の尾根筋および南東斜面で確認された旧石器時代から近世までの遺構・遺物の分布範囲である。

なお、これまで浅見山 I 遺跡に関して、「大久保山 A 遺跡」(本庄市史編集室編 1976)、「大久保山遺跡 浅見山 I 地区」(本庄市史編集室編 1986、松本・町田 2002他)なる呼称が用いられてきた経緯があるが、遺跡の地形的独立性に鑑み、早稲田大学の担当者との協議し、固有の遺跡名を冠することにした。

今回報告するⅢ次調査の調査範囲は、この支丘北東半の尾根から先端部周辺の南東斜面にかけての1帯である(第5・6図)。調査範囲は、南西-北東に細長く、全体がかなり傾斜した斜面地であり、遺構検出面のローム層上面での標高は、65.4~86.5mと、高低差が21m以上ある。調査面積は、約6,525㎡である。



I次調査範囲(昭和56年度 早稲田大学調査。東半部分)

第6図 浅見山 I 遺跡全体図

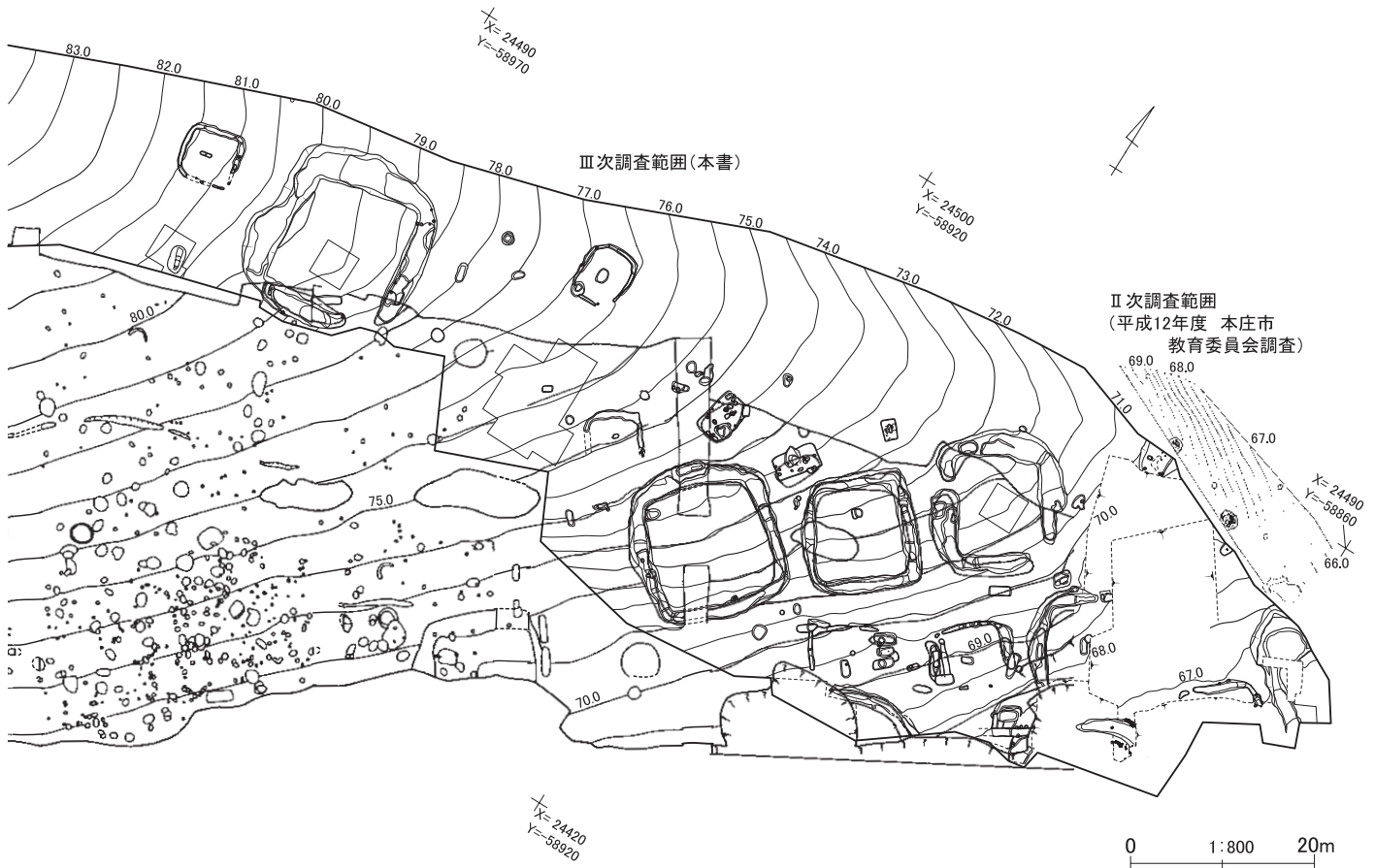
調査範囲に関しては、事業主体者が異なることから、都市計画道路用地をA1、A2地点、産業業務拠点用地、南口駅前広場用地をB1～B3地点と区分したが(第7図)、本書にて、一括して報告する。

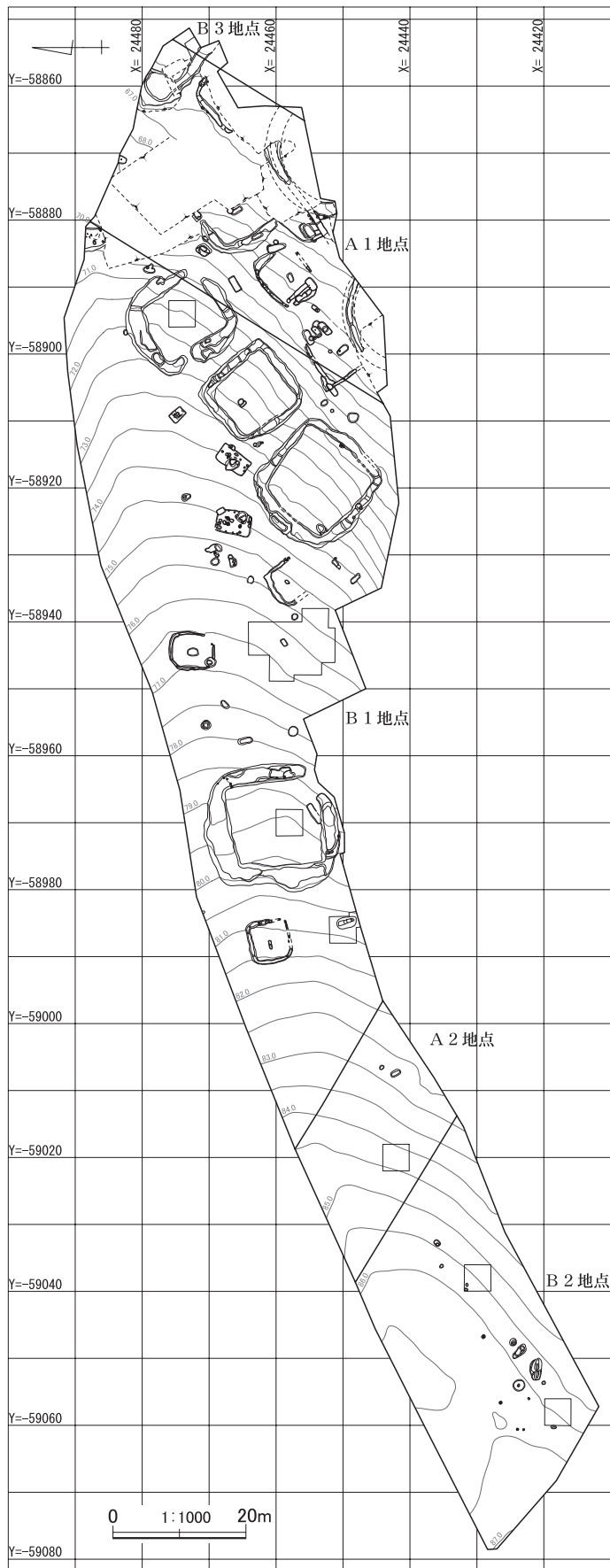
Ⅲ次調査で検出した遺構は、ローム層中の旧石器時代の黒曜石製石器集中部1箇所、弥生時代後期の竪穴住居跡3軒、古墳時代前期の方形周溝墓11基、古墳時代中期の円墳2基、縄文時代早期～中・近世の土坑62基、焼土跡2基、中・近世の溝4条、包含層出土の多量の縄文～古墳時代の土器・石器などである。

旧石器時代の石器集中部は、黄褐色のいわゆるハードローム層下部、後述するⅣ層下部からⅤ層を中心に検出したものであるが、武蔵野台地などの層準や年代の判る文化層との対比には、なお検討を要する資料である。本庄市を含む児玉地域では、これまで旧石器時代を対象とした調査例が皆無に近く、発掘調査により確かな地層から得られた、はじめての旧石器時代資料となる。

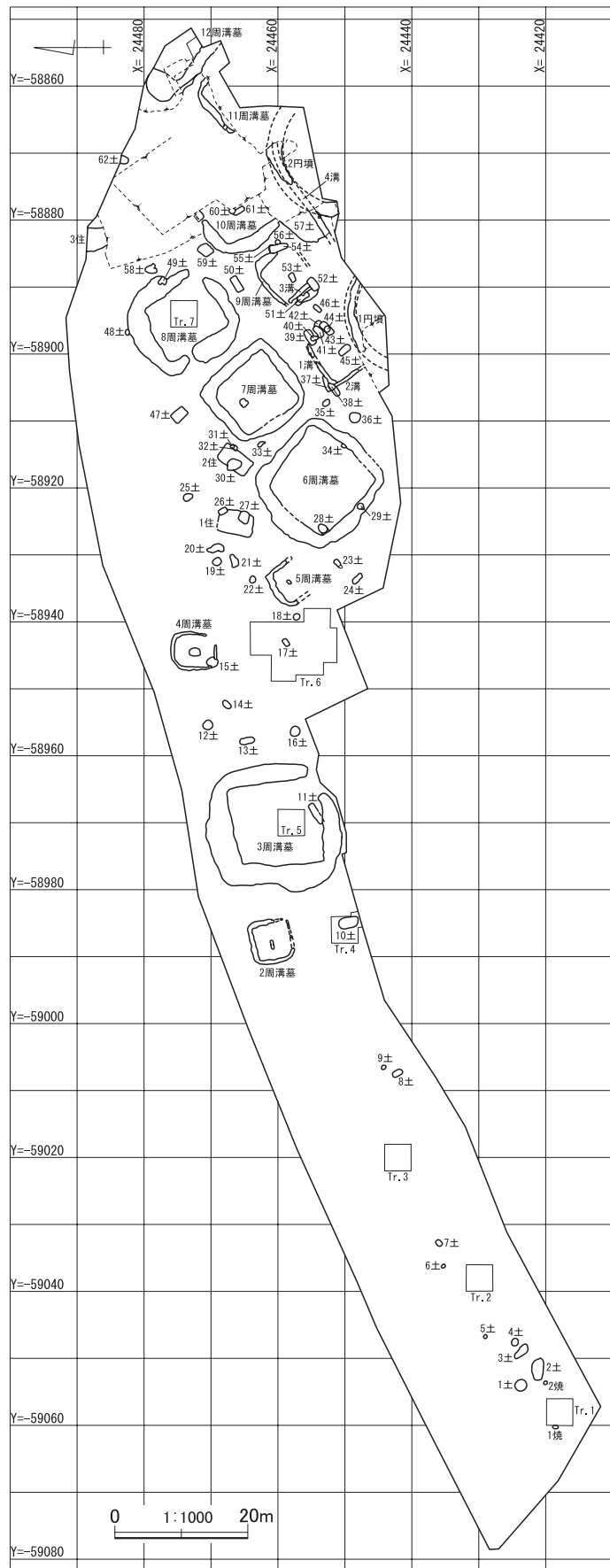
方形周溝墓は、古墳時代前期後半に属し、規模の違いが明瞭な大小、あるいは大・中・小の方形周溝墓が数基ずつ列状に並び墓域を構成するようである。円墳は、残存状態が悪いが、内1基からは、基部が埋置されたままの円筒埴輪が出土している。土坑群の中には、縄文時代早期～前期初頭の土坑が含まれ、また少数ではあるが、弥生時代中期前半の墓坑群の一部をなすものも含まれる。

縄文土器や石器、弥生土器の包含層の多くは、方形周溝墓の周溝覆土である。包含層出土の縄文土器は、周辺では、類例の少ない早期の撚糸文系土器、押型文系土器、条痕文系土器、前期初頭の羽状縄文系土器を主とし、それらの土器に伴い多量の石器類が出土している。





第7図 浅見山I遺跡(Ⅲ次)全体図



第8図 浅見山I遺跡(Ⅲ次)遺構分布図

第2節 検出された遺構と遺物

1 旧石器時代の遺構と遺物

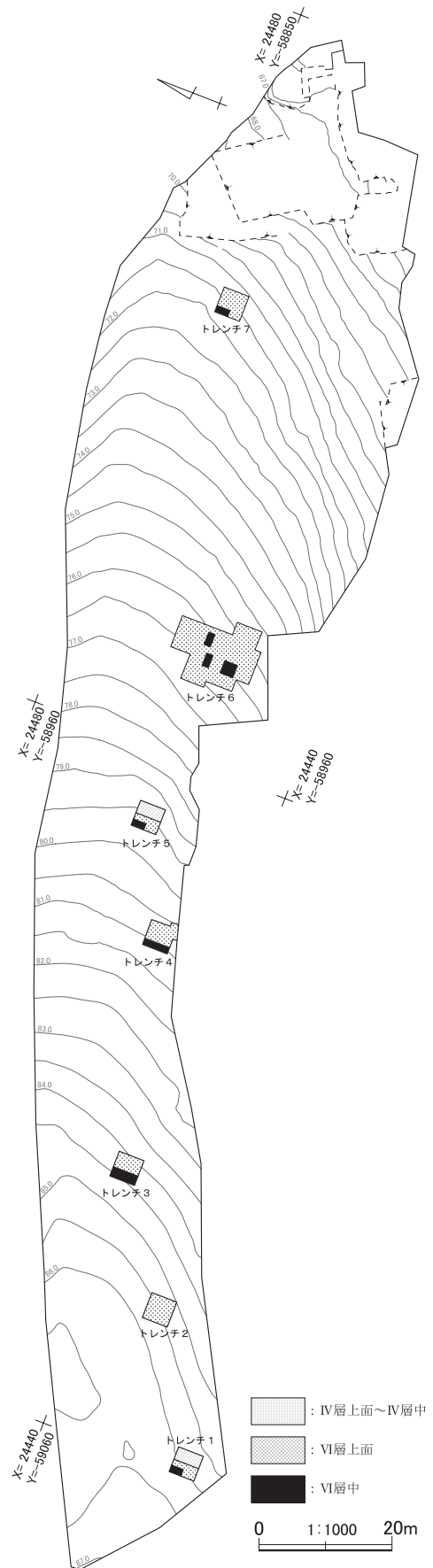
(1) 旧石器時代の調査

浅見山I遺跡では、方形周溝墓や竪穴住居跡などローム層を深く掘り込んだ遺構の多くから、それ以前の石器や碎片・剥片類が多数出土しており、その中には、実際旧石器時代の遺物との異同が定かでないものも含まれた。また、表面採集資料ではあるが、本遺跡では、爪形文土器片や小型尖頭器が採集されており（本庄市史編集室編1976）、縄文時代までの遺構調査に際してもローム層の壁面、溝底に石器や焼礫などが露出していないか、鋭意注意したが、その種の痕跡は見られなかった。縄文時代までの遺構の調査が終了した後、地形を勘案して7箇所を選定し、トレンチ1～7とし、ローム層中の調査を実施した（第9図）。

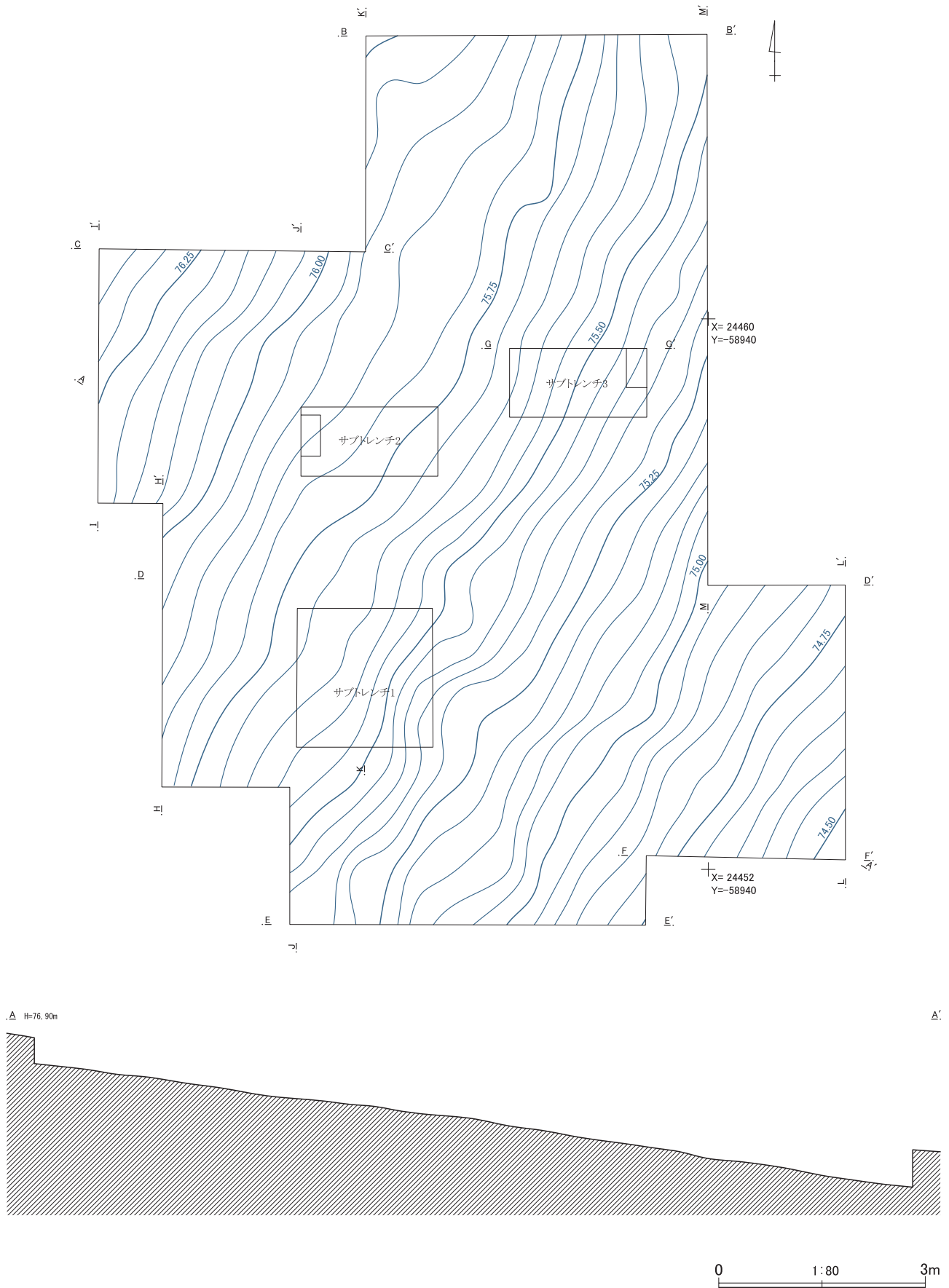
調査範囲の東半、丘陵先端の裾部を含む南東斜面に関しては、方形周溝墓の周溝が、ローム層をトレンチのように大きく掘り抜いており、壁面、溝底などローム層に石器や礫などが一切見られないことから、トレンチ1箇所のみとし、調査範囲の西半、丘陵中腹に重点を置き、トレンチを設定した。なお調査範囲の西半の尾根筋から北縁にかけては、ローム層より下位の礫層（浅見山礫層）が露出しており、遺物が出土する可能性は低いと判断した。

トレンチ調査に関しては、基本的に各4m四方のトレンチを開掘し、黄褐色のハードローム層、および下位のV層まで精査した後、遺物が検出できなかった場合には、トレンチを縮小し、VI層以下の層を精査する方法を用いた。VI層以下の土層に関しては、掘り下げるに従い、シルト化が進み、礫が密集するようになり、30cmほど掘り下げた段階で、事実上手掘りでの掘削が困難になった。この段階で、写真撮影を行い、北・西壁の土層断面図を作成した。

トレンチ6に関しては、石器が出土した時点で、写真撮影、および測点記録を行い、石器の出土層準を示す近辺の土層断面図を作成した。続いて石器の出土位置に応じて順次トレンチを拡張し続け、石器が途切れたことが見定められた時点で、写真撮影などの諸作業を行い、調査を終了した。



第9図 旧石器時代調査トレンチ位置・発掘深度図



第10図 旧石器時代調査トレンチ6平面・断面図

旧石器時代の石器が出土したのは、トレンチ 6・7のみである。トレンチで検出した石器は、いずれも黒曜石製であり、剥片類を含む点数は55点である。大半は、以下に記すⅣ層下部からⅤ層にかけての層準から出土している。

(2) 層序

これまで周辺地域を含め更新世に遡るローム層中の発掘調査が、ほとんどなされて来なかったこともあり、ローム層を層位区分すること自体、調査段階からの課題となった。本地域を含む埼玉県北部では、丘陵、段丘の表土下の最上部ローム層は、大里ローム層と呼ばれ、南関東地方の立川ローム層の上部に対比されるものとされてきた(堀口・河原塚 1979他)。また、黄褐色のローム層の下位には、暗褐色の暗色帯、あるいは暗褐色の礫混じりシルト層が見られる。大里ローム層は、重鉱物組成などから、主に富士山を給源とする南関東地方の立川ローム層とは異なり、浅間山起源の火山灰からなると推定されている(堀口・河原塚 上掲、大森・端山・堀口編 1986他)。また、群馬県域で板鼻褐色軽石層(A s - B Pグループ)以上のローム層を「上部ローム層」と総称するが(新井 1962)、大里ロームと同じ地層と考えられる。

本遺跡の立地する丘陵上の表層を覆う黄褐色ローム層も、この大里ローム層であり、以下の層位に区分することができた(第11~13図:Ⅲ a ~Ⅴ層)。なお、以下の区分は、遺跡全体の基本層序も兼ねるため、ローム層より上位の層の区分も、ここに一括して記載する。

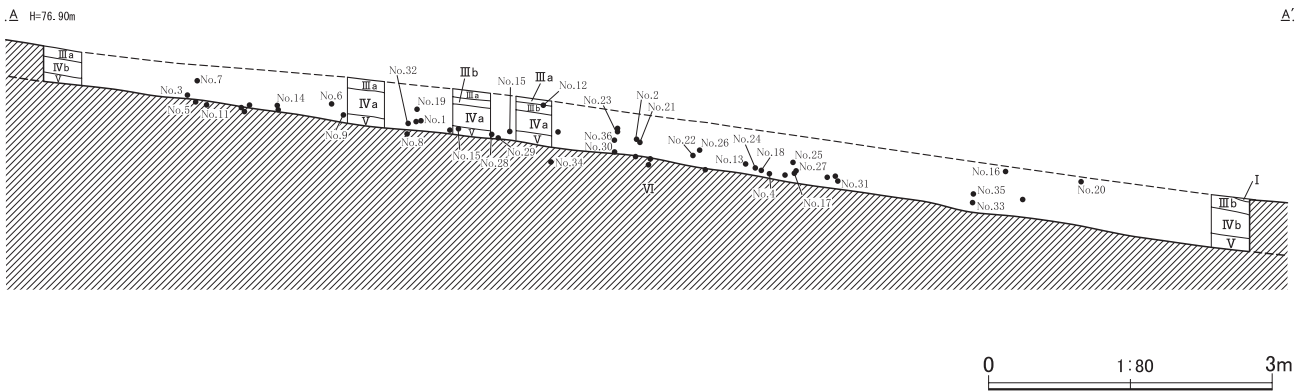
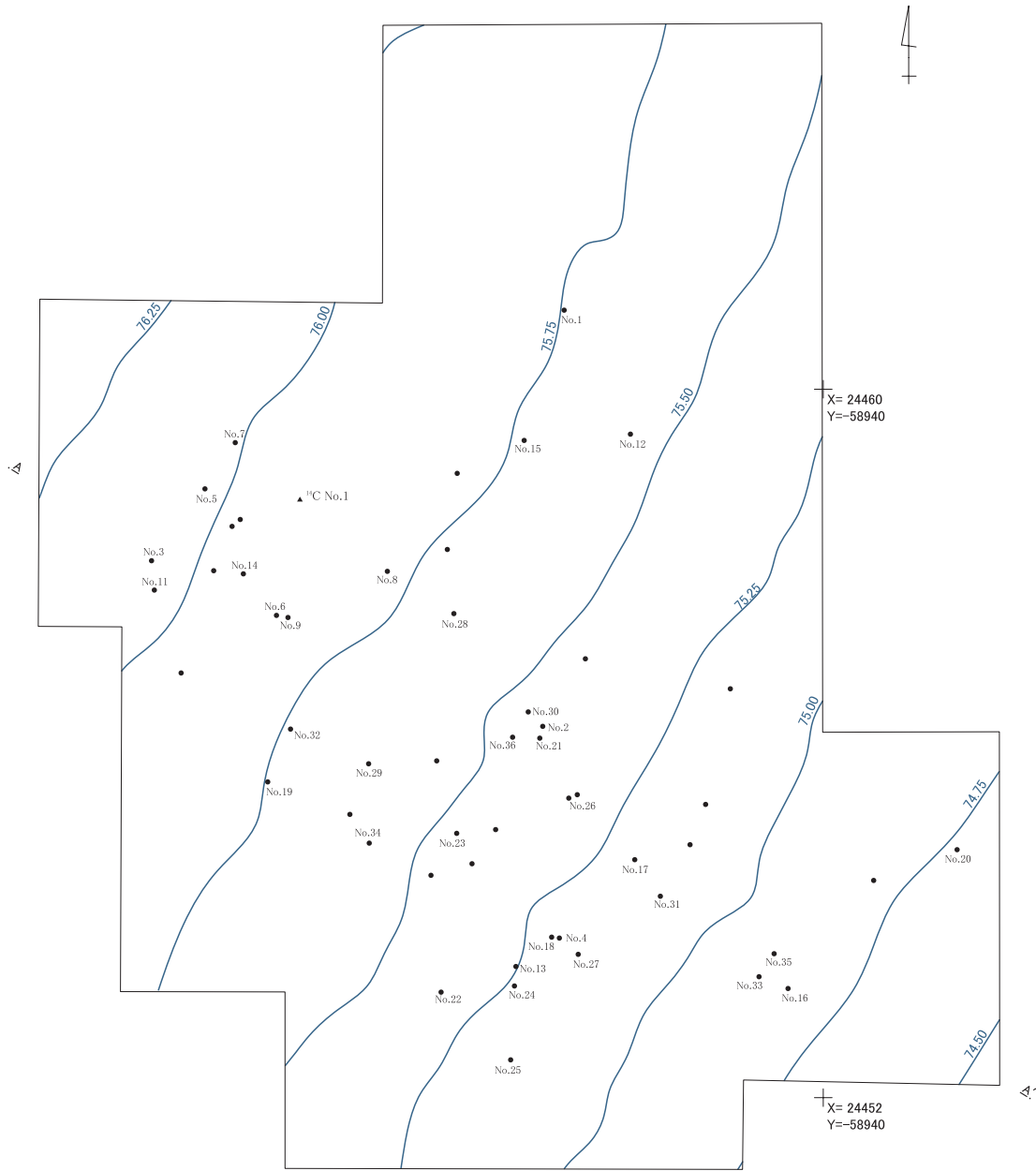
I層:近世以降、現代にいたる現表土層。調査範囲は、調査前には、葛や篠竹の繁茂する荒蕪地であった。所々A s - Aが吹き寄せられたのか濃集する部分が見られた。

Ⅱ a層:中・近世の遺構覆土を一括した。暗褐色土や二次堆積の黒褐色土などからなる土層である。近世の遺構覆土の場合、多くA s - Aが含まれ、しまりが弱い。中世の遺構覆土には、とくに特徴があるわけではなく、遺物による判定を援用した。

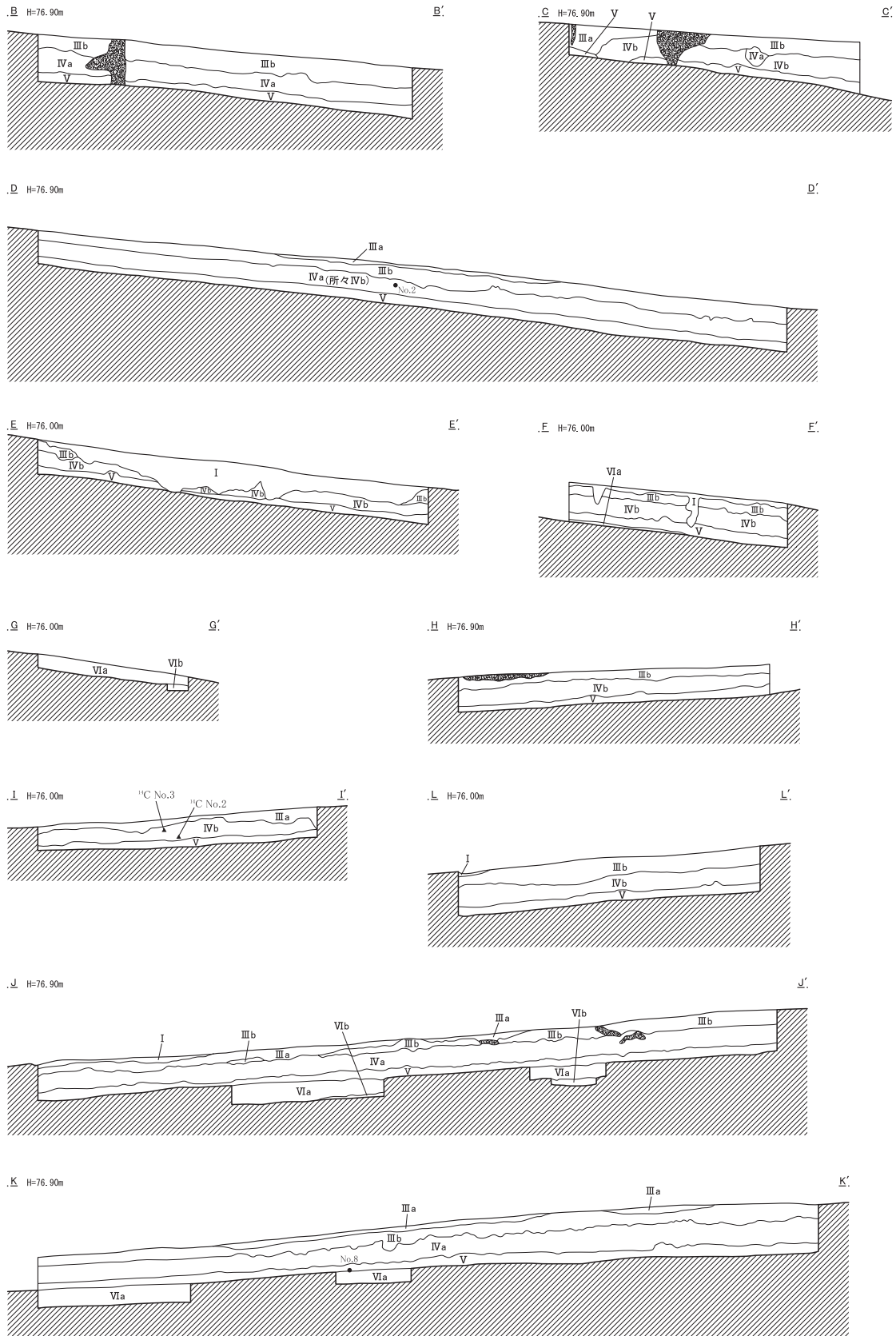
Ⅱ b層:主に弥生・古墳時代の住居跡や方形周溝墓の覆土に見られる暗褐色土~黒褐色土である。この層に特徴的なのは、いわゆる旧表土と呼ばれる黒褐色土で、この黒褐色土、および暗褐色土、ロームの様々な混合土によって、上記の遺構覆土の多くは構成される。とくに方形周溝墓の覆土の上・中層では、純層に近い黒褐色土層が見られる場合がある。ただし、この黒褐色土の上・下限の時期は、いまだに確定できているとは言えない。A s - Bと思われる軽石を含む30号土坑の覆土が、本層に近いことから見て、古墳時代以降ある段階まで覆土に大きな違いが見られないのかもしれない。

Ⅱ c層:縄文時代の土坑覆土の、主に黄褐色、暗褐色土を一括して本層とした。今回の調査で検出した縄文時代の遺構は、早期の土坑に限られるため、総じてロームを多く含む黄褐色土の覆土が多い。

Ⅲ a層:黄褐色ローム層。黄褐色ローム層最上部のいわゆるソフトローム層の上部である。Ⅲ b層と截然と分けることはできないが、Ⅲ b層に比し軟弱で、暗褐色土が部分的に混じり、やや汚れたロームの感がある。層厚は、6~16cmである。調査所見によれば、本層中に縄文時代前期初頭までの遺物が包含され、あるいは混入していることを確認している。丘陵上のローム層は、全体に不安定な斜面堆積物であり、中でもⅢ a層は、著しく軟弱で、風化、浸蝕にさらされ続けた不安定な部分であるかに見える。出土する遺物の時期は、必ずしも本ローム層の一次的な堆積時期を示さないであろう。なお、Ⅲ a・b層の区別が不分明な場合、まとめてⅢ層という呼称を用いた。



第11図 旧石器時代調査トレンチ6遺物分布図

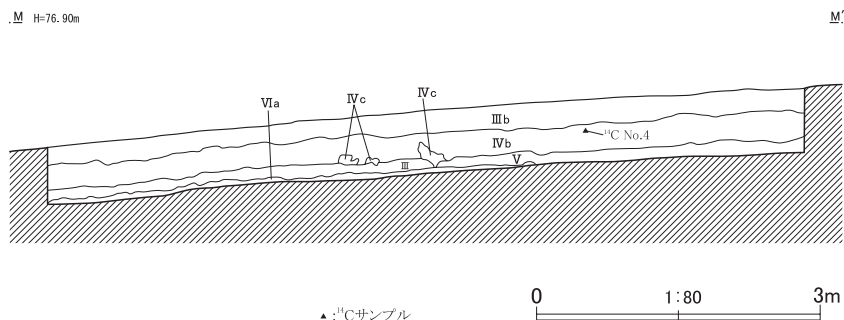


第12図 旧石器時代調査トレンチ6断面図(1)

浅見山 I 遺跡

Ⅲ b 層：黄褐色ローム層。

Ⅲ a 層下のほぼ均質なソフトローム層である。Ⅲ a 層よりしまっており、暗褐色土が混じることもない。比較的堆積状態のよい部分では、下記のⅣ a 層、いわゆるハードローム層との区



第13図 旧石器時代調査トレンチ6断面図(2)

別は、さほどむつかしくはないが、境界は不規則に乱高下するようであった。層厚は、8～37cmである。

Ⅳ a 層：黄褐色ローム層。黄褐色のいわゆるハードローム層である。上位のⅢ b 層や下位のⅤ層に比べ、やや白みが強い。本層は、丘陵斜面という地形のためか、トレンチ毎にかなり異なるようである。調査範囲の最高所に近いトレンチ1から丘陵斜面を下ったトレンチ6までは、部分的に軟質となり(Ⅳ b 層)、硬軟のロームが不規則に入り組み、丘陵裾部に近いトレンチ7では、本層が全体に均質に厚く堆積している。本層、あるいは次に記すⅣ b 層上部に、極局的ではあるが、団塊状、雲状にスコリアが濃集する部分が見られ、「A s - Y P およびその直上の火山灰互層と関連する」軽石との同定結果を得ている(本書第Ⅵ章第1節1)(註1)。層厚は、10～29cmである。

Ⅳ b 層：黄褐色ローム層。Ⅳ a 層の軟化、ソフトローム化した部分である。層厚は、Ⅳ a 層とほぼ同様である。Ⅳ a 層と上下の堆積関係を示すことなく、入り組むように硬軟が変化する。Ⅳ a 層との違いは、堆積環境により生じた層相の違いと考えられる。両層の違いは、傾斜地の不安定な堆積環境に起因するのであろう。Ⅳ a・b 層の違いが不明瞭な場合、あるいは両層の総称として、Ⅳ層という呼称を用いた。

Ⅴ層：黄褐色ローム層。Ⅳ層と次に記すⅥ a 層との漸移層である。Ⅳ a 層に比し、かなり軟弱であり、また色調は暗褐色みを増す。上・下層との界面は、不規則に上下する。層厚は、8～23cmである。

Ⅵ a 層：暗褐色礫混じりシルト層。5～30mm大の角礫を含む暗褐色のシルト層、あるいはシルト化の著しいローム層である。下部に行くほどシルト化が進み、礫の量も多くなる。層厚は、20cm前後である。

Ⅵ b 層：暗褐色礫混じりシルト層。Ⅵ a 層と次に記すⅦ層との境をなす層である。断面では、灰白色のシルト層に所々不規則な鋸歯状、波状に暗褐色シルトが食い込んでいるかに見えた。Ⅶ層表面のオープンクラックの入った部分であろう。層厚は、20cm前後である。

Ⅶ層：灰白色小礫混じりシルト層。灰白色のシルト層、あるいは粘土層である。本層は、極小面積しか調査していないが、調査後の造成工事に際し、観察した丘陵露頭によれば、本層以下は、砂礫層や粘土層などが幾重にも重なり合い丘陵地形を形作っているようであった。(松本)

註

(1) 大里ローム層の下部に、A s - B P (A s - M P を含む) が「団子状に密集している部分」が見られることについては、本地域の様々な露頭で観察されている(児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会編 1993)。大里ローム層下部に、とくに軽石が多く含まれることについては、当初より注意されてきたところであるが(堀口・河原塚 1979)、今回の調査では、軽石の同様の層準での濃集部分を確認することができなかった。

(3) 旧石器時代の石器

概要

今回の調査では、いわゆるソフトロームであるⅢ層上面での遺構の精査を終えた後、旧石器時代の調査のためのトレンチを7箇所を設定し、そのほとんどの箇所で暗褐色のシルト質土であるⅥ層上面まで開掘し、一部をⅥ層中まで掘り進め、調査を行った（第9～13図）。

その結果、ローム層中の遺物として、トレンチ7から1点石器が出土し、トレンチ6からはまとまって石器が出土したため、トレンチ6を拡張して、54点の石器を検出した（遺物取り上げ番号の53・54は、トレンチ6出土石器ではあるが、出土位置が確認できなかった資料である）。また、方形周溝墓の周溝など他の時代の遺構覆土および、主にローム層上面での表採資料中にも、旧石器時代に属すると判断できる石器が含まれ、その種の石器は、62点に上った。ここでは、計117点の旧石器時代の石器について報告する。

出土状況（第11～13図、図版2～5）

今回の調査地点は、東西方向に延びる丘陵支丘の尾根中腹から先端部、裾部にかけての一角であり、調査範囲内の最高所と裾部では、ローム層上面での標高差が21m以上ある斜面地である。主に石器が出土したトレンチ6は、調査地点のほぼ中央に位置し、西から東へ向かって傾斜する尾根筋から南側、南東側斜面へと転じる傾斜の変換点にあたる。

トレンチ6内のローム面も同様にゆるやかに傾斜しており、その中で遺物は大きく偏ることなく、分布範囲全体が等高線に長軸が直交する長楕円形を描くように、やや散漫に分布している。垂直分布では、Ⅲb層～Ⅵ層までの出土層位の幅をもつが、中心は、黄褐色のハードローム層であるⅣ層下部からハードローム層とⅥ層とした暗褐色シルト質土の漸移層であるⅤ層にあり、数点を除けば、ほぼ30cmくらいの幅に収まる高低差で出土している（第11～13図）。なお、焼礫やそれに類する礫や炭化物の集中などは、一切見られなかった。

第Ⅵ章に詳細を載せるが、トレンチ6壁面で採取した4点の炭化物微細片を試料として、AMS法を用いて¹⁴C年代測定を行った結果、やや採集資料に問題のある1点を除き、校正前の年代が約20500～22600年BPとの結果を得た（本書第Ⅵ章第1節2）。しかし、ローム層の重鉍物、火山ガラスの分析からは、ATと考えられる火山ガラスのピークがⅤ層～Ⅵa層にかけて若干認められるものの、拡散しており、非常にあいまいである（本書第Ⅵ章第1節1）。調査区が傾斜地にあたるため、ローム層の堆積に何らかの二次的要因が加わっている可能性が高い。したがって、今回出土した石器群は、分析によって得られたデータの年代以降に位置づけられる可能性が高いということ以外には、地質層位学を含む自然科学的な手法による年代的な位置付けが明確ではない資料ということになる。

石器群の様相（第14～16図、第1表、図版30・31）

出土した石器は、定形石器の形態や剥片剥離技術などから、いくつかの異なる時期に属すると考えられる。地域的な様相を踏まえた石器群の位置付けに関しては、第Ⅶ章でまとめて述べることとし、ここでは、個別石器の記載にとどめる。

なお、トレンチ6から出土した石器はすべて黒曜石で、肉眼観察で5つの母岩に分類している。そ

それぞれの特徴は、次の通りである。

Ob 1 は、透明度は高いが、やや黒いモヤ状の部分があり、それが一部は縞に見える。Ob 2 は、Ob 1 よりもさらに透明度が高く一部に縞に見える部分があり、小さな気泡が入る。この 2 母岩がほとんどを占め、あとの 3 母岩はどれも 1 点ずつの単品である。Ob 3 は、透明感はあるが若干赤みがかかったモヤ状の部分が多い。Ob 4 は、やはり透明度が高いが、はっきりした黒い縞が途切れながら入っている。この母岩に類似したものは後述するトレンチ外の石器にも多く見られる。Ob 5 は、とても透明度が高く、一部モヤ状の部分があるが不純物はほとんどない。また、うち 11 点につき、蛍光 X 線による原産地分析を行い(本書第 VI 章第 1 節 3)、Ob 1・3・5 は和田峠産、Ob 2 は蓼科産のものとの結果を得ている。

個別石器の記載 (第 14~16 図、第 1 表、図版 30・31)

トレンチ 6 出土石器 (第 14・15 図、第 1 表、図版 30・31)

第 14・15 図には、トレンチ 6 出土の石器を提示した。

第 14 図 1 は、二側縁加工の茂呂型ナイフ形石器である。稜の平行する石刃を素材とし、打点を右下に設定している。先端部には素材の末端が表面に少しめくれるような形で残っている。ブランディングは、打面部を削除するように右下から側縁にかけてと、左下に施されている。両側縁部の上半の剥離は、ややノッチ状の部分もあり一定ではなく、臨機的に施されたものや、使用に際し残されたものと考えられる。Ob 3 に帰属する。

第 14 図 2~14 には、Ob 1 に帰属する石器を提示した。

2 は二側縁加工のナイフ形石器で、礫面の残る、背面の剥離方向が一定していない縦長剥片を素材としている。基部に平坦な打面が残っている。ブランディングは、両側縁の下半部に施されているが、右側縁ではややノッチ状になっている。左側縁上半部は、一部欠損しているが平坦な剥離が施され、尖頭形を作り出している。右側縁には使用による微細な剥離痕が一部に残っている。

3 は両側縁が平行する単打面の石刃状の剥片である。

4 は二次加工を有する剥片で、左側縁の表面側に二次加工が施されている。素材となった剥片は、若干の調整を加えた打面を加撃して得られているが、力が上手く抜けずにやや軸がねじれた形になっている。

5~14 は、いずれも小型、縦長の剥片である。6~8 は、打面に若干の調整が加えられている。12 には打面に小さなパンチマークが残されている。13 は石核の小口部分を剥離したもので、断面が三角形をなしている。

15 は Ob 4 に帰属するもので、両側縁および背面の稜が平行する石刃で、打面調整が施されている。

16 は Ob 5 に帰属するもので、やはり両側縁が平行する小型の石刃である。

17~36 には、Ob 2 に帰属する石器を提示した。

17、18 は微細な剥離痕を有する剥片で、17 は、矩形の剥片の末端部に、18 は、横長剥片の右側縁に微細な剥離痕が残っている。

19 は両側縁および背面の稜が平行する石刃で、打面には細かな調整が施されている。断面形が台形をなし、下部を欠損しているものの、ある程度の長さもあったものと推測され、今回の調査で発見された石器の中では、もっとも優美な石刃である。

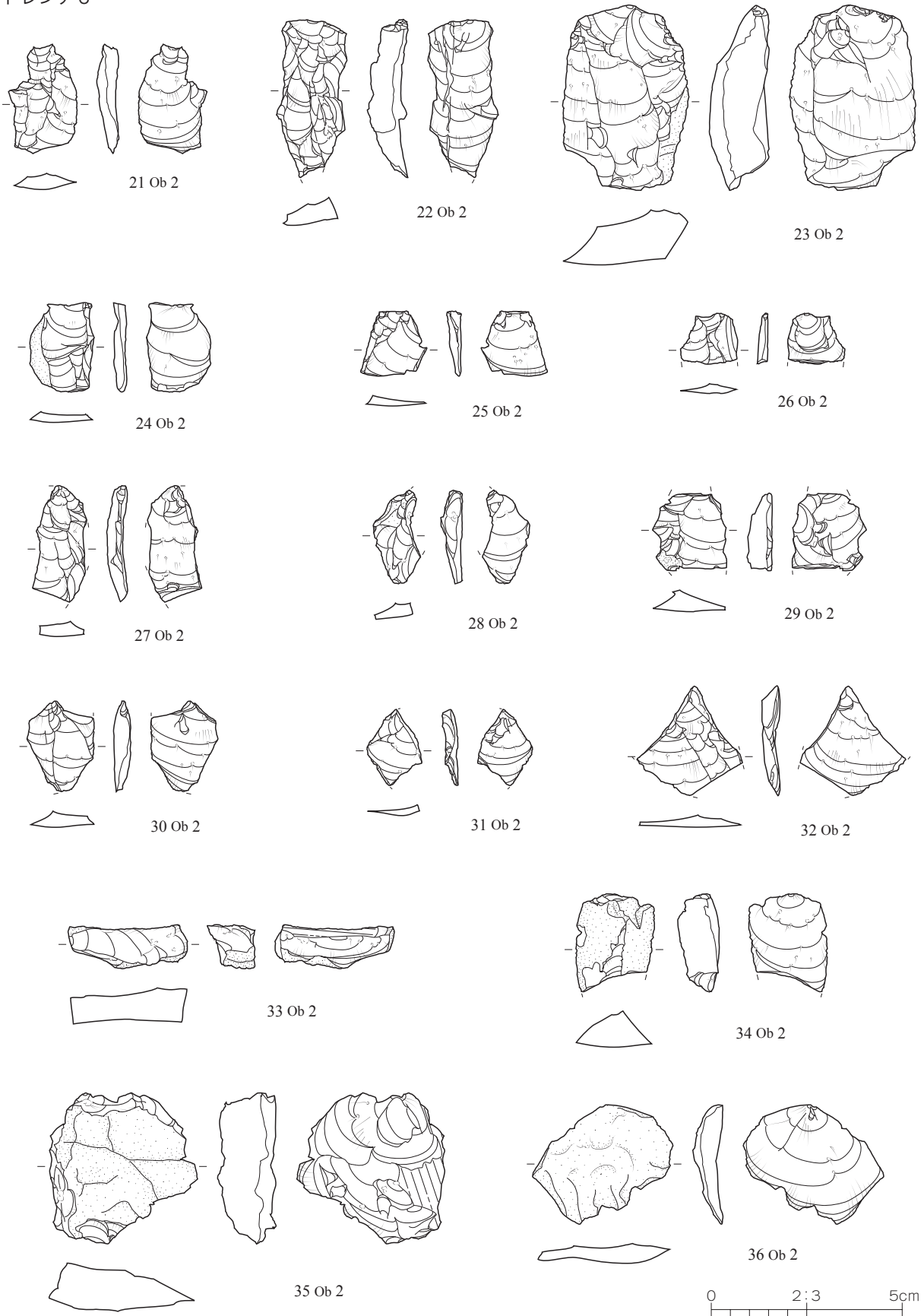
第 14 図 20、第 15 図 21~23 には、両側縁の比較的平行する縦長剥片を提示した。いずれも打面調整は

トレンチ6



第14図 旧石器時代出土遺物（1）

トレンチ6



第15図 旧石器時代出土遺物（2）

施されていない。23は厚手で、図の裏面左の剥離面は石核の一部である。

24～33は、不定形な剥片であるが、33を除き、縦方向に長い剥片である。

34～36は、背面がすべて礫面で覆われている。剥片剥離の初期、礫面の削除に伴う剥片であろう。34を見ると、角礫状の原石を素材とし、小口を剥離して、剥片剥離を始めていることが分かる。

トレンチ外出土石器（第16図、第1表、図版31）

第16図には、トレンチ外出土の石器を提示した。

37は腹面側にファシットが入る彫器である。やや厚めの縦長剥片を、素材を打面を基部側に設定し用いている。全周に腹面側からの剥離を施した後、ややノッチ状に仕上げた右側縁の上端を加撃し、細い槌状の剥離を施し、彫刀面を作出している。彫刀面は若干ねじれ、腹面側に傾いている。左刃で、形態的に見て「荒屋型彫刻刀形石器」に分類できる。ベージュ色の硬質の頁岩を用いている。8号方形周溝墓周溝内から出土している。

38は有槌尖頭器である。裏面は平坦な自然面で、表面は二次加工によりほぼ全面が覆われているため、素材の形態は明確ではない。表面は急角度の剥離を裏面側から施し尖頭形を作出したあと、さらに全周に細かな剥離を施し、整形している。裏面は右半部と基部に平坦剥離を施している。最後に、このようにして作られた、尖頭形石器の上端を加撃し、表面左に槌状の剥離を施している。これによっても全体の形状はあまり崩れることがなく、ほぼ左右対称の柳葉形をなす優美な「男女倉型」有槌尖頭器である。透明度は高いが、ややモヤ状のものと細かな気泡が入る黒曜石を使用している。ローム層上面で採集した資料である。

39は二次加工を有する剥片である。板状の剥片を素材としているが、裏面は自然面で、表面にはほぼ全面に二次加工が施されているため、その細かな形状は不明である。裏面の自然面を打面として、主に左側面から求心状に平坦な剥離が施され、さらにその後細かな剥離も加えられるが、不連続で、縁辺部は鋸歯状を残している。ただし、右側縁上半部には、先端部の方向からの加撃による剥離面があり、直線的な縁辺が残されている。38と異なり、この剥離後に周囲をめぐる平坦剥離が施されており、最終的に槌状剥離を行ったわけではないが、周縁加工の石器の側縁の一部に、直線的な剥離の縁辺を残す形態は類似している。また、平坦な自然面を裏面に設定する素材の用い方も類似している。このような点から両者は同時期の石器群に属するものと解釈してよいと考える。38よりもさらに透明度は高いが、同様にモヤ状の部分が入る黒曜石を使用している。6号方形周溝墓周溝から出土している。

40は搔器である。右上半部を一部欠損している。やや厚手の剥片の末端の最も厚い部分に連続した急角度の剥離を施し、刃部を作出している。時期的な位置付けは難しいが、使用している石材がトレンチ6からまとまって出土しているOb 2に類似した黒曜石であることから、同一の石器群に帰属するものとしてもよいかもしれない。調査区外の法面から出土している。

41～48には、縦長剥片を提示した。すべて透明度の高い黒曜石製で43、44はOb 2に、41、42、51、52はOb 4に、49、50はOb 5に類似している。

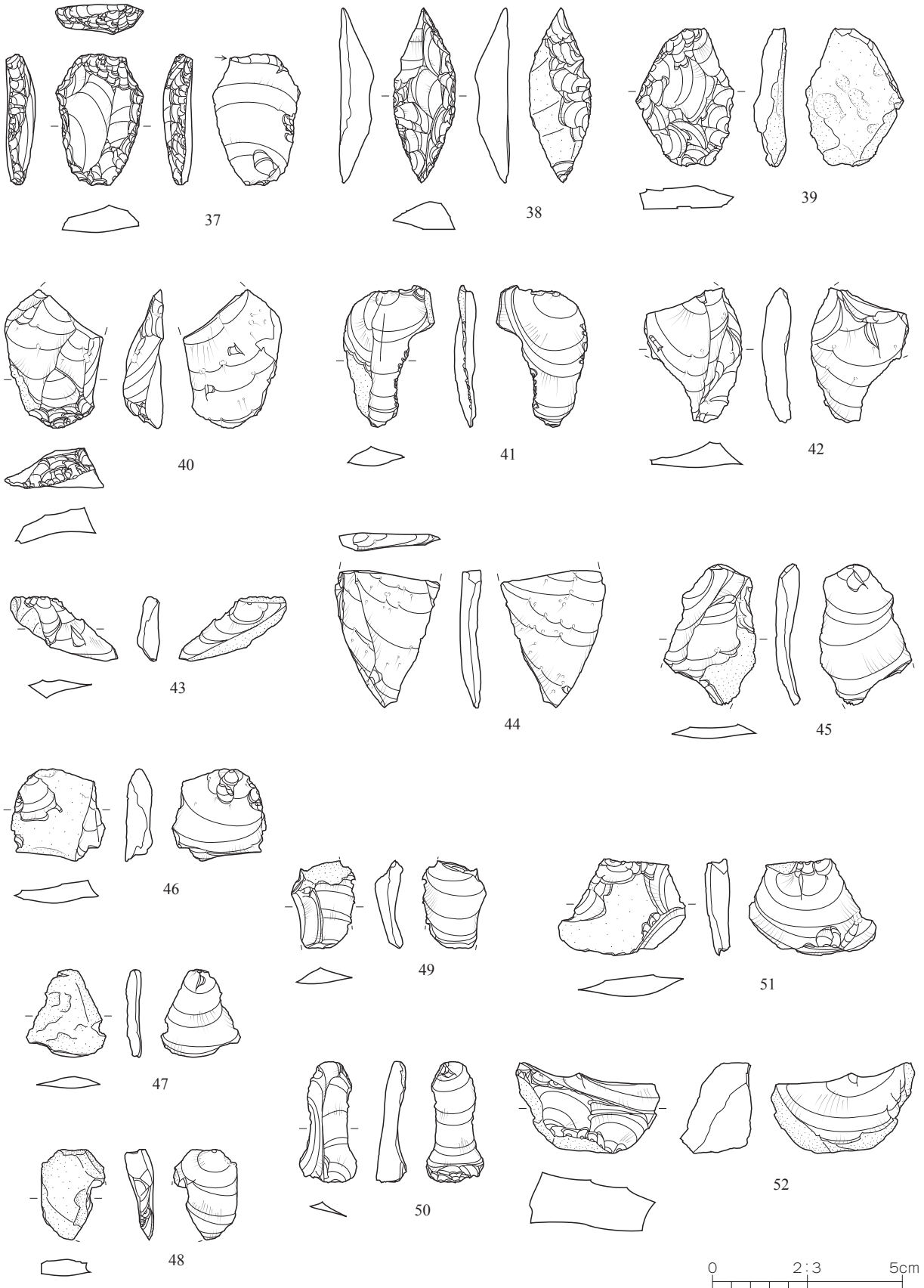
41～45は、縦長の剥片で、打面の残るものはすべて単打面である。

46～50は、表面が自然面で覆われた小型矩形の剥片で、46は裏面に不連続な二次加工が施されている。

49～52は、背面の剥離方向が多方面から入るものを集め提示した。

50の表面右半の剥離面はポジ面で、図の裏面下部の剥離面がその打面にあたる。（亀田 直美）

トレンチ外



第16図 旧石器時代出土遺物（3）

第 1 表 旧石器時代出土遺物観察表

挿図No.	器種	石材	母岩	個体	産地	完形	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	遺構名	遺物No.
1	ナイフ形石器	黒曜石	Ob3		和田	○	31.37	17.65	5.48	2.0	トレンチ6	2
2	ナイフ形石器	黒曜石	Ob1		和田	○	32.86	17.23	6.92	2.2	トレンチ6	8
3	剥片	黒曜石	Ob1			○	41.14	25.10	5.97	3.4	トレンチ6	37
4	RF	黒曜石	Ob1		和田	下部欠	40.96	41.07	7.94	9.6	トレンチ6	31
5	剥片	黒曜石	Ob1			○	14.73	11.13	2.10	0.3	トレンチ6	43
6	剥片	黒曜石	Ob1			下部欠	17.35	16.37	3.69	0.7	トレンチ6	41
7	剥片	黒曜石	Ob1			下部欠	21.43	23.82	3.88	0.9	トレンチ6	48
8	剥片	黒曜石	Ob1			下部欠	23.77	19.41	5.05	1.3	トレンチ6	6
9	剥片	黒曜石	Ob1			○	20.18	14.64	3.68	0.7	トレンチ6	49
10	剥片	黒曜石	Ob1			下部欠	21.84	15.16	9.01	1.5	トレンチ6	53
11	剥片	黒曜石	Ob1			下部欠	17.22	18.91	6.35	1.5	トレンチ6	34
12	剥片	黒曜石	Ob1			○	23.84	22.72	11.93	3.1	トレンチ6	1
13	剥片	黒曜石	Ob1			下部欠	21.04	7.20	5.30	0.9	トレンチ6	21
14	剥片	黒曜石	Ob1			○	24.82	8.55	3.96	0.6	トレンチ6	45
15	剥片	黒曜石	Ob4			下部欠	29.53	15.61	4.39	1.2	トレンチ6	3
16	小形石器	黒曜石	Ob5		和田	○	19.27	6.75	1.77	0.2	トレンチ6	30
17	UF	黒曜石	Ob2		蓼科	○	20.29	21.10	5.79	1.9	トレンチ6	26
18	剥片	黒曜石	Ob2			○	15.66	25.17	5.88	1.8	トレンチ6	27
19	剥片	黒曜石	Ob2		蓼科	下部欠	36.13	17.49	5.09	2.9	トレンチ6	17
20	剥片	黒曜石	Ob2		蓼科	○	35.28	26.10	7.28	5.8	トレンチ6	47
21	剥片	黒曜石	Ob2			○	28.53	17.61	5.84	1.8	トレンチ6	10
22	剥片	黒曜石	Ob2		蓼科	○	40.97	18.49	9.27	4.5	トレンチ6	24
23	剥片	黒曜石	Ob2			○	48.04	34.09	15.03	23.0	トレンチ6	13
24	剥片	黒曜石	Ob2			○	23.51	16.53	3.44	1.3	トレンチ6	23
25	剥片	黒曜石	Ob2			○	17.48	16.92	3.88	0.9	トレンチ6	19
26	剥片	黒曜石	Ob2			下部欠	13.35	14.72	2.69	0.6	トレンチ6	12
27	剥片	黒曜石	Ob2	1	蓼科	左側縁欠	29.36	14.11	5.17	2.0	トレンチ6	18
28	剥片	黒曜石	Ob2			右側縁欠	24.42	13.83	5.52	1.2	トレンチ6	7
29	剥片	黒曜石	Ob2			上下部欠	20.64	19.51	6.89	2.1	トレンチ6	16
30	剥片	黒曜石	Ob2			上部欠	23.48	17.61	4.67	1.6	トレンチ6	40
31	剥片	黒曜石	Ob2	3		右側縁欠	15.61	12.90	3.63	0.7	トレンチ6	35
32	剥片	黒曜石	Ob2			上下部欠	22.78	25.22	4.79	2.1	トレンチ6	28
33	剥片	黒曜石	Ob2			○	31.67	11.03	12.42	4.0	トレンチ6	42
34	剥片	黒曜石	Ob2			下部欠	26.94	20.72	10.71	5.4	トレンチ6	52
35	剥片	黒曜石	Ob2	2	蓼科	○	39.41	38.86	13.80	18.5	トレンチ6	39
36	剥片	黒曜石	Ob2		蓼科	○	31.52	37.64	7.33	4.2	トレンチ6	11
37	彫器	頁岩				○	34.29	22.84	7.78	6.6	SZ-08 3区	
38	尖頭器	黒曜石			和田	○	45.18	16.47	8.72	4.7	表採	82
39	RF	黒曜石				○	36.16	25.56	8.45	6.4	SZ-06	11
40	搔器	黒曜石			蓼科	上部欠	36.60	25.40	9.94	6.9	表採	
41	UF	黒曜石				○	36.39	24.71	5.63	2.8	SZ-05 2区	
42	剥片	黒曜石				上部欠	33.08	24.35	7.64	4.2	SZ-04 4区	
43	剥片	黒曜石				○	16.18	26.69	5.91	1.4	SZ-06	5
44	剥片	黒曜石				上部欠	36.23	27.38	5.46	3.6	表採	56
45	剥片	黒曜石				下部欠	36.80	23.92	7.12	3.5	表採	115
46	剥片	黒曜石				○	24.45	23.97	6.80	3.5	SK-50 6区	
47	剥片	黒曜石				○	22.93	20.78	3.91	1.4	SZ-03	4
48	剥片	黒曜石				右側縁欠	23.78	18.93	7.08	2.4	SK-22	
49	剥片	黒曜石				下部欠	22.28	17.23	7.20	1.6	SK-22	
50	剥片	黒曜石				○	31.78	15.02	7.92	2.0	SZ-07 6区	
51	剥片	黒曜石				○	25.06	32.30	6.24	3.8	SZ-09	
52	剥片	黒曜石				上部欠	20.08	38.24	17.98	11.5	SZ-06 6区	

2 竪穴住居跡

1号住居跡（第17～19図、第1表、図版6・32）

丘陵尾根筋の裾寄りの緩斜面で検出した遺構である。長軸が標高74.5m前後の位置で、長辺が等高線にほぼ平行するように設けられている。26号土坑に北東隅を、27号土坑に東壁の一角を壊されている。確認面は、Ⅲa層としたソフトローム層上面である。篠竹や葛の根が密生する表土層の直下に露出するⅢa層、とくにその上部は、かなり攪拌されている。

平面形は、各辺がかなり直線的な隅丸長方形である。長軸長（短辺の midpoint 間の長さ）は5.26m、短軸長（長辺の midpoint 間の長さ）は3.60m、長軸方位はN-12°-Eである。後述するように短軸が主軸となる可能性もあり、この場合、主軸方位、つまり短軸の方位は、N-79°-Wとなる。

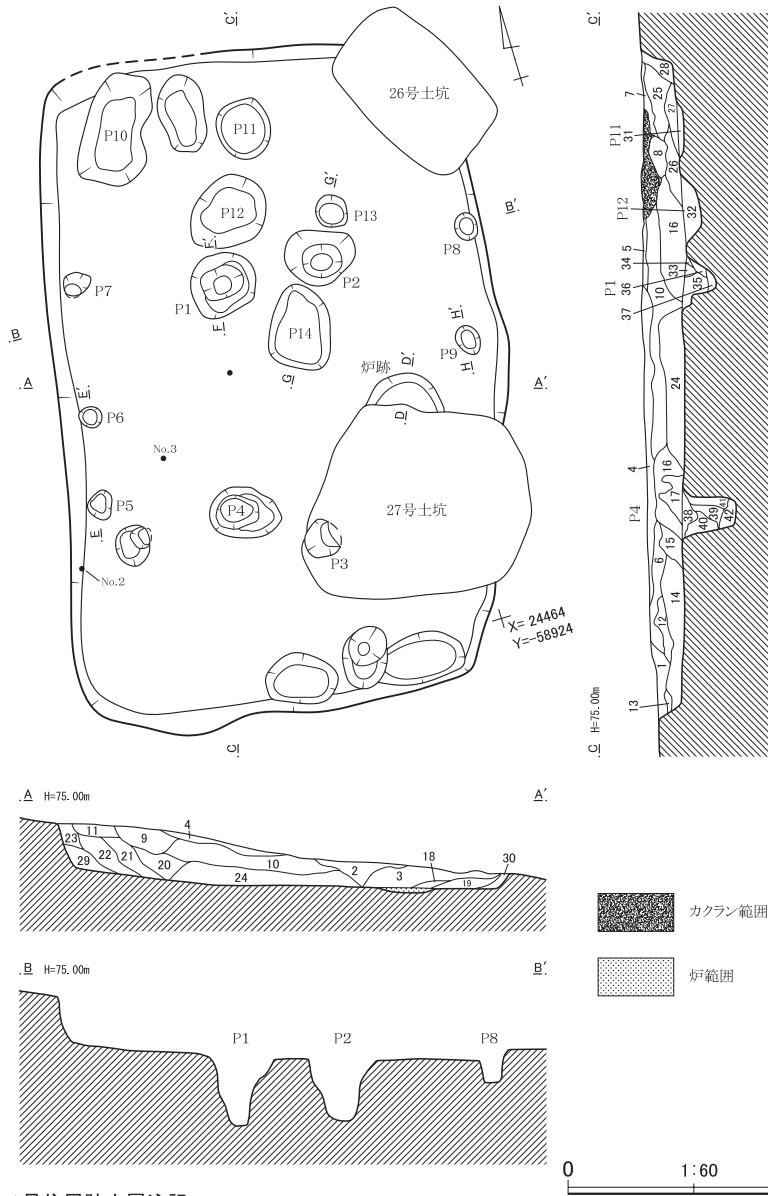
斜面上部にあたる西壁側は、掘り込みも深く、壁も急峻であるが、土壌の流出が進行したためか、北・南壁側はやや浅く、東壁はさらに浅く、壁の立ち上がりも不明瞭である。壁高は、西壁で37cm、南・北壁で19～24cm、東壁で12cm前後である。

床面はほぼ平坦であるが、斜面下方に向かって微妙に傾斜している。全面にわたって顕著な硬化は見られない。床面と思われるかすかに硬化した面で柱穴が検出できなかったため、床面をやや下げて柱穴を精査したが、明瞭な貼床層は確認できなかった。

支柱穴は、やや変則的ではあるが、掘り込み、覆土、位置から見てP1～P4の4つと考えられる。まず、P1・P4は支柱穴として問題ないであろう。P1は深さが53cm、P4は深さ42cmを測り、底面が東西に長い長楕円形である。土層断面（C-C'、F-F'断面）でも、柱根かと思われる痕跡が認められる。P2も、P1に近接しすぎているとはいえ、深さ48cm、覆土や掘り込みもしっかりしており、支柱穴と見て間違いはない。P3は、27号土坑の側壁で検出した痕跡的なピットではあるが、調査時の所見では、27号土坑の覆土とは明瞭に区別できる覆土であった。P3の床面からの深さは、44cmである。

P1～P4を4本柱の支柱穴とすると、樽式土器の分布圏にそのまま見られる、隅丸長方形で短辺に平行する対の柱穴が近接する例に類似する柱穴配置となる。P1-P2、P3-P4の並びは、東壁側に向かってハの字形にやや開いており、柱穴が主軸を中心線として対称に配される住居跡に一般的な傾向からすれば、短軸方向が主軸となる可能性も考えられる。通常奥壁寄りにある炉の位置をも勘案すれば、入口部は、西壁側になるのかもしれないが、斜面の高い側に入口部を想定することになり問題が残る。

P5～9は、いわゆる壁柱穴の可能性のある小ピットである。床面で明瞭に確認できたが、径18.5～24.5cmと小さく、底面がやや不明瞭な先細り気味となるようであった。深さは、P5が20cm、P6が32cm、P7が29cm、P8が19cm、P9が12cmである。覆土は、いずれもローム混じりの暗褐色土、ないしは褐色土で、支柱穴や他のピットの覆土と大きな違いは見られない。P7・8が、ほぼP1-P2の延長線上に位置し、P5もP3-P4と同じような位置関係にあることが注意される。入口部の位置の想定とも関連し、短軸（中心線）上に近いP6・9は、必ずしも壁柱穴と決めつけることができないのかもしれない。他にP1・2の周辺から北西隅にかけての範囲と南東隅にやや大きめのピットが見られる。



1号住居跡土層注記

- 1層: 褐色土層。暗褐色土と粒子の細かい黄褐色土の混合土。下部にロームブロック、黒褐色土を斑状に含む。
- 2層: 暗褐色土層。黒褐色土と灰黄褐色土の斑状の混合土。1、2mm大のAs—B(?)を多量に含む。2・3層は、27号土坑覆土。
- 3層: 暗褐色土層。黒褐色土とロームの斑状の混合土。雲状、斑点状をなし、所々ラミナが見られる。
- 4層: 暗褐色土層。黒褐色土を主に、斑点状、斑状にローム粒、5～20mm大のロームブロックを含む。
- 5層: 黒褐色土層。4層に近いが、黒褐色土がはるかに多い。
- 6層: 暗褐色土層。4層に近いが、黒褐色土が多い。4層より黒み弱い。南壁寄りややロームが多くなる。
- 7層: 暗褐色土層。暗褐色土とロームのよく混ざった混合土。
- 8層: 暗褐色土層。7層土をベースに、5～10mm大のロームブロック、黒褐色土粒、5mm大の炭化物粒を点々と含み、黒褐色土プロ

ックを斑状に含む。

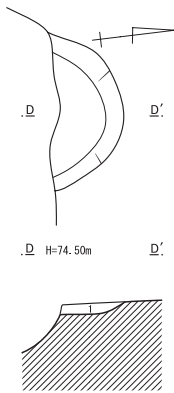
- 9層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、くすんだ黒みのあるロームの斑状混合土。
- 10層: 黒褐色土層。黒みの強い輪郭不鮮明なローム粒子、5～20mm大のロームブロックを斑状に含む。圧倒的に黒褐色土。ややしまっており、粘性あり。
- 11層: 褐色土層。9層に近いが、ローム多い。
- 12層: 暗褐色土層。6層に近いが、ロームが多い。5～30mm大の輪郭不鮮明なロームブロックを斑状、雲状に含む。
- 13層: 黄褐色土層。黄褐色ロームを主に、5mm大の黒褐色土小ブロックを含む。
- 14層: 暗褐色土層。12層に近いが、黒褐色土が多い。黒褐色土は、全体に斑点状を呈し、中央に濃集する。2～5mm大の炭化物片が点在する。
- 15層: 黒褐色土層。14層に近いが、黒褐色土がさらに多い。2～3mm大の炭化物粒を微量含む。
- 16層: 黒褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒、5～20mm大の雲状のロームブロック(輪郭不明瞭で濃集部に近い)を含む。
- 17層: 黄褐色土層。黒褐色土を微量含む黄褐色ロームのブロックと黒褐色土を斑状に含む暗褐色土のブロック。
- 18層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの斑状の混合土。
- 19層: 褐色土層。18層に近いが、ロームが多い。
- 20層: 暗褐色土層。9層に近いが、黒褐色土が多い。黒褐色土は所々10～30mm大のブロック状をなし21層より黒みが多い。
- 21層: 褐色土層。20層に近いが、ロームが多い。20層より黒褐色土ブロックが小さい。ロームは所々5～10mm大のブロック状。
- 22層: 褐色土層。21層に近いが、ロームが多い。
- 23層: 黄褐色土層。22層に近いが、ロームが多い。殆どローム。黒褐色土を微量含む。
- 24層: 暗褐色土層。16層に近いが、ロームが多い。ロームの輪郭13層より鮮明。
- 25層: 褐色土層。暗褐色土、くすんだ色調のロームの混合土を主に、黒褐色土を含む。所々5mm大の黄褐色ローム小ブロックを斑点状に含む。
- 26層: 暗褐色土層。25層に近いが、黒褐色土が多い。5～20mm大のロームブロックを不規則に含む。
- 27層: 黒褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒、焼土粒を含む。細かい炭化物を微量含む。

第17図 1号住居跡平面・断面図(1)

浅見山 I 遺跡

- 28層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土、黒褐色土を含む。25層に類似し、よりロームの多い層。
- 29層: 褐色土層。23層に近いが、黒みが若干強い。
- 30層: 黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を微量含む。
- 31層: 暗褐色土層。ローム粒、ロームブロックを斑状に含み、焼土粒を微量含む。P11覆土。
- 32層: 暗褐色土層。31層に近いが、ロームが少ない。P12覆土。
- 33層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性ともに弱い。33~37層はP1覆土。
- 34層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 35層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 36層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。

- 37層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 38層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を少量含む。38~42層は、P4覆土。
- 39層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。柱の抜き取り痕か。
- 40層: 黄褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 41層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 42層: 黄褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。粘性ややあり。

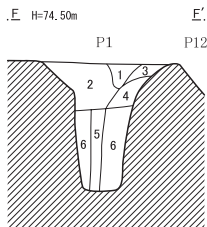
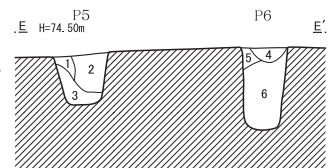


1号住居跡炉土層注記

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。ロームは、ローム粒及び5~50mm大のロームブロックからなる。焼土粒をかなり含む。

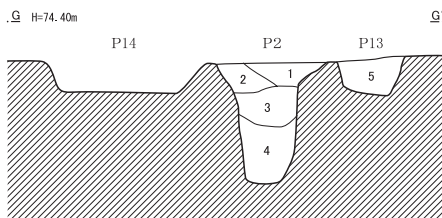
1号住居跡P5・P6土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、炭化物粒を微量含む。
- 2層: 黄褐色土層。7mm大のロームブロック。
- 3層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 4層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 5層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。
- 6層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。



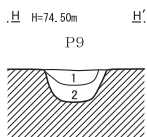
1号住居跡P1土層注記

- 1層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 2層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 3層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 4層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。
- 5層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。柱根痕。
- 6層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。



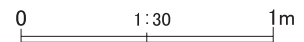
1号住居跡P2・P13土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、炭化物粒微量含む。しまり弱く、粘性弱い。
- 2層: 褐色土層。5~30mm大のロームブロックを多量に含む。
- 3層: 暗褐色土層。5~30mm大のロームブロックをかなり含む。
- 4層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、ロームブロックが少ない。



1号住居跡P9土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含む。
- 2層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。



第18図 1号住居跡平面・断面図(2)

炉跡は、ほぼ短軸上の東壁寄りで検出した。27号土坑により南半を大きく壊されている。皿状に掘りくぼめられた地床炉であろう。平面形はほぼ円形で、現存径は63cm、深さは4cmである。覆土には、かなり焼土を含むが、炉床には被熱赤化した痕跡がほとんど見られない。

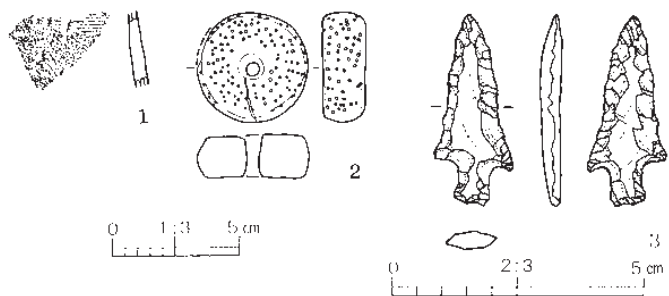
他にP11も覆土に微量ながらも焼土を含み、直上の層（C-C'断面の27層）に焼土や炭化物を含むことから見て、炉跡の可能性があるとしたい。

覆土は、ピットおよび27号土坑覆土を除いて、28層に分けられた。A-A'断面では、主に褐色土、暗褐色土、黒褐色土、ロームからなる埋積土が、斜面上部からかなり一方向的に流入、堆積した様が見取れるが、C-C'断面ではやや不規則である。

なお、2・3層は、本住居跡の断面をかすめた27号土坑覆土である。後掲する平面図では示し得なかったが、27号土坑は、本来より大きく開口していた模様である。

遺物としては、少数の土器片と土製紡錘車、打製石鏃が覆土中から出土している（第19図1～3）。櫛描文の施文された胴部片（1）は、覆土中出土である。土製紡錘車（2）は、南西隅に近い西壁沿いの、床面よりかなり浮いた位置から、頁岩製の打製石鏃（3）は、P4・6の間で、床面よりやや浮いた状態で出土している。3は全長37.2mm、幅15.5mm、東関東の後期にま見られる、いわゆる「アメリカ式石鏃」の一種であろうか（海老原 2004）。

文様のある土器片は、唯一図化した第19図1のみであり、他は磨きに近い撫でが施された無文の胴部片ばかりである。多少強引ではあるが、文様のある破片が乏しいことを、むしろ時期的特徴とすれば、弥生時代後期末葉以降、あるいは古墳時代前期を含めた位置付けが可能であると考えられる。本住居跡の時期は、遺物および覆土から弥生時代後期末葉～古墳時代前期と考えたい。



第19図 1号住居跡出土遺物

第2表 1号住居跡出土遺物観察表

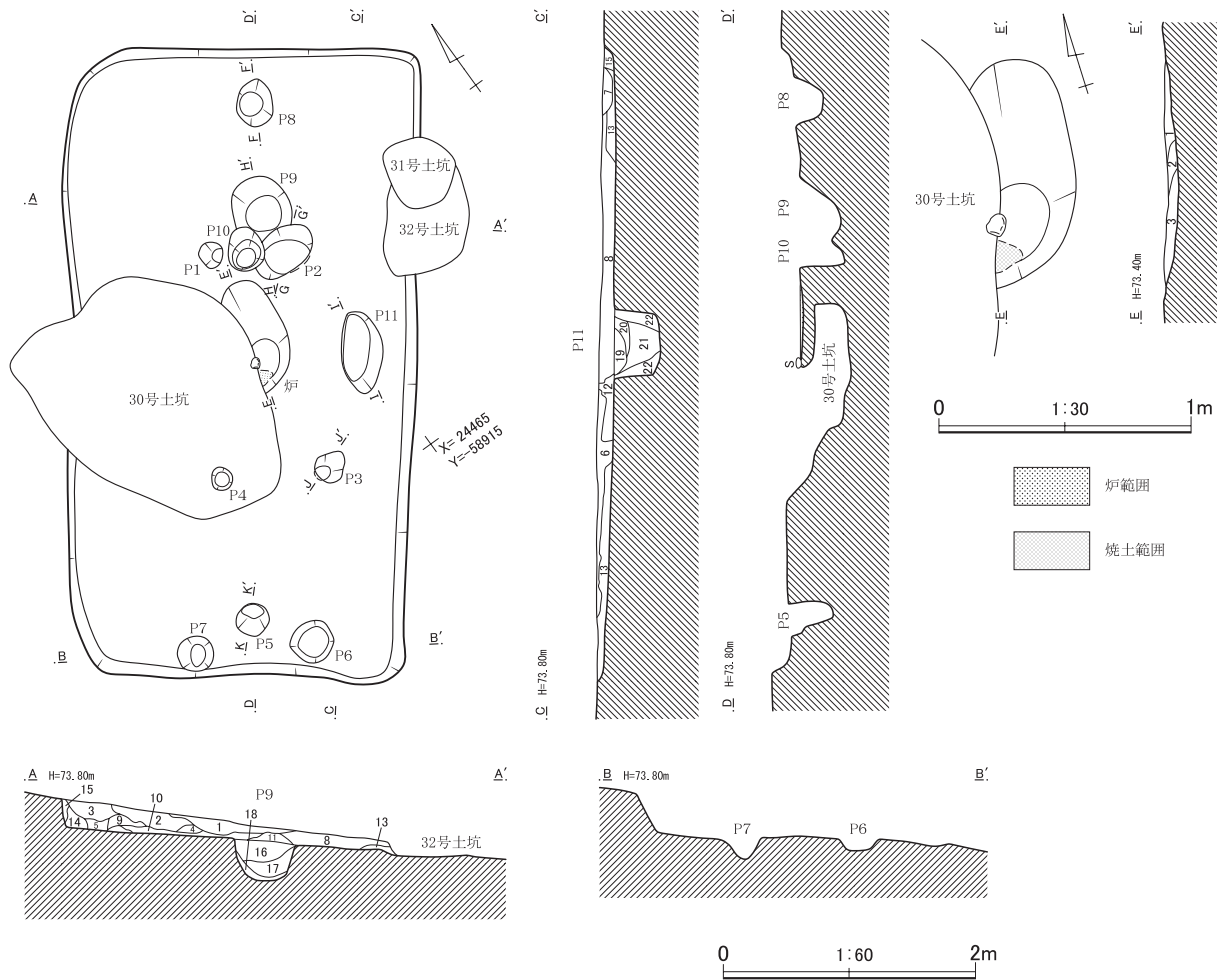
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕		ゆるやかにくびれる部位。	外面-櫛描簾状文と同波状文。内面-ミガキ、ナデ。	白色粒多量 外面-褐灰色、 内面-褐色	胴部破片。
2	紡錘車	直径 4.3 厚さ 1.7	断面はおおむね長方形で、台形にはならない。	外面-全面に細かな刺突文。土製。	白色粒・砂礫 内外面-橙色	

2号住居跡（第20・21図、図版6・7）

丘陵尾根筋の裾寄りの緩斜面で検出した遺構である。長辺は等高線にほぼ平行し、中央の標高は、73.5m前後である。北西壁中央から床面にかけて30号土坑に大きく壊され、南東壁を31・32号土坑に壊されている。確認面は、Ⅲa層上面である。

西壁が多少丸みをもつものの、他の辺はほとんど直線に近く、長方形といってもよい平面形である。長軸長は4.97m、短軸長は推定で2.74m前後、長軸方位は、N-37°-Eである。

斜面上部の北西壁側は、掘り込みも深く、壁もしっかりしており、斜面下方にあたる南東壁側は、掘り込みも浅く、壁の立ち上がりも明瞭ではない。壁高は、北西壁で23～33cm、南東壁では1、2cmである。



2号住居跡土層注記

- 1層: 黒褐色土層。褐色に近い5~10mm大のローム粒、ロームブロックを斑点状に含む。白色のバミスを微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。褐色ないしは暗褐色ロームの斑点が見える。
- 3層: 暗褐色土層。1層に近いが、さらにロームが多い。
- 4層: 暗褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。
- 5層: 暗褐色土層。9層に近いが、ロームが若干多い。
- 6層: 暗褐色土層。黒褐色土とロームの斑状の混合土。5mm大の炭化物及び炭化物粒が点在し、焼土を微量含む。
- 7層: 褐色土層。ロームと暗褐色土の斑状の混合土。中央に焼土粒、5mm大の焼土ブロックが集中。炭化物も点在。
- 8層: 暗褐色土層。6層に近いが、黒褐色土が微妙に多く、炭化物も7、8mm大のものを含む。
- 9層: 暗褐色土層。2層に近いが、やや黒褐色土が多い。1層より少ない。
- 10層: 暗褐色土層。4層に近いが、暗い色調のロームが多く斑状を呈する。
- 11層: 黒褐色土層。1層に近いが、ロームが少ない。ややしまり増す。

- 12層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を少量含む。ロームブロックを主とする。
- 13層: 黄褐色土層。12層に近いが、ロームが少なく、ローム粒を主とする。
- 14層: 黄褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。
- 15層: 黄褐色土層。13層に近いが、暗褐色土が若干多い。
- 16層: 褐色土層。5mm大のロームブロック、炭化物粒を微量含む。16~18層は、P9覆土。
- 17層: 褐色土層。5mm大のロームブロックを少量含む。
- 18層: 黄褐色土層。10~15mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 19層: 暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックを少量、炭化物粒微量含む。19~22層は、P11覆土。
- 20層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックをかなり含む。
- 21層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 22層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを多量に含む。粘性ややあり。

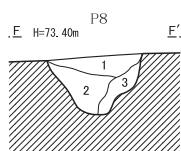
第20図 2号住居跡平面・断面図

2号住居跡炉土層注記

- 1層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒、焼土粒微量含む。しまり弱い。
- 2層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロック、焼土粒を微量含む。

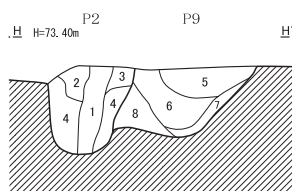
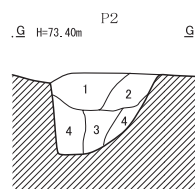
しまり弱い。

- 3層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、焼土粒少量、炭化物粒微量含む。しまり弱い。



2号住居跡P8土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 3層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。



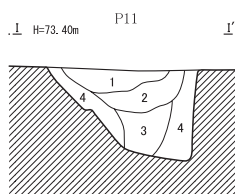
2号住居跡P2土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に、3mm大の黒褐色土粒を少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のロームブロックをかなり含み、3mm大の黒褐色土粒を少量含む。
- 3層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり弱く、粘性ややあり。
- 4層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。

2号住居跡P2・P9土層注記

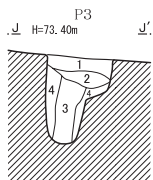
- 1層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 2層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 3層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 4層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。

- 5層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 6層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 7層: 黄褐色土層。10~15mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 8層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含み、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。



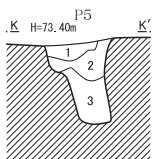
2号住居跡P11土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、黒褐色土小ブロックをかなり含む。
- 3層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 4層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを多量に含む。粘性ややあり。



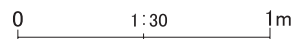
2号住居跡P3土層注記

- 1層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。3mm大のローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。
- 3層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。しまり弱く、粘性ややあり。
- 4層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。



2号住居跡P5土層注記

- 1層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 2層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。
- 3層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。



第21図 2号住居跡断面図

浅見山 I 遺跡

床面はほぼ平坦であるが、斜面下方に向かっていくらか傾斜している。いわゆる直床で、貼床層は見られず、床面の硬化も微弱である。

支柱穴については、先記した1号住居跡の変則的な柱穴配置をも勘案し、以下のような見方を一案として記しておきたい。

支柱穴としては、深さや位置からP1～P4の4本柱である可能性が考えられる。P1は径21cm、深さが44cm、P2は長径53cm、深さ32cm、P3は径26cm、深さ35cmである。P4は、30号土坑の壁に残されたピットの痕跡で、土坑壁での径19cm、床面から復元した深さは46cmである。P1-P2間、P3-P4間が著しく狭小になるが、1号住居跡の支柱穴配置に似ることが補強材料になるかと思う。全体として、北西側、斜面上方側のP1・4が、P2・3に比べ、やや深いことが特徴になるのかもしれない。

なお、P2・3は、土層断面（G-G'、H-H'、I-I'断面）に柱根かと思われる痕跡が認められる。P2と重複するP9・10に関しては、P2より掘り込みが深く問題が残るが、P1に近接しすぎており、P2に関連するピットと見る余地を残し、支柱穴からは一応除外する。

P5は、ほぼ長軸線上の奥壁側に傾斜して掘り込まれた斜行ピットで、深さ33cm、P6の深さは7cm、P7の深さは14cmである。該期に一般的な長軸方向に主軸をもつ住居跡とすれば、P5は、いわゆる入口部梯子穴、P6は貯蔵穴であろう。P7も、P6とよく似た対になる位置にあり、貯蔵穴に類するピットとも考えられる。

長軸線上奥壁寄りのP8は、深さが21cm、かなり不整な形状のP11の深さは、39cmである。P8は、P5と対になるような位置にあり、補助的な柱の柱穴などとも見ることができそうであるが、確言できない。

炉跡は、住居跡の中央で検出した。30号土坑により南西半を大きく壊されている。皿状に浅く掘りくぼめられた地床炉である。平面形は卵形に近く、長径89cm、現存短径は30cm前後、深さは5、6cmである。覆土は3層で、焼土粒や炭化物粒を含む黒みの強い層が主となるが、全体に焼土粒や炭化物粒は、少量、あるいは微量である。炉床の被熱赤化は顕著とは言えず、焼土が隅にわずかに残されているのみである。

炉跡中央で検出した拳大の円礫は、枕石の類であろうが、本来の位置を保ってはいないようである。

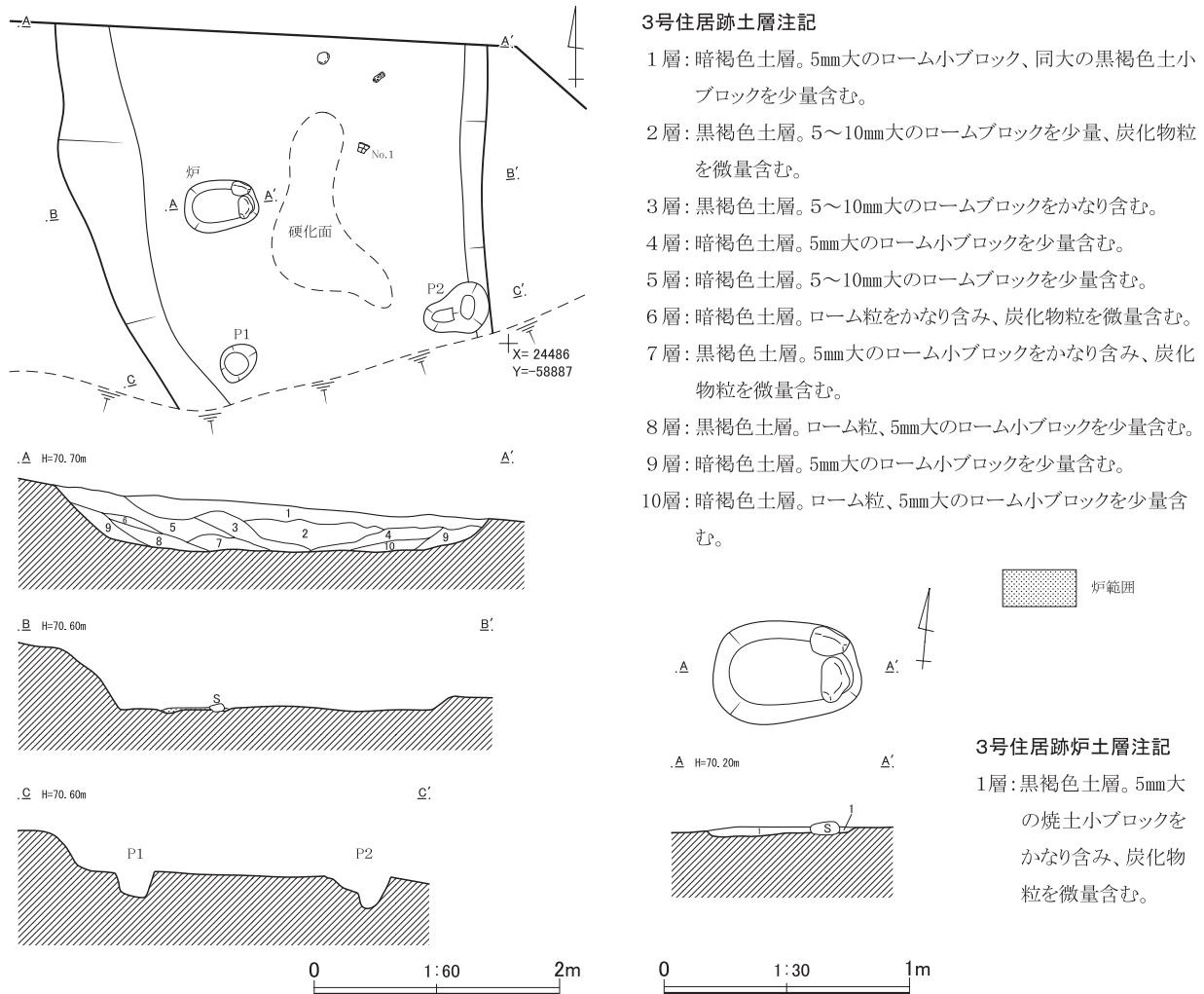
覆土は、ピットの覆土を除いて、15層に分けられた。A-A'断面に見られるように、主に褐色土、暗褐色土、黒褐色土、ロームからなる埋積土が、全体としては、斜面上方から流入し続けた様子がうかがえるが、土層は必ずしも整然とはしていない。

遺物は、弥生土器片かと思われる小破片が、少数出土したのみである。

本住居跡は、住居形態や覆土から見て、近接する1号住居跡とほど遠からぬ時期の所産であろう。よって弥生時代後期後半～末葉と推定される。

3号住居跡（第22・23図、第3表、図版7・32）

丘陵裾部に近い緩斜面で検出した遺構である。本遺構より北、東側は傾斜がかなりきつくなるようであり、尾根筋の傾斜の弱い平場の北東端に設けられた住居跡のようである。中央の標高は、70.2～70.3mである。遺構の北半は、道路に面する崖面に近過ぎ調査することができなかった。また、南壁側は、旧陸軍の施設建設に伴う地形改変により削平されている。確認面は、Ⅲa層上面である。



第22図 3号住居跡平面・断面図

東西壁間の中点を通る軸での現存長は、2.85m、この軸に直交する東西方向での長さは、3.45mである。平面形は不明であるが、2・3号住居跡を参照するなら、やはり南北方向に長い長方形、隅丸長方形に復元するのが、まず無難であろう。西壁南端は、内側に湾曲しはじめており、ほどなく南西隅に連なるかに見える、また2・3号住居跡の場合、ともに長軸方向の中央付近に炉跡があり、それらを参考に復元するなら、長軸長は3.5m前後となる。ただし、西壁北端は直線的で、このまま北西隅、北壁に連なるようには見えないから、おそらく北壁側はさらに長く伸び、2・3号住居跡と同程度か、やや小振りの住居跡を想定するのが、最も無理が少ない。以上の推定から、南北方向に長軸（主軸）をもつ住居跡という想定に立ち、記載を進める。

長軸方位は、 $N-6^{\circ}-W$ である。斜面上部にあたる西壁側は、壁の残りがよく、東壁側では、掘り込みも浅く、壁の傾斜も緩やかである。西壁北端での壁高は、53cm、東壁中央での壁高は、10cm前後である。

床面は、全体にほぼ平坦であるが、壁際に微妙な凹凸が見られる。いわゆる直床であり、貼床層は確認できない。炉跡の東側に明瞭な硬化面が認められる。

支柱穴は検出できなかった。P1・2は、掘り込みはしっかりしているが、位置的に支柱穴と見るのはむづかしいであろう。P1は径35cm、深さ20cm、P2は壁にくい込むように掘り込まれたやや不

浅見山 I 遺跡

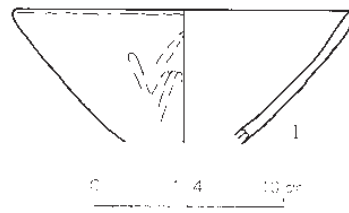
整な形態のピットで、長径56cm、深さは25cmである。

炉跡は、現存する床面の中央、西壁寄りで見出した。楕円形に浅く床面を掘りくぼめ炉床を設けた地床炉である。長径59cm、短径42cm、深さは3、4cmである。覆土には、焼土の小さな固まりや炭化物粒が含まれるが、赤化は顕著ではなく、炉床のロームが赤みを帯びる程度であった。炉の東縁に並ぶ人頭大の礫は、枕石であろう。

覆土は、10層に分けられた。暗褐色土の1層、4～6層、9・10層、いわゆる旧表土に由来すると思われる黒褐色土の2・3層、7・8層が、主に斜面の上方から入れ替わり流入し続けて、住居跡の窪地を埋めていった模様である。

遺物は、少数の弥生土器片が覆土から出土したのみである。第23図1の弥生土器は、硬化面の脇から、床面よりやや浮いた状態で出土した。

遺物および覆土から見て、弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第23図 3号住居跡出土遺物

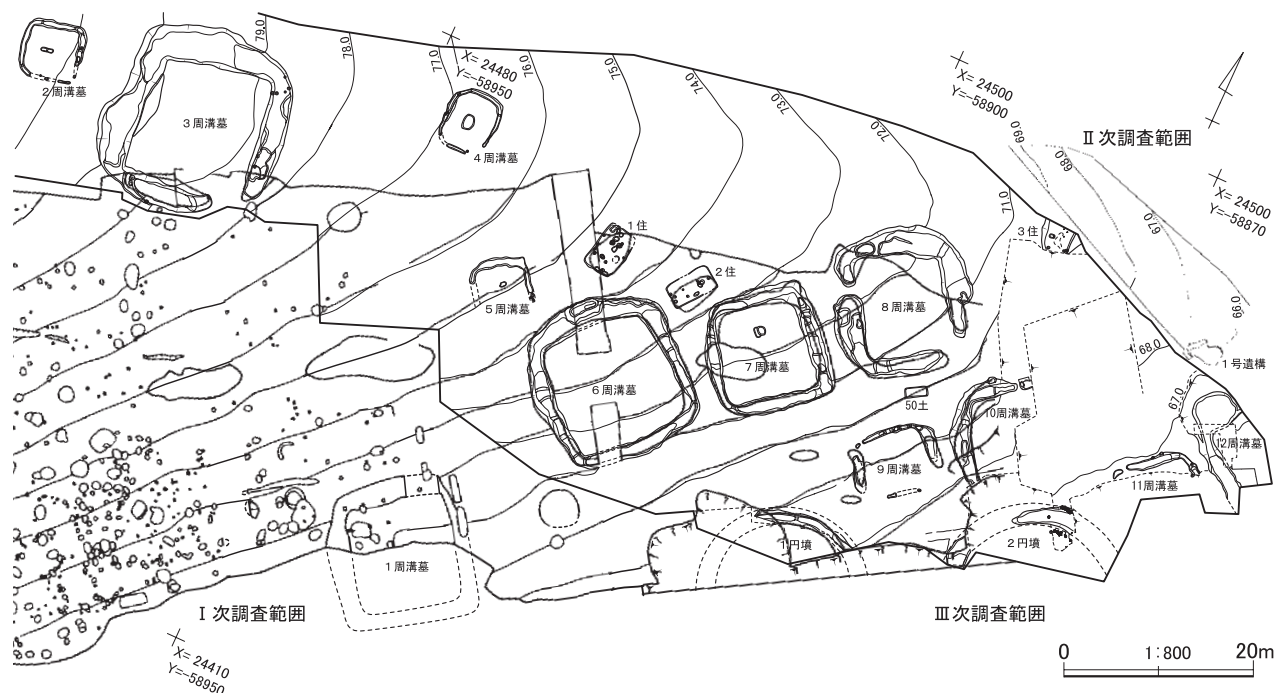
第3表 3号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢または高坏	口径 18.2 器高 (6.9)	やや丸みをもち大きく開く器形。	外面-斜位のナデ。内面-横位、斜位のナデ。	石英・長石などの砂粒多量 内外面-橙色、内面全面黒斑	口縁部~体部破片。1/5 残存。

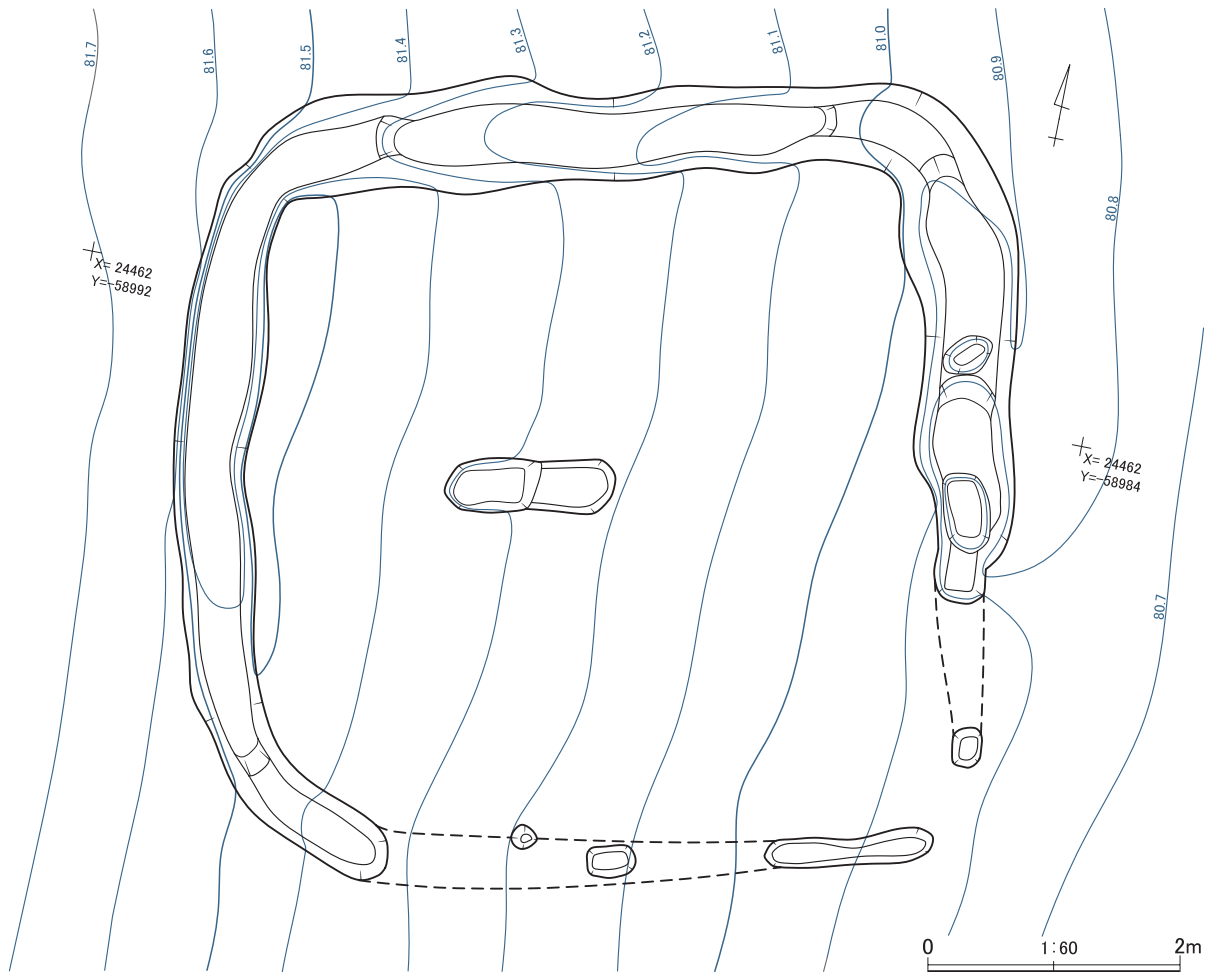
3 方形周溝墓

方形周溝墓群は、浅見山丘陵(大久保山)の北縁の支丘尾根筋から東南麓にかけての一带に立地する。支丘の南斜面は、方形周溝墓の位置する先端部を除けば、比較的傾斜がゆるやかで、多数の遺構が残されており(早稲田大学調査)、一方北斜面は急崖をなし礫層が露出する状態で、遺構は見られない。

Ⅲ次調査で調査した方形周溝墓は、11基である。丘陵裾部にわずかに未調査範囲を残すものの、古



第24図 方形周溝墓および関連遺構分布図



第25図 2号方形周溝墓等高線図

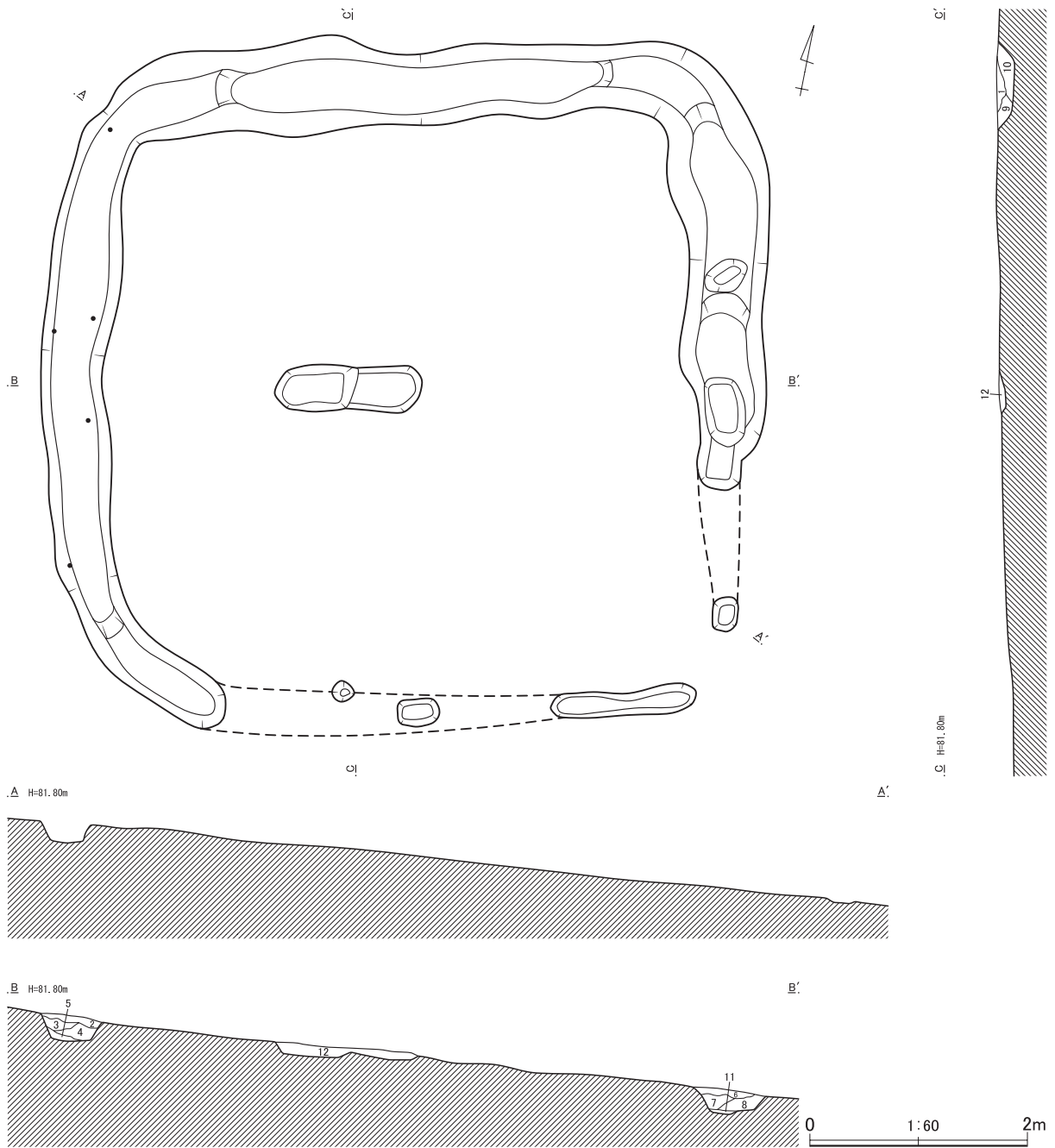
墳時代前期の墓域のほぼ全体を調査し得たことになる。早稲田大学がすでに調査した1基を含めた12基が、この墓域を構成する方形周溝墓の総数と見られる。早稲田大学が発掘調査を実施した方形周溝墓（第24図：本書では、「1号方形周溝墓」と仮称する）を考慮し、今回調査した方形周溝墓に、2～12号方形周溝墓の呼称を与え、記載する。

なお、12号方形周溝墓は、当教育委員会が平成13年に行ったⅡ次調査で、遺構の一部を検出した「1号遺構」と同一の遺構とみなした経緯がある（松本・町田 2002）。後記するように両遺構は直接つながらないため問題が残るが、同一の遺構である可能性が最も高いと考えるに至っている。また、同方形周溝墓は、形態的に前方後方墳、あるいは前方後方形周溝墓になると推定される。

また、土坑を含めた50号土坑（本書：第50・106図）は、覆土の性状が、方形周溝墓の周溝覆土に類似し、さらに主軸方向が周溝に平行することから見て（第24図）、方形周溝墓と何らかの関係をもつ遺構であり、形態的に、方台部の埋葬施設に類似した施設である可能性が考えられる。

2号方形周溝墓（第25・26図、図版8）

今回調査した方形周溝墓群の西端、丘陵尾根筋の最高所で検出した遺構である。南北方向の傾斜のゆるい尾根筋の緩斜面に、西・東周溝がほぼ等高線に平行するようにして造られており、方台部中央の標高は、81.2m前後である。



2号方形周溝墓土層注記

- 1層：暗褐色土層。20mm大の白色軽石、ローム粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックを少量含む。
- 3層：暗褐色土層。にぶい黄褐色粘土粒を多量に含み、5～50mm大のロームブロックを少量含む。粘性がややある。
- 4層：褐色土層。5～30mm大のロームブロックを多量に、にぶい黄褐色粘土粒を少量含む。
- 5層：暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、にぶい黄褐色粘土粒を少量含む。
- 6層：暗褐色土層。ローム粒、5～40mm大のロームブロックを少量含む。
- 7層：暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。

- 8層：暗褐色土層。ローム粒を少量、5～30mm大のロームブロックを多量に含む。
- 9層：暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、にぶい黄褐色粘土粒を少量含む。粘性がややある。
- 10層：褐色土層。にぶい黄褐色粘土粒を多量に含む。粘性がある。
- 11層：褐色土層。黄褐色粘土粒、5～20mm大のロームブロックを少量含む。
- 12層：褐色土層。褐色のくすんだ色調のロームと黒褐色土の混合土を主に、褐色土を含む。4層に近いが、5～30mm大のロームブロックを含む。周溝覆土の一部に類似する。主体部覆土。

第26図 2号方形周溝墓平面・断面図

確認面は、Ⅲ a 層としたソフトローム層上面である。葛や篠竹の根が繁茂する腐植土の表土層を除去した時点で、おぼろげに周溝の輪郭が見えたため精査に切り替えた。Ⅲ a 層は、基本的にローム層ではあるが、斜面に通有の不安定な堆積物であり、上部はとくに軟弱で、時期的にも一定しない再堆積ロームに類するものと思われた。

平面形は、正方形に近く周溝が廻り、南東隅に陸橋部をもつ形態である。全体に残存状態が悪く、とくに南周溝から東周溝南端にかけては、確認面を平滑にして精査しようとする覆土がなくなりかねない有り様であった。実際、南溝は、確認時には平面図の点線の範囲にかすかに暗褐色の覆土が広がるかにも見えたが、その時点でも南東隅は周溝が途切れることが視認できた。

周溝は、おおむね直線的であるが、西周溝から南西隅にかけてはやや丸みが強い。規模は、周溝外縁の南北で6.20m、同じく東西で6.67m、方台部長は南北5.27m、東西5.40mである（以下、平行する周溝外縁の midpoint を結ぶ直線を中軸線と仮称し、残存状態のよい方形周溝墓の全長、方台部長については、中軸線上で計測した。なお、周溝外縁が著しく不整な場合、周溝内縁、つまり方台部辺を用い中心軸を求めた）。東西方向での中軸線の方位は、東西方向よりわずかに南に傾き、 $S-103^{\circ}-W$ を指す。

周溝幅には広狭が目立ち、溝底にも凹凸が見られる。周溝幅は、北溝で57~88cm、東溝で70~92cm、西溝で56~65cmである。周溝の断面形は、鍋底状、U字状で、溝底は、標準土層Ⅳ層としたハードローム層中である。いずれの溝底もかなり凹凸している。周溝中央での深さは、北溝で17cm、東溝で14cm、西溝で23cmである。南溝は、中央の土坑状の掘り込みで深さが7cm、東側の細長い掘り込みの深さは、3cmである。周溝の最深部は、西溝北半で深さ28cm、最も浅いのは、南溝である。

北溝は両隅が浅く、段差をもって中央が深く掘り込まれており、東溝も南側に向かい段差をもち深さが増す。東溝の溝底には、土坑状の掘り込みが2箇所で見られる。北側の掘り込みは、長径52cm、短径29cm、溝底からの深さが7cm、南側の掘り込みは、長径64cm、短径37cm、溝底からの深さは10cmである。北側の掘り込みは、溝底から掘り込まれているようであったが、南側の掘り込みに関しては、どのような段階に掘り込まれたのか確定できなかった。西溝は他の周溝に比べ溝壁が急峻で、周溝幅もやや狭い。

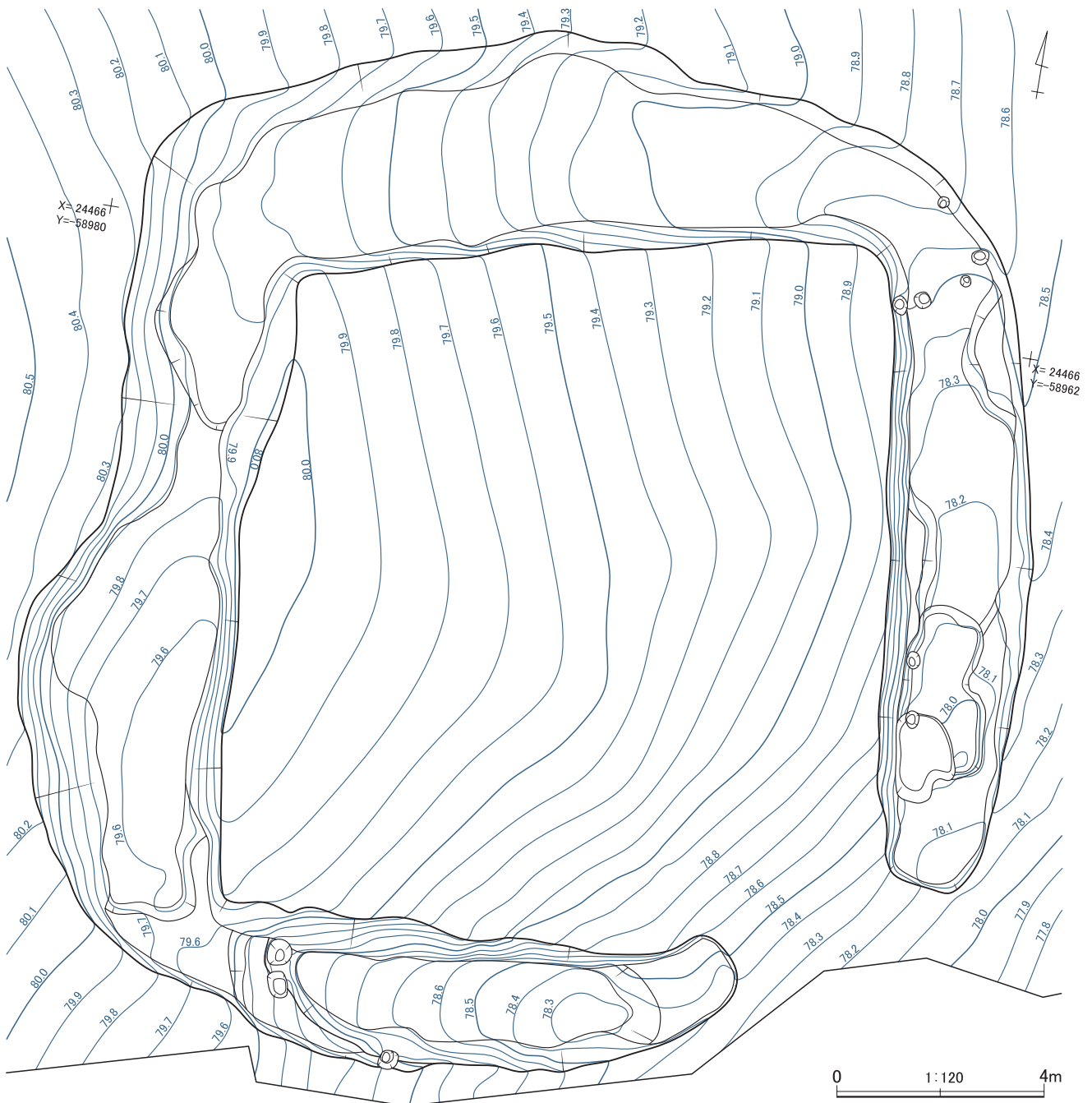
周溝覆土は、主にロームの混入量の違いから褐色土層、暗褐色土層からなる11層に分けられた。他の残りのよい周溝覆土には見られた黒褐色土層が見られないのは、周溝の下部しか残存していないためであろうか。

方台部の中央、わずかに西側に寄った位置で、主体部と思われる土坑を検出した。平面形は東西に長い長楕円形に近い形態である。底面中央に段差が見られ、楕円形の2つの土坑が重複しているかにも見えるが、断面観察では、覆土は一様で、重複する土坑と見るのは困難であった。長軸長は138cm、短軸長は40cm、長軸方位の一方は、 $N-101^{\circ}-W$ である。断面形は、西半の深い部分では鍋底状、浅い東半では皿状で、深さは、西半で10cm、東半では7、8cmである。

覆土は、くすんだ色調のロームと黒褐色土の混合する褐色土の単一層で、埋葬施設などの痕跡は一切見られなかった。

遺物は、古墳時代以前の少数の土器細片が周溝内から出土したのみである。主体部に関しては、覆土をすべて採取し篩かけを行なったが、土器の微細片以外遺物を検出することができなかった。

本遺構の時期は、出土遺物および覆土から見て、古墳時代前期と考えられる。

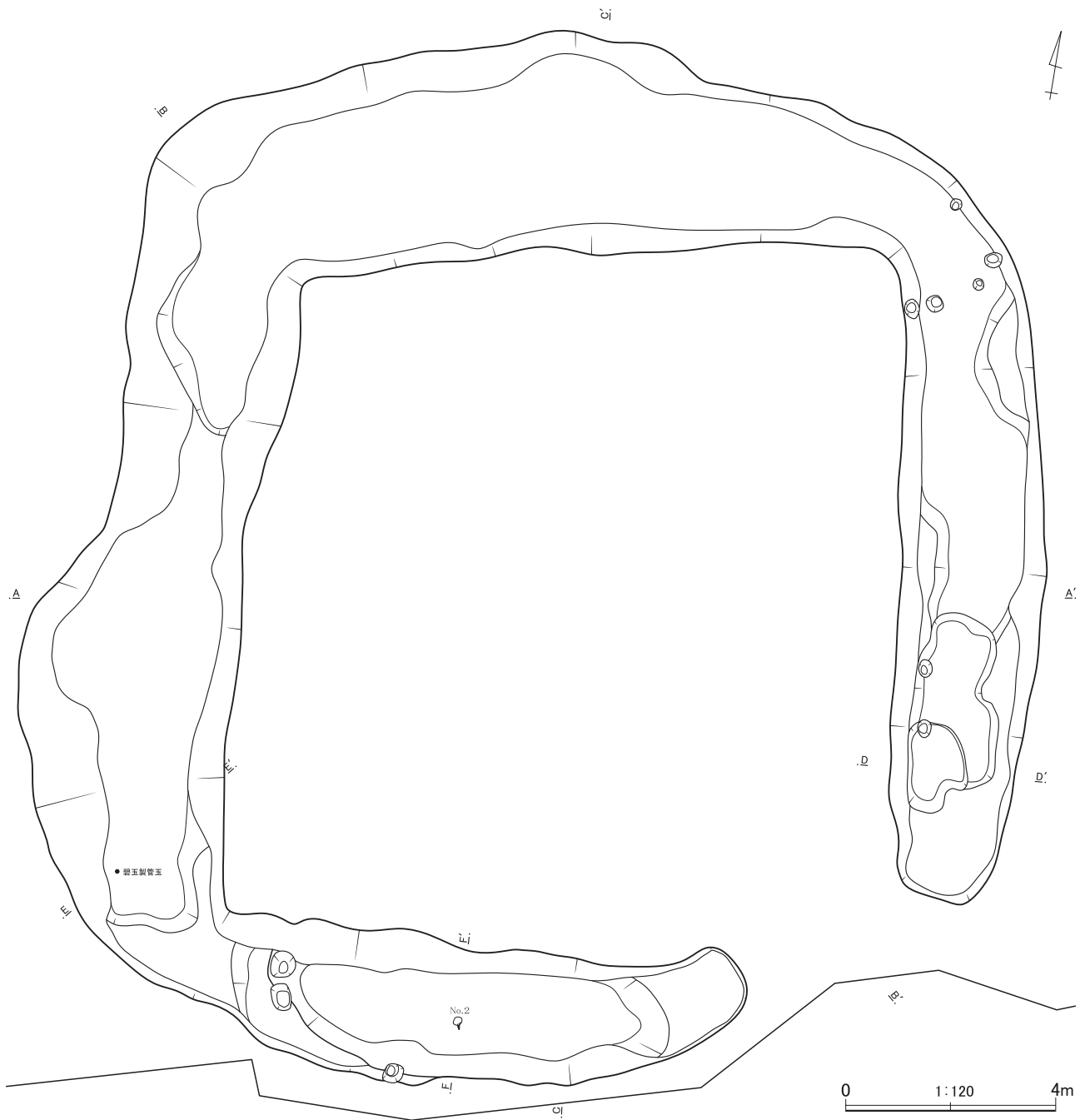


第27図 3号方形周溝墓等高線図

3号方形周溝墓（第27～32図、第4表、図版8～10・32・34）

丘陵尾根筋の中腹をかなり下った位置で検出した遺構である。尾根筋の緩斜面に、西・東溝がおおむね等高線に平行するようにして造られており、方台部中央の標高は、79.5m前後である。2号方形周溝墓から東に5.6mほど下った位置である。南溝内壁の一部で11号土坑と重複するが、浅い土坑のため溝壁は、ほとんど壊されていない。

確認面の大半は、Ⅲa層上面であるが、北溝側は、標準土層Ⅲ～Ⅴ層とした黄褐色ロームが薄く、あるいはほとんど見られず、Ⅴ層中、および一部はⅥ層と呼称した礫混じりの暗褐色シルト層上面で確認した。後述する方台部の南半から陸橋部にかけてやや傾斜が強くなる特徴は、確認時にも明瞭に



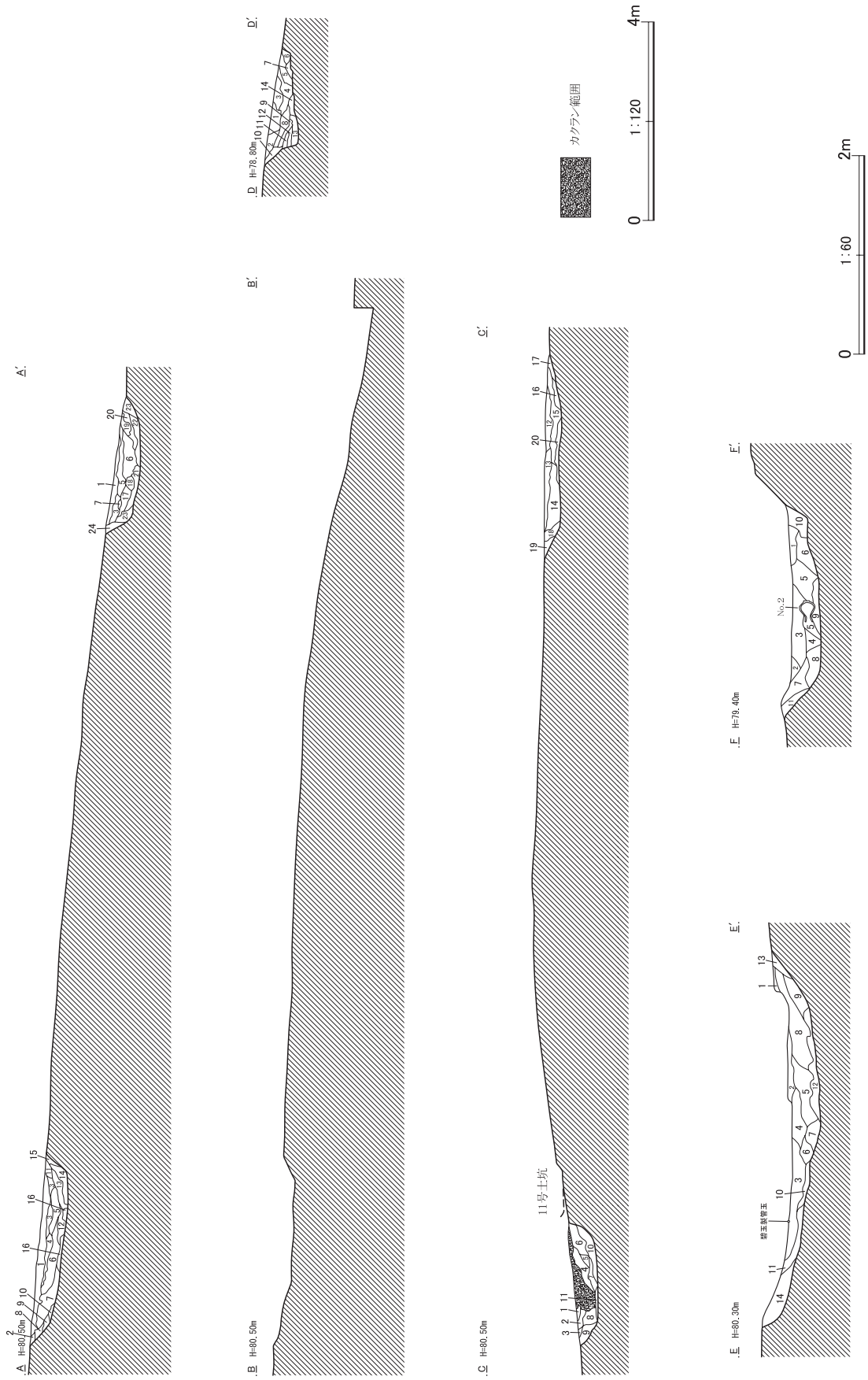
第28図 3号方形周溝墓平面図

見てとることができた。

周溝内縁、すなわち方台部の平面形は、歪な正方形と言いたいところであるが、より正確には、北西－南東を対称軸とする凧形に近い。南東隅には陸橋部が掘り残されている。

周溝内縁は、かなり直線的であるが、周溝外縁は、全体に丸みをもち、部分的に曲折する。規模は、周溝外縁の南北で19.84m、同じく東西で18.82m、周溝幅に広狭があるため、最大長は多少異なり、南北で20.00m、東西で19.20mを測る。方台部長は南北13.34m、東西12.50mである。南北方向での中軸線方位は、N－6°－Wである。

東・南溝の周溝幅は一様であるが、西・北溝は広狭が著しい。とくに西溝南半、北溝西半の周溝外



第29図 3号方形周溝墓断面図(1)

3号方形周溝墓土層注記

〈A-A' 断面〉

- 1層: 褐色土層。くすんだ色調のロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土。しまりなし。表土ほど粒子粗くない。
- 2層: 褐色土層。1層に近いが、ローム粒、5～30mm大のロームブロックをかなり含む。ロームはいずれもくすみ茶色がかかる。
- 3層: 褐色土層。1層に近いが、黒褐色土が多い。やや斑状をなす。
- 4層: 暗褐色土層。1層に近いが、3層よりかなり黒褐色土が多い。5～20mm大のロームブロックがぼんやり見える。ロームと黒褐色土は同量。
- 5層: 暗褐色土層。3層に近いが、黒褐色土が多い。
- 6層: 黒褐色土層。ローム粒、5～20mm大のロームブロックを斑状に含む。もつとも黒褐色土の多い層。
- 7層: 暗褐色土層。5層に近いが、ロームが若干多い。5～20mm大のロームブロック。5層より輪郭鮮明。
- 8層: 褐色土層。7層に近いが、ロームがはるかに多い。
- 9層: 暗褐色土層。8層に近いが、ロームがより黄色みを増す。
- 10層: 黄褐色土層。黄褐色ロームを主に、若干暗褐色土・黒褐色土を含む。殆ど黄褐色ローム粒とロームブロック。
- 11層: 褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。
- 12層: 暗褐色土層。5層に近いが、ロームが多い。ロームがより乱れて不規則に入る。
- 13層: 暗褐色土層。12層に近いが、ロームが多い。ロームの量は、

5層>12層>13層。

- 14層: 褐色土層。くすんだ色調のロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。
- 15層: 褐色土層。ややくすんだ色調のロームを主に、微量の暗褐色土を含む。微妙に汚れたローム。
- 16層: 褐色土層。ややくすみ白みがかかったロームを主に、微量の黒褐色土を斑状、雲状に含む。
- 17層: 暗褐色土層。5層に近いが、黒褐色土が多い。
- 18層: 暗褐色土層。17層をベースに黒褐色土、ロームを斑状に混合。ロームは、所々20～30mm大のブロック。
- 19層: 暗褐色土層。18層に近いが、ロームあるいは暗褐色土が多く、黒褐色土が少ない。全体に斑状。
- 20層: 暗褐色土層。19層に近いが、ロームが多い。全体に斑状。
- 21層: 褐色土層。22層に近いが、黄褐色ロームが少なく、くすんだ色のロームが多い。
- 22層: 黄褐色土層。黄褐色ロームを主に、斑状に、所々黒褐色土が混じる。
- 23層: 褐色土層。3層に近いが、黒褐色土あるいは暗褐色土が多い。粒子が細かい。
- 24層: 黄褐色土層。粒子の細かいローム、暗褐色土の混合土。

〈C-C' 断面〉

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒、5～10mm大ロームブロックが点在する。
- 2層: 暗褐色土層。全体に暗褐色土と黒褐色土、ロームからなり、黒褐色土とロームは比較的よく混じる。
- 3層: 褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。
- 4層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土、ローム斑状を呈する。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、さらに黒褐色土、ロームが分離し集塊している。
- 6層: 褐色土層。ロームを主に、黒褐色土が斑状に混入する。4層よりかなりロームが多い。
- 7層: 黄褐色土層。6層に近いが、黄色みが鮮明なロームが多い。この層以下、粘性ややあり。
- 8層: 黄褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。5～35mm大の黒褐色土ブロック、ロームブロックが所々はっきり見える。
- 9層: 黄褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。
- 10層: 黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土あるいは暗褐色土を少量含む。ロームは部分的に5～40mm大のブロック状をなす。
- 11層: 黄褐色土層。10層に近いが、黒みが強い(黒褐色土が多い)。

- 12層: 暗褐色土層。15層より明るい色調、つまりロームが多い。ロームは所々輪郭が不鮮明な5～10mm大のブロック状をなすが、ローム自体暗褐色を帯びる。しまっているが、15層より柔らかか。
- 13層: 暗褐色土層。12層に近いが、ロームが多く色調が明るい。
- 14層: 暗褐色土層。13層より黒みが強い。下半には白みを帯びたロームが斑状に混入する。小礫をかなり含む。
- 15層: 暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ロームを微量含み、小礫を少量含む。14層に近いが、色調が暗く、かなりしまり、粘性ややあり。黒みの強いバンド。
- 16層: 暗褐色土層。15層に近いが、黒みが少ない。粘性あり。
- 17層: 暗褐色土層。15層に近いが、赤茶みを帯びロームが多い(水の影響か?)。
- 18層: 暗褐色土層。15層に近いが、さらに黄褐色ロームが多い。
- 19層: 褐色土層。18層に近いが、ロームが多い。ロームの方が主。
- 20層: 暗褐色土層。15層の暗褐色土・黒褐色土とやや白みのあるくすんだ色調の黄褐色ロームが斑状に混じる。小礫をかなり含む。粘性あり。

第30図 3号方形周溝墓断面図(2)

縁は、大きく掘り広げられている。周溝幅は、東溝で270cm、南溝で238～290cm、西溝で256～560cmである。北溝は、最大幅540cm、北東隅にかけて細くなり、北東隅での周溝幅は、200cmである。周溝の断面形は、鍋底状、船底状で、周溝中央での深さは、北溝で34cm、東溝で50cm、南溝で56cm、西溝

浅見山 I 遺跡

〈D-D' 断面〉

- 1層：褐色土層。ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土。ローム、黒褐色土は斑状をなす。しまりなく軟質。上部に5～10mm大のロームブロックを含む。
- 2層：褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 3層：暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、1層土(暗褐色土)を斑状に含む。1層より黒みが強い。
- 4層：暗褐色土層。1層に近いが、黒褐色土が多い。
- 5層：褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。1層よりロームが多い。
- 6層：黄褐色土層。全体に黒みがかつたくすんだ色調のローム。微量の暗褐色土あるいは黒褐色土を満遍なく含む。
- 7層：黄褐色土層。壁崩落土。1～10mm大のローム粒・ロームブロックを含む。
- 8層：暗褐色土層。1層に近いが、黒褐色土あるいは暗褐色土が

多い。4層よりローム、黒褐色土がブロック状をなさず、分離していない。

- 9層：褐色土層。褐色土、ローム、暗褐色土が交互にまとまりをなし混合する。一部根などによる攪乱の可能性あり。
- 10層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。壁際は殆どローム。
- 11層：褐色土層。ロームと黒褐色土の斑状の混合土。2種の土はかなり不規則に入り混じる。
- 12層：黒褐色土層。ローム粒、10～40mm大のロームブロックが不規則に混合する。
- 13層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。暗褐色土は所々局在する。
- 14層：黄褐色土層。13層に近いが、暗褐色土が多い。性状は13層に似る。

〈E-E' 断面〉

- 1層：褐色土層。くすんだ色調のロームと暗褐色の混合土。ロームの方がやや多い。しまりなく軟質。
- 2層：褐色土層。1層に近いが、暗褐色土が多い。軟質。
- 3層：黒褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。ロームは、斑状、斑点状に含まれ、部分的に輪郭のはっきりしたブロック状をなす。この層以下、ややしまり増す。
- 4層：暗褐色土層。3層に近いが、3層より乱れている(ロームがより不規則に混入する)。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームが多い。斑状を呈する。
- 6層：暗褐色土層。4層に近いが、ロームが多い。
- 7層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を少量含む。

- 8層：褐色土層。ロームと暗褐色土の混合土。全体に斑点の集合のよう。
- 9層：褐色土層。8層に近いが、黄褐色ロームを斑状に含む。
- 10層：黄褐色土層。ロームを主に、5～10mm大の暗褐色土・黒褐色土ブロックを所々含む。
- 11層：黄褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。
- 12層：黄褐色土層。10層に近いが、ロームが少ない。上部は波状に乱れる。
- 13層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。
- 14層：黄褐色土層。ローム(ローム粒、大小のロームブロック)を主に、暗褐色土を微量含む。

〈F-F' 断面〉

- 1層：褐色土層。ロームと暗褐色の混合土。よく混ざっている。しまっており、粘性ややあり。黒みの強いバンド。
- 2層：暗褐色土層。ロームと暗褐色の混合土。1層より暗褐色土あるいは黒褐色土が多い。
- 3層：黒褐色土層。くすんだ色調のロームを斑状、斑点状に含む。ロームは、5～10mm大のブロック状に見えるところがある。
- 4層：黒褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。
- 5層：暗褐色土層。暗褐色土あるいは黒褐色土を主に、くすんだ色調のロームを含む。

- 6層：褐色土層。ロームと暗褐色の混合土。ロームの方が多い。所々ロームは5～20mm大のブロック状をなす。
- 7層：褐色土層。5層に近いが、ロームが多い。
- 8層：褐色土層。7層に近いが、ロームが多い。
- 9層：黄褐色土層。7層に近いが、暗褐色土が若干多い。
- 10層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を微量含む。
- 11層：黄褐色土層。7層に近いが、8層よりさらにロームが多く、10層よりロームが少ない。

第31図 3号方形周溝墓断面図(3)

で50cmである。南・東溝は、北・西溝に比べ溝壁が急峻で、周溝幅もやや狭い。南溝は、段差をもって中央が深く掘り込まれており、西隅からの落ち際から外壁にかけピットが3個穿たれている。ピットの溝底からの深さは、北側から59cm、53cm、18cmである。東溝には、北東隅の外壁沿い、中央の内壁沿いの2箇所に掘り残しの平場が見られ、南端近くに不定形の掘り込みが認められる。土坑状の掘り込み下面は、標準土層VI層の礫混じりの暗褐色シルト層に達している。溝底からの深さは、6～

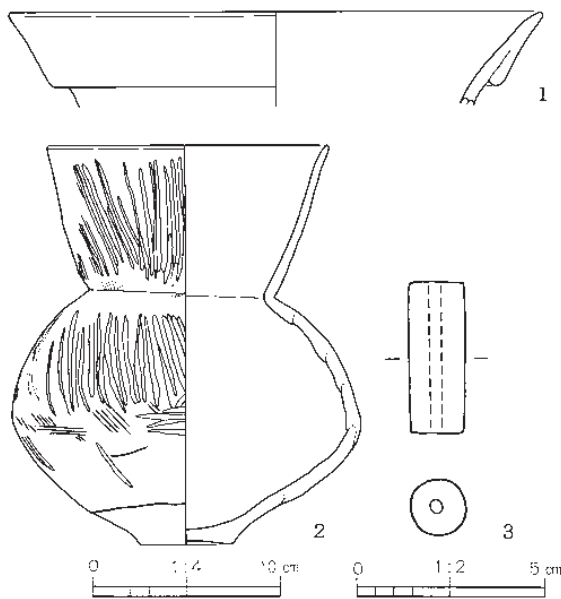
18cmである。溝底から掘り込まれているようにも見えるが、土層断面（第29・31図：D-D'断面）では明瞭とは言えない。なお、北東隅にかけて小ピットが5個見られるが、この周辺は溝底全体に凹凸が著しく、とくに掘り込まれたピットか否か確定できない。

溝底は、東西溝、南溝ではほぼIV層とした黄褐色ハードローム層中、北溝の一部は、V層ないしはVI層の暗褐色シルト層中である。いずれの溝底にも細かな凹凸が見られる。

方台部には、主体部の痕跡は見られなかった。方台部は、他の方形周溝墓のように一様な傾斜を示さず、南半から陸橋部にかけて、勾配が目に見えてきつくなる。土壤の流出や後代の地形改変による影響も考えられるが、とくに陸橋部に著しい傾斜の変化に関しては、造墓に際し何らかの造作がなされた可能性もないとは言い切れない。

覆土は、周溝各々でかなり異なるかに見えるが、流入した堆積土の構成には、大きく見て2つのパターンが認められる（第29・31図）。

ひとつは、西・東溝に典型的に見られるもので、溝底との間に1、2層の間層をはさんで特徴的な黒褐色土が周溝中央に堆積するパターンである（第29・30図：A-A'断面6層）。この黒褐色土は、いわゆる旧表土に由来する土と思われ、遠目には「黒色」、「真黒」と形容してもよいような特徴的な堆積土である。南溝は攪乱されている部分が多いが、E-E'断面、あるいは西溝のF-F'断面でも、この黒褐色土が同様の層準で確認できる（第29・31図：E-E'断面3層、F-F'断面3・4層）。同



第32図 3号方形周溝墓出土遺物

じ東溝でも黒褐色土層がわずかな部分もあるが（第29・31図：D-D'断面）、溝底に掘り込みが見られることや陸橋部に近いことと関連する可能性がある。

E-E'、F-F'断面では、溝底や溝壁沿いにローム質の一次的な流入土が堆積した後、ロームを主とする褐色土、ロームが減じ黒褐色土をまじえる暗褐色土、最後にやや外壁寄りに黒褐色土の順に、主に方台部側からの流入土により周溝が埋没した過程が読み取れる。E-E'、F-F'断面では上層の覆土が図化できなかったが、他の断面では、黒褐色土の堆積後、再び褐色土や暗褐色土が堆積した模様である。

いまひとつのパターンは、北溝に見られる、上記した黒褐色土が見られないパターンである。北溝一

第4表 3号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 (28.0) 底径 - 器高 -	口縁部は複合口縁で外反して開く。	磨耗により調整不明。	石英 内外-橙色	口縁部小片 内外面磨耗
2	壺	口径 (14.7) 底径 5.0 器高 21.1	底部は平底で、体部は膨らみを持ち、最大径は下半部にある。口縁部は直口縁で、僅かに内彎する。	外面-口縁部～体部ハケメ後ミガキ、底部ヘラケズリ。内面-口縁部ナデ。	角閃石・チャート 内-ぶい黄橙色 外-橙色	3/4以上残存
3	管玉	長さ：3.43cm、径：1.25cm、孔径：0.22～0.31cm、重さ：10.68g、碧玉製。				



第33図 4号方形周溝墓等高線図

帯は黄褐色のハードロームの多くが流出しており、地山が暗褐色みを帯びたロームであり、丘陵尾根筋のこの一帯には、もともと黒褐色土の堆積が見られなかったか、薄かったのであろう。

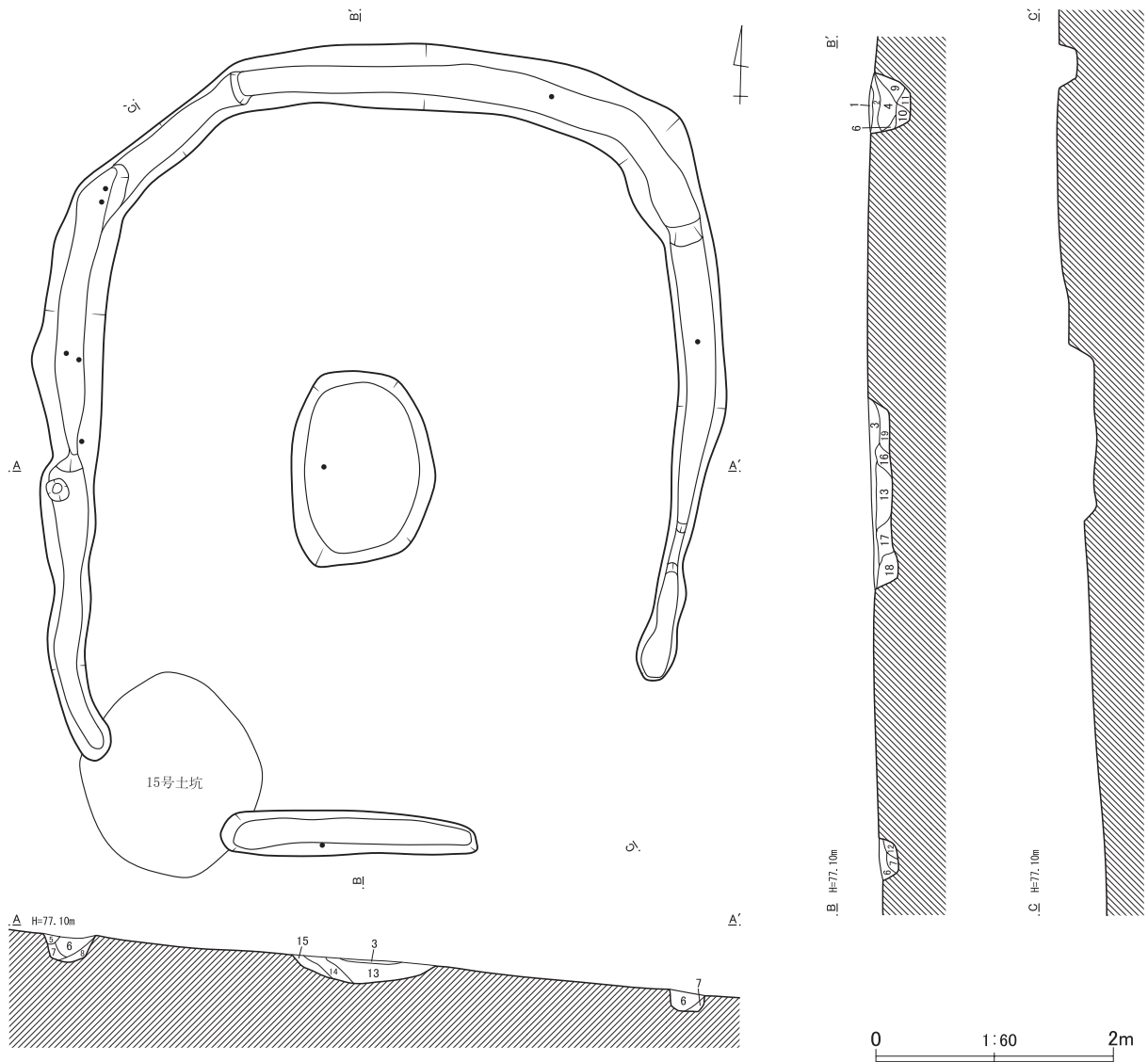
本遺構に確実に伴う遺物は、南溝から出土した直口壺（第32図2）、西溝から出土した碧玉製管玉（同図3）の2点である。他に周溝全体から散漫ではあるが、かなりの量土器片が出土したが、大半は条痕文などが施された弥生土器片である。直口壺は、南溝のほぼ中央、溝底から3、4cm浮いた高さで横転した状態で出土し、管玉は、西溝の南西隅寄りの位置で、溝底から15cm前後浮いた高さで出土した。層位的には、直口壺は、溝底に堆積した黄褐色土の上、暗褐色土中から一部黒褐色土に覆われて、管玉は、溝底との間に間層をはさんだ黒褐色土中から出土した。

本遺構の時期は、出土遺物および覆土から見て、古墳時代前期中葉～後葉である。

4号方形周溝墓（第33・34図、図版10・11）

丘陵尾根筋をやや下った位置で検出した遺構である。3号方形周溝墓の東、16m前後下った位置である。尾根筋の緩斜面に、西・東溝がほぼ等高線に平行するようにして造られており、方台部中央の標高は、76.5m前後である。南西隅が11号土坑に壊されており、この部分の陸橋部の有無は不明とせざるをえない。確認面は、Ⅲa層上面である。

平面形は、隅丸長方形に近く、南東隅に陸橋部をもつ形態である。周溝はいずれも胴張り状に丸み



4号方形周溝墓土層注記

- 1層：黒褐色土層。ローム粒・ロームブロックを含み、As—Aをかなり含む。
- 2層：暗褐色土層。暗褐色土間に層厚10～30mmのAs—A挟在する。
- 3層：褐色土層。所々に5～10mm大のロームブロックを含み、As—Aが一部雲状に濃集する。
- 4層：褐色土層。暗褐色土とロームの均質な混合土。
- 5層：黄褐色土層。しまりのない黄褐色ローム質土。
- 6層：褐色土層。4層に近いが、黒みが強い。
- 7層：褐色土層。暗い色調のローム質土。4層に比し、ローム多い。
- 8層：褐色土層。4層に近いが、暗褐色土とローム斑状に混合する。
- 9層：褐色土層。4層に近いが、黒褐色土を部分的に斑状に含み、5mm大のローム小ブロックを部分的に含む。
- 10層：暗褐色土層。暗褐色土、ローム粒、5mm大のローム小ブロックの混合土。黒褐色土が局部的に斑状に混入する。
- 11層：褐色土層。10層に近いが、10～20mm大のロームブロックを含む。

- 12層：黄褐色土層。8層に近いが、20mm大のロームブロックを所々含む。
- 13層：褐色土層。3層に比し、しまっており、黒みがやや強い。ロームブロックは見えない。13～19層は、主体部覆土。
- 14層：褐色土層。3層に比し、しまっており、黒みがやや強い。黒褐色土を斑点状に含み、5～10mm大のロームブロックを多く含む。
- 15層：黄褐色土層。黒褐色土を微量含む。
- 16層：黄褐色土層。13層に近いが、やや黒み強く、上・下部に5～20mm大のロームブロックを含む。
- 17層：黄褐色土層。ローム粒、5～30mm大のロームブロックと褐色土の混合土。ロームの方がやや多い。
- 18層：褐色土層。13層土とローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。17層よりローム少ない。
- 19層：褐色土層。18層に近いが、ローム粒、ローム小ブロックが少ない。

第34図 4号方形周溝墓平面・断面図

をもち、2隅も緩いカーブを描く。南西隅、南東隅が確定できず、また全体に歪で中心軸を求めにくい。南北方向での中軸線は、ほぼ真北を指すようである。規模は、周溝外縁の南北で6.80m、同じく東西で5.63m、方台部長は南北5.93m、東西4.88mである。

周溝幅には広狭が目立ち、溝底にも凹凸が見られる。周溝幅は、北溝で45～56cm、東溝で17～40cm、西溝で30～60cm、南溝中央で36cmである。

いずれの周溝も断面形がU字状を呈し、溝壁が垂直に近く掘り込まれている。溝底は、標準土層Ⅳ層としたハードローム層中である。全体に溝底は凹凸している。西溝は、北半が深く掘られており、一旦北西隅で浅くなった後、北溝から北東隅にかけ再び深度を増す。東溝は、中央近くがやや浅くなっている。周溝中央での深さは、北溝で32cm、東溝で16cm、南溝で16cm、西溝で22cmである。西溝中央には、溝底に径20cm前後、深さ19cmの小ピットが1個見られる。

周溝覆土は、12層に分けられた。本遺構は、基本的にⅢa層上面で検出したが、Ⅲa層中にまで植物根などが及んでおり、周溝の一部では、覆土の上部にまでAs-Aが混入していた(第34図：1～3層)。よって本来の周溝覆土は、4～12層の9層である。As-Aの降下以降、ローム面が露出したり、ローム層に耕作などの深耕が及ぶ期間を長く経ているものと見てよいであろう。

周溝覆土は、全体にロームの卓越した黄褐色土や褐色土がほとんどであり、周溝の深い南側の方形周溝墓に特徴的な黒褐色土層を欠いている。この点で、同じ尾根筋の2号方形周溝墓の周溝覆土に類似している。周溝そのものが多く下部のみ残存していることとともに、尾根筋、斜面の高所ほど堆積土が薄く、いわゆる旧表土の残存状態が悪いことと関連すると考えられる。

主体部は、方台部のほぼ中央、わずかに西寄りの位置で検出した。平面形は、一見すると歪な楕円形に見えるが、南北壁は微妙に直線的で、胴の強く張った隅丸方形、樽形と見ることもできる。長軸長は160cm、短軸長は122cm、長軸方位の一方は、N-2°-Wである。南北壁は、比較的急で直線的に立ち上がり、かすかに凹凸がみられるものの底面も平坦である。東西方向では、壁の立ち上がりもゆるやかで丸みをもち、つまり全体が小さなボートのような形に掘り込まれている。北西隅から中央にかけての最深部での深さは、20cm、南東隅の最も浅い部分での深さは、12cmである。

主体部の覆土は、7層に分けられた(第34図：13～19層)。3層とした土層は、覆土中にくい込んだAs-A降下以降の新しい土である。底面に、中央の13層をはさんで16・17層というロームを主とする黄褐色土が堆積し、壁沿いにやや黒みのある褐色土の18・19層が堆積しており、何らかの痕跡とも見えるが、疑問点にとどまる。

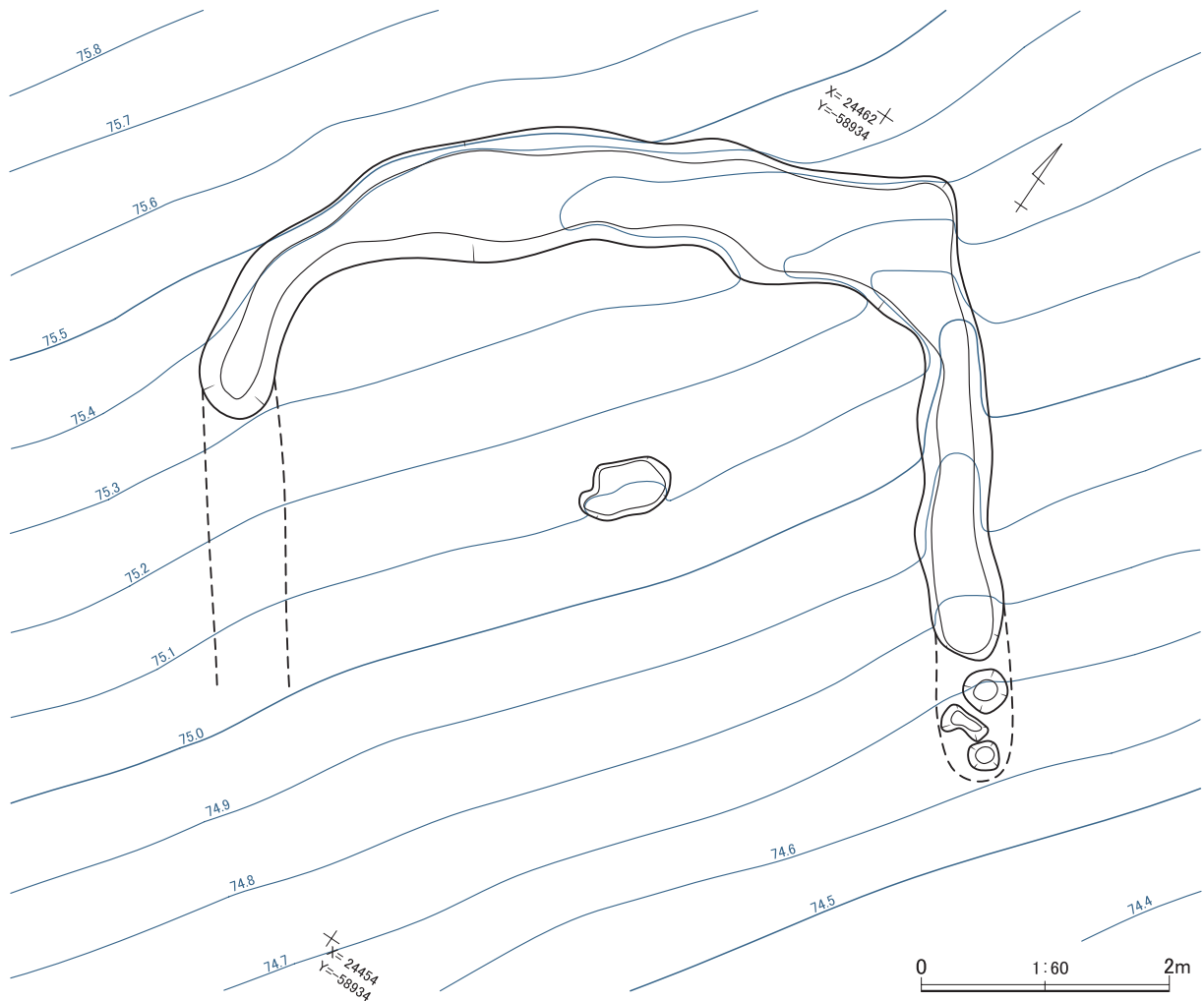
遺物としては、周溝から分散して出土した土師器片が数点あるのみである。主体部に関しては、覆土をすべて採取し篩かけを行ったが、土器の微細片以外遺物を検出することができなかった。

本遺構の時期は、出土遺物および覆土から見て、古墳時代前期である。

5号方形周溝墓(第35・36図、図版11)

今回調査した方形周溝墓群のほぼ中央、地形的には丘陵尾根筋と南東麓斜面との境目に位置する遺構である。4号方形周溝墓から南に11.6m斜面を下った位置である。北西から南東に向かって傾斜する斜面に対し、周溝が斜交して造られており、方台部中央の標高は、75.1m前後である。

確認面は、Ⅲa層としたソフトローム層上面である。土壌の流出、削剝により西・南溝は失われたと見



第35図 5号方形周溝墓等高線図

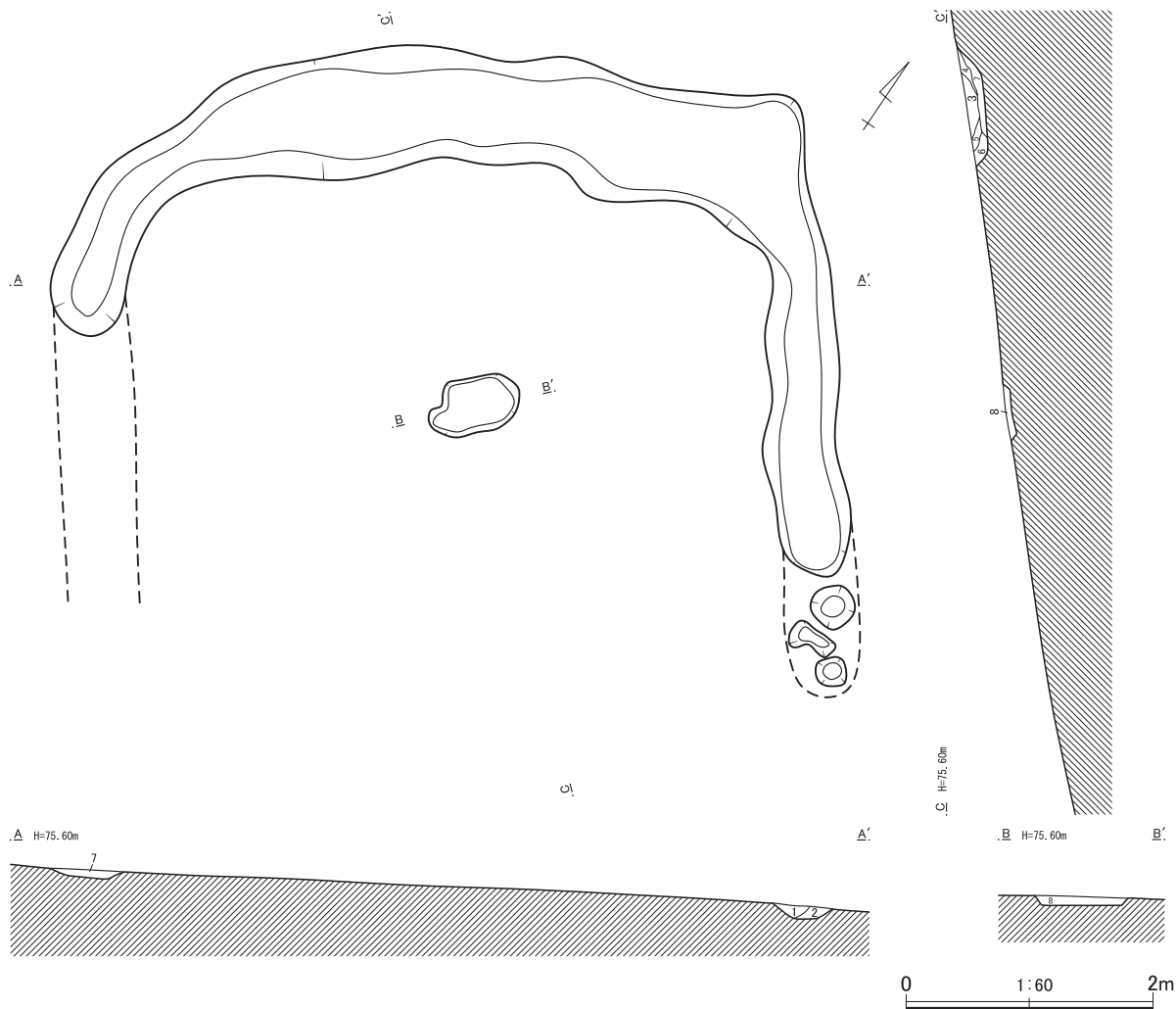
てよいであろう。北東溝も南東端は溝底のくぼみに残された覆土が辛うじて残るような状態であった。

残存する周溝は、L字形をなし、西隅が北西溝末端の彎曲として残っている。北隅から北東溝にかけての外縁が直線的になる他は、内外縁ともに不規則に蛇行しており、形状が定まらない。北東溝に直交し、北西溝にほぼ平行する軸線を強いて求めれば、おおよそN-128°-Wを指す。規模は、西隅の西端から北東溝外縁までが6.28m、同じ線上での方台部長は、5.23mである。この数値は、北東-南西方向での軸長、方台部長に近い値であろう。北隅を含めた北東溝の全長は、4.77mである。総じて南北方向、あるいは北西-南東方向の規模がまさる、本遺跡の方形周溝墓の傾向からすれば、本来北東溝は、もう少し先まであったと推定してよさそうである。

周溝幅は、北西溝で50~102cm、北東溝で47~59cmである。周溝の断面形は、鍋底状、皿状で、溝底の大半は、標準土層Ⅳ層としたハードローム層中であるが、浅い部分はⅢ層中にとどまっている。深さは、西隅で5、6cm、北西溝中央で15cm、北東溝で10cm前後である。溝底は、かなり凹凸している。

周溝覆土は、8層に分けられた。主にロームの多寡により分けられた黄褐色土、褐色土、暗褐色土の3種の土からなり、黒褐色土の明瞭な層が見られないことが特徴的である。主にロームを多く含む一次的な流入土、崩落土が堆積する傾向が見られる溝底付近の覆土のみ残存したものと考えられる。

主体部は、方台部のほぼ中央、北東溝の残存部分から見てもやや北西寄りの位置で検出した。平面



5号方形周溝墓土層注記

- 1層: 褐色土層。ローム粒を多量に、20mm大の褐色土粒、炭化物粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 4層: 褐色土層。2層より明るい。5mm大のローム小ブロックを少量含む。

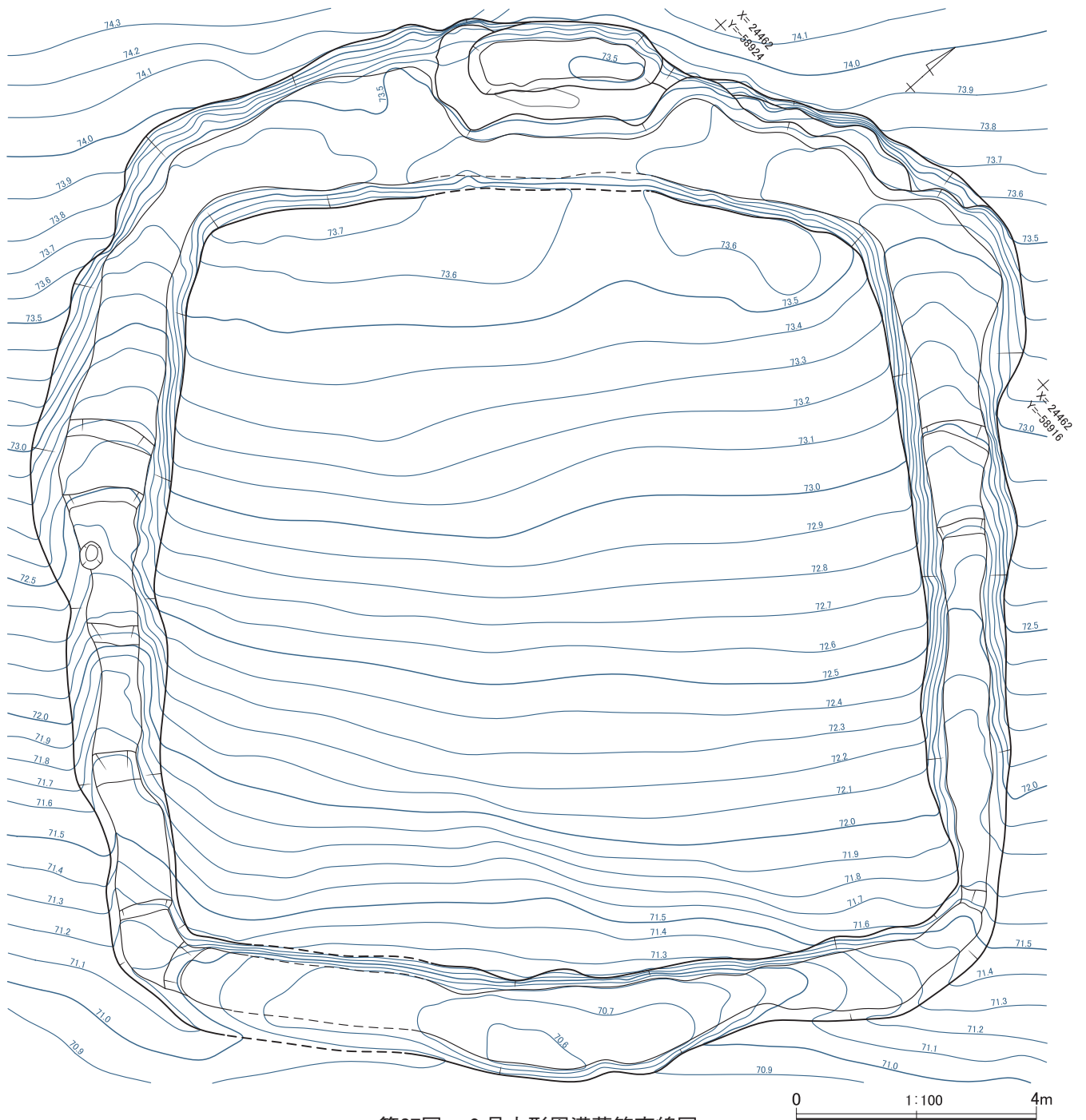
- 5層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 6層: 褐色土層。1層より明るい。5mm大のローム小ブロックを微量含む。粘性ややあり。
- 7層: 黄褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。粘性ややあり。早い段階での壁面崩落を示すものか。
- 8層: 褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。主体部覆土。

第36図 5号方形周溝墓平面・断面図

形は、楕円形の一端が突出する不整な形態である。当初土坑の重複例とも考えたが、断面観察では、重複例と見ることは困難であった。長軸長は75cm、短軸長は44cm、長軸方位の一方は、N-135°-Wである。壁の立ち上がりは全体に直線的で、坑底も比較的平坦であり、断面形は鍋底形を呈する。南半の最深部での深さは8cm、浅い部分では5cm前後しかない。

主体部の覆土は、暗褐色土とロームの混じり合った褐色土の1層である。坑底付近の土がわずかに残されたと見てよいであろう。主体部に関しては、覆土をすべて採取し篩かけを行ったが、玉類等を検出することはできなかった。

本遺構の時期は、覆土および周辺遺構との関係から見て、古墳時代前期と考えられる。

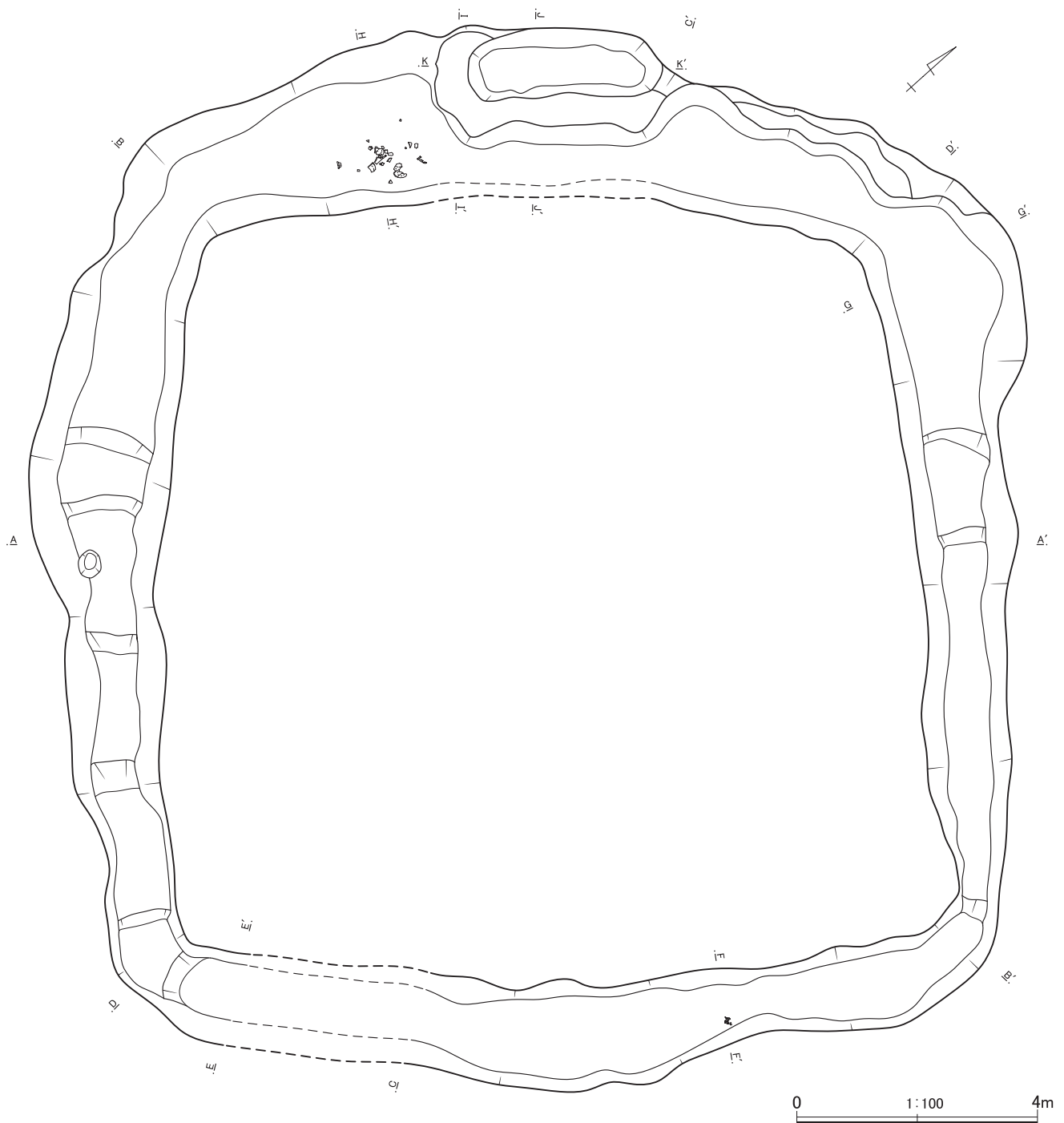


第37図 6号方形周溝墓等高線図

6号方形周溝墓（第37～43図、第5表、図版12・13・32）

今回調査した方形周溝墓群のほぼ中央、地形的には丘陵先端部にほど近い南東麓斜面に位置する遺構である。北西から南東に向かって傾斜する斜面に、北西・南東溝が平行して造られており、方台部中央の標高は、72.8m前後である。北西側に近接する5号方形周溝墓との間隔は、2.8mしかない。南西溝が29号土坑と、南東溝が34号土坑と重複している。北東・南西溝の破線部分は、早稲田大学による試掘トレンチの範囲である。確認面は、Ⅲb層上面である。

全体の平面形は、方形に近いが、各辺はかなり外彎する。方台部の平面形は、東西に軸をもつ扇形、ないしは南東溝を底辺とする台形様にも見える。斜面に対し直交する南西・北東溝が下方の隅に向かっ

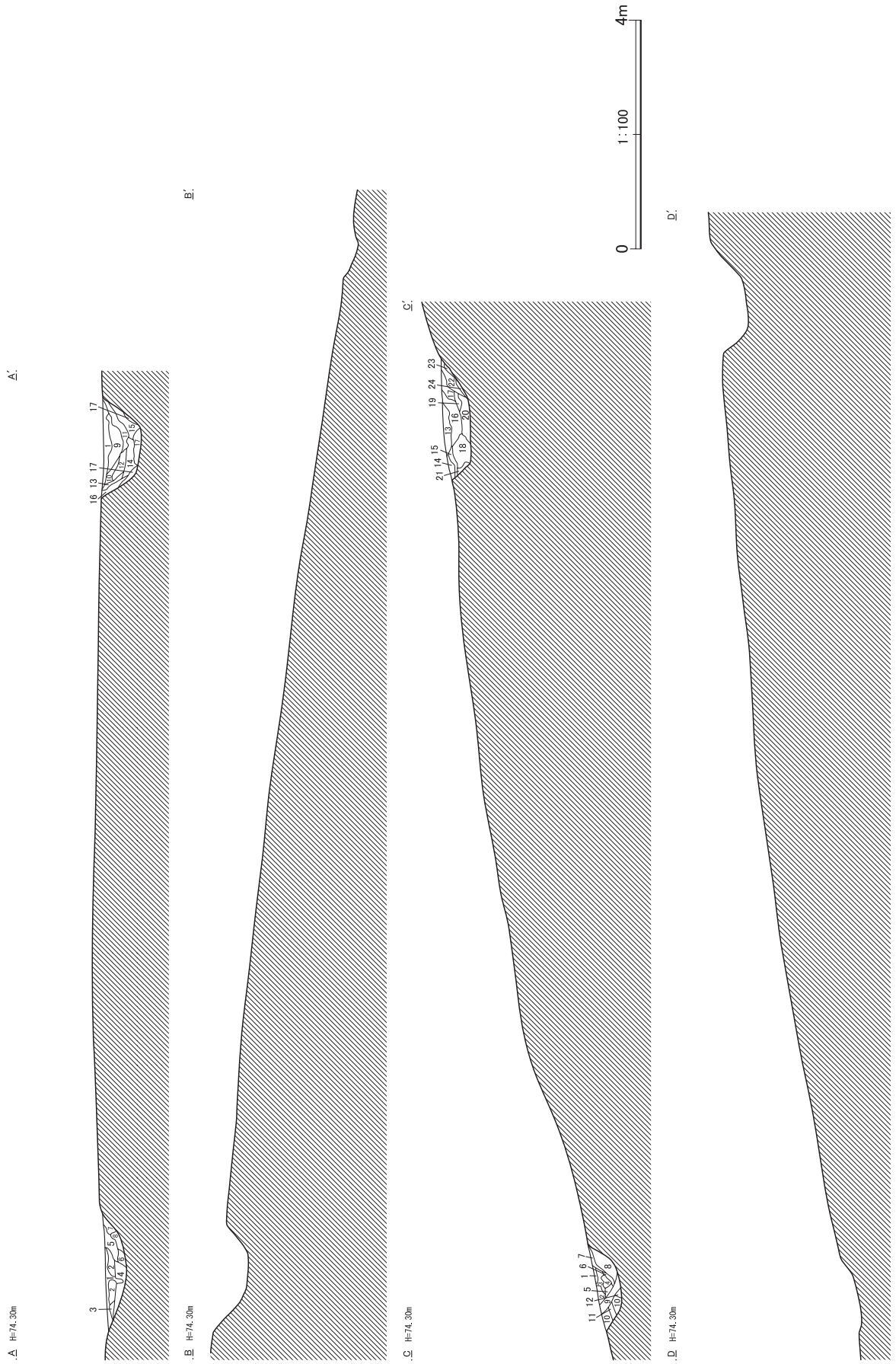


第38図 6号方形周溝墓平面図

て、周溝幅が著しく減ずることからすれば、本来より方形に近い形態であった方台部が、土壌の流出、削剝により斜めに削ぎ落とされて、検出時の形態にまで変形したと見る余地を残すのかもしれない。

規模は、周溝外縁の南西-北東で15.69m、同じく北西-南東で17.50mを測る。周溝幅に広狭があるため、最大長は多少異なり、南西-北東で16.20mになる。方台部長は、南西-北東で12.70m、北西-南東で12.90m前後である。北西-南東方向での中軸線方位は、N-52°-Wである。

周溝内縁は、胴張り状にゆるく外彎するものの、比較的曲折は少ない。周溝外縁は、全体に丸みをもつとともに、曲折する部分も多い。南西溝は西隅近くで幅広となり、北東溝も北隅付近で外縁が膨らむ。四隅は総じてくびれ気味であり、東隅のくびれは、とくに目立つ。周溝幅は、北西溝で200~285cm、北東



第39图 6号方形周溝墓断面图(1)

浅見山 I 遺跡

6号方形周溝墓土層注記

〈A-A' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。灰黄褐色みを帯びた暗褐色土を主に、ローム粒、5mm大のローム小ブロック、As-Aを含み、粒子が粗い。
- 2層: 黒褐色土層。ローム粒を含む。しまり強く、粘性ややあり。
- 3層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームが斑状に混合。
- 4層: 黒褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。右半黒み強く2層に近い。輪郭の不鮮明な5mm大のローム小ブロックが点在する。局所的に溝底に密着してロームが濃集する。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、ロームが多い。
- 6層: 暗褐色土層。5層に近いが、ロームが多い。
- 7層: 暗褐色土層。黒褐色土、ロームの混合土。
- 8層: 暗褐色土層。7層に近く、黒褐色土とローム(暗褐色土を少量含む)が斑状に混合し、7層よりロームが多い。ロームは、5～20mm大のブロック状、斑点状をなす。
- 9層: 黒褐色土層。黒褐色土と暗褐色土の混合土を主に、ローム粒、5～20mm大の輪郭不鮮明な雲状のロームブロックを含む。黒褐色土も全体に斑状をなす。黒みが最も強い層。

しまっている。

- 10層: 暗褐色土層。9層に近いが、ロームが多い。雲状のロームブロックが大きい。
- 11層: 暗褐色土層。9層に近いが、ロームが多い。10層より黒褐色土が多い。
- 12層: 褐色土層。10層に近いが、黄褐色ロームがはるかに多い。斑状。
- 13層: 暗褐色土層。ローム、暗褐色土の均質な混合土。
- 14層: 暗褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。所々5～10mm大のロームブロックを含む。
- 15層: 褐色土層。14層に近いが、黒褐色土が若干多い。100mm大の黒褐色土を微量含む、ローム大ブロックを若干含む。
- 16層: 褐色土層。14層に近いが、黒褐色土が少ない。
- 17層: 黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。ロームは所々20～30mm大のブロック状をなす。

〈C-C' 断面〉

- 1層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土が均一に混入する。
- 2層: 褐色土層。1層に近いが、黒みの強い暗褐色土がやや多い。
- 3層: 褐色土層。1層に近いが、黒みの強い暗褐色土がやや多い。暗褐色土の量は、2層>3層。
- 4層: 暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土、ロームの混合土。黒褐色土が多い。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、黒褐色土が多い。
- 6層: 黄褐色土層。4層に近いが、ロームがかなり多い。
- 7層: 黄褐色土層。黄褐色ロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。6層に近いが、暗褐色土が多い。
- 8層: 暗褐色土層。ロームと黒褐色土の混合土。黒褐色土が淡く、全体に斑点状をなす。溝底付近にロームが濃集する部分あり。
- 9層: 暗褐色土層。8層に近いが、黒褐色土が多い。溝底付近にロームが濃集する部分あり。
- 10層: 褐色土層。暗褐色土と黒褐色土、ロームが斑状に混合する。ロームは下部に多い。
- 11層: 褐色土層。10層に近いが、黒褐色土が多い。
- 12層: 黄褐色土層。ロームを主に、黒みの強い暗褐色土を少量含む。
- 13層: 黒褐色土層。粘性のややある、しまった黒褐色土を主に、

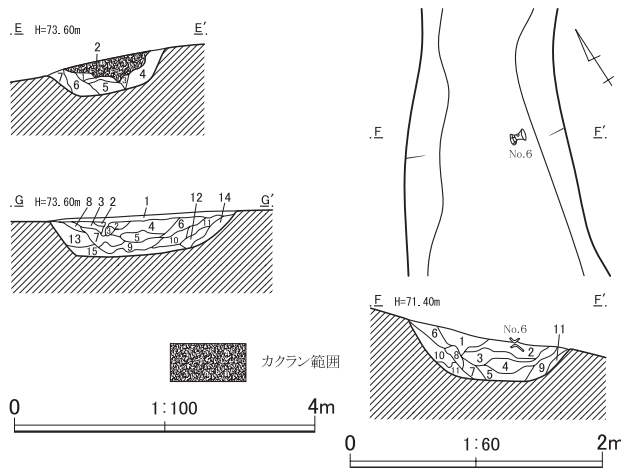
ローム粒、10mm大のロームブロック(とくに下部に集中)を含む。

- 14層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の混合土。比較的良好に混合している。ロームブロックを微量含む。
- 15層: 黒褐色土層。13層に近いが、ロームが若干多い。
- 16層: 黒褐色土層。黒褐色土を主に、暗褐色土、ロームを斑点状(全体が輪郭の不明瞭なブロック状)に含む。
- 17層: 暗褐色土層。16層に近いが、ロームが多い。中央に10～20mm大のロームブロックを含む。
- 18層: 暗褐色土層。16層に近いが、黒褐色土が少ない。全体に、点描のように暗褐色土、黒褐色土、ロームが混じる。
- 19層: 暗褐色土層。17層に近いが、ロームが少なく、ブロックは見えない。
- 20層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの斑状の、不均質な混合土。ロームは部分的に白みがかかる。
- 21層: 黒褐色土層。黒褐色の大ブロック。
- 22層: 褐色土層。暗褐色土、ロームの混合土を主に、黒褐色土を少量含む。
- 23層: 黄褐色土層。黄褐色ロームの崩落土。
- 24層: 暗褐色土層。20層に近いが、黒褐色土がかなり多い。

第40図 6号方形周溝墓断面図(2)

溝で129～232cm、南東溝で105～181cm、南西溝で108～235cm、東隅の最も幅狭の部分では、68cmである。

周溝の断面形は、浅いところではU字状、船底状であるが、北西・北東溝の比較的残りのよい部分では、溝壁から溝底にかけ屈曲の明瞭な逆台形状、いわゆる箱薬研に近い形態である。周溝中央での深さは、北西溝で49cm、北東溝で66cm、南東溝で41cm、南西溝で40cmである。溝壁は、全体に内壁は急峻で、外壁は傾斜がゆるい。また、南西・南東溝に比べ、北西・北東溝の方が溝壁の立ち上がりが



〈E-E' 断面〉

1層：黒褐色土層。ローム、暗褐色土が斑状、部分的にラミナを

〈F-F' 断面〉

- 1層：暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。白色軽石粒、焼土粒を少量含む。
- 2層：暗褐色土層。1層に近いが、暗褐色土が多い。全体に暗褐色土、ロームが斑状、斑点状をなす。白色軽石粒は、上半にのみ見られる。炭化物も微量含む。比較的しまる。器台(No. 6)は、この層中出土。
- 3層：暗褐色土層。2層に近いが、ロームが全体に多い。所々5mm大のローム小ブロック、白色粒を微量含む。
- 4層：褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。所々5～20mm大のロームブロックを斑状に含む。
- 5層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を少量、斑状に含む。

〈G-G' 断面〉

- 1層：鈍い黄褐色土層。As-Aを多量に含み粒子が粗い。As-Aは、所々雲状をなし、全体に満遍なく含まれる。ローム粒、暗褐色土も斑状に含む。
- 2層：黒褐色土層。暗褐色土を斑状に含む。白色軽石粒を点々と含む。かなりしまっている。
- 3層：黒褐色土層。2層に近いが、暗褐色土が多い。黒みは2層より弱く、4層より強い。
- 4層：黒褐色土層。2層に近いが、暗褐色土がやや多く、黒み弱い。白色軽石粒上半に点在する。
- 5層：暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の混合土。2種の土が斑状に混合。右半とくに黒褐色土が多い。4層より黒褐色土多い。
- 6層：暗褐色土層。5層に近いが、暗褐色土が多く、全体に斑状を呈する。
- 7層：暗褐色土層。5層に近いが、5mm大のローム小ブロックが点在する。右上半部にラミナが見える。しまり弱く、不均質な土質。

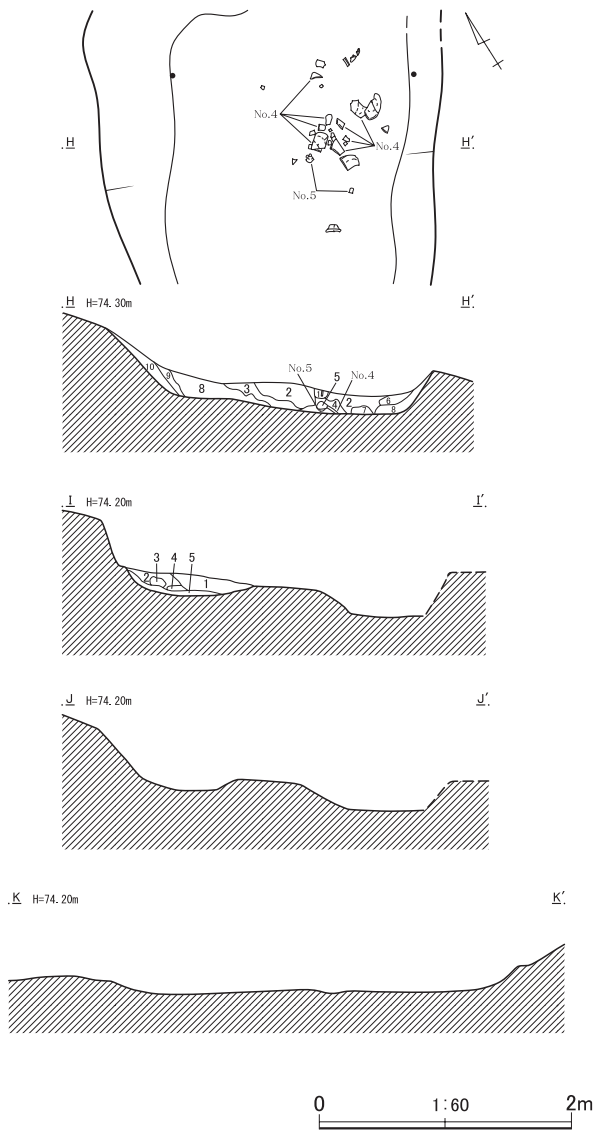
なす。

- 2層：暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の斑状の混合土。ロームを雲状に含み、とくに斜面下側に濃集する。
- 3層：黒褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が多い。暗褐色土より黒褐色土の方が多。
- 4層：黄褐色～暗褐色土層。ロームを主とする黄褐色のブロックと暗褐色土とロームの混合土のブロックが互層をなす。地崩れのように、壁などが大きく崩れ、流入した層の可能性が高い。
- 5層：褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。黒褐色土は所々5mm大の小ブロック状をなす。左半は、ロームが多い。
- 6層：黄褐色土層。黒褐色土とローム、どちらもブロックをなし、交互に入り混じる。
- 7層：黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を微量含む。

- 6層：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多い。
- 7層：暗褐色土層。6層に近いが、ローム多い。暗褐色土は、量的に3層の暗褐色土と同じくらいで、斑状をなす。
- 8層：褐色土層。7層に近いが、暗褐色土が少ない。上端に100mm大のローム大ブロックを含む。
- 9層：褐色土層。暗褐色土、ロームの混合土。4層とほぼ同量の暗褐色土。
- 10層：褐色土層。6層に近いが、5mm大のローム小ブロックが目立つ。壁際にローム大ブロックが見られる。
- 11層：黄褐色土層。ロームを主に、5～20mm大の暗褐色土を点々と含む。

- 8層：暗褐色土層。黄褐色ロームと黒褐色土の斑状の混合土。所々ラミナが見える。
- 9層：暗褐色土層。5～7層に比し、黒褐色土が多く、粘性が増す。斑状ではあるが、上位の層よりよく混ざっている。
- 10層：暗褐色土層。6層に近いが、ロームが多い。9層よりロームが多い。ロームは所々100mm大の星雲状をなす。
- 11層：暗褐色土層。6層に近いが、若干黒褐色土が多い。10層より黒褐色土が多い。ローム粒、白色粒も含む。
- 12層：暗褐色土層。11層に近いが、若干ロームが少ない。
- 13層：暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土、ロームの混合土。左半部分的にラミナが見える。
- 14層：褐色土層。くすんだ色調のロームを主に、暗褐色土、黒褐色土が混合する。所々5～30mm大の黄褐色ロームブロックを含む。粘性あり。
- 15層：褐色土層。14層に近いが、黄褐色ロームが少なく、粘性が強い。14層のロームより黄色み弱い黄褐色ロームが主。

第41図 6号方形周溝墓平面・断面図(1)



第42図 6号方形周溝墓平面・断面図(2)

しっかりしているようである。

北西溝中央の外壁に沿って平場が掘り残され、土坑が掘り込まれている。本方形周溝墓に確実に伴う、いわゆる周溝内土坑と見てよい。平場は、外壁に連なるように設けられており、土坑の大きさに合わせるかのように一旦途切れ、再び外壁沿いの幅の狭い平場となり、北隅まで延びている。土坑が穿たれた平場の平面形は、北東-南西に長い不整な長楕円形で、長さが382cm、幅190cmを測る。溝底からの高さは、北東側が高く26cm、南西側では、23cmである。土坑は、周溝外壁をいくらか掘り広げるようにして掘り込まれており、平面形は長楕円形である。長軸長321cm、短軸長は107cm、長軸方位の一方は、N-41°-Eである。土坑の断面形は、船底形で、中央での平場上面からの深さは、11cm、北西側での確認面からの深さは、51cmである。試掘トレンチが深く及んでいたこともあり、適当な土層断面を設定することができなかったが、土坑下部の覆土は、ロームの卓越する黄褐色土や褐色土で、少量の暗褐色土ないしは黒褐色土を不規則に含むやや粘性のある土であった。

北東溝の溝底は、東隅に向かってかなり傾斜しており、中央に2段の段差が認められる。南西溝の溝底は5段の段差をもって、斜面の傾斜に沿い、階段状に仕上げられている。南東溝の溝底は、東隅側が浅く、

〈H-H' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土とやや白みがかかったロームのブロック。
- 2層: 暗褐色土層。黒褐色土、暗褐色土の斑状の混合土を主に、ローム粒、雲状のロームの集合を含む。粘性あり、かなりしまっている。
- 3層: 暗褐色土層。迷彩様に暗褐色土と黒褐色土、ロームが混合。
- 4層: 暗褐色土層。3層に近いが、10mm大のロームブロックが多い。
- 5層: 黒褐色土層。黒褐色土のブロック内にローム粒と5mm大の雲状のローム小ブロック混合。
- 6層: 暗褐色土層。2層に近いが、ロームがかなり多い。
- 7層: 褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の斑状の混合土を主に、白みがかかったローム粒、雲状の同種ロームの集合を含む。粘性かなり強い。
- 8層: 暗褐色土層。6層に近いが、黒褐色土が多い。ロームは、6層より少なく、2層より多い。
- 9層: 褐色土層。8層に近いが、ロームが多い。
- 10層: 黄褐色土層。黄褐色ロームを主に、黒褐色土を斑状に少量含む。ロームはややくすんで赤みを帯びる。全体にやや汚れたソフトロームの感じ。

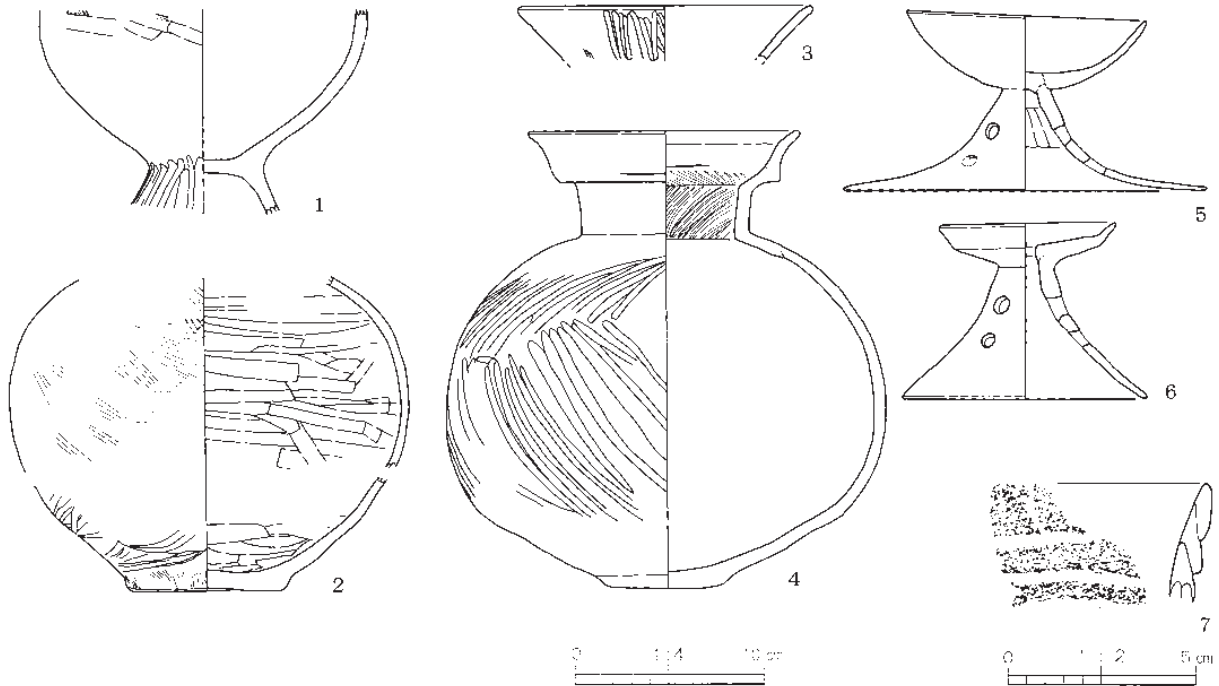
〈I-I' 断面〉

- 1層: 褐色土層。黄褐色ロームを主に、黒褐色土を斑状に(50mm位の固まりあり)含む。
- 2層: 黄褐色土層。1層に近いが、黄褐色ロームが多い。ロームは、ローム粒とロームブロックの集合。
- 3層: 黒褐色土層。ローム粒を含む黒褐色土の大ブロック。
- 4層: 黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを主に、黒褐色土を斑状に含む。
- 5層: 褐色土層。くすんだ灰褐色みを帯びたロームを主に、わずかに黒褐色土を含む。

全体に南隅に向かうゆるやかな傾斜をもち作出されている。いずれの溝底にも、細かな凹凸が見られる。

溝底は、北東・南東・南西溝南半は、IV層とした黄褐色ハードローム層中であり、南西溝北半から北西溝の大半、北隅にかけてはV層中、北西溝では、一部VI層とした暗褐色ロームが露出する状態であった。

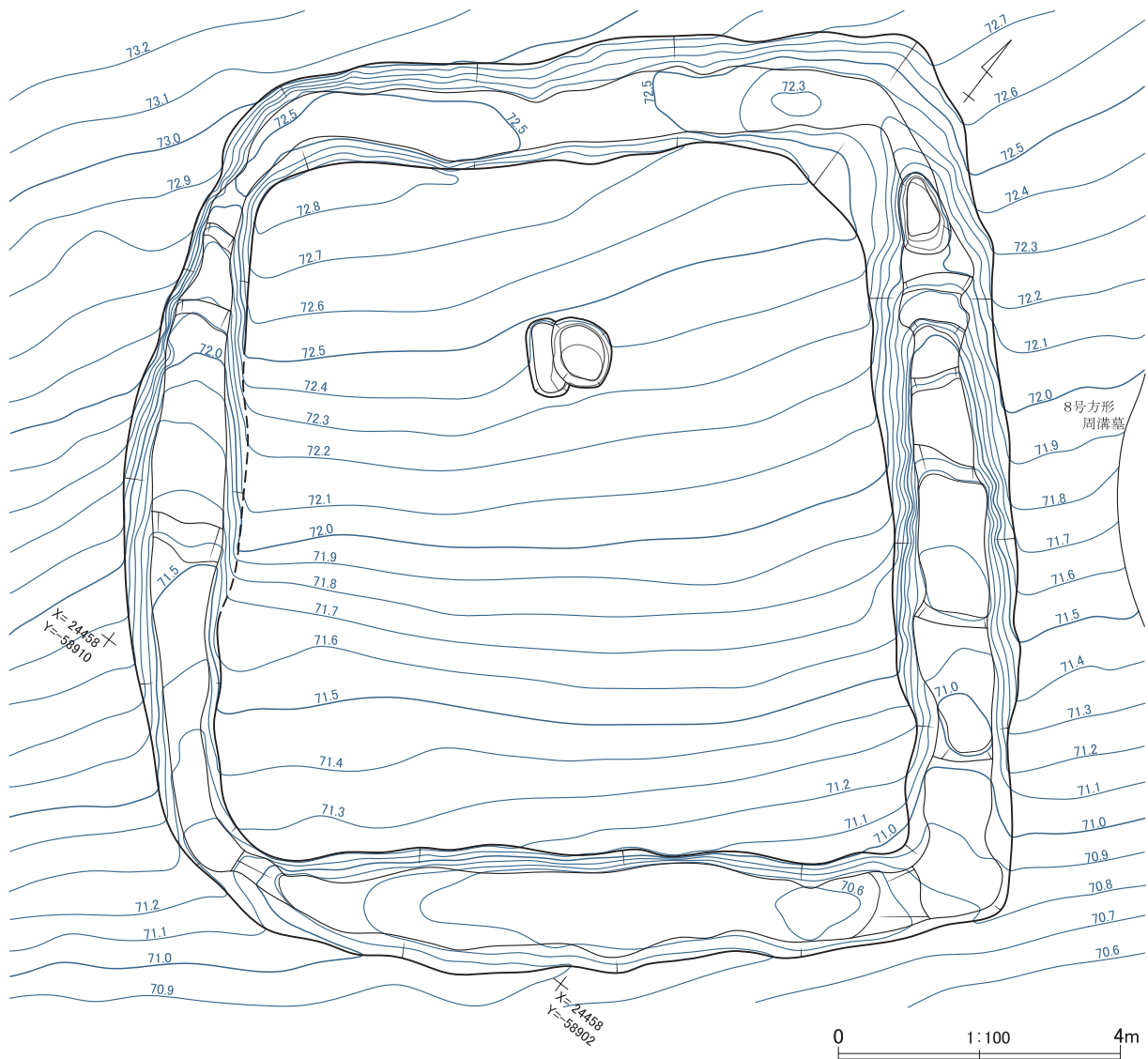
各周溝覆土は、10層前後に分けられた。周溝覆土は、黒褐色土や暗褐色土、ロームの多寡により区分した黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の4種からなり、中でも覆土の多くは、暗褐色土であった。一様な堆積状態とは言い難いが、上部に黒褐色土が堆積し、下部には、暗褐色土や褐色土、黄褐色土が堆積する、という堆積状態が見られる周溝が最も多い。周溝が浅い場合、黒褐色土を欠く場合も見られるが(第39・40図：C-C'断面の南東溝など)、上部に黒褐色土、下部ほどローム混入量



第43図 6号方形周溝墓出土遺物

第5表 6号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口径 - 底径 - 器高 -	体部は中位に膨らみを持つ。脚部は「ハ」の字に開く。	外面-体部上半ハケメ、体部下半ナデ、ミガキ。脚部外面ミガキ。内面-脚部上位指ナデ、下位ヨコナデ。	砂粒多量、長石・チャート・岩片粒 内-明赤褐色 外-にぶい赤褐色	1/2以下残存
2	壺	口径 - 底径 - 器高 -	平底で、体部は膨らみを持つ。	体部ハケメ後ミガキ。底部ナデ。内面-ハケナデ。	海面骨針・砂粒 内-にぶい黄橙色 外-明黄褐色	体部~底部片 3/4残存
3	壺	口径 19.5 底径 5.4 器高 27.9	口縁部は外反気味に開く。	外面-口縁部ヘラナデ後ミガキ。内面-ヘラナデ。	石英・長石・角閃石・チャート 内外-橙色	口縁部小片
4	壺	口径 (14.4) 底径 6.2 器高 24.2	平底で、体部は大きく膨らむ。頸部はほぼ直立し、口縁部は有段口縁となる。	外面-口縁部ヨコナデ、頸部ナデ。体部ミガキ。内面-口縁部ナデ。頸部ミガキ。	角閃石・微砂粒 内-灰褐色 外-橙色	口縁部一部欠損
5	高坏	口径 12.6 底径 19.2 器高 9.6	坏部は内彎して立ち上がり、脚部は強く開く。	内面-脚部内面ヘラケズリ後ナデ。	石英・長石・角閃石・チャート 内外-橙色	内外面磨耗
6	器台	口径 9.2 底径 12.9 器高 9.3	器受部は口縁付近で屈曲し、短く外傾して開く、脚部は「ハ」の字状に開く、脚部には上下二段の円孔が3方向に開く。	外面-ナデ。内面-ナデ。	石英・角閃石・暗赤褐色粒 内外-橙色	内外面磨耗
7	甕	口径 (22.3) 底径 - 器高 -	粘土紐積み上げ成形。外面に粘土紐積み上げの痕跡を残す。	外面-口縁部ナデ。内面-口縁部ナデ。	石英・長石・角閃石 内-にぶい赤褐色 内外-にぶい黄褐色	口縁部小片



第44図 7号方形周溝墓等高線図

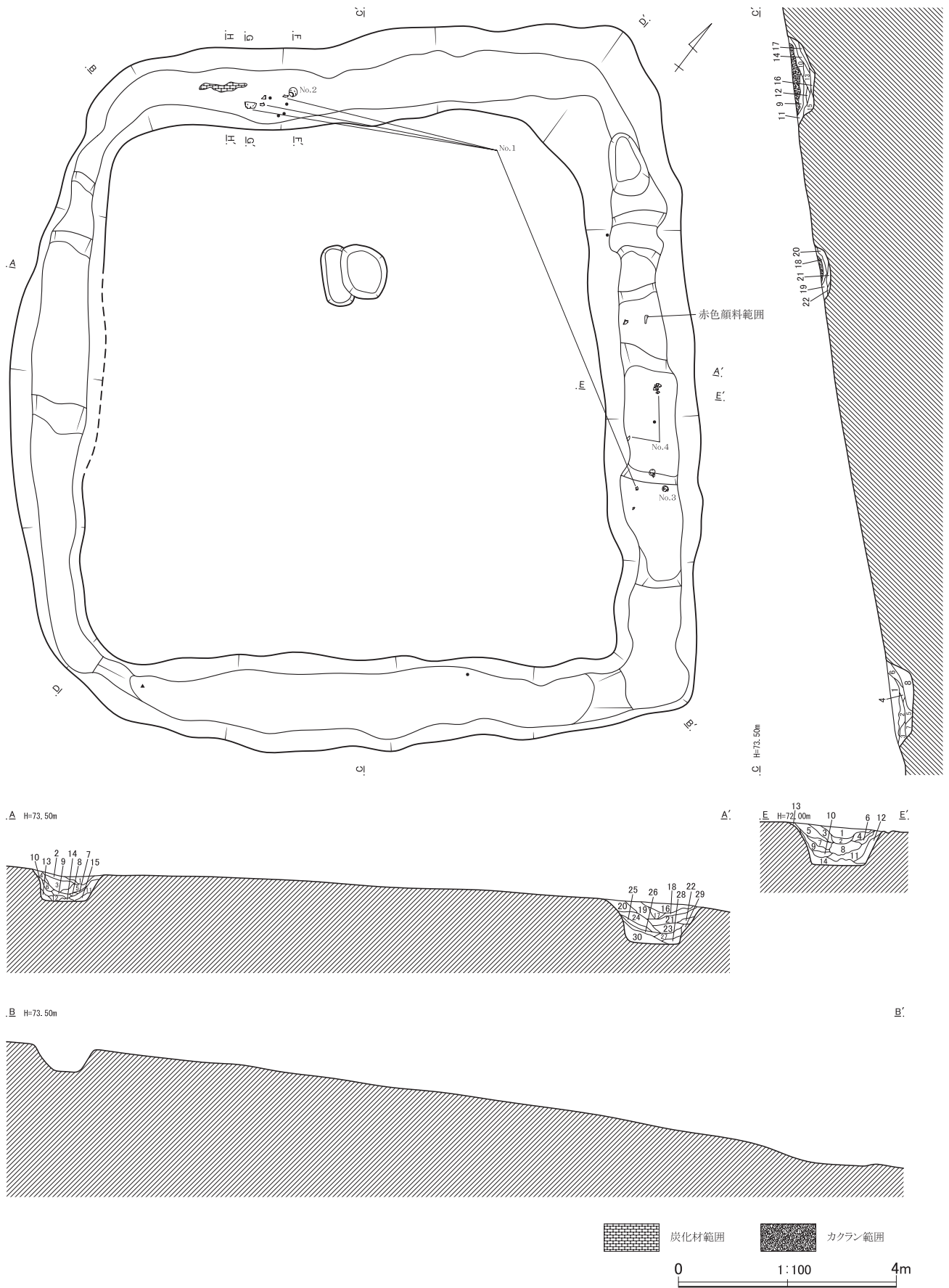
増し色調も明るくなる傾向は、ひとつの堆積パターンとすることができるのかもしれない。下部の褐色土、黄褐色土は、主に溝壁などの崩落、流入に由来する土であり、それらがある程度の堆積した後、暗褐色土やいわゆる旧表土に由来する黒褐色土が流入、堆積したものと推定される。

出土遺物の大半は土器であり、二重口縁の壺(第43図4)、高坏(同5)、器台(同6)の3点が、本遺構に確実に伴う遺物である。4の二重口縁壺は、北西溝の南西半で、溝底から覆土の下層にかけて、2m前後の範囲に破片が散らばった状態で出土した。5の高坏は、周溝内土坑に伴う壇状の平場の南西脇で、やはり浮いた状態で出土した。6の器台は、南東溝の中央部、やや北東寄り、表土層直下の2層とした暗褐色土中から出土した(第41・42図)。1・7は混入した時期の異なる土器である。

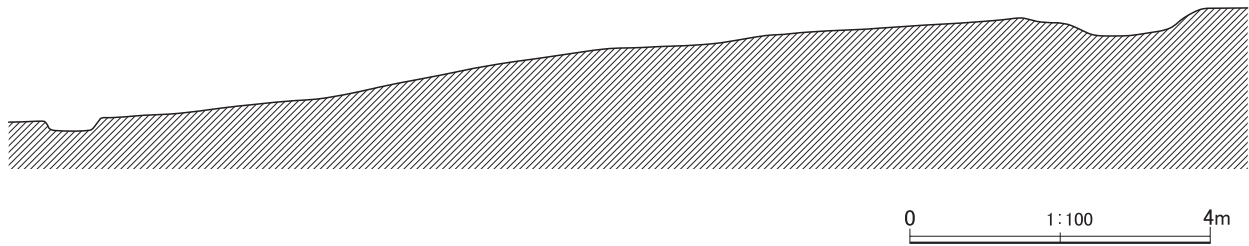
本遺構の時期は、出土遺物および覆土から見て、古墳時代前期後葉である。

7号方形周溝墓(第44~49図、第6表、図版13・14・32)

丘陵先端部に近い南東麓斜面に位置する遺構である。北西から南東に向かって傾斜する斜面に、北西・南東溝がおおむね平行して築かれており、方台部中央の標高は、72.0m前後である。方形周溝墓



第45図 7号方形周溝墓平面・断面図(1)



7号方形周溝墓土層注記

〈A-A' 断面〉

- 1層:黒褐色土層。褐色ローム粒、5～20mm大のロームブロック、炭化物を含む。ややしまる。
- 2層:暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒が多く、ブロックも多く大きい。全体に斑状をなす。
- 3層:暗褐色土層。1層に近いが、黒褐色土集中部とローム集中部(中央が多い)が、微妙に分離。焼土粒、白色粒(パミス?)を微量含む。
- 4層:暗褐色土層。3層に近いが、かなり明瞭に褐色ロームが多い。白色粒を少量含む。
- 5層:暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。右下部にはロームと共に焼土粒が多い。白色粒も少量含む。
- 6層:暗褐色土層。4層に近いが、ロームが多い。ロームの量は、4・5層と同じくらい。
- 7層:褐色土層。ローム粒を主に、黒褐色土を少量含む。右半には焼土の薄層が見られる。
- 8層:褐色土層。5層に近いが、焼土粒が点在する。黒褐色土も微妙に少ない。
- 9層:褐色土層。6層に近いが、ロームが若干多い。焼土粒も極微量含むが、8層よりは少ない。
- 10層:黄褐色土層。9層に近いが、ロームがさらに多い。
- 11層:褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。5～10mm大の焼土ブロック一箇所あり。質感は、いわゆるソフトロームに類似する。
- 12層:黄褐色土層。11層に近いが、ローム多く、焼土を含まない。
- 13層:暗褐色土層。黒褐色土とロームほぼ同量の斑状の混合土。
- 14層:褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。
- 15層:褐色土層。14層に近いが、さらにロームが多い。
- 16層:黒褐色土層。真黄色のローム粒、暗褐色土粒を含み、5～10mm大の褐色土ブロックを所々雲状に含む。白色粒(軽石?)を少量含む。
- 17層:黒褐色土層。16層に近いが、くすんだ色のロームが多い。
- 18層:暗褐色土層。17層に近いが、さらにロームが多い。
- 19層:暗褐色土層。18層に近いが、さらにロームが多い。右半は黒褐色土がやや集中する。黒褐色土、ロームは斑点状。
- 20層:褐色土層。19層に近いが、ロームが多い。
- 21層:褐色土層。18層に近いが、ロームが多い。黒褐色土の量は、16層>17層>18層>23層>21層>19層>22層。
- 22層:暗褐色土層。21層に近いが、20mm大、50mm大のロームが雲状に濃集する。
- 23層:暗褐色土層。21層に近いが、黒褐色土が微妙に多い。
- 24層:暗褐色土層。20層に近いが、黒褐色土が多い。
- 25層:褐色土層。20層に近いが、ロームが若干多い。
- 26層:暗褐色土層。24層に近いが、黒褐色とロームがやや乱れ斑状をなす。
- 27層:褐色土層。26層に近いが、ロームが多い。
- 28層:黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを主に、間に斑状に黒褐色土が入る。
- 29層:黄褐色土層。28層に近いが、黒褐色土が少ない。地山のロームより若干軟質。
- 30層:黄褐色土層。29層に近いが、黒褐色土が若干多い。

〈C-C' 断面①〉

- 1層:黒褐色土層。ローム粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。1～8層は、南溝覆土。
- 2層:黒褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロック少量含む。
- 3層:黒褐色土層。ローム粒を少量含み、5～10mm大のロームブロックをかなり含む。
- 4層:褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 5層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 6層:暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを少量含む。
- 7層:暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。
- 8層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、小豆色粘土小ブロックをかなり含む。粘性ややあり。

第46図 7号方形周溝墓断面図(1)

〈C-C' 断面②〉

- 9層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の斑状の混合土を主に、ローム粒、輪郭不鮮明な5~10mm大のロームブロックを含む。9~17層は、北溝覆土。
- 10層: 暗褐色土層。9層に近いが、黒褐色土が多い。
- 11層: 暗褐色土層。黒褐色土、暗褐色土同量程度の混合土。ローム粒を含む。焼土粒、5mm大の焼土小ブロックを少量含む。
- 12層: 暗褐色土層。11層に近いが、焼土粒、5mm大の焼土小ブロックが濃集する。
- 13層: 黒褐色土層。暗褐色土を斑点状に含む。焼土粒を微量含む。大粒の黒色土が、主に11層寄りに点在する。
- 14層: 暗褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。

- 15層: 暗褐色土層。11層に近いが、黒褐色土が多い。
- 16層: 暗褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。焼土粒が見られない。
- 17層: 褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を少量斑状に含む。
- 18層: 暗褐色土層。5~30mm大のロームブロックをかなり含む。18~22層は、主体部覆土。
- 19層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。
- 20層: 黒褐色土層。5~20mm大のロームブロックを少量含む。
- 21層: 黒褐色土層。5~30mm大のロームブロックをかなり含む。
- 22層: 褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。

〈E-E' 断面〉

- 1層: 黒褐色土層。斑状、斑点状に暗褐色土、ローム粒を含み、5~10mm大のロームブロックを含む。
- 2層: 黒褐色土層。1層に近いが、黒褐色土が少ない。
- 3層: 暗褐色土層。暗褐色土、ロームが比較的均質に混じる混合土。
- 4層: 黒褐色土層。3層に近いが、黒み若干強い。
- 5層: 暗褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。ロームは斑状。
- 6層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの同量くらいの混合土。3層よりよく混合している。下端にローム粒、5~15mm大のロームブロックが濃集する。
- 7層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土(2種の土は斑状をなし分離不能)、ロームの混合土。5層よりロームが少なく、黒み強い。
- 8層: 黒褐色土層。暗褐色土、ローム粒、5~10mm大のロームブロック(全体に黒みの強いローム)を斑状に含む。2層より黒み

- 強い。1層よりはローム多い。
- 9層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土、黒褐色土を斑状にかなり含む。黒褐色土の量は、1層>8層>10層>7層>11層>9層。
- 10層: 暗褐色土層。8層と同じ3つの色調の土が斑状に混合。但し、ロームと黒褐色が同量。
- 11層: 暗褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。壁側及び下端にローム大ブロック混入する。
- 12層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。11層よりロームが多い。
- 13層: 黄褐色土層。黄褐色ロームを主に、黒褐色土を少量含む。
- 14層: 褐色土層。黄褐色ロームを主とする。13層より黒褐色土が多く、黒褐色土の輪郭が鮮明。

第47図 7号方形周溝墓断面図(2)

群の中、中央に並ぶ比較的大型の3基の方形周溝墓の真中あたり、南西側に近接する6号方形周溝墓とは、2.0m前後の間隔しか開けず並列している。南西溝のほぼ中央から方台部中央にかけて、長さ7.4m、幅3.5mの楕円形の大きな攪乱により壊されている。確認面は、Ⅲb層上面である。

全体の平面形は、歪な方形には違いないが、南東溝を下底とする台形と言った方がより適切な形態であり、方台部の形態も同様である。北・東隅は、比較的直角に近く曲がるのに、南隅が鋭角、西隅が鈍角をなすことが台形様に歪んだ原因である。規模は、南西-北東方向の中軸線上の外縁で12.55m、方台部長9.14m、北西-南東方向の同じく外縁で13.08mで、方台部長は、9.72m前後と推定される。台形様の形態のため、方台部の北西辺長は8.93m、南東辺のそれは9.86mを測る。北西-南東方向での中軸線方位は、N-39°-Wである。

南西溝を除いて、周溝幅はかなり一様に見えるが、北隅が幅広く、東隅がくびれることがやや目立つ点である。南西溝は、中央が膨らみ、西隅、南隅にかけて周溝幅が減じる。中央付近での周溝幅は、北西溝で167cm、北東溝で172cm、南東溝で170cm、南西溝で170cm前後である。くびれの著しい南隅、西隅での周溝幅は、74cm、68cmである。

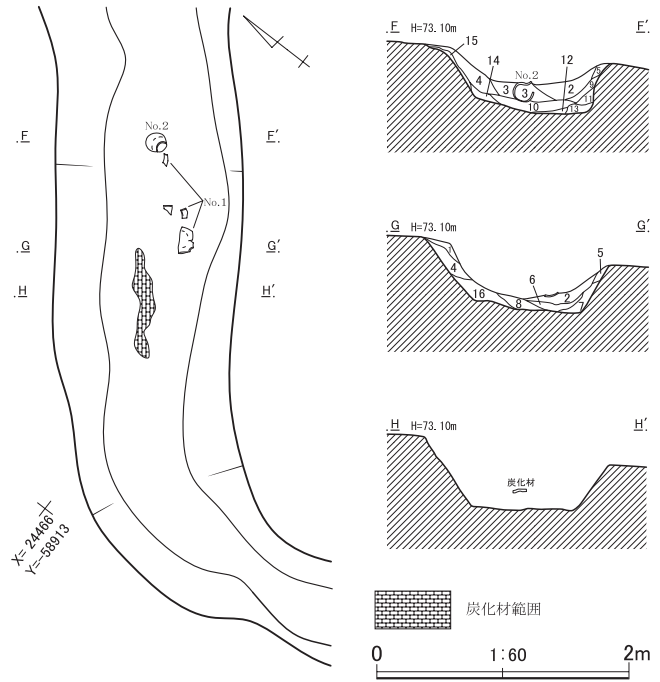
北西・南東溝は、溝底にかなり凹凸が見られるものの、等高線に沿うように一様な深さで掘られているが、北東・南西溝は、傾斜に従い階段状に掘り込まれている。また、北東溝中央は、段差をもち、深く

浅見山 I 遺跡

7号方形周溝墓土層注記

(F-F'、G-G' 断面)

- 1層:暗褐色土層。黒褐色土、暗褐色土、ローム(雲状に濃集する部分あり)の混合土。炭化物粒を微量含む。
- 2層:暗褐色土層。黒みが弱く、炭化物粒及び焼土粒を含まない。
- 3層:暗褐色土層。5~10mm大の炭化物粒及び焼土粒を含む。2層より黒みが強い。
- 4層:暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。壁際にローム粒、ロームブロックが雲状に濃集する。
- 5層:褐色土層。くすんだ褐色の50~60mm大のロームブロックを含む。しまりやや強く、粘性若干ある。
- 6層:暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が多い。5mm大のくすんだ色調のローム小ブロックを含む。しまりやや強く、粘性若干ある。
- 7層:暗褐色土層。5層に近いが、ロームが少ない。6層にも似るが、くすんだ褐色の50~60mm大のロームブロックを含む。
- 8層:暗褐色土層。6層に近いが、5~20mm大の黄褐色ロームブロックが点在する。この層上面で、40mm大の焼土の塊が見られる。上半に焼土粒を微量含む。しまりやや強く、粘性若干ある。
- 9層:褐色土層。5層に近いが、黒褐色土が多く、斑状をなす。
- 10層:暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの斑状の混合土。
- 11層:褐色土層。9層に近いが、黒褐色土が多く、斑状に分散。



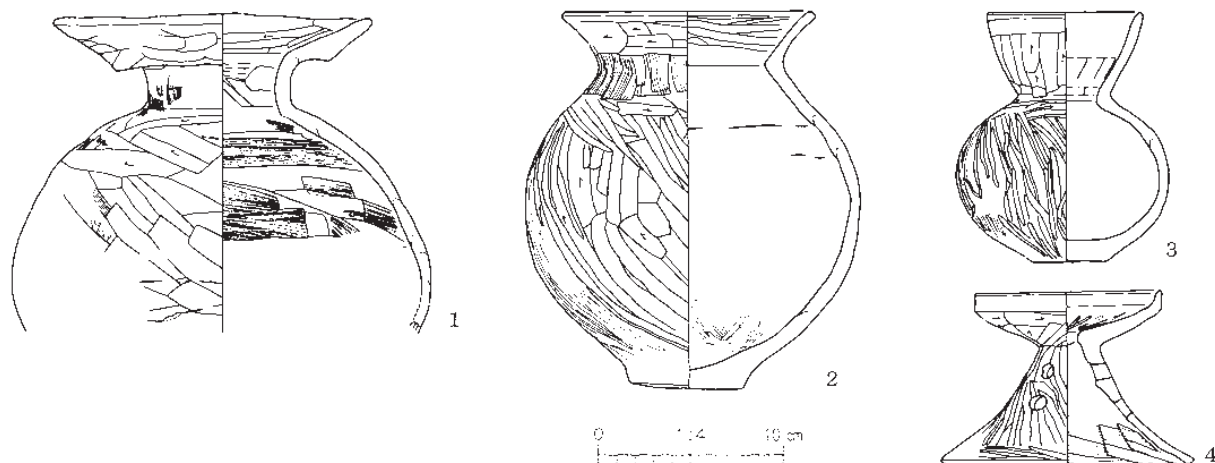
- 12層:褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。
- 13層:黄褐色土層。ローム粒、10~70mm大のロームブロックを主に、暗褐色土、黒褐色土が斑状に混じる。
- 14層:黄褐色土層。60~70mm大のローム大ブロックと黒褐色土(中央に多い)、暗褐色土(両側に目立つ)の混合土。
- 15層:黄褐色土層。黄褐色ローム粒、ロームブロックを主に5~50mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。
- 16層:暗褐色土層。4層に近いが、若干黒み強い。しまりやや強く、粘性若干ある。

第48図 7号方形周溝墓平面・断面図(2)

なっている。周溝の断面形は、とくに残存状態のよい北西溝の南西半や北東・南西溝、南東溝の中央などでは、底面が平坦で両壁が直線的に急峻に立ち上がる、いわゆる箱薬研である。北隅は、方台部側が削ぎ落とされたように傾斜が緩くなっており、東隅は浅くなり、断面形も皿状に近い。周溝中央での深さは、北西溝で40cm、北東溝で75cm、南東溝で44cm、南西溝で54cmである。最も浅い東隅は、深さが16cmしかない。北東溝中央の深く掘り込まれた部分での深さは、70cmである。溝底は、総じて標準土層IV~V層上面であるが、深く掘り込まれくぼんだ部分では、VI層の暗褐色のロームが露出した状態である。

北東溝の北隅近くには、溝底に土坑状の掘り込みが認められる。周溝内土坑と考えられるが、かなり掘り下げた段階で確認したため、土層断面を設定することができなかった。土坑上端での平面形は、卵形に近く、周溝の走向に沿う長軸の長さは、116cm、短軸長は、66cm、長軸方位の一方は、N-45°-W、中央の深さは、27cmである。溝底付近の覆土は、比較的ロームの卓越する土であった。

周溝の覆土は、周溝各々でかなり異なるかにも見えるが、量及び土層の数の上で主となる堆積土は暗褐色土であること、周溝上層のしかも中央部に特徴的な黒褐色土が堆積する傾向が多く見られ、また下層は暗褐色土、褐色土、黄褐色土が占め、より下層ほど褐色土、黄褐色土、つまりロームが卓越する傾向があることが指摘できる。そうした特徴的な堆積状態は、周溝の残存状態がよく、覆土が厚く残る部分ほど顕著に見られるようである(第45・46図:A-A'断面)。



第49図 7号方形周溝墓出土遺物

第6表 7号方形周溝墓出土遺物観察表

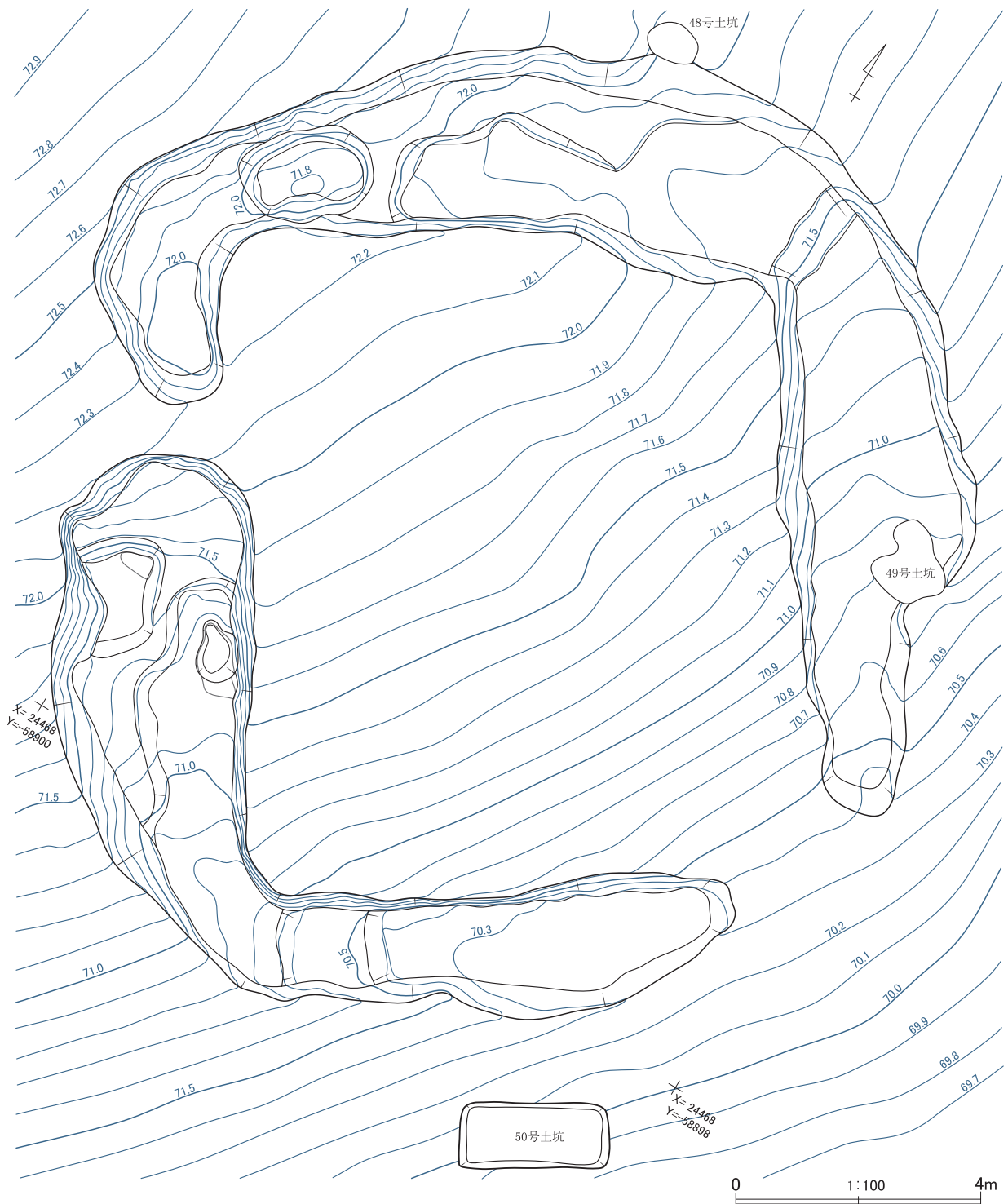
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 16.5 底径 - 器高 -	粘土紐積み上げ成形。体部は膨らみを持ち、頸部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外傾して開く。	外面-口縁部ヘラケズリ、体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヘラケズリ。体部ハケメ。	軽石碎粒・角閃石・石英・暗赤褐色粒 内外-橙色	底部欠損
2	壺	口径 (13.1) 底径 6.0 器高 19.9	平底で、体部は丸く膨らむ。口縁部は「く」の字口縁で僅かに外反して開く。	外面-口縁部ヘラケズリ、頸部ハケ目。体部ヘラケズリ後ミガキ。内面-口縁部ミガキ。底部ハケメ。	角閃石・石英・チャート 内-灰褐色 外-橙色	ほぼ完形
3	壺	口径 8.1 底径 3.8 器高 13.2	底部は平底で、体部は膨らみを持ち、最大径は中位にある。口縁部は直口口縁で僅かに内彎気味に立ち上がる。	外面-口縁部上位ヨコナデ、中～下位ヘラケズリ。体部ミガキ。内面-口縁部ヘラナデ。	チャート・砂粒 内外-明赤褐色	3/4以上残存
4	器台	口径 9.9 底径 12.7 器高 9.2	器受部は口縁先端で屈曲して立ち上がる。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部には上下二段の円孔が3方向に開く。	外面-器受部口縁ヨコナデ、器受部ヘラケズリ。脚部ミガキ。内面-器受部口縁ヨコナデ。器受部ミガキ。脚部ナデ、裾部ハケメ。	チャート・角閃石 内外-橙色	3/4以上残存

方台部の北東寄りの位置で主体部と思しき重複する土坑を検出した。不整形な1基の土坑と思ひ込み開掘し、坑底近くでようやく重複する2基の土坑であることが判明した。重複関係は、東側の土坑が西側の土坑を切って造られている。どちらかが本方形周溝墓に伴わない可能性も捨て切れないが、掘り込みも浅く確証を得ることができなかつた。西側の土坑を主体部a、東側の土坑を主体部bとして記載する。

主体部aの平面形は、北西-南東に長い長楕円形で、長軸長は、89cm、短軸長は推定で44cm、長軸方向の一方は、N-44°-W前後である。断面形は、鍋底形に近く、中央での深さは、18cmである。溝底付近での所見になるが、覆土は、暗褐色土のわずかに混入するロームを主とする土であった。主体部bの平面形は、微妙に角張った不整円形で、北西-南東方向での径は77cmであり、同方向を強いて長軸とすれば、長軸方位の一方は、N-37°-Wくらいになるようである。断面形は、溝壁、溝底の境が不明瞭な船底形、あるいは椀形で、中央での深さは、32cmである。覆土は5層に分けられる。坑底に周溝覆土と類似した黒褐色土が堆積しており、何らかの関連性をうかがわせるが、埋葬施設に特有の痕跡などは認められない。

本遺構に確実に伴う遺物は、二重口縁壺(第49図1)、短頸の壺(2)、直口壺(3)、器台(4)である。1の二重口縁壺は、北西溝の南西半で、溝底から20cm弱浮いた状態で出土している。2の短頸壺は、北東溝中央のやや深く掘り込まれた部分の南へり、溝底から20cm前後浮いた位置で逆位で、4の器台は、その壺の北側すぐそば、E-E'断面上層の黒褐色土層に対応する層準から出土している。器台の北側では、覆土の下層上面とも言うべき高さで、狭い範囲ではあるが、赤色顔料が濃集していた(第VI章参照)。

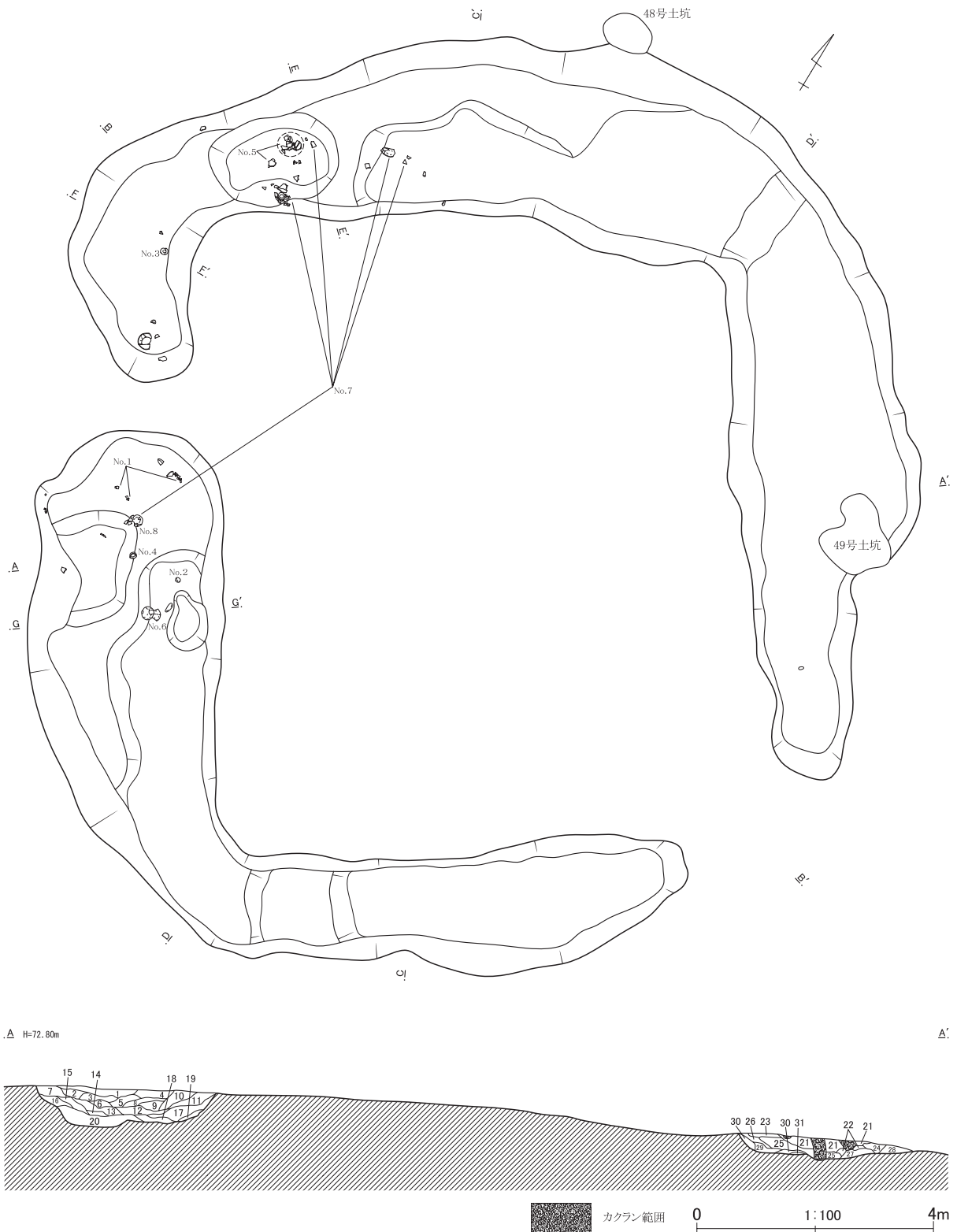
本遺構の時期は、出土遺物および覆土から見て、古墳時代前期中葉～後葉である。



第50図 8号方形周溝墓等高線図

8号方形周溝墓（第50～56図、第7表、図版15・16・33・34）

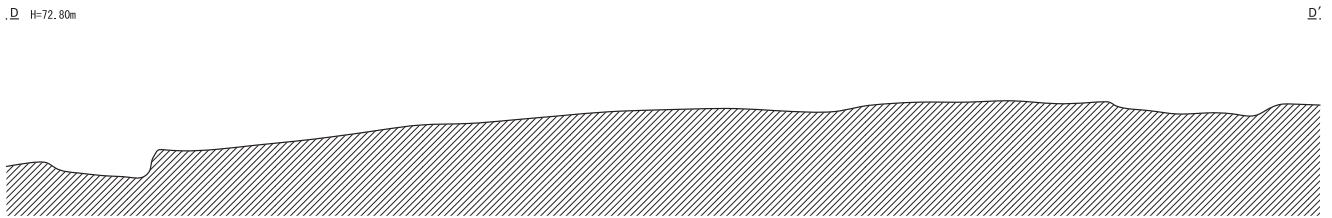
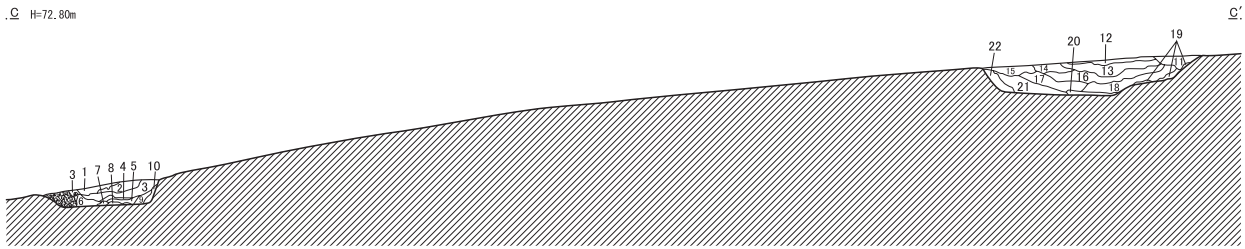
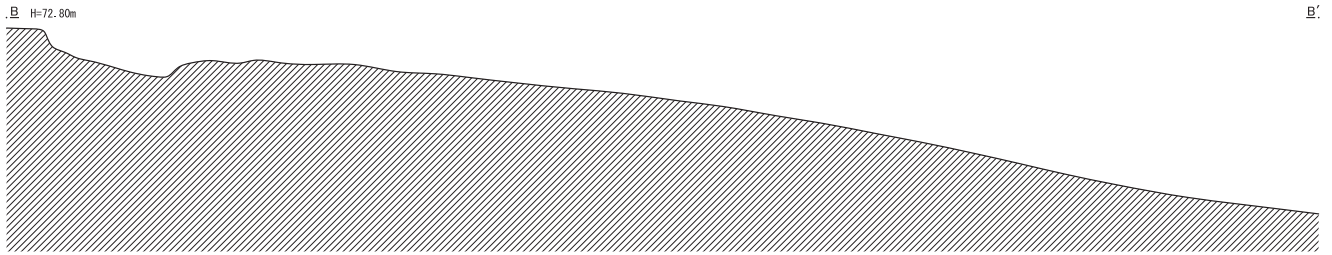
丘陵先端部の尾根筋から南東麓斜面にかけて位置する遺構である。ほぼ東西方向に傾斜する尾根筋と北西－南東に傾斜する南東麓の傾斜変換点付近に、等高線が方台部の対角線上を走るように造られており、方台部中央の標高は、71.6m前後である。南西側に近接する7号方形周溝墓とは、1.5m前後しか離れていない。北西溝外縁の一部を48号土坑に、北東溝の一部を49号土坑に壊されている。南東側に近接して埋葬施設の一種とも目される50号土坑がある。確認面は、Ⅲb層上面である。



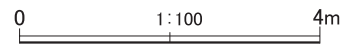
第51図 8号方形周溝墓平面・断面図(1)

周溝外縁は全体に丸みをもち、とくに南北隅はほとんど弧を描く。平面形は、不整な円形と呼ぶのが適切かと思われる。方台部の平面形は、やはり菱形、あるいは北西-南東を対称軸とする扇形に近い。西隅からわずかに曲折して南西溝に連なる位置および東隅に陸橋部が設けられている。

周溝内縁は、各辺明瞭な直線を描き、また三隅も鋭く屈折するが、周溝外縁は、膨らみ、部分的に



カクラン範囲



8号方形周溝墓土層注記

(A-A' 断面①)

- 1層:暗褐色土層。黒褐色土とローム粒、5~20mm大のロームブロックの斑状、斑点状の混合土。白色粒(軽石?)を含み、オレンジ色の粒(土器粒?)を含む。しまりやや強い。
- 2層:暗褐色土層。1層に近いが、暗褐色土及びロームが若干多く、黒褐色土の黒みが強い。
- 3層:暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が多い。
- 4層:暗褐色土層。2層に近いが、白色粒をかなり含み、オレンジ色の粒を微量含む。黒褐色土は、2層より若干多い。
- 5層:黒褐色土層。暗褐色土、ローム粒を含み、白色粒をかなり含む。全体に斑状をなす。
- 6層:暗褐色土層。3層に近いが、若干ロームが多い。
- 7層:暗褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。壁寄りに向かってロームが漸増する。
- 8層:暗褐色土層。4層に近いが、ロームが多い。右端でロームがブロック状に濃集する。
- 9層:暗褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。とくに、右側に寄るほどロームが多くなる。
- 10層:褐色土層。暗褐色土とロームの混合土を主に、黒褐色土を斑状、斑点状に含む。

- 11層:褐色土層。10層に近いが、黒褐色土が多い。
- 12層:暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、2mm大の黄褐色軽石粒を少量、炭化物粒を微量含む。
- 13層:暗褐色土層。6層に近いが、ロームが多い。ローム、黒褐色土の量は、7層と同じくらい。
- 14層:黒褐色土層。ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。
- 15層:褐色土層。7層のロームがやや多い部分に類似する。
- 16層:黄褐色土層。7層に近いが、ロームが多い。
- 17層:褐色土層。10層に近いが、さらにロームが多い。
- 18層:褐色土層。5~20mm大のロームブロック、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。ロームブロックは角張っており、輪郭明瞭。粘性ややあり。
- 19層:黄褐色土層。5~50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。ロームブロックは角張っており、輪郭明瞭。
- 20層:黄褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。表土化した土か?。
- 21層:黒褐色土層。ローム粒、5mm大の黄色みの強いローム小ブロック、5~10mm大の輪郭不鮮明なロームブロックを含む。白色粒(軽石?)を少量含む。

第52図 8号方形周溝墓断面図(1)

〈A-A' 断面②〉

- 22層: 黒褐色土層。21層に近いが、ロームが多い。5mm大のローム小ブロックを含む。
- 23層: 褐色土層。黒褐色土とロームが同量程度の混合土。しまりがない。
- 24層: 黒褐色土層。21層に近いが、ロームが多い。黒褐色土は中央に斑状に濃集する。
- 25層: 暗褐色土層。黒褐色土とロームの混合土。23層に近いが、黒褐色土が多い。
- 26層: 暗褐色土層。25層に近いが、若干ロームが多い。
- 27層: 暗褐色土層。黒褐色土とロームが同量程度の斑状の混合土。5~20mm大の輪郭明瞭なロームブロックを含む。22層より黒

褐色土が少ない。

- 28層: 暗褐色土層。27層に近いが、ロームが多い。上部左端にローム、黒褐色がよく混ざった大ブロックが見られる。右半は、ロームがやや多い。
- 29層: 暗褐色土層。26層土を主に、5mm大のローム小ブロックを多量に含む。10~30mm大のロームブロックを微量含む。
- 30層: 暗褐色土層。黒褐色土を主に、ローム粒を含む。5mm大のローム小ブロックを微量含む。
- 31層: 黄褐色土層。ローム粒、ロームブロックを主に、黒褐色土を斑状に少量含む。

〈C-C' 断面〉

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒を含む。ローム粒は、10~20mm大の雲状に濃集する。とくに下半は、粒子が粗い。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、暗褐色土、黒褐色土を主に、ローム粒を含む。
- 3層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が多い。
- 4層: 暗褐色土層。3層に近いが、5mm前後のローム小ブロックをかなり含む。所々ロームは雲状に濃集する。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、黒褐色土が多い。
- 6層: 暗褐色土層。4層に近いが、ロームと暗褐色土の5~20mm大の輪郭不鮮明なブロックを斑状に含む。
- 7層: 暗褐色土層。3層に近いが、5mm大のローム小ブロックがかなり多い。5層と殆ど同じ。若干ローム小ブロックが少ない。
- 8層: 黄褐色土層。暗褐色土とローム粒、5~30mm大のロームブロックを含む。左半は殆どロームブロックで、ブロック間に暗褐色土が嵌入している。
- 9層: 暗褐色土層。5層に近いが、ローム小ブロックは殆どない。
- 10層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の斑状の混合土を主に、5~20mm大のロームブロックを多く含む。
- 11層: 暗褐色土層。黒褐色土を主に、暗褐色土を雲状、斑点状に含む。ローム粒をかなりの量含み、白色粒(軽石?)を少量含む。

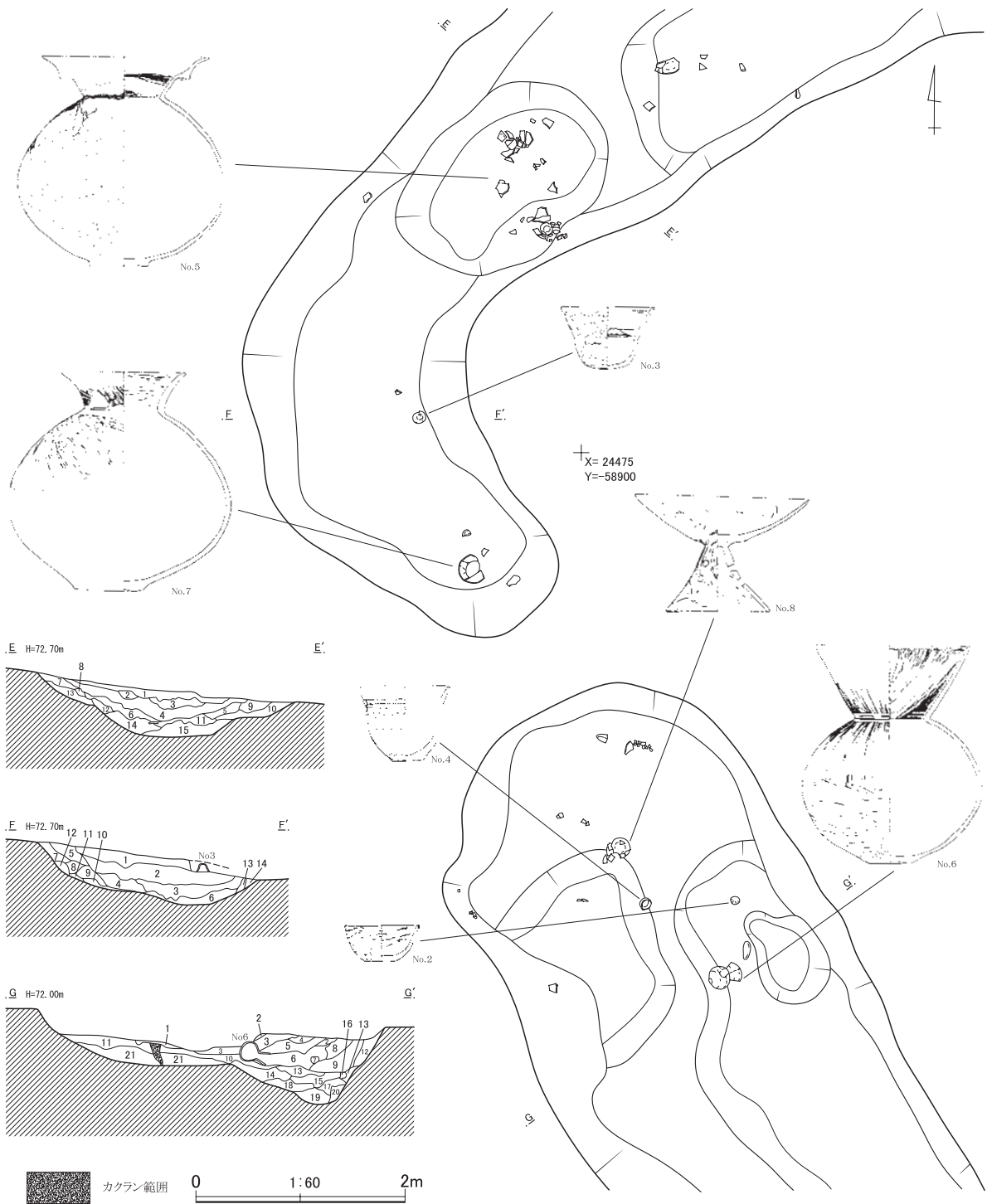
- 12層: 暗褐色土層。11層に近いが、黒褐色土が少ない。混合した土はかなり均一に混じる。
- 13層: 黒褐色土層。11層に近いが、黒褐色土が多い。
- 14層: 暗褐色土層。12層に近いが、黒褐色土が多く、斑状、斑点状。
- 15層: 暗褐色土層。14層に近いが、暗褐色土、ロームが多い。5mm大の小ブロックも入る。黒褐色土の量は、13層>14層>15層>18層>11層>12層>16層>21層>22層。
- 16層: 暗褐色土層。14層に近いが、暗褐色土、ロームが多く明るい。5mm大のローム小ブロックが点在する。
- 17層: 暗褐色土層。15層に近いが、ロームが多い。ただし、16層よりロームが少ない。比較的均一に混合。
- 18層: 暗褐色土層。17層に近いが、黒褐色土が多い。
- 19層: 褐色土層。暗褐色土とロームの斑状の混合土。黒褐色土を少量斑状に含む。溝底付近に、5~20mm大のロームブロックが濃集する。
- 20層: 暗褐色土層。13層に近いが、ロームが多い。
- 21層: 褐色土層。暗褐色土とロームを主に、黒褐色土を少量含む。部分的に5~20mm大のロームブロックが微量点在する。
- 22層: 褐色土層。21層に近いが、全体にローム粒、ロームブロックが多い。

第53図 8号方形周溝墓断面図(2)

曲折する。規模は、周溝外縁の南西-北東で14.41m、同じく北西-南東で15.70m、周溝幅に広狭があるため、最大長は多少異なり、南西-北東で14.92mを測る。方台部長は、南西-北東で8.82m、北西-南東で10.70mである。北西-南東方向での中軸線方位は、N-35°-Wである。

周溝幅には、広狭が目立つ。南西溝は陸橋部に続く部分が幅広くなり、丁度反対側の北西溝も周溝幅が著しく増した後、急激に細くなり、東隅の陸橋部に連なる。中央部での周溝幅は、北西溝で289cm、北東溝で253cm、南東溝で206cm、南西溝で307cmである。因みに最も幅広となる北東溝の周溝幅最大値は、325cm、同じ北東溝の細い部分では、周溝幅は172cmしかない。

周溝の断面形は、鍋底状、船底状である。周溝中央での深さは、北西溝で48cm、北東溝で34cm、南東溝で32cm、南西溝で67cmである。周溝には深淺が著しく、総じて三隅にかけて深さが減じるようである。



8号方形周溝墓土層注記

〈E-E' 断面①〉

1層: 暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に、ローム粒を含み、白色粒(軽石?)を少量含む。中央に暗褐色土、黒褐色土、ロームの混合土の大ブロックを含む。植物の根の繁茂により乱されており、全体にしまりが無い。このあたりの土器片の大半は、本層中より出土。

2層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの斑状、斑点状の

混合土。1層よりロームが多い。

3層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。2層より若干ロームが少ない。

4層: 暗褐色土層。3層に近いが、黒褐色土が多い。

5層: 褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの均質な混合土。5mm大ローム小ブロックを微量含む。しまりなく軟質。

第54図 8号方形周溝墓平面・断面図(2)

〈E-E' 断面②〉

- 6層: 暗褐色土層。6層に近いが、黒褐色土を5~10mm大の斑点状、雲状にかなり多く含む。最も黒みが強い層。
 7層: 褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームが斑状に混合。
 8層: 暗褐色土層。7層に近いが、5mm大のローム小ブロックが目立つ。
 9層: 褐色土層。5層に近いが、ロームが若干多い。
 10層: 褐色土層。5層土とロームの混合土。5~10mm大のローム小ブロックを中央局所的に多量に含む。
 11層: 暗褐色土層。5層土と暗褐色土、黒褐色土の混合土を主に

- 5~10mm大のローム小ブロックを微量含む。
 12層: 暗褐色土層。7層に近いが、暗褐色土、黒褐色土が多い。溝底付近に、ロームが20mm大の雲状に密集する部分あり。
 13層: 黄褐色土層。ローム粒、5~40mm大のロームブロックを主に、暗褐色土、黒褐色土を斑状に含む。
 14層: 暗褐色土層。12層に近いが、ロームが多い。
 15層: 褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの比較的均質な混合土を主に、5~40mm大のロームブロックを多量に含む。

〈F-F' 断面〉

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒を含む。しまりなく軟質。
 2層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土を主に、ローム粒、ロームブロックを斑点状に含む。
 3層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土を主に、ローム粒、5~10mm大の明褐色ロームブロックを含む。とくに下半はロームが多い。
 4層: 暗褐色土層。黒褐色土とロームの混合土。ロームは所々5~10mm大のブロックをなす。3層より黒褐色土が少ない。
 5層: 暗褐色土層。黒褐色土と暗褐色土、ロームの均一な混合土。粒子が粗い。
 6層: 褐色土層。ローム粒、5~150mm大のロームブロックを主に、黒褐色土を斑状に含む。ブロックは不規則に混合。

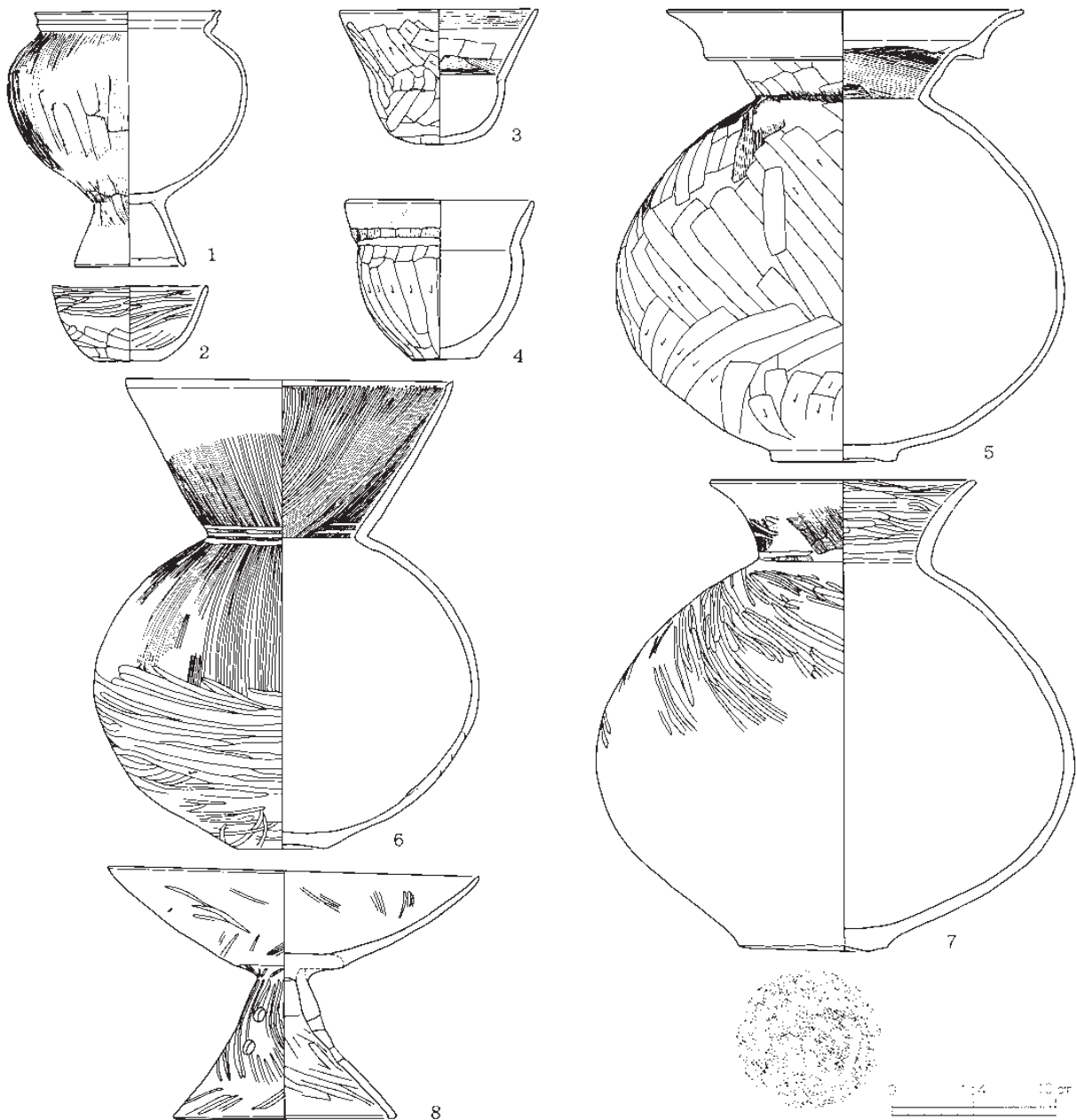
- 7層: 褐色土層。5層に近いが、ロームがわずかに多い。5mm大のローム小ブロックも点在する。
 8層: 暗褐色土層。7層に近いが、ロームを局所的に斑状に含む。
 9層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの斑状の混合土。黒褐色土は、所々5~20mm大のブロック状をなし、とくに中央に黒褐色土、ロームが多い。
 10層: 褐色土層。9層に近いが、それぞれの土が斑点状をなす。
 11層: 褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。
 12層: 黄褐色土層。ハードローム。
 13層: 暗褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。5層よりロームが少ない。
 14層: 黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を微量含む。

〈G-G' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ローム粒、5mm大のローム小ブロックの斑状、斑点状の混合土。ローム小ブロックは、所々まとまる。白色粒を含む。
 2層: 褐色土層。1層に近いが、ロームが少なく、黒褐色土が若干少ない。
 3層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームが少ない。土器粒かと思われる赤褐色粒を微量含む。黒褐色土の量は、3層≧6層>15層>9層>17層>5層>4層=13層>14層。
 4層: 褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。
 5層: 褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。赤茶色の粒子を微量含む。4層より黒褐色土が多い。
 6層: 暗褐色土層。3層に近いが、黒褐色土が若干少ない。2層よりロームが少ない。
 7層: 褐色土層。黒褐色土を少量、30mm大のくすんだ色のロームブロックを含む。
 8層: 暗褐色土層。5層に近いが、20~30mm大のロームブロックを極微量含む。

- 9層: 褐色土層。8層に近いが、黒褐色土が若干多い。
 10層: 黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を淡く斑状に含む。
 11層: 黄褐色土層。10層に比し、ロームが若干多い。
 12層: 黄褐色土層。10層に近いが、ロームが多く、黒褐色土が雲状に局在する。
 13層: 褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。
 14層: 黄褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。11層に比し、30~50mm大のロームブロックが多い。13層より黒褐色土がわずかに少ない。
 15層: 褐色土層。13層に近いが、黒褐色土を雲状に含む。
 16層: 黄褐色土層。ロームを主に、黒褐色土を少量含む大ブロック。
 17層: 褐色土層。15層に近いが、黒褐色土が少ない。
 18層: 褐色土層。17層に近いが、ロームが多い。
 19層: 黄褐色土層。18層に近いが、さらにロームが多い。
 20層: 黄褐色土層。19層に近いが、さらにロームが多く、ローム粒、20~60mm大のロームブロックがまとまる。
 21層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を極微量含む。

第55図 8号方形周溝墓断面図(3)



第56図 8号方形周溝墓出土遺物

北隅の段差の上がり端では、深さが10cm前後しかない。いずれの周溝も溝壁や溝底に不規則な凹凸が認められる。廃絶、埋没過程において、溝壁などの崩落、土崩を繰り返したかの感を受ける。

西隅付近では、土坑状の掘り込みを検出した。周溝内土坑の一種としてよいであろう。土坑の平面形は不整な楕円形で、長軸が周溝とほぼ平行し、坑壁が周溝内外壁と密接するように掘り込まれている。長軸長は、212cm、短軸長は、148cm、長軸方位の一方は、 $N-48^{\circ}-E$ である。断面形は、船底形と見ることができようか、溝壁、溝底ともに全体が丸みをもっている。中央での深さは、27cmである。覆土は、暗褐色土、褐色土の3層に分けられた（第54・55図：E-E'断面）。土層断面による限り、上位の覆土ととくに大きな違いは見られず、方台部側からの褐色土の流入と内外からの暗褐色土の流入という周溝全体の一連の堆積過程の中で埋没した土坑と見てよいと思われる。北西溝では、この周溝内土坑のすぐ脇にも彎入するように掘りくぼめられた部分が見られた。

第7表 8号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器種	量法 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口径 (11.0) 底径 6.5 器高 15.2	脚台部は直線的に開き端部を折り返す。体部は上半部に最大径を持ち、口縁部はS字状口縁である。	外面-体部~脚上半部ハケメ、部分的にケズリ痕が露出している。内面-ヘラナデ。	角閃石・石英・チャート 内-明赤褐色 外-橙色	約1/2残存
2	鉢	口径 9.2 底径 3.9 器高 4.5	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾して開く。	外面-口縁部ミガキ、体部ヘラケズリ。内面-ミガキ。底面指ナデ。	チャート・砂粒 内外-橙色	完形
3	鉢	口径 11.9 底径 2.5 器高 8.0	底部は平底気味の丸底で、体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直線的に開く。	外面-口縁部上位ナデ、口縁部中位~体部ヘラケズリ。内面-口縁部ハケメ、体部ナデ。	角閃石・石英・チャート 内外-橙色	ほぼ完形
4	鉢	口径 11.2 底径 4.0 器高 9.5	底部は平底で、体部は膨らみを持つ。口縁部は外傾して直線的に開く。	外面-口縁部ヨコナデ、一部ハケメが残る細線がヨコに走る。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	角閃石・チャート 砂粒 内外-橙色	ほぼ完形
5	壺	口径 21.2 底径 7.5 器高 26.8	底部は平底で、体部は膨らみを持ち、最大径は下半部にある。口縁部は有段口縁で外反して開く。	外面-口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部ナデ。内面-口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ。	角閃石・砂粒 内-にぶい黄褐色 外-橙色	3/4以上残存
6	壺	口径 - 底径 - 器高 -	平底で、体部中位に最大径を持ち、口縁部は外傾して開く。	外面-口縁部から体上半部縦方向のミガキ。下半部横方向の幅広のミガキ。内面-口縁部縦方向のミガキ。	精良、微砂粒 内-にぶい黄褐色 外-明褐色	ほぼ完形
7	壺	口径 (15.8) 底径 8.9 器高 27.9	底部は平底で木葉痕が付く。体部は膨らみを持ち、最大径は下半部にある。口縁部は外反して開く。	外面-口縁部ハケメ、体部ミガキ。内面-口縁部ミガキ。	角閃石、チャート 内-灰黄色 外-にぶい黄褐色	3/4以上残存 内面磨耗
8	高坏	口径 22.0 底径 12.9 器高 15.1	坏部は僅かに内彎しながら緩やかに開く。脚部は細めの基部から「ハ」の字に開き、上下2段の円孔が三方に開く。	外面-坏部~脚部ミガキ。内面-坏部ミガキ、脚部ヘラナデ。	角閃石・石英 内-橙色 外-明赤褐色	口縁部一部欠損

北隅には段差が設けられ、また、南東溝の南隅近くも段差をもち、階段状に掘り込まれている。南西溝では、北西端近くの内外壁に接する2箇所にも不整形の掘り込みが見られ、北西溝と同様に方台部側が溝状に深くなっている。2箇所の掘り込みは、土層断面からも(第54図: G-G'断面)、周溝とは独立した掘り込みと見るのは難しい。溝底は、IV層とした黄褐色ハードローム層中である。

周溝の覆土で主になるのは、やはりかなり黒みの強い暗褐色土であり、黒褐色土層が上層に、他の多くは暗褐色土層が占め、溝底近くになるに従いロームを多く含む褐色土や黄褐色土からなる土層が多くなる傾向を見て取ることができる(第51~53図: A-A'断面北東溝、第51・53図: C-C'断面、第54・55図: F-F'断面)。南西溝は、この種の堆積状態とはやや異なり、特徴的な上層の黒褐色土層が不明瞭であったり(同上: A-A'断面南西溝)、黒褐色土層が見られず、ロームを多く含む褐色土層、黄褐色土層が全体的に卓越するようである(第54・55図: G-G'断面)。

西隅近くの陸橋部両側の周溝内から、かなりの数の完形土器が出土している(第54・56図)。南西溝では、第56図6の大型直口壺が溝底が深くなる部分の斜面で10~15cm浮いて横転した状態で出土している(第54・55図: G-G'断面)。すぐ脇の北側の土層からは2の小型鉢が、また北西脇からは4の鉢と8の高坏が、溝底から10~15cm浮いた覆土中層~下層から出土している。いずれも溝底に掘り込まれた窪みのへりや斜面から出土しているように見えるが、出土層位からすれば、窪みの埋没後に周溝内に移動した遺物と判断できる。陸橋部脇では、磨石、砥石(第135図130、第136図133)が出土している。

陸橋部をはさんだ南西溝北西端から西隅、北西溝南西半では、7の壺底部が確認面直下から、3の直口の鉢がやはり同層準の黒褐色土中から出土している。5の二重口縁壺は、北西溝南西端の周溝内土坑と重なるように破片がまとまって出土しているが、頸部から上は逆位で確認面直下から、他の破片も土坑覆土と周溝覆土のほぼ境目から上位にかけての高さから出土している(第54図)。層位的には、やはり土坑が埋まり切った後に周溝内に転落したり、放置された遺物と見られる。

本遺構の時期は、出土遺物および覆土から見て、古墳時代前期後葉である。

9号方形周溝墓（第57～60図、第8表、図版17・33）

丘陵先端部の南東麓斜面に位置する。北西から南東に向かい傾斜する斜面に、北西溝が平行する形で造られており、方台部中央の標高は、68.9m前後である。北側に近接する8号方形周溝墓からは、50号土坑をはさみ5.21mの距離を置いて設けられている。

この一帯は、中世以降の土坑が集中しており、また耕作などにより土壌の攪拌、流失が進んでいるため、残存状態が著しく悪い。南隅から南東溝にかけてや西隅なども、本来周溝が巡っていた可能性もあるかと思われるが、ほとんど痕跡的である。ただし、方形周溝墓の覆土は、黒みの強い特徴的な土であり、他の遺構との識別は、それほど困難ではなかった。北東溝の南東端を54号土坑に、南西溝の中央を51号土坑に、同南東端を52号土坑によって壊されている。方台部南西寄り中央の主体部があってもよいような位置には、後代の53号土坑が掘り込まれている。当初主体部の可能性も考慮したが、覆土の違いは明瞭であった。ちなみに53号土坑は、覆土からカワラケ片が出土しており、中世以降の土坑である。

本遺構の確認面は、暗褐色土が微妙に混じる漸移層のⅢa層、ないしは純層に近いソフトローム層であるⅢb層上面である。

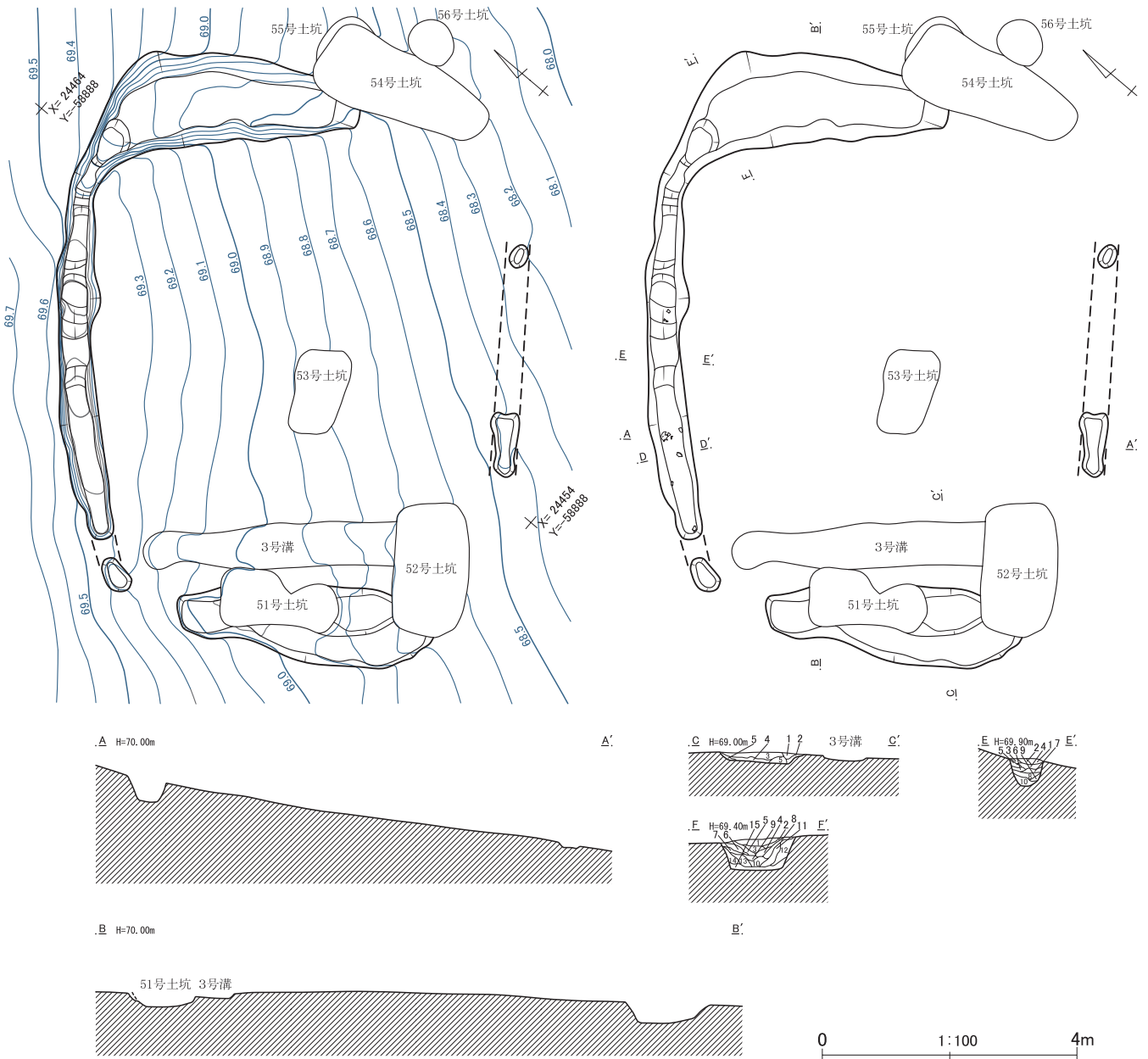
全体の平面形は、かなり不整な長方形に近い形態に見える。ただし、方台部の北隅は鈍角で、南隅も南東溝の痕跡から復原すると開きが大きくなることからすれば、東西方向に対称軸をもつ扇形のような形態になるのかもしれない。規模は、北東－南西方向の全長以外いずれも推定値になるが、北西－南東方向の中軸線上の外縁で7.36m前後、方台部長6.25m前後、北西－南東方向の同じく外縁で9.14m、方台部長は、7.12m前後になる。北東－南西方向での中軸線方位の一方は、N-51°-Wである。

方台部側の溝壁は、比較的直線的であるが、とくに北東・南西溝の外縁は大きく掘り広げられている。西隅は、小さな窪みを介して繋がり、南東溝は、周溝覆土と同じ土が埋積した2つの土坑あるいはピットのような窪みが辛うじて残るのみである。ただし、遺構検出時には、南東溝は、黒みの強い覆土が、図示した以上につながっているようにも見えた。周溝幅は、北東溝の幅広の部分で152cm、南西溝の中央南東寄り120cm、北西溝で50cmである。

北東・南西溝の溝底は細かな凹凸はあるものの、おおむね平坦であるが、北西溝は、段差や掘りくぼめられた部分があり、高低が著しい。周溝の断面形も、周溝毎、あるいは周溝の部分によってもやや異なる。北東溝の断面形は、箱薬研に近く、南西溝は浅く皿状を呈する。北西溝の断面形は、箱薬研、もしくは溝壁がより急峻なU字状である。周溝中央での深さは、北東溝で30cm、南西溝で17cm、北西溝で42cmである。北西溝の中央2箇所と北隅近くの3箇所は、土坑状、あるいはピット状に掘りくぼめられている。それらの部分の溝壁上端からの深さは、北隅の窪みから50cm、52cm、65cmである。南東溝の痕跡の深さは、深いところでも7、8cmしかない。溝底は、総じてⅣ層とした黄褐色ハードローム層中であるが、北東溝の一部、および北西溝の掘り込みの深い部分では、暗褐色みを帯び、Ⅴ層中、あるいはⅥ層上部にまで達している。

周溝の覆土は黒褐色土層が上層や中層に見られる断面（第57・58図：C-C'、E-E'、F-F'断面）と、黒褐色土層が見られない断面（第59図：D-D'断面）に分けられる。全体に暗褐色土が主となり、その暗褐色土の黒みが強いことが特徴になるようである。

北西溝南西半の覆土中より口縁部を大きく欠いた二重口縁壺（第60図1）が出土している。覆土上



9号方形周溝墓

〈C—C' 断面〉

- 1層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロック、黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、同大の黒褐色土ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 3層: 黒褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含む。

- 4層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、同大の黒褐色土ブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 5層: 褐色土層。5～20mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

〈E—E' 断面①〉

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、さらに炭化物粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒、5～10mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。

- 3層: 暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を微量含む。
- 4層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロック、黒褐色土小ブロックを少量含む。

第57図 9号方形周溝墓等高線・平面・断面図

浅見山 I 遺跡

〈E-E' 断面②〉

- 5層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。
- 6層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を微量含む。
- 7層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。

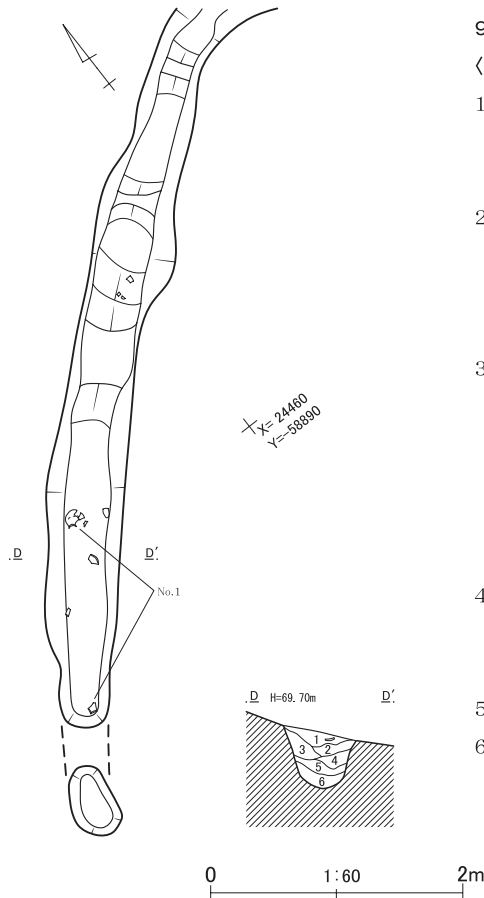
- 8層: 黒褐色土層。5~20mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 9層: 暗褐色土層。5mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 10層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。

〈F-F' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に、ローム粒を少量、白色粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、暗褐色土が多く、ローム粒も多い。
- 3層: 黒褐色土層。ローム粒を微量、暗褐色を斑状に含む。黒褐色土の量は、3層>12層≧5層>1層。
- 4層: 暗褐色土層。2層に近いが、暗褐色土が多い。
- 5層: 暗褐色土層。1層に近いが、黒褐色土が多い。
- 6層: 暗褐色土層。5層に近いが、暗褐色土が多く明るい。
- 7層: 暗褐色土層。6層に近いが、暗褐色土が多く明るい。
- 8層: 暗褐色土層。4層に近いが、ロームが多い。5mm大のローム小ブロックを微量含む。以上、1~8層は、全体にしまり弱いが、やや粘性があり、しっとりしている。
- 9層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が若干少なく、明るい。

- 10層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の斑状の混合土を主に、ローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量含む。
- 11層: 暗褐色土層。8層に近いが、黒褐色土が多い。斑状、迷彩状に暗褐色土、黒褐色土を含み、ローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量含む。
- 12層: 褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームが斑状、迷彩状に混合。
- 13層: 暗褐色土層。10層に近いが、暗褐色土が多く明るい。
- 14層: 暗褐色土層。13層に近いが、暗褐色土が多い。壁際にローム粒、5~40mm大のロームブロックが多い。
- 15層: 黄褐色土層。ローム粒、5~30mm大のロームブロックを主に、暗褐色土、黒褐色土を斑状に含む。

第58図 9号方形周溝墓断面図

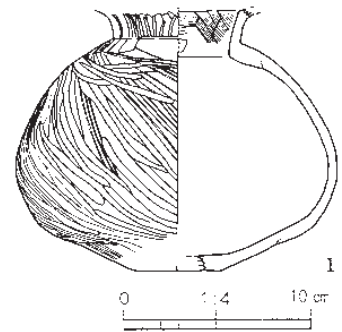


第59図 9号方形周溝墓平面・断面図

9号方形周溝墓土層注記

〈D-D' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を含む。しまりは弱いが、粘性はややある。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、5~8mm大の雲状の黒褐色土ブロックを含む。しまりは弱い、粘性はややある。
- 3層: 暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に60~70mm大のロームブロック(ローム密集部)を2つ含む。しまりは弱いが、粘性はややある。
- 4層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土若干多い。しまりは弱いが、粘性はややある。
- 5層: 暗褐色土層。2層と同じ。
- 6層: 暗褐色土層。3層に近いが、黒褐色土が若干少ない。北壁際にロームの密集部あり。しまりは弱いが、粘性はややある。



第60図 9号方形周溝墓出土遺物

層を中心に破片が分散して出土したものである(第59図)。外面は、比較的に丁寧にミガキが施されているが、下調整の粗いハケ目が全体に露出している。赤みの強い色調のやや軟質の土器である。

本遺構の時期は、出土遺物および覆土などから見て、古墳時代前期中葉~後葉と考えられる。

第 8 表 9 号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 底径 器高 - (4.7) -	底部は平底で、体部は膨らみを持ち、最大径は下半部にある。口縁部は有段口縁である。	外面-頸部ミガキ、体部ハケメ調整後、ミガキ。全体にハケメがかなり残る。 内面-頸部ハケメ。	角閃石 内-暗赤褐色 外-明赤褐色	1/2 以下残存

10号方形周溝墓（第61～63図、第9表、図版18・19・35）

丘陵先端の南東麓、北西から南東に向かって傾斜する斜面に位置する。等高線が方台部の対角線上を走るようにして設けられており、方台部中央の標高は、68.2m前後である。北西側で近接する8号方形周溝墓とは、4.3m前後の距離を置き、最も近接する南西側の9号方形周溝墓からは、1.44mしか離れていない。

方台部の中央、西寄りの部分は、60・61号土坑により壊されている。また、本遺構の東半は、方台部西半を鉤の手に残し、旧陸軍の施設に伴うかと思われる造成工事により、大きく失われている。この造成工事は、丘陵先端を斜めに段切りし、礫層近くまで掘り下げ、複数の方形の平地を造作した大掛かりなものであり、本遺構の北西溝もその際に北東半を斜めに削ぎ落とされ、北隅近くを切断されている。南西溝の先端も同様の造成により断ち切られている。確認面は、Ⅲb層、あるいはいわゆるハードローム層であるⅣ層上面である。

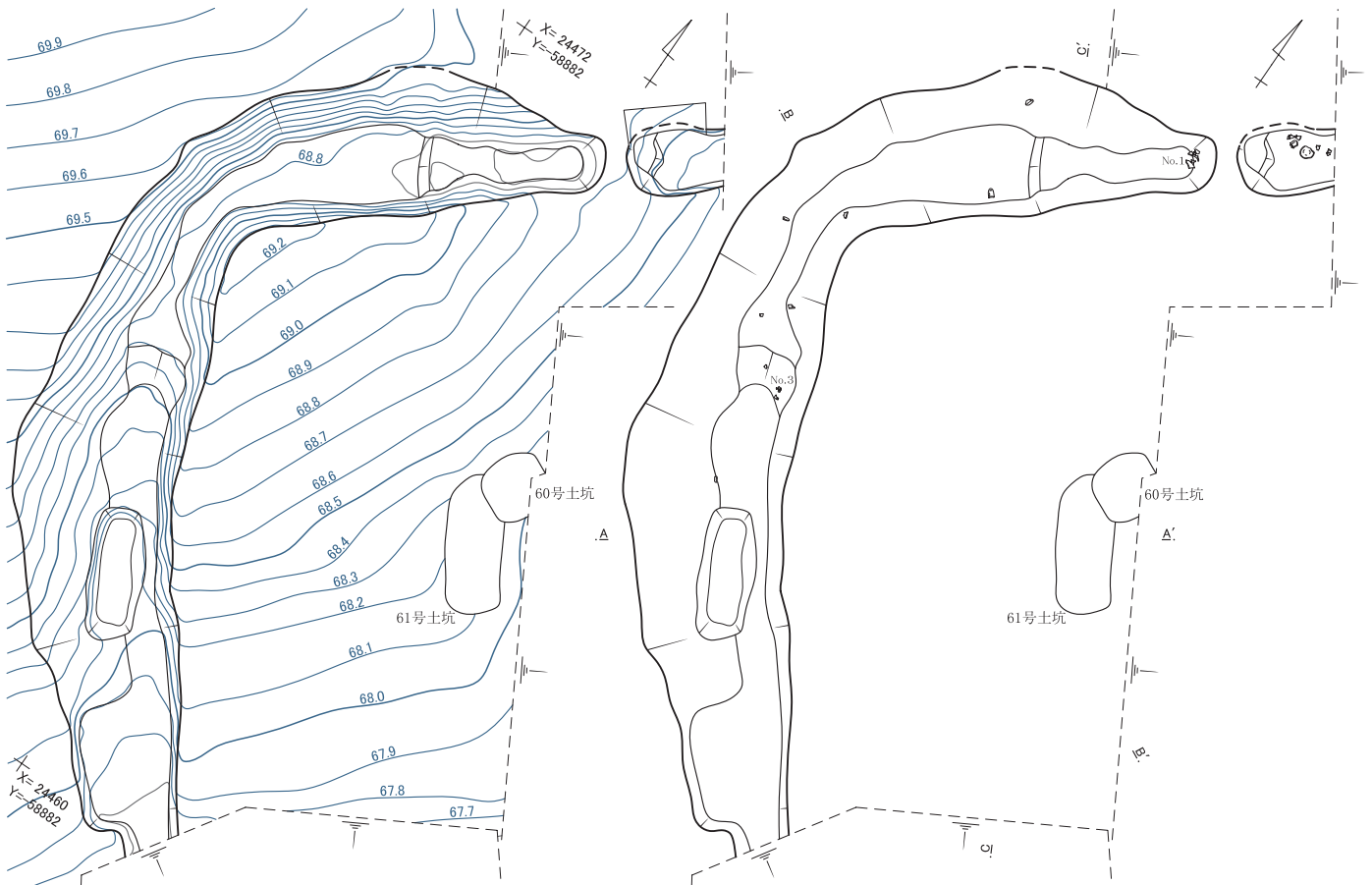
北西・南西溝しか残っていないため全形は不明である。北西溝の端近くには、陸橋部が掘り残されている。南西溝の南東端も極端に細くなり、浅くなることからすれば、南隅あたりにも陸橋部が付されていた可能性が高い。西隅が明瞭に鈍角になることから見て、3・8号方形周溝墓のように方台部が菱形や扇形に近い形態になるか、あるいは6・7号方形周溝墓のように台形様になるのか、どちらかであろう。

規模は、いずれも現存長になるが、方台部の北西縁で6.55m、南西縁で8.00mを測る。北西溝の中心線の走向は、N-52°-Eである。周溝幅が3・6・8号方形周溝墓ほどないことからすれば、切断された部分からほど遠からぬ位置で周溝が屈曲し、おおよそ7号方形周溝墓くらいの規模の方形周溝墓になりそうである。仮に方台部の平面形、規模ともに7号方形周溝墓に類似していたとすると、北西-南西方向での全長は、13m前後、中軸線の方位もほぼ近似した方形周溝墓として推定復原することができる。

方台部の辺縁はかなり直線的である一方、周溝外縁は丸みをもち弧状となる。この特徴に加え、周溝の途中に陸橋部をもつ点では、8号方形周溝墓に類似している。中央の幅広な部分での周溝幅は、北西溝で190cm、南西溝で214cmである。

北西・南西溝ともに、西隅を挟んだ同じような位置に段差が見られる他、溝底は比較的平坦である。南西溝の溝底は、斜面に沿ってなだらかに傾斜している。周溝の断面形は、外壁側が長く伸びやや傾斜のゆるい箱葉研である。周溝中央での深さは、北西溝で70cm、南西溝で58cmであるが、周溝外壁上端と溝底との比高差は、北西溝中央で95cmにもなる。北西溝の陸橋部北東側での周溝の深さは16cm、南西溝の南東端での深さは14cmである。溝底の大半は、暗褐色ロームであるⅥ層の上面であり、浅い部分は、Ⅳ、Ⅴ層中である。

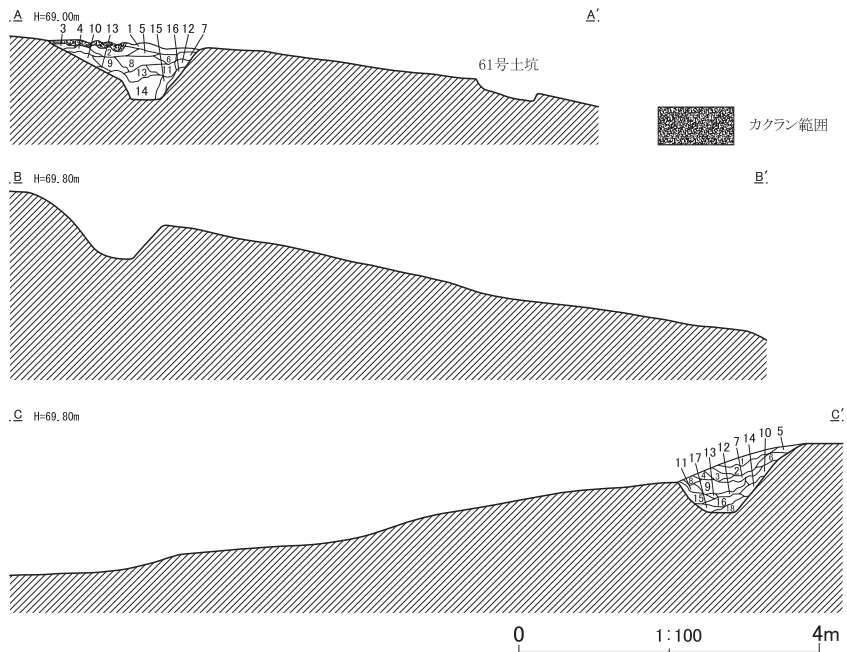
南西溝の中央南東寄り、溝底に土坑を1基検出した。周溝内土坑と考えられる。土坑上端での平面形は、隅丸の長方形近く、周溝の走向に沿う長軸の長さは、177cm、短軸長は、75cm、長軸方位の



10号方形周溝墓土層注記

〈A-A' 断面①〉

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックを含む。粒子が粗い。
- 2層: 黒褐色土層。暗褐色土を雲状に含み、ローム粒を少量含む。
- 3層: 暗褐色土層。4層に近いが、黒褐色土が少ない。
- 4層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が少ない。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、黒褐色土が若干多い。
- 6層: 暗褐色土層。4層土を主に、5～10mm大のロームブロックが斑点状、雲状にまもりながら混入する。
- 7層: 暗褐色土層。5層に近いが、暗褐色土が多い。
- 8層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の斑状の混合土を主に、ローム粒を少量含み、10mm大のロームブロックを微量含む。
- 9層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が若干少ない。
- 10層: 暗褐色土層。9層に近いが、黒褐色土が少なく、30mm大のロームブロックを中央やや右寄りに極微量含む。



- 11層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ローム(輪郭不明瞭な雲状)が斑状に混合する。
- 12層: 暗褐色土層。11層に近いが、ロームがはるかに多い。中央に黒褐色土が集中する。
- 13層: 暗褐色土層。11層に近いが、ロームが多い。20～40mm大のロームがまとまり、迷彩のよう。

第61図 10号方形周溝墓等高線・平面・断面図

〈A-A' 断面②〉

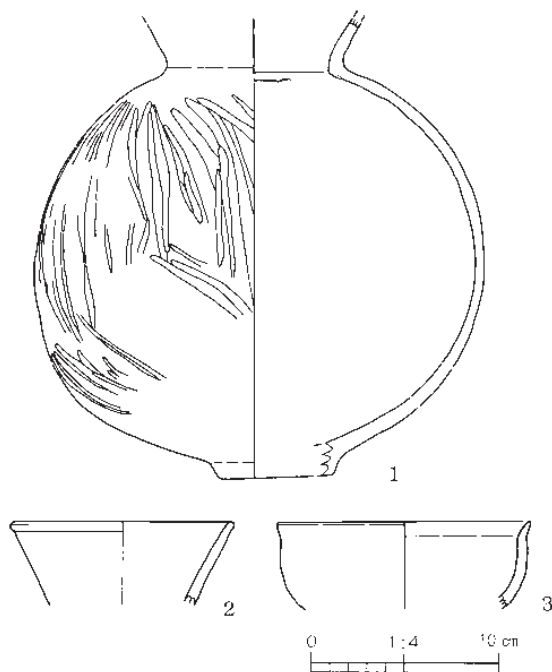
- 14層: 褐色土層。くすんだ暗褐色に近いロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。14~16層は、周溝内土坑覆土。
15層: 褐色土層。14層に近いが、黒褐色土が多い。

〈C-C' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。所々5~60mm大の雲状に濃集する暗褐色土と黒褐色土小ブロックの混合土を主に、ローム粒を含む。焼土あるいは土器粒かと思われる橙色粒、及び白色粒を微量含む。しまっている。
2層: 暗褐色土層。1層に比し、はるかに暗褐色土が多く、黒褐色土が少ない。
3層: 淡暗褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。下半には、とくに暗褐色土が多い。
4層: 暗褐色土層。2層に近いが、ロームがわずかに多い。10mm大の黄色ロームブロックを含む。ロームの量は、3層>4層>2層。
5層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が若干少ない。
6層: 淡暗褐色土層。2層に近いが、ロームがかなり多い。
7層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が多い。
8層: 暗褐色土層。1層に近いが、斑点状の黒褐色土が多く、暗褐色土が少ない。
9層: 暗褐色土層。8層に近いが、黒褐色土が多い。

- 16層: 褐色土層。14層に近いが、やや黒褐色土が多い。黒褐色土の量は、15層>16層≧14層。
10層: 暗褐色土層。9層に近いが、黒褐色土が少ない。8層より黒褐色土が多く、斑点著しい。
11層: 暗褐色土層。8層に近いが、斑点状のロームが多い。
12層: 暗褐色土層。9層に近いが、黒褐色土が少ない。8層より黒褐色土が多く、よく混合している。
13層: 暗褐色土層。11層に近いが、斑状にロームを含む。
14層: 暗褐色土層。暗褐色土、ロームを主に、黒褐色土を均一に含む。
15層: 褐色土層。暗褐色土、黒褐色土とロームが同量、斑状に混合する。
16層: 暗褐色土層。暗褐色土、ロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。
17層: 褐色土層。雲状の黄褐色ロームを主に、暗褐色土、黒褐色土が斑状に混合する。
18層: 褐色土層。17層に近いが、雲状の黒褐色土が多い。

第62図 10号方形周溝墓断面図



第63図 10号方形周溝墓出土遺物

一方向は、N-27°-W、中央部の溝底からの深さは29cmである。覆土は、VI層土と思われるくすんだ暗褐色に近いシルト質ロームを主とする褐色土であり、上位の周溝覆土とは截然と区別することができた(第61・62図: A-A'断面)。溝底を掘りくぼめ、掘り上げたVI層土を多く用いて埋められた土坑である。

周溝覆土は、全体に黒みの強い暗褐色土を主とし、北西溝では、特徴的な黒褐色土が見られず、南西溝では、上層に黒褐色土、中層を暗褐色土が占める堆積状態が見られた(第61・62図: A-A'断面、C-C'断面)。

第63図1の壺は、北西溝の陸橋部を挟んだ周溝内から散らばって出土した破片が接合したものである。他の土器(第63図2・3)は、周溝覆土上層出土の磨耗の著しい細片である。

本遺構の時期は、出土遺物および覆土などから見て、古墳時代前期後葉と考えられる。

第9表 10号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 - 底径 - 器高 24.4	平底。体部中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。	外面-体部ミガキ。内面-磨耗により、調整不明。	角閃石、チャート 内-にぶい黄色 外-橙色	3/5 残存
2	壺	口径 (10.8) 底径 - 器高 -	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	外面-口縁部ヨコナデ。内面-磨耗により、調整不明。	角閃石・白色粒 内-にぶい黄褐色 外-橙色	口縁部片
3	坏	口径 (13.4) 底径 - 器高 -	体部は内彎して立ち上がり、口縁部で短く外傾する。	磨耗により、調整不明。	角閃石 内外-橙色	口縁部片 内外面磨耗

11号方形周溝墓 (第64・65図、図版19・35)

丘陵先端部の南東麓に位置する遺構である。西から東へ、北西から南東へと傾斜する斜面に占地し、北西溝が等高線にほぼ平行する形で造られている。残存する方台部中央の標高は、66.7m前後である。東側の10号方形周溝墓の残存部分とは、12m前後離れており、この間は段切り造成により大きく削られ、遺構が残存する余地はない。確認面は、Ⅲb層上面である。上記造成による攪乱は、Ⅲb層に止まらず、Ⅳ層以下にも及んでおり、確認面は様々な攪乱により乱されていたが、黒みの強い特徴的な覆土のため、本遺構を識別することができた。

残存する北西溝、北東溝は鉤の手をなし、北西溝の末端のわずかな彎曲が、西隅の痕跡と見られる。

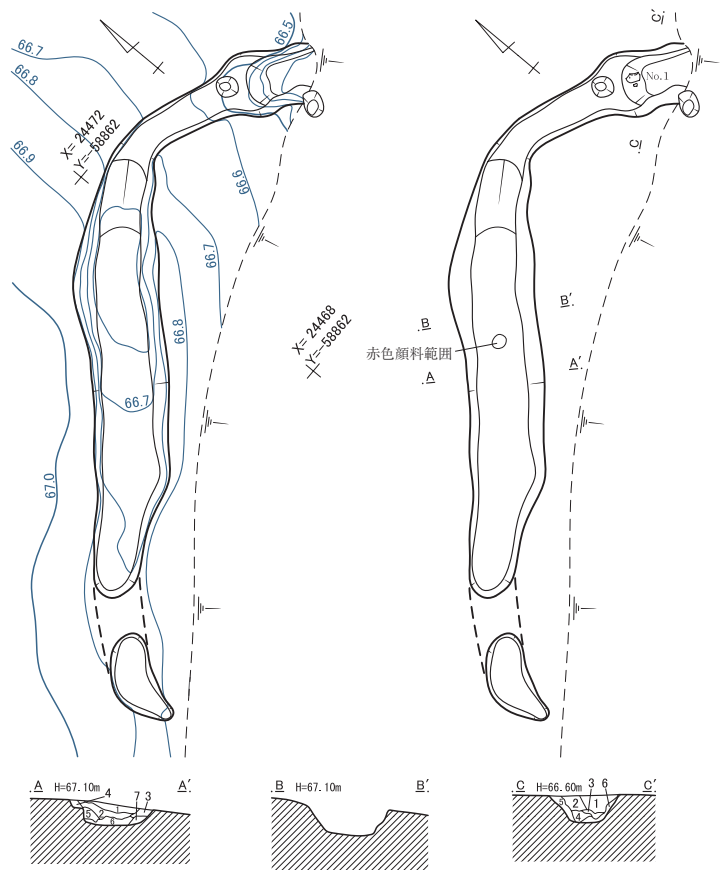
11号方形周溝墓土層注記

〈A-A' 断面〉

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒を少量、5mm大のローム小ブロックを微量含む。白色粒(軽石?)を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の混合土を主に、ローム粒、ロームブロック(ブロックというよりローム粒の濃集塊)を含む。3種の土がほぼ同量。
- 3層: 暗褐色土層。2層に近いが、ロームが多い。
- 4層: 黒褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が多い。
- 5層: 暗褐色土層。3層に近いが、さらにロームが多い。
- 6層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土、黒褐色土を斑状に含む。
- 7層: 褐色土層。6層に近いが、暗褐色土、あるいはくすんだ色調のロームが多い。

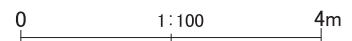
〈C-C' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の比較的良好に混ざった混合土を主に、ローム粒、5~8mm大のロームブロックを少量、白色粘土のブロックを数点含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。3、4mm大のローム小ブロックを含む。
- 3層: 暗褐色土層。2層より黒褐色土が若干多い土を主に、30~40mm大の白色粘土ブロックを2点含む。



- 4層: 褐色土層。2層土を主に、黒褐色土、ローム粒、ロームブロック、5~30mm大の粘土ブロックを含む。
- 5層: 褐色土層。黒褐色土、暗褐色土、ロームの斑状の混合土。
- 6層: 黄褐色土層。ロームを主とし、暗褐色土を微量含む。

第64図 11号方形周溝墓等高線・平面・断面図



北東半は周溝の残存状態も悪くないが、南西半は次第に掘り込みも浅くなり、末端では特徴的な黒みがかかった覆土の微かな帯状の跡となり途切れる。形態的にも、方台部の辺縁が直線的な形状を保つのは、北東半のみである。規模は、方台部西隅から南西溝の端までの長さは、7.3m、方台部北東辺の現存長は、2.09mである。南西溝末端の近辺に西隅があるとして全形を復原すれば、北東-南西方向での全長が10m余の方形周溝墓と推定できる。9号方形周溝墓を少し大きくしたような規模になるのか。北西溝を縦断する中心線の方位は、北向きでN-50°-Eである。

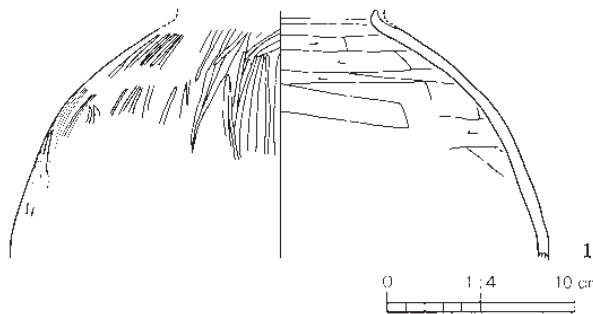
周溝幅は、北西溝の中央で102cm、北東溝末端で80cmである。周溝の断面形は、北東半では、箱葉研に近いが、南西半では、鍋底状、皿状である。深さは、北東溝末端で36cm、北西溝の最も深い部分で38cm、西隅近くでは10cm前後である。溝底は、標準土層IV層としたハードローム層中であり、ほぼ平坦であるが、北隅附近に段差が認められる。

周溝覆土は、2箇所の土層断面で6、あるいは7層に分層できた。南西溝の土層断面（第64図：A-A'断面）では、上層に黒褐色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土、あるいはロームを主とする黄褐色土が堆積しており、北東溝の土層断面（第64図：C-C'断面）では、丁度A-A'断面の堆積土から上層の黒褐色土層を除いたような堆積状態を観察することができた。C-C'断面は、上部が削平され、A-A'断面の黒褐色土層より下の土層が残った状態である、とする見方は、かえってC-C'断面の方が掘り込みも深く残りがよいため、成り立ち難い。あるいは黒褐色土自体の成因に、

答えを求めることができるのかもしれない。

出土遺物は、壺の大形片（第65図1）以外、微細な土器片がわずかに出土したのみである。1の壺は、北東溝の溝底よりやや浮いた位置で出土した。また、南西溝のほぼ中央の下層で、覆土中に濃集する赤色顔料を検出し、採取している（第64図および本書第VI章参照）。

本遺構の時期は、覆土および遺物から見て、古墳時代前期後葉と考えられる。



第65図 11号方形周溝墓出土遺物

第10表 11号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 - 底径 - 器高 -	体部は膨らみを持つ。	外面-体部上半部ミガキ。内面-胴部上半はヨコのケズリ、以下ケズリ、ナデ。	角閃石・砂粒 内外-にぶい橙色	体部 1/4 残存

12号方形周溝墓（第66～68図、第11表、図版20・35）

丘陵先端部南東麓の末端に位置し、本遺跡の方形周溝墓群の中、最東端にある遺構である。この一帯は、旧陸軍によるとされる造成工事や種々の攪乱が深く及んでおり、また、調査範囲も限られたため、調査できたのは、北西・南西溝および方台部の北東側の一角である。とくに北西溝は、段切り造成による土取りが溝底近くにまで達しており、残存状態が悪い。等高線が方台部の対角線上を走るように造られているらしく、方台部の調査範囲内での中央の標高は、66.4m前後である。西側の11号方形周溝墓北西溝と本遺構南西溝とは、1mほどの間隔を空け併走する。確認面は、Ⅲb層上面、部分的にⅣ層以下である。

12号方形周溝墓土層注記

〈A-A'-A'' 断面〉

- 1層：現在の表土層、及び埋め土。As-Aを多量に含む。
 2層：暗褐色土層。やや明るい色調の暗褐色土を主に、ローム粒、5～10mm大のロームブロックを含む。黒褐色土粒、5mm大の黒褐色土小ブロックが点在する。かなりしまっている。
 3層：暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土がやや多く、5～20mm大の黒みの強い暗褐色土ブロックを斑状に含む。

- 4層：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。20mm大の黒褐色土ブロックを極微量含む。
 5層：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に含み、10mm大の黒褐色土ブロックを含む。12層よりロームが多い。
 6層：黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。基本土層Ⅲ～Ⅳ層漸移層。

〈C-C' 断面〉

- 1層：黒褐色土層。ローム粒、5～50mm大のロームブロックを少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
 2層：暗褐色土層。ローム粒を多量に、5～10mm大のロームブロック、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。

- 3層：暗褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックをかなり含み、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
 4層：褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

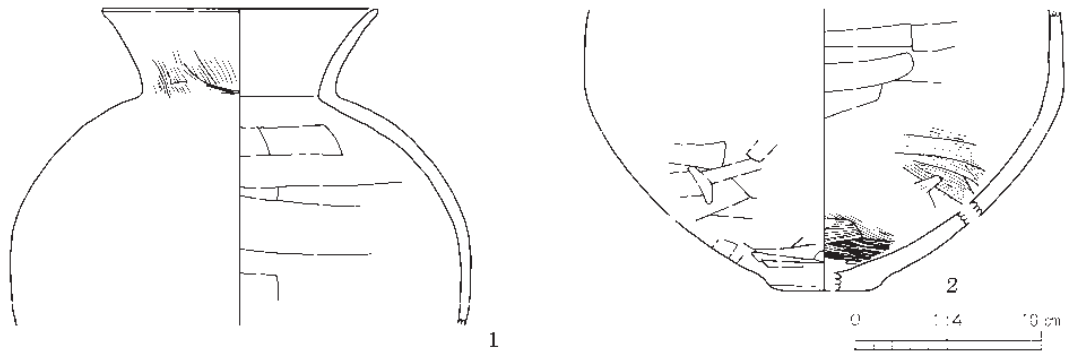
〈E-E' 断面〉

- 1層：黒褐色土層。黒褐色土を主に（純黒褐色土ではなく、暗褐色土との混合土）、ローム粒を含む。
 2層：暗褐色土層。1層に近いが、斑点状の暗褐色土が多く、色調暗く、ローム粒が多い。
 3層：黒褐色土層。1層に近いが、黒褐色土が多い。部分的に黒褐色土の混入量にむらがある。
 4層：暗褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。
 5層：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。局所的に黒褐色土を斑状に含む。
 6層：暗褐色土層。3層に近いが、黒褐色土が微妙に少ない。
 7層：暗褐色土層。6層に近いが、ロームが多く、黒褐色土の大ブロックを含む。
 8層：暗褐色土層。7層に近いが、ロームがはるかに多い。斑状にロームが混入する。

- 9層：暗褐色土層。8層に近いが、黒褐色土が多い。黒褐色土の量は、9層>7層。
 10層：暗褐色土層。6層に近いが、5～20mm大の雲状のロームを少量含む。
 11層：褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に、斑状にロームを含む。
 12層：暗褐色土層。黒褐色土とロームの斑状の混合土。上半は暗褐色土、斑状の黒褐色土、ローム。
 13層：暗褐色土層。黒褐色土とロームが斑状に混合する。
 14層：暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の混合土を主に、斑状にロームを含む。
 15層：暗褐色土層。上半は、上から暗褐色土、黒褐色土。黒褐色土の下面は不規則な波状をなす。下半はロームを主とする。

第67図 12号方形周溝墓断面図

平面形については、Ⅱ次調査の際に検出した「1号遺構」との関係が問題になる。Ⅱ次調査の「1号遺構」に関しては、古墳周溝や本遺跡の方形周溝墓などに特徴的な黒褐色土を多量に含む覆土の性状から見て、弥生～古墳時代の遺構であると考えられ、また覆土に焼土などを交えず、底面から壁面にかけて緩やかな曲線を描き立ち上がり、床面と思われる硬化面も見られないことなどから、早稲田大学が試掘調査で確認した本遺構と同一遺構と考え、報告した（松本・町田 2002）。Ⅱ次調査で確認した諸事実に変更はないが、今回の調査で、残存状態が悪すぎるとは言え、「1号遺構」と連結すると推定した本遺構の周溝末端が立ち上がり、「1号遺構」と本遺構とが直接結びつかないことが判明したため、再考を要することとなった。しかし、「1号遺構」に関しては、住居跡や土坑と考える積極的な証左を欠き、また、地形の旧状を推し図り難い丘陵末端とは言え、別の方形周溝墓と考えるには、文字通りその余地がないことは明白であった。また、「1号遺構」の底面の標高値は、最深部で61.33mと、本方形周溝墓の北西溝の北東縁上端の標高値にはほぼ等しいが、北西溝の掘り込みの浅い部分まで削平され、深い部分のみ残ったと見ることもできる。あるいは、前方部の周溝が途切れる例も見られないではないため、周溝が一旦途切れるかに見えること自体は、両遺構が別の遺構であるとする決



第68図 12号方形周溝墓出土遺物

第11表 12号方形周溝墓出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 (14.5) 底径 - 器高 -	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反する。	外面-口縁上半部ナデ。下半部ハケメ。体部ナデ。内面-体部ヘラナデ。	角閃石・橙色粒 内外-橙色	口縁～体部 1/4 残存
2	壺	口径 - 底径 (5.8) 器高 -	小さな平底で、体部は膨らみを持つ。	外面-体部ヘラナデ。内面-中位ヘラナデ、下位ハケメ。	角閃石・暗赤褐色粒 内外-橙色	胴部～底部片

め手にはならないと考える。よって、両遺構を同一遺構として、以下の平面形などの記載を進める。

周溝外縁は全体に丸みをもち、波打つような曲線を描くが、方台部の2辺はかなり直線的である。北西溝の西～北西縁のあるかないかのような立ち上がりには比べ、同北東～東縁は、溝壁も明瞭で立ち上がりもしっかりしており、形態的に、北西溝の中央に陸橋部をもつ形態であることは、まず間違いない。北西溝は、大きく丸みをもって掘り広げられており、「1号遺構」と別遺構であったとしても、「B II型」(田中 1977・1984)に含まれることになる。「1号遺構」と同一の遺構であるとすれば、位置的に見て、「1号遺構」は前方部の前端を形作る周溝と見る外ない。本遺構は、前方後方墳、あるいは、いわゆる前方後方形周溝墓となる可能性が高いと判断する。

いずれも残存部分の長さになるが、北西溝の最も膨らんだ部分の外縁から南西溝の末端までの長さは、10.29m、前方部の北西辺の長さは4.18m、南西辺の長さは6.05mである。南西辺の方位は、南向きでS-57°-Eである。この方位は、前方部側から見た主軸方位に近いものであろう。残存状態のよい部分の周溝幅や深さから見て、前方部が6・8号方形周溝墓の方台部と同じくらいの規模になると推定される。仮に6号方形周溝墓を目安とし全体を推定復原すると、後方部長が13m前後、前方部長が5.8m前後、全長23.8mほどの前方部が比較的短いタイプの前方後方墳(前方後方形周溝墓)になりそうである。

周溝幅には広狭が著しい。北西溝の幅広の部分で393cm、南西溝中央で170cmである。周溝の断面形は、北西溝では皿状、船底状、南西溝では箱葉研に近い形態である。周溝中央での深さは、北西溝で15cm前後、南西溝で62cmである。南西溝の南東半は、削平されており、溝底付近の覆土がわずかに残る状態であった。

溝底は、北西から南東に向かってかなり傾斜している。IV層中に溝底のある南西溝の中央を除いて、溝底は、VI層中、あるいはVI層上面で、溝底全体に細かな凹凸が認められる。

周溝覆土は、北西溝で4、5層、南西溝で15層に分けられた(第66・67図)。北西溝の覆土は、溝底付近の覆土と思われるが、C-C'断面では、特徴的な黒褐色土が観察できた。南西溝では、上層と中層に黒褐色土が見られ、他の土層は、主に暗褐色土からなる土層である。

遺物としては、第68図1・2の壺が周溝覆土から破片となり、分散して出土しているのみである。

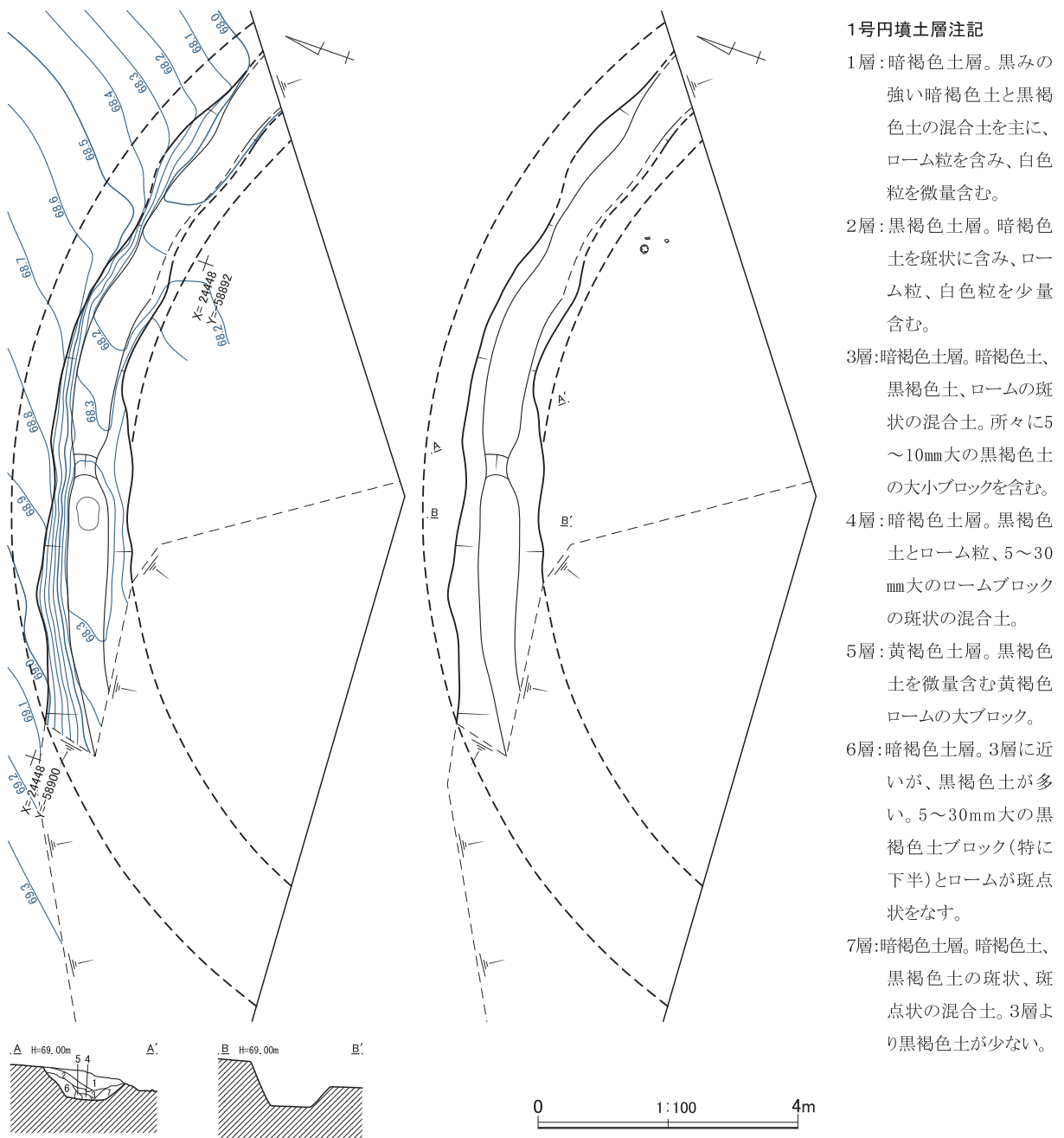
本遺構の時期は、覆土および遺物から見て、古墳時代前期後葉と考えられる。

4 円墳

1号円墳（第69・70図、第12表、図版21・35）

丘陵先端に程近い南東斜面の裾部に位置する遺構である。北西から南東にかけ傾斜する斜面が幾分緩やかになる部分に位置するらしく、墳丘側での標高は、68.2~68.3mである。

この一帯は、緩い傾斜地がそのまま谷底低地に滑り込むような地形をなしており、谷埋めの堆積物と思われる黒灰色みを帯びた暗褐色土が分布していた。試掘調査の所見に加え、この暗褐色土の薄い西半で、より黒みの強い周溝覆土がおぼろ気に見えたため、周溝を横断する2本のトレンチを設定し、トレンチ間の覆土を追いかける形で遺構を精査した。墳丘部分に関しては、坪掘り状に掘り下げ断面



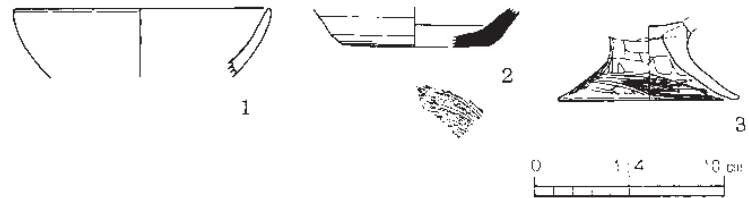
第69図 1号円墳等高線・平面・断面図

浅見山 I 遺跡

観察を行ったが、ローム層上面は不規則に乱れた不整合面をなし、その上に本遺構より後代の上記暗褐色土が堆積した模様であった。よって、墳丘部分は、本来の墳丘基底層下まですでに失われていると考えられる。周溝の残存率は、おおよそ1/7強である。確認面は、Ⅲ層中、ないしはⅣ層上面である。周溝の残存率が低いため規模の正確な復元はもとより困難であるが、試みに周溝の円弧から中心を求め、全形を復原すると、墳丘径が15.4m前後、全長が18.9m前後の円墳になりそうである。溝壁上端は、内外縁ともに波打つように屈曲する。残存部分の中央での周溝幅は100cm、西半の最も残りのよい部分で180m前後である。中央やや西寄りに段差をもつ他、溝底は比較的平坦である。周溝の断面形は箱葉研に近く、内外縁ともに溝壁の立ち上がりはしっかりしている。深さは、溝底の段差のすぐ東側で44cm、西側のやや深い部分で51cmである。

覆土は、7層に分けられた。黒みの強い暗褐色土が主となり、中層に斜面上部から流入した黒褐色土の土層が認められる。

遺物は、土師器その他の小片が大半である。第70図3の高坏脚部片は、周溝の西端近くの覆土中から出土した。2は混入した遺物であろう。



第70図 1号円墳出土遺物

本遺構の時期は、出土遺物および覆土から見て、古墳時代後期である。

第12表 1号円墳出土遺物観察表

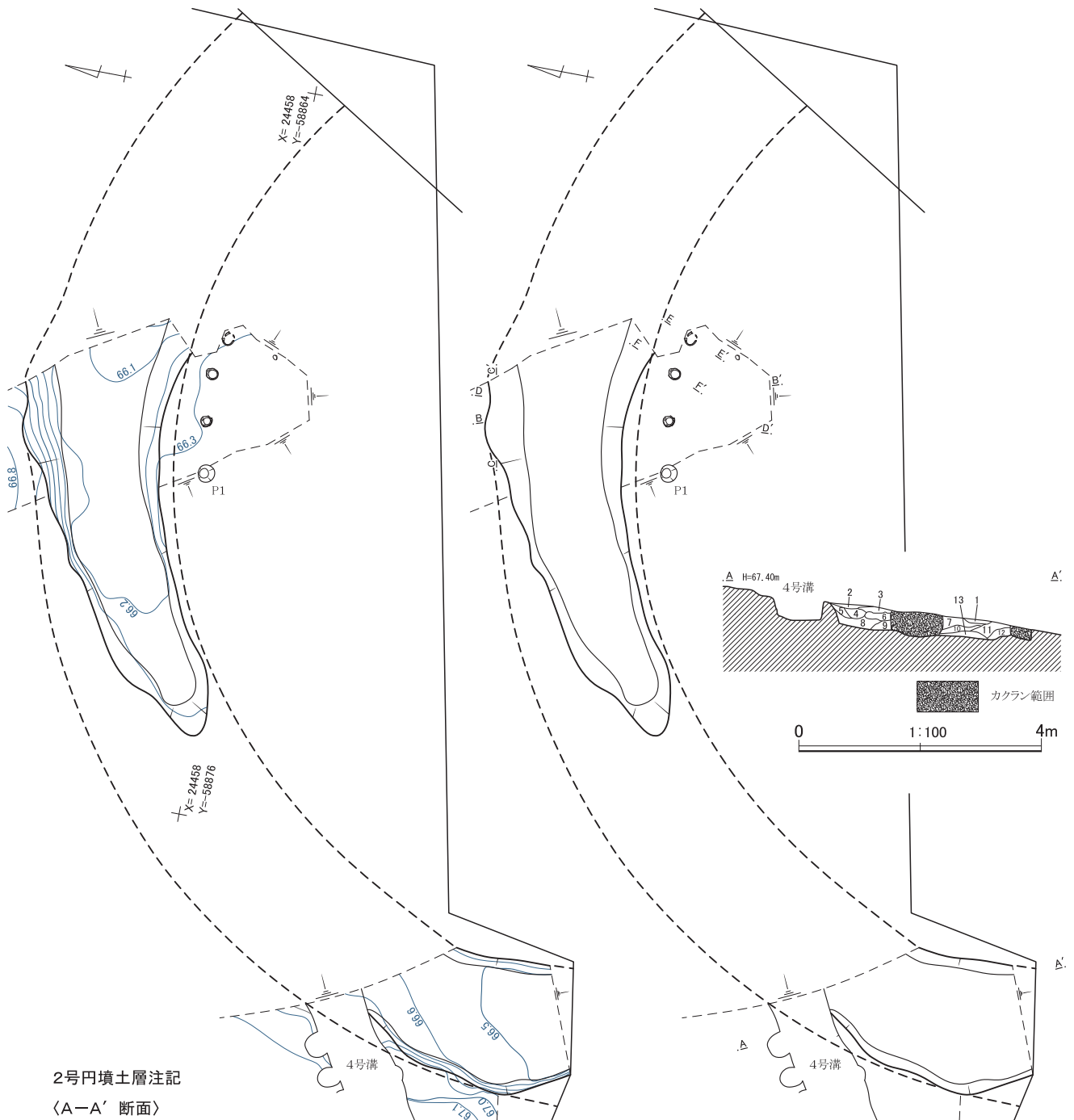
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (13.5) 底径 - 器高 -	口縁部は内彎して立ち上がる。	磨耗により、調整不明。	金雲母、微砂粒	口縁部小片 内外面磨耗
2	坏	口径 - 底径 (7.9) 器高 -	平底で、体部は外傾して開く。	外面-体部ロクロナデ、体部下端手持ちヘラ削りか。内面-ロクロナデ。底部回転糸切り。酸化焰焼成。	角閃石・微細光沢粒 内外-にぶい褐色	底部片
3	高坏	口径 - 底径 9.6 器高 -	脚部は短く「ハ」の字に開く。	外面-脚部上位ナデ、下半部ハケ目後ミガキ。内面-脚部上位ヘラナデ、下位ハケ目後ヘラナデ。	チャート・石英・角閃石 内外-明赤褐色	脚部片

2号円墳 (第71~78図、第13~15表、図版22・35~37)

丘陵先端南東斜面の裾部に位置する遺構である。裾部一帯は傾斜も緩慢で、北西から南東に向かってわずかに傾斜する平場に本遺構は立地する。残存する墳丘部分の標高は、66.3mである。

この一帯は、旧陸軍の施設建設などによる地形改変が著しく、周溝は、2つに分かれ、墳丘部分も半島状に極一部が残るのみである。ひとつながりで円弧をなす周溝が2箇所に分断された結果と見て間違いはないが、記載の便宜上、西側の周溝を西周溝、東側の周溝を東周溝と呼び分けて、以下、記載することにした。

西周溝は、両側を攪乱に切断され、北縁の一部を4号溝および攪乱に含めたさらに時期の新しい溝により壊されている。東周溝も両側を攪乱により壊されており、西端は方形に近く削り取られた造成面の底面にわずかに覆土が溝状に残る状態であった。やはり4号溝が周溝と重なり、新しい溝が墳丘部分の南側を壊している。西・東周溝合算した周溝の残存率は、おおよそ1/6強である。確認面は、ソフトロームであるⅢ層上面である。



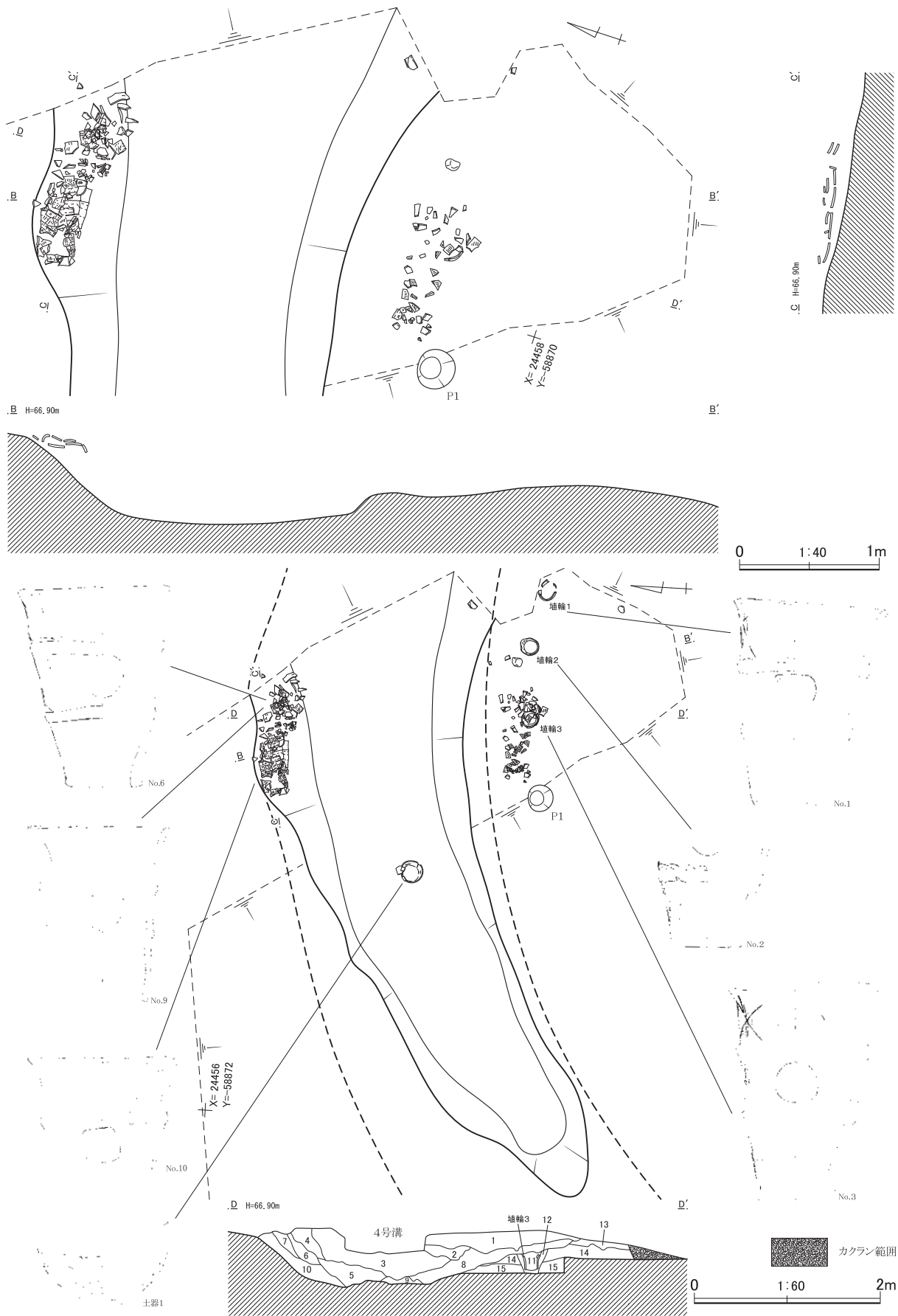
2号円墳土層注記

〈A-A' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土を主に、ローム粒、白色粒(軽石)をかなり含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒、5mm大のローム小ブロック(一部灰色シルト)を含み、白色粒を少量含む。
- 3層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が多い。
- 4層: 黒褐色土層。3層に近いが、黒褐色土がかなり多い。
- 5層: 暗褐色土層。3層に近いが、黒褐色土が若干少ない。2層より黒褐色土が多い。
- 6層: 暗褐色土層。3層に近いが、暗褐色土が多い。
- 7層: 暗褐色土層。1層に近いが、黒褐色土が若干少ない。白色粒を含む。右端にスコリア濃集(As—Bのようにも見える)。

- 8層: 暗褐色土層。4層に近いが、暗褐色土と黒褐色土が斑状。
- 9層: 暗褐色土層。8層に近いが、ロームが多い。
- 10層: 暗褐色土層。7層に近いが、黒褐色土が多く、白色粒を少量含む。
- 11層: 暗褐色土層。10層に近いが、くすんだ色のロームが多い。上半に白色粒をかなり含む。
- 12層: 暗褐色土層。10層に近いが、ローム粒が多く、白色粒もかなり含む。10層よりロームが乱れて入る。
- 13層: 褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの斑状、斑点状の混合土。かなりしまっている。

第71図 2号円墳等高線・平面・断面図



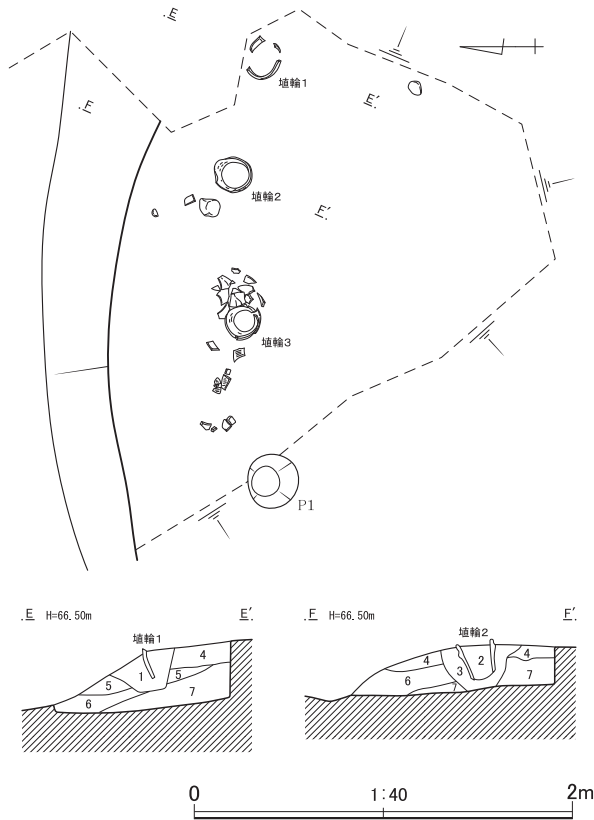
第72図 2号円墳平面・断面図(1)

〈D-D' 断面〉

- 1層: 黒褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に、局所的にローム粒、5~20mm大のロームブロックを多く含む。ブロックは輪郭不鮮明で雲状。
- 2層: 黒褐色土層。1層に近いが、雲状のロームが多い。
- 3層: 黒褐色土層。斑点状に5~10mm大の暗褐色土ブロックを含み、ローム粒がかなりの量点在する。焼土粒を微量含む。ややしまり、やや粘性がある。
- 4層: 黒褐色土層。3層に近いが、暗褐色土が多くやや明るい。
- 5層: 黒褐色土層。3層に近いが、やや黒みが増す。最も黒みの強い層。ローム粒、ロームブロックは、3層より偏在する。
- 6層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、白みのある、くすんだ色調のロームの斑状の混合土。局所的に10~20mm大の黒褐色土ブロックを含む。
- 7層: 暗褐色土層。6層に近いが、ロームが多い。黒褐色土と同じくらいの量。

- 8層: 暗褐色土層。6層に近いが、左半にロームが局在する。
- 9層: 暗褐色土層。8層に近いが、ロームが多い。
- 10層: 暗褐色土層。6層に近いが、ロームが若干多い。
- 11層: 暗褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロック、15mm大の黒褐色土ブロックを微量含む。粘性ややあり。
- 12層: 暗褐色土層。ローム粒、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量、5mm大のローム小ブロックをかなり含む。粘性ややあり。円筒埴輪の掘り方の埋め土。
- 13層: 暗褐色土層。黄褐色ロームと暗褐色みを帯びたロームを主に、黒褐色土を含む。いわゆる旧表土の黒褐色土とローム層の乱高下する不整合面を含む層。13~15層は、地山。
- 14層: 暗褐色土層。黄褐色ロームと暗褐色みを帯びたロームの混合土を主に、10~20mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。
- 15層: 褐色土。黄褐色ロームと暗褐色みを帯びたロームの混合土。いわゆるソフトロームに相当する層。

第73図 2号円墳断面図



第74図 2号円墳平面・断面図(2)

2号円墳埴輪列土層注記

〈E-E'、F-F' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に、5~10mm大のロームブロックをかなり含む、同大の黒褐色土ブロックを少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックをかなり含む、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。円筒埴輪の掘り方の埋め土。
- 4層: 暗褐色土層。黄褐色ロームと暗褐色みを帯びたロームの混合土を主に、10~20mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。D-D'断面の14層と同じ。4~7層は、削平、流出を免れた墳丘下の地山であり、盛り土は見られない。
- 5層: 褐色土層。黄褐色ロームと暗褐色みを帯びたロームの混合土。いわゆるソフトロームに相当する層。D-D'断面の15層と同じ。粘性ややあり。
- 6層: 褐色土層。黄褐色ロームと暗褐色みを帯びたロームの混合土。ロームの多くがブロック化しており、少量ではあるが、5~10mm大の暗褐色みを帯びたロームあるいは暗褐色土のブロックが目立つ。粘性ややあり。
- 7層: 褐色土層。6層に近いが、6層ほどロームがブロック化していない。粘性ややあり。

周溝の残存率が低くかなりの誤差を見込まなければならないが、一応周溝の円弧から中心を求め、全形を復原すると、墳丘径が16.1m前後、全長が20.6m前後となり、1号円墳と同規模か、あるいはほんの少し大きめの円墳と推定できる。溝壁上端は、内外縁とも曲折が著しい。いずれも残りのよい部分での数値になるが、周溝幅は、西周溝で232cm、東周溝216cmである。細かな凹凸はあるものの、溝底はおおよそ平坦である。周溝の断面形は、箱薬研ないしは鍋底形に近く、深さは西周溝で36cm、

浅見山 I 遺跡

東周溝の最深部で63cmである。

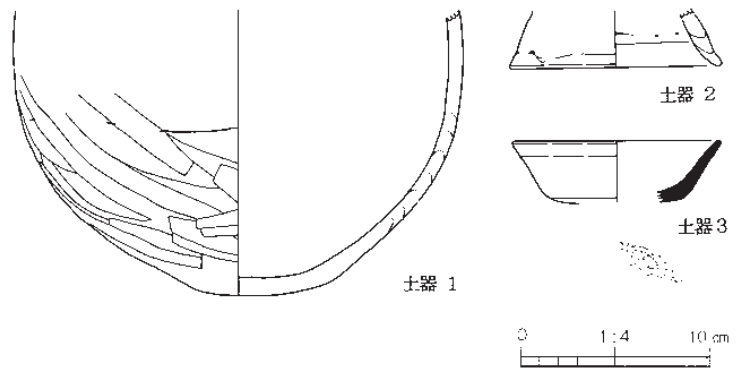
墳丘がかつてあった周溝の内側で残存するのは、東周溝に沿う縦横 2 m余の台形様のほんのわずかな範囲のみである。この部分は、三方を攪乱により切断されており、上面をなすのは旧表土の黒褐色土とロームの境をなす層であった。つまり、墳丘はおろか墳丘下の黒褐色土の下まで、完全に削平された状態であった。

表土剥ぎの際、周溝外縁に沿って1、2 個体分の円筒埴輪が一見そのまま土圧で押しつぶされたかのような状態で出土した（第72図上）。2 個体くらいの円筒埴輪を組み合わせた埴輪棺かと思い、精査したところ、埴輪片を覆う土や下面に付着した土が、周辺の攪乱内の土と同質であるように見え、また、埴輪片は周溝覆土の上面あるいは攪乱層に類似した土層上面に貼り着くようにして散らばり、少数ではあるが、東側の攪乱内に落ち込んだ破片もあること（第72図上）が観察できた。したがって、この東周溝外壁で出土した埴輪片、および同じような高さで対面する墳丘部分で出土した埴輪片（同図上）は、墳丘や周溝を大きく破壊した造成に際し、二次的に移動し、放置されたものと判断された。この推定の妥当性は、それら埴輪片の一部が、墳丘側に埋置されていた円筒埴輪下部と接合することで裏付けられた。なお、東側の攪乱、切り土された造成面からは、図化していないが、染付様の文様をプリントした磁器などが出土しており、旧陸軍により造成工事が行われ、何らかの施設が設けられていたとする伝聞にある程度符合する。

墳丘のテラスにあたる部分で、ほぼ最下段の突帯以下を埋め込まれた3 個体の円筒埴輪が列状に樹立された状態で出土している。また、埴輪列の西側、埴輪間の間隔にほぼ等しい距離を置いた位置で、埴輪が抜き取られた痕と思われるピットを検出している（第74図）。埴輪列をなす円筒埴輪から周溝内縁までの距離（溝壁上端の稜線から円筒埴輪もしくはピットの中心までの距離）は、埴輪 2（第72・76図 2）で50cm、埴輪 3（第72・76図 3）

で71cm、P 1で74cmである。西側に行くほど離れるのは、西側ほど深く削られているためである。

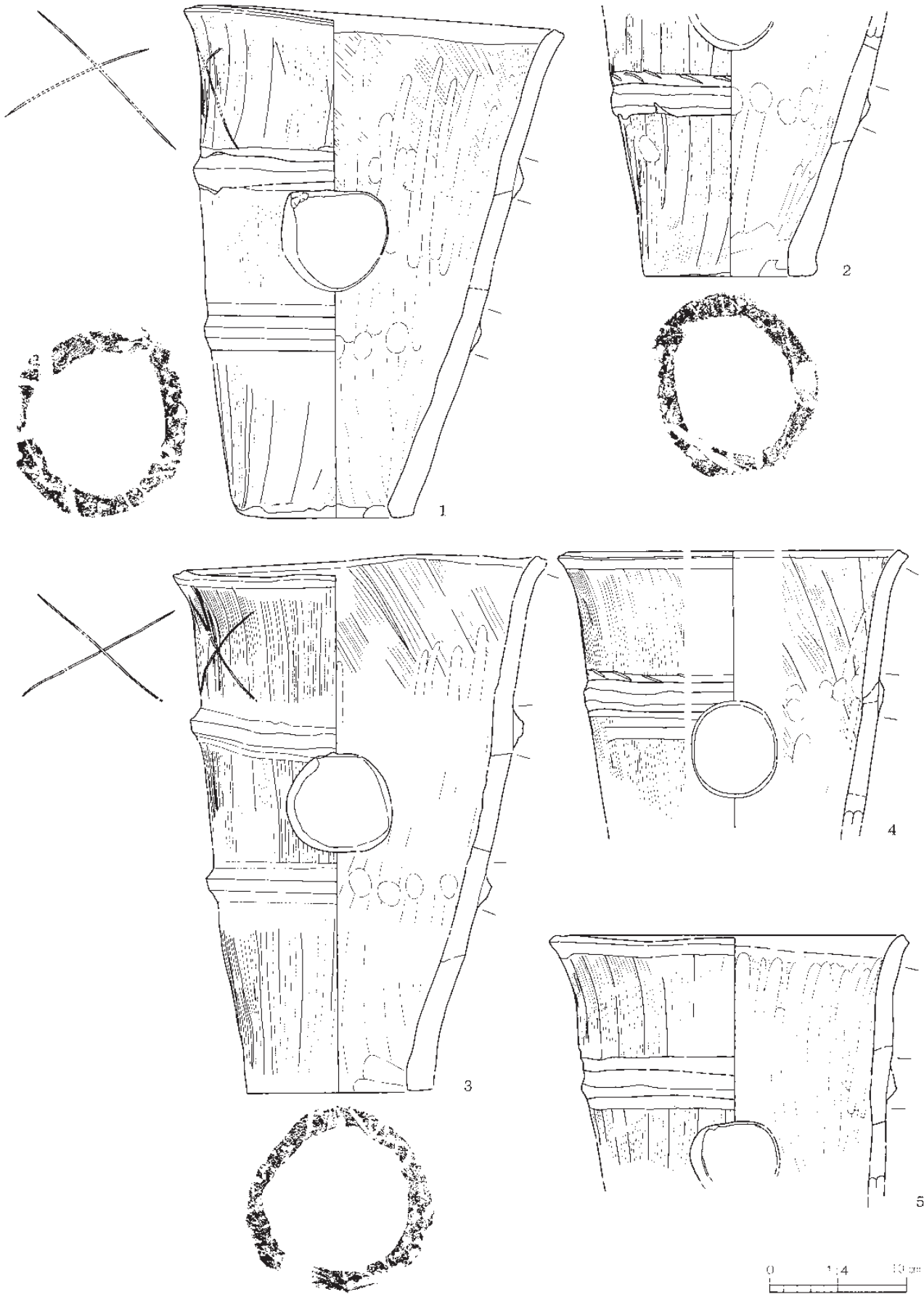
埴輪およびP 1の中心間の距離は、埴輪 1 - 埴輪 2が62cm、埴輪 2 - 埴輪 3が78cm、埴輪 3 - P 1が87cmと一定しないようである。試みに中心間距離の平均値をとり、先の墳丘径の推定値



第75図 2号円墳出土遺物（1）

第13表 2号円墳出土遺物観察表

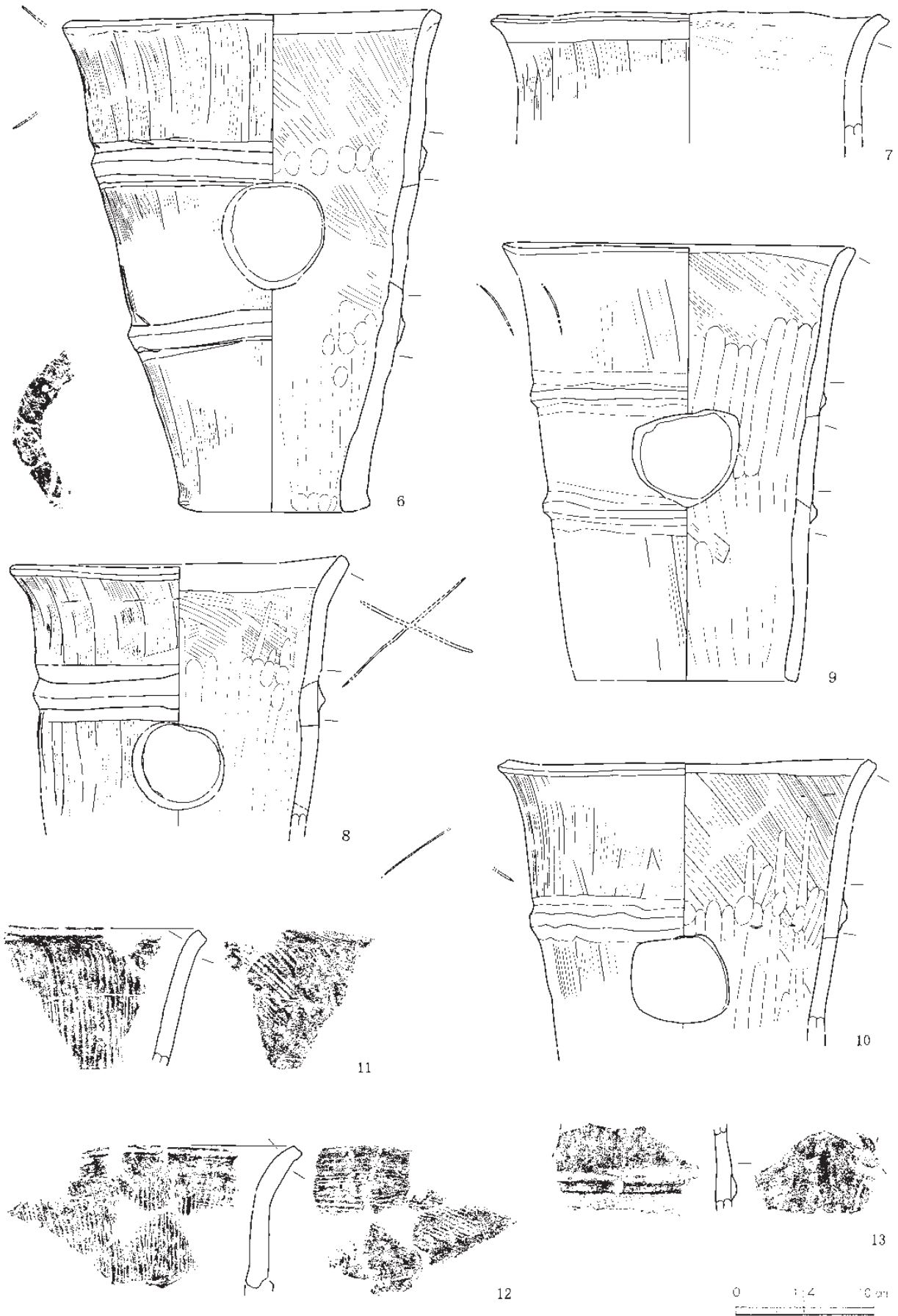
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 - 底径 - 器高 -	底部は丸底気味で、体部は球形に膨らむ。	外面 - 体部ヘラ削り後ナデ。内面 - 不明	チャート・軽石砕粒・角閃石・石英・暗赤褐色粒 内 - 黄橙色 外 - 明黄褐色	体部1/3残存 内面磨耗
2	台付甕	口径 (11.0) 底径 - 器高 -	脚部は「ハ」の字に開く。	外面 - 脚部ナデ。内面 - ヨコナデ。	砂礫・チャート・暗赤褐色粒 内外 - 橙色	脚部片
3	坏	口径 (11.2) 底径 (7.0) 器高 (3.3)	平底で、体部は外傾して開く。	外面 - 体部ロクロナデ。内面 - ロクロナデ底部回転糸切り。酸化焙焼成。	片岩 内外 - にぶい褐色	体部片



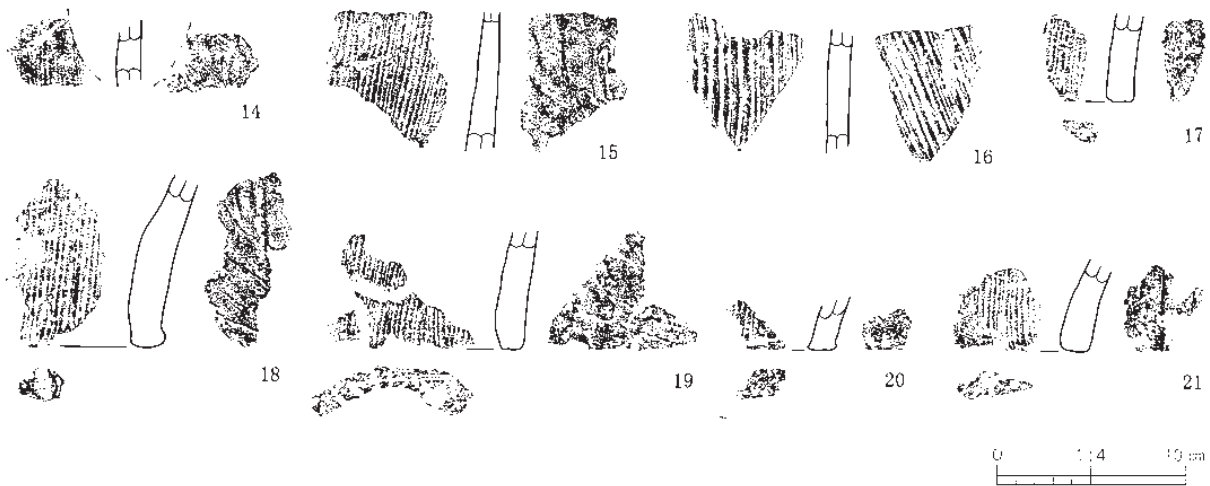
第76図 2号円墳出土遺物(2)

第14表 2号円墳円筒埴輪観察表(1)

NO.	法量 (cm)			突帯 (cm)		透孔 (cm)		形態・調整等の特徴	ハケ本数 (2cm)	色調	備考	
	器高	口径	底径	幅	高さ	形状	孔径					
	段高											
1	37.4 ①13.5	27.8 ②11.2	13.1 ③10.8	2.5	0.6	半円	(7.3) × 7.8	外面 内面	タテハケ。断続ナデによる突帯貼付。ナナメハケ後、縦指ナデ・指頭圧痕。口縁部ヨコナデ。	外：6 内：6	橙色 5YR7/6	外面第3段に線刻「×」。片岩・粗粒チャート含む。底面に棒状圧痕。
2	- ①12.5	- ②-	(12.7) ③-	1.9	0.4	不明	- × -	外面 内面	タテハケ。断続ナデによる突帯貼付。縦指ナデ・指頭圧痕。底部横方向のケズリ。	外：6	にぶい橙色 7.5YR7/4	片岩・粗粒チャート含む。外面に指紋あり。底面に棒状圧痕。
3	39.1 ①15.0	27.3 ②11.9	13.7 ③12.2	2.8	0.6	(円)	7.2 × 7.7	外面 内面	タテハケ。断続ナデによる突帯貼付。ナナメハケ後、縦指ナデ・指頭圧痕。口縁部ヨコナデ。	外：6 内：6 ~7	橙色 7.5YR6/6	外面第3段に線刻「×」。片岩・粗粒チャート含む。底面に棒状圧痕。
4	- ①-	(25.6) ②-	- ③10.2	2.3	0.4	(円)	- × -	外面 内面	タテハケ。断続ナデによる突帯貼付。口縁部ヨコナデ。ナナメハケ後、縦指ナデ・指頭圧痕。口縁部ヨコナデ。	外：7 内：6	橙色 5YR6/6	片岩・チャート含む。
5	- ①-	(26.3) ②-	- ③11.2	2.0	0.7	円	- × 6.6	外面 内面	タテハケ。口縁部ヨコナデ。ナナメハケ後、縦指ナデ。口縁部ヨコナデ。	外：6 内：6	にぶい橙色 7.5YR6/4	片岩・粗粒チャート含む。
6	36.3 ①13.6	(27.4) ②12.4	(13.9) ③10.3	2.3	0.4	円	7.7 × 7.4	外面 内面	タテハケ。断続ナデによる突帯貼付。第1段は縦指ナデ・指頭圧痕。第2・3段はナナメハケ後に一部ナデ・指頭圧痕。	外：5 内：6	橙色 5YR7/6	外面第3段に線刻「×」か。片岩・粗粒チャート含む。
7	- ①-	(28.7) ②-	- ③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。口縁部ヨコナデ。磨減するが、ナナメハケ後にナデ。	外：6 内：5 ~8 ~8	橙色 5YR6/6	片岩・チャート含む。
8	- ①-	24.5 ②-	- ③10.5	2.2	0.6	円	(6.3) × 6.6	外面 内面	タテハケ。口縁部ヨコナデ。ナナメハケ後、縦指ナデ・指頭圧痕。口縁部ヨコナデ。	外：7 内：7	橙色 5YR6/6	内面第3段に線刻「×」。片岩・粗粒チャート含む。
9	31.3 ①12.4	25.5 ②8.0	(16.0) ③10.9	1.7	0.3	半円	6.7 × 7.7	外面 内面	タテハケ。ナナメハケ後、縦指ナデ。口縁部ヨコナデ。	外：6 内：8 ~7	橙色 5YR6/8	外面第3段に線刻。片岩・粗粒チャート含む。
10	- ①-	(27.3) ②-	- ③10.7	2.8	0.5	半円	- × -	外面 内面	タテハケ。断続ナデによる突帯貼付。ナナメハケ後、縦指ナデ・指頭圧痕。口縁部ヨコナデ。	外：5 内：5 ~8	にぶい橙色 7.5YR7/4	外面第3段に線刻「×」か。片岩・チャート含む。
11	- ①-	- ②-	- ③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。口縁部ヨコナデ。磨減するが、ナナメハケ後にナデ。	外：5 内：5	にぶい橙色 7.5YR7/4	片岩・粗粒チャート含む。
12	- ①-	- ②-	- ③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。口縁部ヨコナデ。ナナメハケ後にナデ。口縁部ヨコナデ。	外：5~10 内：6~9	橙色 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
13	- ①-	- ②-	- ③-	2.0	0.4	(円)	- × -	外面 内面	タテハケ。ナデ。	外：10	明赤褐色 2.5YR5/6	片岩・チャート含む。
14	- ①-	- ②-	- ③-	-	-	不明	- × -	外面 内面	タテハケ。ナデ。	外：8	橙色 2.5YR6/6	SZ-12付近出土。片岩・粗粒チャート含む。
15	- ①-	- ②-	- ③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。縦・斜め指ナデ。	外：8 内：9 ~9	橙色 2.5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
16	- ①-	- ②-	- ③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。ナナメハケ。	外：4 内：5 ~7 ~7	橙色 5YR6/6	SZ-10付近出土。片岩・粗粒チャート含む。



第77図 2号円墳出土遺物(3)



第78図 2号円墳出土遺物(4)

第15表 2号円墳円筒埴輪観察表(2)

NO.	法量 (cm)					透孔 (cm)		形態・調整等の特徴	ハケ本数 (✓ 2cm)	色調	備考
	器高	口径	底径	幅	突出度	位置	孔径				
17	①-	②-	③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。 ナデ。	外：7 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
18	①-	②-	③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。 斜め指ナデ。	外：7 2.5YR6/8	SK-57出土。 片岩・粗粒チャートを含む。 底面に棒状圧痕。
19	①-	②-	③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。 ナデ。	外：7 ~ 9 2.5YR6/6	片岩・粗粒チャートを含む。 底面に線状の圧痕。
20	①-	②-	③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。 ナデ。	外：6 2.5YR6/8	片岩・粗粒チャート含む。
21	①-	②-	③-	-	-	-	-	外面 内面	タテハケ。 指ナデ。	外：7 10YR5/1	SK-57出土。 粗粒チャート含む。

を用いて試算してみると、テラスを半周させるのに必要な埴輪の本数は、32本であり、入口部を除いても50~60本の埴輪が樹立されていたと推定できる。

3個体とも埴輪本体よりもやや大きめのピットの中に土を敷き詰め、裏込めをして埋置されている。また、いずれも突帯上の透孔が部分的にはあれ残っており、対面する透孔を結ぶ線が墳丘の中心に向かうようにして設置されていたことが判る。埴輪を埋置したピットは、いずれも径が30~40cmで、深さは20cm前後であり、断面形は上部が広い逆台形に近い形状である。裏込めの土は、ややロームの目立つ暗褐色土である。

周溝の覆土は、断面の位置でかなり異なるようであった。A-A'断面では、明白な黒褐色土の層は、4層とした土層のみであったが、全体に黒みの強い暗褐色土が卓越し(第71図)、D-D'断面では、中央にいわゆる旧表土の黒褐色土を主とする土層が厚く堆積し、他はやはり黒みの強い暗褐色土、あるいは褐色土が堆積していた(第72・73図)。

遺物としては、先に記した円筒埴輪の他に、西周溝の底面近くから壺胴部~底部(第72・75図1)が出土している。この土器は、底面を下にして正位の状態出土し、内面に7、8cm位の厚さで赤色顔料がぎっしり詰まっていた(第VI章参照)。3は周溝に混入した遺物であろう。

本遺構の時期は、出土遺物および覆土から見て、古墳時代後期前半である。

5 土 坑

1号土坑（第80図、図版23）

調査範囲の西端、丘陵尾根の平場の端に位置する遺構である。確認面は、いわゆるソフトローム層のⅢ層上面である。

平面形は円形で、中央に楕円形のピット状の掘り込みが見られる。最大径は178cmである。断面形は、鍋底状で、底面には凹凸が著しい。ピット状の掘り込み部分での深さは32cm、円形部分の深さは16～24cmである。覆土は、6層に分けられ、全体に暗褐色土とロームの混合土からなる。中央の掘り込みも一連の過程で埋没したようである。

2号土坑（第79・80図、第16表、図版23・38）

調査範囲の西端、丘陵尾根の平場から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形はやや角張った長楕円形で、長径は313cm、最大径は330cm、短径は170cmである。長軸方位は、N-90°-Wである。2つの土坑が重複するように深さの異なる底面が2つあり、西側の浅い底面の土坑がまずあり、東側に新たな深い底面をもつ形に掘り直されたのかもしれない。長軸方向での断面形は船底を2つ並べたような形態で、深い方の東側の底面は、西側、斜面の上方に向かって傾斜し、深さが増す。東側の底面の深さは61cm、西側の底面の深さは39cmである。

覆土は、8層に分けられた。いずれの土層もロームが過半を占め、わずかに赤みや黒みが強いことで、かろうじて地山のロームから識別できるような土であった。2層は、確認面でも赤みがかなり強く、ごく微量視認できた焼土粒以外に、ごく細かい粉末の焼土が全体に含まれるのかもしれない。また、土層断面から見て、2つの重複する土坑というより、ある時点では一体となり、同時に埋没したことが明らかである。

出土遺物は僅少である。早期を主とする縄文土器の微細な破片がほとんどであるが、1点対向する弧状の平行沈線と刺突文の見られる弥生時代中期前半かと思われる小型壺口縁部片（第79図1）が出土しており、同期に属する遺構と考えたい。



第79図 2号土坑出土遺物

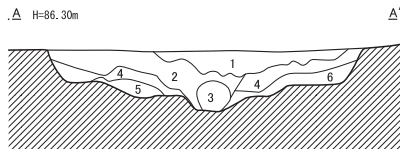
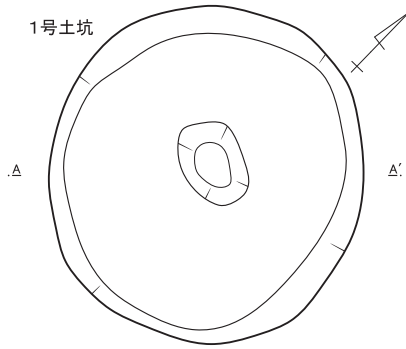
第16表 2号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺		やや外傾する口縁。	外面-曲線文と刺突文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-明黄褐色	弥生時代中期前半。口縁部破片。

3号土坑（第80図、図版23）

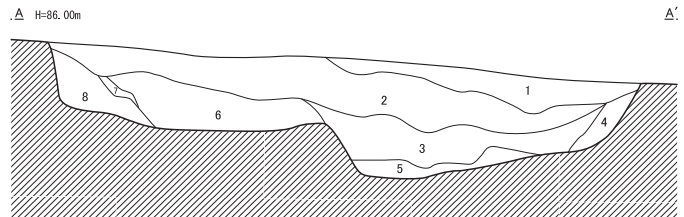
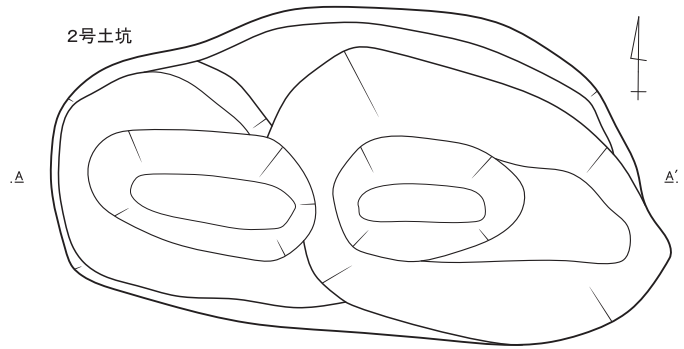
調査範囲の西端、丘陵尾根の平場から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は不整な長楕円形に近く、長径は258cm、最大径は267cm、短径は104cmである。長軸方位は、N-43°-Wである。長軸方向での断面形は、船底形の一端が深くなるような形態で、北西側から傾斜および段差をもって次第に深さが増し、南東端が急激に深く丸く掘り込まれている。最深部での深



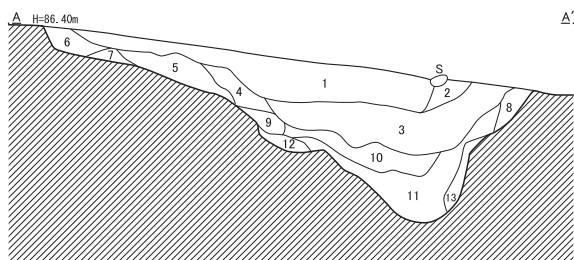
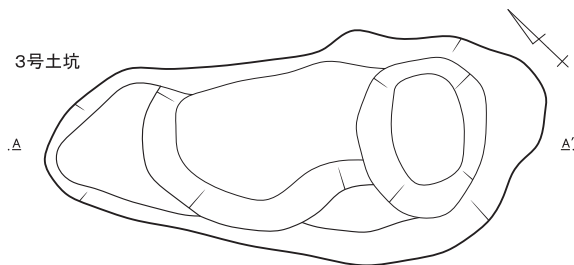
1号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土とロームの均一な混合土。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、暗褐色土が多い。
- 3層: 黄褐色土層。やや黒みの強いハードロームのブロック。
- 4層: 黄褐色土層。ローム粒・ロームブロックからなる層。
- 5層: 褐色土層。4層に近いが、暗褐色土が若干多い。
- 6層: 褐色土層。4層に近いが、暗褐色土がかなり多い。



2号土坑土層注記

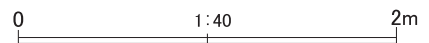
- 1層: 黄褐色土層。ほとんどローム。暗褐色土を微量含む。
- 2層: 黄褐色土層。1層に近いが、ごく微量焼土を含む。
- 3層: 黄褐色土層。2層に近いが、若干黒みが強くしまる。
- 4層: 黄褐色土層。2層に近いが、白みの強いローム(シルト化している)が多い。ロームブロックが目立つ。
- 5層: 黄褐色土層。3層に近いが、10~50mm大の白みの強いロームブロックを含む。
- 6層: 黄褐色土層。3層に近いが、全体に白みが強い。
- 7層: 黄褐色土層。白みの強いロームの集中部。
- 8層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土をごく微量含む。



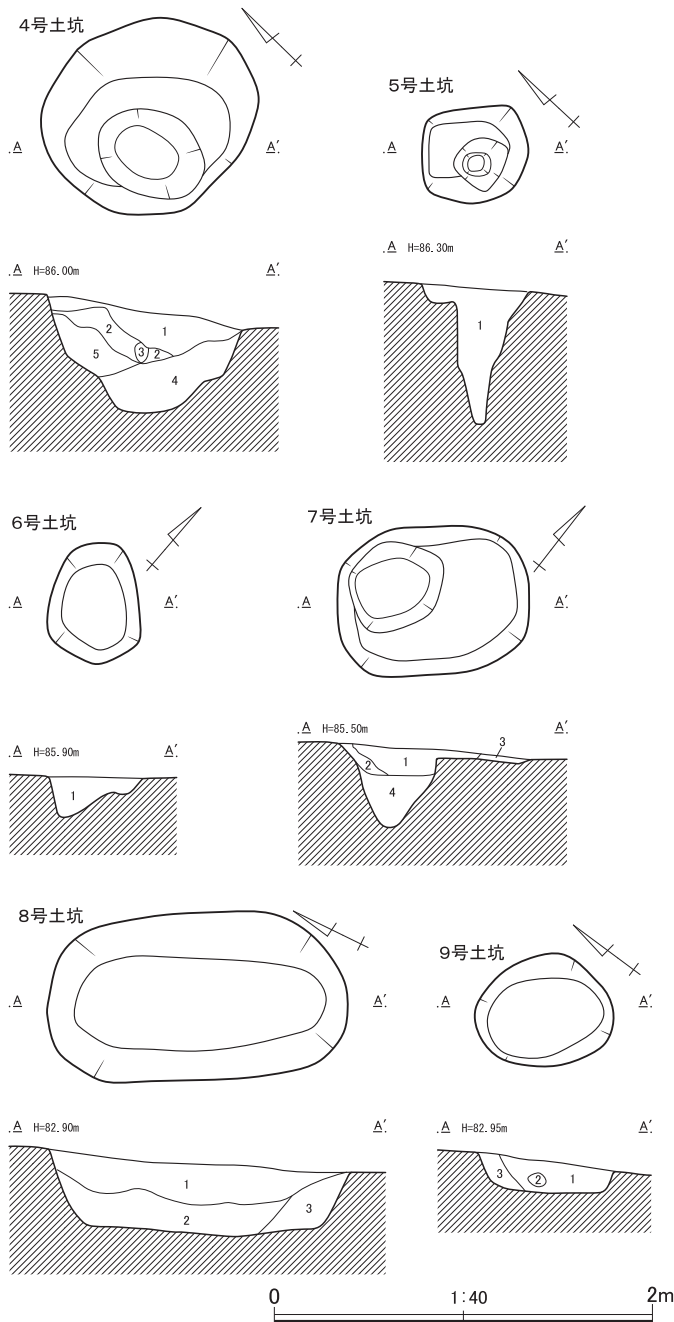
3号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。ローム粒、5~10mm大の黒褐色土小ブロック及び5~30mm大のロームブロックを含む。
- 2層: 褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。

- 3層: 暗褐色土層。1層の褐色土と黒褐色土、ロームが斑状に混合し、所々雲状に集塊する。しまりがない。
- 4層: 褐色土層。褐色土とロームの均一な混合土。
- 5層: 黄褐色土層。暗褐色土を若干含む。
- 6層: 黄褐色土層。5層に近いが、暗褐色土が多い。
- 7層: 黄褐色土層。5層に近いが、ロームが多い。
- 8層: 黄褐色土層。ロームの崩落土。暗褐色土をごく微量含む。
- 9層: 暗褐色土層。3層に近いが、ロームがわずかに多い。20~30mm大のロームブロックを含む。
- 10層: 黄褐色土層。暗褐色土、黒褐色土を斑状に含む。
- 11層: 暗褐色土層。3層に近いが、黒褐色土が多い。
- 12層: 黒褐色土層。ローム、暗褐色土が斑状に混じる。
- 13層: 黄褐色土層。8層に近いが、ロームが多い。黒褐色土が斑状に混じる。



第80図 1~3号土坑平面・断面図



第81図 4～9号土坑平面・断面図

4号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。暗褐色土、ロームを少量含む。
- 2層: 褐色土層。ロームを主に、10～20mm大のブロック状の暗褐色土を少量含む。
- 3層: 褐色土層。1層土のまとまり。
- 4層: 褐色土層。1層に近いが、壁際にロームが多い。
- 5層: 褐色土層。2層に近いが、ロームがかなり多い。

5号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。暗褐色土を万遍なく含む。

6号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を微量含む。

7号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を均一に万遍なく含む。
- 2層: 褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 3層: 褐色土層。2層に近いが、さらにロームが多い。
- 4層: 褐色土層。2層に近いが、さらにロームが多い。3層よりロームが多い。

8号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に若干含む。
- 2層: 褐色土層。1層に近いが、暗褐色土がさらに少ない。
- 3層: 褐色土層。2層に近いが、暗褐色土がさらに少ない。殆どローム。やや柔らかかで粘性少しある。

9号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を若干含む。
- 2層: 褐色土層。ロームブロック。
- 3層: 褐色土層。1層に近いが、白みがややある。暗褐色土をごく微量含む。粘性ややある。

さは、77cmである。覆土は、13層に分けられた。暗褐色土と黒褐色土、ロームが不規則に混濁した土が主となり、とくに1～3層、10～13層には、黒褐色土が顕著に含まれるようである。

覆土全体から散漫に、土器片や一部剥片かと思われる石片が出土している。微小片であり図化していないが、弥生時代中期前半の筒型土器かと思われる破片が出土している。遺物および覆土から見て、弥生時代中期前半の遺構であろう。

4号土坑 (第81・82図、第17表、図版23・38)

調査範囲の西端、丘陵尾根の平場から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。平面形はやや不整な円形で、最大径は114cmである。中央が深く掘り込まれており、断面形は大小

浅見山 I 遺跡

の鍋底を重ねたような形態である。最深部の深さは53cm、中段の深さは30cm前後である。覆土は、4層に分けられ、暗褐色土とロームの混合土が主になる。

出土遺物はわずかであるが、縄文施文の壺かと思われる破片が1点出土している(第82図1)。舌状文のようになるのか、縄文が一部ナデ消されている。3号土坑などと同じ弥生時代中期前半の遺構の可能性はある。



第82図 4号土坑出土遺物

第17表 4号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺		頸部にてゆるくくびれる器形。	外面-くびれ部分の上にLRの単節縄文。一部磨消。内面-ナデ。	砂礫 内外面-明褐色	弥生時代後期。胴部破片。

5号土坑 (第81図、図版23)

調査範囲の西端、丘陵尾根の平場のはずれに位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、丸みのある方形に近く、最大径は56cm、最深部での深さは、72cmである。北側壁に沿って上端が角張った形で急激に深くなっており、先細りとなる。覆土は1層で、暗褐色土を満遍なく含む褐色土である。

6号土坑 (第81図、図版23)

調査範囲の西端近く、丘陵尾根の平場から南東斜面にかけ位置する遺構である。このあたりはソフトロームのⅢ層が薄いため確認面は、Ⅲ層中あるいはⅣ層上面である。

平面形はやや角張った不整楕円形で、長径は63cm、短径は48cmである。強いて長軸方位を求めれば、N-41°-Wあたりとなる。断面形はV字形で、南西～南側が急激に深くなっている。覆土は1層で、ロームを主とする土である。

7号土坑 (第81図、図版23)

調査範囲の西端近く、丘陵尾根の平場から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層中あるいはⅣ層上面である。

平面形は、丸みの強い隅丸方形である。長軸長は101cm、短軸長は71cm、長軸方位はN-51°-Eである。ほぼ平坦な浅い隅丸方形の掘り込みの西壁に沿って、不整円形の深い掘り込みをもつ形態である。最深部での深さは42cm、浅い掘り込みは、深さが2cmほどしかない。覆土は4層に分けられ、いずれもロームを主とする土である。

8号土坑 (第81図、図版24)

調査範囲の西半、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層中あるいはⅣ層上面である。

平面形は長楕円形で、長径は159cm、短径は89cm、長軸方位はN-26°-Wである。坑壁の立ち上がりは全体に一様で、底面もほぼ平坦であり、縦横どちらの断面形も鍋底形である。中央での深さは、37cmである。覆土は3層に分けられ、いずれもロームを主とする土である。

9号土坑（第81図、図版24）

調査範囲の西半、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層中あるいはⅣ層上面である。

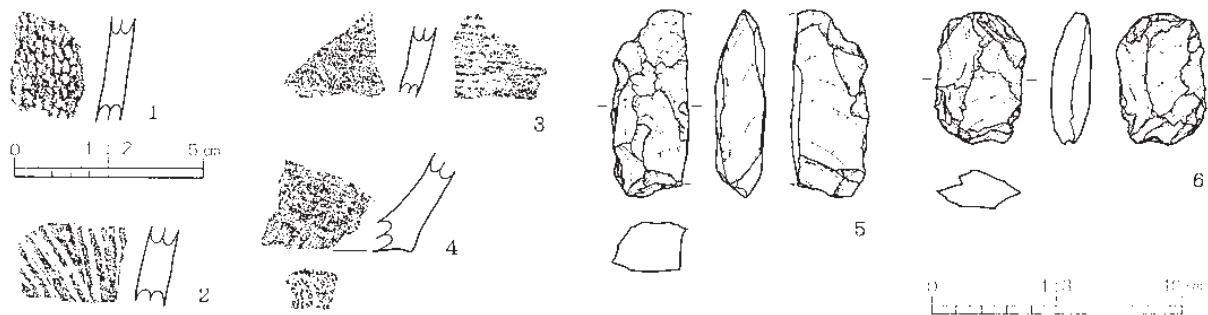
平面形は楕円形で、長径は72cm、短径は59cm、長軸方位はN-37°-Wである。断面形は鍋底形で、坑壁の立ち上がりも一様で、底面もほぼ平坦である。中央での深さは、17cmである。覆土は3層に分けられ、いずれもロームを主とする土である。

10号土坑（第83・84図、第18表、図版24・38）

調査範囲の西半、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層中である。Ⅲ層上面の確認作業時には、ローム層の一部が多少赤み、褐色みを帯びていたが、遺構と考えるにはいたらず、旧石器時代調査用のトレンチ4を開掘し、Ⅲ層をかなり掘り下げた段階になって、ようやく遺構であることを捉えることができた遺構である。

平面形は長楕円形で、長径は298cm、短径は162cmである。長軸方位はN-14°-Wである。長軸方向での断面形は船底形で、短軸方向では箱薬研に近く、坑壁はかなり急峻に掘り込まれている。底面は細長い形態で、中央南寄りやや深くなっている。最深部での深さは、81cmである。覆土は、9層に分けられ、いずれも圧倒的にロームの多い土層である。深度によってロームの質が変わるため、掘り上げられた後、流入した際、それが覆土の違いとなって顕れたのであろう。覆土からも古さの判る遺構である。

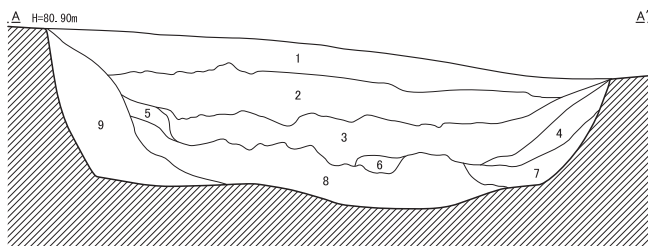
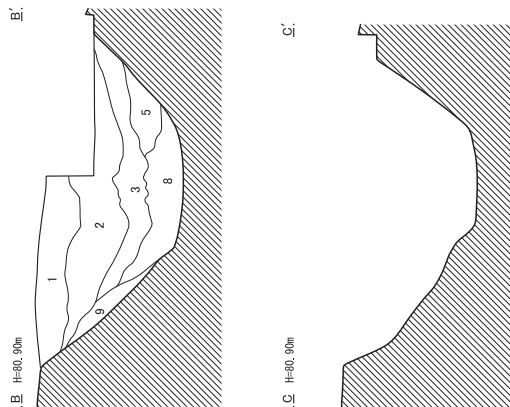
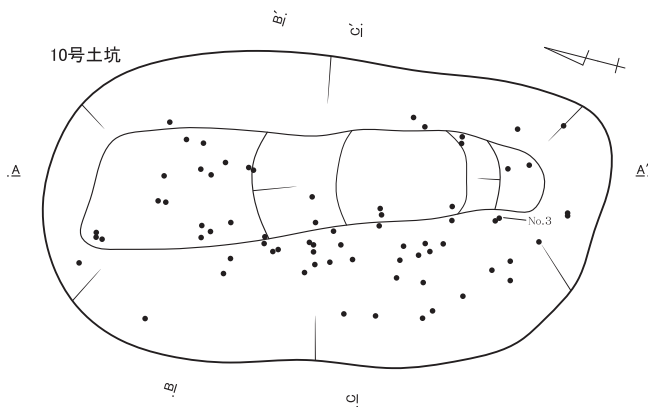
遺物としては、少数の縄文土器片と石器が、主に覆土の上～中層から出土している。他に遺物ではないが、大小の礫が同じような層準にかなりの数混入していた。



第83図 第10号土坑出土遺物

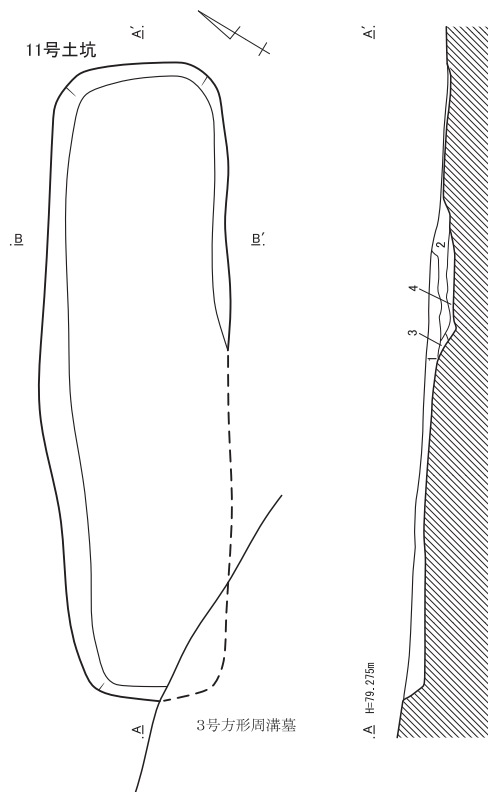
第18表 10号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直立する口縁。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 外面-明赤褐色、内面-橙色	縄文時代早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
2	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-斜位の集合沈線。内面-横位ないし斜位の条痕。	角閃石・片岩・砂礫 内外面-橙色	縄文時代早期中葉・沈線文系。胴部破片。
3	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-横位ないし斜位の条痕。内面-横位の条痕。	赤色粒・角閃石・砂礫、繊維 外面-明褐色、内面-にぶい黄橙色	縄文時代早期後葉・条痕文系。胴部破片。
4	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縄文?。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・片岩、繊維 外面-橙色、内面-にぶい黄橙色	縄文時代前期初頭・羽状縄文系。底部破片。



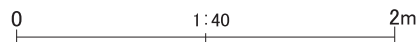
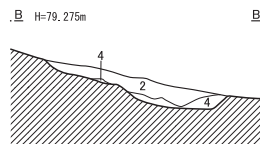
10号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。地山のロームよりやや赤み、褐色みの強いロームを主とする。粒子が細かい。炭化物を微量含む。
- 2層: 黄褐色土層。1層より微妙に赤みが弱く、部分的にロームブロックが混入する。
- 3層: 褐色土層。1層より微妙に黒みが強く、所々ロームが固まりをなしている。
- 4層: 褐色土層。3層に近いが、若干黒みが強い。
- 5層: 褐色土層。3層に近いが、若干白みがある。
- 6層: 褐色土層。3層に近いが、若干黒みが強い(マンガン?が多い)。
- 7層: 褐色土層。4層に近いが、さらに黒みが強い。
- 8層: 黄褐色土層。3層土をベースに、10~50mm大の黄褐色ロームブロックが入り、全体に白みが増す。
- 9層: 黄褐色土層。8層に近いが、白みがかかったロームが多い。ロームブロックも多い。



11号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。粒子の粗い旧表土。As-Aを含む。
- 2層: 黄褐色土層。ロームと暗褐色土の混合土。ロームは5mm大の小ブロックを多く含む。黒褐色土も斑状に混入する。しまりなく軟質。
- 3層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を若干含む。しまりなく軟質。
- 4層: 黄褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。



第84図 10・11号土坑平面・断面図

細片ではあるが、条痕文土器片と早期末～前期初頭かとも思われる縄文施文の土器片（第83図1～4）と打製石斧（同図5・6）が2点出土している。5は、長さが70.1mm、幅35.1mm、6は、長さが52.2mm、幅33.8mm、2点ともに凝灰岩製の粗略な作りが特徴的な打製石斧である。ロームの卓越する覆土、および遺物から見て、縄文時代早期後半から前期初頭にかけての遺構と見られる。

11号土坑（第84図）

調査範囲の中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。削平されたためか、掘り込みもごく浅く、南隅から南東壁にかけては、坑壁も失われている。3号方形周溝墓を切って造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は縦に長い隅丸長方形で、長軸長は336cm、短軸長は101cm、長軸方位はN-59°-Eである。縦横の断面形は船底形、鍋底形になりそうである。東側先端部分にかけてやや深くなっている。最深部での深さは14cm、浅い部分では深さが4cm前後である。覆土は、4層に分けられた。1層にはAs-Aが含まれ、総じて覆土は軟質である。

覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構である。

12号土坑（第86図、図版24）

調査範囲の中央、丘陵尾根に位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

上端での平面形はやや歪な円形である。段をもって掘り込まれており、中段から底面にかけての平面形は、菱形に近い形態である。最大径は150cm、最深部での深さは、62cmである。覆土は、4層に分けられた。褐色土や暗褐色土を主とする土で、土坑掘削時に出たⅣ～Ⅵ層土がブロックの状態で見入し、埋没した模様である。

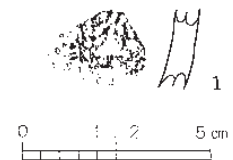
覆土から見て、縄文時代の遺構の可能性が考えられる。

13号土坑（第85・86図、第19表、図版24・38）

調査範囲の中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形はやや不整な長楕円形で、長径は225cm、短径は94cm、長軸方位はN-13°-Wである。長軸方向での断面形は船底形である。最深部での深さは、38cmである。覆土は、10層に分けられた。12号土坑と同様に、土坑掘削時に生じたハードロームのⅣ層土や小豆色のシルト質ロームのⅥ層土をブロックの状態で見入ることが特徴的である。

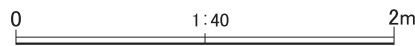
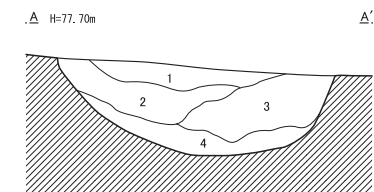
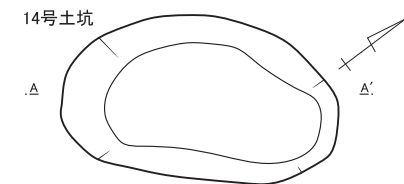
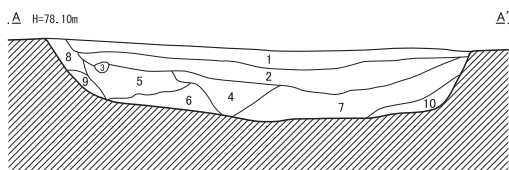
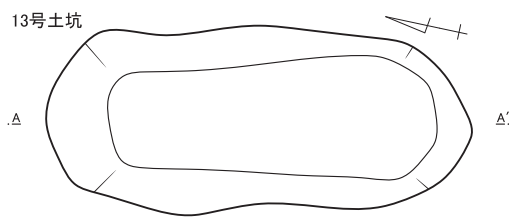
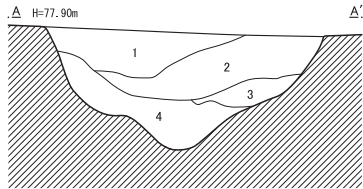
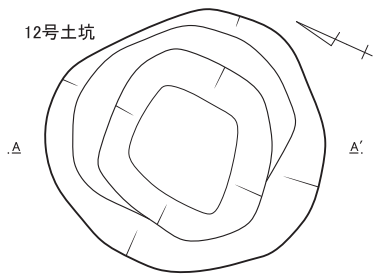
出土遺物は、僅少であるが、撚糸文系土器の破片が1点覆土中から出土している（第85図1）。覆土および出土遺物から見て、縄文時代早期前葉の遺構である可能性が考えられる。



第85図 13号土坑出土遺物

第19表 13号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直立する口縁。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・片岩・砂礫 内外面-明赤褐色	縄文時代早期前葉・撚糸文系。胴部破片。



第86図 12～14号土坑平面・断面図

12号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。5～40mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5～30mm大のロームブロック、5～20mm大の小豆色粘土ブロックを少量含む。
- 3層: 褐色土層。5～20mm大のロームブロックを多量に含む。
- 4層: 暗褐色土層。5～30mm大のロームブロックを多量に、5～20mm大の小豆色粘土ブロックを少量含む。

13号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。ローム粒を多量に含む。
- 2層: 褐色土層。1層より暗い。5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまっており、粘性ややある。
- 3層: 黄褐色土層。70mm前後のロームブロック。
- 4層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。
- 5層: 褐色土層。5mm大の小豆色粘土小ブロックをかなり含み、同大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 6層: 黄褐色土層。5～10mm大の小豆色粘土ブロックを多量に含む。しまり、粘性ともにあり。
- 7層: 暗褐色土層。5mm大の小豆色粘土小ブロックを多量に、同大のローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 8層: 黄褐色土層。5～20mm大の小豆色粘土ブロックを多量に、5mm大のローム小ブロックを微量含む。しまり強く、粘性あり。
- 9層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の小豆色粘土小ブロックをかなり含む。粘性あり。
- 10層: 黄褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、5mm大の小豆色粘土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。

14号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ロームを主に、黒褐色土あるいは暗褐色土を斑状に含む。ロームは所々5～10mm大のブロックをなす。しまり、粘性ともになし。
- 2層: 黄褐色土層。ややくすんだ色調のロームを主に、部分的に暗褐色土を若干含む。5～10mm大のロームブロックが多い。
- 3層: 黄褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが大きい(5～150mm大)。
- 4層: 褐色土層。黒みのややある(マンガンなどを含む)ロームを主とする。地山より明らかに軟質。

14号土坑 (第86図、図版24)

調査範囲の中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。平面形はやや不整な楕円形で、長径は144cm、短径は87cm、長軸方位はN-37°-Eである。断面形は半弧状に近く、底面と壁の境が不明瞭である。最深部での深さは、46cmである。覆土は、4層に分けられた。いずれもロームを主とする土で、黒褐色土、あるいは黒み強い暗褐色土が不規則に混入する。覆土から見て、縄文時代の遺構の可能性が考えられる。

15号土坑（第88図、図版24）

調査範囲のほぼ中央、丘陵尾根に位置する遺構である。4号方形周溝墓の南西隅を壊して造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

上端での平面形はやや歪な円形である。上端とはほぼ同形の中段の平場が設けられ、北坑壁に沿って深く掘り込まれている。最大径は175cmである。断面形は鍋底を2つ重ねたような形態である。北側の楕円形の掘り込みの底までの深さは47cm、南側の平場の深さは20cm前後である。覆土は、12層に分けられた。くすんだ色調のロームや褐色土や暗褐色土を主とする土で、様々な方向から流入した薄い層がラミナをなし堆積した模様である。とくに上層には、A s - Bかと思われる粒径の比較的大きいくすんだ灰色のスコリアが所々濃集していた。

出土遺物の大半は、古墳時代前期の土器であるが、おそらく本遺構が壊した4号方形周溝墓の土器と思われる。本以降の時期は、特徴的なスコリアから見て、平安時代か、それ以降と考えられる。

16号土坑（第88図、図版25）

調査範囲のおおよそ中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

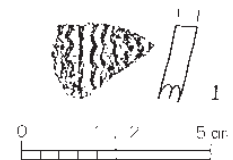
平面形は、ほぼ円形で、最大径は154cmである。断面形は、盆状、鍋底形で、坑壁はかなり急峻に立ち上がる。最深部での深さは21cm、底面はほぼ平坦であるが、斜面に沿いいくらか傾斜している。覆土は、主にロームを含む暗褐色土からなる4層に分けられた。1層には白い軽石粒が含まれるが、微量であり、時期的に限定することができなかった。

17号土坑（第87・88図、第20表、図版25・38）

調査範囲のほぼ中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、隅丸長方形で、長軸長は118cm、短軸長は72cm、長軸方位は、N - 60° - Eである。断面形は、船底形に近く、最深部での深さは、12cmである。坑底には、凹凸が著しい。覆土は、3層で、やはり上層に白色軽石が含まれる。

押型文の見られる縄文土器片が1点（第87図1）出土しているが、伴う遺物かどうか判断し兼ねる。覆土から見て、縄文時代の遺構の可能性はあるであろう。



第87図 17号土坑出土遺物

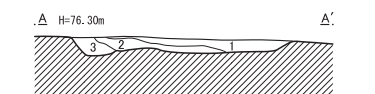
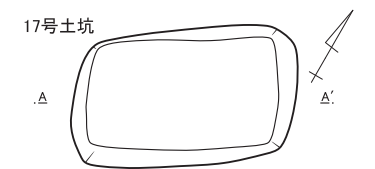
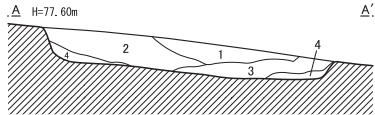
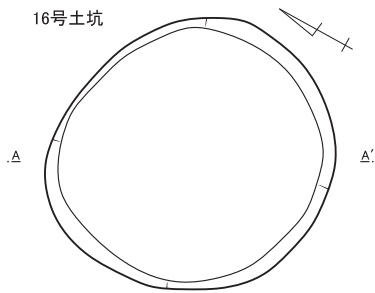
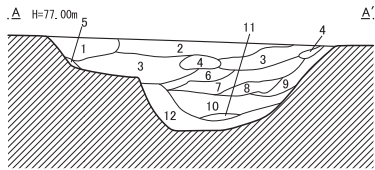
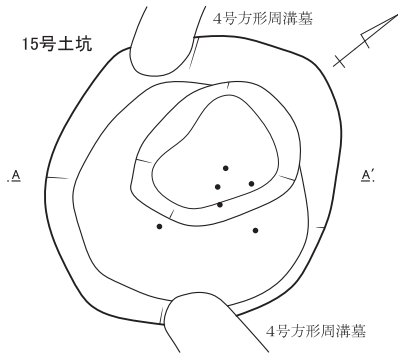
第20表 17号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位回転押捺による浅い圧痕の山形押型文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・砂礫 外面-にぶい赤褐色、 内面-にぶい褐色	縄文時代早期前葉・押型文系。胴部破片。

18号土坑（第89・91図、第21、図版25・38）

調査範囲の中央やや東寄り、丘陵南東斜面に位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、ほぼ円形で、最大径は104cmである。断面形は、鍋底形に近く、底面は全体的に平坦であるが、東半がやや深くなっている。西半の深さは8cm、東半の最深部での深さは、11cmである。覆土は2層に分けられ、どちらもロームを多く含む褐色土である。



15号土坑土層注記

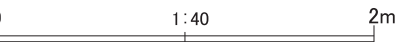
- 1層: 黄褐色土層。ローム粒、5~30mm大のロームブロックを主に、暗褐色土、黒褐色土を不規則に含む。以下、1~6層には、4層のスコリア(As-Bか?)が分散した状態で含まれる。
- 2層: 褐色土層。くすんだ色調の粒子の粗いロームを主に、暗褐色土を含む。不規則なラミナが見える。
- 3層: 褐色土層。くすんだ色調の黄褐色ロームを主に、暗褐色土を含む。1層よりロームが多く、5~10mm大のロームブロックが所々まとまる。不規則なラミナが見える。
- 4層: 褐色土層。灰色がかったスコリア(軽石が主)の濃集層。
- 5層: 褐色土層。1層に近いが、ややロームが多い。
- 6層: 暗褐色土層。5層に近いが、暗褐色土が多い。
- 7層: 褐色土層。5層に近いが、5~30mm大の暗褐色土、黒褐色土濃集部あり。
- 8層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームの斑状の混合土。ロームは5mm大の小ブロックが多い。
- 9層: 黄褐色土層。黄褐色ロームを主とする粒子の細かい層。
- 10層: 暗褐色土層。9層に近いが、ロームが多い。
- 11層: 暗褐色土層。10層に近いが、黒褐色土が多く、雲状に入る。
- 12層: 黄褐色土層。ローム粒、5~40mm大あるいはそれ以上のロームブロック暗褐色土を微量含む。

16号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を少量、2mm大の白色軽石を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5~30mm大のロームブロックを多量に含む。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に含む。
- 4層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。

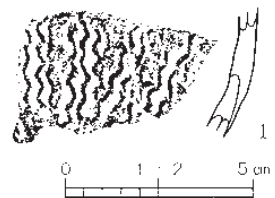
17号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。ローム粒を多量に、2mm大の白色軽石を少量含む。しまっており、粘性ややあり。
- 2層: 褐色土層。ローム粒を多量に含む。粘性ややあり。
- 3層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、ローム粒を多量に含む。粘性ややあり。



第88図 15~17号土坑平面・断面図

出土遺物としては、縄文土器片が数点出土しているが、時期の判る破片は、押型文の施された破片のみである(第89図1)。ロームの卓越する覆土などをも勘案するなら、あるいは1の破片が示す縄文時代早期中葉の遺構である可能性がある。



第89図 18号土坑出土遺物

第21表 18号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		外に向けわずかにふくらむ形状の部位。	外面-縦位回転押捺による山形押型文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・砂礫 外面-橙色、内面-にぶい黄橙色	縄文時代早期前葉・押型文系。胴部破片。

19号土坑（第90・91図、第22表、図版25・38）

調査範囲の中央やや東寄り、丘陵尾根に位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、かなり歪な楕円形に近く、長径は127cm、短径は109cmである。長軸方位を強いて求めれば、N-30°-Wくらいになりそうである。断面形は、椀状に近く、最深部での深さは22cmである。覆土は、6層に分けられた。全体にロームの卓越する褐色土を主とする。

撚糸文の施された胴部片が1点（第90図1）覆土中より出土している。覆土から見て、縄文時代の遺構と思われ、縄文時代早期の遺構の可能性はある。



第90図 19号土坑出土遺物

第22表 19号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	雲母・白色粒・赤色粒・片岩・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	縄文時代早期前葉・撚糸文系。胴部破片。

20号土坑（第91図、図版25）

調査範囲東半の中央寄り、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。2基の土坑の重複例とも見えるが、一応調査時の所見に従い一端が深く掘り込まれた土坑として記載する。

平面形は、かなり歪な長楕円形で、長径は254cm、短径は107cmである。長軸方位は、N-11°-Wである。長軸方向での断面形は、柄杓形に近く、上述したように南半が楕円形に深く掘り込まれている。北半の柄杓の柄のような部分での深さは15cm前後、南半の最深部での深さは58cmである。覆土は、7層に分けられた。2～4層と5層がよく似ており、一連の堆積土であるかに見えることが1つの土坑と見る一つの根拠ではあるが、1・6層に含まれる軽石がともにAs-Aである可能性もあり、近接した時期に続いて造られた2基の土坑である余地は残ることになる。

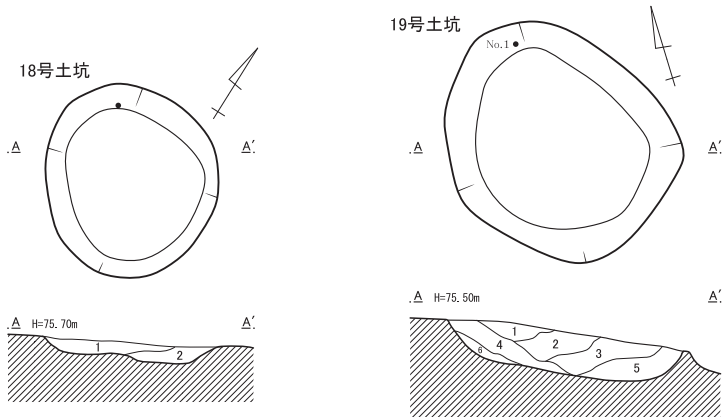
覆土から見て、近世、あるいはそれ以降に属する遺構と考えられる。

21号土坑（第91・92図、第23表、図版25・38）

調査範囲東半の中央寄り、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。2基の土坑が重複する例であり、古い方の切られた土坑を21a号土坑、新しい方を21b号土坑と呼び分け、記載する。

21a号土坑の平面形は、相当歪ではあるが、西半が膨らんだ隅丸長方形に近い形態である。あるいは膨らんだ部分は、21b号土坑の坑壁になるのかもしれない。長軸長は187cm、東半部分での横幅は70cm前後である。長軸方位は、N-70°-Eとなるが、北側の坑壁が本来の長軸方位により近いとすれば、もう少し軸方位は南に振れることになる。西端がやや深くなり、深さが35cm、東半は底面も平坦で、深さ15cmと浅くなっている。覆土には、黒褐色土がかなり含まれるようである。

21b号土坑は、21a号土坑を入れ子状に切っており、土層断面でのみ確認し得た遺構である。上述したように、21a号土坑西半の膨らみが、本遺構の輪郭を表わすとすれば、やや角張った楕円形に近

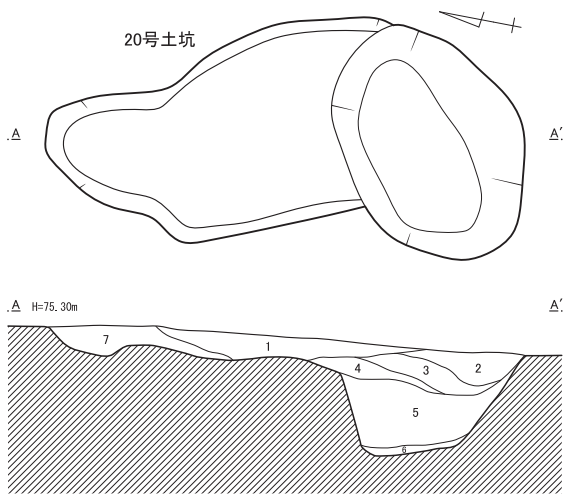


18号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。5mm大の暗褐色土小ブロックを少量含む。
- 2層: 褐色土層。ローム粒を多量に含む。粘性ややあり。

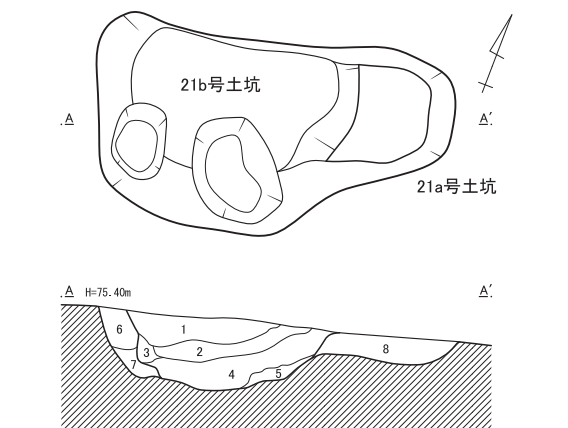
19号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含む。
- 2層: 褐色土層。ローム粒を多量に、5~10mm大の黒褐色土ブロックをかなり含む。
- 3層: 褐色土層。ローム粒を多量に含む。
- 4層: 褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 5層: 褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 6層: 黄褐色土層。炭化物粒を微量含む。



20号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック、2mm大の白色軽石(As-Aか?)を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 2層: 褐色土層。5mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 3層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。しまりあり、粘性ややあり。
- 4層: 褐色土層。5~40mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 5層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。
- 6層: 灰褐色軽石(砂粒?)層。上位は粒子が粗く、やや黄褐色みを帯び、下位は粒子細かくやや黒褐色みを帯びる(噴砂?)。
- 7層: 褐色土層。5~30mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。



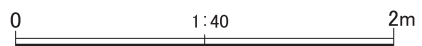
21号土坑土層注記

(21b号土坑)

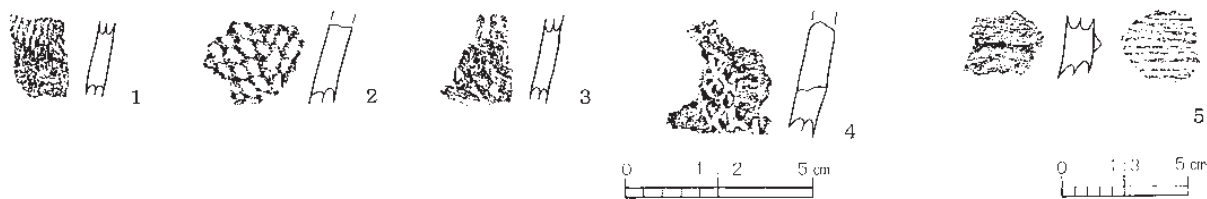
- 1層: 黒褐色土層。ローム粒、炭化物粒を少量含む。
- 2層: 黒褐色土層。ローム粒を多量に、炭化物粒を微量含む。
- 3層: 黒褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 4層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックを少量、ローム粒を多量に含む。
- 5層: 褐色土層。ローム粒を多量に、炭化物粒を微量含む。

(21a号土坑)

- 6層: 黄褐色土層。5~10mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。
- 7層: 黒褐色土層。5~50mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 8層: 褐色土層。ローム粒を多量に含む。



第91図 18~21号土坑平面・断面図



第92図 21号土坑出土遺物

第23表 21号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい赤褐色	縄文時代早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
2	深鉢		おおむね直立する口縁。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・片岩・砂礫 内外面-明褐色	縄文時代早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
3	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位回転押捺による浅い圧痕の山形押型文。内面-ナデ。	白色粒・片岩・砂礫 内外面-橙色	縄文時代早期前葉・押型文系。胴部破片。
4	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位回転押捺による楕円押型文。内面-ナデ。	砂礫 外面-赤褐色、内面-明赤褐色	縄文時代早期前葉・押型文系。胴部破片。
5	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-横位の低い隆帯。その他は無文。内面-横位ないし斜位の条痕。	白色粒・赤色粒・砂礫、繊維 外面-明赤褐色、内面-橙色	縄文時代早期後葉。胴部破片。

い形態が想定できそうである。断面形は、半弧状で、最深部での深さは39cmである。底面の2個のピット状の掘り込みも、本遺構に伴う可能性がある。覆土は5層に分けられ、全体に炭化物粒を含む。

2つの土坑それぞれに伴う遺物を分離することができず、また遺物の大半は、土器細片ではあるが、土器片は、すべて早期に属する縄文土器である（第92図1～5）。覆土に含まれる黒褐色土が多少気になるが、下限を示す土器（同図5）から見て、縄文時代早期後半に属する遺構の可能性はある。

22号土坑（第93・94図、第24表、図版25・38）

調査範囲東半の中央寄り、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する。確認面は、Ⅲ層上面である。

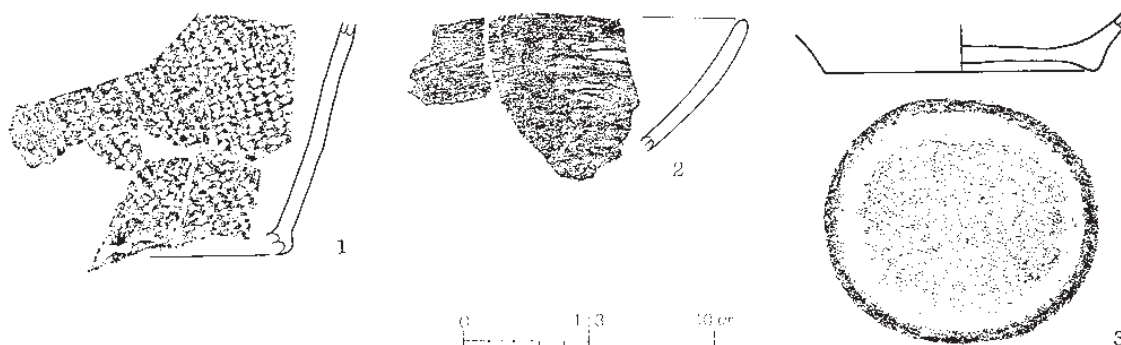
平面形は、歪な円形で、最大径は105cmである。開口部に対し、底面が北西にずれており、北～西側の坑壁は明瞭に挟り込むように掘り込まれている。断面形は、北東～南西方向ではフラスコ形となる。東～南側の坑壁は、立ち上がりが急峻で、微妙に彎曲している。底面はほぼ平坦で、中央での深さは、53cmである。覆土は、7層に分けられた。いずれも暗褐色土とロームの混合土であり、2・5～7層は、微量ながら炭化物粒を含む。全体にしまっているが、下層ほどしまりが強く、粘性が増すようであった。

縄文土器の破片を含めかなりの量の土器片が出土しているが、土坑の時期を示すと思われる土器片のみ図化した（第93図1～3）。1の縄文施文の土器片は、西壁寄りの下層から破片がまとまった状態で出土している。2・3は、同一個体と思われ、微妙な楕円形の底部の無文の鉢になるようである。2には、他に同一個体片がかなりの量あるが、3の底部片とは接合しない。3の底部片は、1の破片と同様に、西壁に寄った位置の坑底から5cm前後の高さで出土している。

1の土器は、混入した縄文土器の可能性も捨て切れない。2・3の土器も類例が見当たらず、位置

浅見山 I 遺跡

付けに苦慮するが、一応弥生時代中期前半の楕円形の鉢（浅鉢）などに関連する土器と考えた。よって本遺構も同時期に帰属する可能性があるとしたい。



第93図 22号土坑出土遺物

第24表 22号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺		おおむね直線的に開く部位。	外面：単節縄文RL。内面：ナデ。	白色粒・赤色粒・片岩・砂礫 内面にぶい橙色、外面橙色	弥生時代中期前半？。底部付近の破片。
2	鉢		わずかに内湾しながら立ち上がる部位。	外面：無文。横位のナデおよびミガキ 内面：外面と同様。	白色粒・赤色粒・角閃石・片岩・砂礫 内面橙色、外面橙色	弥生時代中期前半？。口縁部破片。3と同一個体。
3	鉢	底径（長径）11.0 底径（短径）9.7	やや外反しながら開く部位。上げ底で、底面は楕円形を呈する。	外面：無文。横位のナデおよびミガキ 内面：外面と同様。	白色粒・赤色粒・角閃石・片岩・砂礫 内面橙色、外面橙色	弥生時代中期前半？。底部破片。2と同一個体。

23号土坑（第94図、図版26）

調査範囲東半の中央寄り、丘陵南東斜面を下った位置にある遺構である。南西端を攪乱により壊されている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや不整な長楕円形で、現存長径120cm、短径は65cm、長軸方位は、N-53°-Eである。壁の立ち上がりも明瞭であり、長軸方向での断面形は、鍋底形に近い。底面には、不規則な凹凸が見られる。最深部での深さは、32cmである。覆土は4層で、上層には炭化物粒が含まれる。

微細片のため、図化していないが、縄文土器片が2点出土している。縄文時代の遺構であろうか。

24号土坑（第94図、図版26）

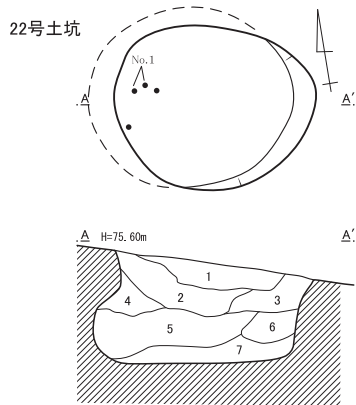
調査範囲東半の中央寄り、丘陵南東斜面を下った位置で検出した遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや角張った長楕円形で、長径180cm、短径は75cm、長軸方位は、N-44°-Wである。長軸方向での断面形は、船底形に近く、最深部での深さは、25cmである。底面には、不規則な凹凸が見られる。覆土は6層で、1・2・6層は黒褐色土を主とする。

図化していないが、無文の縄文土器片が1点出土している。縄文時代の遺構の可能性はある。

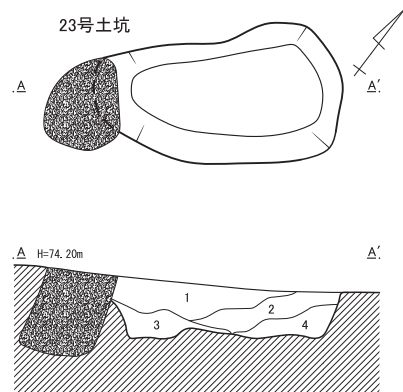
25号土坑（第94・95図、第25表、図版26・38）

調査範囲東半の中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。



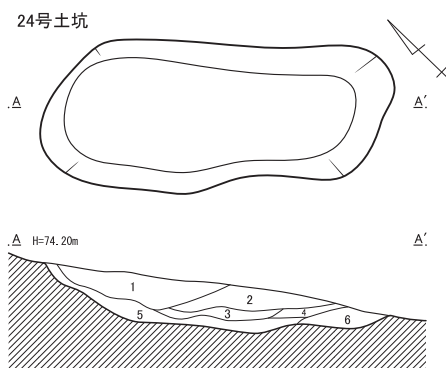
22号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 2層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 3層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを微量含む。
- 4層: 黄褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に少量含む。
- 5層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を少量含む。しまり強く、粘性ややあり。
- 6層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 7層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。しまり強く、粘性ややあり。



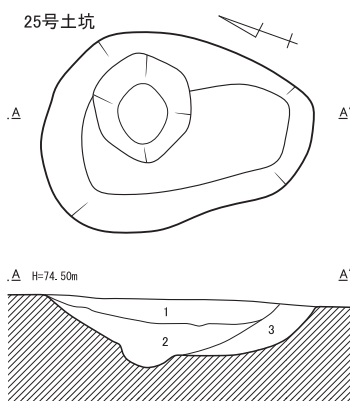
23号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を微量含む。
- 3層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に含む。
- 4層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを微量含む。



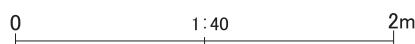
24号土坑土層注記

- 1層: 黒褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 2層: 黒褐色土層。ローム粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 4層: 褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックをかなり含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 5層: 褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロック、黒褐色土小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 6層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロック、ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。



25号土坑土層注記

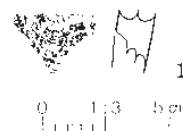
- 1層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 2層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロック、10mm大の小豆色粘土ブロックを少量含む。
- 3層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに弱い。



第94図 22~25号土坑平面・断面図

浅見山 I 遺跡

平面形は、歪な楕円形、あるいは卵形に近い。長径は142cm、短径は100cm、長軸方位は、N-20°-Wである。長軸方向での断面形は、半弧状、あるいは椀状で北東壁に沿ってピット状の掘り込みが見られる。中央での深さは30cm、ピット状の掘り込みの底面からの深さは、5、6cmである。覆土は3層で、しまり、粘性を欠く褐色土である。縄文時代前期初頭かと思われる土器片（第95図1）などが出土している。縄文時代の遺構の可能性がある。



第95図 25号土坑出土遺物

第25表 25号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-残存範囲において無文。内面-大半が剥落、調整不明。	白色粒・片岩・砂礫、繊維 内外面-にぶい黄橙色	縄文時代前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。

26号土坑（第97図、図版26）

調査範囲東半の中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。平面形は、隅丸方形で、長軸長133cm、短軸長は86cm、長軸方位は、N-32°-Wである。溝壁が直立気味に立ち上がるため、断面形は、いずれの方向でも箱形に近い。底面もほぼ平坦であり、中央での深さは、45cmである。覆土は6層で、全体にロームブロックが目立つようである。

27号土坑（第97図、図版26）

調査範囲東半の中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。1号住居跡を大きく切り込んで造られているが、確認面では、輪郭ははっきり見えなかった。

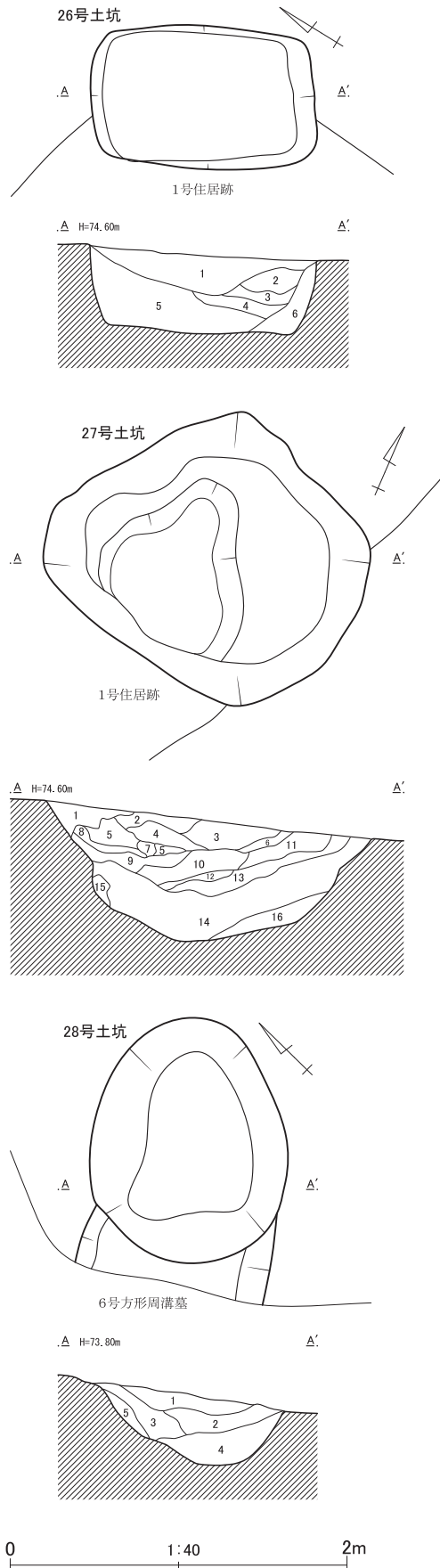
平面形は、角の丸い歪な方形、あるいは菱形に近い。北西-南東方向に主軸があると見立てると、長軸長は166cm、短軸長は150cm、長軸方位は、N-70°-Wとなる。東西方向での最大長は、193cmである。断面形は、傘を逆さにしたような形態である。底面は不明瞭で、西側がやや深くなっている。最深部での深さは、74cmである。覆土は、16層に分けられた。黒褐色土とロームが不規則に混合する様々な土が入り混じって堆積しており、ロームはとくにブロック状を成すものが目立った。9・12層のように、As-Bかと思われるテフラが純層に近い状態で見られる層もあり、大半は埋め戻された土と見てよいであろう。

微細片のため図化していないが、撚糸文施文の縄文土器片1点とともに、細かな時期の判らない土師器片が1点出土している。平安時代の遺構であろうか。

28号土坑（第96・97図、第26表、図版26・38）

調査範囲東半の中央、やや南寄り、丘陵南東斜面で検出した遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。6号方形周溝墓の西隅内縁にあたり、同周溝墓に切られている。2基の土坑の重複例の可能性もあるが、判然としない。一応1基の土坑として記載する。

平面形は、楕円形になろうか。卵形に近い深い掘り込みと浅い掘り込みが結びついた形状になる。長径は155cm、短径は116cm、長軸方位は、N-44°-Eである。断面形は、椀状で、底面が不明瞭である。北東側最深部での深さは、40cmである。



26号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 2層: 褐色土層。5~30mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 3層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
1層よりもやや暗い。
- 4層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 5層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 6層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック少量含む、粘性あり。

27号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。黒褐色粒と若干灰色がかった5~20mm大の黒褐色土小ブロック、ローム粒、ローム小ブロックの斑状の混合土。白色軽石含む。
- 2層: 暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。
- 3層: 黄褐色土層。ローム粒、5~30mm大のロームブロックを主に、黒褐色土を斑状に含む。
- 4層: 黄褐色土層。3層に近いが、ロームがやや多い。ブロックは黄色みが強く、3層のそれより輪郭明瞭。
- 5層: 黄褐色土層。4層よりさらに黄褐色ロームのブロックが多い。5~50mm大の黄色ロームとやや白みがかったロームの2種のブロックあり。
- 6層: 黄褐色土層。ロームと黒褐色土の混合土。ロームの方が多い。
- 7層: 黄褐色土層。黄褐色ハードロームのブロック。
- 8層: 黄褐色土層。黄褐色ロームを主に、少量の黒褐色土を含む。粘性強い。
- 9層: 黄褐色土層。上部に粒子のやや粗い黄褐色テフラ。下部に粒子の細かい(砂層のような)黄褐色あるいは灰褐色テフラ。
- 10層: 黄褐色土層。ローム粒、5~50mm大の白みがかったロームブロックを主に、灰色がかった黒褐色土、10~20mm大の黒褐色土小ブロックを中央に雲状に含む。
- 11層: 黄褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。ロームブロックの輪郭明瞭で、黄色み強い。
- 12層: 黒褐色土層。砂のような黒褐色テフラ層。
- 13層: 黄褐色土層。10層に近いが、ロームブロックが少なく、粒子の粗いロームを主とする。
- 14層: 黄褐色土層。ローム粒、5~80mm大のロームブロックを主に、斑状、雲状に黒褐色土を含む。明白な埋め戻し土。
- 15層: 黄褐色土層。ハードロームのブロック。
- 16層: 黄褐色土層。14層に近いが、さらにロームブロックが多い。粘性あり。

28号土坑土層注記

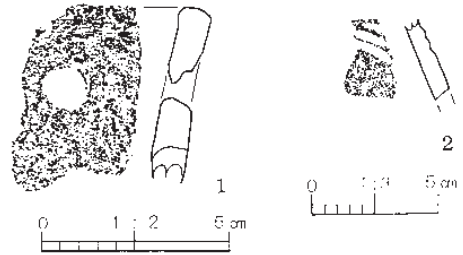
- 1層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大の白色軽石を少量含む。しまり強く、粘性ややあり。
- 2層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む、2mm大の白色軽石を微量含む。しまり強く、粘性ややあり。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒を多量、5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり強く、粘性ややあり。
- 4層: 黒褐色土層。ローム粒をかなり含む、5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり強く、粘性ややあり。
- 5層: 褐色土層。ローム粒を多量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第96図 26~28号土坑平面・断面図

浅見山 I 遺跡

覆土は5層で、黒褐色土が卓越する層が主となるようである。撚糸文系土器と思われる無文の口縁部片1点(第96図1)と弥生土器かと思われる沈線文の見られる土器片が1点(同図2)出土している。

覆土および出土遺物から見て、弥生時代中期前半の遺構の可能性はある。



第97図 28号土坑出土遺物

第26表 28号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直立する口縁。断面角頭状の口唇部。	外面-残存範囲において無文。円形の補修孔あり。ナデ。内面-ナデ。	砂礫 内外面-明赤褐色	縄文時代早期前葉・撚糸文系。口縁部破片。
2	壺?		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-残存範囲において、横位ないし斜位の沈線3条。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・片岩・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	弥生時代中期前半?。胴部破片。

29号土坑 (第99図、図版26)

調査範囲東半の中央南寄り、丘陵南東斜面をかなり下った位置にあり、6号方形周溝墓の溝底で確認した遺構である。周溝覆土下層のロームを多く含む土を除去した後に、新たに確認できたため、方形周溝墓とは別の遺構と判断した。土坑とピットの重複例であろうが、覆土が類似しており、類似した時期の所産であろう。土坑部分を主に記載する。

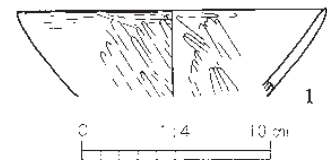
土坑部分の平面形は、やや不整な円形で、最大径は96cm、深さは17cmである。断面形は、鍋底形に近い。周溝に切られているとすれば、本来はかなり深い土坑であったことになる。土坑部分の覆土は3層で、黒褐色土を主とする土である。

30号土坑 (第98・99図、第27表、図版26・38)

調査範囲東半の中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。2号住居跡を大きく切って造られている。

平面形は、歪な三角形、あるいは北西-南東に軸をもつ紡錘形に近い。北西-南東方向での最大長は208cm、これに直交する方向での幅は、163cmである。一旦上端の平面形に沿う形で底面まで掘り上げられ、さらに東壁に沿う形で、東壁の奥まで抉るように土坑状に掘り抜かれている。最深部での深さは、62cmである。覆土は、12層に分けられた。主に暗褐色土、黒褐色土、ロームの混合土からなり、埋め戻された土と見られる。

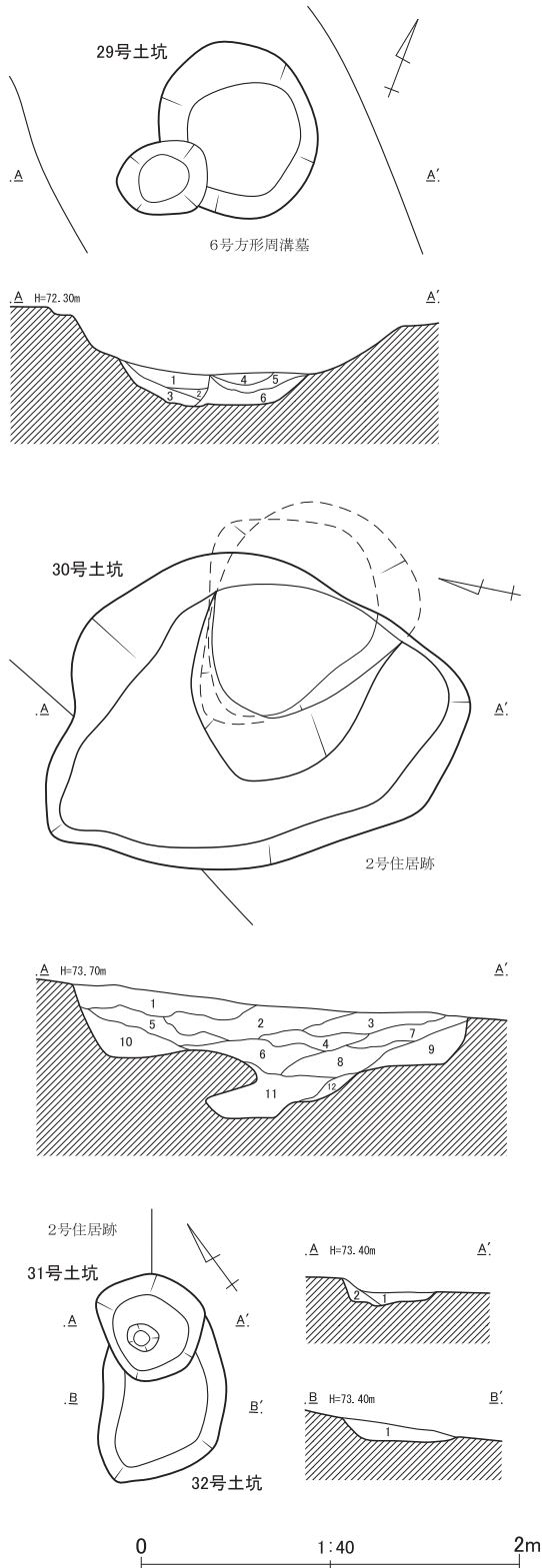
覆土および出土土器から見て、古墳時代前期の遺構の可能性はある。



第98図 30号土坑出土遺物

第27表 30号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径 16.4 器高 (4.5)	やや丸みもち大きく開く器形。	外面-ケズリに近い横位の調整後、斜位のミガキ、ナデ。内面-斜位、横位のミガキ、ナデ。	角閃石・雲母などの砂粒多量 内外面-にぶい橙色	口縁部~体部破片。1/3強残存。



29号土坑土層注記

- 1層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 2層: 黒褐色土層。5mm大の小豆色粘土小ブロックを少量、同大のローム小ブロックを微量含む。
- 3層: 暗褐色土層。5~50mm大の小豆色粘土ブロックを多量に含む。
- 4層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。しまり、粘性ともにあり。
- 5層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともにあり。
- 6層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、同大の小豆色粘土小ブロックをかなり含む。しまり、粘性ともにあり。

30号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~20mm大のロームブロック、5~10mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。
- 2層: 黒褐色土層。5~50mm大のロームブロックを少量、5~20mm大の黒褐色土ブロックをかなり含む。
- 3層: 褐色土層。5~50mm大のロームブロックをかなり含む、5mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。
- 4層: 黒褐色土層。5~20mm大の黒褐色土ブロックを多量に、5~30mm大のロームブロックを少量含む。
- 5層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 6層: 黄褐色土層。5~30mm大のロームブロックを多量に、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 7層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に、5~10mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。
- 8層: 暗褐色土層。5~30mm大のロームブロック、5~10mm大の黒褐色土ブロックをかなり含む。
- 9層: 褐色土層。5~40mm大のロームブロックを多量に、5~20mm大の黒褐色土ブロックをかなり含む。
- 10層: 暗褐色土層。5~30mm大のロームブロックをかなり含む、5mm大の黒褐色土ブロックを微量含む。
- 11層: 暗褐色土層。5~30mm大のロームブロック、5~20mm大の小豆色粘土ブロックを多量に、5~20mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。しまり弱く、粘性ややあり。
- 12層: 褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に、5~30mm大の小豆色粘土ブロックを少量、5mm大の黒褐色土小ブロックを微量含む。しまり弱く、粘性ややあり。

31号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックと同大の黒褐色土ブロックとの混合土。粘性ややあり。
- 2層: 褐色土層。1層に近いが、ロームブロックの比率が高い。

32号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ローム粒、5~20mm大のロームブロックの斑状、斑点状の混合土。As—Aと思われる1~3mm大の白色、灰白色の軽石粒を多量に含む。

第99図 29~32号土坑平面・断面図

浅見山 I 遺跡

31号土坑（第99図、図版27）

調査範囲の東半中央、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。2号住居跡を壊して造られており、32号土坑と重複し、同遺構に切られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、多角形とも見える不整な円形で、最大径は、60cmである。断面形は、鍋底形で、底面中央に径18cmほどのピット状の掘り込みが見られる。ピット状の掘り込みを除いた深さは4cmである。1層とした覆土は、本遺構覆土である2層と大きな違いは見られないが、32号土坑の覆土の可能性が高い。

覆土から見て、近世あるいはそれ以降の所産であろう。

32号土坑（第99図、図版27）

調査範囲東半の中央寄り、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。2号住居跡、31号土坑を壊して造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、歪な楕円形に近い形態になろうか。現存長は65cmである。南側は斜めに削平されており、塵取りのようになっている。最深部での深さは、10cmである。覆土は1層で、A s - Aと思われる軽石粒を多量に含む。

覆土から見て、近世、あるいはそれ以降に属する遺構と考えられる。

33号土坑（第101図、図版27）

調査範囲東半の中央寄り、丘陵尾根から南東斜面にかけ位置する遺構である。2つの土坑の重複例とも見えるが、分離できなかった。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、歪な楕円形に尾が付いたような形態で、最大長は122cm、中央での横幅は55cmである。覆土は3層で暗褐色土、褐色土が主になる。

覆土から見て、縄文時代の遺構の可能性はある。

34号土坑（第101図、図版27）

調査範囲東半の中央南寄り、丘陵南東斜面に位置する遺構である。6号方形周溝墓と重複するが、新旧関係を確認することができなかった。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、微妙に角張った円形、あるいは楕円形になろうか。北西-南東方向での現存長は、48cmである。断面形はU字形で、中央がやや深くなっており、中央最深部での深さは、37cmである。覆土は、7層に分けられた。上層に黒みの強い暗褐色土が集中し、下部ほどロームの多い暗褐色土、褐色土が堆積していた。

微細片のため図化していないが、撚糸文施文の土器片が1点覆土中から出土している。覆土の性状から見て、縄文時代早期前葉の遺構とするのはためらわれるが、少なくとも6号方形周溝墓より古い遺構である可能性は高いと思われる。

35号土坑（第100・101図、第28表、図版27・38）

調査範囲東半の中央南寄り、丘陵南東斜面に位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。平面形は、楕円形である。長径は117cm、短径は81cm、長軸方位はN-30°-Wである。断面形は、船底形で、底面には凹凸が目立つ。最深部での深さは、27cmである。覆土は、5層に分けられた。暗褐色土、黒褐色土とロームの混合土が主で、埋め戻された土と見られる。



第100図 35号土坑出土遺物

覆土中から撚糸文系土器の破片（第100図1）が出土しているが、覆土から見て、縄文時代の遺構とは思えない。縄文時代以降の遺構であろう。

第28表 35号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	片岩・砂礫 内外面-橙色	縄文時代早期前葉・撚糸文系。胴部破片。

36号土坑（第101図、図版27）

調査範囲東半中央の南縁寄り、丘陵南東斜面の裾部にかけて位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや角張っているが、円形に近いと見てよいであろう。最大径は170cmである。断面形は、船底形で、最深部での深さは、24cmである。覆土は、6層で、上層に黒褐色土が多く、下部にゆくほどロームが多くなり、褐色みを帯びるようである。底面直上層である5層には、微量の炭化物が含まれる。

細片のため図化していないが、撚糸文施文の縄文土器片と弥生土器かと思われる条痕文施文の破片が1点ずつ出土している。出土土器と覆土の性状から見て、弥生時代中期前半に属する可能性がある。

37号土坑（第103図、図版27）

調査範囲東半中央の南縁近く、丘陵の南東斜面裾部で検出した遺構である。1号溝、38号土坑を切って造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、長楕円形、あるいは隅丸長方形に近い。長軸長は246cm、短軸長は91cm、長軸方位は、N-23°-Wである。南北方向での断面形は、立ち上がりの不明瞭な皿状で、最深部での深さは、19cmである。覆土は1層で、As-Aと思われる軽石を含む。近世、あるいはそれ以降の遺構である。

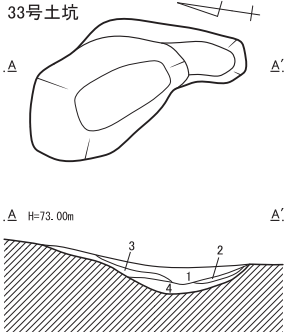
38号土坑（第103図）

37号土坑と北半が重複し、同土坑により壁上部を壊されている。また、1・2号溝にも切られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、卵形に近い。長軸長は116cm、短軸長は75cm、長軸方位は、N-53°-Wである。断面形は、鍋底形に近く、最深部での深さは、39cmである。覆土は、4層に分けられた。いずれもロームブロックや黒褐色土のブロックが目立つ土層であり、埋め戻された土と見られる。

覆土から見て、中世以降に属する遺構であろう。

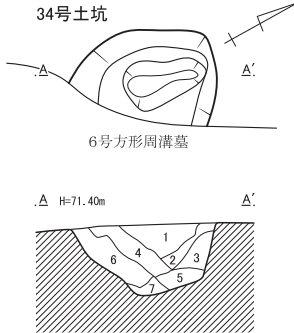
33号土坑



33号土坑土層注記

- 1層:褐色土層。5mm大のローム小ブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 2層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 3層:褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 4層:黄褐色土層。5～10mm大のロームブロック、同大の小豆色粘土ブロックを多量に含む。粘性ややあり。

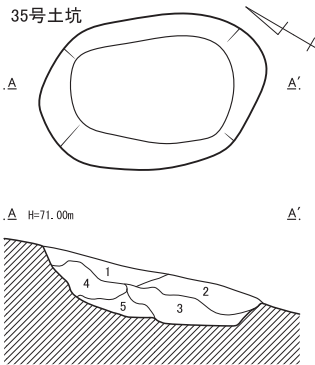
34号土坑



34号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒を含む。白色粒を微量含む。
- 2層:暗褐色土層。黒みの強い暗褐色土を主に、ローム粒、5mm大のローム小ブロックを含む。左端にロームブロック状に密集。
- 3層:暗褐色土層。同量のローム、暗褐色土が斑状に混合。
- 4層:暗褐色土層。暗褐色とロームの混合土。暗褐色土の方が多。
- 5層:暗褐色土層。4層に近いが、上半暗褐色、下半ローム。境界は波状をなし、ロームと暗褐色土が分離している。
- 6層:褐色土層。くすんだ色調のロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。
- 7層:褐色土層。ロームブロックの密集層。若干暗褐色土が混じる。固くしまっている。

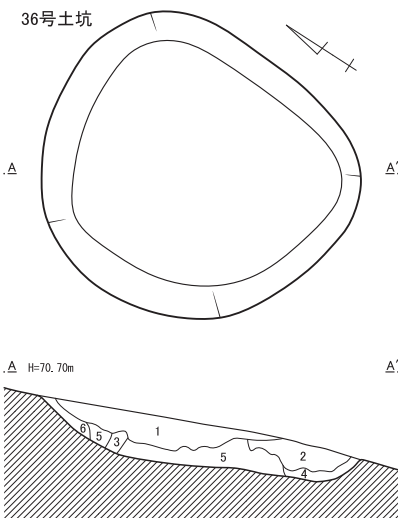
35号土坑



35号土坑土層注記

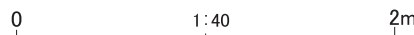
- 1層:暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。よく混じる。少量の白色粒を含む。
- 2層:暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。白色粒を極微量含む。
- 3層:暗褐色土層。黒褐色土とローム、暗褐色土が斑状に混合。黒褐色土は下部に濃集。ロームは60～70mm大のブロックをなす部分あり。
- 4層:暗褐色土層。黒褐色土、ロームが斑状、文字通り迷彩のように混じる。
- 5層:褐色土層。2層に近いが、くすんだ色調のロームが多い。

36号土坑



36号土坑土層注記

- 1層:黒褐色土層。黒褐色土、暗褐色土、ロームの混合土。全体に斑点状。黒褐色土は所々20mm大のブロック状をなす。上半に白色パミスを含む。
- 2層:暗褐色土層。1層に近いが、ロームが多い。5～7mm大の黒褐色土ブロックが点々と見られる。上半のみ白色パミスを斑状に含む。
- 3層:暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。
- 4層:褐色土層。2層に比し、ロームと暗褐色土がよく混合している。ややしまる。
- 5層:褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。所々10～15mm大の暗褐色土ブロックが点在する。微量の炭化物を含む。ややしまる。
- 6層:褐色土層:5層に近いが、暗褐色土が多い。



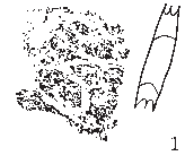
第101図 33～36号土坑平面・断面図

39号土坑（第102・103図、第29表、図版27・38）

調査範囲東半中央の南東寄り、丘陵の南東斜面裾部に位置する遺構である。40号土坑に切られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、隅丸長方形で、長軸長は236cm、短軸長は113cm、長軸方位は、N-66°-Eである。長軸方向での断面形は、船底形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面には凹凸が著しい。最深部での深さは、20cmである。覆土は、10層に分けられた。旧表土に由来する黒褐色土をかなり含む土層と暗褐色土、褐色土を主とする土層からなり、ブロック状の土が目立つ埋積土であった。

縄文土器の微細片が出土しているが（第102図1）、本遺構に伴うものではないであろう。覆土から見て、中世、あるいはそれ以前に属すると思われるが、縄文時代にまで遡る遺構ではない。



第102図 39号土坑出土遺物

第29表 39号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-残存範囲において無文。ナデ。 内面-ナデ。	白色粒・砂礫、 繊維 外面-橙色、内 面-褐灰色	縄文時代前期 初頭・羽状縄 文系?。胴部 破片。

40号土坑（第103図、図版27）

39号土坑を切って造られた土坑である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや角張った楕円形、あるいは隅丸長方形と見ることもできる。長軸長は108cm、短軸長は64cm、長軸方位は、N-24°-Wである。北半は浅く、南半が深く掘り込まれており、南半の底面は、2つのピットが重なり合ったような形状になっている。最深部での深さは、26cmである。覆土は、3層に分けられた。黒褐色土が主で大きさの異なるロームブロックを少量含む土層であった。

覆土上層から青磁片が出土したが、現地調査の時点で紛失してしまった。中世以降の遺構であろう。

41号土坑（第104図、図版27）

調査範囲東半の南東寄り中央、丘陵の南東斜面裾部に位置する遺構である。42号土坑に切られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

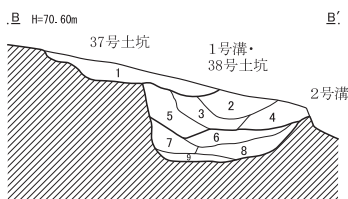
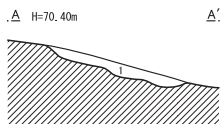
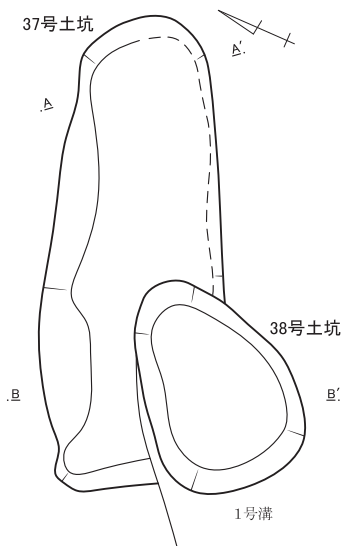
平面形は、西辺側がやや屈曲した隅丸長方形で、長軸長は186cm、短軸長は98cm、長軸方位は、N-42°-Eである。西辺側が段差をなし微妙に浅くなっており、2基の土坑の重複例の可能性も考えられたが、土層断面による限り、その種の痕跡はみられない。長軸方向での断面形は、船底形に近い。最深部での深さは、16cmである。覆土は、6層に分けられた。ロームブロックを多量に含む最下層の8層以外は、暗褐色土、黒褐色土を主とする土層で、わずかずつではあるが、炭化物が混入していた。

覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と思われる。

42号土坑（第104図、図版27）

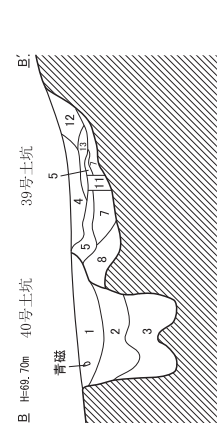
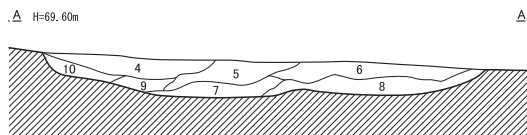
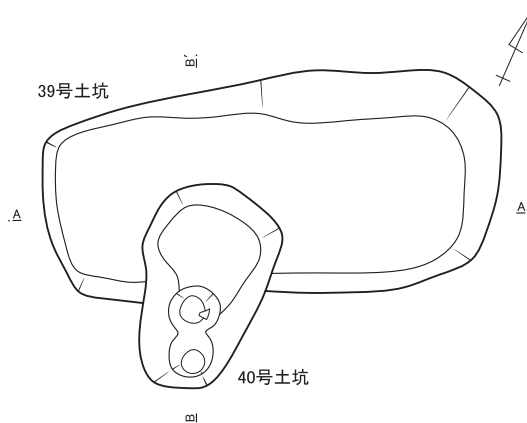
42・43号土坑を切って造られた土坑であり、確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや不整な楕円形である。長径は110cm、短径は90cm、長軸方位は、N-54°-Wである。



37・38号土坑土層注記

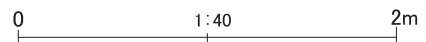
- 1層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、2mm大の白色軽石(A_s—A?)を微量含む。
37号土坑覆土。
- 2層:黒褐色土層。ローム粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。2～5層は、
1号溝覆土。
- 3層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 4層:黒褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 5層:褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 6層:褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、5mm大の黒褐色土小ブロックを微量含
む。しまり、粘性ともにあり。6～9層は38号土坑覆土。
- 7層:褐色土層。5～20mm大のロームブロック、5～30mm大の黒褐色土ブロックを多量に含む。
しまり、粘性ともにあり。
- 8層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、5mm大の黒褐色土小ブロックを少
量含む。しまり、粘性ともにあり。
- 9層:黄褐色土層。5～10mm大のロームブロック、5mm大の小豆色粘土小ブロックを少量含む。
しまり、粘性ともにあり。



39・40号土坑土層注記

- 1層:黒褐色土層。3mm大のローム小ブロック、
炭化物粒を少量含む。1～3層は、40
号土坑覆土。
- 2層:黒褐色土層。5～30mm大のロームブ
ロックを少量含む。
- 3層:黒褐色土層。5～20mm大のロームブ
ロック、5～10mm大の黒褐色土ブ
ロックを少量含む。
- 4層:黒褐色土層。5mm大のロームブロックを少量含む。4～13層は、
39号土坑覆土。
- 5層:黒褐色土層。5～10mm大のロームブロック、5mm大の黒褐色
土小ブロックをかなり含む。
- 6層:暗褐色土層。5mm大のロームブロックをかなり含む。
- 7層:暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックを多量に、5～10
mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 8層:褐色土層。5～20mm大のロームブロックを多量に、黒褐色土
をかなり含む。粘性ややあり。
- 9層:褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に含む。粘性
ややあり。

- 10層:暗褐色土層。5～30mm大のロームブロックを少量含む。粘性
ややあり。
- 11層:黒褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。しま
り弱く、粘性弱い。
- 12層:暗褐色土層。5～30mm大のロームブロックをかなり含む。しま
りあり、粘性弱い。
- 13層:黒褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。しまり、
粘性ともに弱い。



第103図 37～40号土坑平面・断面図

断面形は、皿状で、最深部での深さは、13cmである。覆土は2層で、上層の1層には、A s - Aかと思われる軽石が含まれる。覆土から見て、近世、あるいはそれ以降に属する遺構であろう。

43号土坑（第104図、図版27）

42号土坑に壊され、44号土坑を切って造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、隅丸長方形に近く、長軸長は241cm、短軸長は107cm、長軸方位は、N - 36° - Eである。東半の壁は比較的立ち上がりもしっかりしているが、西半は、底面の凹凸も著しく、立ち上がりも不明瞭である。全体として見れば、断面形は、船底形に近いようである。覆土は、5層に分けられた。ロームや黒褐色土のブロックが目立つこと、炭化物粒が多くの土層に見られることが、特徴になる。

44号土坑と遺物を分けて取り上げることができなかったが、カワラケかと思われる微細な土器片が2点出土している。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と思われる。

44号土坑（第104図、図版27）

43号土坑の底面で検出した土坑である。平面形は、不整な円形で、最大径は95cm、最深部での深さは、21cmである。覆土は、最下層の1層のみ残存した模様である。中世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。

45号土坑（第104図、図版28）

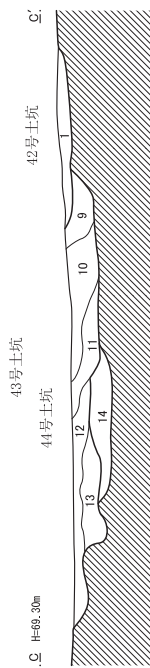
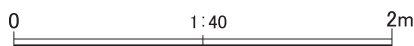
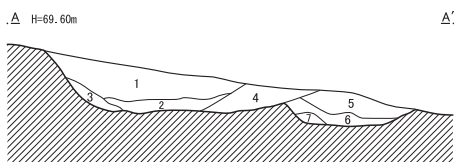
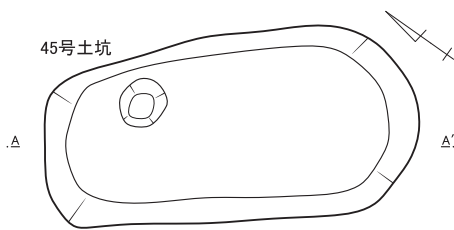
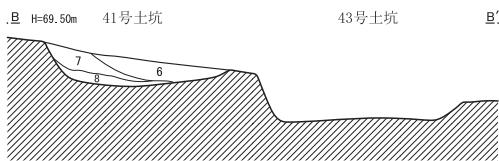
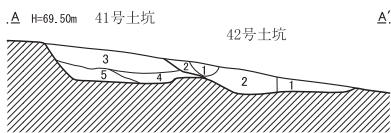
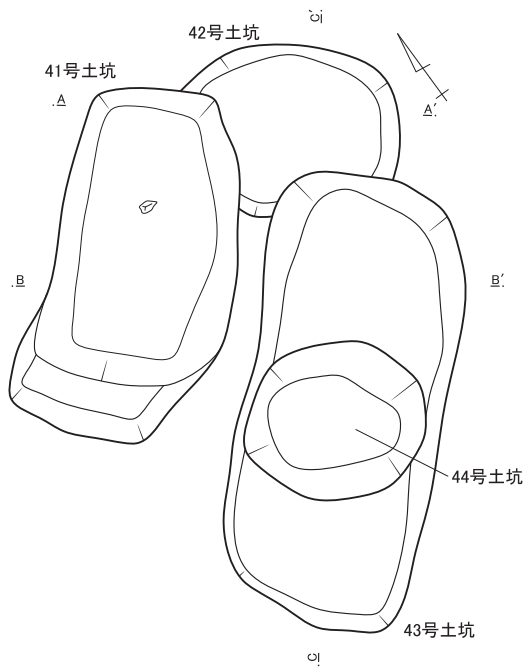
調査範囲東半中央の南寄り、丘陵の南東斜面裾部に位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。南東寄りの底面中央には段差があり、段差を境に黒褐色土を主とする覆土と暗褐色土を主とする覆土と違いが見られる。南東側には、より小さな土坑が重複していた可能性があるが、他に2つの土坑とする痕跡が見られないため、一つの土坑として記載する。

平面形は、隅丸長方形、あるいは長楕円形である。長軸長は196cm、短軸長は100cm、長軸方位は、N - 35° - Wである。全体として断面形は、船底形に近いが、上述したように底面には段差があり、また、底面の北寄りの位置に、小ピット状の掘り込みが見られる。最深部での深さは、25cmである。覆土は、7層に分けられた。ロームや黒褐色土のブロックが目立つ覆土であり、やはり埋め戻された可能性があるように思われる。細片であり図化していないが、撚糸文系土器の破片が出土している。覆土が類似することから見て、周辺の土坑と同様に中世以降の遺構であろう。

46号土坑（第105図、図版28）

調査範囲東半の南東寄り、丘陵南東斜面の裾部に位置する遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。平面形は、隅丸長方形、あるいは長楕円形で、長軸長は135cm、短軸長は63cm、長軸方位は、N - 38° - Eである。全体的な断面形は、船底形に近いが、北西壁に接してピット状に深さが増す部分があり、また、底面には凹凸が著しい。最深部は、ピット状の掘り込み部分で、深さ23cm、それ以外の部分の深さは、5～8cmである。覆土は、5層に分けられた。上層の1～3層は、黒褐色土を主とする土層である。

覆土から見て、中世以降の遺構であろうか。



41～44号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大の白色軽石を少量含む。1・2層は、42号土坑覆土。
- 2層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 3層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を少量含む。3～8層は、41号土坑覆土。
- 4層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。
- 5層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 6層:黒褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を少量含む。
- 7層:黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
- 8層:褐色土層。5～40mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 9層:褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。9～13層は、43号土坑覆土。
- 10層:暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックをかなり含み、5mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。炭化物粒を微量含む。
- 11層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロック、黒褐色土ブロックを少量含み、炭化物粒を微量含む。
- 12層:暗褐色土層。5～30mm大のロームブロック、10mm大の黒褐色土ブロックを少量、炭化物粒を少量含む。
- 13層:褐色土層。5～20mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。
- 14層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。44号土坑覆土。

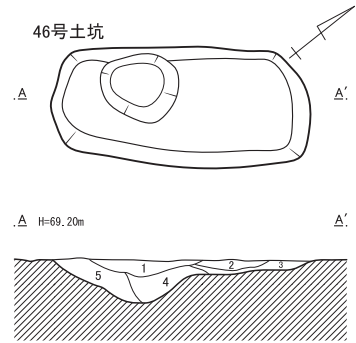
45号土坑土層注記

- 1層:黒褐色土層。5～10mm大のロームブロック、黒褐色土ブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 2層:黒褐色土層。5～10mm大の黒褐色土ブロックをかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 3層:黒褐色土層。5mm大のローム小ブロック、黒褐色土小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 4層:黒褐色土層。2層類似。黒褐色土、ロームが少ない。粘性ややあり。
- 5層:暗褐色土層。5～20mm大の黒褐色土ブロックをかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 6層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、10mm大の黒褐色土ブロックを微量含む。粘性ややあり。
- 7層:暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックを多量に、5mm大の黒褐色土小ブロックを微量含む。粘性ややあり。

第104図 41～45号土坑平面・断面図

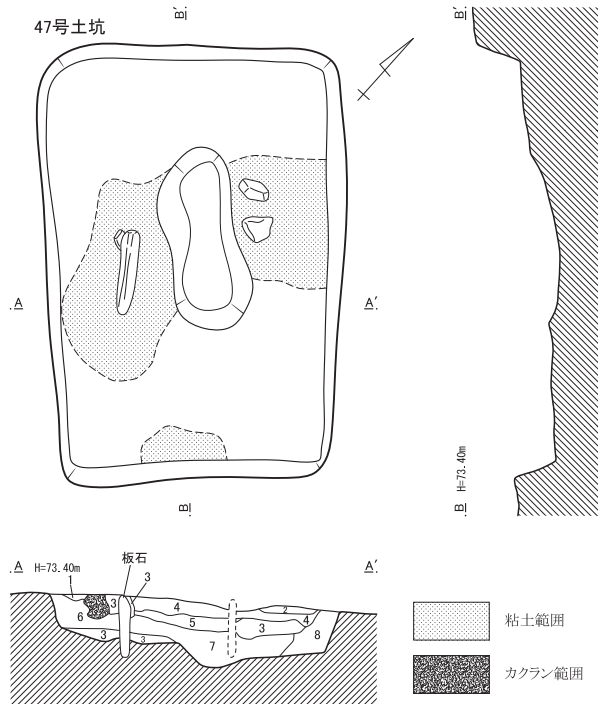
46号土坑土層注記

- 1層: 黒褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。
- 2層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。1層より暗い。
- 3層: 黒褐色土層。5~20mm大のロームブロックをかなり含む。しまり弱く、粘性ややあり。
- 4層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 5層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。粘性ややあり。



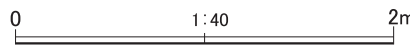
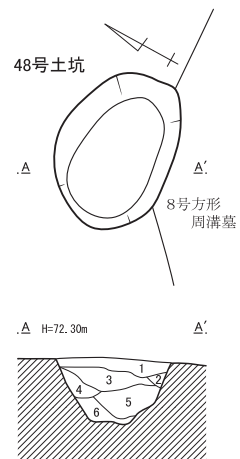
47号土坑土層注記

- 1層: 褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、同大の黒褐色土小ブロック、炭化物粒を微量含む。
- 3層: 灰白色土層。2mm大の白色軽石、炭化物粒を少量含む。しまり強く、粘性強い、粘質土、埋葬施設の補強材。
- 4層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック、5~20mm大の白色粘土ブロック、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 5層: 灰白色土層。粘質土、5mm大のローム小ブロック、片岩片を少量含む。補強材の粘土と共に埋葬施設の片岩が内側へ倒れたものと思われる、しまり強く、粘性強い。
- 6層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 7層: 褐色土層。5~50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 8層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。



48号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。2mm大の白色軽石をかなり含み、5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロック、炭化物粒を少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック、2mm大の白色軽石をかなり含み、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 3層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大の白色軽石を少量含む。
- 4層: 暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に、2mm大の白色軽石を微量含む。
- 5層: 暗褐色土層。5mm大のロームブロック、2mm大の白色軽石を少量含む。
- 6層: 暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックをかなり含み、2mm大の白色軽石、炭化物粒を少量含む。



第105図 46~48号土坑平面・断面図

47号土坑 (第105図、図版28)

調査範囲東半の中央北寄り、丘陵尾根筋の端に位置する遺構である。表土除去作業中に、長さ50cmほどの板状に割り取られた緑泥片岩の大石が出土しており、何らかの石組みを伴う大きな土坑であることが確認できた。確認時の覆土についての所見では、近・現代の遺構の可能性も考慮されたが、そ

浅見山 I 遺跡

れは、上層の覆土が乱されていたため、実際精査してみても、極端に時期の新しい遺構と見ることはできないと判断された。確認面は、Ⅲ層上面である。

結論から先に述べれば、四辺が直線的な形の掘り込み内に緑泥片岩の板石や礫を並べ囲いとし、ロームブロックや粘土質の土を敷き詰めた遺構であり、墓坑の一種と見るのが最も自然であろう。土坑本来の使用面は、叩き締められたかに見える5層上面、あるいは土質から見て、4層の上面と考えられる。したがって、調査ができたのは、土坑の使用面以下の充填土などにより造作された「掘り方」に相当する部分ということになる。

平面形は、隅丸長方形で、長軸長は230cm、短軸長は156cm、長軸方位は、N-43°-Wである。断面形は、箱形に近く、四壁は、かなり急峻に立ち上がる。掘り方中央には、長径96cm、短径36cmの長楕円形の浅い掘り込みが見られる。中央の掘り込みを含めた深さは、33cmである。覆土は、8層に分けられた。1・2層は、土坑の使用面より上の堆積土、土坑本体の埋め土とも思えるが、局所的にしか残存しておらず、断定できない。3層は、灰白色の粘土質の土で、板石の根固めなどに用いられた補強材、4・5層は、石囲いの中の床の造作その他に用いられた床材であろう。掘り方の底面に一部の板石を打ち込んで、あるいは拳大～人頭大の礫を配して、一定の空間を囲み、その内部を埋葬施設として利用したと推定される。

微細片のため図化していないが、ハケメの見られる胴部片が4点出土している。覆土である1・2層土の所見に従うなら、中世、あるいはそれ以降の遺構と見られる。

48号土坑（第105図、図版28）

調査範囲東半の中央北東寄り、丘陵尾根筋に位置する遺構である。8号方形周溝墓を切って造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや不整な楕円形で、長径は85cm、短径は62cm、長軸方位は、N-98°-Wである。断面形は、逆台形に近く、最深部での深さは、35cmである。覆土は、6層で、いずれの層にも、径2mm大の白色軽石粒が含まれるようであった。

覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と見られる。

49号土坑（第106図、図版28）

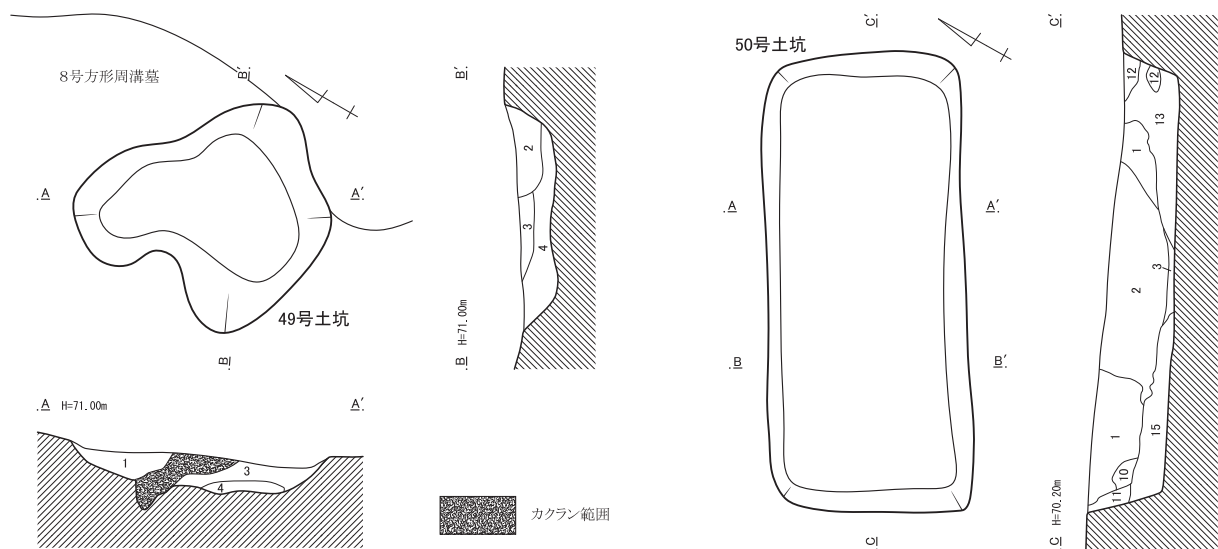
調査範囲東半の中央北東寄り、丘陵尾根筋に位置する遺構である。8号方形周溝墓を切って造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、2つの楕円形が合したような不整な形態で、北西-南東方向での最大長は、130cmである。断面形は、鍋底形で、底面には凹凸が著しい。最深部での深さは、20cmである。覆土は、4層に分けられた。全体にロームブロックを不規則に含む攪拌されたような覆土である。

近世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。

50号土坑（第106図、図版28）

調査範囲東半の東寄り、丘陵南東斜面で検出した遺構である。8号方形周溝墓南東溝、9号方形周溝墓北西溝、10号方形周溝墓北西隅の3つの溝に囲まれた、方形周溝間の空隙のほぼ中央に位置する。

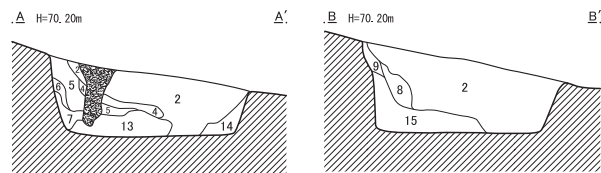


49号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。色調は3層よりやや暗い。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、炭化物粒を少量含む。新しいピット覆土の可能性あり。
- 3層: 黒褐色土層。5~30mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

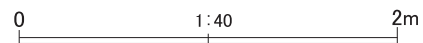
50号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。黒褐色土と暗褐色土の混合土。ローム粒を少量、上部に白色粒(軽石か?)を微量含む。粘性ややあり、しまっている。
- 2層: 暗褐色土層。2層に近いが、1層のロームが暗い色調を帯びるのに対し、明るい色調のロームが多い。
- 3層: 暗褐色土層。2層に近いが、ローム粒・ロームブロックが多い。
- 4層: 黒褐色土層。1層に近いが、黒褐色土が多い。
- 5層: 暗褐色土層。1層に近いが、暗褐色土が多い。
- 6層: 暗褐色土層。3層に近いが、ロームを斑状に含む。
- 7層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土、ロームが斑状に混合する。ロームは5~40mm大のブロック状をなす。
- 8層: 暗褐色土層。2層に近いが、黒褐色土が少ない。
- 9層: 暗褐色土層。8層に近いが、ロームが多い。黒褐色土の量は、2層>15層>8層>9層。



- 4層: 黒褐色土層。5~40mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。

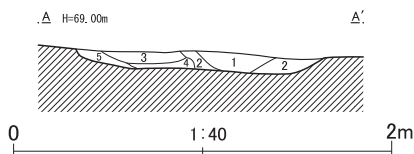
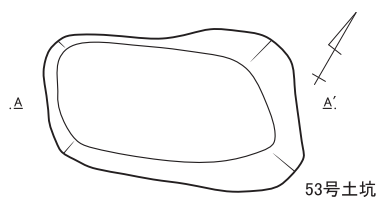
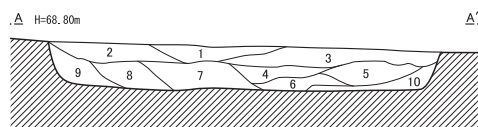
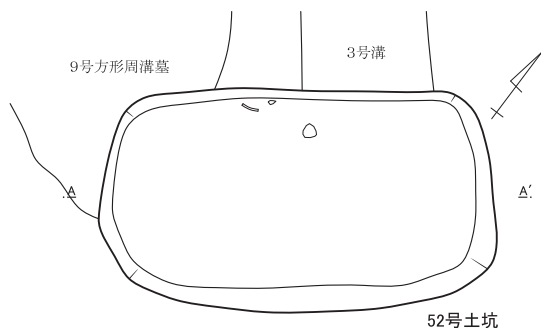
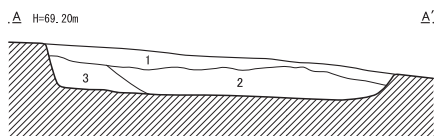
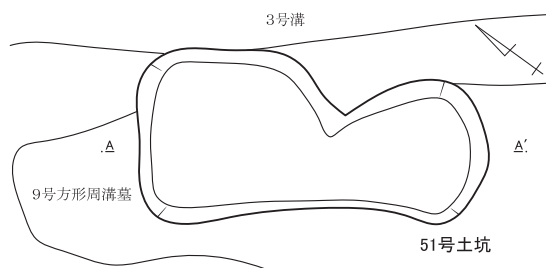
- 10層: 暗褐色土層。2層土にローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量含む。
- 11層: 暗褐色土層。黒褐色土、暗褐色土、ロームが2層に比べ分離し、斑状をなす。
- 12層: 暗褐色土層。黒褐色土を斑状に含み、ローム粒、5~20mm大のロームブロックが少量点在する。黒褐色土、ロームを右上端に含む。
- 13層: 褐色土層。黒褐色土を不規則に含み、ローム粒、5~20mm大のロームブロックが少量点在する。
- 14層: 暗褐色土層。黒褐色土、ロームが迷彩様に混合する。
- 15層: 暗褐色土層。2層土とローム(5~20mm大のロームブロックが左上端に集中)の混合土。2層に比し、暗褐色土が多く、黒褐色土が少ない。



第106図 49・50号土坑平面・断面図

確認面は、Ⅲ層上面である。

確認作業の時点で、方形周溝墓の覆土に類似する黒みの強い暗褐色土の覆土で、しかも周溝に長軸が平行する土坑であることから、方形周溝墓と関連する埋葬施設の一種であることが予想された。土層観察用のベルトをキの字に残し、少しずつ覆土を掘り下げ、平坦にしては、埋葬施設の痕跡を確認する作業を順次繰り返し、開掘した。しかしながら、この面的に埋葬施設の痕跡を探る作業では、明瞭な痕跡を捉えることができなかった。



51号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 2層:暗褐色土層。5~30mm大のロームブロック、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 3層:暗褐色土層。5~30mm大のロームブロックを多量に、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。

52号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量、2mm大の白色軽石をかなり含む。
- 2層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、白色軽石をかなり含み、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 3層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大の白色軽石をかなり含む。
- 4層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、2mm大の白色軽石を少量含む。
- 5層:暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に、2mm大の白色軽石、5~10mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。
- 6層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大の白色軽石、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 7層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを多量に、同大の黒褐色土小ブロックをかなり含み、2mm大の白色軽石少量含む。
- 8層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、2mm大の白色軽石を少量含む。
- 9層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 10層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。

53号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。5~20mm大のロームブロック、2mm大の白色軽石をかなり含む。
- 2層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、2mm大の白色軽石をかなり含む。
- 3層:暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。
- 4層:黒褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 5層:暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック、10mm大の黒褐色土ブロックを少量含む。粘性ややあり。

第107図 51~53号土坑平面・断面図

平面形は、隅丸長方形で、長軸長は243cm、短軸長は106cm、長軸方位は、N-61°-Eである。四辺はほぼ直線的であり、坑壁の立ち上がりも急峻である。断面形は、箱薬研に近い。底面は、北東側が南西側に比し、わずかに高くなるが、ほぼ平坦である。北東端での深さは29cm、南西端での深さは49cmである。

覆土は、15層に分けられた。黒褐色土、暗褐色土、ロームの混合土からなり、北東壁沿いにブロッ

ク状のまとまりをなす細かな層が確認できたが、全体としては、1・2層とした色調が微妙に異なる以外大きな違いの見られない比較的均質な暗褐色土が、覆土の大半を占めていた。つまり、土坑などに多く見られる掘削土がそのまま投げ込まれたようなロームと他の土が斑状に入り乱れる堆積状態ではなく、しかも水平堆積に近い数層の流入土からなる、住居跡覆土にしばしば見られる堆積状態とも異なるようであった。

縄文時代早期の土器の微細片が9点出土している以外、遺物は皆無であった。覆土をすべて採取し、篩で選別したが、玉類などの遺物は検出できなかった。覆土などから見て、古墳時代前期に属する遺構と思われる。

51号土坑（第107図、図版28）

調査範囲東半の南東寄り、丘陵南東斜面の裾部に位置する遺構である。3号溝、9号方形周溝墓南西溝を切って造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、ひょうたん形に近く、2つの土坑が重複したようにも見えるが、土層断面ではその種の痕跡は見られない。よって、中央がくびれた形態の1つの土坑として記載する。長軸長は185cm、短軸長は64cm、長軸方位は、N-36°-Wである。長軸方向での断面形は、船底形で、底面はほぼ平坦である。最深部での深さは、23cmである。覆土は3層で、黒褐色土とロームの混合土からなる土である。

縄文時代早期の土器微細片以外には、刷毛目の入った甕胴部の微細片が1点出土しているのみである。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

52号土坑（第107図、図版29）

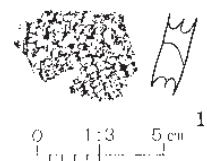
調査範囲東半の南東寄り、丘陵南東斜面の裾部に位置する遺構である。3号溝、9号方形周溝墓南西溝を切って造られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、隅丸長方形で、長軸長は207cm、短軸長は118cm、長軸方位は、N-53°-Eである。底面は平坦で、壁の立ち上がりも直立気味であり、断面形は、箱形に近い。最深部での深さは、24cmである。覆土は10層に分けられた。いずれも暗褐色土を主に、黒褐色土やロームの小ブロックを含む土である。

灰褐色の瓦質の土器微細片が1点出土している。中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

53号土坑（第107・108図、第30表、図版29・38）

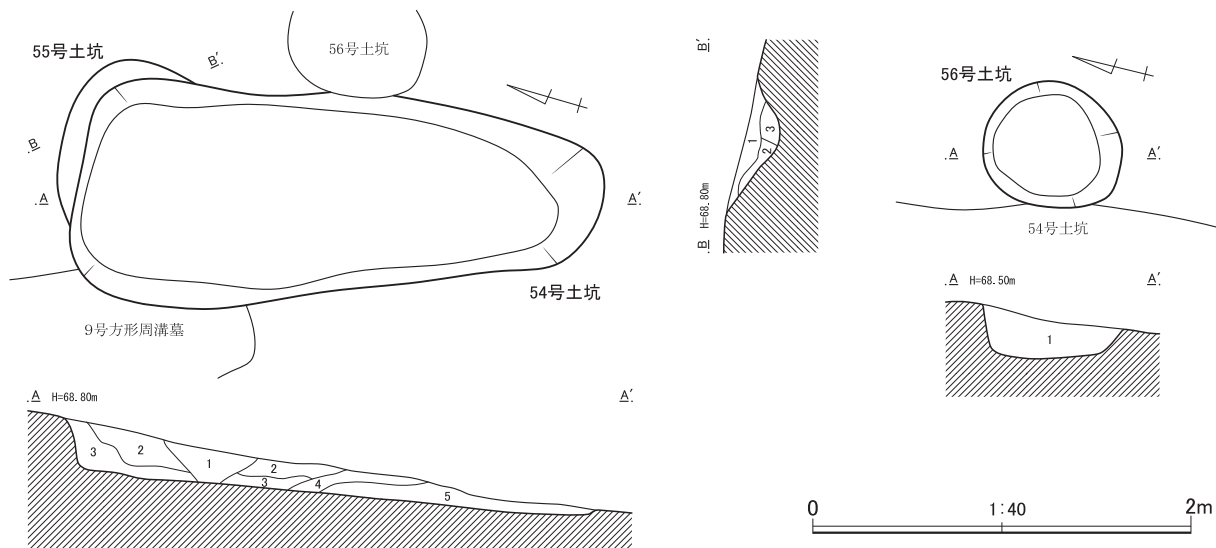
調査範囲東半の南東寄り、丘陵南東斜面の裾部に位置する遺構である。9号方形周溝墓の方台部中央にあるため、同周溝墓の埋葬施設の可能性も考えたが、覆土の性状は、より新しい時期の遺構であることが明白であった。確認面は、Ⅲ層上面である。



第108図 53号土坑出土遺物

第30表 53号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-外面に右撚り0段多条の縄文。内面-横位ないし斜位の条痕。	白色粒・角閃石繊維 外面-明赤褐色、 内面-黒褐色	縄文時代前期 初頭・羽状縄文系。胴部破片。



54号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。2mm大の白色軽石をかなり含み、5mm大のローム小ブロック、炭化物粒を少量含む。新しいピット覆土の可能性あり。
- 2層: 暗褐色土層。2mm大の白色軽石をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 3層: 暗褐色土層。2mm大の白色軽石、5～10mm大のロームブロックをかなり含む。
- 4層: 暗褐色土層。2mm大の白色軽石をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを微量含む。
- 5層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、2mm大の白色軽石、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。

55号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、2mm大の白色軽石、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。炭化物粒を少量含む。
- 2層: 褐色土層。5～30mm大のロームブロックを多量に、同大の黒褐色土ブロックをかなり含む。2mm大の白色軽石、炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。
- 3層: 黄褐色土層。黒褐色土をかなり含み、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。

56号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5～30mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

第109図 54～56号土坑平面・断面図

平面形は、歪んだ隅丸長方形で、長軸長は132cm、短軸長は77cm、長軸方位は、N-60°-Eである。断面形は、船底形で、底面には微妙な凹凸が見られる。最深部での深さは、10cmである。覆土は、1～5層で、ロームブロックを含む暗褐色土が主になる。

縄文土器の細片が1点出土しているが（第108図1）、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

54号土坑（第109図、図版29）

調査範囲東半の南東縁近く、丘陵南東斜面の裾部に位置する遺構である。55号土坑、9号方形周溝墓南東溝と重複し、両遺構を切って造られている。56号土坑に東壁の一部を壊されている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、南側に向かって先細りとなる長楕円形である。隅丸長方形で、長軸長は280cm、短軸長は105cm、長軸方位は、N-17°-Wである。北壁は直立気味であるが、南壁は壁の立ち上がり自体不明瞭なため、長軸方向での断面形は、L字状に近い。北壁側の最深部での深さは21cmである。覆土は4層で、全体にロームブロックが顕著に見られ、また2mm大の白色軽石を含むようである。

撚糸文系土器の微細片が出土しているが、伴う遺物ではない。周辺の土坑と同様に、中世、あるいはそれ以降の遺構と見てよいであろう。

55号土坑（第109図、図版29）

54号土坑と重複し、過半が壊されている遺構である。残存部分は、土坑の北縁のわずかな範囲であろう。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、円形、あるいは楕円形であろうか。現存最大長は、80cmである。断面形は、V字形に近いが、へりの部分だからであろう。現存最深部での深さは、18cmである。覆土は3層で、やはり2mm大の白色軽石が目立つようである。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

56号土坑（第109図、図版29）

54号土坑を切って造られた土坑である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや歪な円形で、最大径は73cmである。断面形は、鍋底形で、最深部での深さは、21cmである。覆土は1層で、54・55号土坑の覆土に類似した暗褐色土である。覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

57号土坑（第110・111図、第31表、図版29・38）

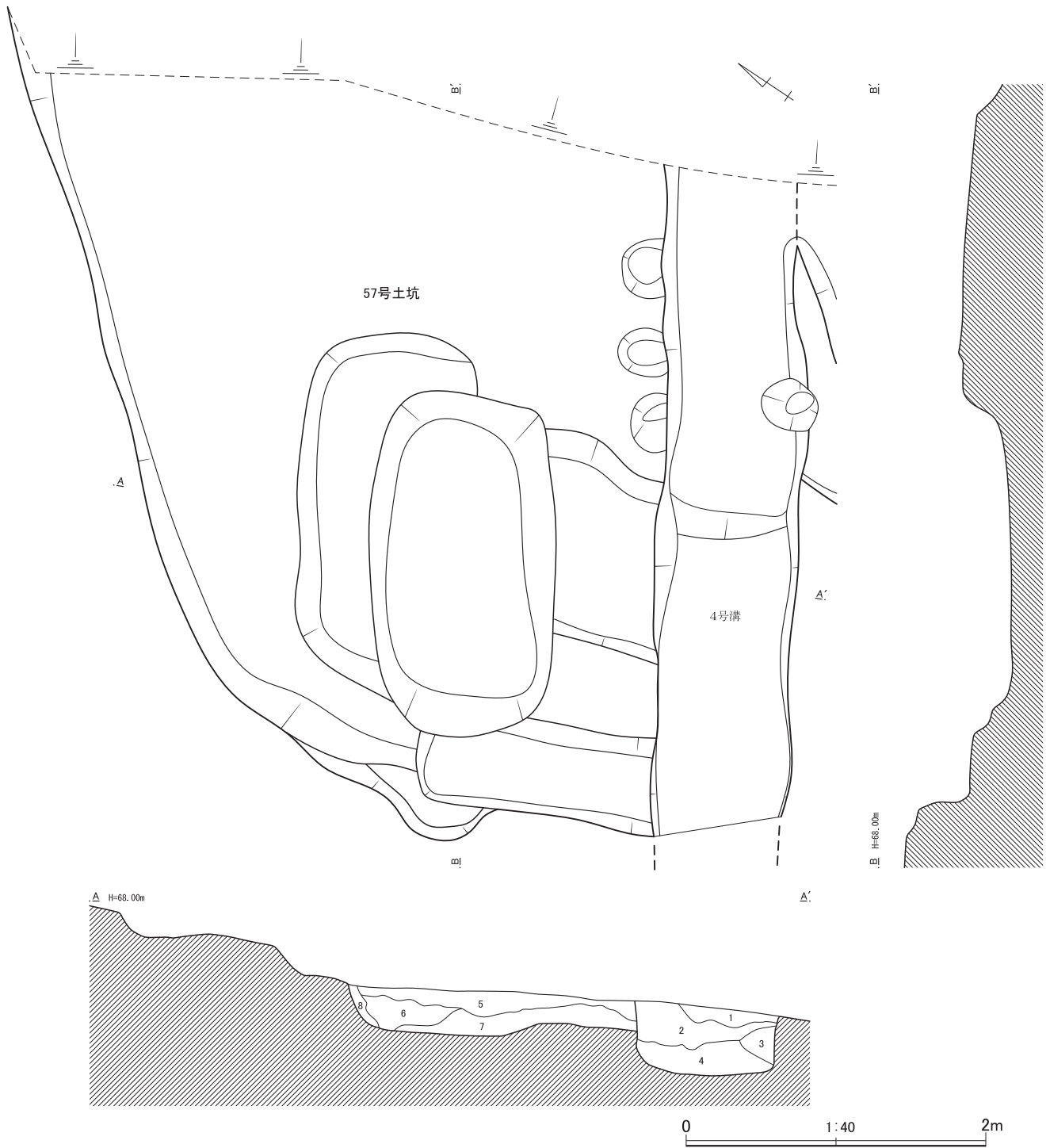
調査範囲東半の南東縁近く、丘陵南東斜面の裾部に位置する遺構である。4号溝に切られており、東半は、攪乱により壊されている。確認面は、Ⅲ層上面である。

全体を土坑と総称したが、集水のための施設や作業空間かと思われる全体を形作る大きな掘り込み（集水部と仮称する）と、水溜めや溜め井に類する西寄り中央の土坑状の掘り込み（北から水溜め1、水溜め2）と導水施設と見られる南東側の細長い掘り込み（西から導水部1・2）の3種の施設が複合した遺構と考えることができる。

残存する集水部の平面形は、扇形に近い。北東－南西方向での現存長は、4.69mである。壁際は微妙に掘りくぼめられおり、水溜めや導水部に水が集まりやすくなっているように見える。集水部の深さは、水溜めの脇で16cmである。

水溜め1は、現状では南側の壁を欠き、塵取り状となっているが、本来は水溜め2同様に土坑状であったと思われる。水溜め1の平面形は、隅丸長方形で、長軸長は242cm、短軸長は推定で118cm前後と見られる。長軸方位も、N-58°-Eあたりと推定できる。集水部底面からの最深部の深さは、24cmである。水溜め2は、水溜め1と重複し、それを切って設けられた水溜めである。丁度水溜め1が南西に平行移動したような位置にあたるが、斜面のため集水部からの深さは、倍加している。平面形は、隅丸長方形で、長軸長は225cm、短軸長は124cm、長軸方位は、N-56°-Eである。集水部底面からの最深部までの深さは、60cm、水溜め1と水溜め2の底面の比高差は、36cmである。

土層断面では、少なくとも導水部1は、水溜め2とともに開口していた段階があることが判る。平面形は、水溜め2から4号溝の方に延びる溝状で、溝幅は130cm前後である。中央での集水部底面からの深さは52cm、水溜め2と導水部1の底面の比高差は、12cmである。水溜め2を含めて、覆土は4層で、いずれもローム小ブロックを含む粘性の強い暗褐色土である。導水部2は、水溜め2の南西端



57号土坑土層注記

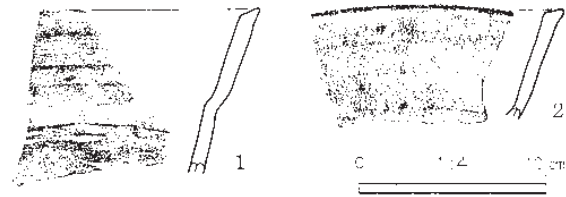
- 1層:暗褐色土層。2mm大のAs-Aをかなり含み、5~10mm大のロームブロックを少量含む。1~4層は、4号溝覆土。
- 2層:暗褐色土層。2、3mm大のAs-A、5~10mm大のロームブロックをかなり含む。
- 3層:暗褐色土層。2、3mm大のAs-Aをかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 4層:暗褐色土層。2mm大のAs-Aをかなり含み、5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。

- 5層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性あり。
- 6層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、炭化物粒を微量含む。粘性あり。
- 7層:暗褐色土層。砂粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性あり。
- 8層:暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に含む。粘性あり。壁際には一部鉄分の沈着が見られる。

第110図 57号土坑平面・断面図

から延びる溝状の掘り込みである。水溜め1・2どちらかに伴う導水施設と見てよいであろう。中央での溝幅は62cm、集水部底面からの深さは、35cmである。

破片ばかりではあるが、覆土中から中世の素焼き土器片、瓦質土器片、あるいは埴輪片がかなりの量出土している。図化した内耳鍋も（第110図1・2）、覆土中から出土したものである。15世紀後半～16世紀前半に属そうか。また、水溜め2の北隅近くの壁際で、杭かと思われる炭化していない木材が出土している。覆土および出土遺物から見て、中世の遺構と考えられる。



第111図 57号土坑出土遺物

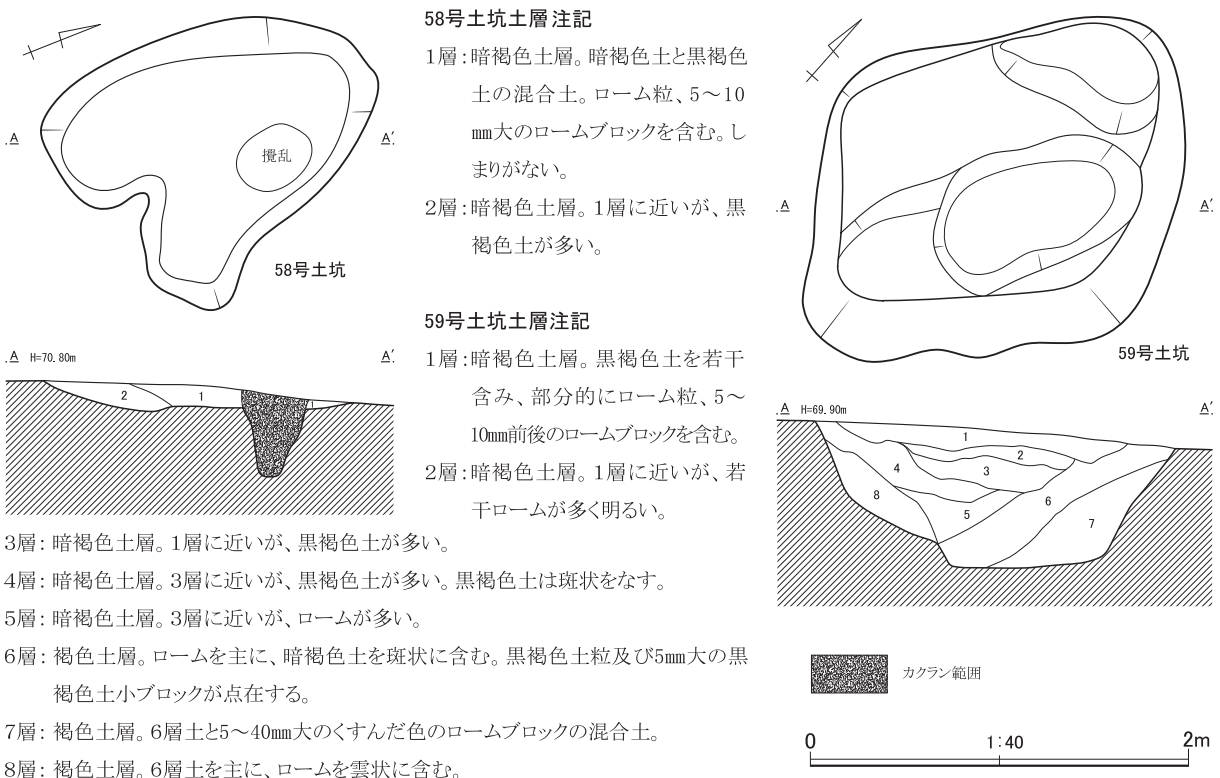
第31表 57号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋		屈曲部から内彎気味に開く口縁。	外面－横位のナデ。炭化物付着。 内面－横位のナデ。	白色粒・片岩片などの細砂多量 内外面－黒褐色	口縁部～体部破片。
2	内耳鍋		屈曲部から内彎気味に開く口縁。	外面－横位のナデ。炭化物付着。 内面－横位のナデ。	白色粒・片岩片などの細砂多量 内外面－黒褐色	口縁部～体部破片。

58号土坑（第112図、図版29）

調査範囲東半の北東寄り、丘陵尾根筋で検出した遺構である。北東壁寄りの一部を攪乱により壊されている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、2つの楕円形が合したような不整な形態で、南北方向での最大長は180cm、東西方向での最大長は142cmである。南北方向での断面形は、皿状で、底面には、凹凸が著しい。最深部での深さは、14cmである。覆土は2層である。覆土から見て、縄文時代の遺構であろうか。



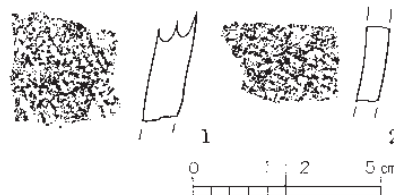
第112図 58・59号土坑平面・断面図

浅見山 I 遺跡

59号土坑（第112・113図、第32表、図版29・38）

調査範囲東半の東寄り、丘陵南東斜面で検出した遺構である。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや不整な平行四辺形に近い。一応北東-南西を長軸方向とすると、長軸長は190cm、短軸長は167cm、長軸方位は、N-48°-Eである。北東-南西方向での断面形は、段差をもつ鍋底形、バケツ形で、最深部での深さは、84cmである。北隅と東隅寄りが深くなっており、北西半は底面がやや浅い。覆土は、8層に分けられた。1～5層は、黒褐色土を含む暗褐色土、6～8層は、ロームがやや多い褐色土で、下部の土は、まとまって流入したようである。縄文時代前期後半あたりの可能性のある縄文のみ施された胴部片が出土しているが(第113図1・2)、時期を確言するのは難しい。縄文時代の遺構と思われる。



第113図 59号土坑出土遺物

第32表 59号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		おおむね直立する口縁。	外面-R Lの単節縄文。内面-ナデ。	角閃石・片岩・砂礫 内外面-橙色	縄文時代前期後半?。胴部破片。
2	深鉢		おおむね直立する口縁。	外面-R Lの単節縄文。内面-ナデ。	角閃石・片岩・砂礫 外面-橙色、内面-明赤褐色	縄文時代前期後半?。胴部破片。

60号土坑（第114図、図版29）

調査範囲東半の東寄り、丘陵南東斜面で検出した遺構である。東隅の一角は攪乱により壊されており、南側で61号土坑と重複し、同土坑を壊している。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや丸みのある隅丸方形である。北東-南西方向が最も大きく、最大長は、98cmである。断面形は、U字状で、最深部での深さは、38cmである。覆土は、7層に分けられた。上層の1～3層は、As-Aをかなり含む。1層は、攪乱の可能性はある。

近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

61号土坑（第114図、図版29）

60号土坑に北東隅を壊されている遺構である。当初10号方形周溝墓の主体部とも考えたが、覆土がやや軟弱で新しいとの所見を得ている。確認面は、Ⅲ層上面である。

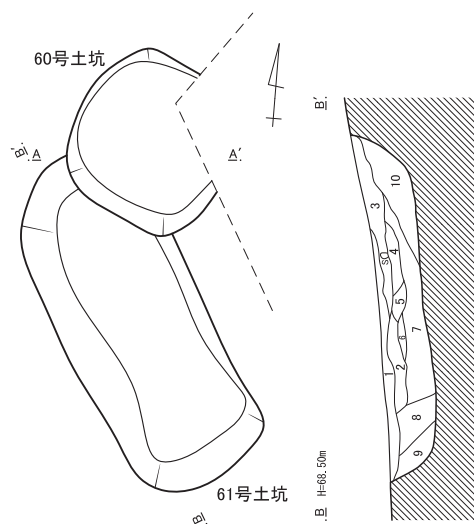
平面形は、隅丸長方形で、長軸長は184cm、短軸長は78cm、長軸方位は、N-30°-Wである。長軸方向での断面形は、船底形で、最深部での深さは、26cmである。底面は、南側に向かってわずかに傾斜する。覆土は、10層に分けられた。ローム、暗褐色土、黒褐色土の混合土からなり、全体に自然流入土には見えない。

縄文土器の微細片が出土しているが、伴うものではないであろう。古墳時代以降の遺構であろうか。

62号土坑（第114・115図、第33表、図版29・38）

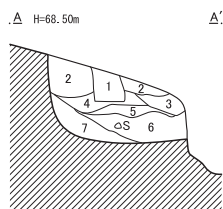
調査範囲東半の北東縁、丘陵南東斜面で検出した遺構である。北半は調査範囲外であり、また一部を攪乱により壊されている。確認面は、Ⅲ層上面である。

平面形は、やや胴の張った隅丸長方形になろうか。南北が長軸方向とすると、長軸方向での現存長



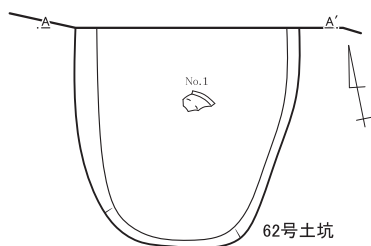
60号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。暗褐色土、黒褐色土の混合土を主に、As—Aを多量に含む。
- 2層: 鈍い黄褐色土層。As—Aを含み、ローム粒を含む。5~10mm大のロームブロックが点在する。
- 3層: 黄褐色土層。ロームを主に、As—Aを含み、灰色がかった5~20mm大のロームブロックを含む。
- 4層: 鈍い黄褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが少ない。
- 5層: 鈍い黄褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが多く、大きい(5~30mm大)。
- 6層: 暗褐色土層。暗褐色土、鈍い黄褐色土の混合土を主に、ローム粒、5~10mm大のロームブロックを少量、5~40mm大の黒褐色土ブロックが雲状に点在する。
- 7層: 暗褐色土層。6層に近いが、ロームが多い。



61号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。斑状の暗褐色土と黒褐色土の混合土。ローム粒を含む。
- 2層: 暗褐色土層。黒褐色土とローム粒、5~40mm大のロームブロック(雲状で不規則な形)の斑状の混合土。
- 3層: 暗褐色土層。2層に近いが、はるかに黒褐色土・暗褐色土が多い。
- 4層: 暗褐色土層。1層に近いが、黒褐色土が多い。
- 5層: 暗褐色土層。4層に近いが、黒褐色土が多い。
- 6層: 暗褐色土層。ロームと暗褐色土の混合土。斑状に黒褐色土を含む。
- 7層: 暗褐色土層。ロームを主に、斑状に黒褐色土・暗褐色土を含む。
- 8層: 暗褐色土層。暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に、くすんだ色調のロームを斑状に含む。
- 9層: 暗褐色土層。10層に近いが、ロームが多い。
- 10層: 褐色土層。6層に近いが、ロームが多い。



62号土坑土層注記

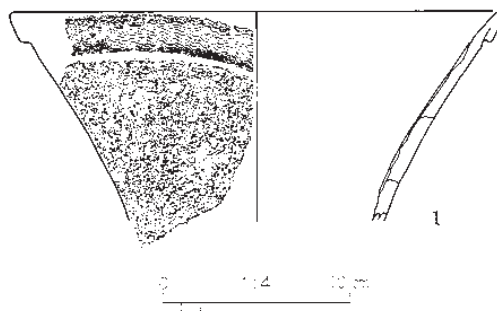
- 1層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。腐蝕を顕著に受けている。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒をかなり、5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 4層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、ローム粒を少量含む。
- 5層: 褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 6層: 褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。



第114図 60~62号土坑平面・断面図

は116cm、短軸長は112cm、長軸方位は、N-10°-Eである。東西方向で断面形は、U字状で、底面は、ほぼ平坦である。最深部での深さは、38cmである。覆土は、6層に分けられた。1・4層は、方形周溝墓の覆土に見られる黒褐色土と同じ黒褐色土層である。

樽式土器の壺破片(第114図1)が、土坑のほぼ中央で底面から5cmほど浮いた状態で出土している。弥生時代後期に属する土坑と見られる。



第115図 62号土坑出土遺物

第33表 62号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 (26.2)	複合口縁。	外面 - 折り返し部分に櫛描波状文。 内面 - ナデ。	白色粒・角閃石・砂礫 外面 - 明黄褐色、内面 - にぶい黄橙色	弥生時代後期。口縁部～頸部破片。

6. 焼土跡

1号焼土跡 (第116図)

調査範囲の最西端の丘陵尾根に位置する遺構である。焼土跡と呼称したが、実際に火を焚いた跡である燃焼面も見られず、わずかに焼土が残る遺構である。炉穴などの燃焼面下部の被熱範囲が土壌の流失を経て、なお痕跡的に残存したものととも考えられる。北端は、根による攪乱により壊されている。確認面は、Ⅲ層上面である。平面形は、楕円形で、長軸長は85cm、短軸長は52cm、長軸方位は、N - 10° - Eである。南北方向での断面形は、鍋底形に近いが、北側は一段深くなるようである。最深部での深さは、25cmである。覆土は2層に分けられた。いずれもロームの卓越する土で、1層には明瞭に焼土が含まれる。覆土から見て、縄文時代の遺構と思われる。

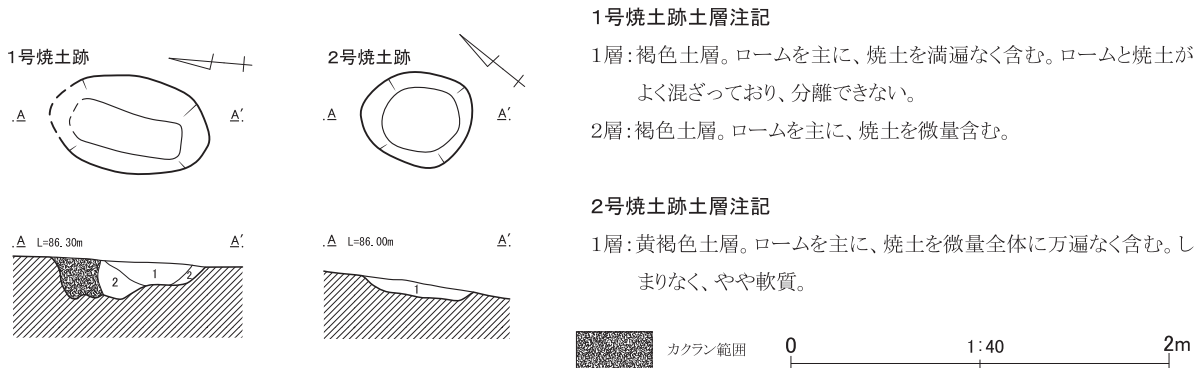
2号焼土跡 (第116図)

調査範囲の西端近く、丘陵尾根に位置する遺構である。1号焼土跡と同様に、炉穴などの残痕であろうか。確認面は、Ⅲ層上面である。平面形は、やや不整な円形で、最大径は58cmである。断面形は、浅い皿状で、最深部での深さは、8cmである。覆土は1層で、ロームを主とし、全体に偏りなく焼土が混入していた。覆土から見て、縄文時代の遺構と思われる。

7. 溝

1号溝 (第117図、図版27)

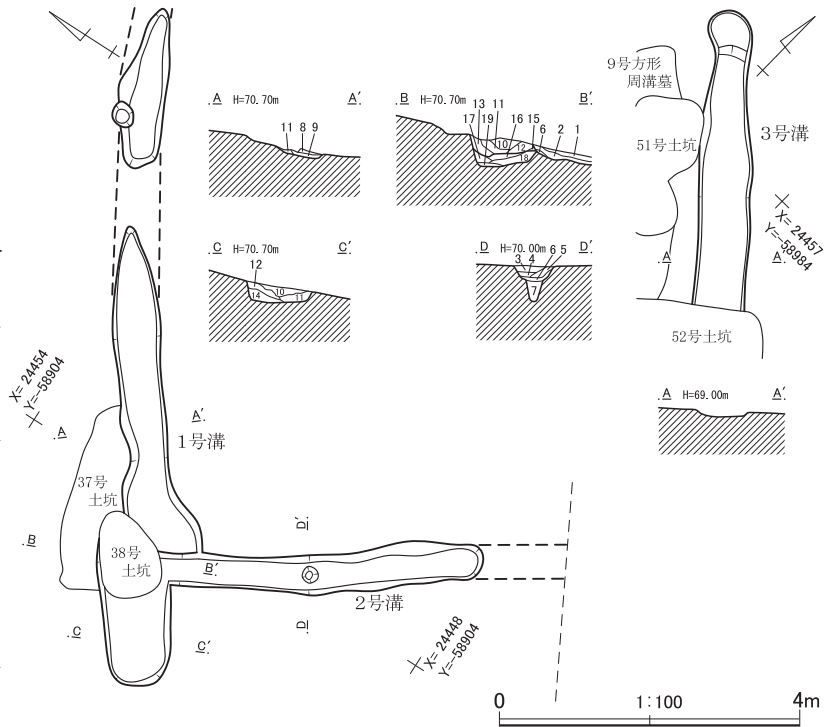
調査範囲の南東縁近く、丘陵南東斜面の裾部に位置する遺構である。38号土坑を壊して造られており、37号土坑、2号溝に南端近くの一角を壊されている。確認面は、Ⅲ層上面である。



第116図 1・2号焼土跡平面・断面図

1・2号溝土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大の白色軽石を少量含む。1～7層は、2号溝覆土。
- 2層: 暗褐色土層。2mm大の白色軽石を少量、5mm大のローム小ブロックを微量含む。
- 3層: 黒褐色土層。5mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 4層: 褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、同大の黒褐色土ブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 5層: 褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を少量含む。
- 6層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 7層: 褐色土層。ローム粒、5～10mm大のロームブロックをかなり含む。
- 8層: 褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、黒褐色土をかなり含む。粘性ややあり。8～15層は、1号溝覆土。
- 9層: 褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、黒褐色土層を少量含む。粘性ややあり。
- 10層: 黒褐色土層。ローム粒をかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 11層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含む。しまり、粘性ともにあり。
- 12層: 黒褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 13層: 褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 14層: 黒褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり、同大の



- 黒褐色土ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 15層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 16層: 褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、5mm大の黒褐色土小ブロックを微量含む。粘性あり。16～19層は、38号土坑覆土。
- 17層: 褐色土層。5～20mm大のロームブロック、5～30mm大の黒褐色土ブロックを多量に含む。粘性あり。
- 18層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、5mm大の黒褐色土小ブロックを少量含む。粘性あり。
- 19層: 黄褐色土層。5～10mm大のロームブロック、5mm大の小豆色粘土小ブロックを少量含む。粘性あり。

第117図 1～3号溝跡平面・断面図

本来、丘陵裾の傾斜変換点付近に設けられた、北東－南西方向に長く延びた溝が、削平や土壤の流失により損なわれ、一部分のみ残存したものであろう。途中途切れているが、現存長は、8.9m、溝幅は、65～92cmである。南西端近くで、溝の走向がずれるように見えるのは、あるいはもとは溝が複数あったためかもしれない。断面形は、U字状で、最深部での深さは、25cmである。覆土は、8層に分けられた。おおむねローム、暗褐色土、黒褐色土が不規則に混じり合ったブロックの目立つ覆土である。

覆土から見て、近世、あるいは近世以降の遺構であろう。

2号溝（第117図）

1号溝と直交し、北西－南東に走る溝である。やはり溝底に近い部分のみ残存した遺構であろう。確認面は、Ⅲ層上面である。

現存長は、4.3m、溝幅は、43～57cmである。断面形は、U字状で、最深部での深さは、20cmである。

浅見山 I 遺跡

中央の溝底に径20cm前後、深さ27cmのピットがひとつ穿たれている。覆土は、7層に分けられた。1号溝と同様に、ローム、暗褐色土、黒褐色土が不規則に混じり合ったブロックの目立つ覆土である。

覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

3号溝 (第117図、図版28・29)

調査範囲の南東縁近く、丘陵南東斜面の裾部で検出した。溝底近くが辛うじて残存した遺構と見てよいであろう。51・52号土坑に切られている。確認面は、Ⅲ層上面である。

現存長は、3.9m、溝幅は、45～71cmである。断面形は、浅い皿状で、深さは、10cm前後である。調査所見では、ローム、暗褐色土、黒褐色土が不規則に混じり合った覆土であった。

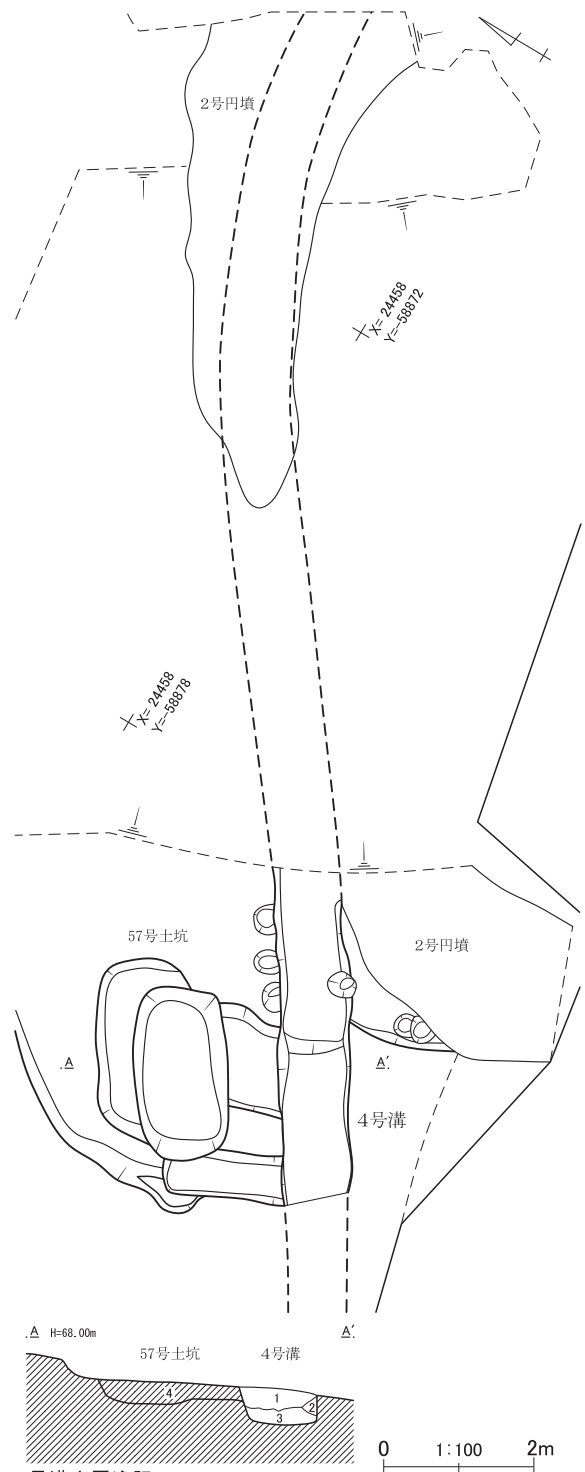
覆土から見て、近世の遺構と考えられる。

4号溝 (第118図、図版22・29)

調査範囲の南東縁、丘陵南東斜面の裾部で検出した北東-南西方向に走る溝である。攪乱により大きく壊されており、西側の57号土坑との重複部分と東側の半島状の地山残存部分の2箇所、わずかに確認することができた遺構である。2号円墳、および水溜め状の遺構である57号土坑を切っている。なお、東側の残存部分では、2号円墳との通しの土層断面でのみ把握し得た。確認面は、Ⅲ層上面である。

西側での現存長は、4.5m、溝幅は、85～99cmである。断面形は、箱葉研に近く、深さは、50cm前後である。溝壁に沿う北側の外側に3個、南側の内側に1個のピットが穿たれている。ピットは、いずれも径40cm前後、深さは、21～44cmである。あるいは水門のような施設の痕跡である可能性がある。覆土は、3層に分けられた。いずれの層もAs-Aがかなり混入していた。

遺物はほとんど出土していないが、覆土から見て、近世の遺構と考えられる。



4号溝土層注記

- 1層: 暗褐色土層。2mm大のAs-Aをかなり含み、5～10mm大のロームブロックを少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。2、3mm大のAs-A、5～10mm大のロームブロックをかなり含む。
- 3層: 暗褐色土層。2、3mm大のAs-Aをかなり含み、5mm大のローム小ブロックを少量含む。
- 4層: 暗褐色土層。2mm大のAs-Aをかなり含み、5mm大のローム小ブロック、同大の黒褐色土小ブロックを少量含む。

第118図 4号溝跡平面・断面図

8 遺構外出土遺物

(1) 土器

縄文土器（第119～121、第34～40表、図版39・40）

出土した縄文土器の大半は、縄文時代早期前葉の撚糸文系土器、早期後葉の広義の条痕文系土器、前期初頭の羽状縄文系土器である。以下、これらの土器群について2、3触れておきたい。

量的には、上記した3つの土器群が相半ばするが、破片資料ばかりとは言え、口縁部片や文様片など形態的、装飾的特徴に富む破片が多いのは、撚糸文系土器である。

今回の調査で出土した撚糸文系土器の口縁部片の内、とくに多いのは、口唇部上面に撚糸文や縄文が施され、口縁部以下底部にかけて同じ回転方向の撚糸文や縄文が反復される井草Ⅱ式、あるいは大丸式とされる土器である（第119図2～24、38）。本遺跡出土土器の場合、この種の口縁部片は、さらに外面口唇部直下に明瞭な圧痕や刺突の施されるもの（同図4～15、38）とそれらが施されないもの（同3・16～25）に分けられ、両者は、口縁部形態にも違いが見られる。圧痕や刺突は、指頭によるもの（5・14・15）、棒状、竹管状の工具によるもの（7～10・11・38）、縄文や撚糸文の原体によるもの（4・6・12・13）と種々あり、大半が口唇部直下の圧痕・刺突施文部を境に短く屈折外反したり、肥厚する形態である。

明瞭な圧痕や刺突の見られないとした後（3・16～25）は、総じて口唇部につけわずかに肥厚しつつ口縁部全体が緩やかに外半する形態が特徴的である。この種の土器にも、口唇部直下に胴部の撚糸文と同じ原体による目立たない圧痕が施されるもの（16・17・20・23・25）、装飾的に加えられた圧痕列か、原体の断続、休止によりたまたま生じた圧痕なのか決め難いものも多い。

夏島式と思われる口唇部上面に撚糸文や縄文の見られない口縁部片（26～34）は、形態的には、明瞭な圧痕や刺突の見られないとした一群（3・16～25）に類似している。撚糸文が斜めに走る34に関しては、やや胎土も異なり、時期を異にする可能性も捨て切れない。

胴部片に関しては、図化し得たのは大形片のみである（第120図39～50）。他に細かな破片がかなりの量出土しており、縦位密接施文の撚糸文の見られる破片が大半である。

他に撚糸文系土器としては、井草Ⅰ式と思われる口縁部片が1点（第119図1）、外面口唇部直下に沈線の施された東山式と見られる口縁部片が2点出土しているが（同35・36）、いずれにせよ、中心をなすのは、井草Ⅱ式、大丸式と夏島式であり、今後より細かな位置付けや地域性の問題など、他遺跡例との比較を踏まえ、検討する必要があると思われる。

早期後葉とした広義の条痕文系土器（第121図70～79）の中には、鶴ヶ島台式（75）などとともに、口唇部直下に隆帯の付されるもの（同76）、また少数ながら、刺突文・圧痕文系土器が含まれ（同70～74）、あるいは早期末葉に位置づけられるもの（同77）も含まれるようにも見える。図示し得た破片に限られるが、全体として、破片の多くは、条痕が一部であったり、不明瞭なものが多く、表裏に明瞭な条痕の見られるものがほとんどないことが、一つの特徴になるようである。

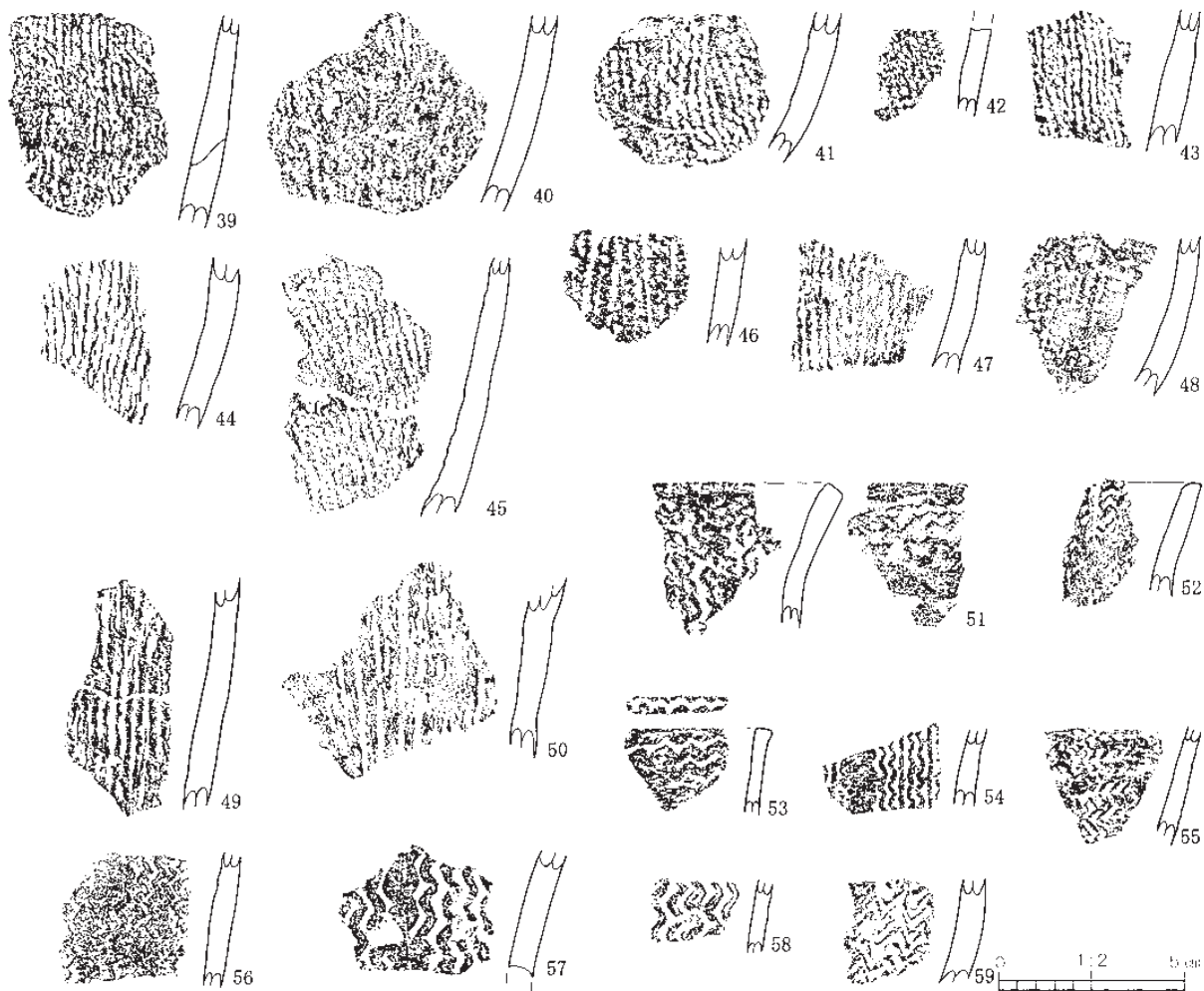
前期初頭とした羽状縄文系土器（第121図80～92）は、口縁部片や縄文以外の加飾のある土器片が全く出土していないため、時期限定の材料を欠くが、必ずしも羽状縄文ばかりではないなど問題点も多く、あるいは早期末葉から前期初頭と時間幅を広げて、考える必要がある一群なのかもしれない。



第119図 遺構外出土縄文土器（1）

第34表 遺構外出土縄文土器観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢		顕著に肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と外面に横位回転押捺による RL の単節縄文、胴部に斜位回転押捺による RL の単節縄文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石 内外面-にぶい黄橙色	12号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅰ式。口縁部破片。
2	深鉢		顕著に肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部外面に横位回転押捺による RL の単節縄文、胴部に斜位回転押捺による RL の単節縄文。内面-ナデ。	角閃石 外面-橙色、内面-明褐色	10号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
3	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と外面付近に横位回転押捺による R の撚糸文、胴部に R の撚糸文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 外面-明赤褐色、内面-明褐色	2号円墳出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
4	深鉢		顕著に肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部外面に横位回転押捺による RL の単節縄文、胴部に RL の単節縄文。口唇部直下に1列の縄圧痕文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石 内外面-にぶい黄橙色	8号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
5	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と外面付近に横位回転押捺による RL の単節縄文、胴部にかすかな縄文?。口唇部直下にごく浅い1列の指頭圧痕。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・片岩 内外面-にぶい赤褐色	表採。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
6	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と外面付近に横位回転押捺による R の無節縄文、胴部に R の無節縄文。口唇部直下に1列の縄圧痕文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 外面-にぶい黄橙色、内面-橙色	7号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
7	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と内面付近に横位回転押捺による R の撚糸文、胴部に R の撚糸文。口唇部直下に1列の圧痕文、あるいは刺突文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 外面-明褐色、内面-橙色	包含層出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
8	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と外面付近に横位回転押捺による R の撚糸文、胴部に R の撚糸文。口唇部直下に1列の圧痕文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・片岩 内外面-橙色	7号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
9	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端に横位回転押捺による R の撚糸文、胴部に R の撚糸文。口唇部直下に1列の圧痕文、あるいは刺突文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 外面-にぶい橙色、内面-にぶい黄褐色	10号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
10	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と外面付近に横位回転押捺による RL の単節縄文。口唇部直下に1列の圧痕文。内面-ナデ。	片岩 外面-明赤褐色、内面-にぶい褐色	1号円墳出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
11	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端に横位回転押捺による RL の単節縄文。口唇部直下に刺突文。以下、縄文?。内面-ナデ。	片岩・角閃石 内外面-赤褐色	12号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
12	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端に横位回転押捺による R の撚糸文。口唇部直下に撚糸文原体を押圧。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 外面-橙色、内面-にぶい橙色	表採。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
13	深鉢		外反する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面-口唇部上端に横位回転押捺による RL の単節縄文、口唇部直下に RL の単節縄文による側面圧痕。内面-ナデ。	角閃石 外面-にぶい黄橙色、内面-橙色	7号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・稻荷原式。口縁部破片。
14	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と外面付近に横位回転押捺による R の撚糸文、胴部に絡条体条痕。口唇部直下に1列のかすかな指頭圧痕。内面-ナデ。	角閃石 内外面-明褐色	7号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。



第120図 遺構外出土縄文土器（2）

第35表 遺構外出土縄文土器観察表（2）

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
15	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面－口唇部上端に横位回転押捺によるRLの単節縄文、胴部に絡条体条痕。口唇部直下に1列のかすかな指頭圧痕。内面－ナデ。	片岩・砂礫 内外面－明赤褐色	1号円墳出土。早期前葉・捺糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
16	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面－口唇部上端に横位回転押捺によるRの捺糸文、胴部にRの捺糸文。口唇部直下に捺糸文原体を押圧。内面－ナデ。	角閃石・片岩・砂礫 内外面－明赤褐色	6号周溝墓出土。早期前葉・捺糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
17	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面－口唇部上端に横位回転押捺によるRの捺糸文？、胴部にRの捺糸文。口唇部直下に捺糸文原体を押圧。内面－ナデ。	白色粒・角閃石 内外面－明赤褐色	7・8号周溝墓出土。早期前葉・捺糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
18	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面－口唇部上端に横位回転押捺によるRの捺糸文、胴部にRの捺糸文。内面－ナデ。	角閃石・砂礫 外面－明褐色、内面－橙色	9号周溝墓出土。早期前葉・捺糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
19	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面－口唇部上端に横位回転押捺によるRの捺糸文、胴部にRの捺糸文。内面－ナデ。	角閃石・砂礫 内外面－橙色	11号周溝墓出土。早期前葉・捺糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。

第36表 遺構外出土縄文土器観察表(3)

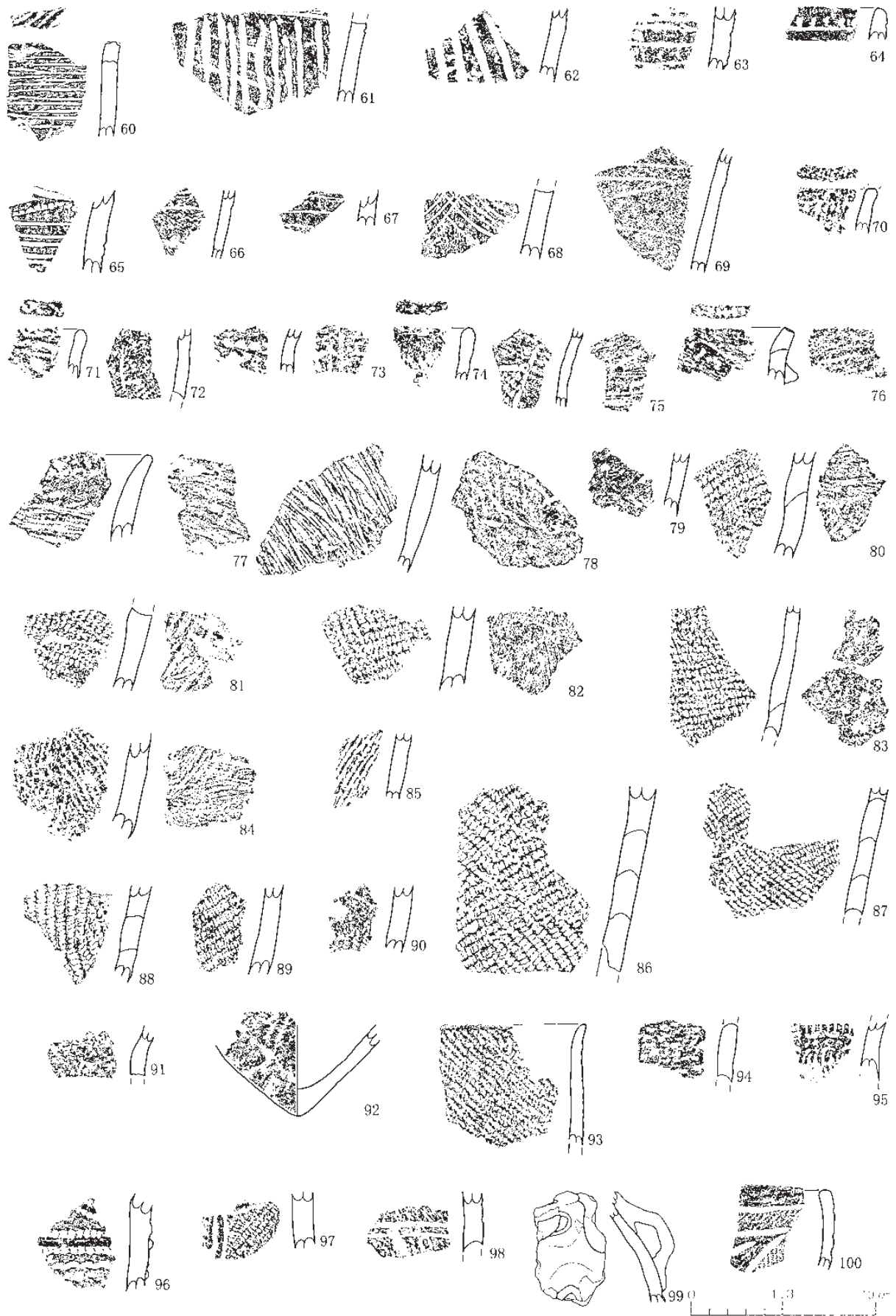
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
20	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端と外面付近に横位回転押捺によるRの撚糸文。口唇部下に撚糸文原体を押圧?。内面-ナデ。	白色粒・角閃石 内外面-にぶい黄橙色	6号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
21	深鉢		外反する口縁。	外面-口唇部上端に横位回転押捺による撚糸文?、胴部にRの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒 外面-にぶい黄橙色、内面-明黄褐色	3号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
22	深鉢		おおむね直立する口縁。	外面-口唇部上端に横位回転押捺によるRの撚糸文?、胴部にRの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・片岩 内外面-にぶい赤褐色	7号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
23	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部外面の一部に縦位回転押捺によるRの撚糸文。口唇部直下に撚糸文原体を押圧。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・砂礫 内外面-明赤褐色	22号土坑出土。早期前葉・撚糸文系・大丸式。口縁部破片。
24	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-口唇部上端に横位回転押捺によるRの撚糸文、胴部に絡条体条痕。内面-ナデ。	角閃石 外面-にぶい黄橙色、内面-橙色	表採。早期前葉・撚糸文系・井草Ⅱ・大丸式。口縁部破片。
25	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-胴部にRの撚糸文。口唇部直下に撚糸文原体を押圧。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・片岩 内外面-明赤褐色	6号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。
26	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-胴部にRの撚糸文。内面-ナデ。	砂礫 外面-赤褐色、内面-橙色	45号土坑出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。
27	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面: 胴部にRの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒 外面-明赤褐色、内面-明黄褐色	包含層出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。
28	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-胴部にRの撚糸文。内面-ナデ。	角閃石・片岩 内外面-橙色"	11号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。
29	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-胴部にRの撚糸文。内面-ナデ。	角閃石 内外面-橙色	8号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。
30	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-胴部にRの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒 内外面-明黄褐色	7号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。
31	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-胴部にLの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒 外面-にぶい褐色、内面-橙色	6号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。
32	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-斜位回転押捺によるRLの単節縄文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・片岩・砂礫 内外面-にぶい赤褐色	30号土坑出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。
33	深鉢		わずかに肥厚・外反する口縁。	外面-胴部にLの無節縄文。内面-ナデ。	白色粒 外面-にぶい褐色、内面-にぶい黄褐色	包含層出土。早期前葉・撚糸文系・夏鳥式。口縁部破片。"
34	深鉢		おおむね直立する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面-斜行するRの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・片岩 内外面-明赤褐色	12号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系?。口縁部破片。

第37表 遺構外出土縄文土器観察表(4)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
35	深鉢		直立する口縁。	外面-口唇部直下に横位沈線1条がめぐるとは、残存範囲において無文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石 外面-明赤褐色、内面-橙色	5号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・東山式。口縁部破片。
36	深鉢		わずかに外反する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面-口唇部直下に横位沈線1条がめぐるとは、残存範囲において無文。内面-ナデ。	片岩 内外面-赤褐色	6号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・東山式。口縁部破片。
37	深鉢		直立する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面-口唇部直下に横位沈線1条がめぐるとは、残存範囲において無文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-橙色	12号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系・東山式。口縁部破片。
38	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる口縁に近い部位。	外面-上端に半円形の押捺。以下、Rの撚糸文。内面-大半が剥落、調整不明。	白色粒・片岩 内外面-にぶい橙色	12号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
39	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	片岩・砂礫 外面-明赤褐色、内面-橙色	12号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
40	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面：Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	包含層出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
41	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・片岩・砂礫 外面-橙色、内面-にぶい黄橙色	7号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。土製円盤の可能性有。
42	深鉢		おおむね直立する口縁。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-明赤褐色	50号土坑出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
43	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-明赤褐色	12号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
44	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	石英・長石・片岩 内外面-にぶい黄橙色	10号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
45	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-RLの単節縄文。内面-ナデ。	赤褐色の岩片多量 内外面-にぶい橙色	8号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
46	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	片岩・砂礫 内外面-にぶい橙色	10号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
47	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Lの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい橙色	6号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
48	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい橙色	8号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
49	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位の絡条体条痕。内面-ナデ。	白色粒・片岩・砂礫 外面-にぶい褐色、内面-明赤褐色	22号土坑出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。
50	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-条間の広いLの撚糸文。所々条痕様の施文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい橙色	6号周溝墓出土。早期前葉・撚糸文系。胴部破片。

第38表 遺構外出土縄文土器観察表(5)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
51	深鉢		わずかに外反する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面-横位・縦位回転押捺による山形押型文。内面-口縁部付近に横位回転押捺による山形押型文。	白色粒・片岩 内外面-橙色	6号周溝墓出土。早期前葉・押型文系。口縁部破片。
52	深鉢		わずかに外反する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面-口唇部上端および口縁部に横位回転押捺による山形押型文。内面-ナデ。	白色粒・細砂 内外面-にぶい赤褐色	8号周溝墓付近出土。早期前葉・押型文系。口縁部破片。
53	深鉢		わずかに外反する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面-口唇部上端および胴部に山形押型文。残存範囲において胴部の押型文は横位回転押捺による。内面-ナデ。	白色粒 外面-にぶい褐色、内面-赤褐色	6号周溝墓出土。早期前葉・押型文系。口縁部破片。
54	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位回転押捺による細かな帯状の山形押型文。内面-ナデ。	白色粒 内外面-にぶい黄橙色	6号周溝墓出土。早期前葉・押型文系。胴部破片。
55	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位回転押捺による帯状の山形押型文。内面-ナデ。	石英・長石・砂礫 外面-にぶい黄橙色、内面-にぶい赤褐色	1号住居跡出土。早期前葉・押型文系。胴部破片。
56	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位回転押捺によるの極浅い山形押型文。内面-ナデ。	片岩・砂礫 外面-にぶい褐色、内面-灰黄褐色	6号周溝墓出土。早期前葉・押型文系。胴部破片。
57	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位回転押捺による帯状の山形押型文。内面-ナデ。	白色粒・片岩 内外面-橙色	1号周溝墓出土。早期前葉・押型文系。口縁部付近の破片。
58	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位回転押捺による山形押型文。内面-ナデ。	片岩・細砂 内外面-橙色	6号周溝墓出土。早期前葉・押型文系。胴部破片。
59	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-横位回転押捺による山形押型文。内面-大半が剥落、調整不明。	白色粒・片岩・砂礫 外面-にぶい赤褐色、内面-黒褐色	6号周溝墓出土。早期前葉・押型文系。胴部破片。
60	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-口唇部に斜めの刻線。以下、横位の細い沈線。下端に斜位の沈線。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・砂礫 外面-橙色、内面-にぶい黄褐色	22号土坑出土。早期中葉・沈線文系。田戸下層式。胴部破片。
61	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位および横位の太く浅い沈線複数。内面-ナデ。	白色岩片・片岩・砂礫 内外面-橙色	表採。早期中葉・沈線文系。田戸下層式。胴部破片。
62	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縦位の太い沈線。内面-ナデ。	白色粒・石英・片岩・砂礫 外面-にぶい橙色、内面-にぶい黄橙色	表採。早期中葉・沈線文系。田戸下層式。胴部破片。
63	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-横位ないし斜位の沈線、その間にC字状竹管文。内面-ナデ。	白色粒・片岩・砂礫 外面-橙色、内面-明赤褐色	3号周溝墓出土。早期中葉・沈線文系。田戸下層式。胴部破片。
64	深鉢		内彎気味に立ち上がる。断面丸棒状を呈する口唇部。	外面-口唇部直下にC字状竹管文に近似する刺突文、横位沈線。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 外面-赤褐色、内面-明赤褐色	表採。早期中葉・沈線文系。田戸上層式。口縁部破片。
65	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-横位・斜位の沈線、貝殻腹縁文。内面-ナデ。	白色粒 内外面-明赤褐色	9号周溝墓出土。早期中葉・沈線文系。田戸上層式?。胴部破片。
66	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-横位・斜位の沈線、貝殻腹縁文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 外面-赤褐色、内面-橙色	包含層出土。早期中葉・沈線文系。田戸上層式?。胴部破片。



第121図 遺構外出土縄文土器 (3)

第39表 遺構外出土縄文土器観察表(6)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
67	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面－横位ないし斜位の沈線。内面－ナデ。	白色粒・砂礫 内外面－にぶい黄橙色	8号周溝墓出土。早期中葉・沈線文系。胴部破片。
68	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる底部に近い部位。	外面－一部で格子目状に交差する斜位の沈線複数。内面－ナデ。	白色粒・砂礫 外面－明赤褐色、内面－赤褐色	包含層出土。早期中葉・沈線文系。胴部破片。
69	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面－稲妻状に方向を違える斜位の沈線複数。内面－ナデ。	白色粒・砂礫 外面－明黄褐色、内面－明褐色	包含層出土。早期中葉・沈線文系。胴部破片。
70	深鉢		おおむね直立する口縁。	外面－口唇部上端に押捺?。口縁部付近に絡条体圧痕文。内面－ナデ。	白色粒・片岩、繊維 外面－明赤褐色、内面－橙色	6号周溝墓出土。早期後葉・刺突・押捺文系。口縁部破片。
71	深鉢		わずかに外反する波状口縁。丸棒状の口唇。	外面－口唇部上端、口縁部に絡条体圧痕。内面－ナデ。	石英・赤銅色の片岩・砂礫、繊維 内外面－にぶい赤褐色	6号周溝墓出土。早期後葉・刺突文・圧痕文系。口縁部破片。
72	深鉢		ほぼ直立する口縁部付近。	外面－絡条体圧痕文。下端に斜位の条痕。内面－ナデ。磨耗のため施文方向不詳の条痕。	白色粒・片岩、繊維少量 外面－にぶい褐色、内面－明赤褐色	6号周溝墓出土。早期後葉・刺突文・圧痕文系。胴部破片。
73	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面－風化により詳細不明ながら、円形刺突文らしきものが複数。内面－磨耗のため施文方向不詳の条痕。	白色粒、繊維 外面－にぶい黄橙色、内面－黒色	10号周溝墓出土。早期後葉・刺突文・圧痕文系。胴部破片。
74	深鉢		内彎気味に立ち上がる口縁。内面内削ぎ気味の口唇。	外面－口縁部に沈線・刺突。口唇部上端に棒状工具による調整。内面－横位の粗いナデ。	石英・赤銅色の片岩・砂礫、繊維 内外面－にぶい赤褐色	8号周溝墓出土。早期後葉。口縁部破片。
75	深鉢		外反気味に立ち上がる部位。	外面－胴部にキザミを伴う横位の低い隆帯。横位の条痕。沈線の交点に円形竹管状工具による刺突文。沈線で区切られた範囲内に刺突を充填。内面－横位の条痕。	白色粒・砂礫、繊維 外面－橙色、内面－明赤褐色	3号周溝墓出土。早期後葉・条痕文系・鶴ヶ島台式。口縁部付近の破片。
76	深鉢		ほぼ直立する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面－横位の条痕。口縁部付近に斜位の隆帯。口唇部上端と隆帯上にキザミ。内面－横位の条痕。	白色粒・砂礫、繊維 外面－明黄褐色、内面－黄褐色	8号周溝墓出土。早期後葉・条痕文系。口縁部破片。
77	深鉢		ほぼ直立する口縁。断面角頭状を呈する口唇部。	外面－口唇部に押捺?。横位ないし斜位の条痕。内面－外面と同様。	雲母・片岩、繊維 内外面－赤褐色	表採。早期後葉・条痕文系。口縁部破片。
78	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面－縦位の条痕。内面－磨耗のため施文方向不詳の条痕。	砂礫、繊維 外面－橙色、内面－明黄褐色	7号周溝墓出土。早期後葉・条痕文系。胴部破片。
79	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面－残存範囲において無文。内面－磨耗のため施文方向不詳の条痕。	砂礫、繊維 内外面－明褐色	62号土坑出土。早期後半・無文・擦痕文系。胴部破片。
80	深鉢		微妙に屈曲して立ち上がる部位。	外面－左捻り0段多条の縄文。内面－横位ないし斜位の条痕。	白色粒・砂礫、繊維 外面－明褐色、内面－にぶい黄橙色	12号周溝墓出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
81	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面－単節のLRとRLを組み合わせた羽状縄文。内面－方向不整の条痕。	砂礫、繊維 外面－橙色、内面－黒褐色	7号周溝墓出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
82	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面－単節のLRとRLを組み合わせた羽状縄文。内面－横位ないし斜位の条痕。	白色粒、繊維 外面－明褐色、内面－にぶい赤褐色	11号周溝墓出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
83	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面－LRの単節縄文。内面－磨耗のため施文方向不詳の条痕。	白色粒・赤色粒、繊維 外面－にぶい黄橙色、内面－黄灰色	包含層出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。

第40表 遺構外出土縄文土器観察表 (7)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
84	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面-斜位の条痕文。	白色粒・砂礫、 繊維 外面-明褐色、 内面-灰黄褐色	12号周溝墓出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
85	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-Rの撚糸文。内面に斜位の条痕文。内面-磨耗のため施文方向不詳の条痕。	白色粒、繊維 外面-にぶい黄 橙色、内面-灰 黄褐色	2号円墳出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
86	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-撚りの異なる0段多条の原体を組み合わせた羽状縄文。内面-ナデ。条痕は認められない。	白色粒・砂礫、 繊維 内外面-明赤褐 色	7号周溝墓出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
87	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-撚りの異なる0段多条の原体を組み合わせた羽状縄文。内面-ナデ。条痕は認められない。	白色粒、繊維 外面-橙色、内 面-にぶい黄橙 色、	7号周溝墓出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
88	深鉢		外反する形状の部位。	外面-右撚り0段多条の縄文。内面-横位ないし斜位の条痕。	白色粒・角閃 石・砂礫、繊維 外面-明黄褐 色、内面-黄灰 色	22号土坑出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
89	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-左撚り0段多条の縄文。内面-横位ないし斜位の条痕。	砂礫、繊維 内外面-橙色	15号土坑出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
90	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-左撚り0段多条の縄文。内面-横位ないし斜位の条痕。	白色粒・砂礫、 繊維 外面-明褐色、 内面-にぶい黄 橙色	50号土坑出土。前期初頭・羽状縄文系。胴部破片。
91	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-縄文?。内面-横位ないし斜位の条痕。	白色粒・角閃 石・片岩・砂 礫、繊維 内外面-赤褐色	50号土坑出土。前期初頭・羽状縄文系?。胴部破片。
92	深鉢		尖底で、おおむね直線的に開く部位。	外面-縄文が認められるが、磨耗により原体の詳細は不明。内面-ナデ。条痕は認められない。	白色粒・砂礫、 繊維 外面-橙色、内 面-にぶい黄橙 色	4号周溝墓出土。前期初頭・羽状縄文系。底部破片。
93	深鉢		頸部のくびれ、口縁の開き加減とも弱い。	外面-R Lの単節縄文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい 赤褐色	6号周溝墓出土。前期後葉・諸磯a式。口縁部~胴部破片。
94	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-半裁竹管状工具による2個1組の列点状の刺突文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 外面-明赤褐 色、内面-橙 色	6号周溝墓出土。中期中葉?。胴部破片。
95	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-連続爪形文と、それに沿う半円形刺突文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 外面-明赤褐 色、内面-灰黄 褐色	12号周溝墓出土。中期中葉・勝坂2式。胴部破片。
96	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる部位。	外面-隆帯の両脇に1列ずつの角押文、その外側に蛇行する沈線文。内面-ナデ。	雲母・片岩・砂 礫 内外面-明赤褐 色	8号周溝墓出土。中期中葉・阿玉台I b~II式。胴部破片。
97	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる。	外面-地文に節の小さなRLの単節縄文。半裁竹管による2本1組の平行沈線が複数組。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 外面-明赤褐 色、内面-にぶ い黄褐色	6号周溝墓出土。中期中葉。胴部破片。
98	深鉢		おおむね直線的に立ち上がる。	外面-地文にRの撚糸文。半裁竹管による2本1組の平行沈線。内面-ナデ。	白色粒・片岩 内外面-明赤褐 色	3号周溝墓出土。中期中葉~後葉。胴部破片。
99	深鉢		口縁に向け内彎する器形。把手部分。	外面-把手とその周辺の随所に、渦巻文に類する沈線文が配される。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 外面-明黄褐 色、内面-にぶ い黄橙色	6号周溝墓出土。中期後葉。胴部破片。
100	深鉢		口縁に向けやや内彎する器形。	外面-2本1組の沈線間にLRの単節縄文が配される。三叉文の一部とみられる沈線文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-にぶい 黄褐色	8号周溝墓出土。晩期前葉・安行3a~3b式併行。口縁部破片。

弥生土器・土師器（第122・123図34～61、図版41・42）

今回検出した弥生土器は、破片ばかりではあるが、時期や地域性の点で興味深い資料を含んでいるようである。遺構外出土の弥生土器は、弥生時代中期前半の土器（第122図1～22）と後期の土器（同図23～33、第123図34～60）に大きく分けられる。

中期前半の土器は、壺では、主に沈線文内を刺突で充填する中期前半でも新しい段階、あるいは中期中葉の土器（第122図10～12など）が目立つが、甕では、ほぼ条痕文の施されるものばかりであり、位置付けに苦慮する。適切に分離することができないが、あるいは条痕と沈線の施された甕（同16）や深鉢形の古い段階の甕（同1・18・20）などのように中期前半でも古い段階の甕と、中期前半でも新しい段階の末期的な条痕甕とが混在しているのかもしれない。

後期の土器は、時期的に単一ではないようであるが、全体として多様な系統の土器が見られることが、一つの特色をなすようである。

まず、これまで本地域の後期弥生土器の中核を構成することが推定されてきた樽式土器が高い比率を占めるようである（第122図23～28・31・32、第123図34～42・57～59）。樽式土器については、同一個体である甕（第123図34～37）のように後期初頭（あるいは中期末葉）の土器が含まれること、これまで類例の乏しい特徴的な形態の大型壺（同41・42）が見られることが指摘できる。後者の大型壺は、肩部と胴部下位が直線的な算盤形の器形になろうか。

第123図43～45・47～49・60は、吉ヶ谷式土器、46も同式の壺になろう。本地域では、後期後半～古墳時代前期にかけて、吉ヶ谷式、吉ヶ谷系の縄文を多用する土器が盛行するようである。

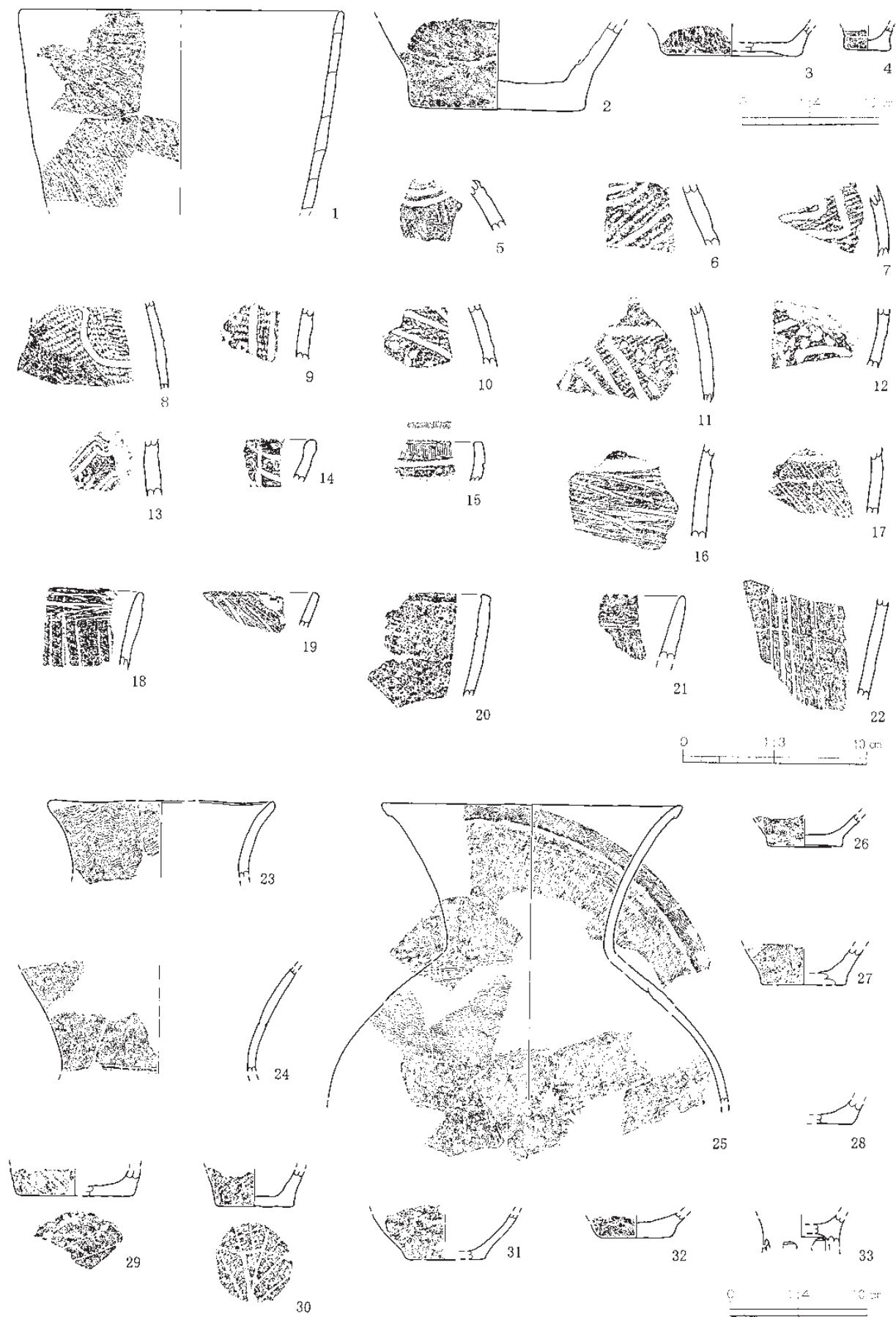
同図55・56は、二軒屋式土器であろう。ともに7本一単位の繊細な櫛描鋸歯文、直線文と附加条縄文が施され、55には、附加条第1種による縄文带上端に縄文原体による圧痕が加えられている。

系統のはっきりしない土器片が2個体分ある（第122図30・第123図50～52、第122図29・第123図53・54）。前者は、幅の狭い低平な折返し口縁の土器で、屈曲の少ない器形の小型壺、あるいは極細身の小型の甕になりそうである。折り返し部以下、LRの単節縄文が施されており、底部外面にまで同種縄文が施されている。くびれ部は無文部となるのか、縄文以外の施文がなされるのか、胴部上位以下全面に縄文が施されるようである。底面には、木葉痕が認められる。後者も前者と同様な器形の特殊な捩りの縄文が施された土器である。附加条第2種と思われるが、軸縄に対して捩り戻しの附加条がうねるように絡げられているらしく、また全体に羽状を呈するように施文されている。底面には、前者と同様に木葉痕が見られる。この2個体の土器は、栃木県や茨城県など東部関東の土器である可能性が考えられるが、類例の検索をまって結論を得たいと思う。

他に土師器の口縁部片が1点出土している（第123図61）。いわゆる樽式系の土器であり、古墳時代前期前葉に位置付けられる。6号方形周溝墓からも1点同種土器の破片（第43図7）が出土しているが、いずれも今回検出した方形周溝墓より時期的に遡る時期の遺物である。

埴輪（第123図62・63、図版42）

遺構外から、家形埴輪および円筒埴輪かと思われる破片が1点ずつ出土している。1・2号円墳には、形象埴輪は1点も見られず、円筒埴輪のみ樹立されていた可能性が高く、また他に同時期の遺構が見られない点から、62の形象埴輪片は何らかの形で、表土中に混入した遺物と考えられる。（松本）



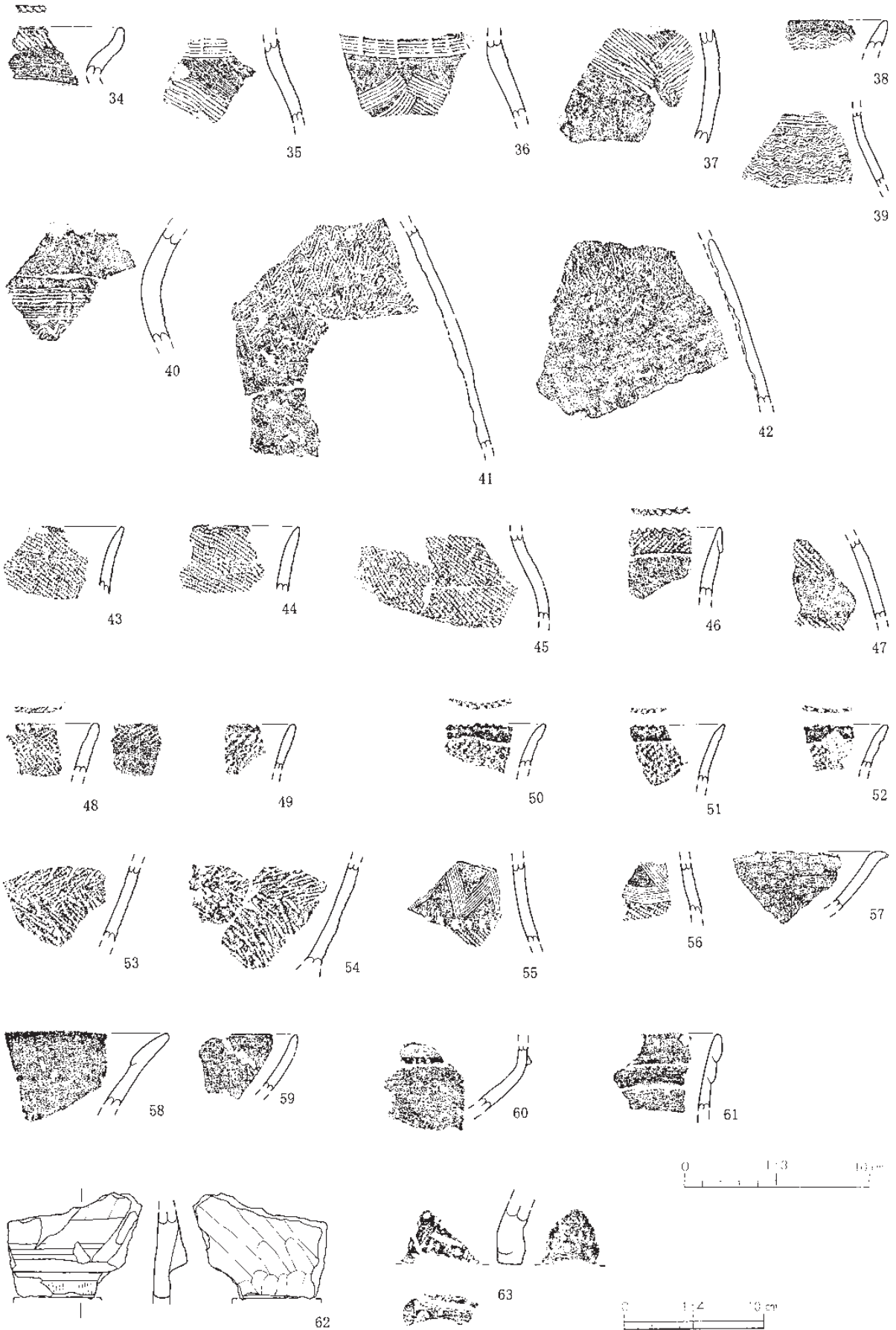
第122図 遺構外出土弥生土器

第41表 遺構外出土観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (23.7)	直立する口縁。内削ぎ気味で断面角頭状を呈する口唇部。	外面-口縁部付近に横位、胴部に斜位の擦痕状の細い条痕。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・砂礫 外面-明黄橙色、内面-にぶい黄橙色	3号周溝墓出土。中期前半。口縁部~胴部破片。
2	壺ないし甕	底径 12.6	底面から器厚に相当する高さまで直立し、それより上はゆるやかに開く形状。	外面-残存範囲において無文。ナデ。内面-ナデ。	赤色粒・角閃石・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	包含層出土。中期前半。底部破片。
3	壺ないし甕	底径 (10.3)	底面から器厚に相当する高さまで直立し、それより上はゆるやかに開く形状。	外面-ハケ目に類する縦位の整形痕があるほかは、残存範囲において無文。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	3号周溝墓出土。中期前半。底部破片。
4	壺ないし甕	底径 3.4	底面から器厚に相当する高さまで直立し、それより上はゆるやかに開く形状。小型。	外面-直立する範囲に横位沈線が1条めぐる。内面-ナデ。	白色粒・角閃石・砂礫 内外面-にぶい橙色	3号周溝墓出土。中期前半。底部破片。
5	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-沈線による曲線文。内面-ナデ。	赤色粒・砂礫 内外面-にぶい橙色	7号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
6	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-沈線文。地文にLRの単節縄文。内面-ナデ。	赤色粒・砂礫 内外面-橙色	7号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
7	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-平行し、重四角文類似の角ばったモチーフをなす複数の沈線。地文にLRの単節縄文。内面-ナデ。	赤色粒・角閃石・砂礫 内外面-橙色	3号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
8	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-沈線による曲線文。地文はLRの単節縄文。内面-ナデ。	片岩・砂礫 内外面-にぶい橙色	3号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
9	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-縦位沈線、竹管状工具による円形刺突文。地文にLRの単節縄文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	6号周溝墓出土。中期前半。頸部~胴部破片。
10	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-沈線文、複数の刺突文。地文にLRの単節縄文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	3号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
11	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-残存範囲において、三角形を呈する3条1組の沈線、その内側に複数の刺突文。地文に節の細かいLRの単節縄文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	3号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
12	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-沈線文、複数の刺突文。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-橙色	3号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
13	壺		外に向けややふくらむ形状の部位。	外面-櫛描波状文?。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-橙色	3号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
14	壺		わずかに内彎しながら立ち上がる口縁。	外面-沈線の区画内にRLの単節縄文。内面-ナデ。	赤色粒・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	8号周溝墓出土。中期前半。口縁部破片。
15	鉢?		わずかに内彎しながら立ち上がる口縁。	外面-口唇部上端と同外面付近にカナムグラによる擬似縄文。それを区画する横位沈線。内面-ナデ。	角閃石・片岩・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	3号周溝墓出土。中期後半。口縁部破片。
16	甕		おおむね直線的に開く形状の部位。	外面-横位沈線、その下に木口状工具による条痕。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-橙色	3号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
17	壺		おおむね直線的に開く形状の部位。	外面-横位沈線、その下に木口状工具による条痕。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-にぶい黄橙色	3号周溝墓出土。中期前半。胴部破片。
18	甕		直立する口縁。内削ぎ気味で断面角頭状を呈する口唇部。	外面-口唇部上端の一箇所に圧痕文。口縁部付近に横位、胴部に縦位の擦痕状の細い条線。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 外面-橙色、内面-にぶい黄褐色	3号周溝墓出土。中期前半。口縁部破片。
19	甕		おおむね直線的に開く口縁。	外面-わずかに外反する口縁。断面角頭状の口唇部。木口状工具による斜位の条痕。内面-ナデ。	白色粒・赤色粒・角閃石・砂礫 内外面-橙色	3号周溝墓出土。中期前半。口縁部破片。

第42表 遺構外出土弥生土器観察表(2)

No.	器種	量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
20	甕		おおむね直立する口縁。断面角頭状の口唇部。	外面-斜位の擦痕。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	3号周溝墓出土。中期前半。 口縁部~胴部破片。
21	甕		直立する口縁。断面角頭状の口唇部。	外面-口縁部付近に横位の擦痕。 口唇部上端にキザミ。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-明赤褐色	6号周溝墓出土。中期後半?。 口縁部破片。
22	甕		おおむね直線的に開く形状の部位。	外面-木口状工具による斜位ないし縦位の条痕。内面-ナデ。	白色粒・赤色粒・角閃石・砂礫 内外面-橙色	3号周溝墓出土。中期前半。 胴部破片。
23	甕	口径 (6.6)	外側へ向けて開く口縁。断面丸頭状の口唇部。	外面-櫛描波状文。内面-ナデ。	白色粒・赤色粒・角閃石・砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	6・12号周溝墓出土。中期後半~後期。口縁部~頸部破片。
24	壺		口縁に向けて大きく開く器形。	外面-頸部に3連止めの櫛描籐状文。内面-ナデ。	赤色粒・角閃石・砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	6号周溝墓出土。後期。頸部破片。
25	壺	口径 (22.0)	複合口縁。口縁に向けて大きく開く器形。	外面-口縁部に櫛描波状文、くびれ部に籐状文(3連止め)でその間はミガキ。胴部上位に波状文、中位以下ミガキ。内面-ナデ。	白色粒・赤色粒・角閃石・砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	6号周溝墓出土。後期。口縁部~胴部破片。
26	甕	底径 5.4	底面から器厚に相当する高さまで直立し、それより上はゆるやかに開く形状。	外面-残存範囲において無文。ナデ。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-にぶい 橙色	6号周溝墓出土。後期。底部破片。
27	壺	底径 (6.2)	底面から上へゆるやかに開く形状。	外面-残存範囲において無文。ナデ。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	6号周溝墓出土。後期。底部破片。
28	壺		底面から上へゆるやかに開く形状。	外面-残存範囲において無文。ナデ。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	6号周溝墓出土。後期。底部破片。
29	壺ないし甕	底径 (8.6)	底面から器厚に相当する高さまで直立し、それより上はゆるやかに開く形状。	外面-左捻り2段にして、前後異方向による捻り戻しの縄文。底面に木葉痕。その他の範囲はナデ。内面-ナデ。	砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	8号周溝墓出土。後期。底部破片。53・54と同一個体の可能性有。
30	壺ないし甕	底径 (5.8)	底面から器厚に相当する高さまで直立し、それより上はゆるやかに開く形状。	外面-底面に木葉痕。その他の範囲はLRの単節縄文。内面-ナデ。	チャート・白色粒・砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	7号周溝墓出土。後期?。底部破片。50~52と同一個体の可能性有。
31	壺	底径 (5.8)	底面から器厚に相当する高さまで直立し、それより上はゆるやかに開き、胴部中位にて最大径となる形状。	外面-残存範囲において無文。ナデ。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい 褐色	6号周溝墓出土。後期。底部破片。
32	壺	底径 5.3	底面から上へゆるやかに開く形状。	外面-残存範囲において無文。ナデ。内面-ナデ。	角閃石・砂礫 内外面-にぶい 橙色	4号周溝墓出土。後期。底部破片。
33	高坏		残存範囲において顕著にくびれる。	外面-台部の残存範囲において3か所、透かし孔に類する穴が穿たれている。その他は無文。内面-ナデ。	白色粒・赤色粒・角閃石・片岩・砂礫 内外面-にぶい 橙色	6号周溝墓出土。後期。底部~台部破片。
34~37	甕		受け口状に屈曲し、上端で直立する口縁。断面丸頭状の口唇部。	外面-口唇部、口縁部にRの無節縄文、頸部に櫛描籐状文、胴部には同様の工具による縦羽状文。内面-ナデ。	白色粒・砂礫 内外面-にぶい 赤褐色	6号周溝墓出土。中期後半。 口縁部~胴部破片。34~37は同一個体。
38	甕		断面丸頭状の口唇部。	外面-櫛描波状文。内面-ナデ。	白色粒・赤色粒・砂礫 内外面-にぶい 黄橙色	遺構外一括。後期。口縁部破片。
39	甕		頸部にてゆるくくびれる器形。	外面-くびれ部分付近に櫛描直線文、その下に櫛描波状文。内面-ナデ。	白色粒・赤色粒・砂礫 内外面-黒褐色	6号周溝墓出土。後期。頸部~胴部破片。
40	壺		頸部にてゆるくくびれる器形。	外面-頸部に櫛歯状工具による波状文および2連止めの籐状文。内面-口縁部に赤彩。ナデ。	赤色粒・角閃石・砂礫 内外面-橙色	7号周溝墓出土。後期。頸部~胴部破片。



第123図 遺構外出土弥生土器・土師器・埴輪

第43表 遺構外出土弥生土器・土師器観察表

No.	器種	量量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
41・42	壺		頸部で強くくびれ、胴部中位にて大きくふくらむ器形。	外面－肩部に波長の大きい櫛描波状文。無文部に赤彩。内面－ナデ。	角閃石・砂礫 内外面－浅黄橙色	6・7号周溝墓出土。後期。胴部破片。41・42は同一個体。
43～45	甕		頸部のくびれ、口縁の開き加減とも弱い。	外面－RLの単節縄文。内面－ミガキに近いナデ。	白色粒・砂礫 内外面－にぶい赤褐色	6号周溝墓出土。後期。口縁部～胴部破片。43～45は同一個体。
46	壺		折返し口縁。やや外反する器形。先細り気味の口唇部。	外面－口縁部にLRの単節縄文。口唇部上端に縄文原体による押捺。内面－ナデ。	赤色粒・角閃石・砂礫 内外面－にぶい褐色	7号周溝墓出土。後期。口縁部破片。
47	壺		胴部中位にてややふくらむ器形。	外面－RLの単節縄文による横位縄文帯。内面－ナデ。	角閃石・砂礫 内外面－橙色	8号周溝墓出土。後期。胴部破片。
48	壺?		やや外反する口縁。	外面－撚り方向の異なる単節縄文を組み合わせた羽状縄文。内面－口縁部にLRの単節縄文。その他はナデ。	白色粒・片岩・砂礫 内外面－にぶい褐色	7号周溝墓出土。後期。口縁部破片。
49	壺?		やや外反する口縁。断面角頭状の口唇部。	外面－LRの単節縄文。内面－ナデ。	角閃石・砂礫 内外面－にぶい橙色	3号周溝墓出土。後期。口縁部破片。
50～52	甕?		折返し口縁。やや外反する器形。先細り気味の口唇部。	外面－折返し部以下にLRの単節縄文。口唇部上端に縄文原体による押捺。内面－ナデ。	砂礫 内外面－にぶい黄橙色	7号周溝墓出土。後期。口縁部破片。50～52は同一個体。
53・54	甕?		おおむね直線的に立ち上がる器形。	外面－左撚り2段にして、前段異方向による撚り戻しの縄文。内面－ナデ。	砂礫 内外面－にぶい橙色	7・8・10号周溝墓出土。後期。胴部下半の破片。53・54は同一個体。
55	甕		頸部にてゆるくくびれる器形。	外面－くびれ部分付近に櫛描鋸歯状文、その下に縄文原体の末端を用いたとみられる円形刺突文が横位1列、結節のある付加条の縄文。内面－ナデ。	砂礫 内外面－黄灰色	8号周溝墓出土。後期。胴部破片。
56	甕		頸部にてゆるくくびれる器形。	外面－くびれ部分付近に櫛描鋸歯状文、その下に弧状の櫛描文と付加条の単節縄文。内面－ナデ。	白色粒・砂礫 内外面－黄灰色	6号周溝墓出土。後期。胴部破片。
57	高坏		やや内彎しつつ立ち上がる器形。急角度で外屈する口唇部。	外面－残存範囲において無文。ミガキ。内面－ナデ。	赤色粒・角閃石・砂礫 内外面－にぶい黄橙色	10号周溝墓出土。後期。口縁部～体部破片。
58	鉢または高坏		外反しつつ大きく開く器形。内面に段をなし、断面おおむね三角形の口縁部。	外面－残存範囲において無文。赤彩。内面－ナデ。赤彩。	角閃石・砂礫 内外面－にぶい黄橙色	9号周溝墓出土。後期。口縁部～体部破片。
59	鉢または高坏		やや内彎しつつ立ち上がる器形。	外面－残存範囲において無文。赤彩。内面－ナデ。赤彩。	角閃石・砂礫 内外面－にぶい黄橙色	6号周溝墓出土。後期。口縁部～体部破片。
60	鉢または高坏		やや内彎しつつ立ち上がる器形。口唇部直下の外面に突帯有。	外面－残存範囲において無文。内面－ナデ。	角閃石・砂礫 内外面－橙色	6号周溝墓出土。後期。口縁部～体部破片。
61	甕		外側に向け弱く開く器形。	外面－残存範囲において無文。輪積痕を2段残す。内面－ナデ。	角閃石・片岩・砂礫 内外面－にぶい橙色	遺構外一括。後期。口縁部破片。

第44表 形象埴輪観察表

番号	器種	部位・形態の特徴	成形・調整手法の特徴	焼成	色調	備考
62	不明	外側に粘土板を貼付して肥厚させる。破片下側を直線的に切り込んだ後にナデ。家の可能性あり。下位の切り込みは窓もしくは出入り口か。	外面、上位ナデ、下位ハケ後ナデ。内面、ナデ。	良好	橙色 5YR6/6	表採。 片岩・チャート含む。
63	不明	小片でガジリがあり、詳細不明。破片下位は透孔か、あるいは底部か。	外面、ハケあるが不明瞭。内面、ナデで下位にケズリ。	良好	橙色 7.5YR6/6	片岩・チャート含む。 円筒埴輪の可能性あり。

(2) 石器・石製品

今回の調査範囲の東半、方形周溝墓群を検出した一帯は、昭和56年度に早稲田大学がローム層上面で確認調査を行い、埋め戻した範囲であり、尾根筋は、表土層直下にローム層が露出する状態であった。よって、縄文時代本来の堆積土は、ローム層の最上部を除き、遺構内覆土のみと考えてよい。

石器類のほとんどは、方形周溝墓の周溝などの時期の異なる遺構出土資料である。ただし、同様の状況で検出された縄文土器が、縄文時代早期前葉の撚糸文系土器、早期中葉の押型文形土器、同沈線文系土器、早期後葉の条痕文系土器、前期初頭の羽状縄文系土器を主とし、なお文様片の偏りを考慮し量的に見るならば、撚糸文系、条痕文系、羽状縄文系土器の3者が卓越しており、石器類の大半は、大きく分けて、縄文時代早期前葉～中葉、早期後葉～前期初頭に属する可能性が高いと見られる。

以下の石器・石製品の内、第136図133・134の砥石以外は、何れも縄文時代に属するものである。第135図130の磨石は、古墳時代前期後葉の8号方形周溝墓の陸橋部の片側の周溝から供献土器とともに出土したものであり、古墳時代前期に砥石として転用されたものと思われる。また、同じ陸橋部をはさんだ反対側の周溝内からは、第136図133の砥石が出土している。

石鏃関連資料（第124図1～18、第45表、図版43）

1～13が石鏃、14～17が石鏃未成品である。1～11は凹基無茎鏃であるが1～3を除き基部の抉りは明瞭でない。1～4は小型製品であり、早期前半に属する可能性が高い。5～11は器体長が長く、抉りが浅く、チャート製のものが多点から前期前半に属するものと思われる。12・13は有茎鏃で、13は凹基有茎鏃と呼ばれるものである。いずれも頁岩製であり、晩期に属する可能性が高い。14は石鏃未成品の典型的形状を示す資料で、基部に丸みを持つものである。円基鏃と分類される場合があるが、未成品の場合が多い。この形状からは平基、凹基、凸基のすべてが製作可能となる。16は両極剥離を用いた石鏃未成品であるが、素材の器体中央付近と思われる部位で折損している。17も未成品の折損資料である。

18が両極剥離痕のある剥片であり、石鏃素材剥片である可能性が高い。石材は3が黒曜石、11が凝灰岩、12・13・15が頁岩でそれ以外はすべてチャートである。

石匙（第124図19、第45表、図版43）

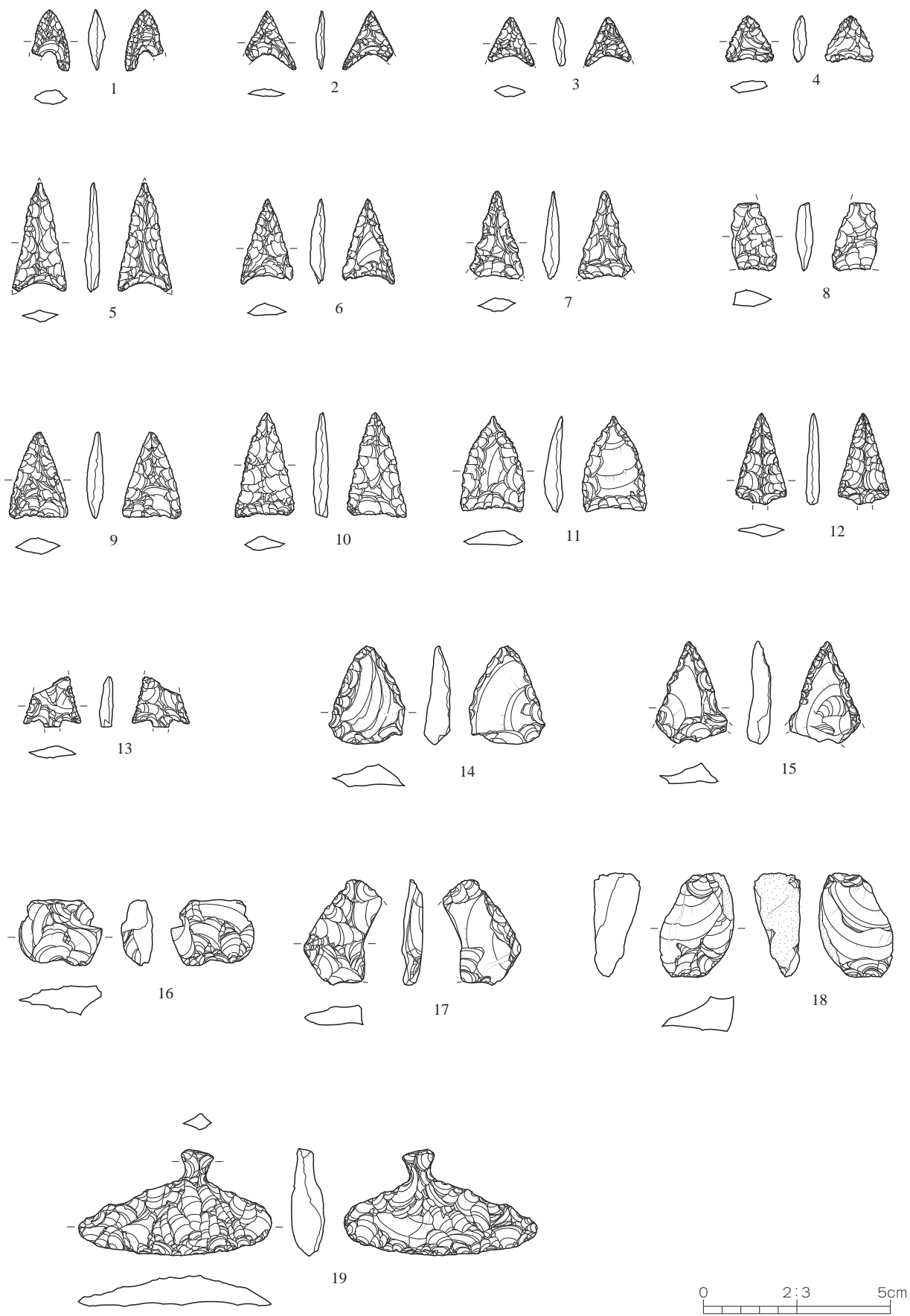
チャート製の横型石匙であり欠損は認められない。素材は横長剥片で調整は押圧剥離が器体の奥まで進行しており非常に丁寧な調整といえる。縄文時代前期に属するものと思われる。

磨製石斧（第125図20・21、第45表、図版43）

20は凝灰岩製の小型製品であり裏面に自然面を多く残し、礫面を直接研磨している。これらの特徴から早期に属するものと思われる。21はホルンフェルス製の剥片を素材としており、剥片の末端部を直接研磨している。器体部分の調整を行わない点で、20と同様早期に属するものと思われる。

打製石斧（第125図22～第128図61、第45表、図版43～45）

22～61は打製石斧である。石材はホルンフェルス16点、凝灰岩13点、安山岩7点、頁岩4点で構成され砂岩は認められない。22は凝灰岩製であり、側縁に両極敲打による調整が認められる。刃部は欠損している。形状からは中期後半の可能性はある。23～29は器体厚が薄手のもので、平面全体形状は刃部幅がやや広がりをもち緩い円弧を描く。刃部断面形状は比較的鋭利な一群である。23～27は側縁



第124図 遺構外出土石器・石製品（1）

ないし上下端に微弱ながら両極敲打の痕跡が認められる資料である。28・29には両極敲打は認められない。いずれも早期末から前期初頭の石器と考えられる。30～57は器体厚が比較的厚い一群であり、形状が安定的ではないが、刃部に急角度の調整加工剥離が施される点から早期後半から前期前半までの石器として考えられる。調整加工は垂直敲打ではない。30～38は基部幅と刃部幅の差が大きく、全体形状が三角形を呈し、刃部形状が直線的なものである。刃部には急角度の調整加工が施される。36～38は欠損しているため形状は明瞭ではないが、刃部の調整と形状、器体厚から判断した。39は刃部形状が31～38と同様に直線状で急角度の調整加工が施される。平面全体形状はほぼ正方形を呈する。早期後半から前期前半に属すると考えられる。40～52は器体の厚さが更に厚いものであり、刃部には急角度剥離が施される。形状は楕円形、長方形、ティアドロップ形などが認められる。41・44・45・49の様裏面の自然面に原石の角部分を用いている例も多い。早期後半から前期前半に属すると考えられる。53～55は刃部を欠損するもので全体形状は不明であるが、調整加工のあり方から早期後半から前期前半に属する可能性が高い。56・57は大形の打製石斧である。56は刃部、両側縁に急角度の調整加工が認められる。57は正面左側縁が素材の急角度な折面で構成される。右側縁と刃部には急角度の調整加工が施される。早期後半から前期前半に属すると考えられる。58～61は小形で器体厚が薄いものである。58は刃部付近に摩耗痕が認められる。形状、素材から早期後半から前期前半に属する可能性が高い。

スクレイパー（第128図62～第130図93、第45・46表、図版46～48）

62～93はスクレイパーである。石材は凝灰岩が16点、ホルンフェルスが9点、安山岩が7点で構成される。62～67は縦長剥片を素材として側縁に刃部を持つものである。64・65は素材のフェザーエッジの使用に伴うと思われる剥離痕が認められる。調整はいずれもやや鋸歯状を呈する。68～87は横長剥片を素材として剥片端部に調整加工と使用に伴うと考えられる不均等の剥離を伴うものである。86・87は大形であり、84・86は肉厚の刃部を持ち急角度の調整加工が施され、礫器との差が微妙なものである。75・76は中期後半に属すると思われる。77は粗製の石匙の可能性もある。その他は、早期前半から前期前半に属するものと思われる。88～91は矩形の剥片を用いたもので、剥片端部に調整加工と使用に伴うと考えられる不均等の剥離を伴うものである。92はノッチ状の抉りを持つものであり、使用に伴って形成されたと思われる剥離面が認められる。93は両面に調整加工が施されるもので刃部はやや尖頭状を呈している。

礫器（第130図94～第131図105、第46表、図版48）

94～105は礫器であり、片面に自然面を有し、急角度剥離によって刃部が形成されるものである。石材は凝灰岩が5点、ホルンフェルスが5点、頁岩が2点で構成される。94～97はやや弧状を呈する刃部を持つものである。上辺にやや丸みを持つ。98～102は刃部が尖頭状を呈するものである。103は小形であるが素材の用い方から礫器と判断した。104は刃部を欠損しているが素材の厚みから礫器の可能性が高い。105は形態的に安定していないが急角度剥離のあり方から礫器と判断した。

いずれも早期前半から前期初頭までの所産と考えられる。

スタンプ形石器（第132図106～第133図113、第46表、図版49）

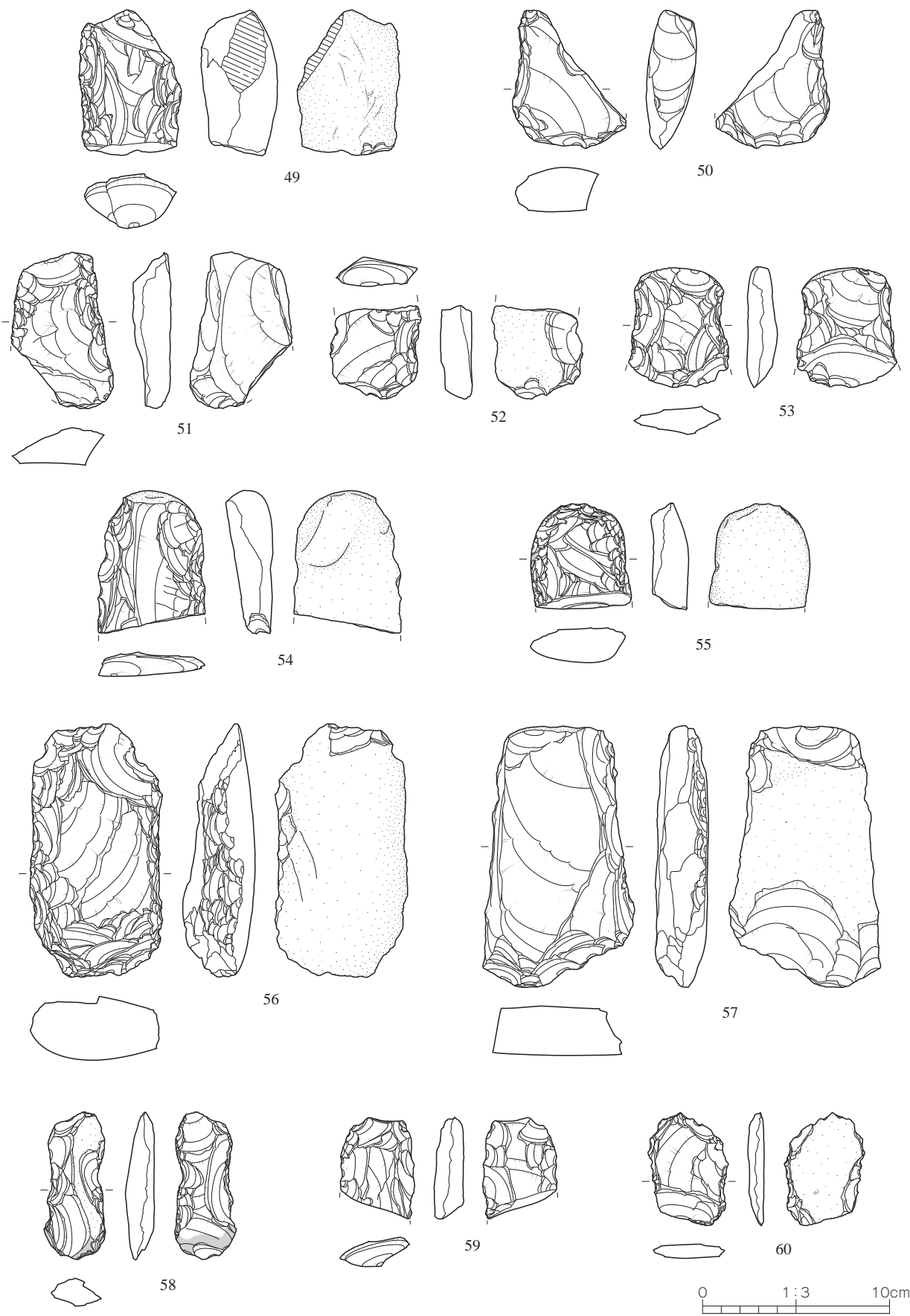
106～113はスタンプ形石器であり、扁平礫の一端を打割し、打割面（底面）を使用面として用いている。石材は閃緑岩3点、花崗岩・砂岩が各1点である。



第125図 遺構外出土石器・石製品（2）



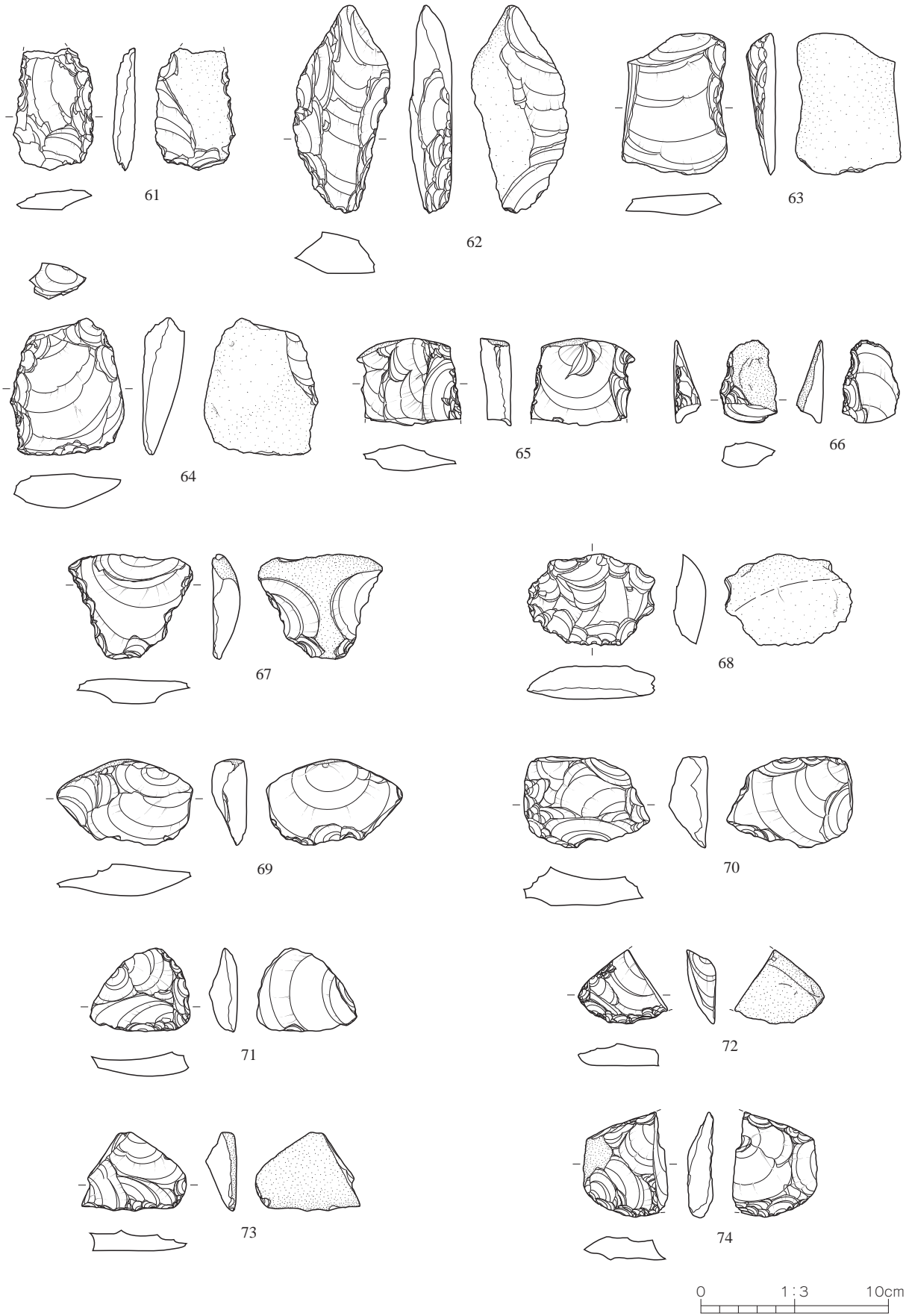
第126図 遺構外出土石器・石製品（3）



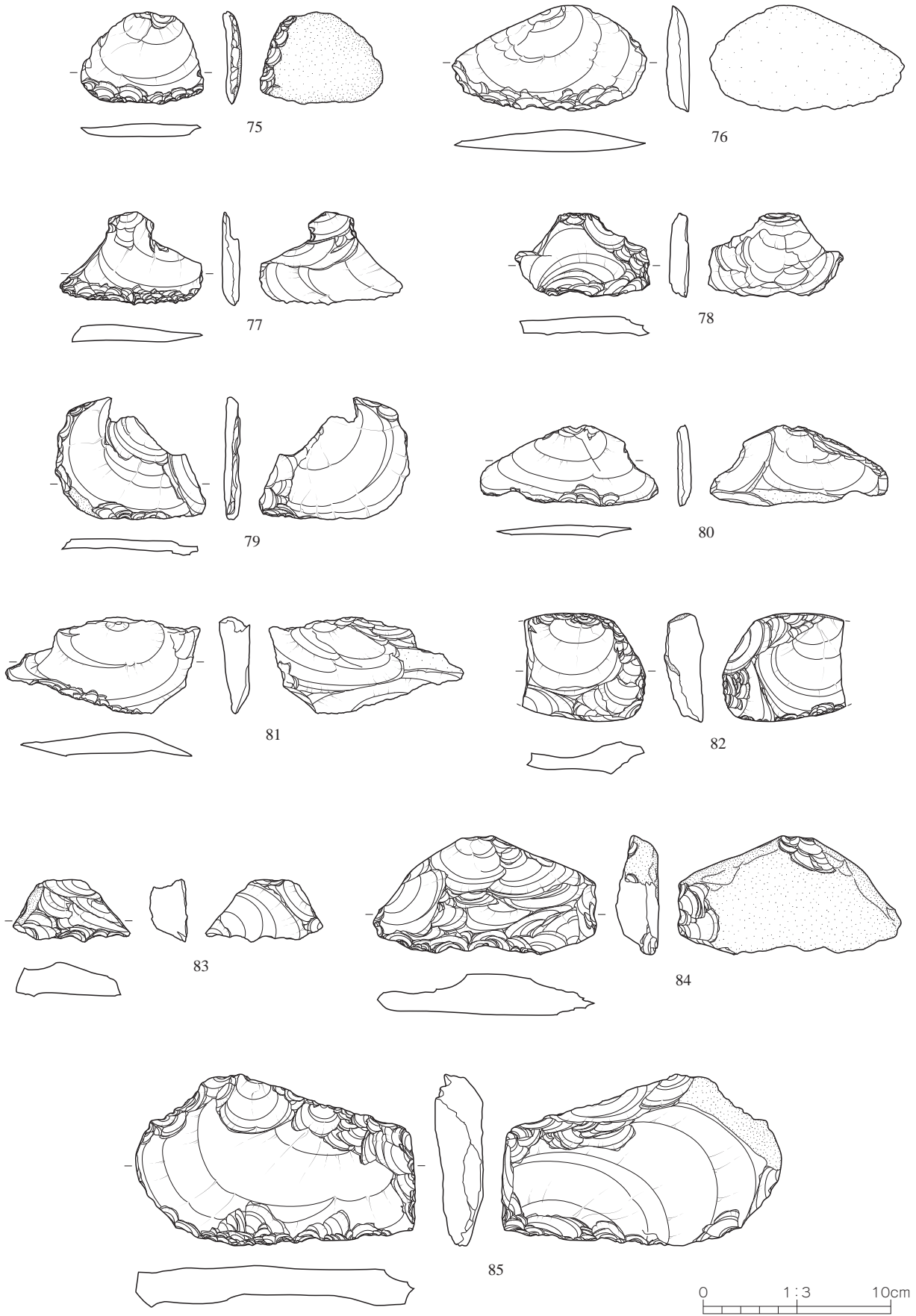
第127図 遺構外出土石器・石製品（4）

第45表 遺構外出土石器・石製品観察表(1)

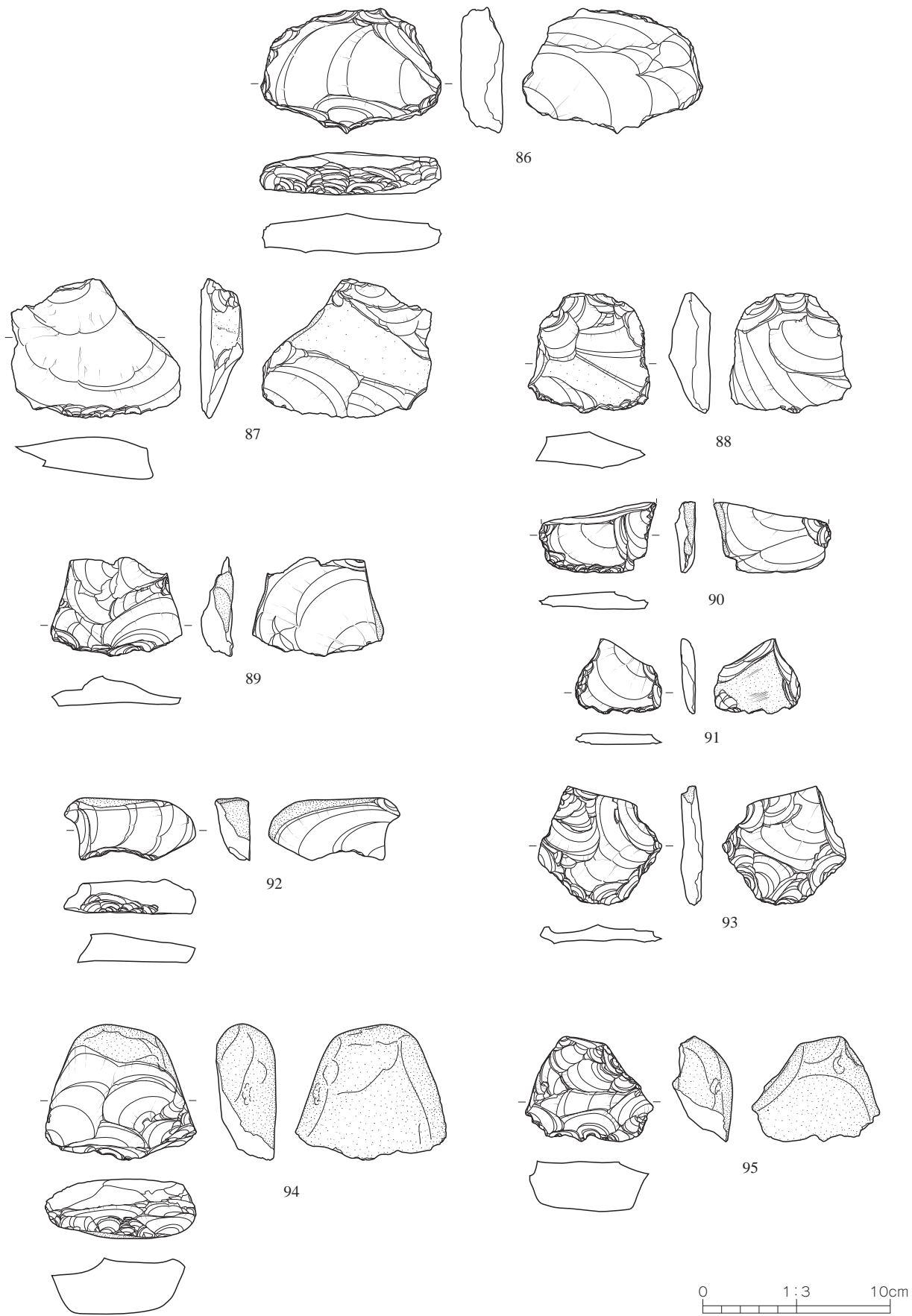
挿図No.	器種	石材	完形	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	遺構名	遺物No.
1	石鏃	チャート	左脚部欠	16.78	10.59	4.57	0.5	SZ-04	
2	石鏃	チャート	左脚部欠	15.48	13.77	2.25	0.3	SK-50	
3	石鏃	黒曜石	○	12.06	12.49	3.33	0.3	表採	62
4	石鏃	チャート	○	12.37	12.72	3.35	0.5	SK-47	
5	石鏃	チャート	○	28.96	14.39	3.91	1.1	SZ-08	
6	石鏃	チャート	○	23.26	13.88	3.70	0.9	SZ-08	
7	石鏃	チャート	両脚部欠	23.63	14.44	4.43	1.0	SZ-07	
8	石鏃	チャート	先端から左脚部欠	18.15	11.28	4.67	1.0	SK-44	
9	石鏃	チャート	○	22.97	15.37	4.33	1.3	SZ-06	
10	石鏃	チャート	○	27.70	15.61	3.85	1.4	SZ-10	
11	石鏃	凝灰岩	○	25.55	16.86	4.48	1.9	Tr5	6
12	石鏃	頁岩	脚部欠	24.62	13.65	3.68	0.9	SZ-03	
13	石鏃	頁岩	先端・脚部欠	13.44	14.68	3.29	0.6	SZ-08	
14	石鏃	チャート	○	25.81	20.55	6.68	3.2	SI-03	
15	石鏃	頁岩	脚部欠	27.01	19.24	5.84	2.3	表採	105
16	石鏃	チャート	○	17.36	21.68	8.41	3.0	表採	12
17	石鏃	チャート	右側縁欠	26.44	23.25	5.51	2.9	SK-02	
18	楔形石器	チャート	○	27.58	19.07	12.15	5.6	表採	
19	石匙	チャート	○	28.04	50.19	8.45	8.6	Tr7	3
20	磨製石斧	凝灰岩	○	59.35	36.00	16.54	48.8		23
21	磨製石斧	ホルンフェルス	基部欠	69.69	40.36	10.35	47.9	SZ-12	1
22	打製石斧	凝灰岩	○	97.23	55.27	16.22	115.9	SZ-07	
23	打製石斧	頁岩	○	69.84	48.30	11.00	49.0	SZ-10	
24	打製石斧	安山岩	○	76.12	62.17	13.29	64.5	SZ-10	
25	打製石斧	凝灰岩	○	84.67	51.21	14.22	81.2	SZ-03	
26	打製石斧	安山岩	○	100.86	59.38	16.39	120.7	SZ-10	7
27	打製石斧	ホルンフェルス	○	78.04	46.30	15.16	69.9	SZ-06	
28	打製石斧	安山岩	○	71.22	49.59	13.87	61.2	ST-02	
29	打製石斧	ホルンフェルス	○	67.88	46.61	11.04	41.9	SZ-12	
30	打製石斧	ホルンフェルス	○	94.21	62.27	24.67	121.6	表採	
31	打製石斧	頁岩	○	105.32	53.93	20.35	135.4	SX-01	3
32	打製石斧	頁岩	○	92.73	52.74	20.88	130.0	SX-01	
33	打製石斧	凝灰岩	○	69.36	45.84	15.95	53.7	SZ-08	13
34	打製石斧	凝灰岩	○	69.29	38.73	16.62	43.2	SZ-08	
35	打製石斧	安山岩	基部欠	70.84	55.53	13.51	73.2	表採	
36	打製石斧	ホルンフェルス	基部欠	60.48	51.40	18.28	59.8	SZ-07_08間	
37	打製石斧	頁岩	基部欠	46.08	52.11	17.97	52.4		37
38	打製石斧	凝灰岩	基部欠	42.05	61.46	20.58	61.2	SZ-07	
39	打製石斧	ホルンフェルス	○	67.60	57.57	19.55	105.1	表採	
40	打製石斧	ホルンフェルス	○	76.81	50.01	19.94	95.7	SZ-07	
41	打製石斧	ホルンフェルス	○	78.78	48.67	15.49	78.9	SZ-06	
42	打製石斧	ホルンフェルス	○	83.89	48.83	18.50	90.9	SZ-07	
43	打製石斧	ホルンフェルス	○	92.02	56.00	23.42	124.6	SZ-10	4
44	打製石斧	凝灰岩	○	85.61	52.78	26.03	126.9	SZ-06	4
45	打製石斧	凝灰岩	基部欠	55.26	39.35	24.22	61.0		
46	打製石斧	ホルンフェルス	○	78.91	52.54	28.79	108.8	表採	
47	打製石斧	凝灰岩	○	74.67	51.95	21.69	97.7	表採	
48	打製石斧	ホルンフェルス	○	93.46	47.56	23.35	113.4	ST-01	
49	打製石斧	ホルンフェルス	刃部欠	75.83	53.81	39.80	208.5	表採	6
50	打製石斧	ホルンフェルス	基部欠	74.82	59.11	24.70	105.2		30
51	打製石斧	安山岩	刃部欠	83.91	53.20	20.76	90.9	ST-02	
52	打製石斧	安山岩	基部欠	49.39	48.30	16.42	57.0		
53	打製石斧	安山岩	刃部欠	63.66	52.48	15.38	60.4	SZ-06	
54	打製石斧	凝灰岩	刃部欠	75.53	57.69	22.27	117.3	SZ-06	
55	打製石斧	凝灰岩	刃部欠	56.52	54.54	18.38	84.3	SD-01	
56	打製石斧	凝灰岩	○	134.63	69.61	37.93	470.3	SZ-10	8
57	打製石斧	凝灰岩	○	137.86	82.69	27.63	421.3	ST-01	
58	打製石斧	凝灰岩	○	77.88	32.27	16.16	39.2	SZ-07	
59	打製石斧	ホルンフェルス	下部欠	53.06	38.89	14.82	36.4	SZ-10	
60	打製石斧	ホルンフェルス	○	59.48	43.06	8.12	25.4	SI-03	
61	打製石斧	ホルンフェルス	上部欠	65.17	43.54	10.74	31.7	SZ-08	
62	スクレイパー	凝灰岩	○	109.89	49.63	21.30	116.8	表採	
63	スクレイパー	ホルンフェルス	○	75.23	55.54	15.43	63.3	SZ-12	
64	スクレイパー	凝灰岩	○	71.64	60.79	19.11	100.5	SZ-09	
65	スクレイパー	凝灰岩	下部欠	49.05	54.26	14.78	47.0	SZ-07	
66	スクレイパー	凝灰岩	下部欠	44.22	30.48	13.66	16.9	SZ-06	
67	スクレイパー	凝灰岩	○	54.85	64.70	13.73	44.4		55
68	スクレイパー	凝灰岩	○	68.29	49.23	17.95	66.5	SZ-10	



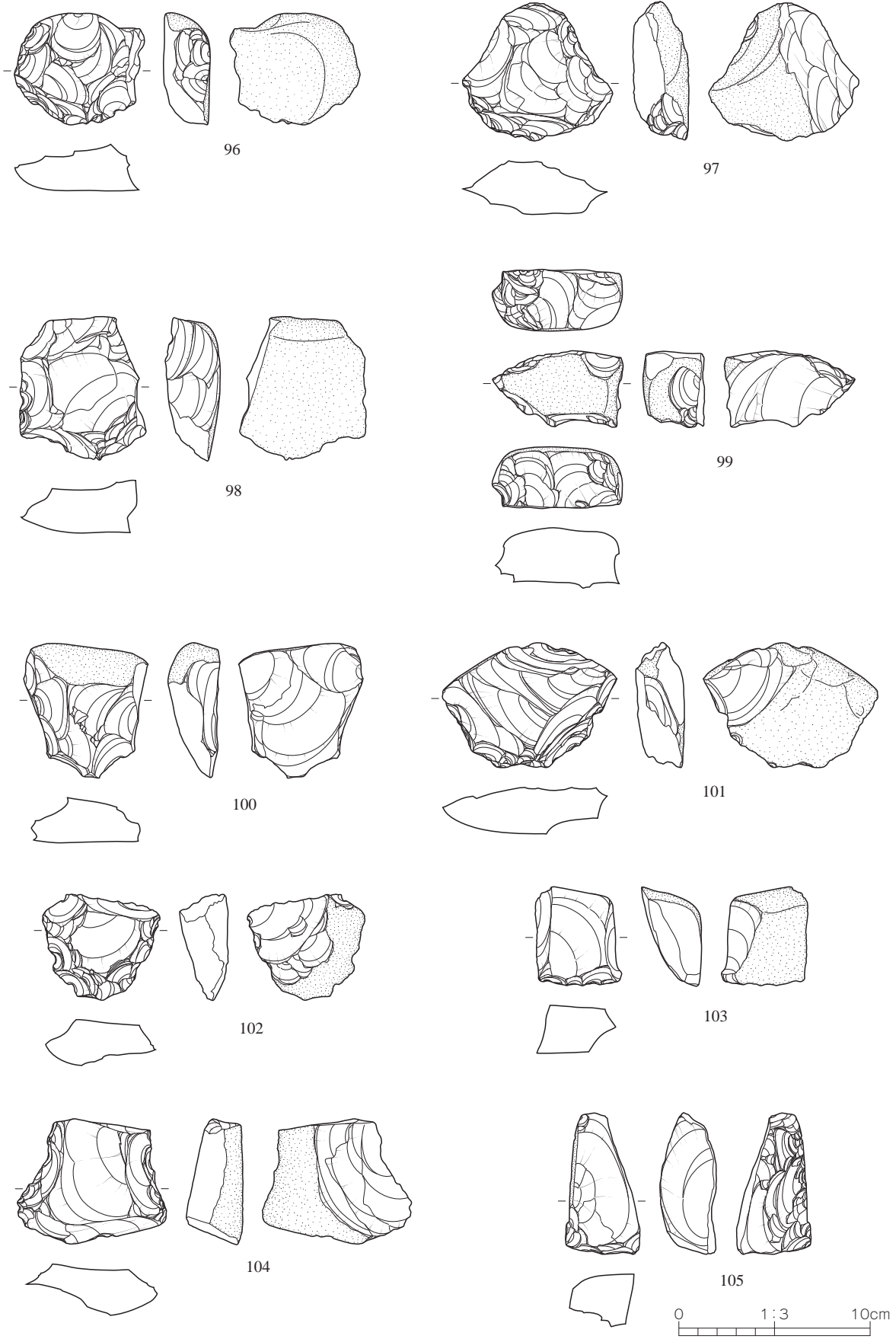
第128図 遺構外出土石器・石製品（5）



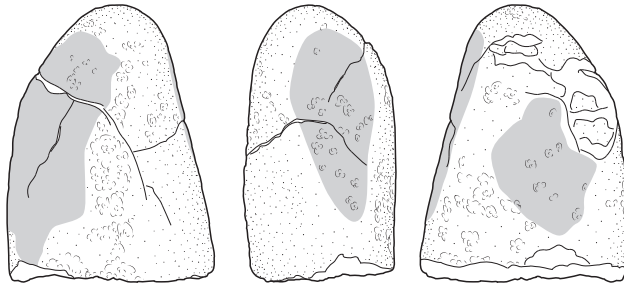
第129図 遺構外出土石器・石製品（6）



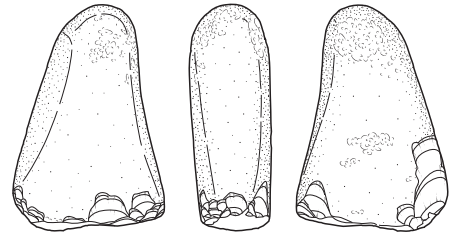
第130図 遺構外出土石器・石製品（7）



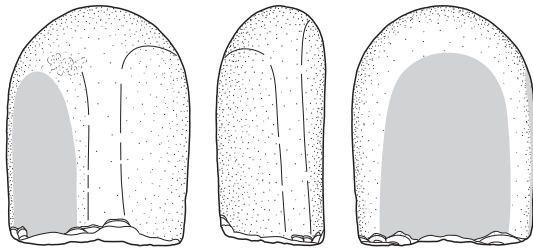
第131図 遺構外出土石器・石製品（8）



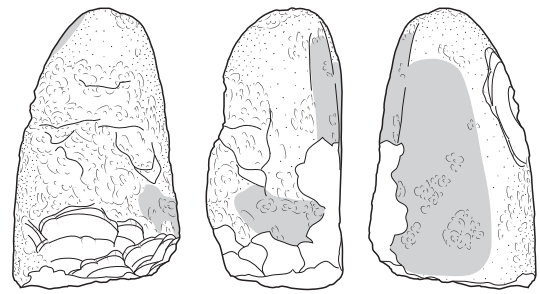
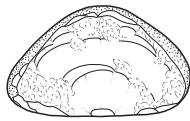
106



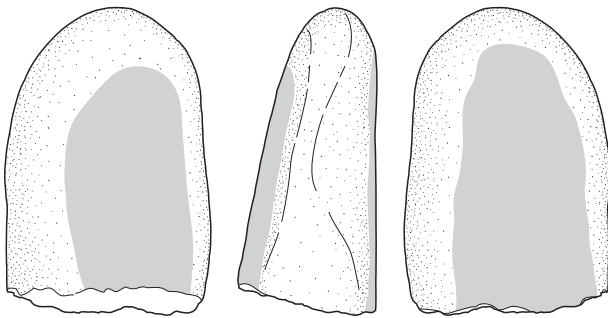
107



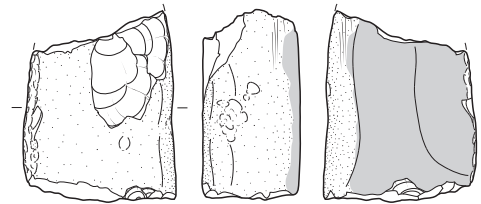
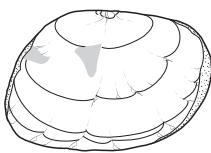
108



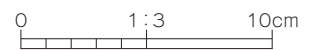
109



110



111



第132図 遺構外出土石器・石製品（9）

106は打割面に整形のための剥離が加えられている。器体部に磨痕と敲打痕が認められる。107は使用が進んだ状態のもので、表面には底面（打割面）方向からの剥離面が、打割面には明瞭な磨痕が認められる。器体頂部に敲打痕が見られる。108・109は器体部に磨痕と敲打痕を持ち、底面方向からの剥離を有し、底面に敲打痕を持つものである。110は器体と底面に磨痕が認められる。111は器体部に磨痕と敲打痕を持ち、底面方向からの剥離を有し、底面に剥離痕を持つものである。製作→使用→再生→使用までの行程を想定できる。112も111と同様であるが、器体部は敲打痕のみである。また上面は折損しているが、折損部に磨痕が認められる。113も底面方向からの剥離を有し、底面に剥離痕を持つものであり、再生行程を経ているものと思われる。

敲打石（第133図114～116、第46表、図版49・50）

114～116は敲打石である。114は砂岩製で大形であり、敲打痕のほか敲打時に生じたと考えられる大きな剥離痕が認められる。大形の礫の分割に用いられた可能性が高い。115は安山岩製の小形品である。敲打痕は端部、側縁、正面に認められ多様な使用方法が考えられる。116は凝灰岩製であり、敲打痕が集中する右側縁付近で器体が破損しており、使用に伴う破損と考えられる。器体には磨痕が存在するが、敲打痕に切られており磨石から敲打石に転用されたものと思われる。

特殊磨石（第133図117、第46表、図版50）

砂岩製であり扁平礫の側縁の幅の狭い部分を利用しており、磨面は2条認められる。また正面裏面にも磨面が展開している点は使用方法からも注目される。元の推定礫形状からはかなり磨滅しているが、摺る行為だけで現状になったとは考えにくい。他の遺跡の出土例では、使用に伴って使用幅が広がるのを避けるために使用面から剥離を施し、幅の狭小化をはかる再生行為を行っている例があり、本資料も同様の行為が伴っている可能性がある。早期前半から前期後半までの所産であろう。

凹石（第134図118～120、第46表、図版50）

石材はすべて安山岩製である。118は楕円形を呈するもので、側縁形状も含め定型化している。使用状況は凹みのほか擦痕が認められる119は器体に磨痕が顕著に見られる。120は棒状に長いタイプの凹石である。早期後半から前期にかけてのものと思われる。

磨石（第134図121～第136図132、第46表、図版50・51）

石材は130の閃緑岩を除きすべて安山岩製である。円形・楕円形を呈し、厚さの薄い扁平礫を素材としているものが多い。127・128は厚さが厚くやや球状を呈するものである。凹石とともに破損品が多いのが特徴である。表裏側縁に敲打痕を残すものが多く、表面に磨痕・擦痕を伴う。131は割面にも磨痕が認められる。

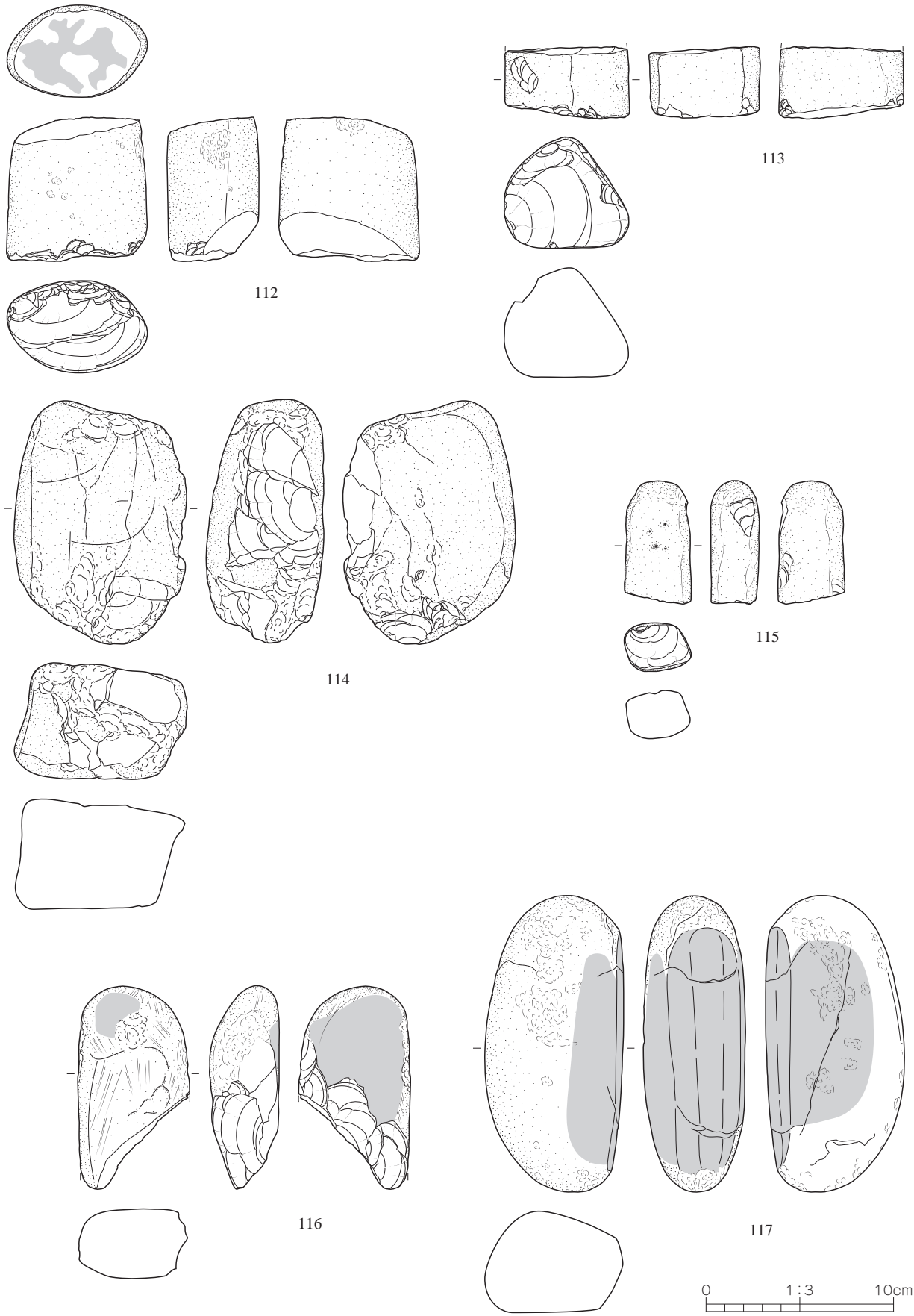
砥石（第136図133・134、第46表、図版51）

133は細粒砂岩製であり、縄文時代早期前半のスタンプ形石器を古墳時代以降に砥石に転用したものと思われる。研面は非常に平滑であり、正面・右側面・裏面に顕著な使用が認められる。スタンプ形石器の底面にあたる部分も使用されているが、剥離面が所々観察できる。134は凝灰岩製であり、古墳時代以降の典型的な砥石である。使用によりかなり小型化している。

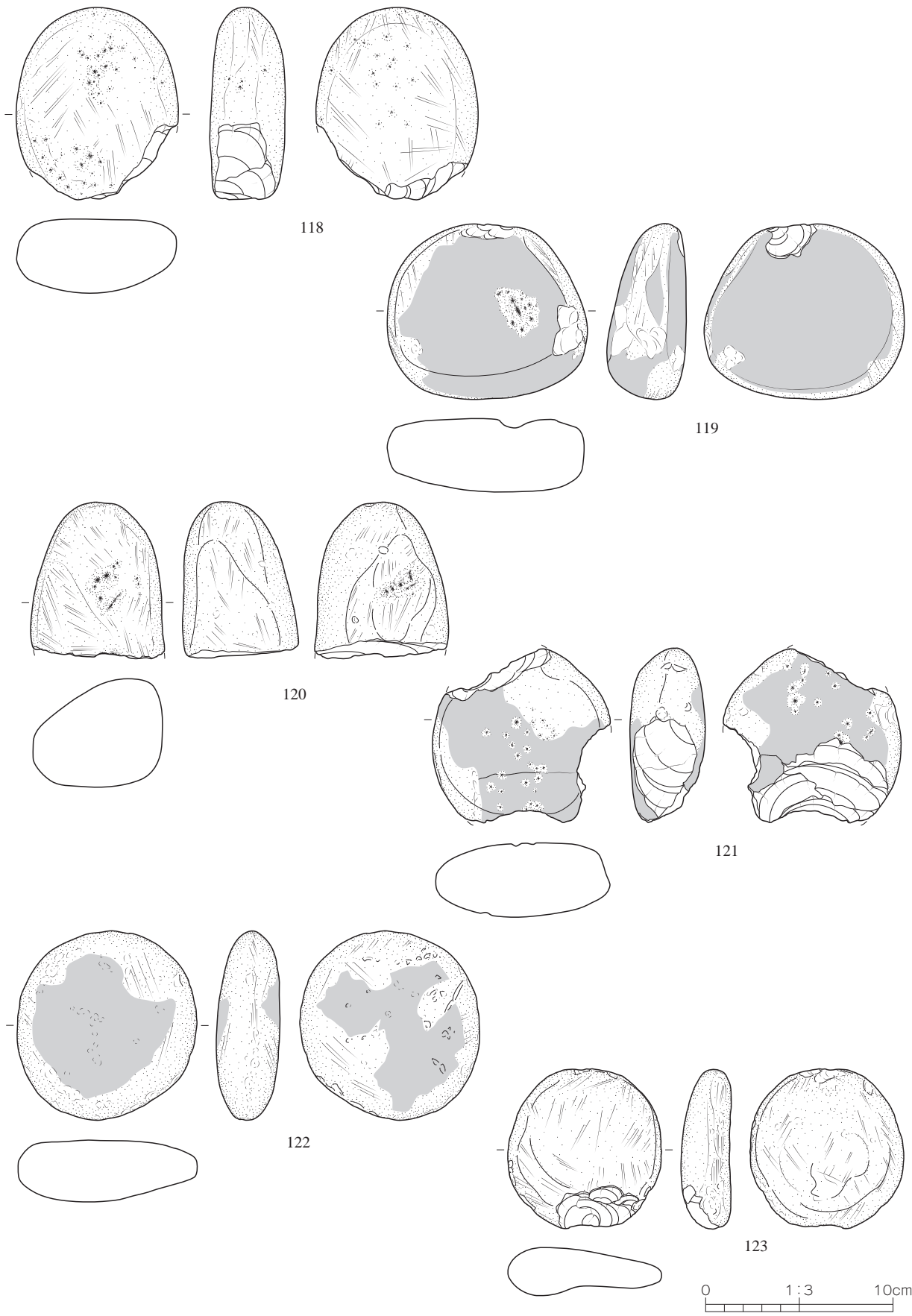
石皿（第136図135、第46表、図版51）

緑色片岩製の石皿と思われる。使用面は判然としないが石皿を作り出す行程の中途段階と思われる。中期の所産と思われる。

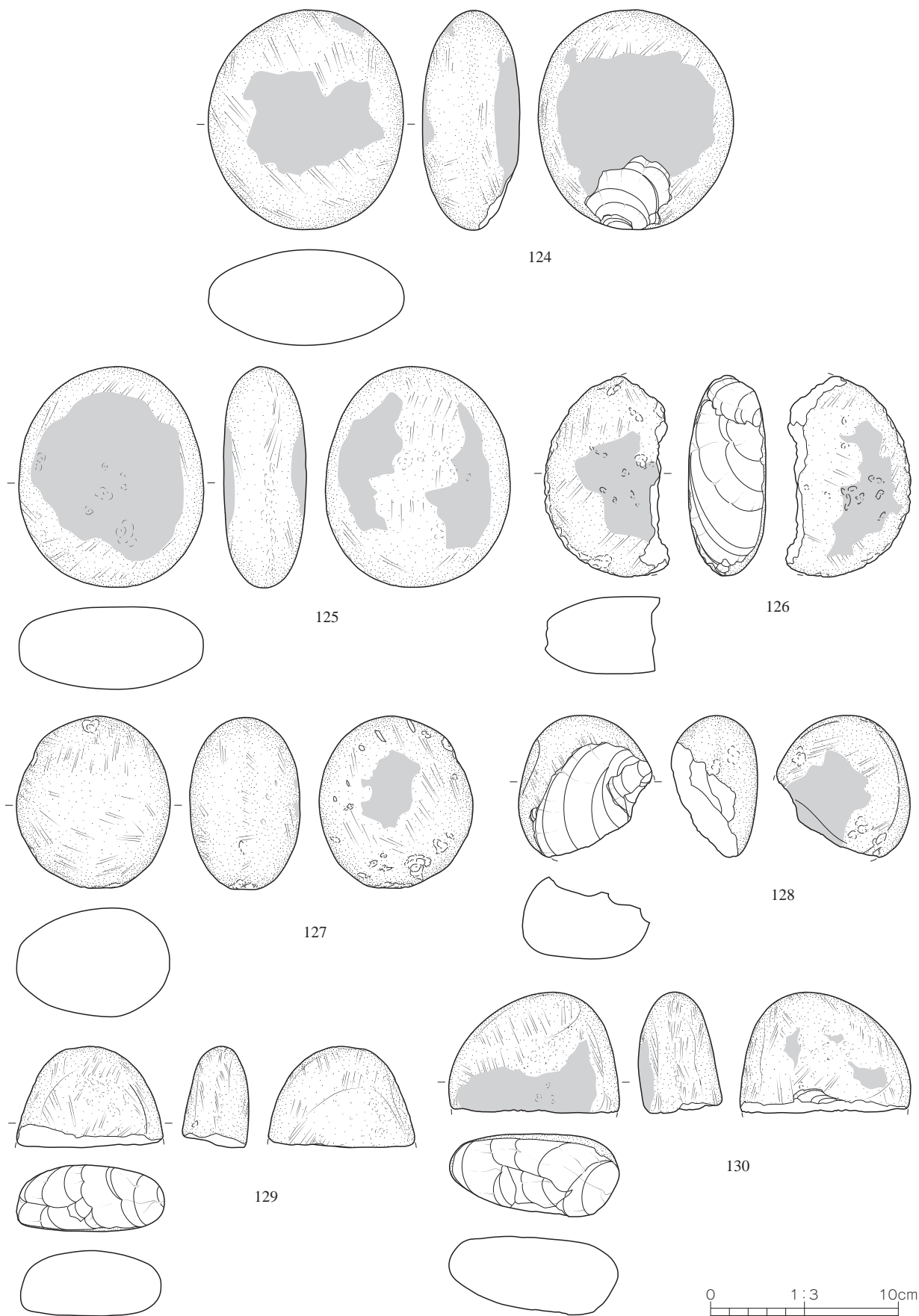
（藤波 啓容）



第133図 遺構外出土石器・石製品 (10)



第134図 遺構外出土石器・石製品 (11)



第135図 遺構外出土石器・石製品 (12)

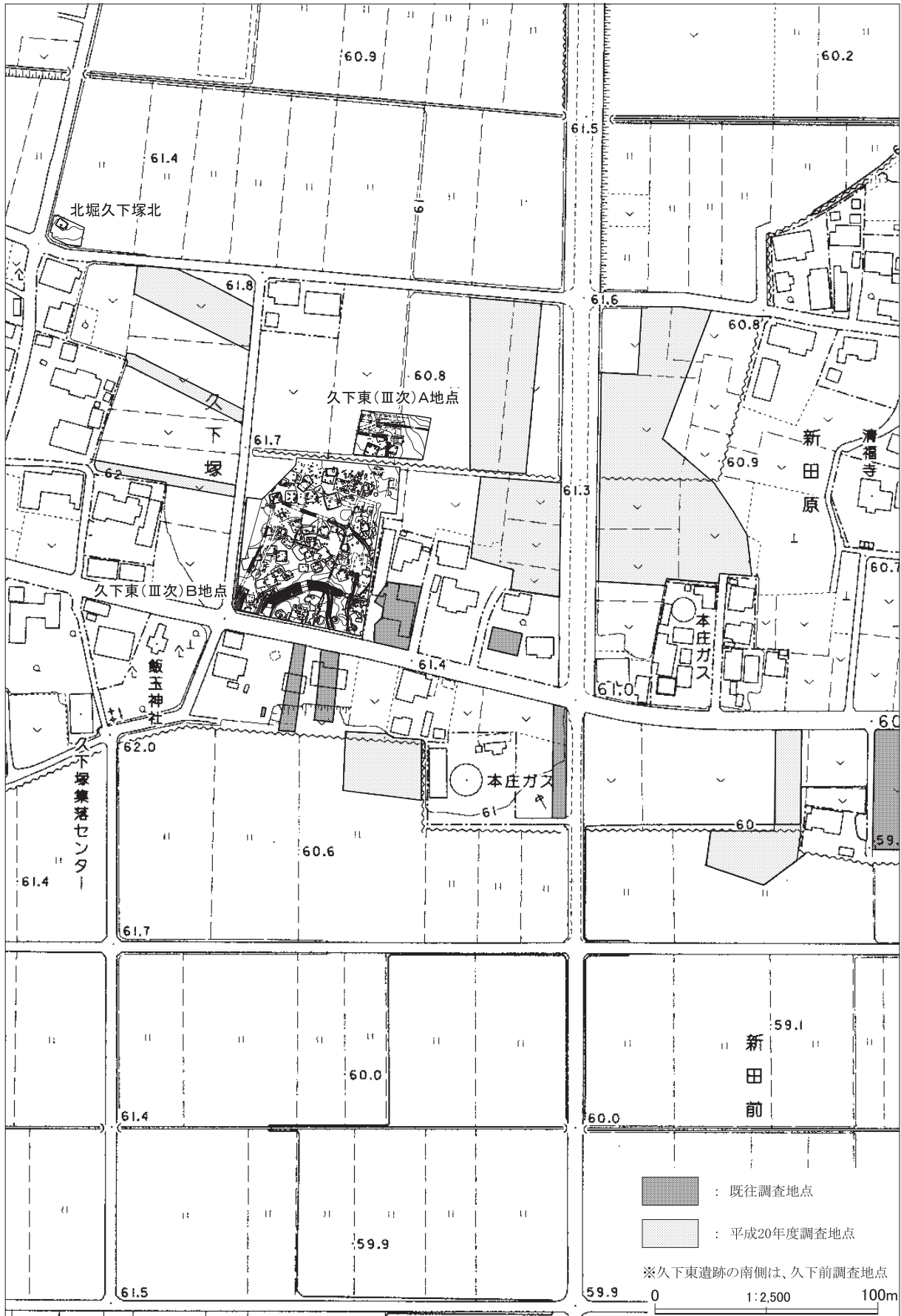


第136図 遺構外出土石器・石製品 (13)

浅見山 I 遺跡

第46表 遺構外出土石器・石製品観察表(2)

挿図No.	器種	石材	完形	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	遺構名	遺物No.
69	スクレイパー	ホルンフェルス	○	46.90	72.84	18.67	59.8	SZ-06	
70	スクレイパー	ホルンフェルス	○	49.62	69.79	19.45	67.8		
71	スクレイパー	ホルンフェルス	○	44.14	52.72	15.08	34.6	ST-01	
72	スクレイパー	凝灰岩	右側縁欠	41.95	48.04	14.20	22.3		
73	スクレイパー	ホルンフェルス	左側縁欠	41.69	55.78	15.75	27.8	SZ-03	
74	スクレイパー	凝灰岩	右側縁欠	54.60	44.73	13.48	34.6	SZ-07	
75	スクレイパー	安山岩	○	49.34	65.18	8.17	30.3	SZ-07	
76	スクレイパー	凝灰岩	○	56.05	101.59	11.86	75.8	一括	
77	スクレイパー	安山岩	○	49.64	74.90	9.24	31.9		15
78	スクレイパー	安山岩	○	43.06	71.62	9.44	33.2	SZ-03	
79	スクレイパー	安山岩	○	63.95	80.20	7.67	36.1	SZ-03	
80	スクレイパー	ホルンフェルス	○	43.11	94.43	6.54	27.1	表採	
81	スクレイパー	凝灰岩	○	52.49	105.79	13.32	59.5		4
82	スクレイパー	安山岩	左側縁欠	58.39	63.90	21.00	77.2	SZ-09	
83	スクレイパー	ホルンフェルス	○	33.65	62.60	19.39	33.2	SZ-06	
84	スクレイパー	ホルンフェルス	○	64.00	116.96	21.51	175.2	SZ-03	
85	スクレイパー	凝灰岩	○	90.03	148.17	24.37	366.8	SZ-02	
86	スクレイパー	安山岩	○	67.35	95.56	22.41	192.5		53
87	スクレイパー	凝灰岩	○	73.59	88.93	19.39	136.8	SZ-07	4
88	スクレイパー	凝灰岩	○	64.40	64.43	19.87	85.3	Tr7	4
89	スクレイパー	安山岩	○	52.68	68.46	16.06	52.6	SZ-10	
90	スクレイパー	凝灰岩	上部欠	35.51	63.31	10.38	26.2	SZ-10	
91	スクレイパー	凝灰岩	○	39.86	45.19	6.90	15.0	SZ-02	
92	スクレイパー	ホルンフェルス	○	33.57	69.17	17.47	45.7	SZ-03	
93	スクレイパー	凝灰岩	○	65.73	65.76	9.80	35.9		
94	礫器	凝灰岩	○	71.82	78.27	31.29	210.6	ST-01	
95	礫器	頁岩	○	59.29	67.48	29.33	121.5	表採	
96	礫器	凝灰岩	○	62.65	70.19	24.59	119.1	ST-01	
97	礫器	ホルンフェルス	○	73.56	78.70	28.44	163.2	ST-01	
98	礫器	ホルンフェルス	○	75.72	69.71	28.16	149.1	SZ-06	
99	礫器	ホルンフェルス	○	38.20	68.21	30.36	125.6	ST-01	
100	礫器	凝灰岩	○	72.52	65.75	23.92	126.2	SZ-06	
101	礫器	凝灰岩	○	66.18	90.19	23.89	153.1	SZ-07	
102	礫器	凝灰岩	○	57.54	60.45	25.09	75.5	SZ-06	
103	礫器	ホルンフェルス	欠損	60.94	44.52	28.85	80.1	表採	
104	礫器	ホルンフェルス	欠損	65.59	76.27	28.35	150.3	SZ-03	
105	礫器	頁岩	○	76.40	45.81	27.35	87.0	ST-01	
106	スタンプ形石器	閃緑岩	○	110.39	82.60	61.16	729.1	SZ-06	10
107	スタンプ形石器	砂岩	○	88.94	58.63	31.23	212.6	SZ-12	
108	スタンプ形石器	花崗岩	○	94.99	72.64	42.90	456.4	SZ-06	
109	スタンプ形石器	閃緑岩	○	114.22	64.04	53.59	542.6	SZ-12	2
110	スタンプ形石器	安山岩	○	122.43	81.25	55.01	774.3	SZ-10	5
111	スタンプ形石器	安山岩	上部欠	74.78	61.21	39.46	258.9	Tr4	
112	スタンプ形石器	凝灰岩	○	73.39	75.28	49.22	421.3	SZ-12	
113	スタンプ形石器	閃緑岩	上部欠	38.33	68.24	64.33	242.7	SZ-07	
114	敲石	砂岩	○	129.46	91.41	58.29	1035.2	SZ-10	6
115	敲石	安山岩	下部欠	65.56	33.79	25.63	103.3	SZ-09	
116	敲石	凝灰岩	下部欠	106.57	59.19	37.56	336.2	SZ-10	2
117	特殊磨石	砂岩	○	156.89	74.62	55.19	920.3	SZ-08	3
118	凹石	安山岩	下部欠	104.61	87.19	41.03	451.6	SJ-03	1
119	凹石	安山岩	○	94.49	106.23	41.47	631.5	SZ-10	
120	凹石	安山岩	下部欠	84.74	70.99	60.19	469.8	SZ-06	15
121	磨石	安山岩	欠損	93.35	97.90	39.78	419.2	SZ-06	19
122	磨石	安山岩	○	101.24	95.19	32.21	404.1	表採	
123	磨石	安山岩	○	84.48	82.08	24.02	258.8	SX-01	2
124	磨石	安山岩	○	117.24	104.25	52.11	816.8	SZ-07	2
125	磨石	安山岩	○	116.78	98.30	43.77	764.4	SZ-12	4
126	磨石	安山岩	欠損	106.58	63.74	40.81	364.5		
127	磨石	安山岩	○	91.67	80.97	59.05	605.8	SZ-06	3
128	磨石	安山岩	欠損	79.31	68.30	44.50	231.1	SZ-07	
129	磨石	安山岩	欠損	52.69	77.12	34.40	171.7	表採	
130	磨石	閃緑岩	欠損	62.53	90.08	40.43	336.5	SZ-08	2
131	磨石	安山岩	上部欠	39.17	71.57	43.64	120.6	SZ-07	2
132	磨石	安山岩	欠損	62.71	102.72	32.84	268.5		
133	砥石	砂岩	○	109.55	68.70	42.18	520.1	SZ-08	1
134	砥石	凝灰岩	欠損	53.13	39.97	17.09	49.6	ST-01	
135	緑色片岩製石器	緑色片岩	欠損	495.00	210.00	36.49	5209.0	SK-47	



第137図 久下東遺跡（Ⅲ次）・北堀久下塚北遺跡調査地点位置図

第IV章 久下東遺跡（Ⅲ次）A1・B1地点の調査

第1節 遺跡の概要

久下東遺跡は、女堀川下流域の標高60.3～61.0mの微高地上に位置する。この微高地は、さらに下流で小山川と合流する男堀川と女堀川の間形成された東西に長い低位段丘であり、遺跡は、旧男堀川を眼前に臨み、沖積地を挟んだ南側間近に浅見山丘陵の残丘を仰ぐ位置に立地している。なおA1



第138図 久下東遺跡A・B地点全体図

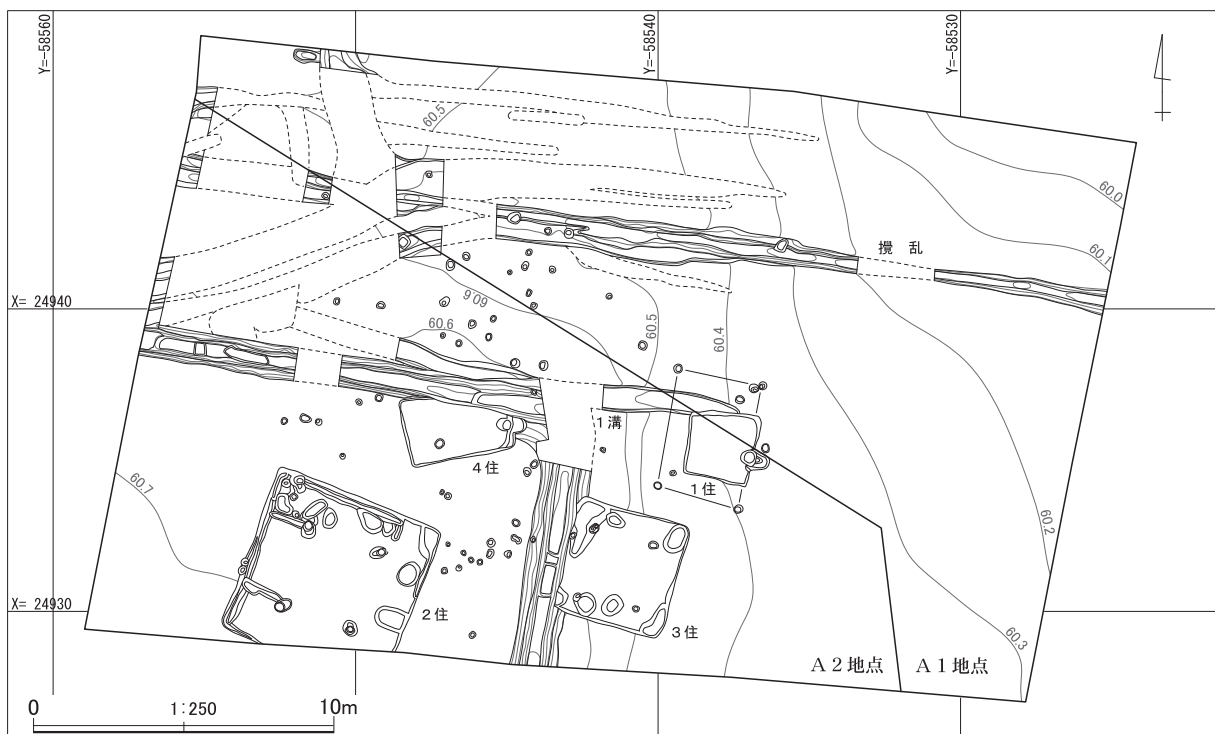
地点の北側は、女堀川の氾濫原がやや複雑な地形をなし広がっており、遺跡の範囲は、南北が細い微高地のほぼ南北全面に及ぶようである。

周辺の遺跡としては、同じ微高地上に、北堀久下塚北遺跡（本書第V章）、北堀久下東北遺跡、久下前遺跡（松本・町田 2002）、七色塚遺跡（恋河内・松本 2008）、北堀新田前遺跡（同左）などの古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡が見られるとともに、遺跡の西方には、墳径65m前後の円墳である公卿塚古墳（太田・佐藤 1991他）、および西原古墳（増田 1987他）などの諸古墳を擁する東富田古墳群が、また南面する浅見山丘陵上には、古墳時代前期の方形周溝墓群からなる墓域が検出された浅見山I遺跡（本書第三章）、同前期末葉～中期初頭の前山1・2号墳（小久保他 1978他）、宍勝寺北裏遺跡（太田・松本他 2003他）などの諸墳墓がある（第2～4図）。さらに浅見山の丘陵上には、宍勝寺裏埴輪窯跡（太田・松本他 2003）や縄文時代～中・近世の大規模な遺跡である大久保山遺跡（昆・佐々木・荒川他 1980他）などがある。

本遺跡は、これまで個人住宅の建設などに先立つ事前調査として、2回の調査が実施されており（増田 1985、太田・松本 2005）、今回の調査がⅢ次調査にあたる。Ⅰ・Ⅱ次調査では、多数の密集する住居跡が検出されており、流域内でも屈指の規模、密度の集落跡であることが判明している。

本書で報告するのは、Ⅲ次調査の調査範囲の内のA1・B1地点である（第137～140図）。調査面積は、A1地点が約309㎡、B1地点が約960㎡である。

A1地点で検出した遺構は、竪穴住居跡1軒（第141図）、B1地点で検出した遺構は、竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡1棟、地下式壙3基、井戸跡4基、土坑18基、溝跡6条である（第140図）。6条の溝跡の内、1・2号溝跡と呼称した遺構は、中世の濠状の遺構である。南側の館跡を取り囲む濠である可能性が高いが、濠内は、近世あるいはそれ以降の遺構が錯雑と重複しており、濠に対応する明



第139図 久下東遺跡A地点全体図

久下東遺跡

確な館跡の痕跡を検出することはできなかった。しかし、濠内では、周辺地域では類例の少ない地下式墳が2基検出され、また、「天文二」(1533)年と刻された五輪塔の地輪が投棄された井戸跡が濠に接して検出されるなど、わずかではあるが濠に関連する手がかりが残されている。今後、濠の走向や館跡の構造など考古学的な探求が必要であるとともに、古記録にある中世「久下氏」(本庄市史編集室編 1986他)との関係など様々な分野からの復元、研究が求められよう。



第140図 久下東遺跡B地点遺構分布図

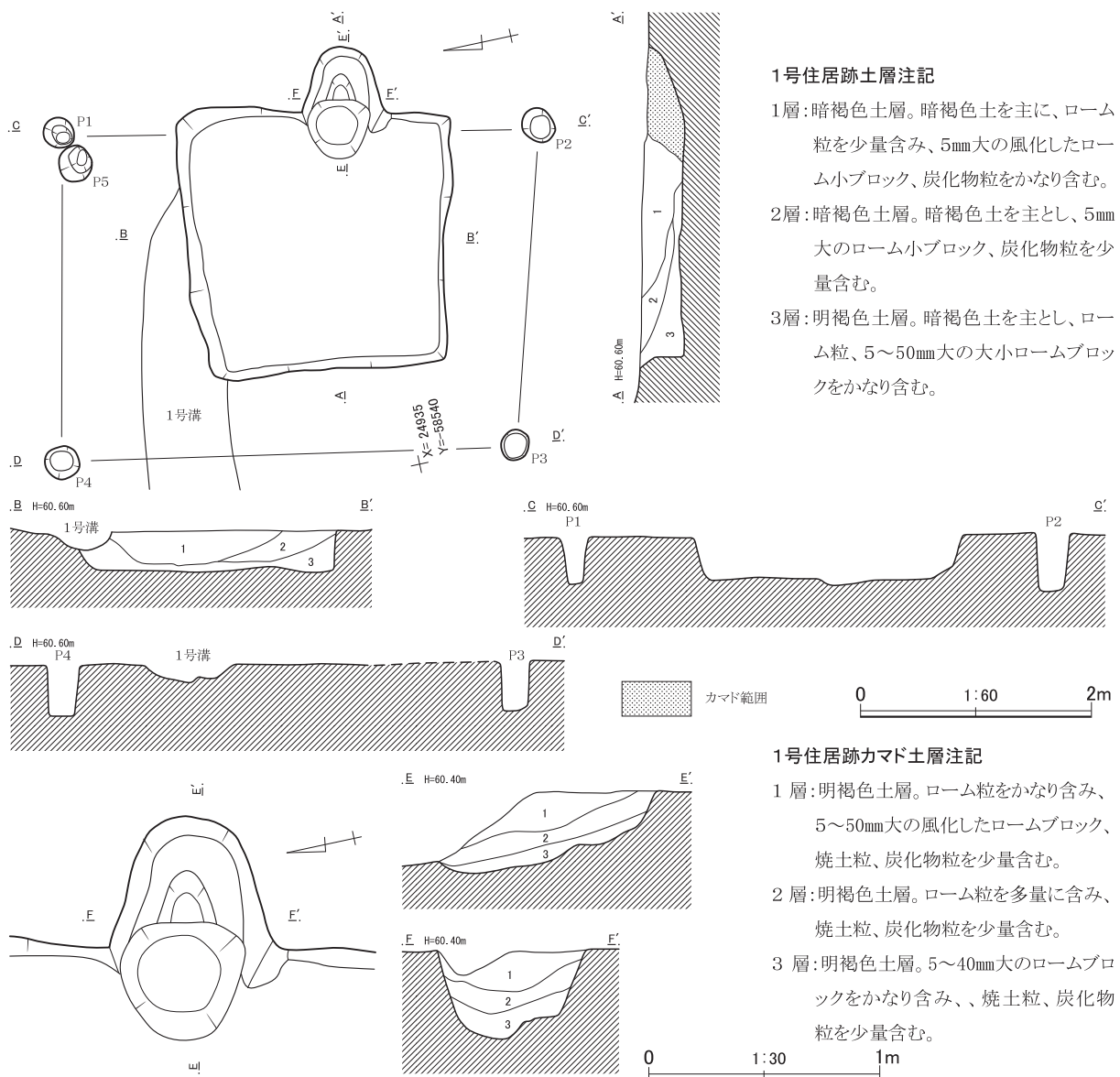
第2節 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居跡

1号住居跡（第141図、図版53）

A 1地点の中央、やや東寄りで検出した遺構である。異例とも言える小型住居跡であり、住居跡を囲むように柱穴が並ぶため、この柱穴も含め一つの遺構である可能性を考えた。1号溝と重複し、同遺構に北壁の上部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや歪な方形で、主軸長は2.80m、副軸長は2.25m、主軸方位はN-102°-Eである。北壁は、若干立ち上がりが緩やかであるが、他の壁は垂直に近く立ち上がる。壁高は、北壁が32cm、東壁が40cm、南・西壁が37cmである。床面はいわゆる直床で、北・東半の一部がわずかな段差をもつ



第141図 1号住居跡平面・断面図

久下東遺跡

て微妙に深くなる他は、おおむね平坦である。

カマドは、東壁のわずかに南寄りの中央に、壁に対してほぼ直角に付設されている。燃焼部は、楕円形に近く、右側の東壁との連結部に袖様のわずかな斜面が掘り残されている。全長97cm、中央での横幅は75cmである。燃焼部の手前側には、不整円形の掘り込みが見られ、底面は奥壁側に向かって少しずつ浅くなり、掘り込みの奥で傾斜が変わり、急峻に立ち上がる。カマドの覆土は、3層に分けられた。ローム粒やロームブロックを顕著に含む明褐色土で、焼土粒や炭化物粒の含有量は多くない。カマドの天井や壁の崩落土は明瞭ではないとしてよいであろう。燃焼部の被熱赤化も顕著ではない。

住居跡の覆土は、3層に分けられた。ローム粒やロームブロックをかなり含む明褐色土が、まず床面上を被い、1・2層とした暗褐色土が、窪地と化した住居内にまとまって流入、堆積した、そういった緩慢などとは言い難い堆積過程が想定できそうである。1層に、炭化物粒がかなり含まれることも注意される。

本遺構では、床面では柱穴などのピットが一切見られなかったが、東壁のほぼ延長線上に2つ、あるいは3つ（P1、P2、P5）、西壁と並行し、西側にやや離れて2つ（P3、P4）の、住居跡を一回り大きくした位置に並ぶ柱穴と思われるピットを検出した。P5は、P1の造り直しなどのピットであろうか、一応同種のピットと考えたい。

柱穴の平面形は、いずれも円形、楕円形であり、ほぼ垂直に近く掘り込まれている。最大径、深さの順に列記すると、P1が28cm、40cm、P2が32cm、50cm、P3が28cm、44cm、P4が31cm、44cm、P5が32cm、40cmである。柱穴の中心間の距離は、P1-P2間が4.15m、P1-P4間が3.82m、P2-P3間が2.79m、P3-P4間が3.95mである。柱穴覆土は、住居跡の覆土とほとんど区別できない暗褐色土を主とする土であった。柱穴内からは、ほとんど遺物は出土していない。以上から、カマドを含む堅穴住居全体を覆うような覆い屋があった可能性を考えたい。

住居跡全体でも、遺物は覆土中から出土した少数の土器破片のみである。

出土遺物から見て、古墳時代後期の住居跡の可能性はある。

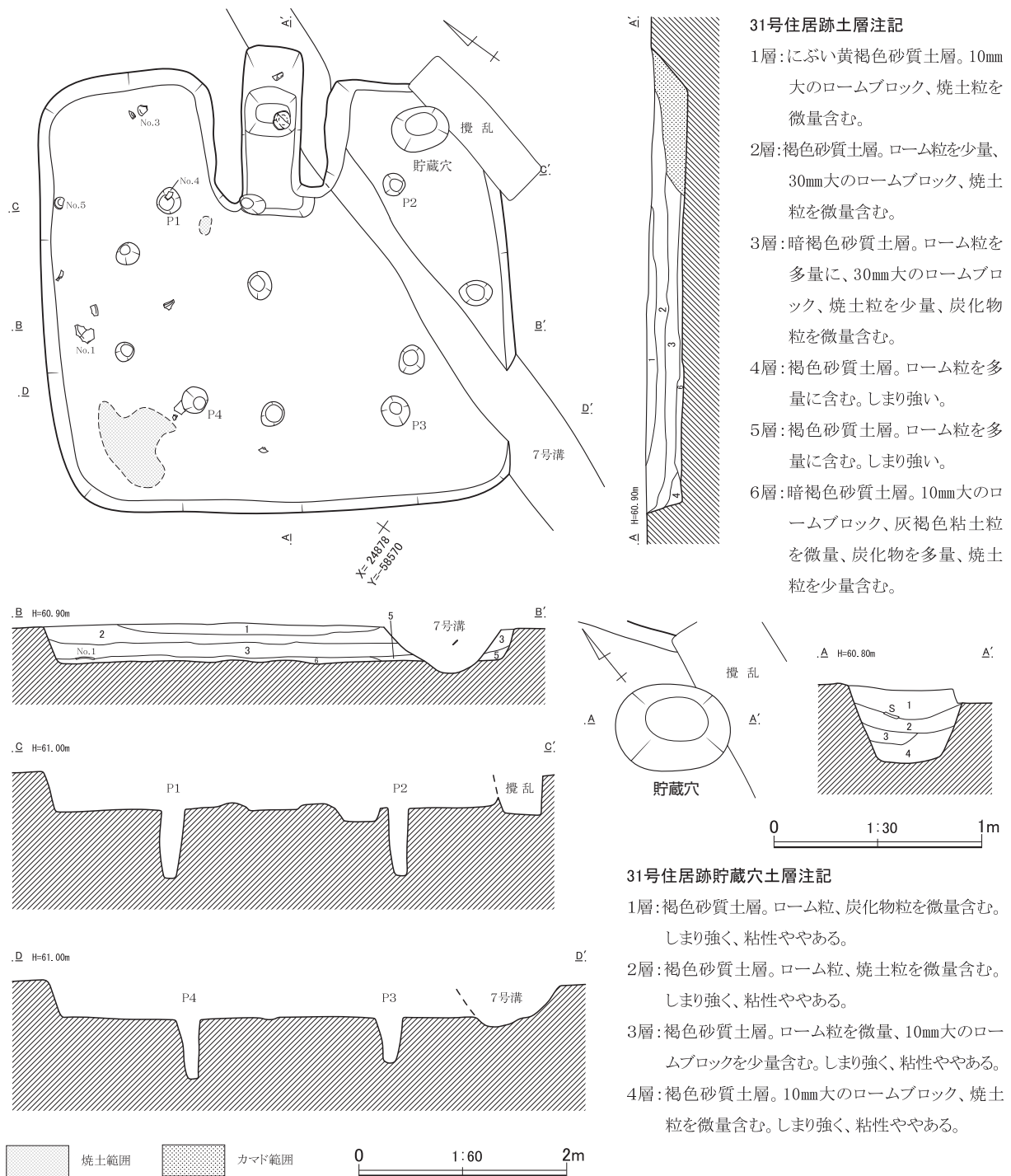
31号住居跡（第142～144図、第47表、図版55・76）

調査地点（B1地点、以下の遺構も同じ）の北西縁の中央で検出した遺構である。北東部分で7号溝が、本遺構を壊し、斜めに横切っており、北東隅を攪乱により壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、主軸方向の方がやや短い方形である。主軸長は4.23m、副軸長は4.54m、主軸方位はN-54°-Eである。全体に掘り込みはしっかりしており、壁も急峻である。壁高は、カマド側で29cm、南東壁で28cm、南西壁で37cm、北西壁で33cmである。貼り床がなされ硬化した床面は、ほぼ平坦である。

主柱穴は、P1～P4の4つである。P2が径22cm前後とやや小さいものの、他はいずれも径25cm前後で、深さはP1・2が65cm、P3が45cm、P4が58cmである。貯蔵穴は、カマド右脇の壁寄りで検出した。平面形は楕円形で、長径55cm、短径42cmである。断面形はU字状で、深さは40cmである。他にもいくつかピットが見られるが、いずれも浅いピットである。

カマドは、北東壁の中央に、ほぼ壁に直交して設けられている。燃焼部奥から右側の袖にかけて、7号溝に大きく壊されており、天井部も残存していない。全長163cm、中央での横幅は146cmである。燃焼部は長方形に近く、北東壁より突き出た掘り込みが残存しており、中央に浅い掘り込みが認めら

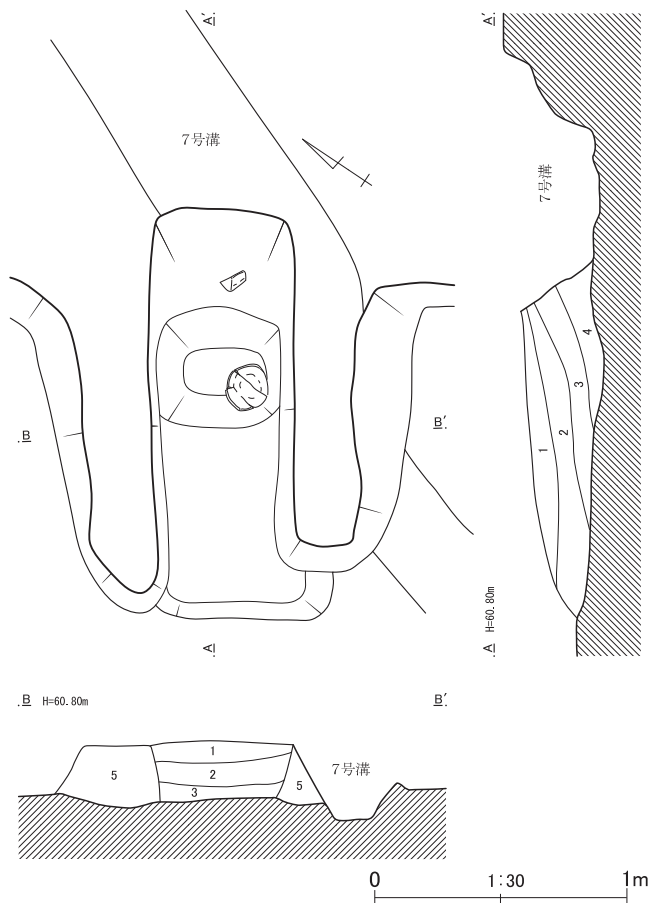


第142図 31号住居跡平面・断面図(1)

れる。掘り込みの上部で底部片が出土している。燃焼部の被熱赤化は顕著ではなく、カマド内の覆土で焼土を多量に含むのは、2層のみである。袖は、暗褐色土とロームの混合土を突き固めて造られており、かなりしまっている。

覆土は、6層に分けられた。全体に褐色、あるいは暗褐色の粒子の粗い土からなり、2・3層には焼土が含まれる。全体に乱れが少なく、比較的緩慢な堆積過程を示すものと思われる。5・6層は、貼床層である。

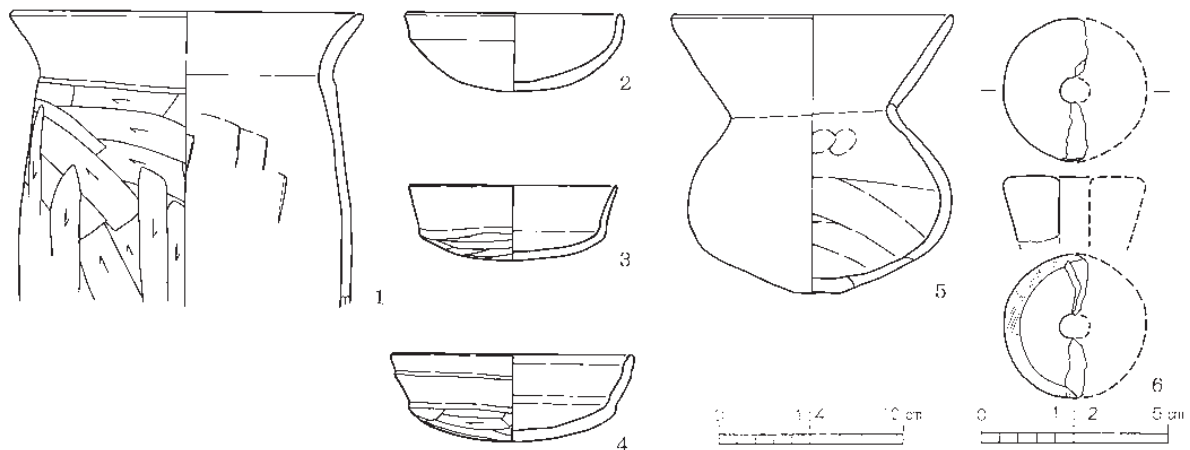
覆土中から土器破片がかなりの量出土しているが、完形もしくはそれに類するものは、図化したも



31号住居跡カマド土層注記

- 1層: 褐色土層。ローム粒を微量、焼土粒を微量含む。しまり強い。
- 2層: 褐色土層。ローム粒を微量、焼土粒を多量に含む。しまり強い。
- 3層: 褐色土層。10mm大のロームブロックを微量、焼土粒少量含む。しまり強い。
- 4層: 褐色土層。ローム粒を微量、焼土粒を少量含む。しまり強い。
- 5層: 褐色土層。暗褐色土とロームの混合土を主に、ローム粒、ロームブロックを多量に含む。下部ほどローム多く、最下部にロームが密集する。硬くしまっている。カマド袖構築材。

第143図 31号住居跡平面・断面図(2)



第144図 31号住居跡出土遺物

のみである(第144図1~5)。1の甕や2・4の坏、5の罎は、住居跡の北隅から北西半にかけての覆土中から出土したが、時期的に幅があるようである。4・5は、遺構の時期よりも古い遺物になる。6の石製紡錘車も覆土中出土である。

出土遺物から見て、古墳時代後期後葉~奈良時代の住居跡と考えられる。

43号住居跡(第145~147図、表48、図版56・76)

調査地点の北西縁寄りの中央で検出した遺構である。65号住居跡と重複し、同遺構を切って造られている。部分的に壁の上部を、攪乱等により壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや不整な胴の張る長方形である。主軸長は4.74m、副軸長は4.35m、主軸方位はN-69°-Eである。北壁側を除けば、壁の立ち上がりも明瞭である。壁高は、カマド側で28cm、南壁で25cm、西壁で27cm、北壁で14cmである。床面は、ほぼ平坦である。

主柱穴は、P1~P4の4つである。P1~P3は、径34~38cmとほぼ同大であり、P4のみ最大長65cmと大きく、しかも角ばった形態で、やや浅い。深さは、P1が25cm、P4が20cm、P2・3が30cm前後である。貯蔵

第47表 31号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (18.8) 底径 - 器高 -	口縁部は外反する。胴部はあまり張らない。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	粗粒チャート・黒色粒 内外-橙色	口縁部~胴部上位 1/4 残存
2	坏	口径 11.6 底径 - 器高 4.2	丸底。体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色粒 内外-橙色	3/4 残存 外面磨耗
3	坏	口径 (11.0) 底径 - 器高 (4.0)	丸底。体部は浅く、口縁部は外反する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色粒・褐色粒 内外-橙色	2/3 残存
4	坏	口径 13.0 底径 - 器高 4.6	丸底。体部は浅い。口縁部は体部との境に稜を持ち、中位に段を有して外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	角閃石・白色粒 内外-橙色	1/2 残存
5	埴	口径 15.1 底径 2.4 器高 14.7	平底。胴部は膨らみを持ち、中位に最大径を有する。口縁部は外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデ、下半ケズリ。底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナデ。胴部上位に指押え痕あり。	チャート・黒色粒 内外-にぶい橙色	完形 内外面磨耗
6	紡錘車	上面径：(3.8) cm、孔径：(0.8) cm、残重：19.87 g、滑石製				1/3 残存

穴は、カマドの左側の北東隅近くとカマドの右側の南西隅寄りの2箇所で見出した。前者を貯蔵穴1、後者を貯蔵穴2とする。貯蔵穴1の平面形は、長楕円形で、長径92cm、短径58cmである。北側が深くなっているが、全体的に掘り込みは緩やかである。最深部での深さは、29cmである。覆土は3層で、炭化物や焼土のいずれか、あるいは両者が含まれるようである。貯蔵穴2の平面形は、やや不整な楕円形で、長径65cm、短径50cmである。やはり北側が深くっており、貯蔵穴1より急峻に掘り込まれている。最深部での深さは、42cmである。覆土は3層で、いずれの層にも微量ながら焼土が含まれる。

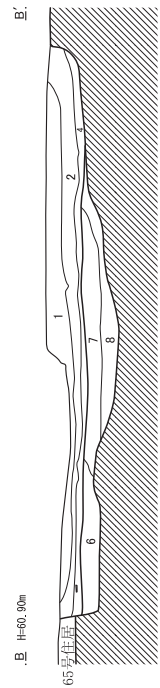
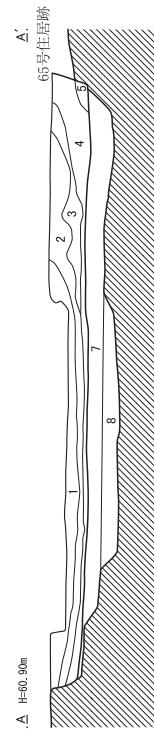
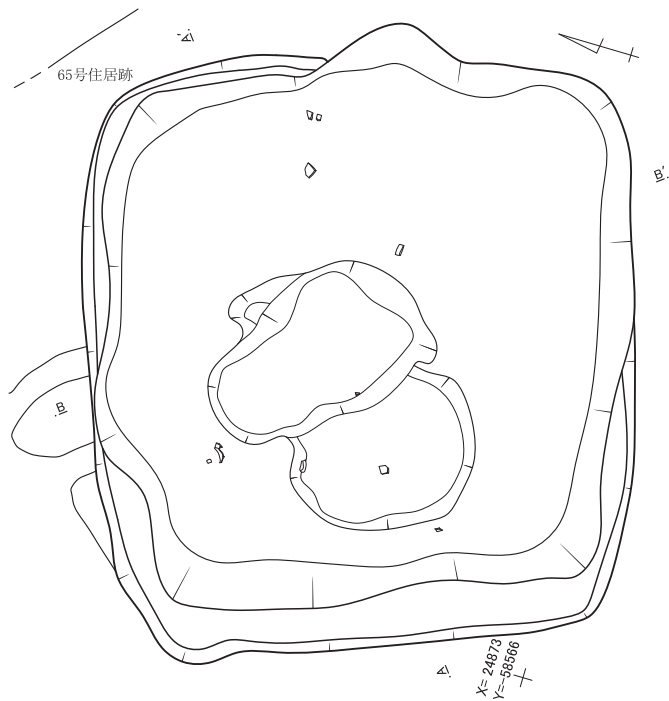
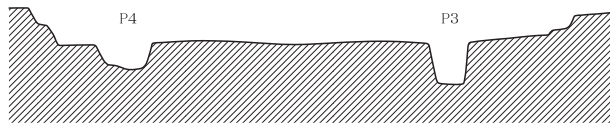
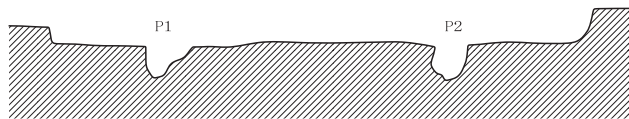
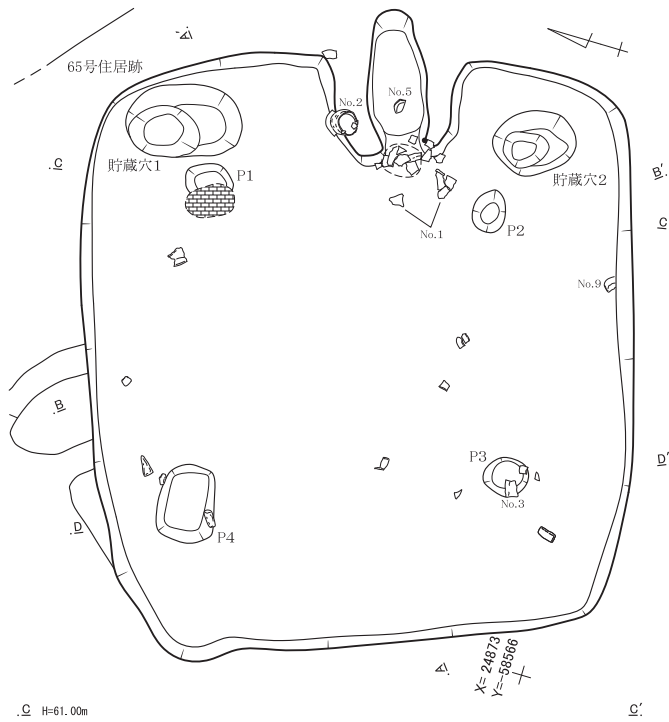
カマドは、東壁のほぼ中央、壁におおむね直交して設けられている。残存するのは、燃焼部と両袖のみである。全長122cm、中央での横幅は119cmである。燃焼部は、長楕円形で、縦断面形は、船底形である。右側の袖内壁を中心に被熱赤化している。カマド内の覆土は4層に分けられ、1・3層には、灰褐色粘土粒が多量に含まれる。2つの層は、天井部の崩落土に由来するのであろう。袖は、主に褐色、鈍い黄褐色の粘質土を突き固めて造られている。7・9層は、袖の芯にあたる部分である。左側の袖、および燃焼部の焚口周辺から甕とその破片がまとまって出土している(第147図1・2)。2は、袖甕であり、他も袖甕やカマドに付帯する土器であろう。

掘り方の埋土を除く住居跡全体の覆土は、5層に分けられた。褐色、あるいは暗褐色の粒子の粗い土からなり、西半は水平堆積に近く、北東半、東半を中心にやや土層が乱れ、多量の土が流入したかに見える。

床面は、床面下を9~29cm掘りくぼめ掘り方とし、土を埋め戻し作出されている。掘り方下面、あるいは粗掘り面は、住居の規模よりやや小さく、東壁のカマド部分から南壁の東半を除いて、壁沿いにぐると直床の平場が掘り残されている。また、掘り方の中央から東壁寄りには、土坑状に深く掘りくぼめられている。6~8層は、掘り方の埋土である。掘り方は、褐色や鈍い黄褐色の粒子の粗い土やシルト質の土を重ねて、埋め戻されている。

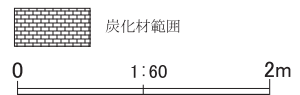
出土遺物は、土器のみである(第147図1~9)。1の甕は、カマドの口の周辺から、2・4の甕は、右側の袖に密着して、5の坏は、カマド内から出土している。2・4は、袖甕であろう。カマドを中心にややまとまりが見られるものの、他は、覆土下層から床面にかけて散漫に出土している。

出土遺物から見て、古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。

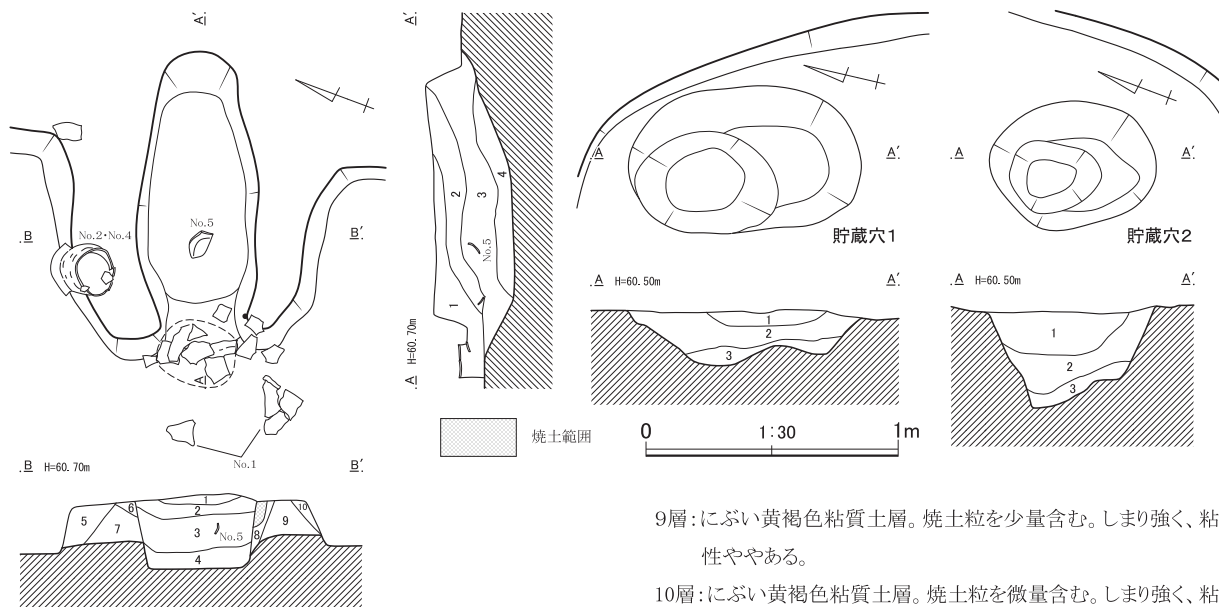


43号住居跡土層注記

- 1層: 褐色砂質土層。30mm大のロームブロック、焼土粒、炭化物を微量含む。粘性ややある。
- 2層: 褐色砂質土層。ローム粒を少量、10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。粘性ややある。
- 3層: 暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、焼土粒を微量、炭化物粒を多量に含む。しまり強い。
- 4層: 褐色砂質土層。30mm大のロームブロックを微量、ローム粒、焼土粒を少量含む。
- 5層: 暗褐色砂質土層。ローム粒を多量に、10mm大のロームブロックを微量含む。しまり強い。
- 6層: にぶい黄褐色砂質土層。30mm大のロームブロックを多量に、炭化物、焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。6～8層は掘り方埋土。
- 7層: 褐色粘質土層。30mm大のロームブロックを微量、炭化物、焼土粒少量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 8層: 褐色砂質土層。50mm大のロームブロックを微量、30mm大の同ブロックを少量、炭化物を微量含む。粘性ややある。



第145図 43号住居跡平面・断面図(1)



43号住居跡カマド土層注記

- 1層: 褐色砂質土層。灰褐色粘土粒を多量、焼土粒を少量含む。しまり強い。
- 2層: 褐色砂質土層。灰褐色粘土粒、焼土粒を微量、炭化物を微量含む。しまり強い。
- 3層: 褐色砂質土層。ローム粒、焼土粒を少量、灰褐色粘土粒を多量に含む。しまり強い。
- 4層: 褐色砂質土層。灰褐色粘土粒を多量に、焼土粒、炭化物を微量含む。しまり強い。
- 5層: 褐色粘質土層。焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 6層: 褐色粘質土層。炭化物、焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 7層: 褐色粘質土層。炭化物を微量、焼土粒を少量含む。しまり強く、粘性あり。
- 8層: 暗赤褐色粘質土層。焼土粒多量に含む。カマド内壁側は強く赤化している。しまり強く、粘性あり。

- 9層: にぶい黄褐色粘質土層。焼土粒を少量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 10層: にぶい黄褐色粘質土層。焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。

43号住居跡貯蔵穴1土層注記

- 1層: 暗褐色砂質土層。ローム粒、50mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 2層: 暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、10mm大のロームブロック、焼土粒、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 3層: 褐色砂質土層。灰褐色粘質土を少量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性ややある。

43号住居跡貯蔵穴2土層注記

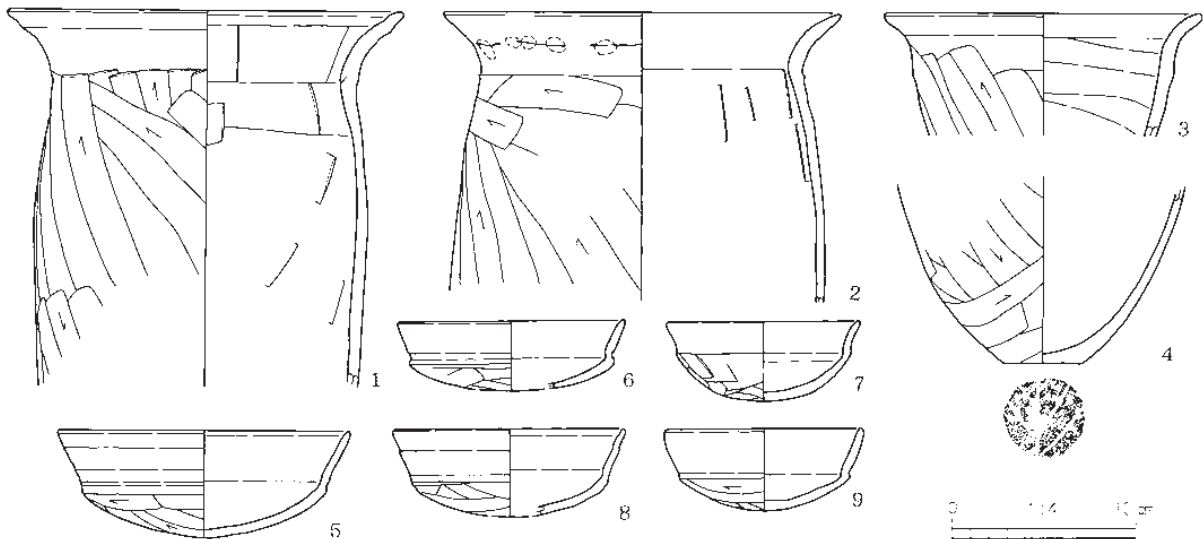
- 1層: 暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、50mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。しまり強い。
- 2層: 暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。しまり強い。
- 3層: 褐色砂質土層。灰褐色粘土粒を多量に、焼土粒を微量含む。しまり強い。

第146図 43号住居跡平面・断面図(2)

45号住居跡 (第148・149図、第49表、図版57・76)

調査地点の東縁、北端に近い位置で検出した遺構である。東半は、調査範囲外にあたり未調査であり、8号溝と北西隅で接し、壁上部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

東壁側が残存しないため、全形を把握できないが、平面形は、やや丸みのある方形、あるいは長方形になる。形態、規模から見て、未調査の東壁側にカマドが付設されていたと推定できる。よって、東西方向に主軸があったと仮定する。現存主軸長は2.28m、副軸方向での最大長は、4.75mである。主軸方位は、N-81°-E前後になる。やや傾斜のある南壁以外は、壁は垂直に近く立ち上がり、掘り込みも深い。壁高は、南北壁で29cm、西壁で27cmである。南西隅近くで一旦途切れるものの、壁沿いには、幅15~32cm、3~10cmの壁溝が巡らされている。床面は、北半の一部に貼り床がなされており、全体にほぼ平坦である。



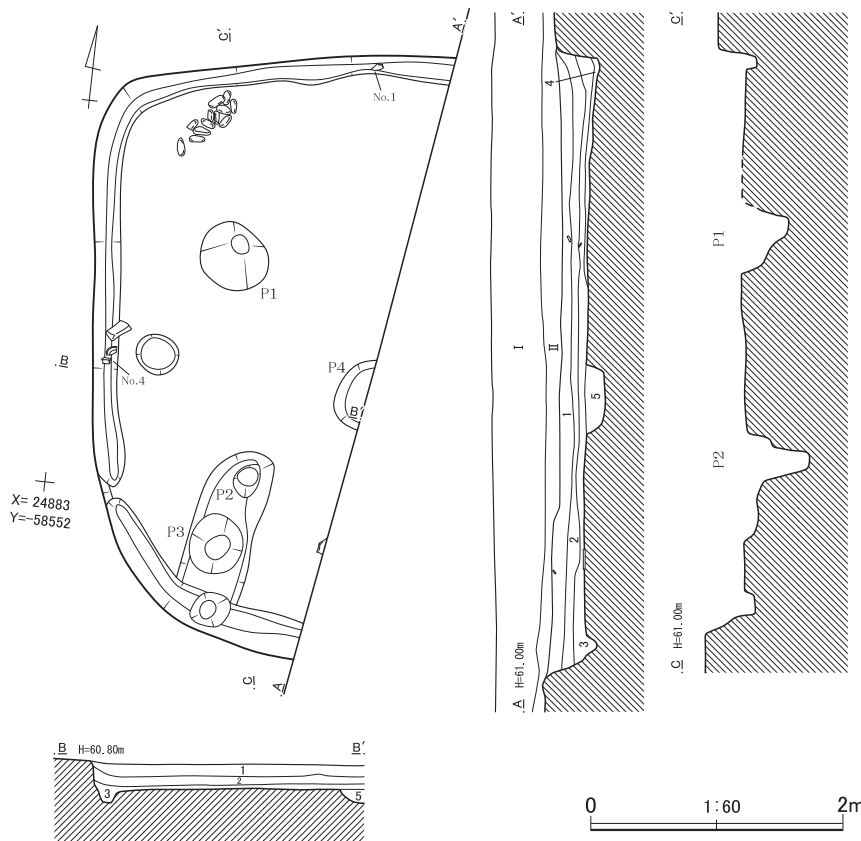
第147図 43号住居跡出土遺物

第48表 43号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 21.2 底径 - 器高 -	口縁部は外反し、上位で斜め上方へ立ち上がる。胴部は張らず、長胴を呈する。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内面-口縁部上位ヨコナデ、中～下位ヘラナデ。胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外-にぶい黄 橙色	口縁部～胴部 1/2 残存
2	甕	口径 (21.2) 底径 - 器高 -	口縁部は外反する。胴部はあまり張らない。	外面-口縁部ヨコナデ。指頭痕あり。胴部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内外-にぶい黄 橙色	口縁部～胴部 上 位 3/4 残存
3	甕	口径 (17.0) 底径 - 器高 -	口縁部は強く外反する。胴部は張らない。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外-橙色	口縁部～胴部 上 位 1/3 残存
4	甕	口径 - 底径 4.2 器高 -	胴部は上方へ開く。	外面-胴部ケズリ。底部木葉痕。内面-胴部～底部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内外-にぶい黄 橙色	胴部下位～底 部 1/2 残存
5	坏	口径 (15.7) 底径 - 器高 5.7	丸底。体部は浅い。口縁部は体部との境に稜を持って外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	角閃石・白色粒 内-橙色 外-にぶい褐色	1/2 残存
6	坏	口径 12.2 底径 - 器高 -	丸底。体部は浅い。口縁部は体部との境に稜を持って外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色粒・褐色粒 内外-橙色	1/4 残存
7	坏	口径 (10.4) 底径 - 器高 4.3	丸底。体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	白色粒・褐色粒 内外-橙色	1/4 残存
8	坏	口径 (12.5) 底径 - 器高 -	丸底。体部は浅い。口縁部は体部との境に弱い稜を持ち、中位に段を有して外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色粒・黒色粒 内-黄灰色 外-にぶい黄色	1/2 残存
9	坏	口径 (10.6) 底径 - 器高 4.3	丸底。体部は浅い。口縁部は体部との境に稜を持って外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	角閃石・白色粒 内外-橙色	1/2 残存

主柱穴は、P 1、P 2 の 2 つが該当する。P 1 は、やや不整な円形で、最大径が 57cm、深さが 36cm である。P 2 は、長径 28cm、深さが 33cm のやや不整な楕円形のピットである。P 2 を包み込んで壁溝に向かって小溝状の掘り込みが設けられている。小溝内には、径 47cm、深さが 32cm の P 3 が掘られ、壁溝内にも小ピットが穿たれている。小溝は、あるいは間仕切りなどに関連する施設であろうか。住居中央の P 4 も、位置的に柱穴や貯蔵穴とは考えにくいピットである。上端が円形に近い形態で、最大径が 59cm、深さは 15cm である。

覆土は、4 層に分けられた。いずれも暗褐色、あるいは鈍い黄褐色の粒子の粗い土で、乱れはあるものの、水平堆積に近い堆積状態を示している。4 層は、部分的に見られたロームを主とする貼り床層である。



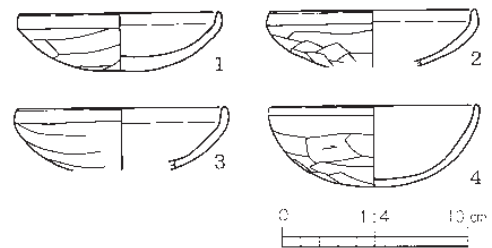
45号住居跡土層注記

- 1層:暗褐色砂質土層。30mm大のロームブロック、焼土粒、炭化物を微量含む。粘性ややある。
- 2層:暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、風化した30mm大のロームブロックを極微量、焼土粒を微量含む。粘性ややある。
- 3層:暗褐色砂質土層。ローム粒、焼土粒を少量、未風化の30~50mm大のロームブロック、30mm大の焼土塊、炭化物を微量含む。粘性あり。
- 4層:にぶい黄褐色土層。未風化の30mm大のロームブロックを多量に含む。貼り床。しまり強く、粘性あり。
- 5層:暗褐色砂質土層。10mm大のロームブロックを微量含む。粘性ややある。ピット覆土。

第148図 45号住居跡平面・断面図

図化した遺物（第148図1~4）の内、1・4の坏は、壁溝上出土である。北西隅脇の床面では、編み物石かと思われる同大の川原石12点がまとまって出土している。西壁沿いの川原石1点も同種の礫であろう。

出土遺物から見て、古墳時代後期後葉~奈良時代の住居跡と考えられる。



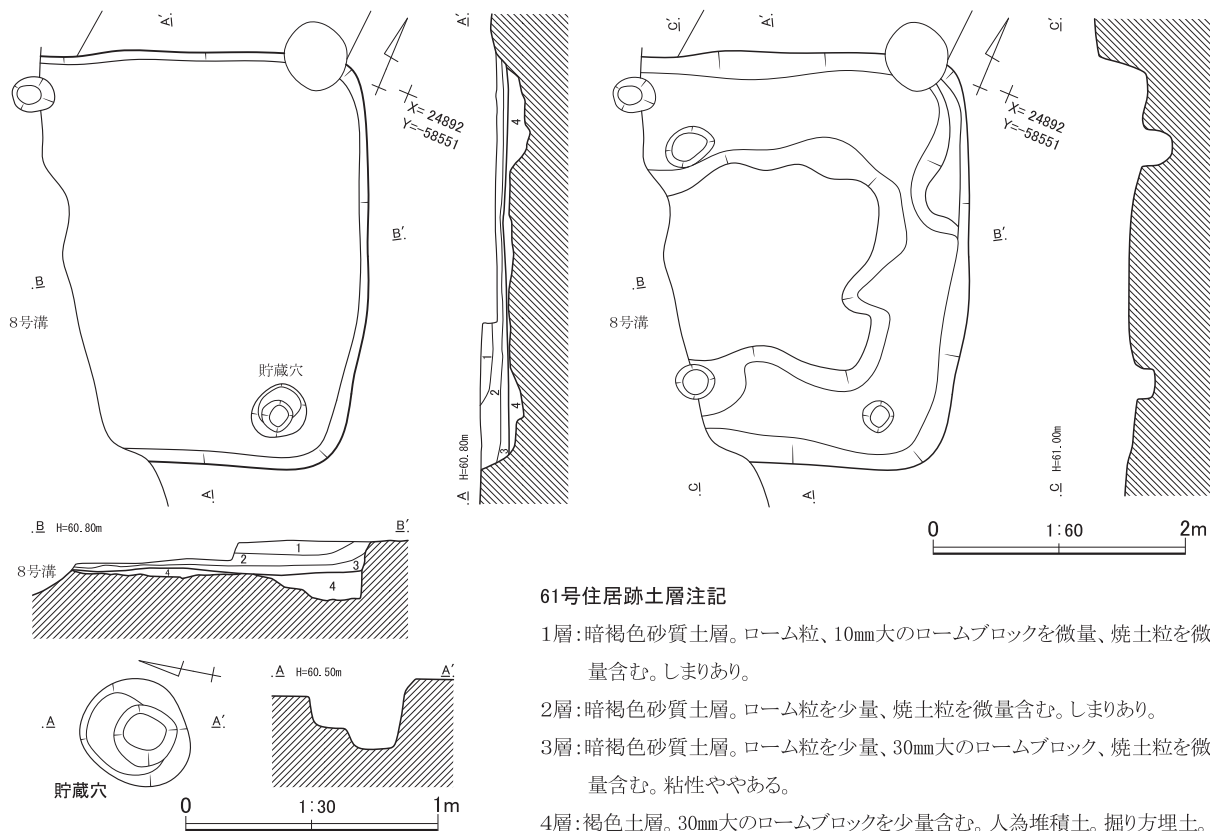
第149図 45号住居跡出土遺物

第49表 45号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (10.8) 底径 - 器高 3.1	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く直立する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	角閃石・白色粒 内外-橙色	1/4 残存 外面磨耗
2	坏	口径 (10.9) 底径 - 器高 -	体部は内彎し、口縁部は短く内傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。内面ヘラナデ。	角閃石・チャート 内-橙色 外-にぶい黄橙色	口縁部~体部 1/5 残存
3	坏	口径 (11.0) 底径 - 器高 -	体部は内彎し、口縁部は短く直立する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	角閃石・褐色粒・白色粒 内外-橙色	口縁部~体部 1/5 残存
4	坏	口径 (11.3) 底径 - 器高 4.3	丸底。体部から口縁部にかけて内彎して開く。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	角閃石・白色粒 内外-橙色	1/2 残存

61号住居跡（第150・151図、第50表、図版57・76）

調査地点の北端近くで検出した遺構である。71号住居跡を切って造られている。8号溝により西側を大きく壊されており、また、攪乱により北東隅の一角などを壊されている。確認面は、黄褐色の軟



61号住居跡土層注記

- 1層:暗褐色砂質土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを微量、焼土粒を微量含む。しまりあり。
- 2層:暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。しまりあり。
- 3層:暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、30mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。粘性ややある。
- 4層:褐色土層。30mm大のロームブロックを少量含む。人為堆積土。掘り方埋土。

第150図 61号住居跡平面・断面図

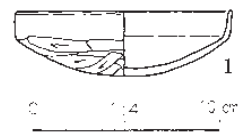
質ローム層上面である。

全形を把握できないが、東壁側がやや張る方形、あるいは長方形と見られる。カマドが付設されていたとすれば、すでに失われている西壁、あるいは南壁の一角にあったと推定される。また、貯蔵穴は、カマドのある壁寄りにある例が多いことからすれば、南壁の西に偏した位置にカマドがあった可能性が考えられる。当否はともあれ、南北方向に主軸があったと仮定する。主軸長は3.31m、副軸方向での現存長は、2.44mである。主軸方位は、S-28°-Eになる。壁の残存状態は良好ではないが、残りのよい南壁などでは、壁は垂直に近く立ち上がる。壁高は、北壁で13~30cm、東壁で27cm、南壁で23cmである。床面には、やや凹凸が見られる。

主柱穴は、確認することができなかった。貯蔵穴は、南東隅の近くで検出した。平面形は、微妙に歪んだ円形で、最大径は45cmである。中央南よりが段をなし深くなっており、最深部での深さは、28cmである。

掘り方の埋土を除く住居跡全体の覆土は、3層に分けられた。暗褐色の粒子の粗い土からなり、壁寄りの層厚は厚く、中央にゆくほど層厚が薄く、水平堆積に近くなるようであった。

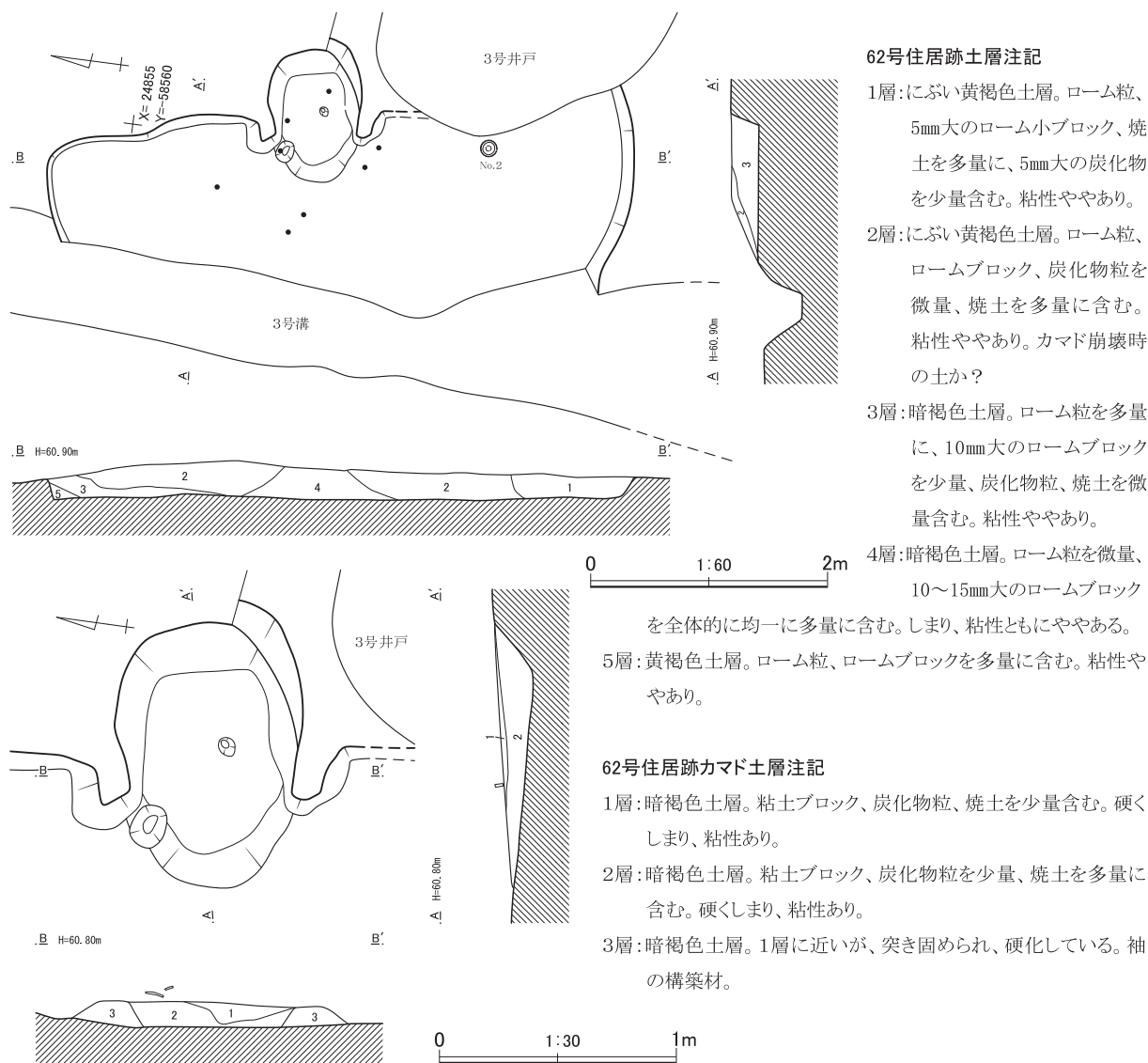
床面は、床面下を3~22cm掘りくぼめ掘り方とし、土を埋め戻し作出されている。掘り方下面は、中央が不整形の島状に浅く、壁沿いがリング状に深くな



第151図 61号住居跡出土遺物

第50表 61号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 11.6 底径 - 器高 3.4	丸底。体部は浅く、口縁部は直立する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外-橙色	2/3 残存



第152図 62号住居跡平面・断面図

ており、全体に凹凸が著しい。西半には、壁に平行して並ぶピット2個を検出している。位置的に見て、床面で確認しきれなかった

主柱穴とも考えられるが、2個のみであり、確証を得ることができなかった。4層は、掘り方の埋土である。掘り方は、ロームブロックを含む褐色土で埋め戻されている。

出土遺物は、覆土中から出土した少数の土器片のみである。1の坏(第151図1)も覆土中出土である。出土遺物から見て、古墳時代後期前半の住居跡であろうか。

62号住居跡 (第152・153図、第51表、図版58・76)

調査地点の南東端近くで検出した遺構である。3号溝に、西半部分を大きく壊され、カマドを含む床面東半の一部のみ残存し、柱穴や貯蔵穴も確認することができなかった。また、3号井戸跡にカマド脇の東壁を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、不明である。南壁側は、かなり不整な形態であり、問題が残る。主軸方向での現存長は、

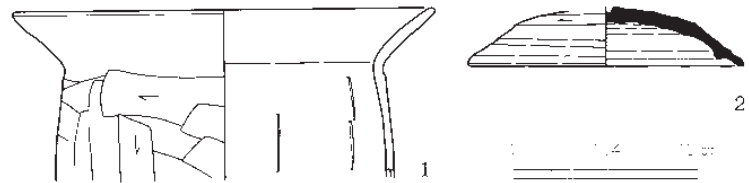
久下東遺跡

1. 27m、副軸方向で現存長は、4.93mである。主軸方位は、N-82°-Eあたりと推定される。東壁、北壁の残存状態のよい部分では、壁の立ち上がりは急峻であるが、南壁は、壁の傾斜もやや弱い。壁高は、北壁で14cm、東壁で24cm、南壁で16cmである。床面は、直床であろうか、比較的平坦である。

カマドは、東壁のほぼ中央、壁におおむね直交して設けられている。残存するのは、燃焼部と両袖のみである。全長111cm、中央での横幅は117cmである。燃焼部は、楕円形に近い形態で、縦断面形は、奥壁側に向かって深くなる塵取り形である。両袖ともに壁からわずかに突き出た半島状で、あるいは袖の芯のみ残存した状態なのかもしれない。右側の袖脇と燃焼部の中央に小ピットが見られる。被熱赤化は、あまり顕著ではない。カマド内の覆土は2層で、ともに粘土ブロックや焼土を含み、天井部の崩落土に関連する土であろう。袖は、覆土内の1層に類似した暗褐色土で、突き固められ硬化している。カマド内から周辺にかけて、土器片が散漫に出土している。

住居跡全体の覆土は、5層に分けられた。通常の住居跡覆土とは異なる、かなり不自然な堆積状態であり、また、1・2層には、炭化物や多量の焼土が含まれ、異例である。カマドなどを大きく壊し、住居内にその土が流入し、あるいは攪拌されるようなことが起こったのかもしれない。1・2層は、住居の埋没過程、あるいはそれ以降の攪乱の痕と見ることもできないではない。

遺物は、少数の土器破片が出土しているのみである。カマドの南側の床面近くから、第153図2の須恵器蓋が出土している。出土遺物から見て、古墳時代後期後葉～奈良時代の住居跡であろう。



第153図 62号住居跡出土遺物

第51表 62号住居跡出土遺物観察表

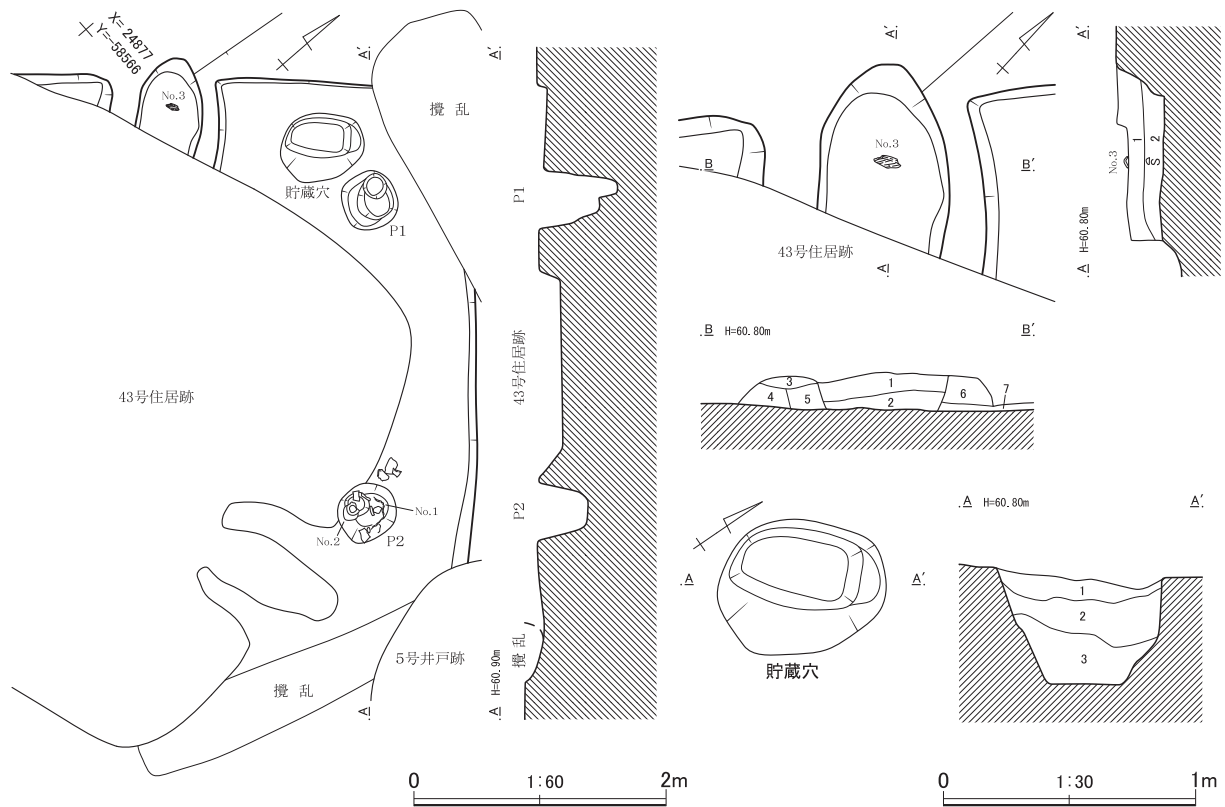
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 22.6 底径 - 器高 -	口縁部は外傾する。胴部はあまり張らない。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。 内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内-におい橙色 外-橙色	口縁部～胴部 上位1/5 残存
2	蓋	口径 14.8 底径 - 器高 -	天井部は丸味を帯び、口縁部はかえりを持つ。	外面-ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面-ロクロナデ。酸化焰焼成	粗粒チャート 内-におい黄橙色 外-黄灰色	つまみ欠失

65号住居跡 (第154・155図、第52表、図版59・76)

調査地点の北西縁寄りの中央で検出した遺構である。43号住居跡と大きく重複し、同遺構に切られている。北隅、および東隅から南東壁にかけて、5号井戸跡や攪乱に床面以下まで壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや胴の張る方形、あるいは長方形になろうか。主軸方向での床面を含めた現存長は4.75m、カマドのある北西壁の現存長は、2.85mである。主軸方位は、N-49°-Wである。壁高は、北西壁で8cm、南東壁で9cmである。壁の立ち上がりは、比較的急峻であり、床面は、ほぼ平坦である。床面の大半は、直床と思われるが、後述するようにカマドの土層断面では、貼り床層かと思われる薄層を確認している。

主柱穴は、南東壁に平行する2つが確認できた。P1は、微妙に角ばった円形で、最大径は48cm、最深部での深さは60cmである。北側が段をもって小ピット状に深くなっている。P2も円形に近い形



65号住居跡カマド土層注記

- 1層: 褐色土層。炭化物を微量、焼土粒多量、灰黄褐色粘土粒を少量含む。しまり強い。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒、50mm大のロームブロック、炭化物を微量、30mm大のロームブロック、焼土粒少量含む。しまり強い。
- 3層: 褐色土層。焼土粒を微量含む。しまり強い。
- 4層: にぶい黄褐色土層。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。し

まり強く、粘性ややある。

- 5層: 褐色粘質土層。ローム粒、30mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 6層: 褐色砂質土層。ローム粒、炭化物を微量含む。
- 7層: 黄褐色土層。焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。

65号住居跡貯蔵穴土層注記

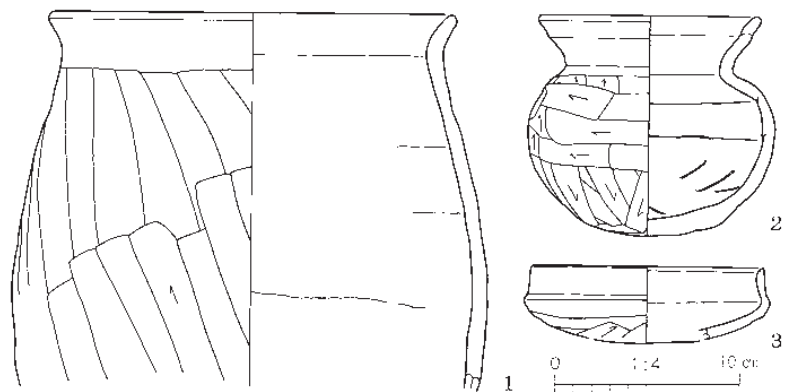
- 1層: 褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを微量含む。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を少量、50mm大のロームブロック、

炭化物を微量含む。

- 3層: 褐色土層。ローム粒を多量に含む。しまり強い。

第154図 65号住居跡平面・断面図

態で、最大径28cm、深さは39cmである。貯蔵穴は、カマドの右脇、P1に近接した位置で検出した。平面形は、不整な楕円形で、段をもって長方形に近い底面が作出されている。断面形は箱薬研で、長径57cm、短径53cm、深さは42cmである。ローム粒、あるいはロームブロックの目立つ褐色土、暗褐色土で埋まっている。



第155図 65号住居跡出土遺物

第52表 65号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (21.2) 底径 - 器高 -	口縁部は短く外反する。胴部は中位に膨らみを持つ。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。 内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外-橙色	口縁部~胴部 中位1/2残存 内外面磨耗
2	罎	口径 11.9 底径 6.8 器高 11.7	丸底。胴部は膨らみを持ち、中位に最大径を有する。口縁部は中位に弱い段を有して外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナデ。	片岩・チャート・褐色粒 内-におい黄褐色 外-におい赤褐色	口縁部1/3 欠失
3	坏	口径 (12.3) 底径 - 器高 -	丸底。体部は浅い。口縁部は体部との境に稜を持ち、内傾する。口唇部内面にわずかな凹線がめぐる。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。 内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	白色粒 内-黒褐色 外-灰黄褐色	口縁部~体部 1/5残存

カマドは、北西壁におおむね直交して付設されている。中心軸での現存長は70cm、中央付近での現存長は103cmである。燃焼部は、楕円形に近い形態に浅く掘り込まれた部分で、被熱赤化の痕跡は明瞭ではない。カマド内の覆土は2層で、焼土を多量に含む1層には、灰黄褐色の粘土粒がわずかに含まれるのみで、天井部の崩落土は見られないようである。7層は、あるいは貼り床層になるのかもしれない。3~6層は、カマドの構築材になろうが、芯などのはっきりしない作りであり、硬化も顕著とは言えない。住居跡全体の覆土の観察ができなかったが、暗褐色土や褐色土などからなる覆土であった。

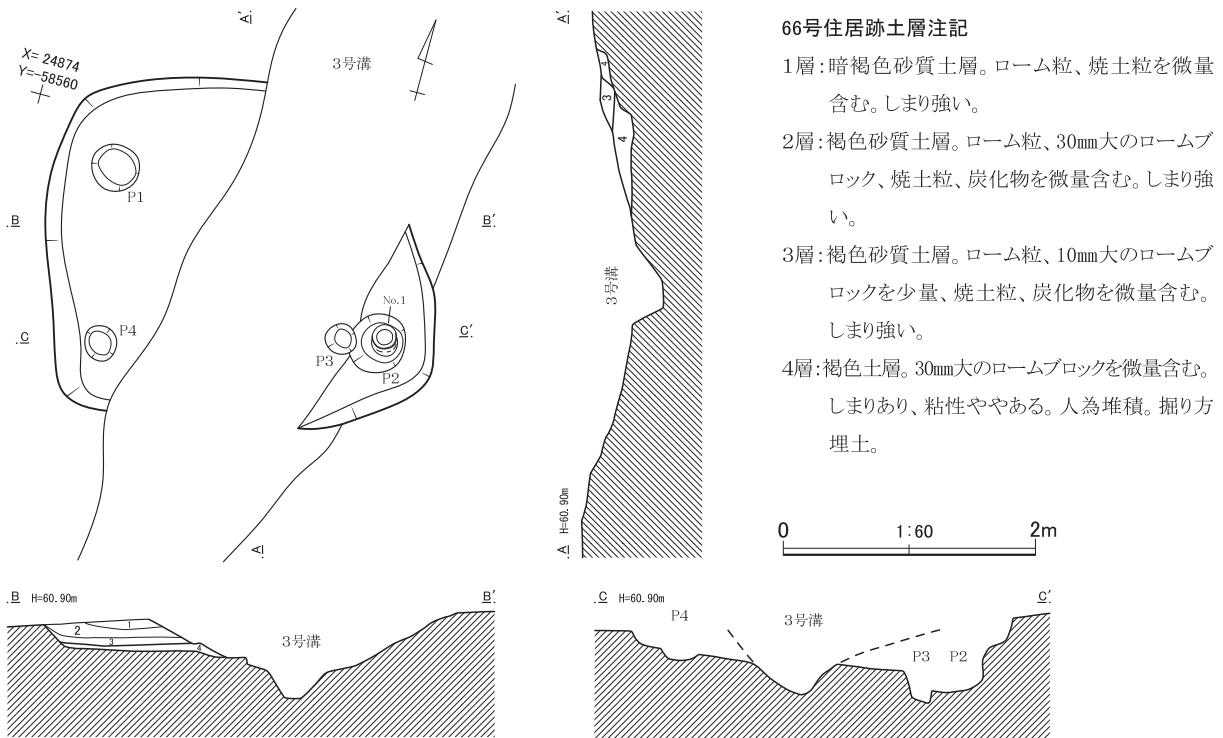
遺物は、少数の土器破片が出土しているのみである。P2内、およびその周辺にまとまるようにして、土器片が出土している（第155図1・2）。

出土遺物から見て、古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。

66号住居跡（第156・157図、第53表、図版60・77）

調査地点のほぼ中央で検出した遺構である。3号溝と重複し、同遺構により遺構中央を大きく斜めに損壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

カマドも貯蔵穴も見られないため、主軸を決めることができないが、一応南北方向に主軸があるとし



第156図 66号住居跡平面・断面図

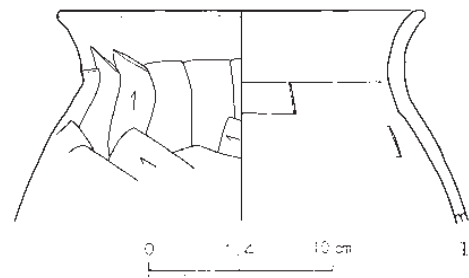
て、以下の記載を進める。平面形は、やや丸みをもった方形である。主軸長は、推定で2.75m前後、副軸長は、2.88mである。強いて主軸方位を求めれば、 $N-15^{\circ}-W$ あたりになる。壁の立ち上がりは、北・東壁は比較的急であるが、南・西壁はやや緩やかである。壁高は、北壁で6cm、東壁で28cm、南壁で25cm、西壁で16cmである。残存状態のよい北西半の床面は、ほぼ平坦である。貼り床の可能性はある。

支柱穴は、位置から見て、P1・3・4であろうか。いずれも円形に近い平面形で、P1は、最大径が39cm、深さ10cm、P3は、最大径25cm、深さ25cm、P4は、最大径29cm、深さ8cmである。P2は、最大径48cm、深さ17cmの楕円形のピットである。P2、P3は、新旧が判然としないが、P2は、P3と新旧の作り直しの関係にある支柱穴か、あるいは他の機能をもつピットであろう。

掘り方覆土、あるいは貼り床層を除く住居跡全体の覆土は、3層に分けられた。粒子の粗い褐色土、暗褐色土からなり、かなりしまっていた。4層は、貼り床層であろう。

覆土中からかなりの量の土器破片が出土しているが、図化し得たのは、1点であった(第157図1)。1の甕は、支柱穴と思われるP2内から、口縁部から胴部上位にかけそのままの状態出土した。

出土遺物から見て、古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第157図 66号住居跡出土遺物

第53表 66号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 19.6 底径 - 器高 -	口縁部は外反する。胴部は張る。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。 内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	粗粒チャート 内外-橙色	口縁部~胴部上位 1/2 残存

67号住居跡 (第158・159図、第54表、図版60・61・77)

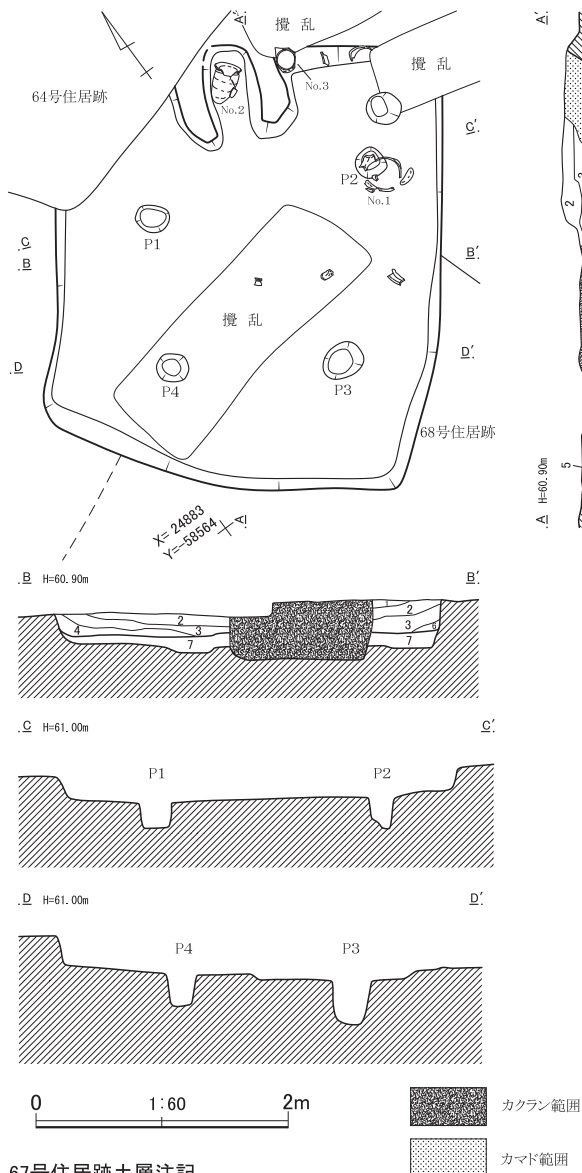
調査地点の北西縁の中央で検出した遺構である。68号住居跡と重複し、同遺構を切って造られている。また、北西壁からカマドにかけて64号住居跡(B2地点)に壊されており、床面の中央、および西隅の一角を攪乱により損壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、かなり歪な長方形で、主軸長は3.51m、副軸長は3.06m、主軸方位は $N-35^{\circ}-E$ である。

カマドのある北東・南西壁は、やや傾斜が緩やかであるが、北西・南東壁は、垂直に近く立ち上がる。壁高は、北東・北西壁が20~22cm、南東壁が28cm、南西壁が17cmである。とくに貼り床層と呼べる明確な層は、見られなかった。

支柱穴は、P1~P4の4つ、4本柱であるが、P2がずれた位置にあり、方形配置とは言い難い。いずれも円形、あるいは楕円形である。最大径、深さの順で列記すると、P1は26cm、18cm、P2は25cm、20cm、P3は34cm、36cm、P4は25cm、25cmである。P2の北東にあるピットは、位置的に貯蔵穴の可能性もあったが、大きさ、深さに問題があり、貯蔵穴とは見做し得なかった。

カマドは、北東壁のほぼ中央に、壁に対して微妙な角度をもって付設されている。右側の袖の基部は、64号住居跡に壊されており、天井部も残存していない。全長79cm、中央での横幅は98cmである。燃焼部は長方形に近い形態である。燃焼部の被熱赤化は、明瞭ではない。カマド内の覆土は3層で、全体に焼土などの混入は顕著とは言えない。袖は、それなりにしまっているが、ロームより暗い色調

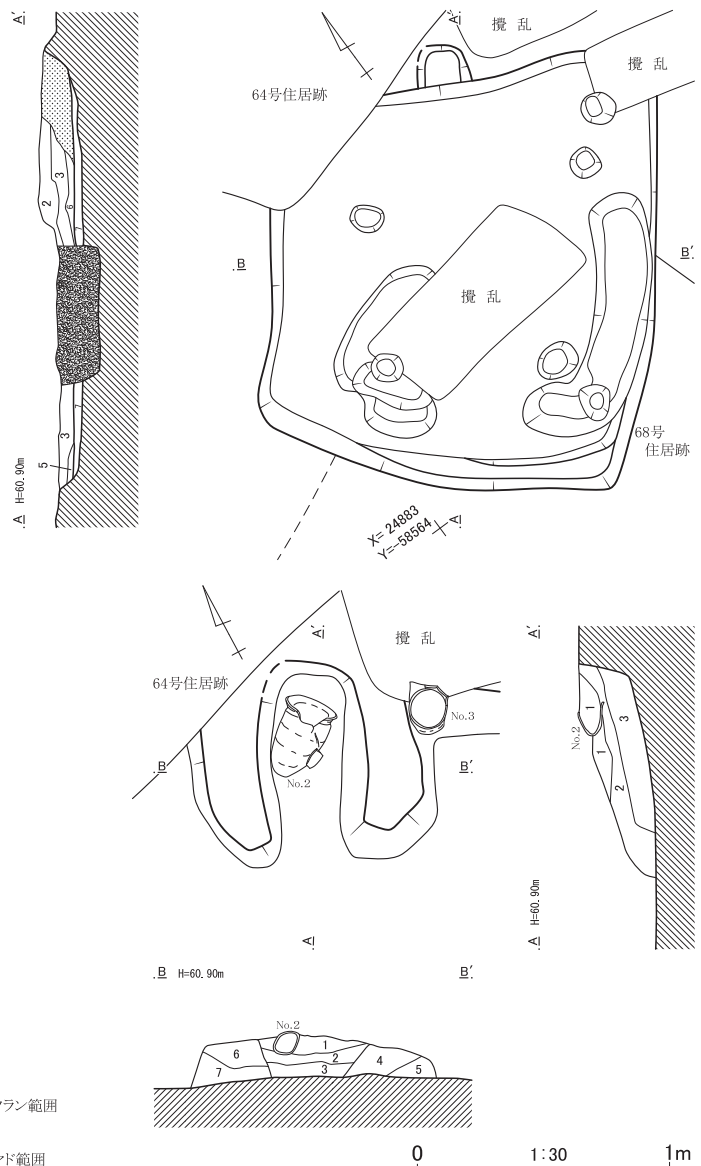


67号住居跡土層注記

- 1層: 暗褐色砂質土層。10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。粘性ややある。
- 2層: 黒褐色砂質土層。30mm大のロームブロック、炭化物、焼土粒を微量、ローム粒を少量含む。粘性ややある。
- 3層: 暗褐色砂質土層。ローム粒を多量に、10mm大のロームブロック、炭化物を微量含む。粘性ややある。
- 4層: 褐色砂質土層。ローム粒を多量に含む。しまり強く、粘性ややある。

67号住居跡カマド土層注記

- 1層: 暗褐色砂質土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 2層: 暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、30mm大のロームブロックを微量含む。
- 3層: 褐色砂質土層。ローム粒、50mm大のロームブロックを微量含む。



- 5層: 暗褐色砂質土層。ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 6層: 暗褐色砂質土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 7層: 暗褐色砂質土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを多量に、10mm大の同ブロックを少量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性ややある。人為堆積。掘り方埋土。

- 4層: 褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。しまり強い。4～7層は、袖の構築材。
- 5層: 褐色土層。ローム粒を少量含む。しまり強い。
- 6層: 褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。しまり強い。
- 7層: 褐色土層。ローム粒を多量に、10mm大のロームブロックを微量含む。しまり強い。

第158図 67号住居跡平面・断面図

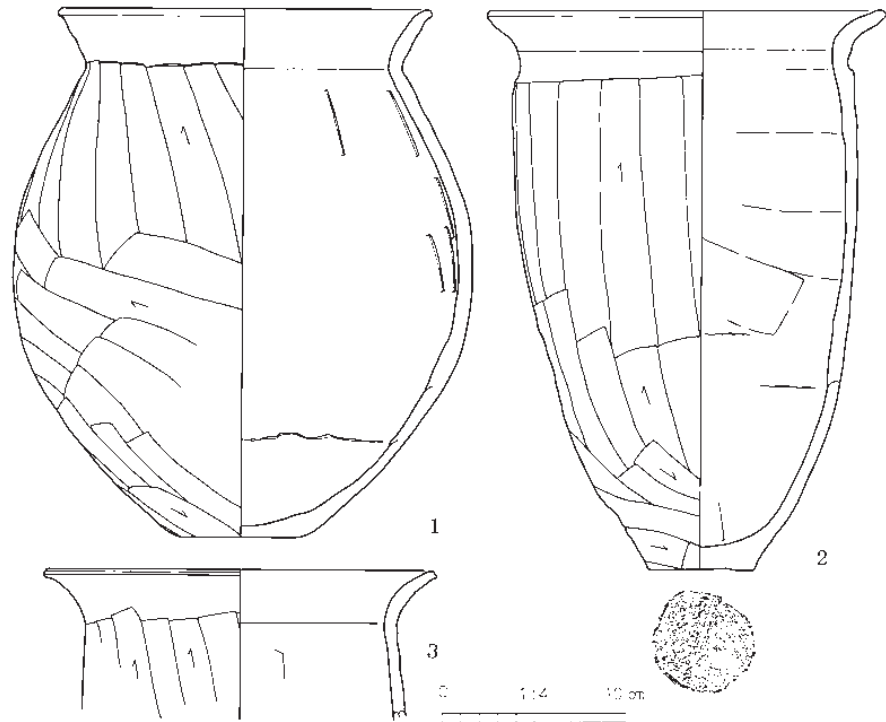
の褐色土を用いて造られている。燃焼部の中央のかなり浮いた位置で、横転した状態の甕が1点（第159図2）、右側の袖の外縁基部で、倒置された甕が1点（同図3）が出土している。

掘り方を除く住居跡の覆土は、6層に分けられた。粒子の粗い褐色土、暗褐色土、黒褐色土からなり、下層にはロームを多く含む土が堆積していた。

床面は、床面下を5～13cm粗掘りし、ローム粒やロームブロックを多量に含む土を充填し、踏み固め造られている。掘り方下面のP3・4のまわりには、不整形な細長い掘り込みが認められ、南隅付近は浅く掘り残されていた。

上記したカマドに関連する土器以外には、P2と重なるようにして、1の甕が出土している（第159図1）。他には覆土から土器片が出土したのみである。

出土遺物から見て、古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。



第159図 67号住居跡出土遺物

第54表 67号住居跡出土遺物観察表

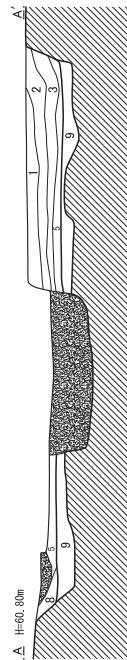
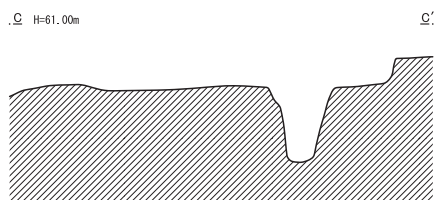
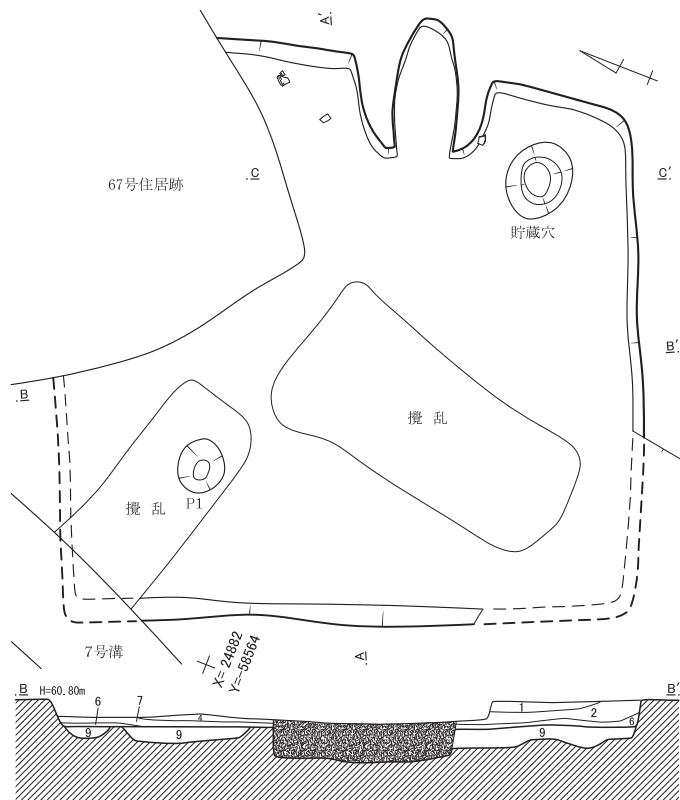
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (19.6) 底径 6.4 器高 27.8	口縁部は外反する。胴部は張り、中位に最大径を持つ。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。底部木葉痕。内面-口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内-明赤褐色 外-明褐色	1/2 残存 外面磨耗 内面剥離
2	甕	口径 21.8 底径 5.5 器高 29.8	口縁部は外反する。胴部は張らず、長胴を呈する。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。底部木葉痕。内面-口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外-明赤褐色	ほぼ完形 内面剥離
3	甕	口径 (21.0) 底径 - 器高 -	口縁部は外反し、胴部は張らない。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	チャート・褐色粒 内-にぶい橙色 外-橙色	口縁部～胴部 上位 1/2 残存

68号住居跡（第160～162図、第55表、図版61・62・77）

調査地点の北西縁の中央、やや北寄りで検出した遺構である。北東隅周辺を67号住居跡に大きく壊されており、北西隅を7号溝により壊されている。また、床面の中央、および北西・南西隅近辺を長方形の攪乱などに損壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、南北壁が平行する台形と言うべきであろう。主軸長は4.49m、副軸長は4.72m、主軸方位はN-18°-Wである。残存部分は少ないが、全体に掘り込みはしっかりしており、壁も急峻である。壁高は、東壁で28cm、南壁で17cm、西壁で23cmである。床面は、ほぼ平坦である。

検出できた支柱穴は、P1のみである。P1は、最大径が43cm、深さ36cmの楕円形のピットである。貯蔵穴は、カマドの右脇で検出した。平面形は楕円形で、長径63cm、短径51cmである。断面形は箱葉

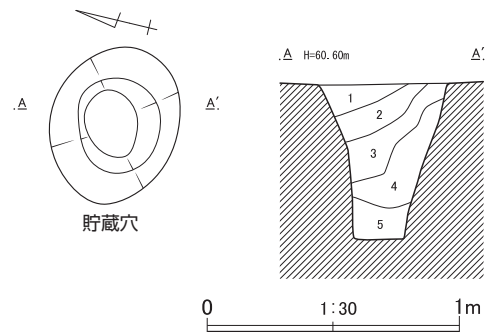
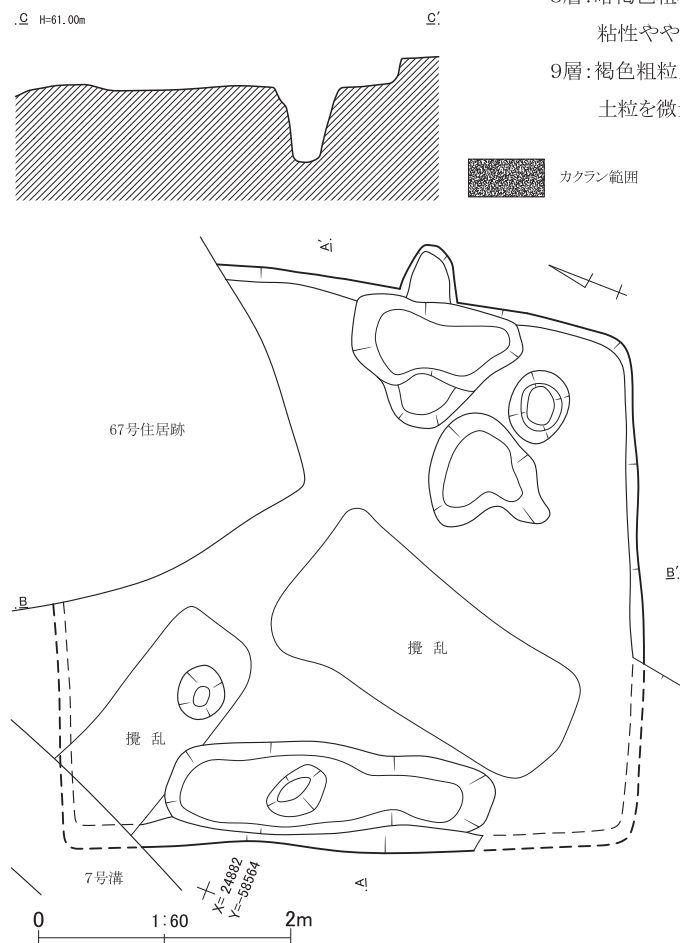


68号住居跡土層注記

- 1層: 暗褐色粗粒土層。10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。しまり強い。
- 2層: 暗褐色粗粒土層。10mm大のロームブロック、炭化物粒、焼土粒微量を含む。しまり強い。
- 3層: 暗褐色粗粒土層。ローム粒、焼土粒を少量、10mm大のロームブロックを微量含む。しまり強い。
- 4層: 暗褐色粗粒土層。ローム粒を微量含む。
- 5層: 暗褐色粗粒土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややある。
- 6層: 暗褐色粗粒土層。ローム粒を少量、10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。
- 7層: 暗褐色粗粒土層。ローム粒を多量に、30mm大のロームブロックを少量含む。しまり強く、粘性ややある。

8層: 暗褐色粗粒土層。ローム粒、10mm大のロームブロック、焼土粒微量含む。粘性ややある。

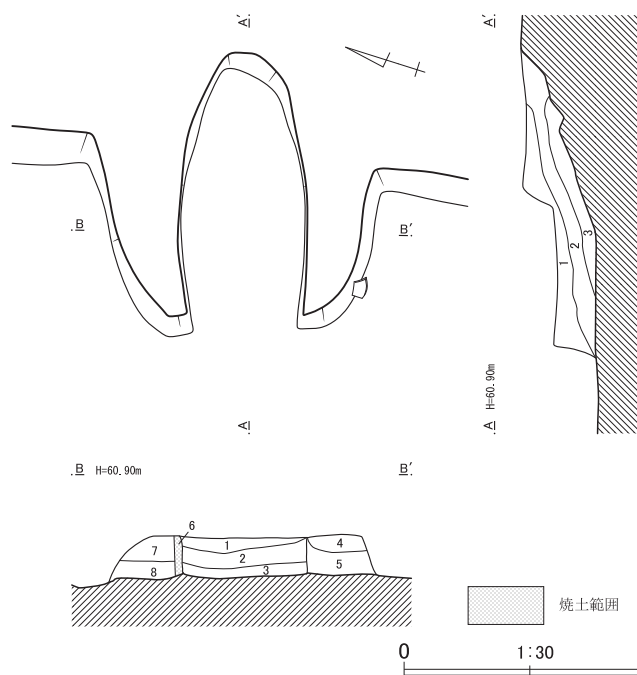
9層: 褐色粗粒土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを多量に、炭化物、焼土粒を微量含む。しまり強い。掘り方の埋土。



68号住居跡貯蔵穴土層注記

- 1層: 暗褐色土層。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性あり。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒、炭化物を微量、焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 3層: 褐色土層。ローム粒を多量に、10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。粘性あり。
- 4層: 褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、灰黄褐色粘土粒を多量に含む。しまり強く、粘性あり。
- 5層: 褐色土層。ローム粒、10mm大の灰黄褐色粘土塊を微量含む。粘性あり。

第160図 68号住居跡平面・断面図(1)



68号住居跡カマド土層注記

- 1層:暗褐色粗粒土層。10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。しまり強い。
- 2層:暗褐色粗粒土層。ローム粒、焼土粒を微量、炭化物を少量含む。しまり強い。
- 3層:暗褐色粗粒土層。ローム粒を少量、30mm大のロームブロック、炭化物を微量、焼土粒を多量に含む。しまり強い。
- 4層:にぶい黄褐色粘質土層。ローム粒、焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。4～8層は、袖の構築材。
- 5層:褐色粘質土層。ローム粒、焼土粒を少量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 6層:にぶい黄褐色粘質土層。焼土粒多量に含む。しまり強く、粘性ややある(被熱面)。
- 7層:褐色粘質土層。ローム粒を微量、焼土粒を少量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 8層:褐色粘質土層。ローム粒を微量、焼土粒を少量含む。しまり強く、粘性ややある。

第161図 68号住居跡平面・断面図(2)

研に近く、深さは61cmである。貯蔵穴の覆土は5層で、最下層の5層以外には、焼土、あるいは炭化物が含まれ、4層には、灰黄褐色の粘土粒が多量に含まれる。

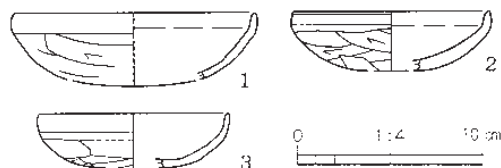
カマドは、東壁の中央からやや南に寄った位置に、ほぼ壁に直交して付設されている。全長111cm、中央での横幅は112cmである。燃焼部は長楕円形に近い平面形である。燃焼面は、奥壁側に向かって強く傾斜し、袖内壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。右側の袖内壁は、被熱赤化し硬化している。カマド内の覆土は、1～3層の3層で、焼土粒を多量に含むのは、3層のみである。袖は、褐色、あるいはにぶい黄褐色の粘土混じりの土を固めて造られている。

掘り方の埋土を除く住居の覆土は、8層に分けられた。粒子の粗い暗褐色土、褐色土である。

床面は、床面下を3～17cm掘り下げ、ロームブロックを多量に含む粒子の粗い褐色土を充填し、作出されている。掘り方下面には、凹凸が著しく、貯蔵穴の西脇には不整形に深くなる部分が見られ、また、西壁に沿って縦長の土坑状の掘り込みが認められた。

第162図1～3の土器は、いずれも覆土中出土である。

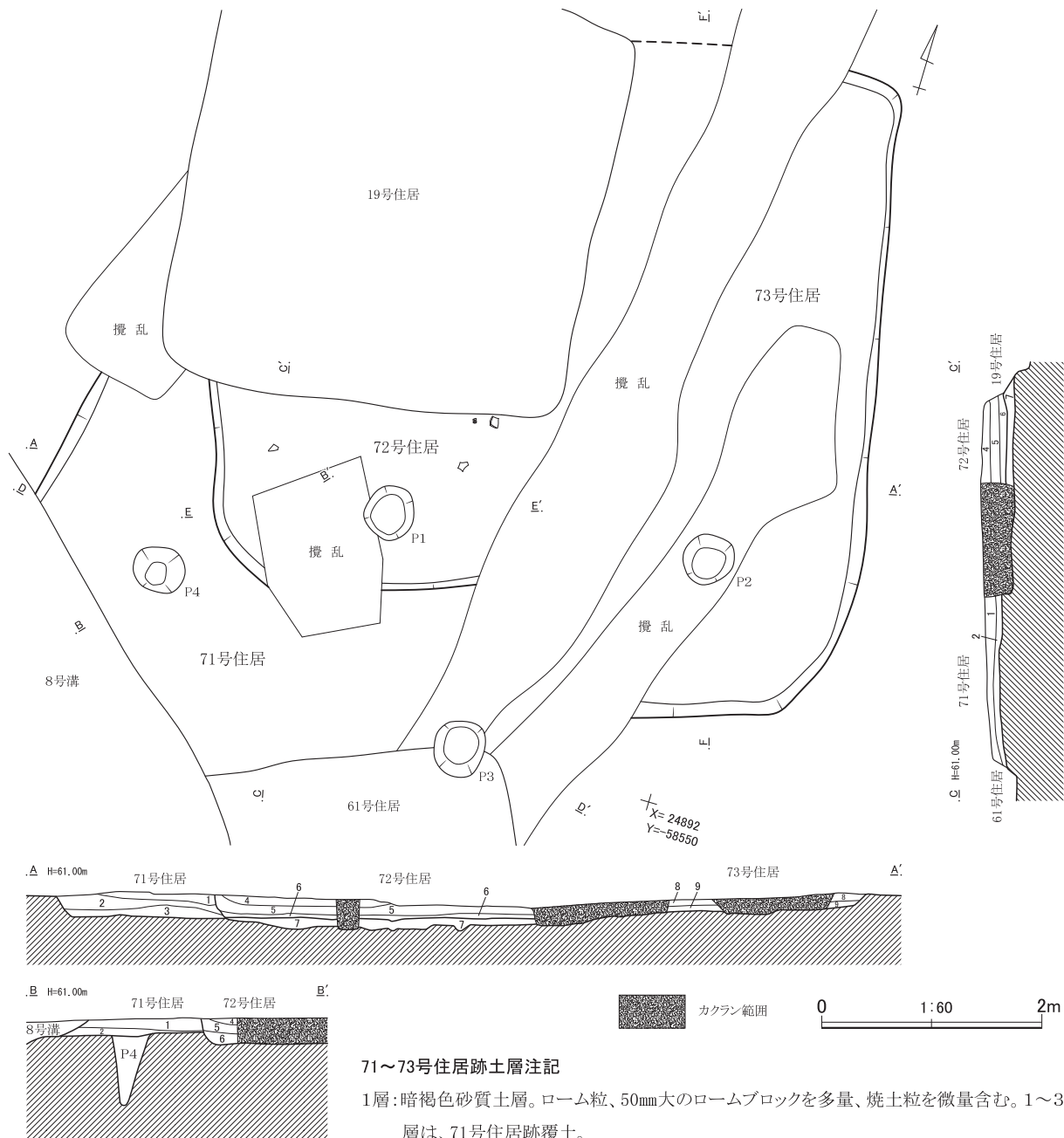
出土遺物から見て、古墳時代後期後葉～奈良時代の住居跡と考えられる。



第162図 68号住居跡出土遺物

第55表 68号住居跡出土遺物観察表

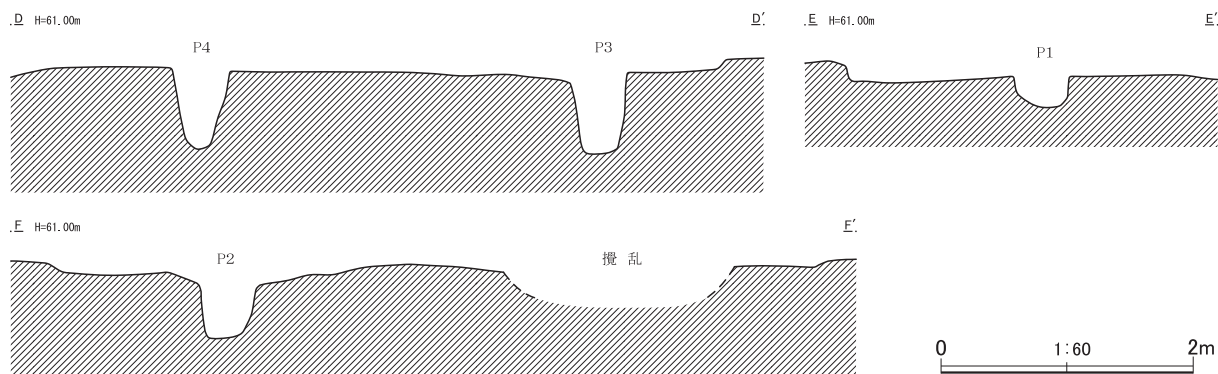
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (12.9) 底径 - 器高 -	丸底。体部は内彎し、口縁部は上方に立ち上がる。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。 内面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	チャート・黒色粒 内外-橙色	口縁部～体部 1/5 残存
2	坏	口径 (10.4) 底径 - 器高 -	丸底。体部は内彎し、口縁部は上方に立ち上がる。	外面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	粗粒チャート・黒色粒 内外-橙色	1/4 残存
3	坏	口径 (10.0) 底径 - 器高 -	丸底。体部は内彎し、口縁部は上方に立ち上がる。	外面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内外-橙色	体部 1/4 残存



第163図 71～73号住居跡平面・断面図

71号住居跡 (第163・164図)

調査地点の北西縁の北端近くで検出した遺構である。遺構北側の大半を19号住居跡 (B 2 地点)、72号住居跡、および溝状の攪乱などに壊されており、南西～南東部分は、8号溝、61号住居跡に切断



第164図 71～73号住居跡断面図

されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

主柱穴の位置から見て、方形、あるいは長方形の住居跡であったと推定される。東壁が東側の攪乱を越えず、主柱穴との間にある程度の間隔があったとすれば、西壁、東壁間の長さは、5.5m前後ということになる。西壁が主軸の方向にほぼ平行するとすれば、主軸方位は、やや東に振れた北向きになりそうである。壁高は、西壁で20cmである。床面は、直床であろうか、微妙な凹凸が認められる。

主柱穴は、P 3、P 4の2つである。P 3は、61号住居跡、および攪乱により切られ、事後的に認定した柱穴である。P 3は、最大径が52cm、深さ62cm、P 4は、最大径が47cm、深さ66cm、どちらも平面形が楕円形のピットである。覆土は3層で、1・3層には、ロームブロックが多量に含まれる。

重複関係から見て、古墳時代前期、あるいはそれ以降の住居跡である。

72号住居跡（第163・164図）

調査地点の北西縁の北端近くで検出した遺構である。遺構の北・東側の大半を19号住居跡（B 2地点）、および溝状の攪乱などに壊されており、南西隅付近をやはり攪乱により損壊されている。遺構北半に関しては、削平されていることもあり、どこまでが本遺構の範囲であるのか確定することができなかった。73号住居跡と重複し、同遺構を切って造られているようである。P 1は、位置的に見て、73号住居跡の主柱穴であろうから、結局本遺構は、南西隅付近の壁と床面のみ残存する遺構ということになる。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、不明である。西壁から攪乱に切られた床面の東端までの長さは、3.2m前後である。西壁が主軸の方向におおよそ平行とするなら、主軸方位は、やや西に振れた北向きになる。壁の立ち上がりは、比較的急である。壁高は、南壁で20cm、西壁で12cmである。

掘り方埋土を除く覆土は、3層に分けられた。粒子の粗い黒褐色土、暗褐色土からなり、6層は、焼土と炭化物を多量に含み、床面を被覆する薄層である。あるいは、焼失住居の可能性もあるのかもしれない。

床面は、床面下を5～10cm粗掘りし、ローム粒、ロームブロックを多量に含む土で埋めて造られている。重複関係から見て、古墳時代前期、あるいはそれ以降の住居跡である。

73号住居跡（第163～165図、第56表、図版77）

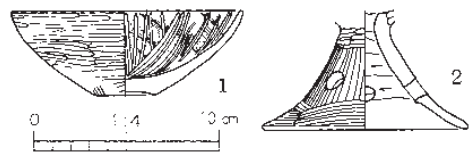
調査地点の北西縁の北端近くで検出した遺構である。遺構の西側の大半を19号住居跡（B 2地点）、

久下東遺跡

および71・72号住居跡、溝状の攪乱などに壊されている。東壁と北・南壁の一部に囲まれたわずかな範囲を調査し得たに過ぎない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、正方形、あるいは長方形になろうか。P 1・2を主柱穴とし、北側の主柱穴は、19号住居跡と攪乱により壊され、カマドは北壁側にあったと見るのが、最も無理の少ない推定であろう。P 1・2の位置関係から、東西方向での規模は、5.7m前後となる。上記の推定によれば、主軸方位は、N-7°-Wあたりである。壁高は、東壁で17cm、北・南壁で8、9cmである。直床であろう。

検出した主柱穴は、P 1、P 2の2つである。P 1は、72号住居跡の掘り方精査時に検出した。P 1は、最大径が50cm、深さ33cm、P 2は、最大径が46cm、深さ53cm、どちらも平面形がやや不整な円形のピットである。住居跡全体の覆土は、粒子の粗い黄褐色土、暗褐色土からなり3層である。



第165図 73号住居跡出土遺物

図化し得たのは、覆土中から出土した2点の土器のみである（第165図1・2）。出土遺物から見て、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第56表 73号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径 12.3 底径 3.0 器高 4.5	平底。体部から口縁部にかけて彎曲気味に開く。口唇部に平坦面を持つ。	外面-口縁部~底部ケズリ後ミガキ。 内面-口縁部~底部ハケ後ミガキ。	チャート・黒色粒 内外-明赤褐色	3/4 残存
2	器台	口径 - 底径 11.0 器高 -	脚部は「ハ」字状に開き、孔を3カ所有する。	外面-脚部ミガキ。内面-脚部上半ケズリ、下半ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外-橙色	脚部 2/3 残存

74号住居跡（第166図、図版63）

調査地点の南東端近くで検出した遺構である。掘り方のみ残存した状態であり、カマドや柱穴も見られない。南東辺は、掘り方の立ち上がりまで失われており、28号土坑にその一部を壊されている。また、29号土坑により北西辺の一角を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや不整な方形で、主軸長は4.32m、副軸長は推定で4.2m前後に復元できる。主軸方位はN-56°-Eである。P 1は、貯蔵穴で、長径49cm、短径40cm、深さが52cmの楕円形のピットである。

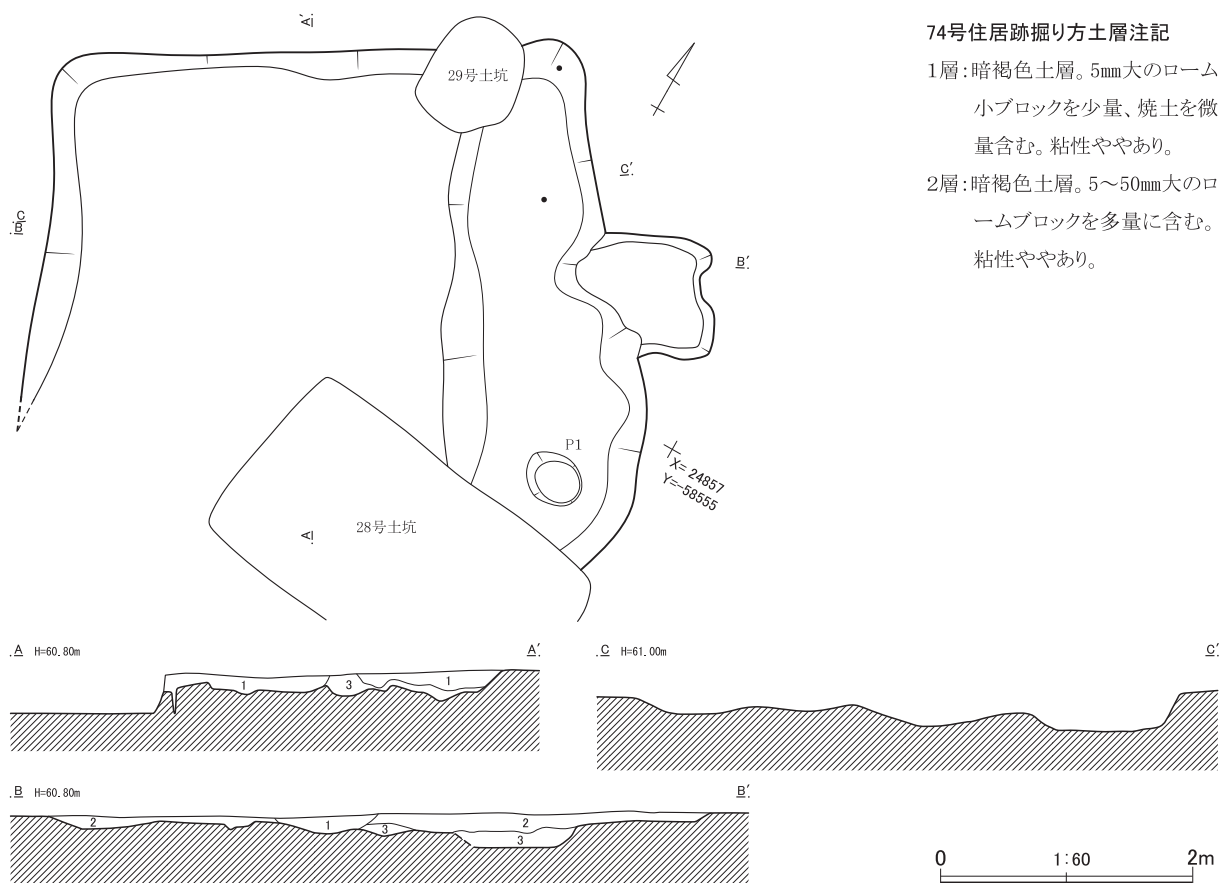
掘り方下面、あるいは粗掘り面には、凹凸が顕著である。カマドがあったと思いき範囲には、不整形の平場が掘り残され、北東壁から住居中央にかけて、幅101~162cmの土坑状の掘り込みが見られる。掘り方覆土は3層で、ローム粒やロームブロックを含む暗褐色土からなる。

出土遺物は、少数の土器小破片のみである。形態、覆土から見て、古墳時代後期の住居跡であろうか。

76号住居跡（第167・168図、第57表、図版63・77）

調査地点の南東端で検出した遺構である。北西隅近辺のわずかな範囲を精査したにとどまる。図示した覆土は、掘り方の覆土である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

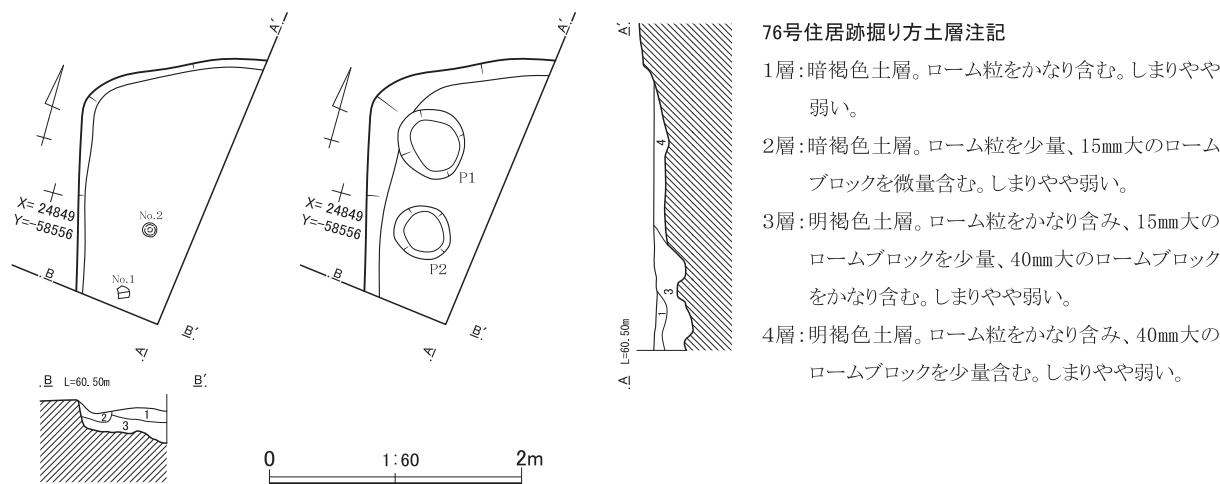
平面形は、方形、あるいは長方形になろうか。現存長は、北壁で1.45m、西壁で1.53mである。壁の立ち上がりは、比較的急峻である。壁高は、北壁で8cm、西壁で10cm前後である。床面は、ほぼ平坦である。床面は、床面下を8~30cm粗掘りして、暗褐色土やロームの多い明褐色土で埋め戻され、作出されている。掘り方下面で、P 1・2の2つのピットを検出している。いずれもやや不整な円形の極浅いピットで



74号住居跡掘り方土層注記

- 1層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、焼土を微量含む。粘性ややあり。
- 2層:暗褐色土層。5~50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

第166図 74号住居跡平面・断面図



76号住居跡掘り方土層注記

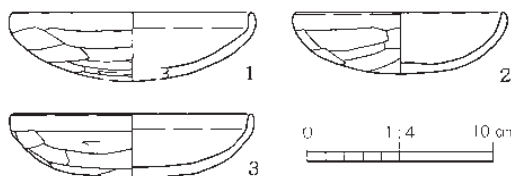
- 1層:暗褐色土層。ローム粒をかなり含む。しまりやや弱い。
- 2層:暗褐色土層。ローム粒を少量、15mm大のロームブロックを微量含む。しまりやや弱い。
- 3層:明褐色土層。ローム粒をかなり含み、15mm大のロームブロックを少量、40mm大のロームブロックをかなり含む。しまりやや弱い。
- 4層:明褐色土層。ローム粒をかなり含み、40mm大のロームブロックを少量含む。しまりやや弱い。

第167図 76号住居跡平面・断面図

ある。P 1 の最大径は63cm、P 2 の最大径は、45cmである。

図化したのは、3点の坏のみである（第168図1～3）。2の坏は、西壁寄りの床面近くから、1の坏も2の脇の同じような高さで出土している。

出土遺物から見て、古墳時代後期後葉～奈良時代の住居跡と考えられる。



第168図 76号住居跡出土遺物

第57表 76号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 13.0 底径 - 器高 3.3	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く直立する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外-橙色	2/3 残存
2	坏	口径 11.5 底径 - 器高 3.2	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く立ち上がる。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	ほぼ完形
3	坏	口径 (13.2) 底径 - 器高 (3.6)	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く直立する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外-橙色	1/2 残存

2 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第169図、図版64)

調査地点の東縁、南東端近くで検出した遺構である。列状に並ぶ3つのピットから認定した遺構である。建物跡であるのか不確定要素が残るが、掘立柱建物跡として記載する。41号土坑と重複しているが、直接柱穴が切り合わないため、新旧関係は不明である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

掘立柱建物跡の可能性のあるピットは、P1~P3の3つである。ピットの中心を結ぶ直線の方

1号掘立柱建物跡土層注記

<P1>

1層: 暗褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックを多量に、焼土粒を微量含む。粘性ややある。

2層: 暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややある。

3層: 黄褐色土層。ロームブロックを主とする層。

4層: 暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを多量に含む。

<P2>

1層: 暗褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ややある。

2層: 暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

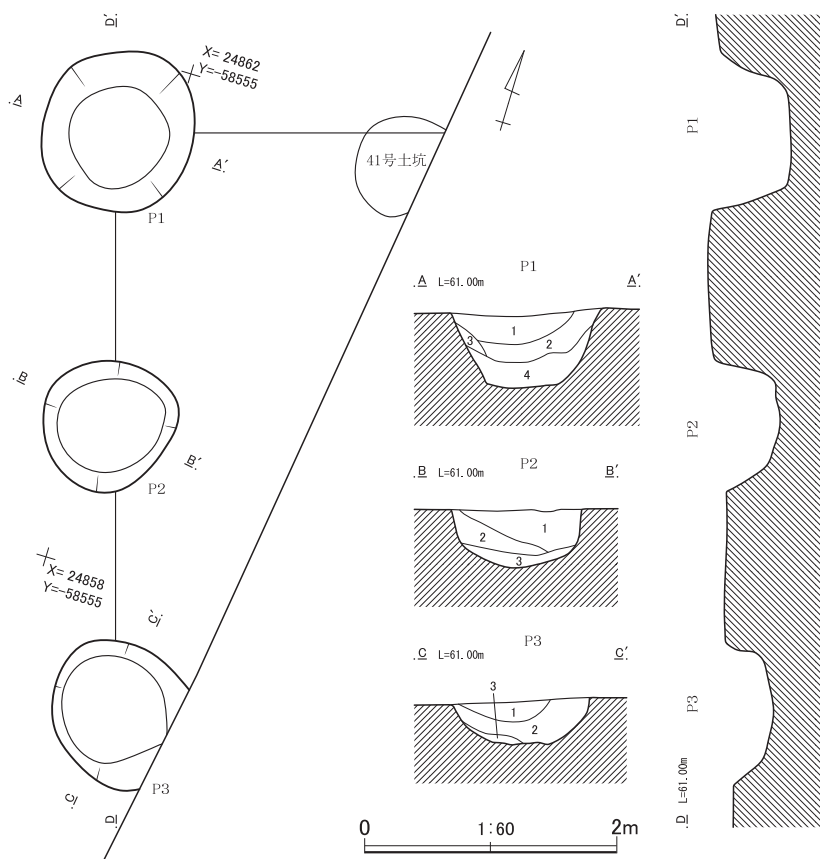
3層: 黄褐色土層。ロームブロックを主とする層。粘性ややある。

<P3>

1層: 暗褐色土層。ローム粒、5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともにややある。

2層: 暗褐色土層。ローム粒を少量、30mm大のロームブロックを多量に含む。しまり、粘性ともにややある。

3層: 黄褐色土層。ロームブロックを主とする層。しまり、粘性ともにややある。



第169図 1号掘立柱建物跡平面・断面図

は、 $N-17^{\circ}-W$ である。平面形は、いずれもやや不整な円形で、最大径は、P 1が117cm、P 2が106cm、P 3が126cmである。断面形は、U字形、鍋底形で、最深部の深さは、P 1が39cm、P 2が47cm、P 3が63cmである。中心間の距離は、P 1-P 2が230cm、P 2-P 3が225cmである。

覆土は、それぞれ3、4層に分けられた。暗褐色土と黄褐色土からなる同じような比較的単純な堆積状態が見られ、柱穴らしい痕跡は、覆土には見られない。

出土遺物は、土器微細片以外検出できなかった。

覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と思われる。

3 地下式墳

1号地下式墳（第170図、図版65）

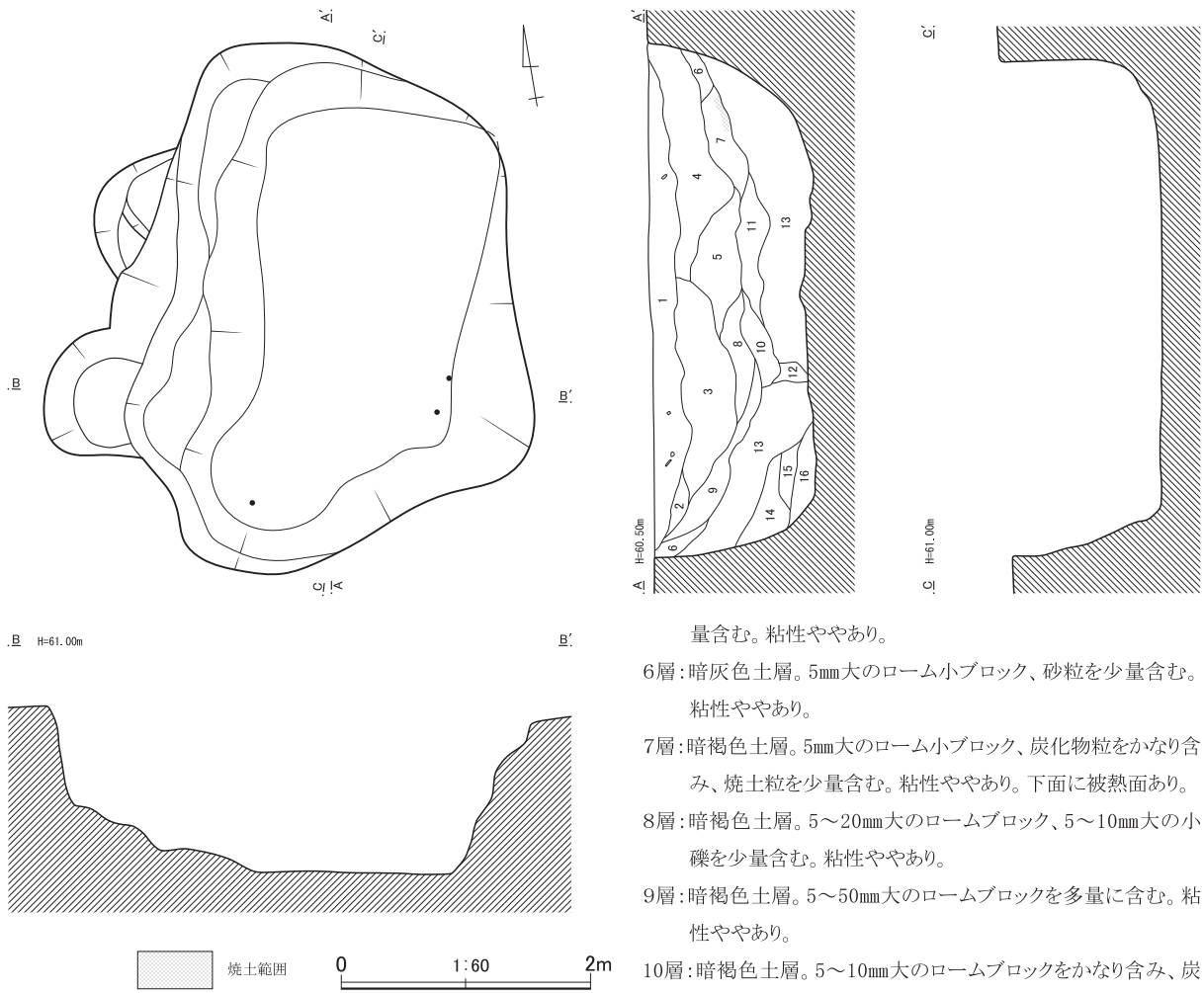
調査地点の南縁近くの中央で検出した遺構である。大きな土坑状の掘り込みに付属して、段差をもつ昇降のため施設、入口施設を伴う遺構であり、地下式墳と呼称される遺構に類似すると判断した。通例に倣い「大きな土坑状の掘り込み」を主室、「入口施設」を竪坑と呼び分け、記載する。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、強いて表せば、かなり崩れた長方形に近い主室の片側長辺に、半弧形をなす竪坑が付帯する形態である。壁の崩落などにより本来の形状を部分的にしかとどめていないのかもしれない。主室の長軸長は、4.10m、短軸長は、3.21mである。主軸方位、すなわち竪坑側から見た主室の中心軸方位は、 $N-99^{\circ}-E$ である。主室には、西壁に沿って段差と平場が見られ、南西側の平場に接続して竪坑が付設されている。西壁の上部には、竪坑とは別に半弧形の掘り込みが見られる。北東隅は、微妙に壁がハングしており、主室壁の本来の形状をかすかにとどめているようである。他の壁は、比較的急峻ではあるものの、凹凸が見られ、丸みをもっている。壁高は、北壁で120cm、東壁で122cm、南・西壁で129cmである。黄褐色ローム層下の砂礫層を掘り抜き、灰褐色、暗灰色の砂礫を含むシルト質土を床面としている。床面は、中央がやや浅くなり、微妙な凹凸がみられるものの、おおむね平坦である。

竪坑は、東壁の南寄りの位置に付設されている。竪坑の全長、竪坑西壁末端から平場の端までの長さは、131cm、西壁との連結部での横幅は、105cmである。確認面から80cm前後垂直に近く掘り込まれ、平場が設けられ、段差を介して緩斜面となり、床面へと連なる。羨門を介することなく、竪坑が主室に直結した形態になると見てよいであろう。

主室の覆土は、16層に分けられた。暗褐色土、暗灰色土、灰色土からなり、暗灰色土、灰色土は、主室の壁に露出しているローム層下の水成堆積層の地山に由来する土層である。つまり、3・5・6・13~16層は、本遺構の掘削土が再び流入したものか、天井部や壁などの地山の残存部分が崩落した土ということになる。中でも13層は、純層に近い暗灰色土が分厚く堆積しており、天井部がそのまま落下した層である可能性が考えられる。13層が天井部の崩落土であるとすれば、主室は、天井がかなり低い構造であったことになる。

遺物は、13層より上部の層から陶磁器片がわずかに出土しているのみである。天井部崩落土より上位から出土した遺物は、時期的に新しいものが含まれようが、中世の遺構と考えてよいであろう。



1号地下式壙土層注記

- 1層:暗褐色土層。5～50mm大の小礫・5～20mmのロームブロックをかなり含み、2mm大の白色軽石を少量含む。粘性ややあり。
- 2層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、2mm大の白色軽石を少量含む。粘性ややあり。
- 3層:暗灰色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、5～30mm大の小礫を少量含む。しまり弱く、粘性ややあり。
- 4層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、5～10mmの小礫を少量含む。粘性ややあり。
- 5層:暗灰色土層。5mm大のローム小ブロック、10mm大の小礫を少

- 量含む。粘性ややあり。
- 6層:暗灰色土層。5mm大のローム小ブロック、砂粒を少量含む。粘性ややあり。
- 7層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、炭化物粒をかなり含み、焼土粒を少量含む。粘性ややあり。下面に被熱面あり。
- 8層:暗褐色土層。5～20mm大のロームブロック、5～10mm大の小礫を少量含む。粘性ややあり。
- 9層:暗褐色土層。5～50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 10層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。
- 11層:暗褐色土層。5～20mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。人為的埋没。
- 12層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。しまり弱く、粘性あり。
- 13層:暗灰色土層。地下式壙天井の崩落土。ローム下の水成層。砂粒を多量に、鉄分を少量含む。粘性ややあり。
- 14層:暗灰色土層。砂粒、5～10mm大の小礫を多量に含む。粘性ややあり。
- 15層:暗灰色土層。砂粒、5mm大の小礫を少量含む。粘性ややあり。
- 16層:灰色土層。砂層。5mm大の小礫を少量含む。

第170図 1号地下式壙平面・断面図

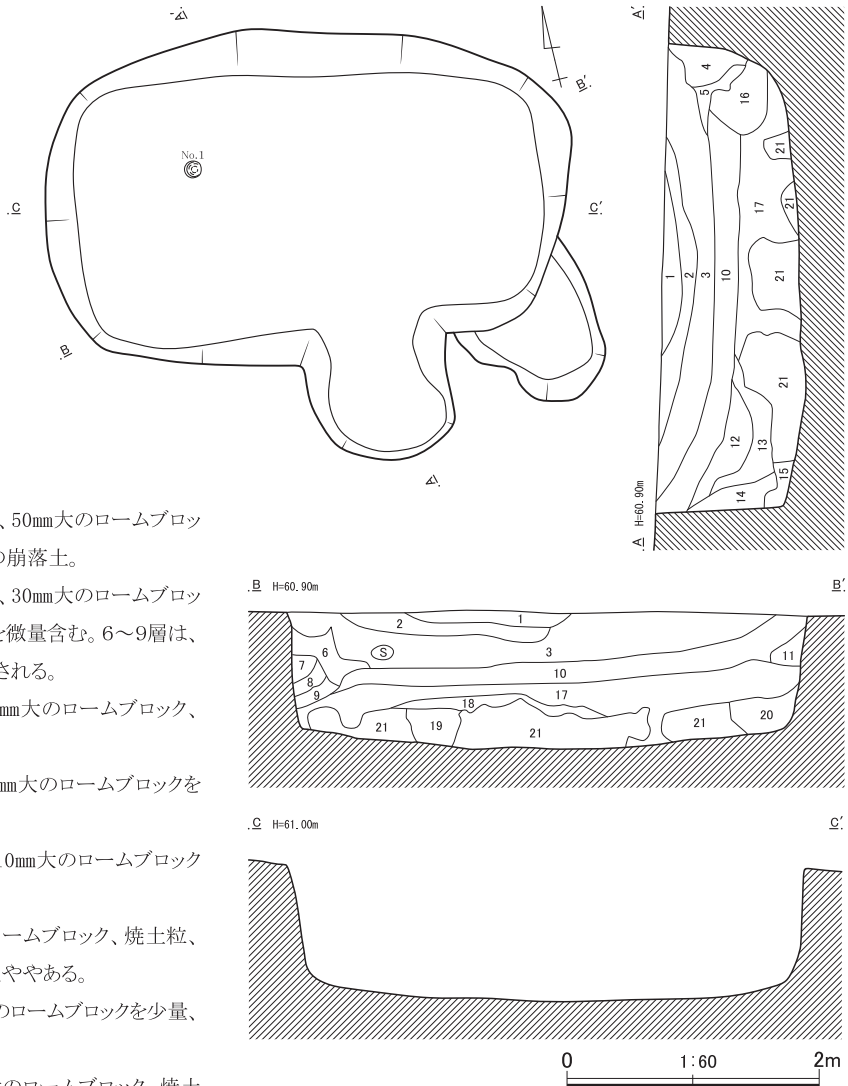
2号地下式壙 (第171・172図、第58表、図版66・78)

調査地点の中央、東縁に近接した位置で検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、隅丸長方形の主室の片側長辺に、舌状に突き出た竪坑が付いた形態である。南東隅には、竪坑と並んで浅い掘り込みが認められるが、伴うものか否か確言できない。主室の長軸長は、4.17m、短軸長は、2.70m、主軸方位は、N-7°-Eである。北壁は、やや丸みをもって立ちあがるが、他の壁は、垂直に近く、急峻である。壁高は、90～95cmであり、ほぼ均一である。床面は、黄褐色の硬

2号地下式壙土層注記

- 1層:暗褐色砂質土層。ローム粒、焼土粒、炭化物を微量、白色粒(軽石?)を微量含む。
- 2層:黒褐色砂質土層。ローム粒、10mm大のロームブロック、焼土粒、炭化物、白色粒(軽石?)微量含む。
- 3層:暗褐色砂質土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを微量、焼土粒少量、炭化物、白色粒微量含む。
- 4層:黄褐色土層。地山の関東ローム。壁の崩落土。未風化。しまり強く、粘性あり。
- 5層:暗褐色砂質土層。ローム粒を多量に、50mm大のロームブロック、焼土粒、炭化物を微量含む。壁の崩落土。
- 6層:暗褐色砂質土層。ローム粒を多量に、30mm大のロームブロックを少量、炭化物、白色粒(軽石?)を微量含む。6~9層は、壁の崩落と同時に堆積した土と推定される。
- 7層:褐色砂質土層。ローム粒を少量、30mm大のロームブロック、白色粒(軽石?)微量含む。
- 8層:褐色砂質土層。ローム粒を少量、10mm大のロームブロックを微量含む。
- 9層:褐色砂質土層。ローム粒を多量に、10mm大のロームブロックを微量含む。
- 10層:黒褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロック、焼土粒、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 11層:暗褐色砂質土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 12層:暗褐色砂質土層。ローム粒、30mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。しまり強い。
- 13層:暗褐色土層。ローム粒を少量、10mm大のロームブロックを多量に、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 14層:暗褐色土層。ローム粒を多量に、10mm大のロームブロックを微量含む。14・15・17~19層は、壁の崩落と同時に堆積した土層と推定される。粘性ややあり。
- 15層:褐色土層。ローム粒を微量含む。しまり強く、粘性ややある。
- 16層:暗褐色砂質土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを少量、150mm大のロームブロックを多量に含む。壁崩落土。



- 17層:黒褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、30mm大のロームブロックを微量、10mm大の同種ブロックを少量含む。しまり強い。
- 18層:暗褐色砂質土層。ローム粒を多量に含む。しまり強い。
- 19層:暗褐色砂質土層。200mm大のロームブロックを微量、30mm大の同種ブロックを多量に含む。しまり強い。
- 20層:褐色砂質土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 21層:黄褐色土層。暗褐色土粒微量含む。天井崩落土。しまり強く、やや粘性ある。

第171図 2号地下式壙平面・断面図

いローム層を掘り込んで作出されており、中央がやや深くなるようである。

竪坑は、南壁中央の東寄りに付設されている。竪坑の平面形は、南側が丸く膨らみ、主室南壁との連結部にかげくびれる形態である。竪坑の全長は、114cm、南壁との連結部での横幅は、118cmである。確認面から垂直に近く床面まで掘り込んで造られており、緩斜面によって床面に接続する。竪坑底面と床面との間は、微段により区分けされているようである。1号地下式壙とは異なり、竪坑と主室の間にごく短い羨道が付く形態になる可能性がある。

久下東遺跡

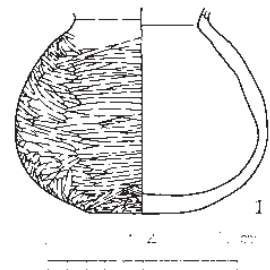
主室、竪坑の覆土は21層で、全体に粒子の粗い土（砂質土）と通常の土壤に大きく分けることができる。総じて粒子の粗い土が上層に、下層に粒子の粗くない土が堆積しており、粒子の粗い土は、基本的に天井部の崩落後、窪地となった主室や竪坑に暫時流入した土と見ることができる。17層の黒褐色土も、かなり混入物が見られるため、すべてとは言いきれないが、天井部を構成するロームより上部の文字通りの旧表土と見てよいかと思う。

本遺構の埋没過程は、以下のように復元できる。まず、地下式壙の廃棄後のある時点で、天井部を構成するローム（21層）が、はがれおちるようにブロックで床面に落下し、引き続き旧表土の黒褐色土（17層）が落下するとともに、暗褐色土（13・14層）や暗褐色砂質土（12・18・19層）が崩落、流入した段階があった。床面に21層以前の堆積土が一切見られないことから見て、主室は、この段階まで密閉された状態にあったようである。竪坑の床面に密着する褐色土（15層）は、土質から見て、この段階までの竪坑からの流入土というより、竪坑の坑壁などの崩落土と見た方が自然であろう。竪坑の底面は、大半が落下したローム（21層）に被われており、竪坑のくびれ部にも天井部があったと推定される。つまり、竪坑の開口部は、丸く膨らんだ部分であり、天井部のある短い羨道があったと見られる。

ロームや黒褐色土を主とする天井部の落下に続いて、窪地となった主室や竪坑に黒褐色土が大量に流入し、以降、暫時暗褐色砂質土や黒褐色砂質土が流入、堆積した。この段階にも、壁の崩落（4層）などは、引き続き起こったようである。

出土遺物の大半は、天井部崩落土より上位の層から出土した。第172図1の土器も、本遺構の天井崩落後に古い遺物が混入したものである。

天井部崩落土より上位から出土した遺物には、時期的に新しいものが含まれるが、中世の遺構と考えてよいであろう。



第172図 2号地下式壙出土遺物

第58表 2号地下式壙出土遺物観察表

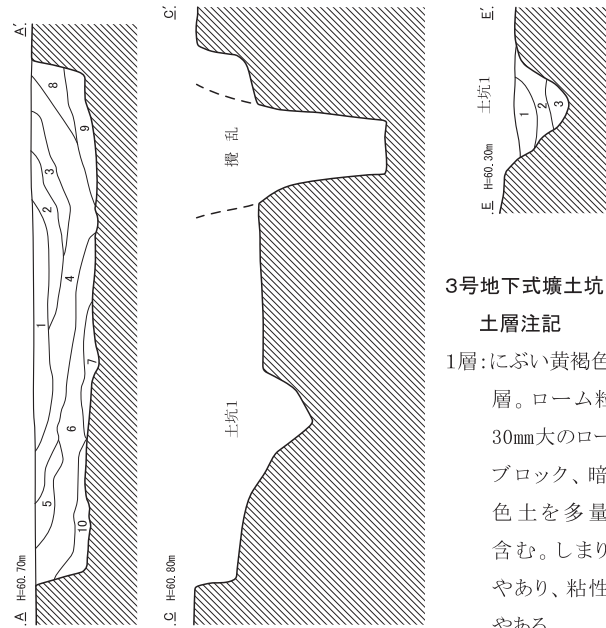
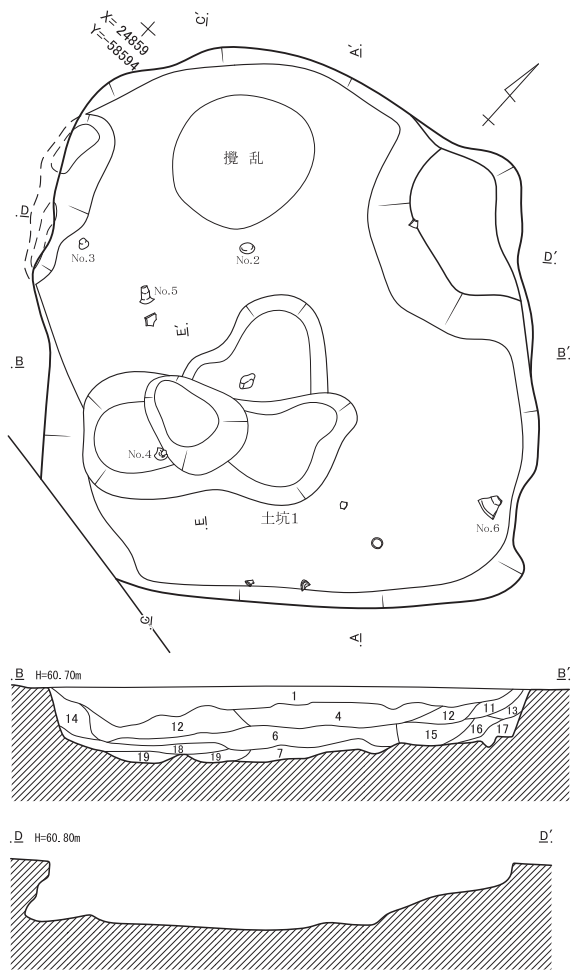
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	埴	口径 - 底径 5.4 器高 -	丸底気味。胴部は膨らみを持ち、中～下位に最大径を有する。	外面－胴部ミガキ。底部ケズリ。 内面－胴部ナデ。底部ナデ。	チャート・黒色 粒・褐色粒 内外－橙色	胴部～底部残存

3号地下式壙（第173・174図、第59表、図版67・78）

調査地点の南西端で検出した遺構である。当初、住居跡と考え、精査したが、カマドや柱穴など住居跡に伴う諸施設が一切見られず、昇降用かと思われる平場が付属し、また壁の一部がハングするなど、地下式壙の特徴を具備するため、地下式壙と認定した。北西壁寄りの一角を、径100～110cmの丸い攪乱により床面まで壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、北西壁が大きく張るが、方形に近いと見てよいであろう。主軸長は3.82m、副軸長は4.40m、主軸方位はS-47°-Wである。全体に掘り込みはしっかりしており、壁も急峻である。西隅は、挟り込むように強くハングしている。壁高は、北・南・西壁で40、41cm、東壁で37cmである。床面には、凹凸が著しい。

南西壁に接する床面には、不整形の土坑が見られる。土坑1と仮称したが、平面形から見ると、卵形、楕円形、不整円形の土坑が重なり合っているようにも見える。北東-南西方向での長さは、218cm、最深部での深さは、48cmである。土坑の覆土は、ロームを主とする土と黒褐色土からなる3層に分けられた。



**3号地下式塙土坑1
土層注記**

1層:にぶい黄褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロック、暗褐色土を多量に含む。しまりややあり、粘性ややある。

2層:黒褐色土層。50mm大のロームブロックを主とし、黒褐色土との混合層。しまりやや弱く、粘性ややあり。

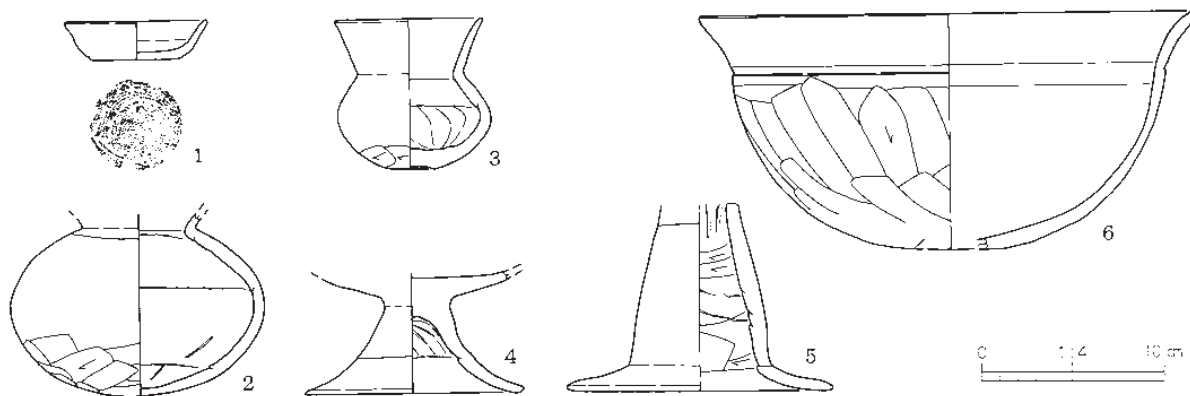
3層:にぶい黄褐色土層。ロームを主とし、シルトを含む。ローム大ブロックが詰まっている感じ。

3号地下式塙土層注記

- 1層:暗褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロックを微量含む。しまりややあり、粘性やや弱い。
- 2層:暗褐色土層。ローム粒、10～20mm大のロームブロックを多量に含む。しまり、粘性がややある。
- 3層:暗褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを微量含む。しまりやや弱く、粘性あり。
- 4層:暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロックの含有量が異なる。ローム粒、5～30mm大のロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。
- 5層:暗褐色土層。ローム粒、焼土粒を微量、20mm大のロームブロックを少量含む。しまりややあり、粘性やや弱い。
- 6層:暗褐色土層。ローム粒、60mm大のロームブロックを多量に、シルトブロックを少量、焼土粒を微量含む。しまり、粘性がやや弱い。
- 7層:暗褐色土層。ロームブロックを主とし、黒褐色土を含む。ローム粒、50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性あり。
- 8層:黒褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロック、焼土粒を少量含む。しまりややあり、粘性あり。
- 9層:暗褐色土層。ロームブロックを主とし、黒褐色土を含む。ローム粒、50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性あり。

- 10層:暗褐色土層。ロームブロックを均一に含む。ローム粒、30mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を少量、焼土粒を微量含む。しまりややあり、粘性ある。
- 11層:にぶい黄褐色土層。ローム粒を少量、5mm大のローム小ブロックを多量に、焼土粒を微量含む。しまり、粘性がややある。
- 12層:暗褐色土層。ローム粒を少量、30mm大のロームブロックを多量に、焼土粒を少量含む。粘性ややあり。
- 13層:にぶい黄褐色土層。ローム粒を少量、5mm大のロームブロックを多量に、焼土粒を微量含む。しまり、粘性がややある。
- 14層:黒褐色土層。ローム粒を少量、30mm大のロームブロック、シルトブロックを多量に含む。粘性あり。
- 15層:暗褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを多量に、黒色土を少量含む。粘性ややあり。
- 16層:にぶい黄褐色土層。ローム粒、炭化物粒、焼土粒を微量、5mm大のローム小ブロックを多量に含む。しまり、粘性がややある。
- 17層:にぶい黄褐色土層。ローム粒、20mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 18層:黒褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロック、シルトを多量に含む。しまりややあり、粘性ある。
- 19層:にぶい黄褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを多量に含む。粘性あり。

第173図 3号地下式塙平面・断面図



第174図 3号地下式墳出土遺物

第59表 3号地下式墳出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	カワラケ	口径 7.6 底径 4.7 器高 2.0	平底。口縁部は外傾する。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面-ロクロナデ。	片岩・白色粒 内外-橙色	ほぼ完形
2	埴	口径 - 底径 - 器高 -	丸底。胴部は張り、中位に最大径を持つ。	外面-胴部上半ナデ、下半ケズリ。 内面-胴部ヘラナデ。	白色粒 内-にぶい橙色 外-橙色	口縁部欠失
3	埴	口径 (7.9) 底径 2.2 器高 8.0	平底。胴部は張り、中位に最大径を持つ。口縁部は直線的に外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ナデ、 下位ケズリ。底部ナデ。内面-口縁 部ヨコナデ。胴部~底部指ナデ。	白色粒 内-明赤褐色 外-橙色	口縁部 1/3 欠失
4	高坏	口径 - 底径 (11.6) 器高 -	脚部は「ハ」字状に広がる。	外面-坏底部ヘラナデ。脚部上半ナ デ、下半ヨコナデ。内面-坏底部ヘラナ デ。脚部上半ヘラナデ、下半ヨコナデ。	チャート・白色粒 内-にぶい橙色 外-にぶい赤褐色	脚部 3/4 残 存
5	高坏	口径 - 底径 (6.2) 器高 -	脚柱部は膨らみを持ち、脚端部は広がる。	外面-脚柱部ナデ、脚端部ヨコナデ。 内面-脚柱部上位絞り目、中~下位 ケズリ、脚柱部ヨコナデ。	チャート・白色粒 内-にぶい橙色 外-にぶい赤褐色	脚部 1/3 残 存
6	鉢	口径 (26.6) 底径 - 器高 -	丸底。体部は膨らみを持つ。口縁部は体部との境にわずかな稜を持って外反する。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部 ケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体 部~底部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内-橙色 外-にぶい赤褐色	1/4 残存

竪坑と呼ぶべき明瞭な施設は見られないが、北隅に掘り残された平場が、竪坑に相当する出入り口施設と考えられる。平場の平面形は、主室側が直線的な台形に近く、東西方向での長さは、136cmである。主室側に向かって緩い傾斜をもち、辺縁から斜面をなし床面へと連なる。平場の中央と床面との高さの差は、30cm前後である。

主室の覆土は、にぶい黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土からなる19層に分けられた。天井部の崩落土と明確に認定できる土層は認められなかったが、1・3・5・8層を除いて、いずれも大なり小なりロームブロックを多量に含むか、ロームブロックを主とする土層である。よって、覆土の多くは、天井部や壁の崩落土であるとまでは言い切れないものの、そうした崩落土や掘削土の再流入した土に関連すると考えることまでは許されよう。

覆土中から、土師器片などがかなりの量出土しているが、多くは、本遺構の時期とは異なり、天井部の崩落後に、主室内に混入した遺物である。一応本遺構内出土遺物として図化した(第174図1~6)、実際に伴う可能性があるのは、1のカワラケのみである。

覆土などから見て、中世の遺構であろう。また、2号地下式墳のように竪坑、羨道をもつ形態から、1号地下式墳のように羨道を失いながらも竪坑が主室から突き出した形態へ、さらに竪坑が主室に取り込まれた本遺構のような形態へと、次第に竪坑の独立性が失われる過程が、時の経過とともに進行したとすれば、本遺構は、今回検出した3基の地下式墳の中で、最も時期的に後出する地下式墳ということなる。

4 井戸跡

3号井戸跡（第175図、図版67～68）

調査地点の南東コーナー付近で検出した遺構である。62号住居跡の南東側壁部分を切って掘削している。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。遺構確認面における平面形は、北西－南東方向に長軸を有する不整長楕円形であるが、遺構中位において平坦面を有し、この面の南東方向に偏在させるように規模を縮小した不整円形となり、最深部に至る。確認面における主軸長は2.79m、短軸長は2.08m、長軸方位はN-30°-Wである。遺構中位におけるテラスの規模は、北西部において75cm、南東部において13cmを測る。また同位の径は1.30m前後を測り、底部径は90cm前後である。遺構確認面からテラスまで深さは、1.77m、同底部までの深さは3.46mであり、底部付近は礫層を掘り抜いている。

覆土は、半截掘削出来る範囲において7層に分けられた。上層部において浅間山系A軽石が観察されるものの、上位には暗褐色土、下位は黒褐色土である。さらに下位部分の覆土は黒褐色土を主体とするものであった。総じてブロック状のロームを含み、一定の深さまでは埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、出土していないが覆土からみて、中世の遺構と考えられる。

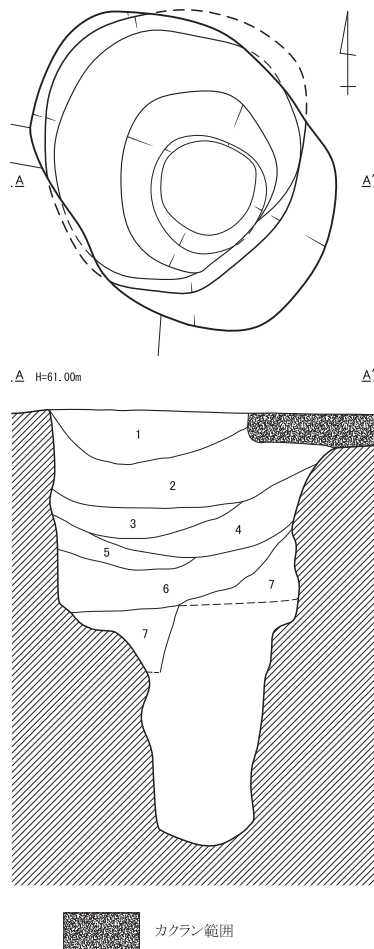
4号井戸跡（第176～183図、第60～62表、図版68・78～81）

調査地点の南縁近くの中
央部東側で検出した遺構で
ある。2号溝南側の東立ち
上がり部分に接している。

確認面は、黄褐色の軟質
ローム層上面である。遺構
確認面における平面形は、
不整円形である。遺構中位
西側に僅かな平坦面を有し、
この面の東側に偏在させる
ように規模を縮小した不整
円形となり、最深部に至る。

遺構確認面における径は
3.48m前後であり、遺構中位
以下の径は1.3m前後である。

覆土は、半截掘削出来る
範囲において12層に分けら
れた。第1層が楔状に垂下
し、以下の層も呼応するか
のように、安定角度を超え
る傾斜を有している。本跡



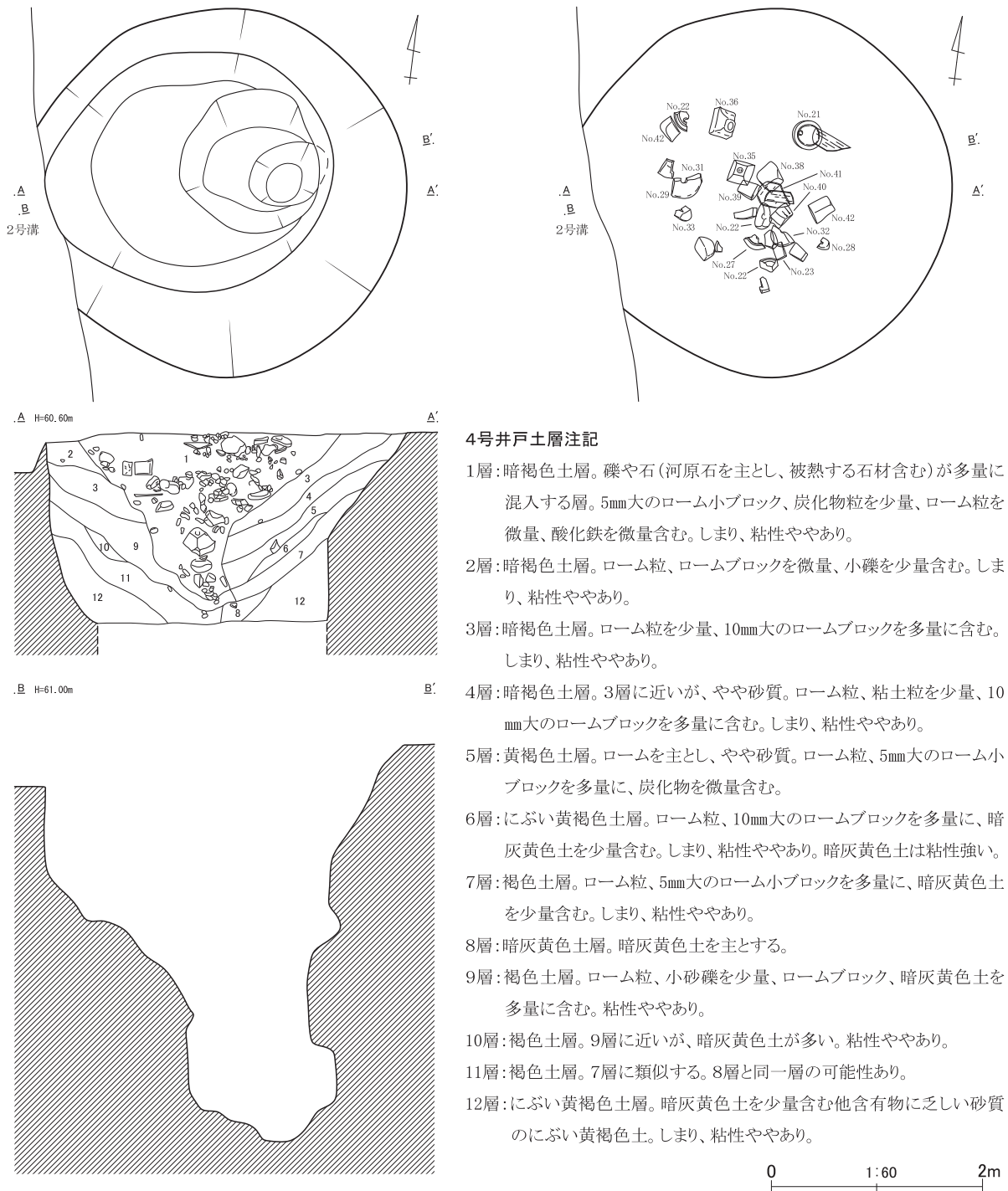
3号井戸土層注記

- 1層: 褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロック、炭化物粒を少量、焼土を微量、AS-Aを多量に含む。粘性やや弱い。
- 2層: 暗褐色土層。ローム粒を微量、10mm大のロームブロック、焼土、AS-Aを少量、20mm大の炭化ブロックを多量に含む。しまりややあり、粘性やや弱い。
- 3層: 暗褐色土層。ローム粒、10mm大の炭化物ブロックを少量、30mm大のロームブロックを多量に、焼土、AS-Aを微量含む。しまりややあり、粘性やや弱い。
- 4層: 暗褐色土層。ローム粒、30mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。
- 5層: 暗褐色土層。ローム粒、20mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 6層: 黒褐色土層。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量、10mm大の炭化ブロックを多量に、焼土を微量含む。しまりやや弱く、粘性ややあり。シルト質。
- 7層: 黒褐色土層。ロームブロックを微量、炭化物粒を少量含む。しまりやや弱く、粘性あり。シルト質。

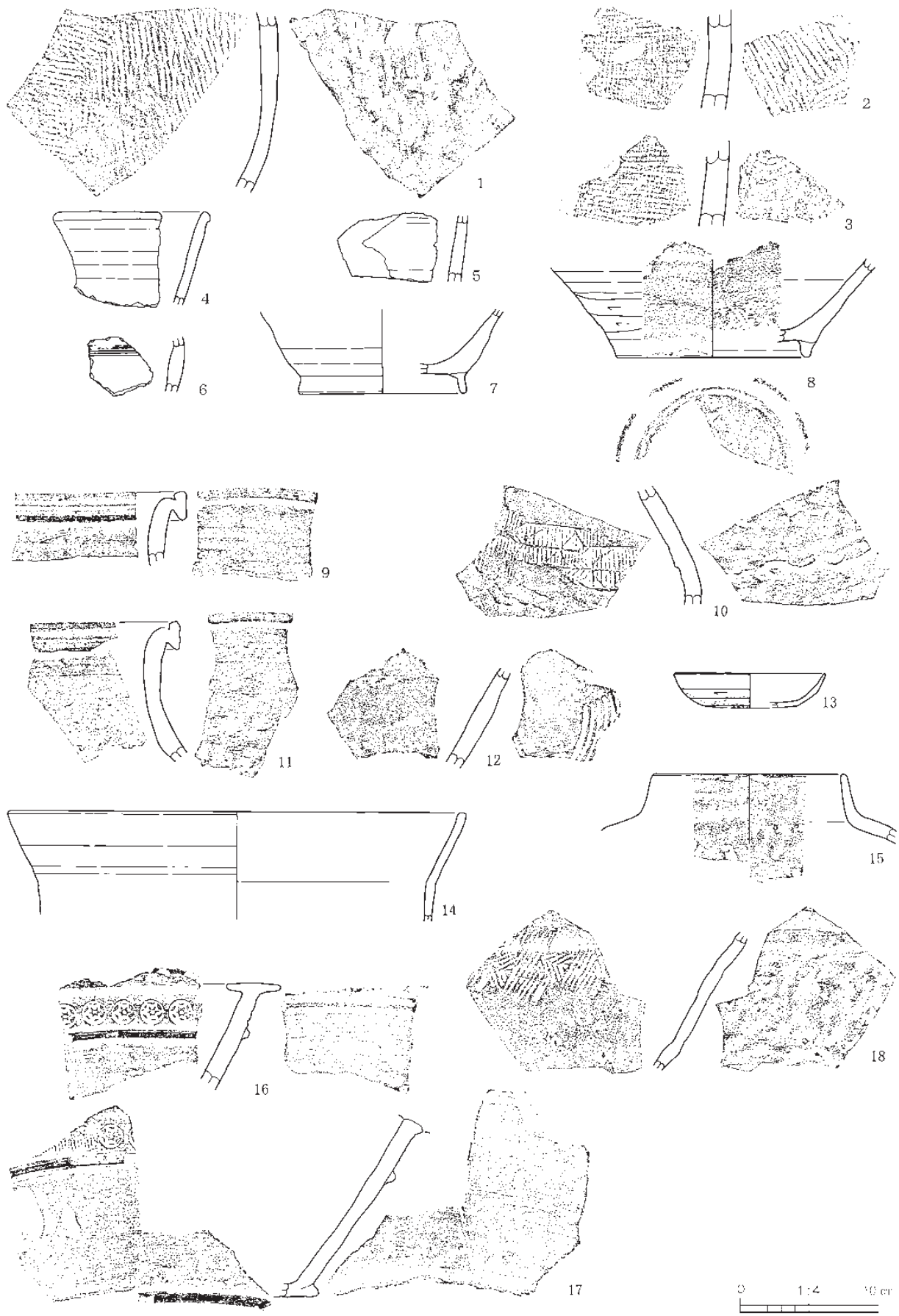
第175図 3号井戸跡平面・断面図

久下東遺跡

覆土は埋め戻したものと考えられ、最終的に第1層土と共に五輪塔や石臼、礫石等を大量に投棄した結果、中心部付近はその重量によって沈降し、それに伴い下層土も引き込まれるように傾斜したものと考えられる。下位の土層は砂礫を主体としており、中位平坦部の崩落土層であった。出土遺物は、山茶碗窯系、常滑窯系大甕、在地産片口鉢、同土師質土器皿、石臼、茶臼、五輪塔、板碑破片等であり、13世紀代から16世紀代に及ぶものであり、上層の投棄遺物は、15世紀代から16世紀代のものを中心とするものであった。



第176図 4号井戸跡平面・断面図



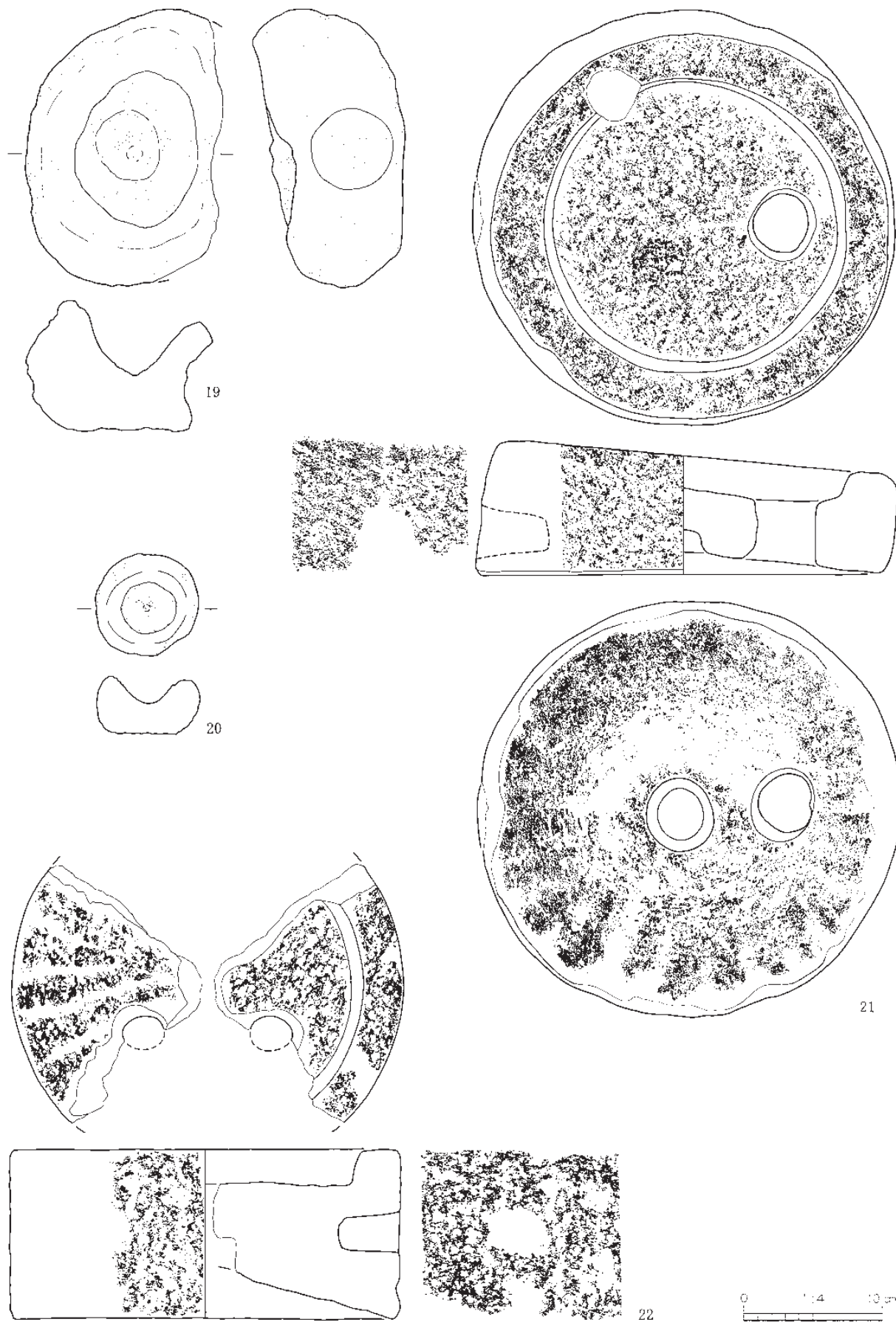
第177图 4号井戸跡出土遺物(1)

第60表 4号井戸跡出土遺物観察表(1)

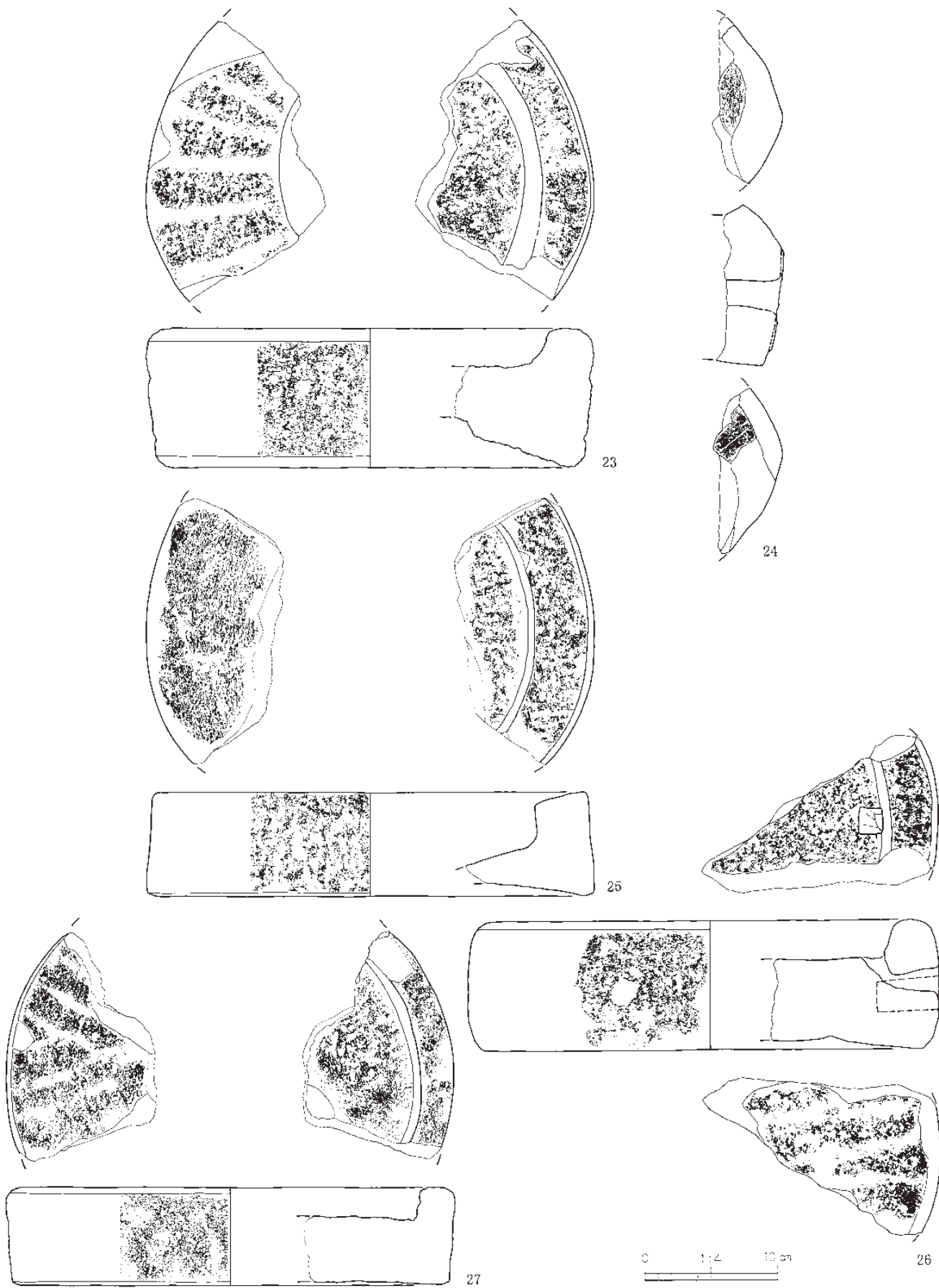
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 底径 器高 — — —	丸みを持つ胴部。	外面－平行タタキ。内面－無文の当具痕。	黒色粒・白色粒 内外－灰オリブ色	胴部片
2	甕	口径 底径 器高 — — —	わずかに丸みを持つ胴部片。	外面－擬格子目タタキ。内面－平行当具痕。	チャート・黒色粒 内外－灰色	胴部片
3	甕	口径 底径 器高 — — —	胴部片。	外面－擬格子目タタキ。内面－同心円状の当具痕。	黒色粒・白色粒 内外－灰色	
4	鉢	口径 底径 器高 — — —	体部はわずかに彎曲し、口縁部はやや肥厚する。	ロクロ整形。内面に灰釉施釉。	石英・チャート 内－灰色 外－灰白色	口縁部～体部上位片
5	(壺)	口径 底径 器高 — — —	直線的な胴部片。	ロクロ整形。外面に灰釉。	堅緻 内－灰白色 外－灰オリブ色	胴部片
6	(碗)	口径 底径 器高 — — —	丸みを持つ体部片。	外面－櫛描き4条線。灰釉。内面－指ナデ。	チャート、堅緻 内－灰白色 外－灰オリブ色	体部片
7	鉢	口径 底径 器高 (12.1) — —	やや彎曲して立ち上がる。足高の高台が付く。	外面－ナデ。内面－ナデ、平滑。	石英・チャート 内外－灰色	体部下位～高台部片
8	鉢	口径 底径 器高 (13.9) — —	外反気味に立ち上がる体部。高台が付く。	外面－回転ナデ、体部下位ヘラケズリ。内面－磨滅のため調整不明瞭。	石英・チャート 内外－黒褐色	片口鉢か体部下位～高台部1/3残存
9	甕	口径 底径 器高 — — —	N字状口縁。	口縁部ロクロ整形。	石英・チャート 内外－黒褐色	常滑口縁部片
10	甕	口径 底径 器高 — — —	胴部上位と思われる破片。	外面－押印文。内面－無文の当具痕、ナデ。	石英・チャート 内－灰黄褐色 外－にぶい黄褐色	常滑胴部片
11	甕	口径 底径 器高 — — —	N字状口縁。	口縁部ロクロ整形。	石英・チャート 内外－暗オリブ褐色	常滑口縁部～胴部上位片
12	搦鉢	口径 底径 器高 — — —	直線的に開く体部。	外面－ナデ。内面ナデ。すり目は深い櫛描きで5条以上。	チャート・黒色粒 内－黄灰色 外－にぶい黄褐色	体部片
13	皿	口径 底径 器高 (11.0) (6.9) 2.5	彎曲気味に立ち上がる体部。ロクロ整形。	外面－口縁部回転ナデ、体部～底部回転ヘラケズリ。内面－回転ナデ。内面及び外面口縁部に錆釉。	石英、堅緻 施釉－暗赤褐色	1/2残存
14	鍋	口径 底径 器高 (33.0) — —	わずかに彎曲して立ち上がる口縁部。	外面－口縁部回転ナデ。内面－口縁部回転ナデ。	片岩・チャート 内外－黒色	口縁部片
15	短頸壺	口径 底径 器高 (14.0) — —	内傾して立ち上がる口縁部。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、くびれ部に指頭圧痕。	片岩・チャート 内外－オリブ黒色	口縁部片
16	火鉢	口径 底径 器高 — — —	口縁部は内外の水平方向に延びる。口縁部下に突帯が巡る。	外面－回転ナデ。上位に重星状の押印文。内面－回転ナデ。	片岩・チャート 内－灰色 外－灰オリブ色	口縁部～体部上位片
17	火鉢	口径 底径 器高 — — —	底部は外方に突出。外面に突帯が巡る。	外面－回転ナデ。上位に重星状の押印文。内面－回転ナデ。	チャート・黒色粒 内－灰色 外－にぶい黄色	体部片
18	甕	口径 底径 器高 — — —	胴部下位と思われる破片。	外面－ナデ。平行及び矢羽根状の押印文。内面－無文の当具痕。	石英・チャート 内外－オリブ黒色	胴部片

第61表 4号井戸跡出土遺物観察表(2)

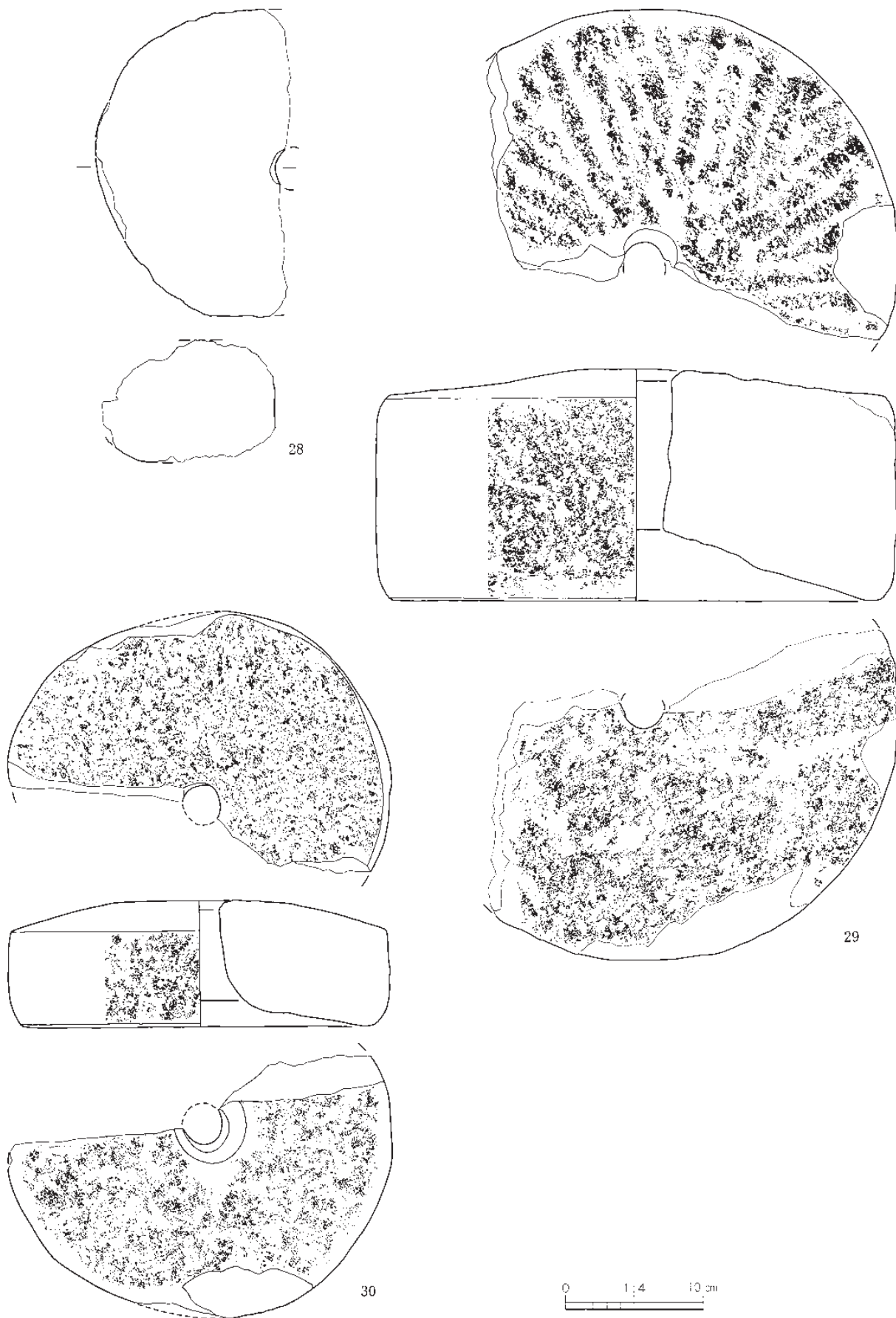
No.	器種	法量 (cm・kg)	形態・成整形の特徴	胎土・色調	備考
19	凹石	長さ 幅 厚 重 19.9 14.0 5.5 2.0	自然石の表面と側面の2ヶ所に凹みを有する。側面の凹みはやや浅い。	角閃石安山岩	一部欠損
20	凹石	長さ 幅 厚 重 7.4 7.4 4.6 0.1	自然石の表面に凹みを有する。	角閃石安山岩	ほぼ完形
21	石白	径 高 重 30.3 9.6 8.9	丁寧な整形。側面に方形の挽木穴あり。挽面は磨耗し、偏減りする。	粗粒安山岩	挽面一部欠損
22	石白	径 高 重 (28.0) 12.2 2.2	供給口の一部を残す。側面に方形の挽木穴あり。挽面は目が残る。	安山岩	
23	石白	径 高 重 (33.0) 10.2 2.2	丁寧な整形。ふくみはやや大きい。挽面には目が残る。	粗粒安山岩	
24	石白(茶白)	径 高 重 — 11.8 0.6	上面は丁寧な磨き整形。側面に方形の挽木穴を有し、円形の額(座)を持つ。挽面は目が残る。	角閃石安山岩	
25	石白	径 高 重 (33.0) 7.7 1.3	側面はやや荒れる。ふくみはやや浅い。挽面は磨耗し、目はほとんど残らない。	粗粒安山岩	
26	石白	最大径 器高 重 (33.8) 9.5 1.4	上縁部は丁寧な整形。上面から側面に貫通する方形基調の穴あり。側面に挽木穴の一部残る。挽面は目が残る。	角閃石安山岩	



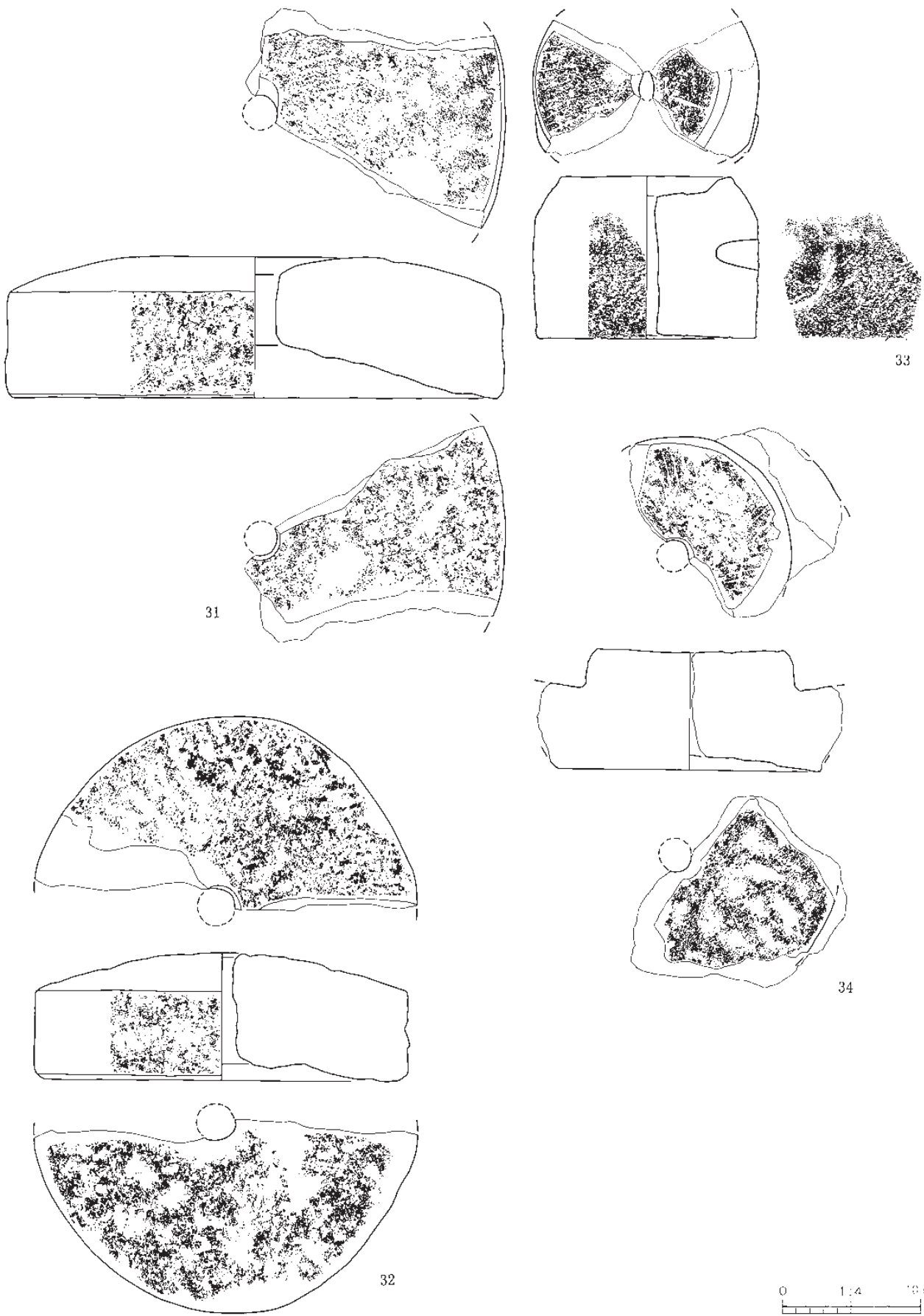
第178図 4号井戸跡出土遺物(2)



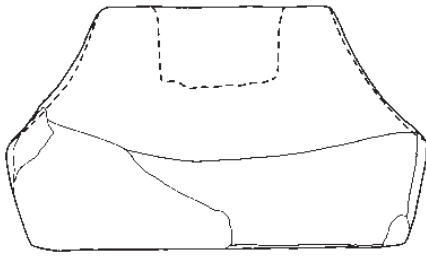
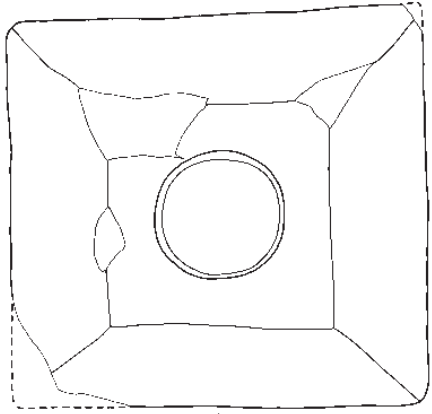
第179図 4号井戸跡出土遺物(3)



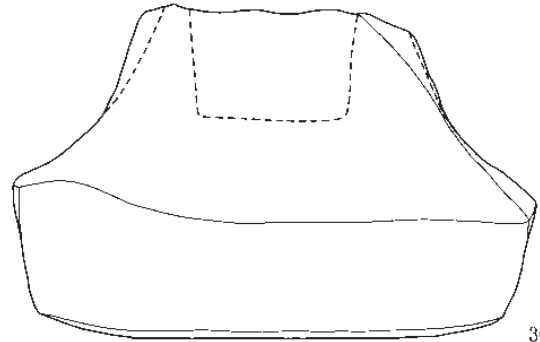
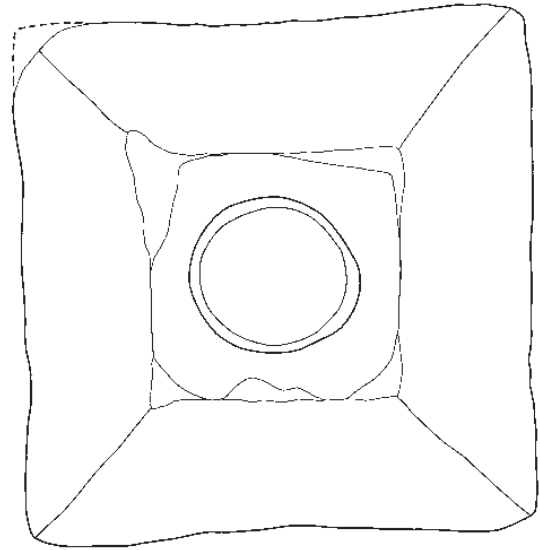
第180図 4号井戸跡出土遺物(4)



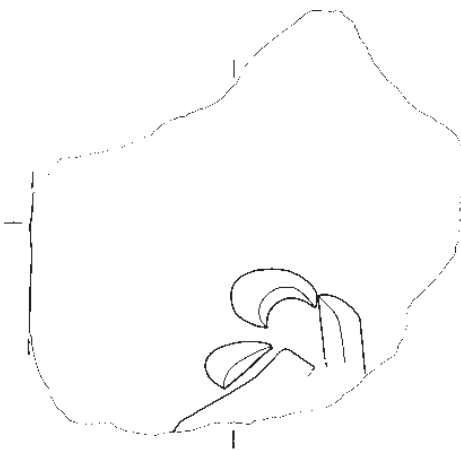
第181図 4号井戸跡出土遺物(5)



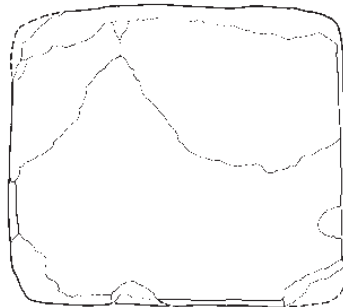
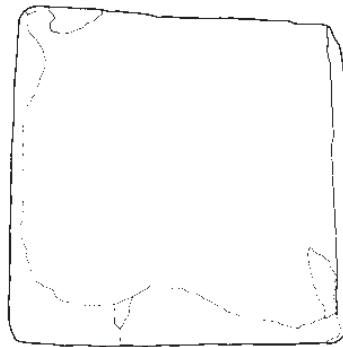
35



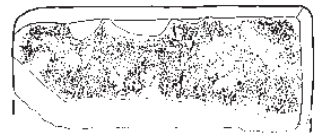
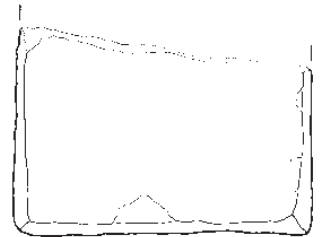
36



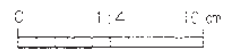
37



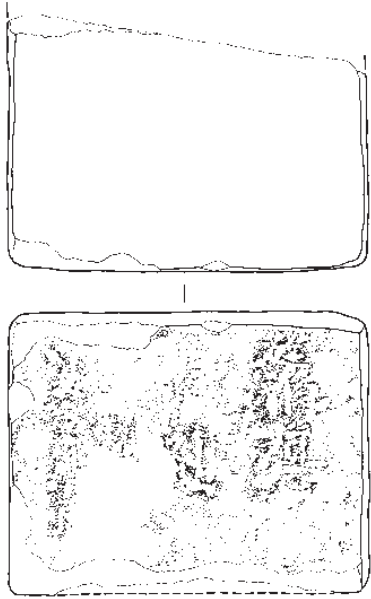
38



39

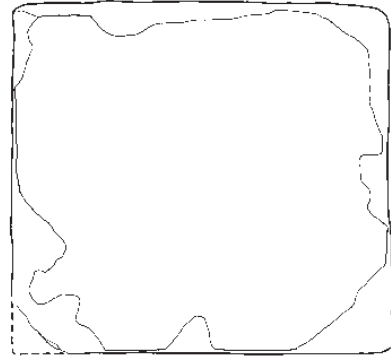


第182図 4号井戸跡出土遺物(6)



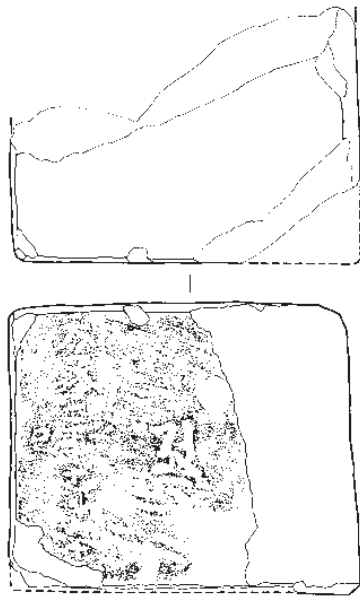
40

逆修道「**引**」
 癸年九
 天文二〇十月〇〇
 (巨カ)



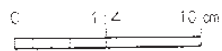
41

妙心禪尼
引



42

癸年九
 天文二〇十月十〇
引
 巳



第183図 4号井戸跡出土遺物(7)

前述遺物のうち、五輪塔の地緯の中には、銘文入りのものがある。これらのうちの二基（第183図40・41）には、「天文二年十月」（1533年）の紀年があり、前者には「逆修道〇」と刻まれている。「逆修道」は生前造墓を示し、「道〇」は名前（出家名）を表すものであり、同紀年のこの2個体は、夫婦のものである可能性が高いと考えられる。

上述したものを含め、五輪塔の各遺物は共に被熱し、表面の赤化が顕著である。この為これらの遺物は、偶発ないし戦乱等によって罹災したものと考えられる。偶発的な火災にかかる被熱の場合においても、その子孫あるいは血縁者によつての、同族の墓石の廃棄行為は、これに代わる新たな墓石等の作製を前提としなければ考え難いものである。本遺構における廃棄行為を、血縁的結合の断絶に起因を求めらば、当地域における支配層の交代を想起させるものであろう。

第62表 4号井戸跡出土遺物観察表(3)

27	石白 上白	最大径 器高さ 重さ	(33.0) 7.2 1.2	丁寧な整形。ふくみは浅い。挽面はやや磨耗するが、目が残る。	粗粒安山岩	
28	石白 下白	径器 高さ 重さ	22.0 8.8 1.3	形状はややいびつで、部分的に工具痕残る。目は残らない。	角閃石安山岩	1 / 2 残存
29	石白 下白	径器 高さ 重さ	(37.4) 16.6 12.2	比較的丁寧な整形だが、所々で剥落する。	粗粒安山岩	1 / 3 残存
30	石白 下白	径器 高さ 重さ	27.2 9.0 5.4	比較的丁寧な整形だが、器面やや荒れる。挽面は磨耗し、目は残らない。	粗粒安山岩	1 / 2 残存
31	石白 下白	径器 高さ 重さ	(36.0) 10.1 2.3	側面は比較的丁寧な整形。ふくみはやや大きい。挽面は磨耗し、目は残らない。	角閃石安山岩	
32	石白 下白	径器 高さ 重さ	(27.0) 9.2 4.0	側面は丁寧な整形。ふくみはやや浅い。挽面は磨耗し、目はほとんど残らない。	粗粒安山岩	1 / 2 残存
33	石白 下白	径器 高さ 重さ	(16.2) 11.6 0.6	茶臼形。上面及び側面は丁寧な整形。側面に方形の挽木穴を有し、円形の額(座)を持つ。挽面はやや磨耗し、目が不明瞭。	粗粒安山岩	
34	石白 下白	径器 高さ 重さ	- 8.7 1.6	茶臼形。挽面はやや磨耗・欠損し、一部に目が残る。	粗粒安山岩	
35	五輪塔 火輪	幅 高さ 重さ	21.5 12.8 7.5	形状は均整がとれ、四隅はやや反る。整形は良好で、表面を磨く。	安山岩	一部欠損
36	五輪塔 火輪	最大幅 高さ 重さ	28.0 17.7 8.6	形状は均整がとれ、四隅はやや反る。整形は良好で、表面を磨く。	角閃石安山岩	ほぼ完形
37	板碑	長さ 幅 厚さ	- 22.7 2.9	葉研彫り阿弥陀如来種子の一部残る。	緑泥片岩	
38	(五輪塔) (地輪)	長さ 幅 厚さ 重さ	18.0 17.9 15.6 7.0	被熱あり。	安山岩	4 / 5 残存
39	(五輪塔) (地輪)	長さ 幅 厚さ 重さ	- 15.9 6.6 1.5	縁は面取りされる。一部被熱あり。	凝灰岩	
40	五輪塔 地輪	長さ 幅 厚さ 重さ	(14.5) 16.5 16.0 6.8	銘文「逆修道[]」「天文二〇十月〇〇」、胎藏界大日如来種子残る。	凝灰岩	2 / 3 残存
41	五輪塔 地輪	長さ 幅 厚さ 重さ	18.5 20.0 15.4 9.1	銘文「妙心禅尼」、胎藏界大日如来種子残る。一部被熱あり。	凝灰岩	一部欠損
42	五輪塔 地輪	長さ 幅 厚さ 重さ	15.4 18.7 - 3.7	銘文「天文二〇十月十日」、胎藏界大日如来種子残る。	凝灰岩	2 / 3 残存

5号井戸跡(第184・185図、第63、図版68・81)

調査地点の南縁近くの西側で検出した遺構である。65号住居跡の北東コーナー付近壁部分を切って掘削している。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。遺構確認面における平面形は、不整円形であるが、遺構中位において規模を縮小した不整円形となり、最深部に至る。底部やや上位にオーバーハング気味の部分を有するが、この部分は湛然状態および渇水期における水面上面に相当し、水位の上下による崩落部分であり、後述する下位の砂礫を主体とした覆土が対応されよう。確認面における径は2.4m前後、遺構中位における径90cm前後、底径およそ50cmである。遺構確認面から底部までの深さは4.65mであり、底部付近は礫層を掘り抜いている。

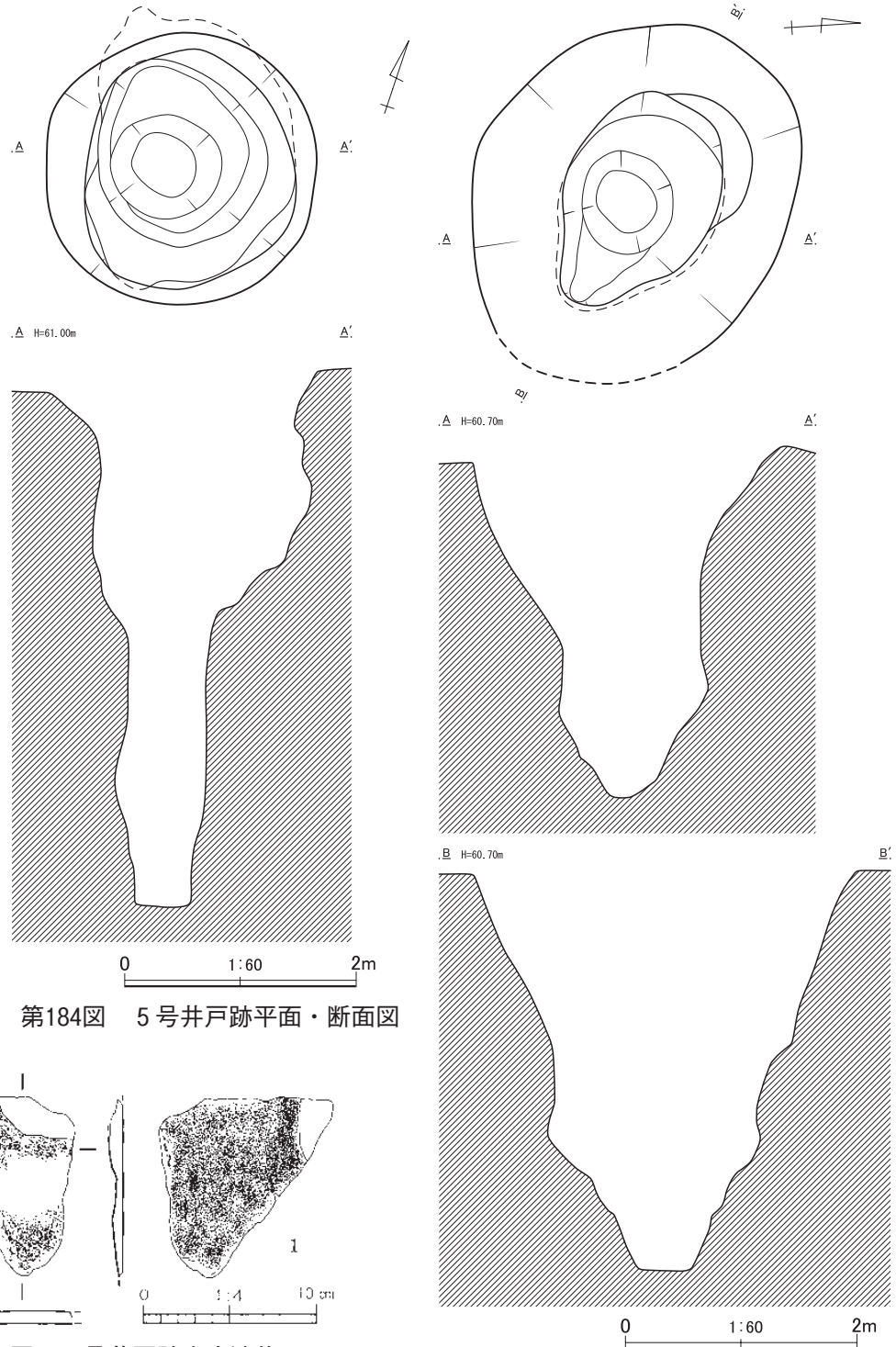
覆土は、半截掘削出来る範囲において分層し観察・図化を試みたが、図化前に観察面にクラックが生じ作業上危険と判断されたため、断念せざるを得なかった。観察による土層は、上位層から中位までは褐色土を主体としローム塊を含むものであり、人為的間埋没と判断されるものであり、下位は砂礫を主体とする崩落層であった。出土遺物は、板碑片が検出されており、覆土から中世の遺構と考えられる。

6号井戸跡（第186図、図版68）

調査地点の中央の北寄り付近で検出した遺構である。南東部の一部を近世の土坑によって切られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。遺構確認面における平面形は、北西-南東方向に長軸を有する不整長楕円形であるが、遺構下位において規模を縮小した不整円形となり、最深部に至る。確認面における主軸

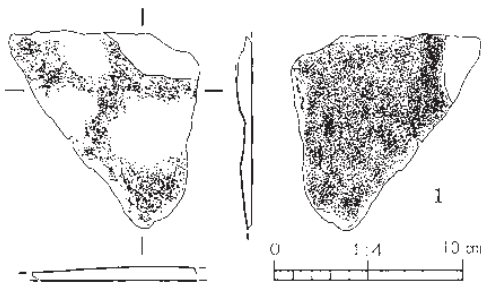
長は3.32m、短軸長は2.73m、長軸方位はN-51°-Wを測り、底部径は1.05m前後である。遺構確認面から底部までの深さは3.5mである。

覆土は、5号井戸と同様に、図を示すことが出来ないが、褐色土、ローム、砂礫を主体とした埋め戻し土である。ローム・砂礫の混入が多いことから、地山を崩壊させつつ埋め戻したものと考えられる。遺物の検出はなく、覆土から中世の遺構と考えられる。



第184図 5号井戸跡平面・断面図

第186図 6号井戸跡平面・断面図



第185図 5号井戸跡出土遺物

第63表 5号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm・g) / 形態・成整形の特徴	胎土・色調	備考
1	(板碑)	長さ：(10.5) 幅：(10.1) 厚さ：(0.7) 重さ81.9。一面に工具痕らしき痕跡あり。	緑泥片岩	

5 土 坑

10号土坑（第187図、図版68）

調査地点の南西端近くで検出した遺構である。周辺は、近世以降の攪乱が多数見られ、攪乱の底で辛うじて確認することができた。

平面形は、やや不整な長楕円形である。長径は167cm、短径は88cm、長軸方位は、 $N-90^{\circ}-W$ である。南北方向での断面形は、鍋底状で、底面は比較的平坦である。最深部での深さは、25cmである。覆土は3層で、いずれも炭化物を微量含む暗褐色土、暗灰色土である。1・2層は、ロームブロックを顕著に含む埋め戻された土のようである。

遺物は、出土していないが、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

16号土坑（第187図、図版68）

調査地点の北西縁沿い、北端近くで検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は円形で、最大径は104cmである。断面形は、鍋底形で、底面はほぼ平坦である。中央での深さは、25cmである。覆土は3層で、いずれも炭化物を微量含む暗褐色土、褐色土であった。

遺物は、出土していないが、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

17号土坑（第187図、図版69）

調査地点の南縁近く、中央部やや西寄り検出した遺構である。7号溝を切って造られている。確認面は、灰色みを帯びたローム層上面である。

平面形は、ほぼ円形で、上端での最大径は60cmである。断面形は、臼状で、北東側を除いて、上端より底面がひと回り大きく造られている。底径は、77cm、中央での深さは、75cmである。覆土は、5層に分けられた。いずれも硬くしまり、粘性のある暗灰色土、暗褐色土で、埋め戻された土と見てよいかと思う。

遺物は、ほとんど出土していないが、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

18号土坑（第187図、図版69）

調査地点の東縁近く、中央部やや南よりで検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、楕円形である。長径は96cm、短径は65cm、長軸方位は、 $N-103^{\circ}-W$ である。長軸方向での断面形は、大小の椀が連結したような形状で、底面には凹凸が著しい。最深部での深さは、29cmである。覆土は、7層に分けられた。1～6層は、暗褐色土、7層は、にぶい黄褐色土で、いずれの層にも、多寡はあれ、ロームブロックが含まれるようである。

遺物は、出土していないが、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。あるいは、7号溝に関連する遺構である可能性もある。

19号土坑（第187図、図版69）

調査地点の東縁近く、中央部やや南よりで検出した遺構である。4号溝により西壁～北壁を壊されてお

久下東遺跡

り、東壁の一部を時期不明の小ピットにより壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、長楕円形である。いずれも推定値になるが、長軸長は198cm前後、短軸長は98cm前後である。長軸方位は、N-3°-Eあたりになりそうである。縦断面形は、船底形に近いが、底面には凹凸が著しい。最深部での深さは、25cmである。覆土は1層で、少量ではあるが、As-Aが含まれる。

遺物は、出土していないが、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

20号土坑（第187図、図版69）

調査地点の東縁近く、中央部南寄りで検出した遺構である。23号土坑と南東側で接しているが、重複関係にはない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形はやや不整な円形で、最大径は108cmである。断面形は、U字状に近く、底面は丸みをもっている。中央最深部での深さは、52cmである。覆土は、5層に分けられた。いずれもロームブロックを含む暗褐色土で、上層の1～3層は、As-Aを含む。全体に不規則な堆積状態を示し、埋め戻された土とも見られる。

遺物は、出土していないが、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

21号土坑（第188図、図版69）

調査地点の南縁近く、中央部やや西寄りで検出した遺構である。7号溝が遺構中央を南北に貫いている。確認面は、灰色みを帯びたローム層上面である。

平面形は、やや不整な円形で、東西方向での径は155cm、南北方向での径は137cmである。断面形は、歪な矩形で、とくに北東～南東側の壁は、垂直に近く立ち上がる。中央最深部での深さは、73cmである。底面には、凹凸が著しい。覆土は2層で、掘削土かと思われる白色粘土のブロックを含む暗灰色土である。埋め戻された土と見られる。

遺物は、出土していないが、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

22号土坑（第188図、図版69）

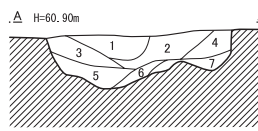
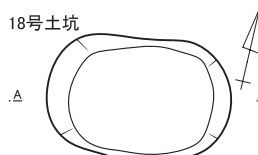
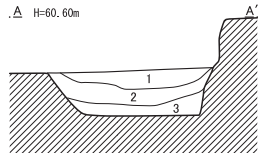
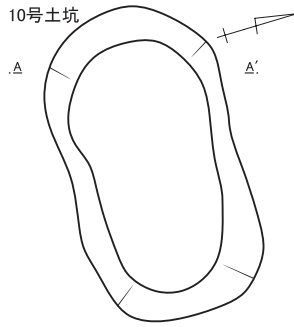
調査地点の南東半で検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

1基の土坑として精査したが、最終的に2基の土坑の重複例であることが判明したため、南側の古い土坑を22a号土坑、北側の新しい土坑を22b号土坑と呼び分け、記載する。

22a号土坑の平面形は、楕円形である。長径は推定値で98cm前後、短径は64cm、長軸方位は、N-10°-Eである。断面形は、現存部分では、鍋底形に近く、最深部での深さは、33cmである。底面には凹凸が著しく、図化していないが、中央に小ピット状の掘り込みがあったようである。覆土は3層で、1層は柱根様の痕跡になる。周辺のピットとの並びを検討したが、明瞭な配列を示す並びを見出すことはできなかった。なお、1層には、As-Aが含まれる。

22b号土坑の平面形は、やや不整な円形で、最大径は48cmである。断面形は、U字状に近く、中央最深部での深さは、68cmである。覆土は3層で、上層の4層には、As-Aが含まれる。

22a・b号土坑に伴う遺物はないが、覆土から見て、どちらも近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。



18号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 2層:暗褐色土層。5~30mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 3層:暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 4層:暗褐色土層。5mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 5層:暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。
- 6層:暗褐色土層。5mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 7層:にぶい黄褐色土層。5~30mm大のロームブロックの純層。粘性あり。

10号土坑土層注記

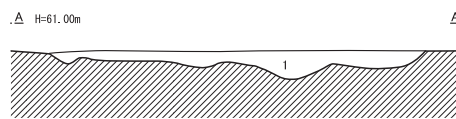
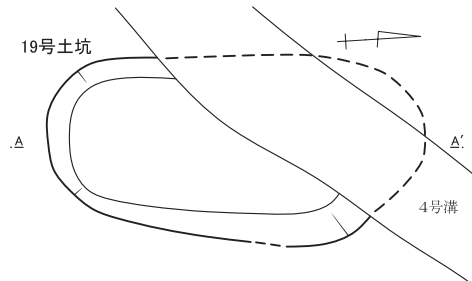
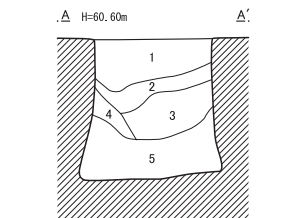
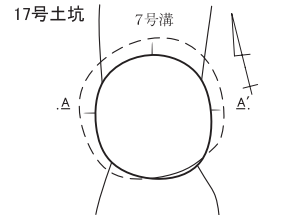
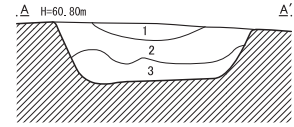
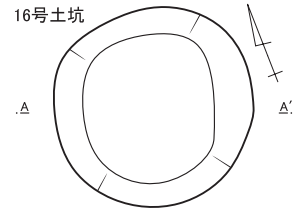
- 1層:暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。粘性あり。
- 2層:暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含み、炭化物粒を微量含む。粘性あり。
- 3層:暗灰色土層。炭化物粒を微量含む。粘性あり。

16号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。ローム粒、炭化物を微量含む。粘性ややあり。
- 2層:暗褐色土層。ローム粒を少量、10mm大のロームブロック、焼土粒を微量含む。粘性ややあり。
- 3層:褐色土層。ローム粒を多量に、5mm大のローム小ブロック、炭化物を微量含む。粘性あり。

17号土坑土層注記

- 1層:暗灰色土層。5~10mm大のロームブロック、炭化物粒を少量含む。硬くしまり、粘性あり。
- 2層:暗灰色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に含む。硬くしまり、粘性あり。
- 3層:暗灰色土層。5~10mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。硬くしまり、粘性あり。
- 4層:暗褐色土層。ローム粒、5~10mm大のロームブロック、炭化物粒を少量含む。硬くしまり、粘性あり。
- 5層:暗灰色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。硬くしまり、粘性あり。

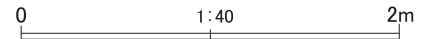
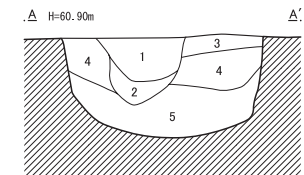
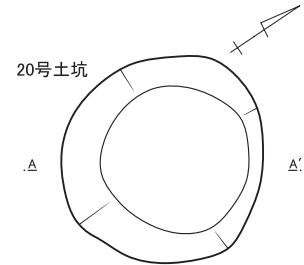


19号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。5mm大のロームブロック、2mm大のAS—Aを少量含む。粘性ややあり。

20号土坑土層注記

- 1層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大のAS—Aをかなり含む。粘性ややあり。
- 2層:暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック、2mm大のAS—Aを少量含む。粘性ややあり。
- 3層:暗褐色土層。5~10mm大のロームブロック、2mm大のAS—Aを少量含む。粘性弱い。
- 4層:暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 5層:暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。



第187図 10・16~20号土坑平面・断面図

久下東遺跡

23号土坑（第188図、図版69）

調査地点の東縁近く、中央部南寄りで検出した遺構である。20号土坑と北西側で接しているが、重複関係にはない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、丸みの強い隅丸長方形である。長軸長は172cm、短軸長は118cm、長軸方位は、N-42°-Wである。長軸方向での断面形は、船底形で、四壁はかなり急峻に近く立ち上がる。底面は、北西側に向かってわずかに傾斜する。北西壁寄りの最深部での深さは、23cm、南東壁寄りでの深さは、15cmである。覆土は2層で、1・2層ともにAs-Aを含む。

遺物は検出できなかったが、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と思われる。

24号土坑（第188図、図版69）

調査地点の中央部、東縁際で検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形はかなり不整な円形で、最大径は59cmである。断面形は、おおむねU字状に近いが、底面は北側に向かって著しく傾斜している。北壁寄りの最深部での深さは、67cm、南壁寄りでの深さは、54cmである。覆土は3層で、いずれもロームブロックを含む暗褐色土である。

遺物は出土していないが、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

25号土坑（第188図、図版70）

調査地点の南東半で検出した遺構である。4号溝と北西端で接しているが、重複関係にはない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや歪な隅丸長方形である。長軸長は81cm、短軸長は55cm、長軸方位は、N-30°-Eである。長軸方向での断面形は、鍋底形に近いが、底面は著しく凸凹している。中央最深部での深さは、28cmである。覆土は4層で、にぶい黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土からなり、全体にロームブロックや焼土粒、炭化物粒を不規則に含むようである。なお、上層の1・2層には、As-Aが含まれる。

遺物は検出できなかったが、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と思われる。

26号土坑（第188図、図版70）

調査地点の南東半で検出した遺構である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

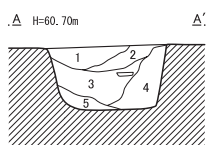
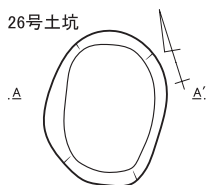
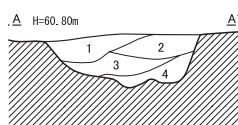
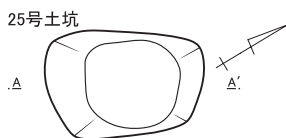
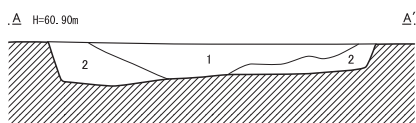
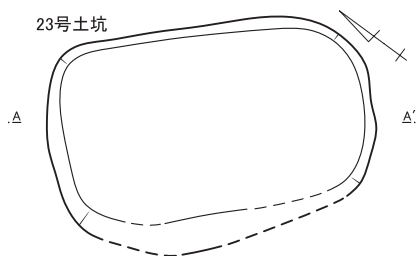
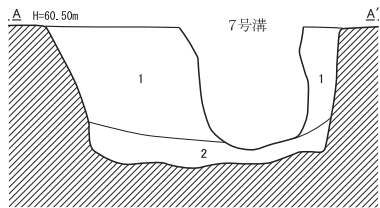
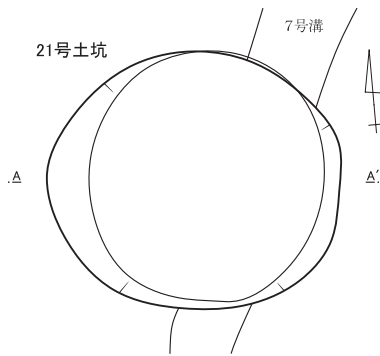
平面形は、楕円形で、長径は81cm、短径は63cmである。長軸方位は、N-18°-Eである。断面形は、U字状で、中央最深部での深さは、40cmである。覆土は、5層に分けられた。1・2層は、As-Aを含み、1・3～5層は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土、にぶい黄褐色土である。埋め戻された土と見てよいであろう。

遺物は検出できなかったが、覆土から見て、近世、あるいはそれ以降の遺構と思われる。

27号土坑（第189図、図版70）

調査地点の東縁近く、中央部南寄りで検出した遺構である。4号溝に切られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや不整な円形で、最大径は123cmである。断面形は、鍋底形に近く、最深部での深さは、



21号土坑土層注記

- 1層: 暗灰色土層。5~10mm大の白色粘土ブロックをかなり含み、砂粒を少量含む。粘性強い。
- 2層: 暗灰色土層。5~10mm大のロームブロック、白色粘土ブロックをかなり含む。粘性強い。

22a・b号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~20mm大のロームブロック、2mm大のAS—Aを少量含む。しまり、粘性弱い。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。粘性弱い。
- 3層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 4層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、AS—Aを少量含む。粘性弱い。
- 5層: 暗褐色土層。5~50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 6層: 黒褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。粘性弱い。

23号土坑土層注記

- 1層: にぶい黄褐色土層。5~20mm大のロームブロック、2mm大のAS—Aをかなり含み、焼土粒を微量含む。粘性ややあり。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大のAS—Aを少量含む。粘性あり。

24号土坑土層注記

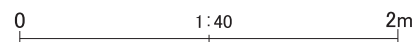
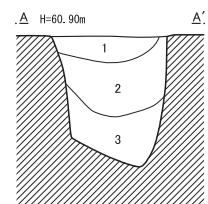
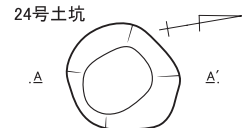
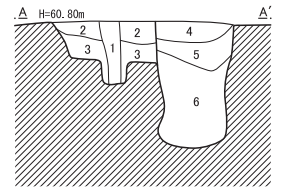
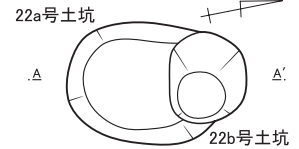
- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性弱い。
- 2層: 暗褐色土層。5~50mm大のロームブロックをかなり含む。粘性弱い。
- 3層: 暗褐色土層。5~40mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。

25号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大のAS—A、焼土粒を少量含む。
- 2層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含み、2mm大のAS—A、焼土粒を少量含む。粘性ややあり。
- 3層: 黒褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 4層: にぶい黄褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

26号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを多量に、焼土粒を微量、2mm大のAS—Aを少量含む。粘性弱い。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、2mm大のAS—Aを少量、炭化物粒を微量含む。粘性弱い。
- 3層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを多量に含む。しまりややあり、粘性弱い。
- 4層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 5層: にぶい黄褐色土層。ロームブロックを多量に含む。粘性あり。



第188図 21~26号土坑平面・断面図

久下東遺跡

43cmである。覆土は3層で、いずれもロームブロックを含む暗褐色土である。

遺物は出土していないが、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

29号土坑（第189図、図版70）

調査地点の南東半で検出した遺構である。74号住居跡と重複し、同住居跡に南東半の壁上部を壊されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形はやや角張った楕円形で、長径は92cm、短径は74cm、長軸方位は、N - 3° - Eである。断面形は、歪な矩形で、南東側がやや深くなっている。覆土は、4層に分けられた。1・2層は、ロームブロックをかなり含み、下層の4層は、ロームが主になる。

遺物は出土していないが、覆土、および重複関係から見て、古墳時代後期以前の遺構である。

30号土坑（第189図、図版70）

調査地点の中央部、やや南東寄りで検出した遺構である。3号溝と東端で接しているが、重複関係にはない。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、やや不整な円形で、最大径は80cmである。断面形は、矩形に近いが、壁はやや丸みをもって掘り込まれている。最深部での深さは、47cmである。覆土は、5層に分けられた。にぶい黄褐色土の4層以外は、いずれも暗褐色土で、3～5層には、ロームブロックが多量に含まれる。全体に埋め戻された土と見てよいであろう。

遺物は出土していないが、覆土から見て、中世、あるいはそれ以降の遺構であろう。

33号土坑（第189図、図版70）

調査地点の中央部、やや南東寄りで検出した遺構である。3号溝と重複し、同溝に切られている。確認面は、3号溝の溝壁のローム層である。

平面形は、丸みの強い隅丸方形で、南北方向での最大長は、60cmである。西側に大きく斜行して先細り状に掘り込まれている。垂直軸での深さは、116cmである。覆土は、観察することができなかった。

3号溝との重複関係から、中世、あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

40号土坑（第189図、図版70）

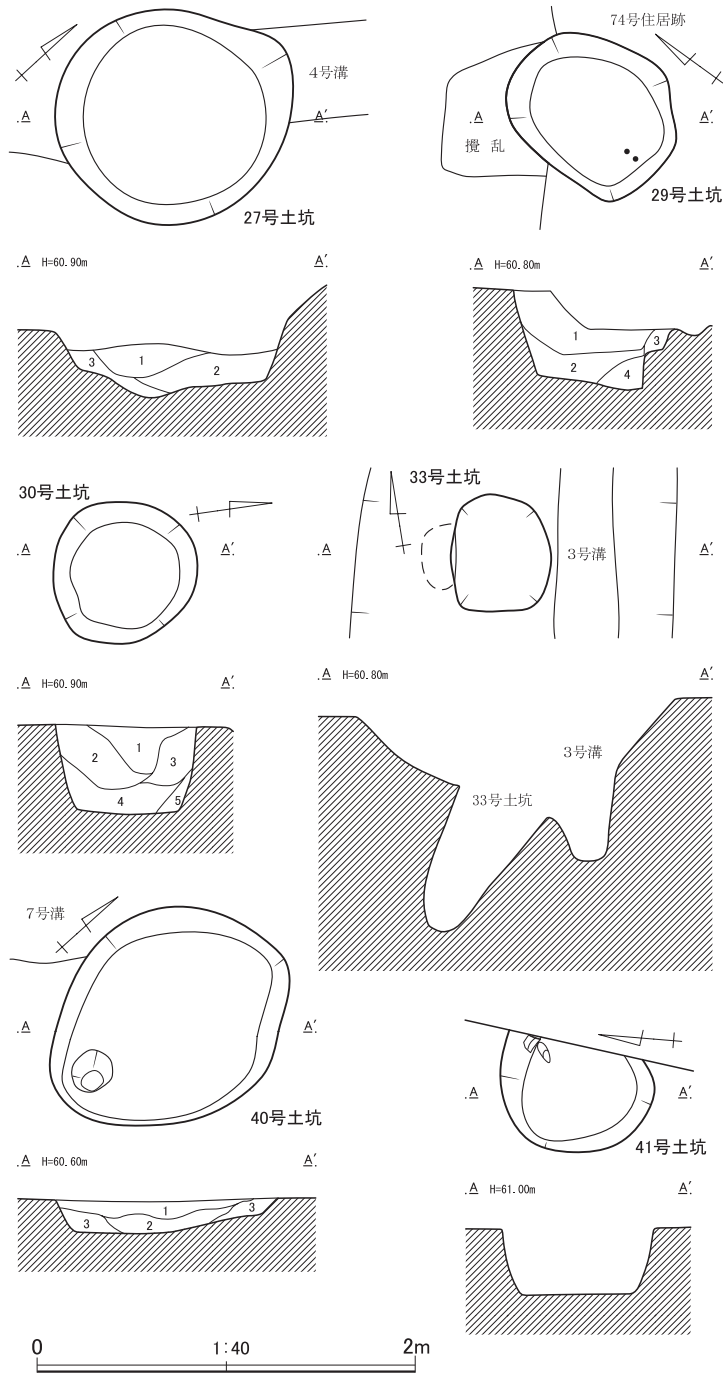
調査地点の南西半の中央で検出した遺構である。7号溝と重複し、同溝を切って造られている。確認面は、灰色みを帯びたローム層上面である。

平面形はかなり歪んだ楕円形、円形で、最大径は、118cmである。断面形は、船底形に近く、南側がやや深くなっている。南壁近くの底面には、小ピットが穿たれている。覆土は3層で、いずれもローム小ブロックを含む暗灰色土である。

7号溝との重複関係から、中世、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

41号土坑（第189図）

調査地点の東縁沿い、やや南寄りの位置で検出した遺構である。1号掘立柱建物跡と重複するが、



第189図 27・29・30・33・40・41号土坑平面・断面図

27号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 2層: 暗褐色土層。5~30mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 3層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。

29号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。焼土粒を微量含む。粘性ややあり。
- 2層: 黒褐色土層。5~30mm大のロームブロックをかなり含む。焼土粒を微量含む。粘性ややあり。
- 3層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 4層: にぶい黄褐色土層。5~50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

30号土坑土層注記

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 2層: 暗褐色土層。5~10mm大のロームブロックをかなり含む。粘性ややあり。
- 3層: 暗褐色土層。5~20mmのロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 4層: にぶい黄褐色土層。5~50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 5層: 暗褐色土層。5~20mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。

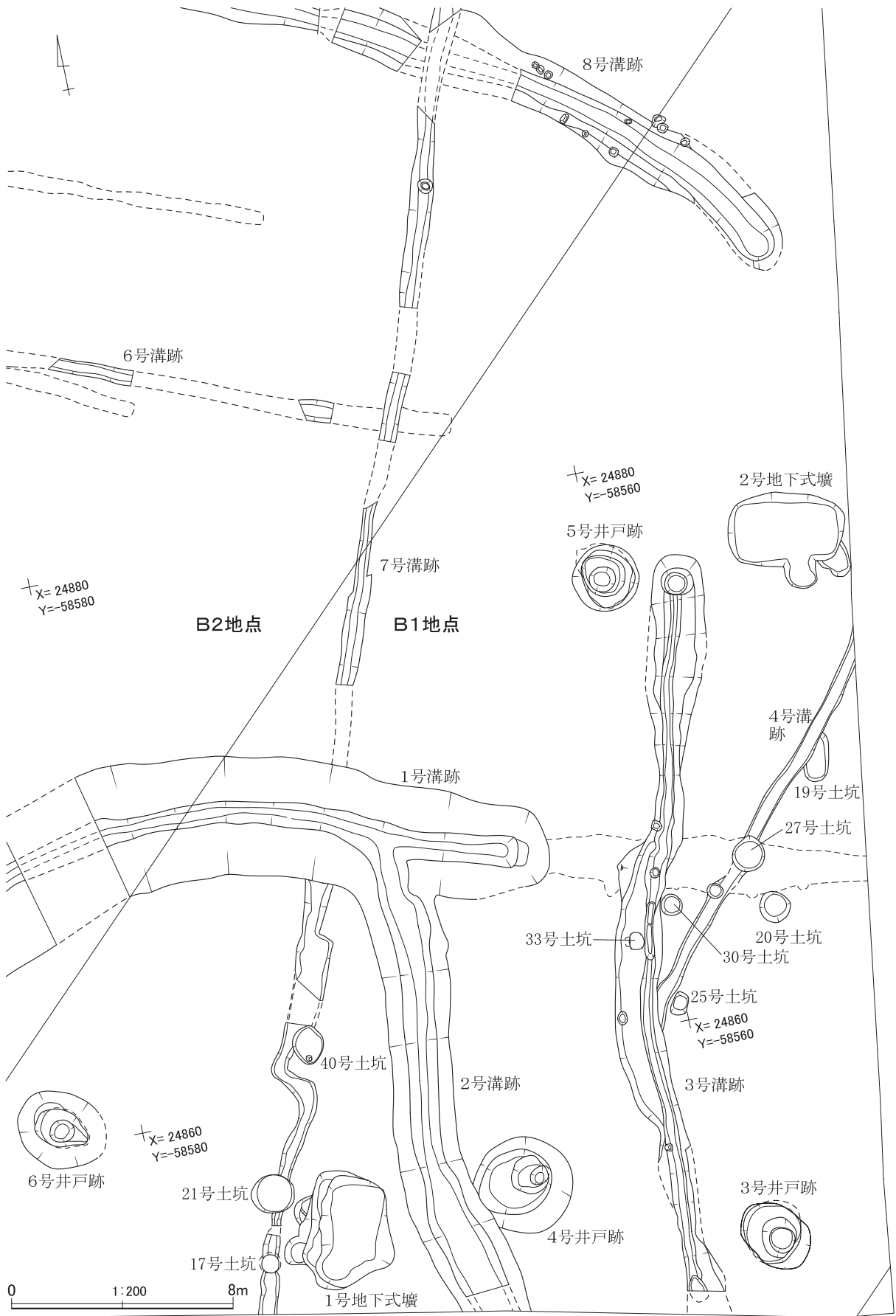
40号土坑土層注記

- 1層: 暗灰色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。焼土粒を微量含む。粘性あり。
- 2層: 暗灰色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、炭化物粒、焼土粒を微量含む。粘性あり。
- 3層: 暗灰色土層。5mm大のローム小ブロックを多量に含む。粘性あり。

同建物跡の柱穴と直接切り合う関係にはない。遺構の東半は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。

平面形は、不整な円形で、最大径は79cmである。断面形は、U字状というより矩形に近いが、壁はやや丸みをもっている。最深部での深さは、35cmである。覆土は、観察することができなかった。

遺物は出土していないが、平面形、断面形が30号土坑と類似しており、同種の遺構と見てよいであろう。中世、あるいはそれ以降の遺構であろうか。



第190図 溝跡および関連遺構分布図

6 溝跡

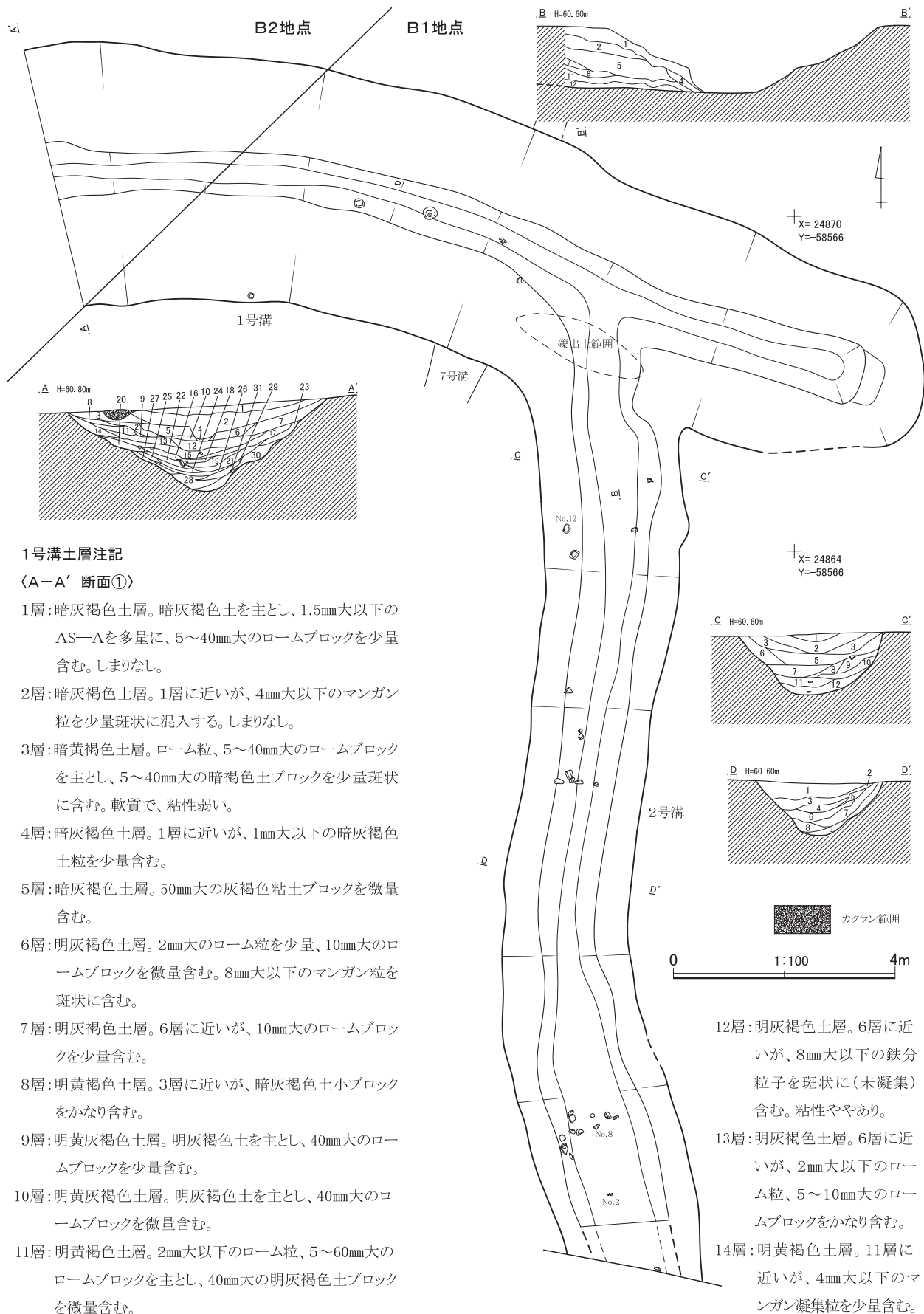
1号溝跡（第190～193図、第64・67表、図版71～73・82～83）

本地点の中央から西側のB2・3地点に亘り検出した遺構である。2号溝跡と接続し、7号溝跡に切られている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。遺構確認面における平面形は、本調査区中央から西にかけては、東南東から西北西へと直線状を呈し、B2地点東側において緩やかな弧を描きながら西南西から東北東へと軸を変換させて直線状に進み、さらにB3地点に至り、再び緩やかに変換して南南東から北北東へと軸を取り、調査区外へと延びている。底面は平坦ではなく、中央部が最深部となる弧状を呈し、明確な変換点を見せずにやや角度を持って直線状に立ち上がり、下位において僅かな稜をもって緩やかな角度へと変じ、直線状に立ち上がる。本調査地点からB3地点までの長さは、41mにおよび、遺構確認面における幅は、4.3～5.2mである。底部の幅は、約60cmを測る。また底面は、本調査地点からB3地点にかけて僅かではあるが下がっている。

覆土は、上層部分においては、浅間山系A軽石（天明3年爆裂 1783）を含み、江戸時代後半期までは埋没は完了しておらず窪状の地形を呈していたものと考えられる。明治初期作成（明治9年頃1876頃）の地籍図には、本跡とプランを一致とする地割りは見当たらず、この頃には埋没は完了したものと推定される。層中位においてはローム塊等の混入は多いものの、立ち上がり上部の崩落土である。層下位は総じて粒子状の混入物を含むものであり、徐々に埋没したものである。底面上は、赤褐色酸化鉄の発達が顕著であった。出土遺物は、上層からは腰折型等の小碗の磁器が、下層からは古代遺物の混入もあるものの、在地産片口鉢片等、茶臼片が検出されている。なお、この茶臼片は2号溝跡出土破片と接合し、紙幅の都合により、1・2号溝出土遺物として別途掲載した（第196図）。同図において拓影図下段上側の、二段の額に隅丸方形の挽木穴を有する大きい破片が1号溝跡出土のもの、他方が2号溝跡出土品である。出土位置は1号溝跡のものは、1・2号溝跡接続部分西側、南立ち上がり部の中層から、後者が同接続部分の南側、西立ち上がり部分上層である。本溝跡の時期は、底部よりやや浮いた状態で出土した在地産片口鉢片を定点にすると、15世紀中葉をやや遡るものと考えられる。

2号溝跡（第190～191・194図、第65～67表、図版71～73・82～83）

本地点の中央からやや西側から南縁中央に亘り検出した遺構である。1号溝跡と接続し、4号井戸跡と重複している。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。遺構確認面における平面形は、1号溝跡との接続部からほぼ南北に進み、南縁付近で緩やかな弧を描き、北北西から南南東へと軸を転じ、調査区外へと延びている。底面は、接続部及び南側がやや広いものの1号溝跡同様平坦ではなく、中央部が最深部となる弧状を呈し、明確な変換点を見せずにやや角度を持って直線状に立ち上がり、下位において僅かな稜をもって緩やかな角度へと変じ、直線状に立ち上がる。1号溝跡から調査区南縁までの長さは15.5mにおよび、遺構確認面における幅は、2.2～2.7mである。底部の幅は、60cm前後であり、広い部分では1.1m前後である。底面は、南縁から1号溝跡にかけて僅かに下がっており、同一レベルで接続する。覆土は、ローム塊の混入が多く、人為的に埋め戻されたものである。特に1号溝跡との接続部分の埋め戻し部分は、礫石によって被覆されていた。本遺構の開削時期は1号溝跡と同時期が考えられ、以後何らかの理由で本跡部分のみ埋め戻されたものと考えられる。



1号溝土層注記

〈A-A' 断面①〉

- 1層: 暗灰褐色土層。暗灰褐色土を主とし、1.5mm大以下のAS-Aを多量に、5~40mm大のロームブロックを少量含む。しまりなし。
- 2層: 暗灰褐色土層。1層に近いが、4mm大以下のマンガン粒を少量斑状に混入する。しまりなし。
- 3層: 暗黄褐色土層。ローム粒、5~40mm大のロームブロックを主とし、5~40mm大の暗褐色土ブロックを少量斑状に含む。軟質で、粘性弱い。
- 4層: 暗灰褐色土層。1層に近いが、1mm大以下の暗灰褐色土粒を少量含む。
- 5層: 暗灰褐色土層。50mm大の灰褐色粘土ブロックを微量含む。
- 6層: 明灰褐色土層。2mm大のローム粒を少量、10mm大のロームブロックを微量含む。8mm大以下のマンガン粒を斑状に含む。
- 7層: 明灰褐色土層。6層に近いが、10mm大のロームブロックを少量含む。
- 8層: 明黄褐色土層。3層に近いが、暗灰褐色土小ブロックをかなり含む。
- 9層: 明黄灰褐色土層。明灰褐色土を主とし、40mm大のロームブロックを少量含む。
- 10層: 明黄灰褐色土層。明灰褐色土を主とし、40mm大のロームブロックを微量含む。
- 11層: 明黄褐色土層。2mm大以下のローム粒、5~60mm大のロームブロックを主とし、40mm大の明灰褐色土ブロックを微量含む。

- 12層: 明灰褐色土層。6層に近いが、8mm大以下の鉄粒子を斑状に(未凝集)含む。粘性ややあり。
- 13層: 明灰褐色土層。6層に近いが、2mm大以下のローム粒、5~10mm大のロームブロックをかなり含む。
- 14層: 明黄褐色土層。11層に近いが、4mm大以下のマンガン凝集粒を少量含む。

第191図 1・2号溝跡平面・断面図

〈A-A' 断面②〉

- 15層:明灰褐色土層。明灰褐色土を主とし、2mm大以下のローム粒、1mm大以下の明灰色粘土粒を少量含む。粘性高い。
- 16層:明灰色粘質土層。明灰粘質土を主とし、2mm大以下のローム粒を少量含む。粘性高い。
- 17層:明灰褐色土層。12層に近いが、2mm大以下のローム粒をかなり含む。
- 18層:明灰色粘質土層。明灰色粘質土を主とし、1mm大以下のローム粒を微量含む。粘性高い。
- 19層:明灰色粘質土層。明灰色粘質土を主とし、1mm大以下のローム粒を微量含む。
- 20層:明灰色粘質土層。明灰色粘質土を主とし、2mm大以下のローム粒をかなり含む。
- 21層:明灰色粘質土層。明灰色粘質土を主とし、2mm大以下のローム粒を少量含む。
- 22層:明灰色粘質土層。明灰色粘質土を主とし、2mm大以下のローム粒をかなり含む。粘性低い。

1・2号溝土層注記

〈B-B'、C-C' 断面〉

- 1層:暗褐色土層。50mm大のロームブロック、炭化物粒、5～10mm大の小礫を少量含む。粘性あり。
- 2層:暗褐色土層。5～40mm大のロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。
- 3層:暗褐色土層。5～40mm大のロームブロックを少量含む。粘性あり。
- 4層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、5～10mm大の小礫を少量含む、炭化物粒を微量含む。粘性ややあり。人為的な埋積土。
- 5層:暗褐色土層。5～50mm大のロームブロックを多量に、5～20mm大の小礫を少量含む。粘性ややあり。
- 6層:暗褐色土層。50mm大のロームブロック、炭化物粒、5～10mm大の小礫を少量含む。粘性あり。

〈D-D' 断面〉

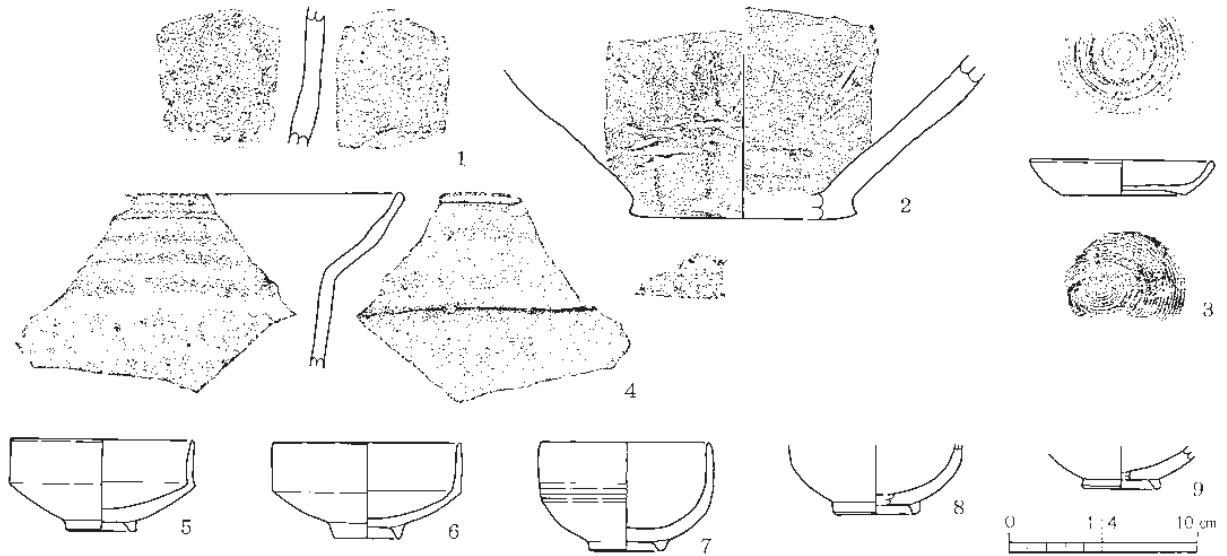
- 1層:暗褐色土層。50mm大のロームブロック、炭化物粒、5～10mm大の小礫を少量含む。粘性あり。
- 2層:暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック少量含む。粘性あり。
- 3層:暗褐色土層。5～40mm大のロームブロックを少量含む。粘性あり。
- 4層:暗褐色土層。5～40mm大のロームブロックをかなり含む。粘性あり。
- 5層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。

- 23層:明灰褐色土層。明灰褐色土を主とし、6mm大のローム小ブロックをかなり含む。
- 24層:明灰色粘質土層。明灰色粘質土を主とし、ローム粒、6mm大以下のロームブロックをかなり含む。
- 25層:明灰色粘質土層。明灰色粘質土を主とし、2mm大以下のローム粒をかなり含む。
- 26層:明灰色粘質土層。21層に近いが、やや砂質。
- 27層:明灰色粘質土層。21層に近いが、やや砂質。4mm大のマンガ凝集粒を微量含む。
- 28層:明灰色粘質土層。21層に近いが、やや砂質。色調はやや明るい。
- 29層:明灰色粘質土層。21層に近いが、有機遺物(炭化物状)を含む。
- 30層:明灰色土層。23層に近いが、2mm大のローム粒、10mm大のロームブロックをかなり含む。
- 31層:明灰色土層。28層に近いが、2mm大のローム粒を少量含む。

- 7層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 8層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 9層:暗褐色土層。5～40mm大のロームブロックを少量、砂粒をかなり含む。粘性ややあり。
- 10層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、砂粒を少量含む。10mm大の小礫を少量含む。粘性あり。下位に鉄分が沈着する。自然流入土。
- 11層:にぶい黄褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。粘性あり。下位に鉄分が沈着する。自然流入土。
- 12層:にぶい黄褐色土層。砂粒を少量含む。10mm大の小礫を少量含む。粘性あり。下位に鉄分が沈着する。自然流入土。

- 6層:暗褐色土層。5～50mm大のロームブロックを多量に、5～20mm大の小礫を少量含む。粘性あり。
- 7層:暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 8層:にぶい黄褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量含む。しまりあり、粘性あり。下位に鉄分が沈着する。自然流入土。
- 9層:にぶい黄褐色土層。砂粒、10mm大の小礫を少量含む。粘性あり。下位に鉄分が沈着する。自然流入土。

第192図 1・2号溝跡断面図



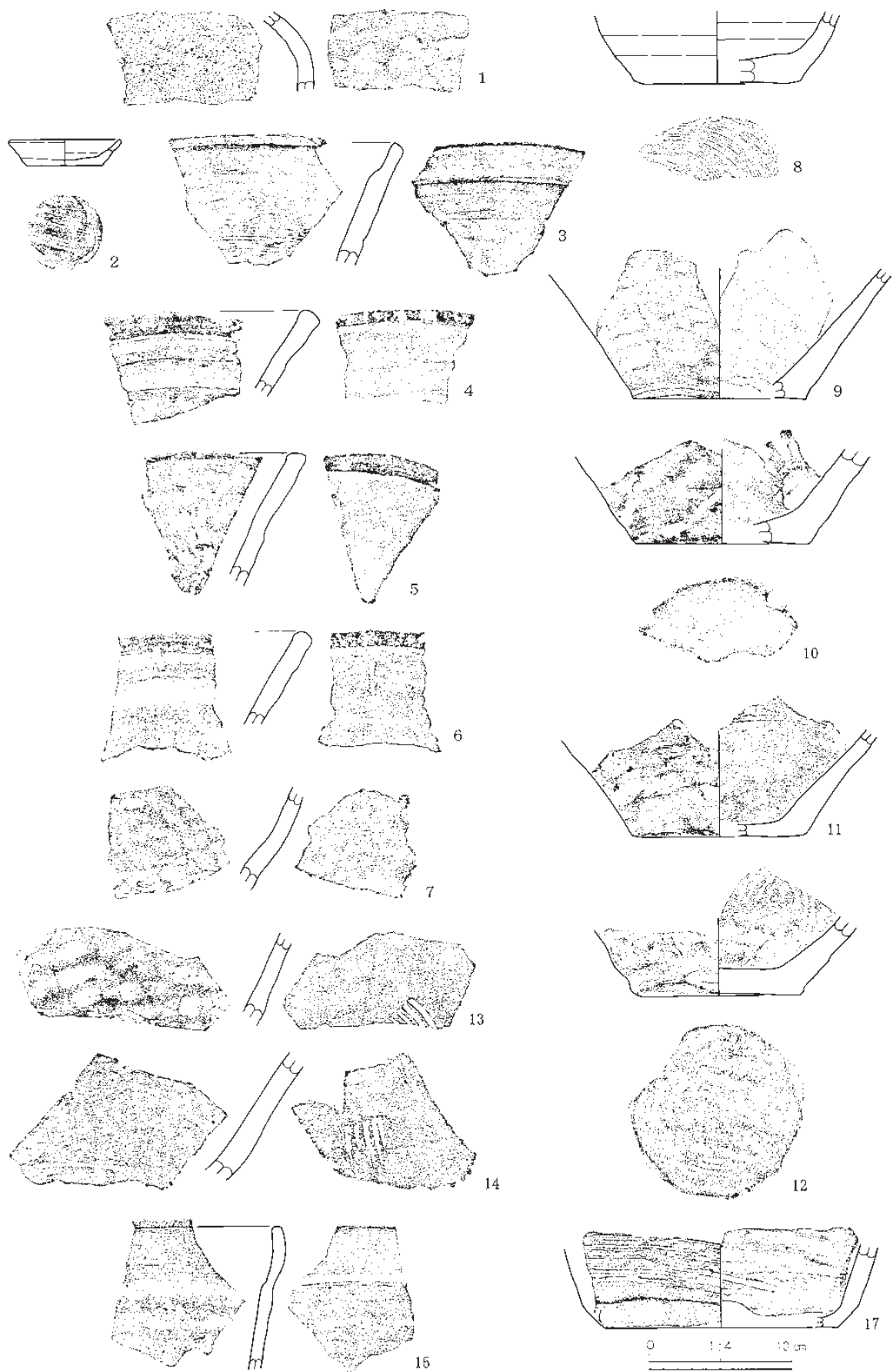
第193図 1号溝跡出土遺物

第64表 1号溝跡出土遺物観察表

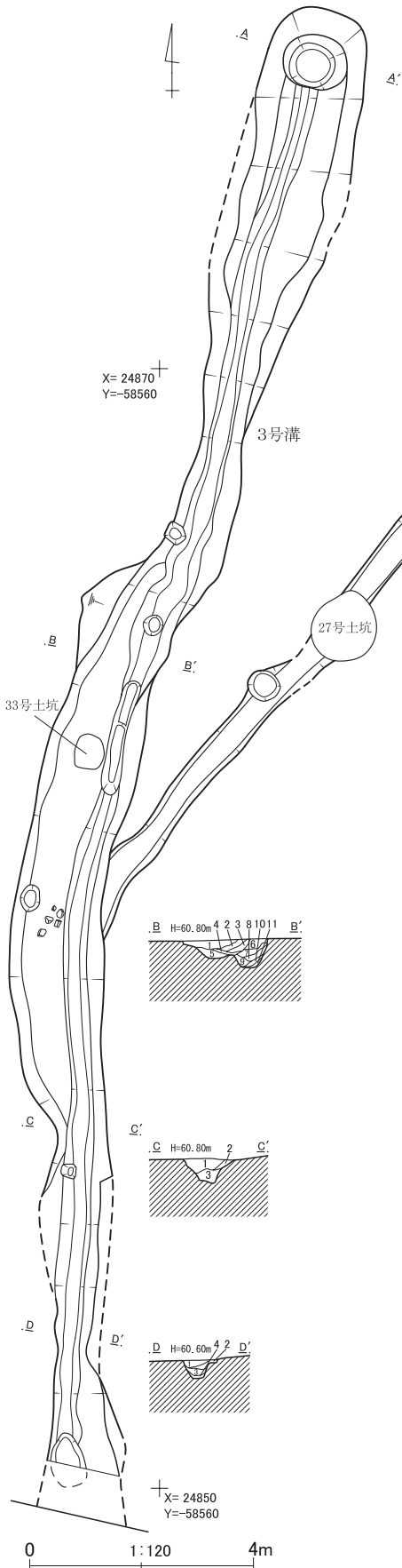
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 - 底器高 -	胴部片。	外面 - ナデ、押印文あり。内面 - ナデ。	石英・チャート 内 - 褐灰色 外 - 灰黄褐色	常滑 胴部片
2	甕	口径 - 底器高 (12.0) 器高 -	彎曲気味に立ち上がる胴部。	外面 - 胴部下位ヘラナデ。内面 - 胴部下位ヘラナデ。	石英・チャート 内 - 灰色 外 - にぶい橙色	常滑 体部下位片
3	カワラケ	口径 (9.8) 底器高 6.5 器高 1.9	彎曲して立ち上がる体部。	ロク口整形。底部回転糸切り無調整。	黒色粒・白色粒 内 - 浅黄色 外 - 明黄褐色	2 / 3 残存
4	鍋	口径 - 底器高 -	内彎して開く口縁部。	外面 - 体部ナデ、口縁部は回転ナデ。 内面 - 体部ナデ、口縁部は回転ナデ。	チャート・黒色粒 内 - 灰オリーブ色	口縁部～体部 上位片
5	碗	口径 (9.8) 底器高 3.8 器高 4.9	外反気味に立ち上がる口縁部。高台は逆台形。	高台接地部を除き施釉、左右均等に鉄釉・灰釉の順に掛け分ける。	堅緻。 内 - 灰オリーブ色・褐色	3 / 4 残存
6	碗	口径 (10.1) 底器高 (3.6) 器高 (9.8)	直線的に立ち上がる口縁部。高台は三角形。	内外面全体にに灰釉、一部に鉄釉がみられる。	石英、堅緻 灰白色・褐色	1 / 4 残存 鉄釉・灰釉の 掛け分け碗
7	碗	口径 6.0 底器高 4.0 器高 5.8	丸みを持つ腰部。高台は逆台形。	高台接地部を除き施釉。外面口縁部・内面は灰釉。外面は口縁部を除き鉄釉を掛け分ける。	石英、堅緻 灰釉 - 灰白色 鉄釉 - 褐色	3 / 4 残存
8	碗	口径 - 底器高 (4.6) 器高 -	丸みを持つ腰部。高台は逆台形。	残存部は外面が鉄釉、内面が灰釉。	堅緻。 内 - 灰オリーブ色 外 - 黒褐色	腰部～高台部 1 / 2 残存
9	碗	口径 - 底器高 (4.2) 器高 -	丸みを持つ腰部。	残存部は外面が鉄釉、内面が灰釉。	石英、堅緻 内 - 灰オリーブ色 外 - 暗褐色	腰部～高台部 片

第65表 2号溝跡出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 - 底器高 -	丸みを持つ胴部片。	外面 - 押印文あるが自然釉がかかる。内面 - 無文の当具痕、ナデ。	石英・チャート 内 - 黄灰色 外 - にぶい赤褐色	常滑 胴部片
2	カワラケ	口径 7.8 底器高 5.1 器高 1.8	口縁部に向かって外反気味に開く。	ロク口整形。底部回転糸切り無調整、中央部に木目状痕。	チャート・白色粒 内 - 黒色 外 - オリーブ黒色	一部欠損 口縁部に煤付着。 灯明坏か
3	鉢	口径 - 底器高 -	口縁部内面が器厚を減じる。口唇部は平坦。	外面 - 口縁部ヨコナデ。内面 - 口縁部ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内外 - 黒褐色	口縁部～体部 上位片
4	鉢	口径 - 底器高 -	やや丸みを持つ口唇部	外面 - 回転ナデ。内面 - 回転ナデ。	粗粒チャート 内外 - 黒褐色	口縁部片
5	鉢	口径 - 底器高 -	直線的に開く口縁部。	外面 - ナデ。内面 - ナデ。	チャート・白色粒 内外 - にぶい黄 橙色	口縁部片
6	鉢	口径 - 底器高 -	丸みを持つ口唇部。	外面 - 口縁部ヨコナデ。内面 - 口縁部ヨコナデ。	粗粒チャート 内外 - 黒褐色	口縁部片
7	(鉢)	口径 - 底器高 -	丸みを持って立ち上がる体部。	外面 - ナデ。内面 - ナデ。	チャート・白色粒 内外 - 黒色	体部片



第194图 2号沟迹出土遗物



3号溝土層注記

〈A—A' 断面〉

- 1層: 褐色土層。ローム粒を微量、灰褐色粘土粒を少量含む。しまり強い。
- 2層: 褐色土層。灰褐色粘土粒を少量含む。しまり強い。
- 3層: 暗褐色土層。灰褐色粘土粒を微量含む。粘性弱い。
- 4層: 暗褐色土層。ローム粒を微量、灰褐色粘土粒を少量含む。粘性あり。
- 5層: 褐色土層。灰褐色粘土粒を多量に含む。しまり弱く、粘性強い。
- 6層: 褐色土層。灰褐色粘土粒を微量含む。粘性強い。
- 7層: 褐色土層。灰褐色粘土粒を多量に含む。しまり強く、粘性強い。桶のあたり痕あり。
- 8層: 暗褐色土層。30mm大の灰褐色粘土ブロックを多量に含む。掘り方埋め土。

〈B—B' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロック、2mm大のAS—Aを少量含む。以下、1～8・10層は、粘性がややあり、9・11層は、粘性がある。
- 2層: 暗灰色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、2mm大のAS—Aを少量、焼土粒を微量含む。
- 3層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含み、2mm大のAS—Aを少量含む。
- 4層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、2mm大のAS—A少量含む。
- 5層: 暗灰色土層。5～10mm大のロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。
- 6層: 暗灰色土層。5～20mm大のロームブロックを多量に含む。
- 7層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり含む。
- 8層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックを少量、5～10mm大の暗灰色土ブロックをかなり含む。
- 9層: 暗褐色土層。5～10mm大の暗灰色土ブロックをかなり含む。
- 10層: 暗灰色土層。5～10mm大の暗灰色土ブロックを多量に含む。
- 11層: 暗褐色土層。5mm大の暗灰色土ブロックをかなり含む。

〈C—C' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロックをかなり、2mm大の白色軽石、10mm大の小礫を少量含む。粘性ややあり。
- 2層: 暗褐色土層。5～50mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。
- 3層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロック、2mm大の白色軽石を少量含む。粘性ややあり。

〈D—D' 断面〉

- 1層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大のAS—Aを少量、焼土粒微量含む。粘性ややあり。
- 2層: 暗褐色土層。5mm大のローム小ブロック、2mm大のAS—A、焼土粒、炭化物粒を少量含む。粘性ややあり。
- 3層: 暗褐色土層。5～10mm大のロームブロックをかなり含み、2mm大のAS—Aを少量含む。粘性ややあり。
- 4層: にぶい黄褐色土層。5～20mm大のロームブロックを多量に含む。粘性ややあり。

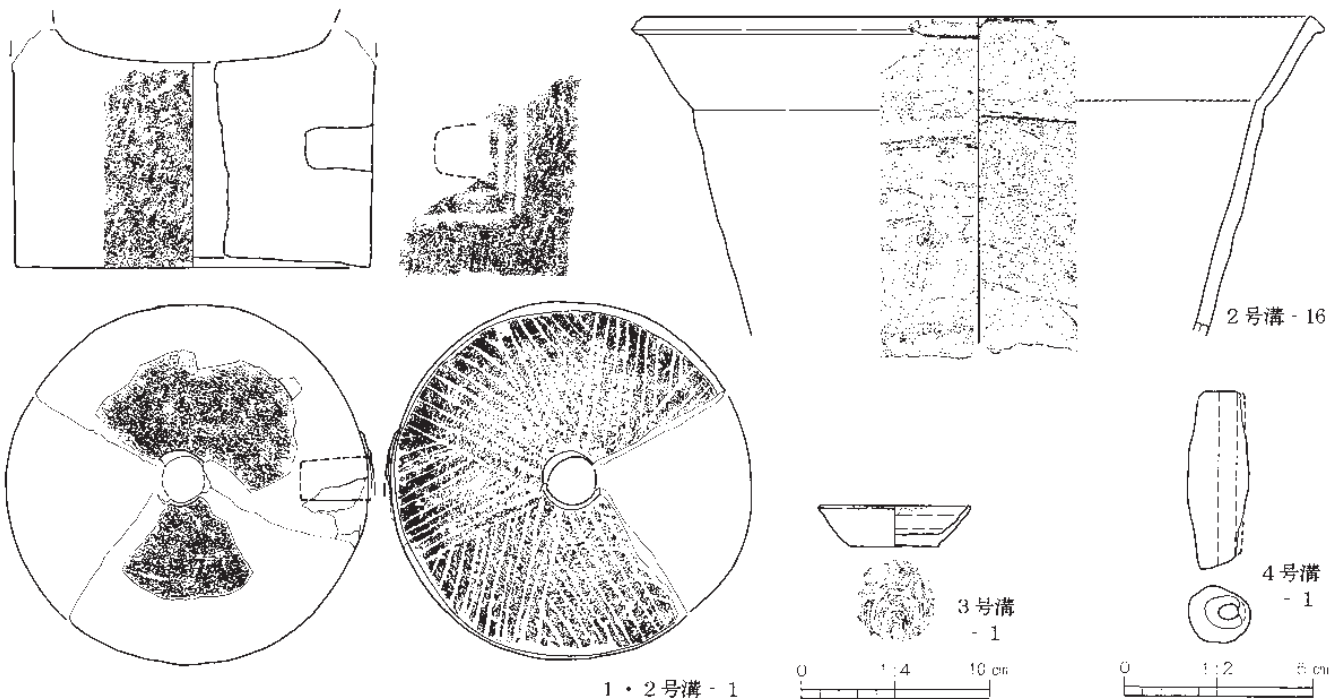
第195図 3・4号溝跡平面・断面図

第66表 2号溝跡出土遺物観察表(2)

8	捏鉢	口径 底器高 — — (11.6)	内彎気味に立ち上がる体部。ロクロ成形。内面は平滑。	ロクロ成形。底部回転糸切り無調整。目。	チャート・白色粒 内外-灰色	体部~底部片
9	捏鉢	口径 底器高 — — (12.0)	外反気味に開く体部。内面は平滑。	外面-ナデ、指頭圧痕。内面-回転ナデ。	チャート・黒色粒 内外-灰色	体部~底部片
10	捏鉢	口径 底器高 — — (12.0)	直線的に開く体部。内面は平滑。	外面-ナデ、粗雑なタタキ。内面-ナデ。	チャート・黒色粒 内外-灰色	外面に煤付着 体部下位~底部 1/5残存
11	捏鉢	口径 底器高 — — (11.8)	外反気味に開く体部。内面は平滑。	外面-指ナデ・指頭圧痕。内面-ナデ。	チャート・黒色粒 内外-灰色	体部下位~底部 1/3残存
12	播鉢	口径 底器高 — — 11.9	やや彎曲して開く体部。	外面-ナデ、粗雑なタタキ。内面-ナデ。すり目は櫛描きで4~6条。	チャート・黒色粒 内外-灰色	体部下位~底部
13	播鉢	口径 底器高 — — —	直線的に開く体部。	外面-ナデ、指頭圧痕。内面-丁寧なナデ、すり目は幅広で4条以上。	チャート・黒色粒 内外-灰色	体部片
14	播鉢	口径 底器高 — — —	やや丸みを持って立ち上がる体部。	外面-ナデ。内面-ナデ、すり目は幅広の櫛描き5条。	チャート・黒色粒 内外-橙色	体部片
15	鍋	口径 底器高 — — —	内彎する口縁部。	外面-体部ナデ、口縁部は回転ナデ。内面-体部ナデ、口縁部は回転ナデ。	白色針状粒・ チャート・黒色粒 内外-灰色	口縁部~体部 上位片
16	鍋	口径 底器高 (36.4) — —	直線的に開く口縁部。口唇部は外方に延びる。	外面-体部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面-体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内-にぶい褐色 外-黒褐色	口縁部~体部 片
17	鉢	口径 底器高 — — (16.0)	直線的に開く体部。	外面-木口状工具ヨコナデ、体部下端ヘラケズリ。内面-ナデ。	細砂粒 内-黄灰色 外-黒褐色	体部下位~底部 片

第67表 1・2号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	石臼 下臼	径 器高 重さ (16.2) 11.6 0.6	茶白形。上面及び側面は丁寧な整形。側面に方形の挽木穴を有し、方形の額(座)を持つ。挽面はやや摩耗するが、目が残る。	砂岩	2/3残存



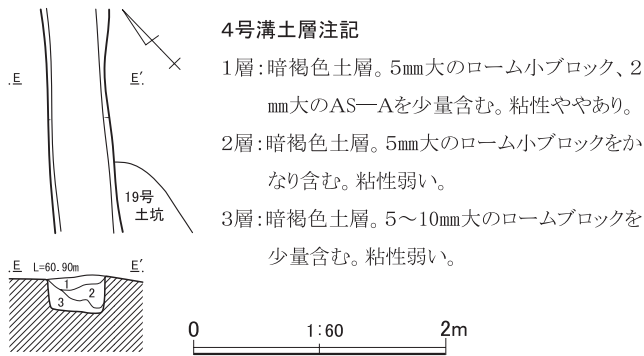
第196図 1・2号溝跡、2~4号溝跡出土遺物

第68表 3号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	カラケ	口径 底器高 8.0 4.7 2.2	直線的に開く体部。	ロクロ整形。底部回転糸切り無調整。	チャート・黒色粒 内外-橙色	2/3残存 口縁部に煤付着。 灯明坏か

第69表 4号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土錘	長さ 径 孔径 4.7 1.6 0.5	中央部がやや太くなる管状土錘。	ナデ。	細砂粒・黒色粒 にぶい黄橙色	一部欠損 重さ10.18g



第197図 4号溝跡平面・断面図

3号溝跡(第190・195・196図、第68表、図版74～75・83)

調査地点の中央からやや東寄りに検出した遺構である。一部近世の溝跡に切られ、62・66号住居跡、4号溝跡を切って掘削されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。遺構確認面における平面形は、北側の幅がやや広く、端部には円形を呈する土坑を有する。

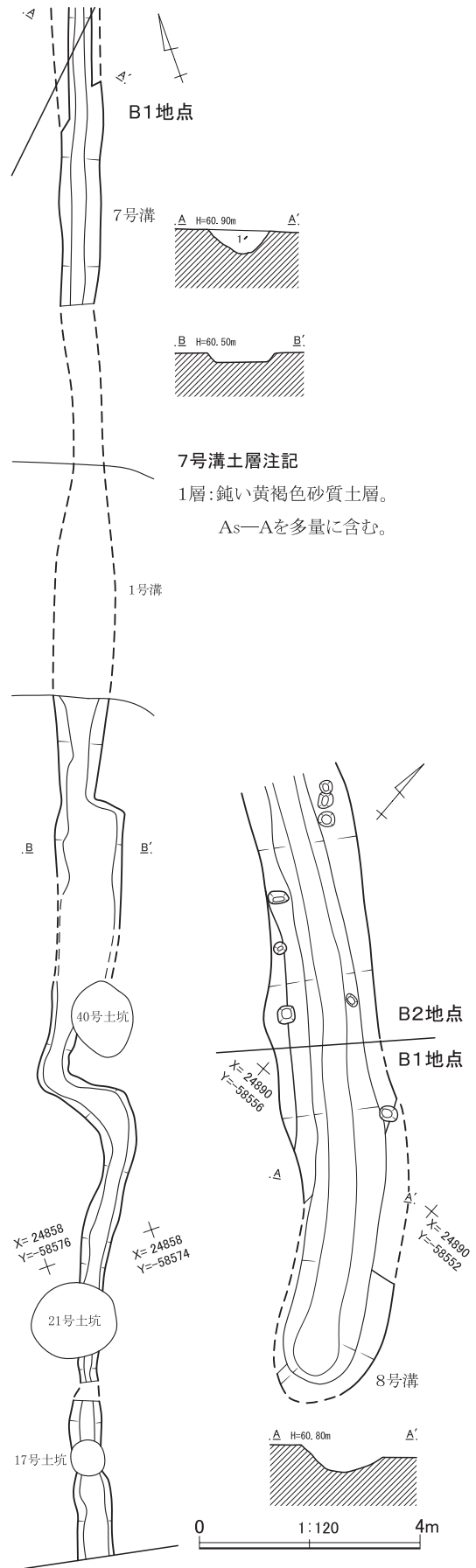
この土坑部分底面には円形の圧痕が観察され、桶等が設置されていたものと考えられる。遺構確認面における幅は、北側において1.8m前後であり、狭い部分では70cm前後である。深さは土坑部分において1.5m、溝部分の最深部で50cm前後である。底面の比高差は、僅かではあるが、南側から北側にかけて下がっており、12cmを測る。このため南側から導水し、北端の土坑部分に水を貯めた施設としての利用が推定される。

覆土は、ローム塊を含む埋め戻し土である。2号溝跡とほぼ平行し、同一の区画意識の元に掘削されたものと考えられる。

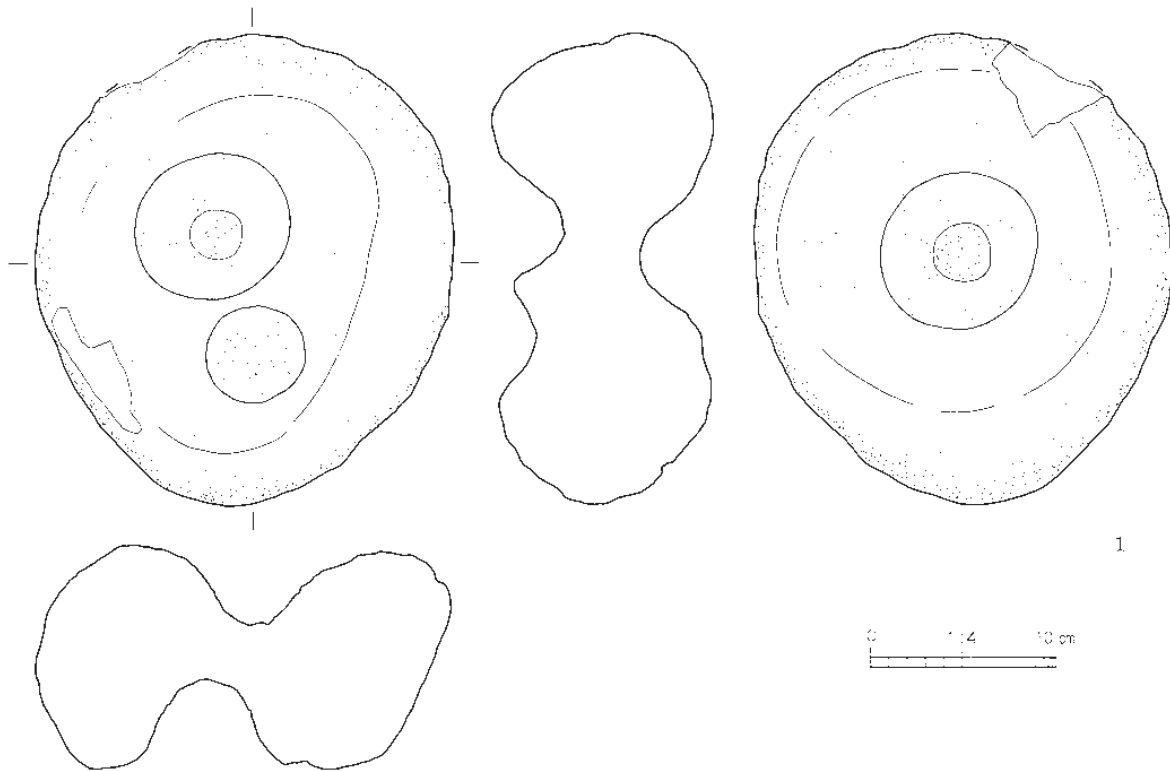
4号溝跡(第190・195・197図、第69表、図版74・83)

調査地点の東寄りに検出した遺構である。19・27号土坑を切って掘削されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。N-42°-Eに軸を有し、直線状を呈する。南東側は3号溝跡に接し、北東側は調査区外へと延びる。立ち上がりは直角に近く、直線的である。

底面の比高さはほとんどないため、用排水の機能は有さずに区画等のために掘削されたものと考えられる。重複関係と覆土から近世、あるいはそれ以降の遺構であろう。



第198図 7・8号溝跡平面・断面図



第199図 7号溝跡出土遺物

第70表 7号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm・kg) / 形態・成整形の特徴	胎土・色調	備考
1	凹石	長さ：24.9 幅：22.1 厚さ：11.7 重さ：4.7。自然石の表裏面に凹みを有する。	角閃石安山岩	一部欠損

7号溝跡 (第190・198・199図、第70表、図版83)

調査地点の西寄りに検出した遺構である。21号土坑に切られ、31号住居跡、1号溝跡、17・40号土坑を切って掘削されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。B2地点北東部に、「L」字状の端部を有し、N-20°-Wの軸を持って直線的に本調査地点に至り、南側において幅を増す部分を持ち、さらに鍵の手状の屈曲部をへて、再びN-20°-Wの軸を持って直線的に調査区南縁外へと続いている。遺構確認面における幅は、75cm前後、底部幅は25cm前後である。遺構確認面からの深さは、40cm前後である。底面標高は、B2地点「L」字状の部分においては60.49m、本調査区南縁付近においては、60.42mではあるが、B2地点と本調査地点の境界部分においては60.35mの数値を見せる。これらの数値は、南側および北側の沖積低地に挟まれた本調査地点の自然地形と呼応するものであり、用排水の機能は有さず、区画等のために掘削されたものと考えられる。覆土から、近世あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

8号溝跡 (第190・198図、図版75・83)

調査地点の北側、西寄りに検出した遺構である。61号住居跡を切って掘削されている。確認面は、黄褐色の軟質ローム層上面である。B2地点北西部から、N-68°-Wの軸を持って直線的にB2地点東縁付近から緩やかな弧を描きつつ本調査区に至っている。遺構確認面における幅は2.0m前後、底部幅は40cm前後である。底面は、西から東に向かい緩やかに下がっている。西および東側に端部を有していることから、用排水の機能は考えがたい遺構である。竪穴住居跡と近接、重複が少ないこと、また覆土から古墳時代の遺構と考えられる。

第V章 北堀久下塚北遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

北堀久下塚北遺跡は、女堀川下流域の標高61m前後の微高地上に位置する。この微高地は、さらに下流で小山川と合流する男堀川と女堀川の間に形成された東西に長い微高地であり、調査地点は、北側が緩やかな傾斜をもって女堀川の氾濫原へと連なる微高地の北縁にあたる。

久下東遺跡（本書第IV章）とは、東側で接しており、西側では、古墳時代中期の規模の大きな円墳である公卿塚古墳（増田・坂本他 1986他）と境を接している。久下東遺跡の集落跡と本遺跡の集落跡は、一体の集落跡を構成する可能性があり、今後調査の進捗をまって、遺跡範囲のより適切な設定を図る必要があるだろう。なお、同じ微高地上には、南西に七色塚遺跡（恋河内・松本 2008）、南東～東側に久下前遺跡（松本・町田 2002）、北堀新田前遺跡（恋河内・松本 上掲）などの古墳～奈良・平安時代の諸集落跡がある。

本遺跡は、平成19年5、6月に実施した試掘調査によりはじめて集落跡であることが判明したため、北堀久下塚北遺跡と命名した遺跡であり、今回の調査が本遺跡に関する最初の発掘調査である。

今回の調査で検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡1軒である。調査対象面積は、約164㎡である。

第2節 検出された遺構と遺物

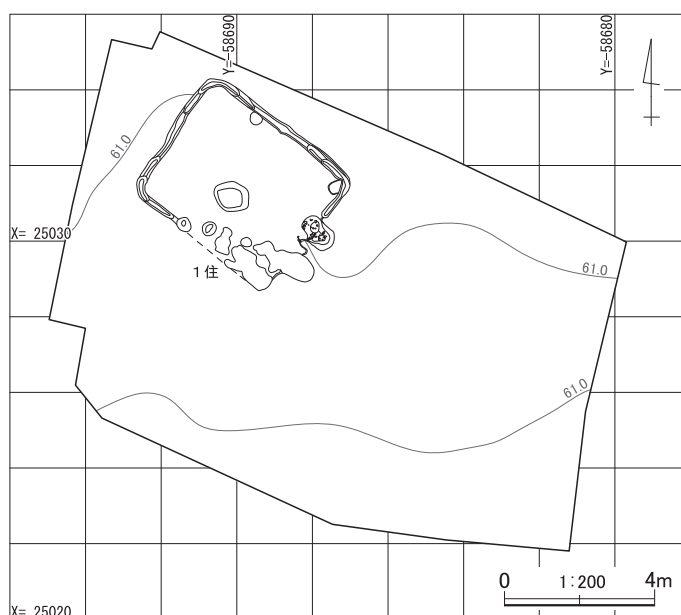
1 竪穴住居跡

1号住居跡（第200～203図、第71表、図版83・84）

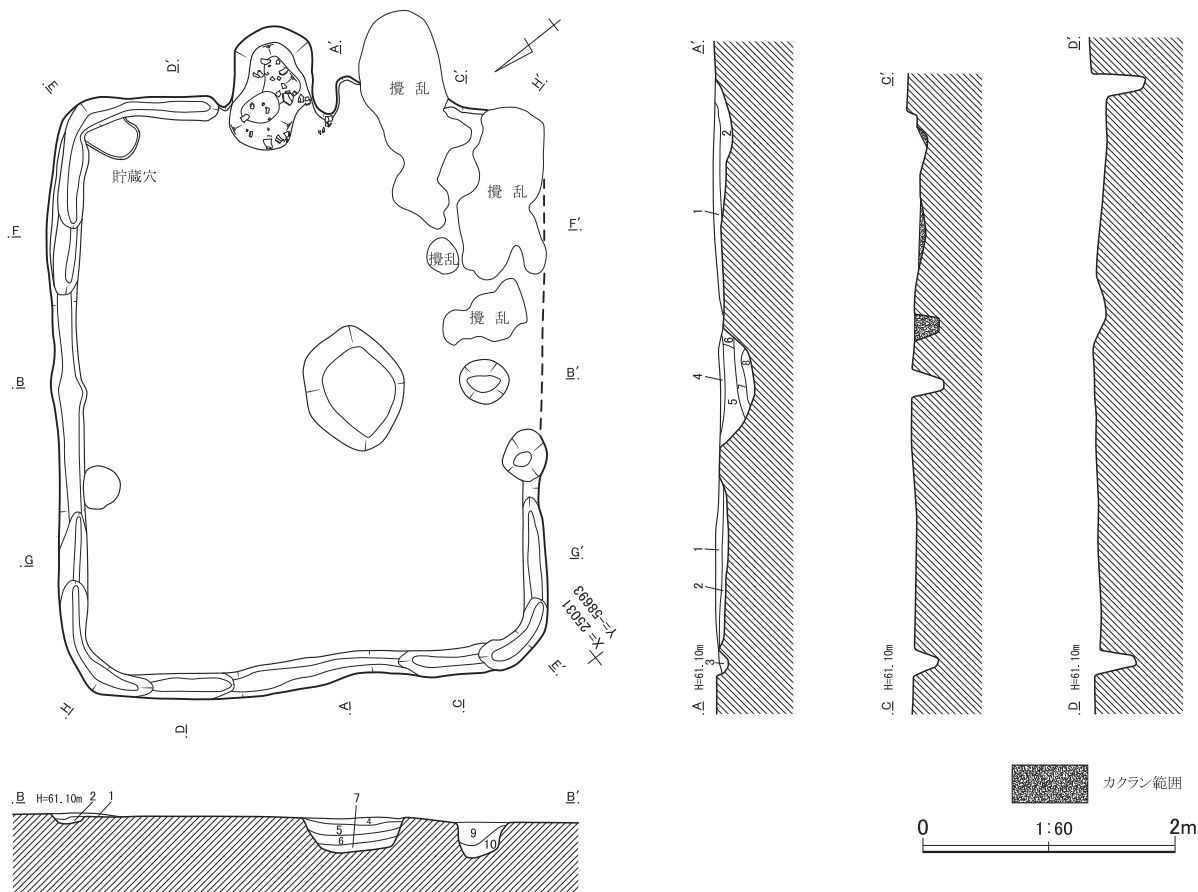
調査地点の北西寄りの一角で検出した遺構である。残存状態は極めて悪く、床面ぎりぎりまで削平されており、覆土の大半は失われている。また南東壁南半から南西壁南半にかけては、攪乱により壊されている。確認面はソフトローム層上面である。

平面形は、長方形で、主軸長は5.25m、副軸長は3.89m前後、主軸方位はS - 52° - Eである。壁は、わずかに残存するのみで、壁高は、四辺いずれも10cmに満たない。床面は、ほぼ平坦である。攪乱により壊されている部分以外は、幅12～28cm、深さが10～31cmの壁溝が巡らされている。

柱穴は検出できなかったが、東隅には、貯蔵穴と思われるピットが認められた。



第200図 北堀久下塚北遺跡全体図

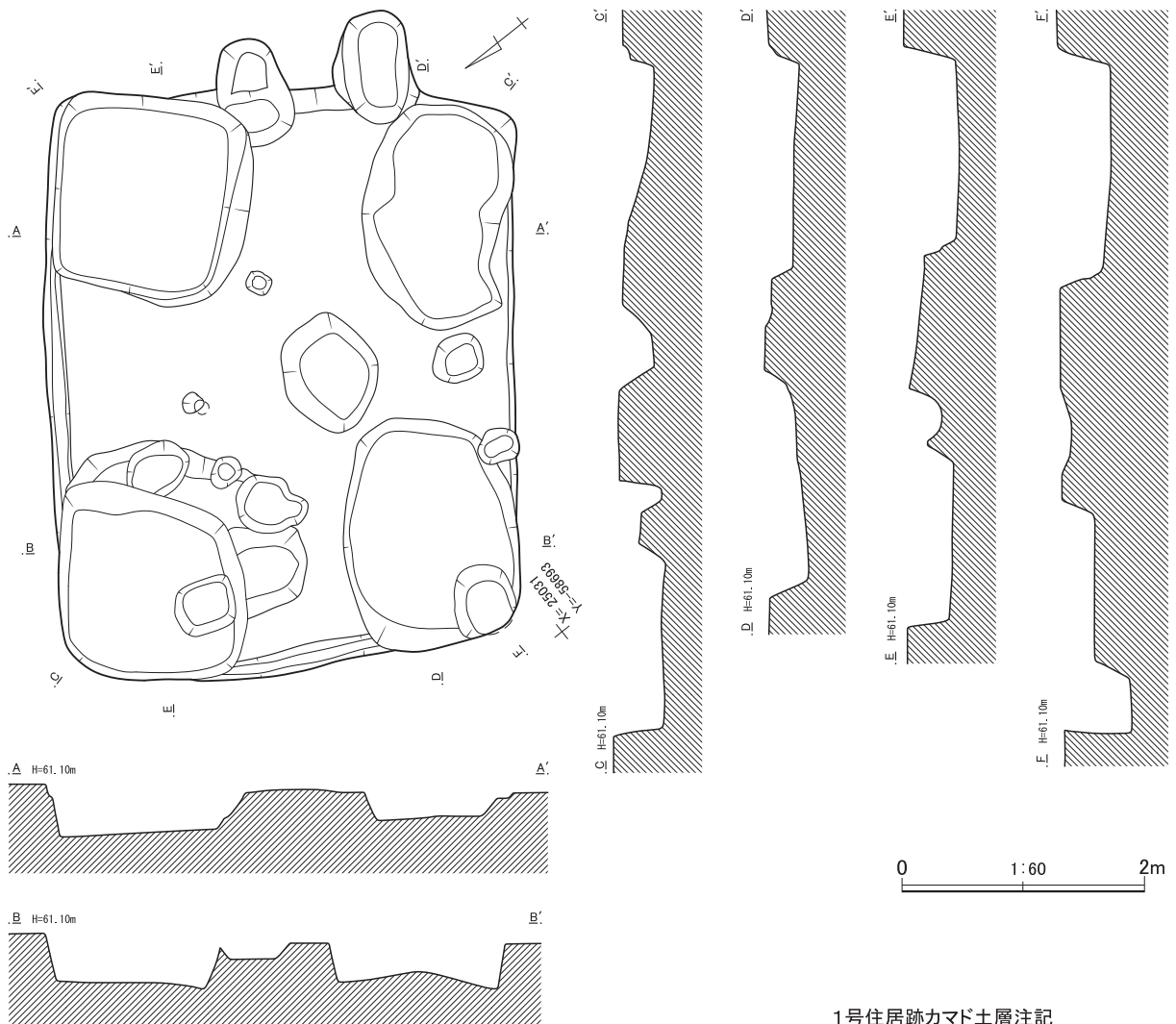


1号住居跡土層注記

- 1層: 暗褐色土層。2mm大以下の焼土粒、炭化物粒、5mm大の炭化物小ブロックを多量に含む。軟質で粘性は弱い。
- 2層: 暗褐色土層。2mm大以下のローム粒をかなり含む。軟質で粘性は弱い。
- 3層: 明褐色土層。暗褐色土を主とし、5~20mm大の大小ロームブロックをかなり含む。軟質で粘性は弱い。壁溝覆土。
- 4層: 暗褐色土層。2mm大以下のローム粒をかなり含む、5~20mm大の大小のロームブロックを微量含む。4~6層は、床下土坑、ピット覆土。

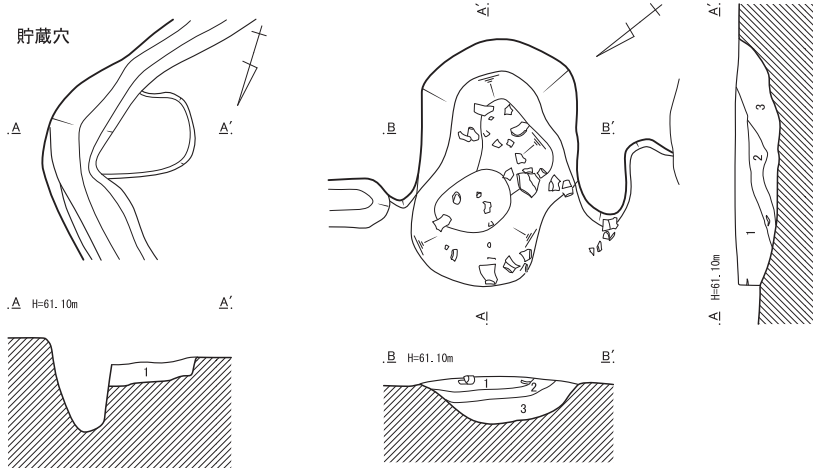
- 5層: 暗褐色土層。2mm大以下のローム粒をかなり含む。
- 6層: 明褐色土層。暗褐色土を主とし、ローム粒、5mm大のローム小ブロックを多量に含む。
- 7層: 明褐色土層。暗褐色土を主とし、ローム粒をかなり含む、5~30mm大の大小のロームブロックを多量に含む。
- 8層: 明褐色土層。暗褐色土を主とし、ローム粒、5~30mm大の大小のロームブロックを多量に含む。
- 9層: 暗褐色土層。1mm大以下のローム粒をかなり含む、5~20mm大の大小の風化ロームブロック、1mm以下の焼土粒を少量含む。軟質で粘性は弱い。
- 10層: 明褐色土層。暗褐色土を主とし、2mm大以下のローム粒をかなり含む。

第201図 1号住居跡平面・断面図(1)



1号住居跡カマド土層注記

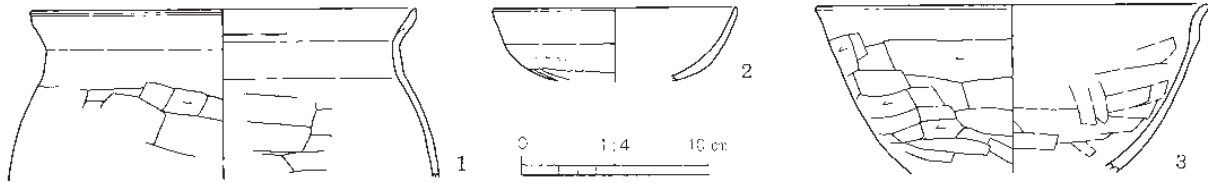
- 1層:暗褐色土層。2mm大以下のローム粒を微量、5mm大以下の焼土粒、4mm大以下の炭化物粒を少量含む。軟質で粘性は弱い。
- 2層:暗赤褐色土層。暗褐色土を主とし、2mm大以下の焼土粒、5~20mm大の大小の焼土ブロック、1mm大以下の炭化物粒を多量に含む。軟質で粘性は弱い。
- 3層:暗赤褐色土層。暗褐色土を主とし、焼土粒、5~8mm大の大小の焼土ブロック、炭化物粒、5mm大の炭化物小ブロックをかなり含む。軟質で粘性は弱い。



1号住居跡 貯蔵穴土層注記

- 1層:暗褐色土層。4mm大以下のローム粒を少量含む。軟質で粘性は弱い。

第202図 1号住居跡平面・断面図(2)



第203図 1号住居跡出土遺物

第71表 1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (20.4) 底径 - 器高 -	口縁部は「コ」の字状を呈する。	外面-口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	角閃石・チャート 細砂粒 内外-橙色	
2	坏	口径 (12.9) 底径 - 器高 -	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外傾して開く。	外面-口縁部ヨコナデ、体部押さえ。底部ヘラケズリ。内面-ヨコナデ。	石英・チャート・細砂粒 内外-鈍い赤褐色	
3	鉢	口径 20.6 底径 - 器高 -	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	外面-口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	角閃石 内外-橙色	

貯蔵穴は、壁溝と重なっており、平面形は、隅丸長方形を半分にした形態であり、現存長軸長は、34cm、横幅は、32cmである。やや軟質な暗褐色土で埋まっている。他に床面を精査した時点で、住居跡中央、南西壁沿い、壁寄り土坑状の掘り込み、あるいはピットを検出したが、いずれも床下の土坑やピットの可能性が高いようである。床面は、中央がやや高くなるようである。

カマドは、南西壁の中央、やや北寄りにあり、壁に対しほぼ直角に付設されている。燃焼部の平面形は、不整な楕円形で、地山を掘り残し作出された短い袖が付いている。左側の袖は、とくに短く、壁のわずかな出っ張りに過ぎない。全長は97cm、中央での袖を含めた横幅は102cmである。燃焼部の縦断面形は、船底形に近く、底面は、手前がやや深く、奥壁に向かってゆるやかな曲線を描き立ち上がる。燃焼部の被熱赤化は、顕著ではない。カマド内の覆土は3層で、全体に焼土や炭化物を含む。焼土ブロックを多量に含む2層は、天井部に関わる土層であろう。接合する個体が少なく図化できなかったが、カマド覆土の上層を中心に、かなりの量の土器破片が出土している。

掘り方を除く住居跡の覆土は、3層に分けられた。1層は、焼土や炭化物を多量に含む暗褐色土で、2層は、ローム粒をかなり含む暗褐色土である。1層に多量に含まれる焼土、炭化物から見て、いわゆる焼失住居になる可能性がある。2層は、全体に軟弱ではあるが、貼床層の可能性は捨て切れない。3層は、壁溝覆土の明褐色土である。

床面は、中央を掘り残し、四隅を方形、楕円形に大きく掘りくぼめ、ローム粒やロームブロックを多く含む土を充填して造られている。四隅の掘り込みは、いわゆる床下土坑であろう。深さは18~40cm、とくに東隅に接する土坑は、一辺136~159cmの明瞭な方形に掘り込まれている。床面中央などにも不整形の床下土坑、ピットが見られた。

図化し得た遺物は、第203図1~3に示した甕、坏、鉢の3点である。2の坏は、貯蔵穴の上で、1の甕、3の鉢は、住居跡南隅の覆土および攪乱内からまとまって出土した。他には、覆土や掘り方などから出土した少数の土器破片以外出土していない。

出土遺物から見て、平安時代の住居跡と考えられる。

第Ⅵ章 自然科学分析

第1節 浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)出土資料の自然科学分析

1 テフラ分析

藤根 久・米田恭子 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

浅見山Ⅰ遺跡は、本庄市栗崎・西富田地内の丘陵斜面に位置する旧石器時代から中・近世にかけての遺跡である。Ⅲ次調査では、丘陵斜面に堆積するローム質堆積物のⅣ層下部からⅤ層にかけて黒曜石製石器が出土した。ここでは、このローム質堆積物中のテフラについて検討した。なお、Ⅳ層中から検出された炭化材について AMS 法による放射性炭素年代測定を行っている (本書本節2参照)。

(2) 試料と分析方法

試料は、トレンチ5およびトレンチ6において5cm間隔で連続的に採取したローム質堆積物31試料 (トレンチ5:17試料, トレンチ6:14試料) である。分析は、以下の方法で行った。トレンチ6は、トレンチ5より標高が低く、Ⅳb層下部において黒曜石製石器が出土している (本書第Ⅲ章第2節1および本節3参照)。なお、各トレンチの位置については、本文を参照されたい (第9図)。

自然含水状態で約30g程度秤量し、1φ (0.5mm)、2φ (0.25mm)、3φ (0.125mm)、4φ (0.0063mm)、の4枚のふるいを重ね、流水下で電磁式フルイ振という機器を用いて、湿式ふるい分けを行った。

各ふるい残渣は、乾燥した後秤量した (粒度組成)。なお、試料の乾燥重量中における粒径4φ以上の砂粒分の重量%を含砂率とした。

4φの残渣 (粒径0.125~0.064mm) については、重液 (テトラブロモエタン、比重2.96) を用いて重鉱物と軽鉱物に分離し、乾燥した後秤量した。

軽鉱物は、石英、長石類、火山ガラスに分類し、火山ガラスは、町田・新井の分類基準 (町田・新井 2003) に従って、バブル (泡) 型の平板状 (b1) およびY字状 (b2)、軽石型の繊維状 (p1) およびスポンジ状 (p2)、急冷破碎型塊状およびフレーク状 (o0) に分類した。

なお、トレンチ6のⅣb層中では、直径1mm以下の白~黄色の軽石について、横山他の方法 (横山他 1986) に従って温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定を行った。

(3) 堆積物の記載とテフラ分析結果 (第204図、図版85)

以下に、各トレンチ堆積物や分析による火山ガラス等の特徴について述べる。

[トレンチ5 (第204図-上段図)]

土層は、堆積物の性状や色調から大きく5層に区分された。本トレンチでは、石器は出土していない。

- III a 層 (No. 1 ~ No. 3) : やや暗い黄褐色の軟質のローム質堆積物である。直径 1 mm 以下の白～黄色の軽石が点在する。現生痕が見られた。軽鉱物の含まれる割合が高く約72%前後である。火山ガラスは、少ないもののバブル型 Y 字状ガラス、軽石型の繊維状ガラス、急冷破碎型塊状ガラスが含まれ、急冷破碎型塊状ガラスがやや多く含まれる。
- III b 層 (No. 4 ~ No. 9) : 上位層よりやや明るい黄褐色の軟質のローム質堆積物である。現生痕が見られた。軽鉱物の含まれる割合が高く約37～64%である。火山ガラスは、少ないもののバブル型 Y 字状ガラス、軽石型の繊維状ガラスおよびスポンジ状ガラス、急冷破碎型塊状ガラスが含まれ、スポンジ状ガラスや急冷破碎型塊状ガラスがやや多く含まれる。
- IV b 層 (No.10～No.14) : 黄褐色の硬質のローム質堆積物である。重鉱物の含まれる割合がやや高く約44～69%である。火山ガラスは、少ないもののスポンジ状ガラスや急冷破碎型塊状ガラスなどが含まれていた。なお、IV a 層は、IV b 層の層相変化と思われる軟質のローム質堆積物であり、IV b 層とは波状に接する。
- V 層 (No.14～No.17) : 淡黒褐色の礫混じり粘土質堆積物である。上部は粘性のある粘土であるが、下部は最大15mm のくさり礫を含む粘土である。軽鉱物の含まれる割合が71～88%である。火山ガラスは非常に少なく、スポンジ状ガラスや急冷破碎型塊状ガラスなどが含まれる。
- VI 層 (分析無し) : 茶褐色の礫混じり粘土質堆積物である。最大 3 cm のくさり礫を多く含む。

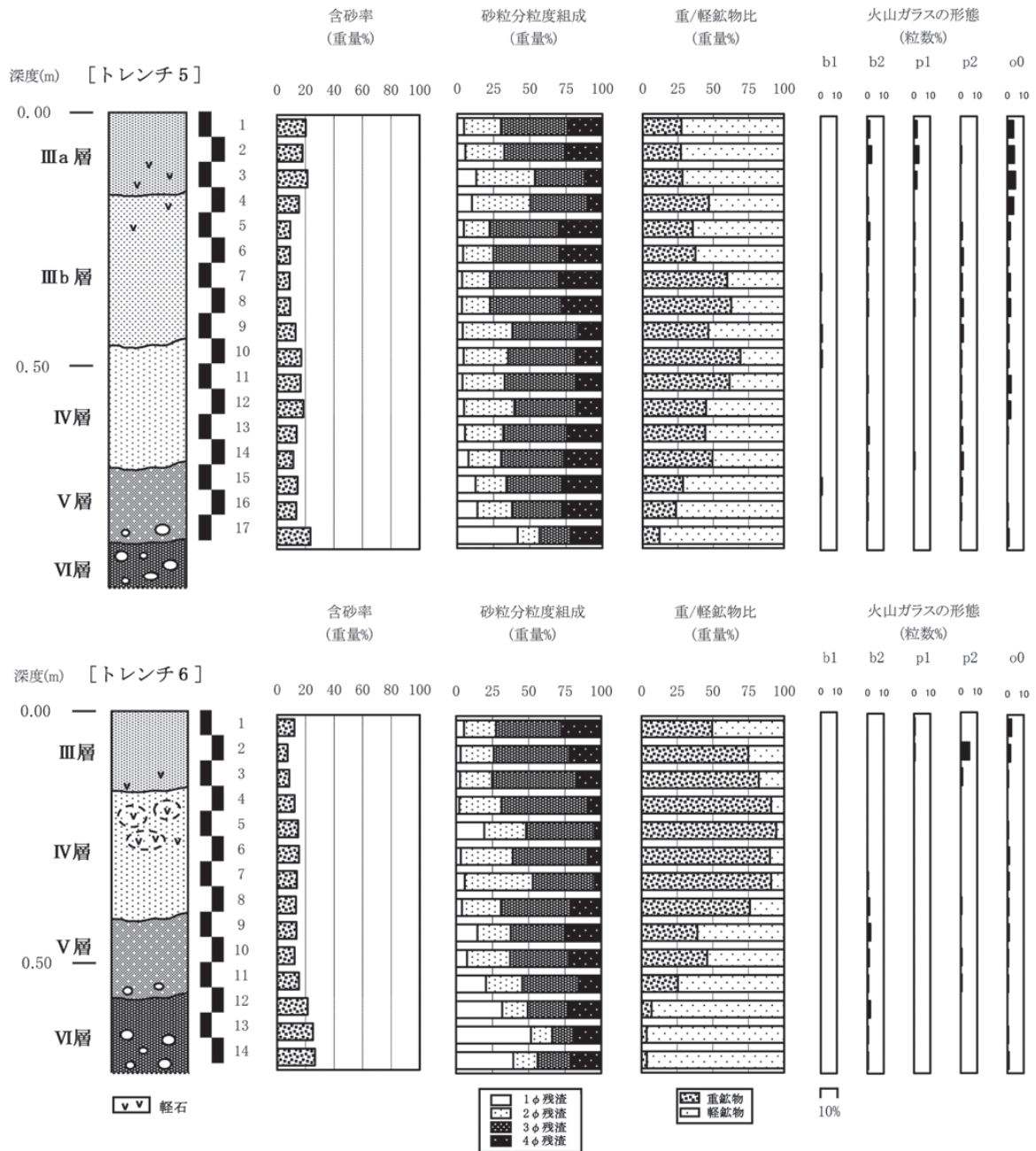
〔トレンチ 6（第204図－下段図）〕

土層は、堆積物の性状や色調から大きく 4 層に区分された。

- III 層 (No. 1 ~ No. 3) : やや暗い黄褐色の軟質のローム質堆積物である。直径 1 mm 以下の白～黄色の軽石が点在する。現生痕が見られた。軽鉱物の含まれる割合が高く42～82%前後である。火山ガラスは、少ないもののスポンジ状ガラスや急冷破碎型塊状ガラスなどが含まれていた。
- IV b 層 (No. 4 ~ No. 8) : 上位層よりやや明るい黄褐色の硬質のローム質堆積物である。直径 1 mm 以下の白～黄色の軽石が集合したブロック状に見られ、全体として硬質である。上部には、炭化材の小片が含まれていた（放射性炭素年代測定を参照）。軽鉱物の含まれる割合が高く約76～94%である。火山ガラスは、少ないものの急冷破碎型塊状ガラスなどが含まれていた。
- V 層 (No. 9 ~ No.11) : やや暗い黄褐色の硬質の粘土質堆積物である。重鉱物の含まれる割合がやや高く約53～74%である。火山ガラスは、少ないもののスポンジ状ガラスや急冷破碎型塊状ガラスなどが含まれていた。
- VI 層 (No.11～No.14) : 茶褐色の礫混じり粘土質堆積物である。最大 4 cm のくさり礫を含む。軽鉱物の含まれる割合が93～96%である。火山ガラスは、バブル型 Y 字状ガラスや急冷破碎型塊状ガラスなどがわずかに含まれていた。

(4) 白～黄色軽石の屈折率測定

トレンチ 6 の IV b 層中では、直径 1 mm 以下の白～黄色の軽石が集合したブロック状に見られたが、



第204図 各トレンチ堆積物の粒度組成、重鉱物 / 軽鉱物比、火山ガラスの形態分布図 [火山ガラスの形態]

b1 : バブル型平板状ガラス, b2 : バブル型Y字状ガラス, p1 : 軽石型繊維状ガラス
 p2 : 軽石型スポンジ状ガラス, o0 : 急冷破碎型塊状およびフレーク状ガラス

篩分けでは風化が著しく、火山ガラスとして十分に抽出できなかった。そこで、軽石粒子を取り出しガラス片 5 点の屈折率を測定した（図版85-7・8）。

火山ガラスの屈折率を測定した結果、範囲1.5023-1.5039（1.5039, 1.5037, 1.5023, 1.5030, 1.5033）、平均1.5032であった。

（5） 考察

2箇所の特レンチにおいて5 cm 間隔に連続試料を採取し、それぞれ水洗篩分けを行った。その結果、主に上位層のⅢ～Ⅳ層において、少ないもののスポンジ状ガラスや急冷破碎型塊状ガラスなどの火山ガラスが検出された。また、特レンチ6のⅣ層中に集合してブロック状に見られた白～黄色軽石の屈折率は、範囲1.5023-1.5039、平均1.5032であった。

これらの急冷破碎型ガラス（塊状・フレーク状）および軽石型ガラスは、その形態的特徴と屈折率特性から、山崎の立川ローム最上部ガラス質火山灰（UG 火山灰；Tachikawa Upper Glassy Ash）と同定される（山崎 1978）。山崎の記載（山崎 1978）によると、UG 火山灰のガラス形態は、小気泡を含むガラス塊状のものと、繊維束状のものとがあり、ガラス片には長石や輝石を伴うことが多い。ここで検出された火山ガラスは、塊状の急冷破碎型のガラスであり、従来の範囲1.500-1.503（町田・新井, 2003）と一致する。

UG 火山灰の噴出源は、浅間火山の可能性が考えられており、その分布と火山ガラスの形態的特徴や屈折率特性から、浅間火山の南東に分布する浅間-板鼻黄色軽石（As-YP）およびその直上の火山灰互層に連続すると考えられている（鈴木, 1991、町田・新井, 2003）。なお、UG 火山灰の噴出年代は、堆積物の¹⁴C年代測定などから約1.5～1.65万年前と考えられる（町田・新井, 2003）。

特レンチ6のⅣ層中の白～黄色軽石は、集合してブロック状に見られたことから、浅間-板鼻黄色軽石（As-YP）の降灰層準を示すと考えられる。

なお、両特レンチのⅣ層～Ⅴ層において、バブル（泡）型の平板状ガラスやY字状ガラスがわずかに含まれ、始良 Tn テフラ（AT）の可能性も考えられたが、特定の層準に集中しないため、明確なことは言えない。また、本遺跡Ⅳ層下部では、石器の形態などから武蔵野台地Ⅳ層上部の石器に対比される黒曜石製石器が出土しており、始良 Tn テフラ（AT）の上位層に相当することから、再堆積などの可能性も考えられる。

（6） まとめ

テフラ分析を行った結果、ブロック状白～黄色の軽石が含まれ、同層準において急冷破碎型ガラス（塊状・フレーク状）が特徴的に検出されたことから、浅間-板鼻黄色軽石（As-YP）およびその直上の火山灰互層に連続すると考えられているテフラ層と考えられた。なお、この軽石は、著しく風化していた。

引用・参考文献

- 町田 洋・新井房夫 2003 『新編火山灰アトラス』：336, 東京大学出版会。
 鈴木正章 1991 「立川ローム層最上部UG火山灰の層序と岩石化学的特性」『道都大学短期大学部紀要』25：87-97。
 横山卓雄・檀原 徹・山下 透 1986 「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25：21-30。
 山崎晴雄 1978 「立川断層とその第四紀後期の運動」『第四紀研究』16：231-246。

2 ローム層中炭化材の AMS 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷 薫・小林絃一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

(1) はじめに

浅見山 I 遺跡は、本市市内の丘陵地に所在する旧石器時代～中・近世の遺構や遺物からなる遺跡である。旧石器時代のトレンチ調査では、IV b 層下部から黒曜石製石器が出土した。ここでは、旧石器時代の黒曜石製石器が出土したトレンチ 6 の IV b 層上・中部から出土した炭化材について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った (試料採取位置については、本書第 11～13 図参照。なお、試料 No. 1 に関しては、第 11 図中に位置のみ記してあるが、IV 層のほぼ中位から採取した資料である)。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは、第 72 表のとおりである。なお、炭化材試料は、主に IV 層中の複数個所から採取した。ただし、小片が多く樹種を同定できる大きさではなかったがいずれも広葉樹であった。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 72 表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-10334	調査区: 浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遺構: Tr-6, 土柱より, IV b 層上部 試料 No. 1	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-10335	調査区: 浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遺構: Tr-6, I-I' 断面, IV b 層上部 試料 No. 2	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-10336	調査区: 浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遺構: Tr-6, I-I' 断面, IV b 層上部 試料 No. 3	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-10960	調査区: 浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遺構: Tr-6, M-M' 断面, IV b 層上部 試料 No. 4	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 不明 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1 N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス

(3) 結果

第 73 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第 205 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

第73表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (%)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-10334 試料 No. 1	-24.54 ± 0.16	22593 ± 75	22590 ± 80	較正曲線範囲外	較正曲線範囲外
PLD-10335 試料 No. 2	-26.36 ± 0.13	20499 ± 66	20500 ± 70	<u>22720BC (68.2%) 22430BC</u>	<u>22900BC (95.4%) 22250BC</u>
PLD-10336 試料 No. 3	-26.51 ± 0.13	21704 ± 73	21700 ± 70	較正曲線範囲外	較正曲線範囲外
PLD-10960 試料 No. 4	-28.16 ± 0.23	3791 ± 25	3790 ± 25	<u>2290BC (56.3%) 2190BC</u> 2170BC (11.9%) 2140BC	<u>2300BC (95.4%) 2130BC</u>

(4) 考察

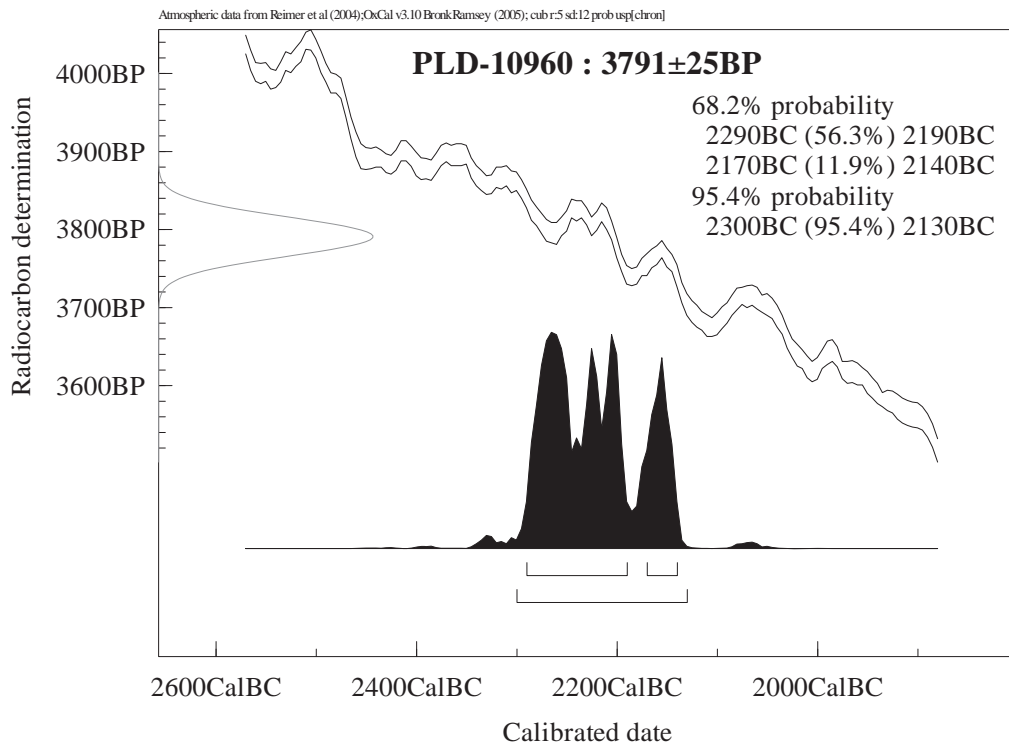
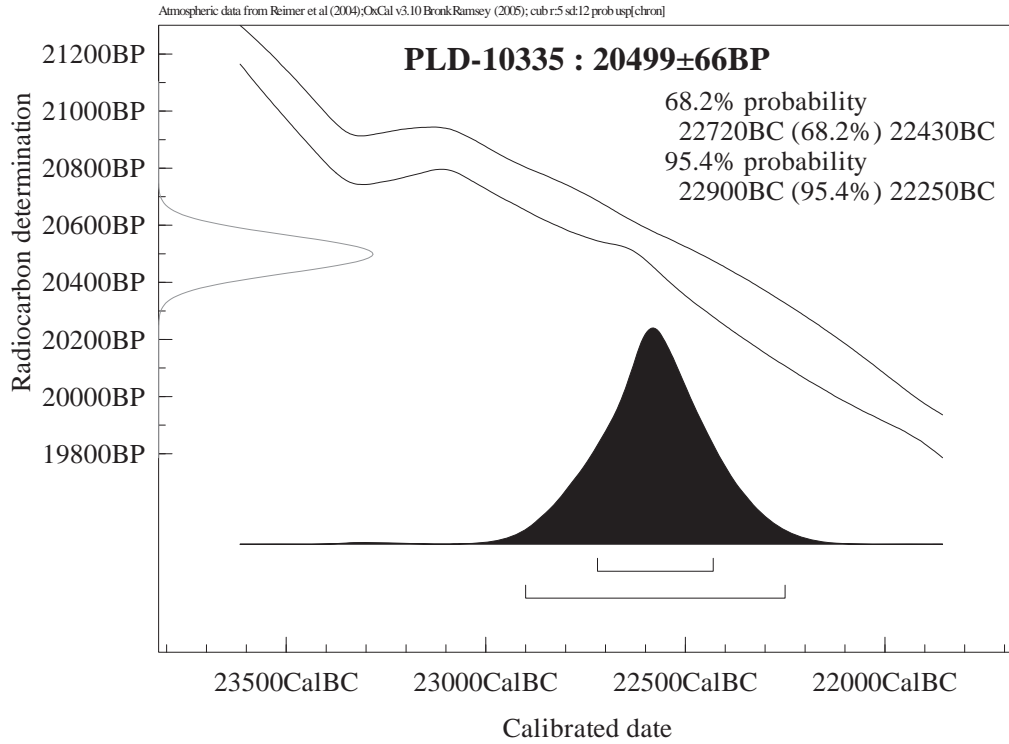
試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。なお、PLD-10334、10336については年代値が古く較正曲線範囲外であったため、¹⁴C年代のみを記載した。

測定した結果、試料 No. 1 や No. 2 あるいは No. 3 の年代値は、20500～22590yrBP を示す。これらの試料は、IV層の中部付近から出土した炭化材であるが、黒曜石製石器が出土した下位層の上限年代を示唆する年代値である。

なお、試料 No. 4 は、若い年代値が得られたが、植物根跡が見られ攪乱を受けたような土層であったことから、上位層から落ち込んだ炭化材と考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37 : 425-430.
- Bronk Ramsey, C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43 : 355-363.
- 中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』：3-20.
- Reimer, P.J.et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46 : 1029-1058.



第205図 試料No. 2 (PLD-10335) およびNo. 4 (PLD-10960) の暦年較正図

3 旧石器時代の黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

浅見山 I 遺跡のⅢ次調査では、丘陵斜面に堆積するローム質堆積物を掘り下げたトレンチのⅣ層下部～Ⅴ層から黒曜石製石器が出土した。ここでは、出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

(2) 試料と方法

分析対象資料は、旧石器時代の調査のために設定されたトレンチ 6 のⅣ層下部～Ⅴ層から出土した黒曜石製石器 11 点、表採および断面採集の黒曜石製石器 2 資料点の計 13 点である (第 75 表)。

試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジを用いて、表面の洗浄を行った。

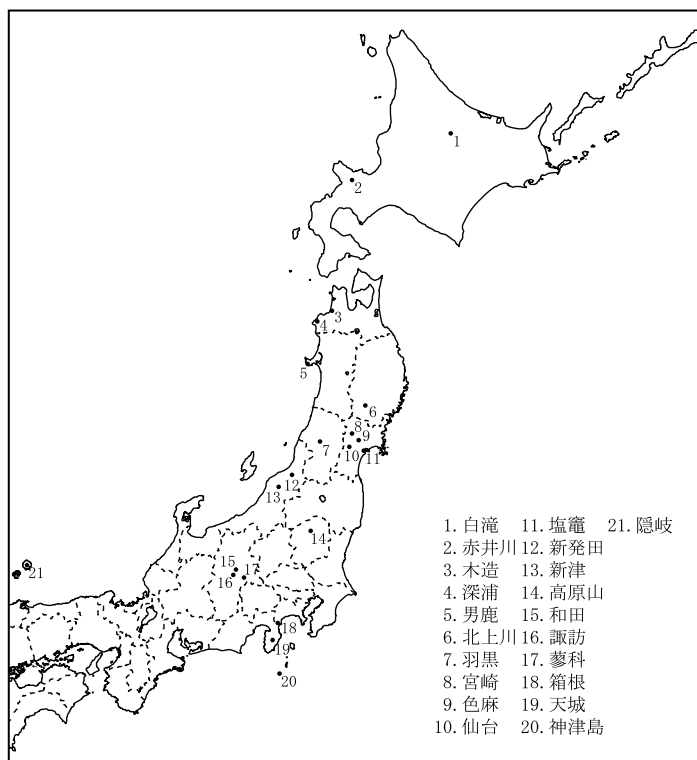
分析装置は、(株)セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA - 2001L を使用した。装置の仕様は、X 線管ターゲットはロジウム (Rh)、X 線検出器は Si (Li) 半導体検出器である。測定条件は、測定時間 300sec、照射径 10mm、電流自動設定 (1 ~ 63 μ A、デッドタイムが 20% 未満になるよう自動設定)、電圧 50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

黒曜石の産地推定には、蛍光 X 線分析による X 線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた (望月 2004 など)。本方法は、まず各試料を蛍光 X 線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) とルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps: count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\text{Log} (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた 2 つの判別図 (横軸 Rb 分率 - 縦軸 Mn 強度 100/Fe 強度の判別図と横軸 mSr 分率 - 縦軸 $\text{log} (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定するものである。

この判別図法は、原石同士の判別図が重複した場合、分離は不可能となるが、現在のところ、同一エリア内の多少の重複はあってもエリア間の重複は



第206図 黒曜石産地分布図 (東日本)

自然科学分析（浅見山 I 遺跡）

ほとんどないことから、産地エリアの推定には十分である。また、指標値に蛍光 X 線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせ、算出しているため、形状や厚みなどの影響を比較的受けにくいという利点があり、非破壊分析を原則とし、形状が不規則で薄い試料も多く存在する出土遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。

なお、厚みについては、かなり薄くても測定可能であるが、それでも 0.5mm 以下では影響をまぬかれないといわれる（望月 1999）。極端に薄い試料の場合、K 強度が相対的に強くなるため、 $\log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$ の値が減少する。また、風化試料の場合で

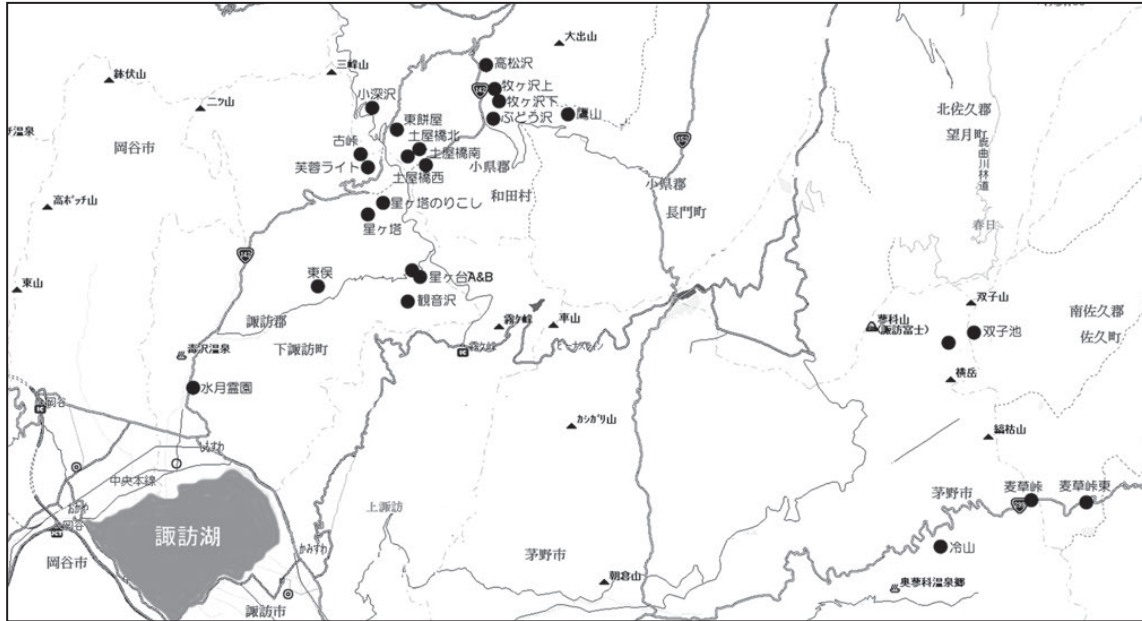
も、 $\log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$ の値が減少する（同上）。そのため、試料の測定面はなるべく綺麗で平坦な面を選び、測定した。測定結果が判別群からかけ離れた値を示した場合は、測定面を変更するか、あるいはメラミンフォーム製スポンジで再度表面の洗浄を行った後、何回か再測定を行って検証した。原石試料は、採取原石を割り新鮮な面を表出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第74表に各原石産地とそれぞれの試料点数、ならびにこれらのエリアと判別群名を示す。また、第206図に各原石の採取地分布図を、第207図に長野県のお原石採取地を示す。

(3) 分析結果

第208・209図に、黒曜石原石の判別図に出土遺物13点をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。8点が蓼科エリア冷山群 TSTY、3点が和田エリア鷹山群 WDTY、2点が和田エリア土屋橋西群 WDTN の範囲内にプロットされた。第75表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。なお、第75表中の試料 No. は、本書第 III 章第14～16図および第 1 表中の遺物番号に一致し、Ob No. は、調査時の遺物取り上げ番号である。

第74表 黒曜石産地（東日本）の判別群名称（望月 2004参考）

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地（点数）
北海道	白滝	八号沢群	STHG	赤石山山頂・八号沢露頭・八号沢・黒曜の沢・幌加林道（36）
		黒曜の沢群	STKY	
青森	赤井川	曲川群	AIMK	曲川・土木川（12）
	木造	出来島群	KDDK	出来島海岸（10）
秋田	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜（7）、八森山公園（8）
		金ヶ崎群	OGKS	
岩手	男鹿	脇本群	OGWM	脇本海岸（4）
		北上折居 2 群	KKO 2	北上川（9）
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前（10）
		湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉（40）
宮城	色麻	根岸群	SMNG	根岸（40）
		秋保 1 群	SDA 1	土蔵（18）
	秋保 2 群	SDA 2		
新潟	新発田	板山群	SBIY	板山牧場（10）
	新津	金津群	NTKT	金津（7）
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢（22）
		七尋沢群	THNH	七尋沢（3）、官川（3）、枝持沢（3）
長野	和田（WD）	鷹山群	WDTY	鷹山（20）、東餅屋（20）
		小深沢群	WDKB	小深沢（18）
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西（11）
	和田（WO）	ブドウ沢群	WOBD	ブドウ沢（20）
		牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下（20）
		高松沢群	WOTM	高松沢（19）
諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台（35）、星ヶ塔（20）	
蓼科	冷山群	TSTY	冷山（20）、麦草峠（20）、麦草峠東（20）	
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAV	芦ノ湯（20）
		畑宿群	HNHJ	畑宿（51）
		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋（20）
静岡	天城	上多賀群	HNKJ	上多賀（20）
		柏峠群	AGKT	柏峠（20）
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島（27）
		砂糠崎群	KZSN	砂糠崎（20）
島根	隠岐	久見群	OKHM	久見パーライト中（6）、久見採掘現場（5）
		箕浦群	OKMU	箕浦海岸（3）、加茂（4）、岸浜（3）



第207図 長野県の黒曜石産地分布図（望月 2004より転載、●が原石採取地）

第75表 分析対象資料と産地推定結果

試料 No.	出土地点	層位	Ob No.	備考	判別群	エリア
1	Tr. 6	IV層下～V層	2		WDTY	和田
2	Tr. 6	IV層中	8		WDTN	和田
4	Tr. 6	V層	31		WDTN	和田
16	Tr. 6	III層	30		WDTY	和田
17	Tr. 6	IV層	26		TSTY	蓼科
19	Tr. 6	IV層	17		TSTY	蓼科
20	Tr. 6	III層	47		TSTY	蓼科
22	Tr. 6	IV層下～V層	24		TSTY	蓼科
27	Tr. 6	V層	18		TSTY	蓼科
35	Tr. 6	IV層	39		TSTY	蓼科
36	Tr. 6		11		TSTY	蓼科
38	表採		82	尖頭器	WDTY	和田
40	調査範囲外南側法面				TSTY	蓼科

(4) おわりに

浅見山 I 遺跡Ⅲ次調査出土の黒曜石製石器13点について蛍光 X 線分析による産地推定を行った結果、8点が蓼科エリア産、5点が和田エリア産と推定された。

引用・参考文献

望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 一上和田城山遺跡篇一』：172-179, 大和市教育委員会.

望月明彦 2004 「殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『殿山遺跡 先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書』上尾市文化財調査報告第76集：272-282, 上尾市教育委員会.

4 赤色顔料の蛍光 X 線分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

浅見山 I 遺跡のⅢ次調査では、古墳時代前期後半の11基の方形周溝墓および同後期前半の2基の円墳が検出された。方形周溝墓群の内、7・11号方形周溝墓の周溝覆土下層では、かなりの量の赤色顔料が濃集する部分が見られた(本書第Ⅲ章第2節3、参照)。また、2号円墳では、周溝底面近くで出土した胴部下半から底部にかけ残存する壺の中に、赤色顔料がぎっしり詰まっていた(本書第Ⅲ章第2節4、参照)。時期が異なり、また出土状態も異なるが、いずれも墳墓に対する何らかの儀礼的行為の痕跡と見てよいであろう。

ここでは、古墳時代の3基の遺構から検出された赤色顔料について蛍光 X 線分析を行い、組成を検討した。

(2) 試料と方法

分析対象資料は、7号方形周溝墓と11号方形周溝墓および2号円墳から検出された赤色顔料である(図版 左段)。セロハンテープに資料を極少量採取して分析試料とした。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X 線管が最大50kV・1 mA のロジウムターゲット、X 線ビーム径が100 μ m または10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器(Xerophy)である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光 X 線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、1.00mA(自動設定による)、ビーム径100 μ m、測定時間500sに設定した。定量分析は標準試料を用いないFP(ファンダメンタル・パラメータ)法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため算出した値は誤差が大きく、参考値である。

また、採取した試料は光学顕微鏡下での観察も行い、赤色顔料の粒子形状を確認した。

(3) 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を、第210図に示す。

いずれもアルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)が検出された。

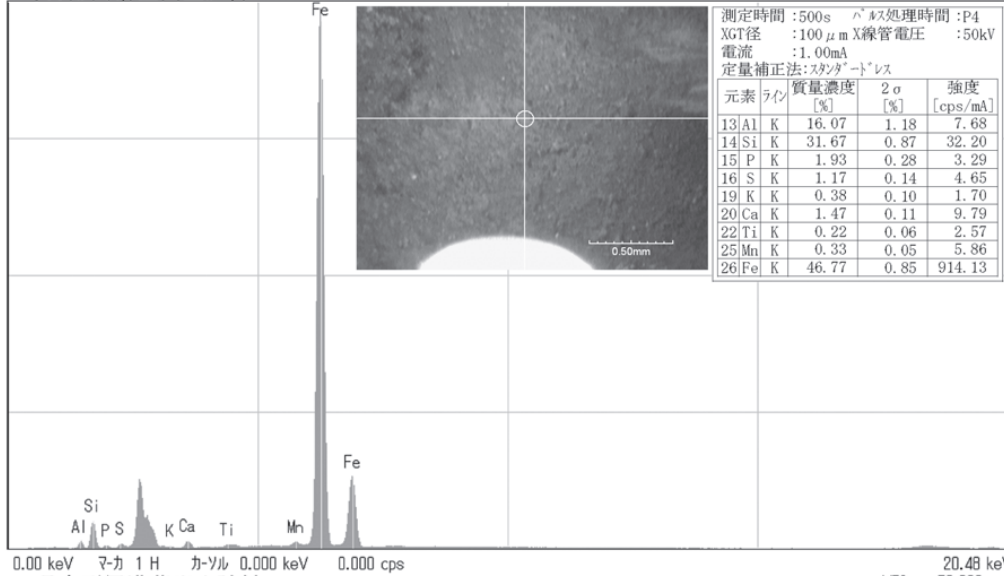
また、光学顕微鏡観察により得られた各画像を図版86右段に示す。

4. 考 察

古墳時代に主に使用されていた赤色顔料としては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は、硫化水銀(HgS)で鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは、狭義には三酸化二鉄(Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全

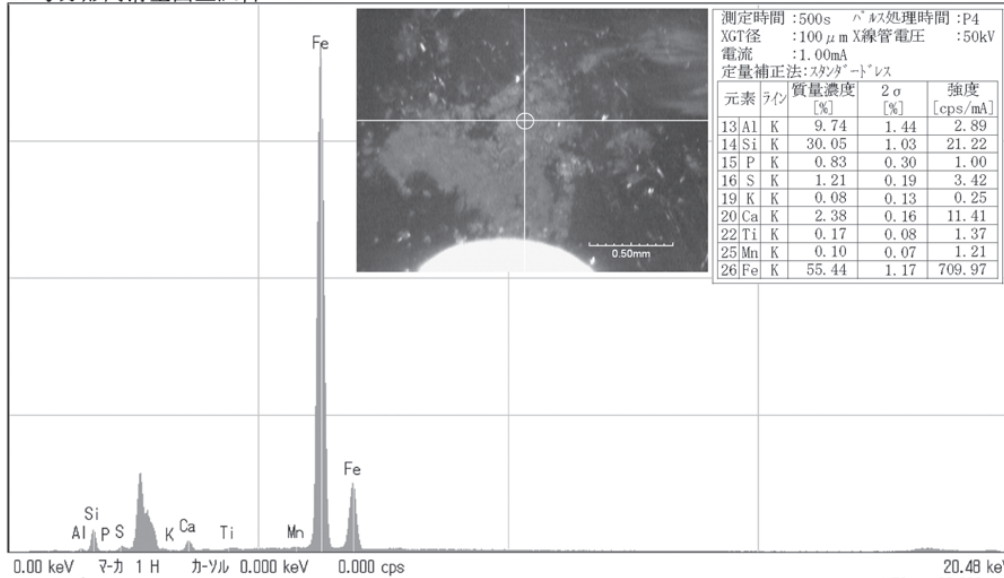
7号方形周溝墓出土試料

VFS 60.000 cps



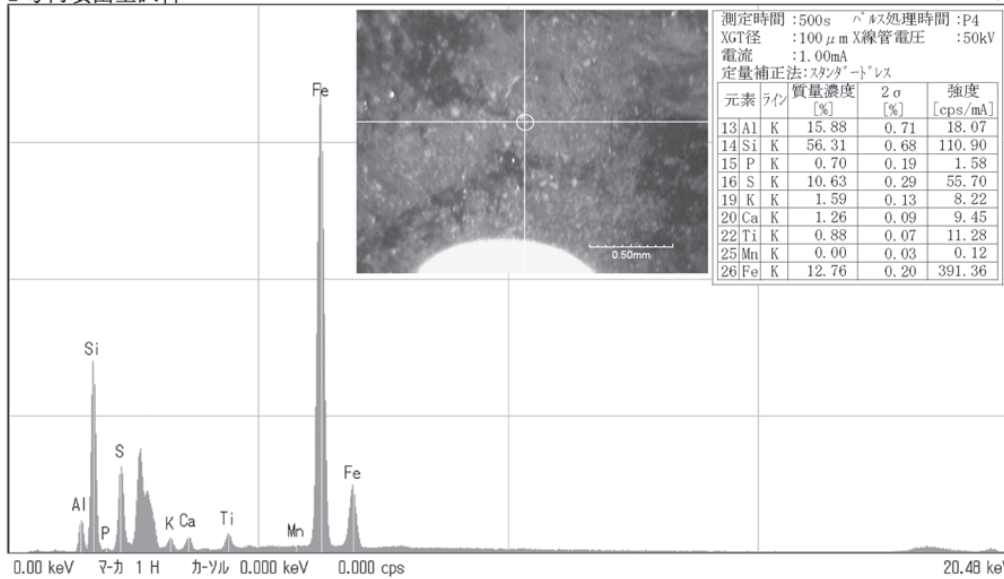
11号方形周溝墓出土試料

VFS 50.000 cps



2号円墳出土試料

VFS 30.000 cps



第210図 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果

般を指し（成瀬 2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは、直径約 $1 \mu\text{m}$ のパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており（岡田1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬 1998）。

分析試料からは、いずれもケイ素など土砂中の成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。一方、鉄がよく検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。また、7号方形周溝墓と11号方形周溝墓の試料は、とくに鉄の含有量が多いが、両者からは、光学顕微鏡下で観察したところ、パイプ状の粒子が観察された（図版86右段）。

5. おわりに

浅見山 I 遺跡Ⅲ次調査の方形周溝墓および円墳から検出された赤色顔料について分析した結果、いずれからも水銀は検出されず、鉄が検出され、鉄（Ⅲ）による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。また、そのうち7号方形周溝墓と11号方形周溝墓より採取した試料からは、パイプ状ベンガラが観察された。

引用・参考文献

- 成瀬正和 1998 「縄文時代の赤色顔料 I —赤彩土器—」『考古学ジャーナル』No438：10-14, ニューサイエンス社.
- 成瀬正和 2004 「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要』：13-61, 宮内庁正倉院事務所.
- 岡田文男 1997 「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』：38-39.

5 炭化材の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

浅見山 I 遺跡のⅢ次調査では、丘陵南東斜面で11基の方形周溝墓が検出された。このうち7号方形周溝墓の北西周溝の底面近くから比較的大型の炭化材が出土した。ここでは、この炭化材の樹種同定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、7号方形周溝墓の周溝から出土した大型と思われる炭化材(断片的な分布、長軸16cm, 幅5cm程度)である。炭化材は、カッターなどを用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)を採取し、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し銀ペーストを塗布した後、金蒸着を行った。観察および同定は、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV型)を使用した。

(3) 結果

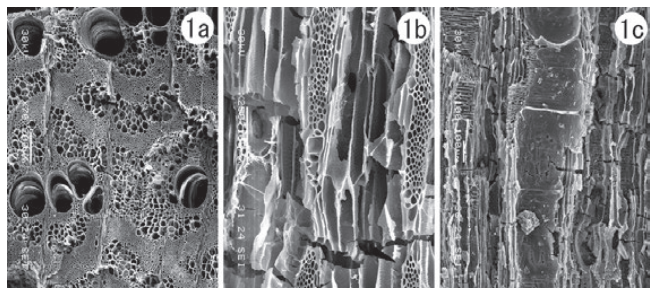
同定結果、炭化材は落葉広葉樹のケヤキであった。出土した炭化材は、円墳の周溝から出土した大型と思われる炭化材であり、如何なる理由で周溝内に埋没したかは不明である。ケヤキの材は、建築材、鋤鋤などの道具類、田下駄、削り物などに多く利用されているが(山田 1993)、方形周溝墓の周溝内から出土したことから祭祀に係わる木材であった可能性が高い。

以下に、同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

[1] ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 (第211図: 1a-1c)

年輪の始めに中型の道管が1~2層配列し、その後小型の道管が集合して接線状・斜状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性1~7細胞幅、4~50細胞高の紡錘形であり、上下端や縁に結晶細胞がある。

ケヤキは、暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く、木目が美しい。狂い安いので十分な乾燥が必要な材である。用途は建築材や容器が多い。



第211図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
1a. ケヤキ(横断面) 1b. 同(接線断面) 1c. 同(放射断面)

引用・参考文献

山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史」
『植生史研究』特別第1号: 242, 日本植生史学会.

第2節 久下東遺跡(Ⅲ次) B 1 地点出土資料の自然科学分析

1 S字状口縁台付甕の胎土材料

藤根 久・米田恭子 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われることが多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質な粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される(藤根・今村 2001)。一方、混和材としての砂粒物は、粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが想定される。例えば東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られ、これらのうち3分の1程度には砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが(藤根 1996、車崎他 1996)、これら火山ガラスは採取される粘土層の上下層に分布するテフラ層と考えられる。このように、混和材は、砂層の特徴を示す可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現河川砂と比較する方法では問題が大きい。そのため、採取地の段丘堆積物中に挟まれる砂層などとの比較検討が必要である。ここでは、土器胎土分析にあたって、土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分に検討した上で、同一の特徴を持つと思われる周辺地域の粘土層や砂層などと比較検討を行う。

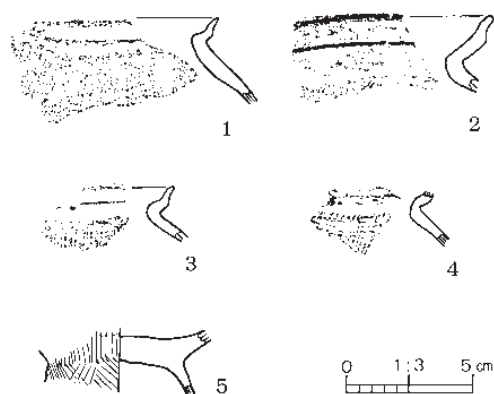
久下東遺跡は、本庄市北堀地内の低位段丘上に位置する縄文時代から中・近世にかけての遺跡である。Ⅲ次調査の調査範囲では、古墳時代前期の住居跡が検出され、また、古墳時代前期以降の時期の遺構からも、破片資料ではあるが、東海系のS字状口縁台付甕が出土した。ここでは、S字状口縁台付甕の胎土について、粘土や砂粒物の特徴を調べた。

(2) 試料と方法

試料は、住居跡(31・61・72号住居跡)、3号地下式壙から出土した古墳時代前期のS字状口縁台付甕(以下、S字甕と呼ぶ)5試料である(第212図1～5、第76表)。なお、古墳時代前期に属する可能性があるのは、72号住居跡のみである。

各胎土分析試料は、以下の方法で偏光顕微鏡用の薄片プレパラートを作製した。

a. 試料を岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し平面を作製した後、同様に平面の固化処理を行った。



第212図 胎土材料を検討したS字状口縁台付甕

第76表 胎土材料を検討した土器試料とその特徴

試料No.	器種	出土遺構	出土位置	部位	備考	その他特徴
1	S字状口縁台付甕	72号住居跡	一括	口縁部	口縁部外面ヨコナデ	中黒サンドイッチ構造
2	S字状口縁台付甕	3号地下式墳	一括	口縁部	口縁部外面ヨコナデ	中黒サンドイッチ構造
3	S字状口縁台付甕	31号住居跡	一括	口縁部	口縁部外面ヨコナデ	中黒サンドイッチ構造
4	S字状口縁台付甕	3号地下式墳	一括	口縁部	口縁部外面ヨコナデ	中黒サンドイッチ構造
5	S字状口縁台付甕	61号住居跡	床面	台		中黒サンドイッチ構造

b. 研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドガラスに接着した。

c. 精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げに研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各土器の薄片は、偏光顕微鏡を用いて、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、孢子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

〔放散虫化石〕

放散虫は放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

〔珪藻化石〕

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数100 μ m程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。小杉（1988）や安藤（1990）によって堆積環境の復原のため環境指標種群が設定されている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（不明種）とした。

〔骨針化石〕

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産も日本列島で23種ほどあり、湖や池あるいは川底に横たわる木材や貝殻などに付着して生育する。

〔植物珪酸体化石〕

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、種類によって大きさが異なるが主に約10～50 μ m前後である。一般的にプラント・オパールと呼ばれ、イネ科草本やスゲなどに存在する。

〔孢子化石〕

孢子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30 μ m程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

〔石英・長石類〕

石英あるいは長石類は、無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

〔長石類〕

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）であ

る。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

〔雲母類〕

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。

〔輝石類〕

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的に淡褐色や淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。 $\text{SiO}_2\%$ が少ない深成岩、 $\text{SiO}_2\%$ が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として $\text{SiO}_2\%$ が中間から少ない火山岩によく見られ、 $\text{SiO}_2\%$ の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

〔角閃石類〕

主として普通角閃石であり、肉眼的には黒色から黒緑色であり、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような $\text{SiO}_2\%$ が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

〔ガラス質〕

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて彎曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。

〔斑晶質〕

長石類などの結晶からなる斑晶構造を呈する。火山岩類である。

〔凝灰岩質〕

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山碎屑物などから構成され、全体的に非晶質である。

〔複合石英類〕

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒から細粒なものまで様々であるため、ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未滿を微細、0.01~0.05mmを小型、0.05~0.1mmを中型、0.1mm以上を大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

〔片理複合石英類〕

片理複合石英類は石英などが片理状に複合する。結晶片岩などの片岩類の特徴である。

〔砂岩質・泥岩質〕

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子

自然科学分析（久下東遺跡）

の大きさが約0.06mm以上を砂岩質とし、約0.06mm未満を泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

（3） 結 果

土器胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、薄片プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成と、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。第77表の微化石類や砂粒あるいは鉱物の出現頻度は、◎が特徴的に多い、○が多い、△が少ない、空欄は未検出を示す。

No.1：平均粒径80 μ m～1mm（最大粒径1.4mm）。石英・長石類>砂岩質、複合石英類（微細）>片理複合石英類>複合石英類、凝灰岩質、斜長石（双晶）、斑晶質、斜方輝石、単斜輝石多い、角閃石類、雲母類、ガラス質、骨針化石、植物珪酸体化石含む。

No.2：平均粒径120～750 μ m（最大粒径1.2mm）。斜長石（累帯）>石英・長石類>砂岩質、複合石英類（微細）>斑晶質、斜長石（双晶）、斜方輝石、複合石英類、片理複合石英類、角閃石類、単斜輝石、雲母類、凝灰岩質、ガラス質、珪藻化石（不明種）、骨針化石多い、孢子化石、植物珪酸体化石多い。

No.3：平均粒径100～800 μ m（最大粒径1.95mm）。石英・長石類>複合石英類（微細）、砂岩質>斑晶質、斜長石（双晶・累帯）、片理複合石英類、ガラス質、完晶質、斜方輝石、角閃石類、単斜輝石、雲母類、放散虫化石、珪藻化石多い（沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia pectinalis* var.undulata、淡水種 *Pinnularia* 属・*Cymbella* 属・*Eunotia* 属・*Diploneis* 属・*Nizschia* 属・*Surirella* 属、不明種破片多産）、骨針化石、孢子化石多い、植物珪酸体化石含む。

No.4：平均粒径80～800 μ m（最大粒径1.3mm）。複合石英類>砂岩質、複合石英類（微細）>斑晶質、石英・長石類、片理複合石英類、斜長石（双晶・累帯）、斜方輝石、完晶質、角閃石類、雲母類、ガラス質、放散虫化石、珪藻化石多い（海水種 *Coscinodiscus* 属 / *Thalassiosira* 属、沼沢湿地付着生指標種群 *Gomphonema acuminatum*、淡水種 *Pinnularia* 属・*Cymbella* 属・*Eunotia* 属・*Diploneis* 属・*Nizschia* 属、不明種多産）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石、植物遺体含む。

No.5：平均粒径100～750 μ m（最大粒径1.6mm）。石英・長石類>複合石英類>複合石英類（微細）、砂岩類>片理複合石英類、斑晶質、斜長石（双晶）、完晶質、斜方輝石、角閃石類、単斜輝石、ガラス質、雲母類、ジルコン、放散虫化石、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia praerupta* var.bidens、淡水種 *Cymbella* 属・*Eunotia* 属・*Diploneis* 属・*Surirella* 属、不明種）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石含む。

（4） 考 察

i) 微化石類による材料粘土の分類

検討した土器胎土薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100 μ m（実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μ m程度）、骨針化石が10～100 μ m前後である（植物珪酸体化石が10～50 μ m前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、

粘土が約 $3.9\mu\text{m}$ 以下、シルトが約 $3.9\sim 62.5\mu\text{m}$ 、砂が $62.5\mu\text{m}\sim 2\text{mm}$ である（地学団体研究会・地学事典編集委員会編 1981）。植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれている可能性があるものの、土器の製作場所などで灰質が多く混入する可能性あることから、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、粘土部分に含まれる微化石類により、a. 淡水成粘土を用いた胎土、b. 水成粘土を用いた胎土の2種類に分類された（第77表）。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

a. 淡水成粘土を用いた胎土（No.3、4、5）

これらの胎土中には、淡水種の珪藻化石が特徴的に多く含まれていた（図版87：1-3c, 3d, 4c, 5d）。珪藻化石には沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia pectinalis* var. *undulata* などが見られたことから、沼沢湿地環境で堆積した粘土を利用していることが推定される。なお、これら胎土中には、放散虫化石や海水種珪藻化石 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、骨針化石が含まれていた。

b. 水成粘土を用いた胎土（No.1、2）

これらの胎土中には、水成環境を指標する不明種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。

第77表 S字状台付甕胎土の粘土と砂粒の特徴

試料No.	器種	粘土の特徴						砂粒の特徴						鉱物の特徴				その他の特徴				
		種類	放散虫化石	珪藻化石 海水種	珪藻化石 淡水種	珪藻化石 不明種	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン		角閃石類	輝石類	雲母類	植物珪酸体化石
1	S字状口縁台付甕	水成					△		Ca	○		○	△	△		△		△	◎	○	△	
2	S字状口縁台付甕	水成				△	△	△	Cd	△		○	○	△		△		△	◎	○	○	
3	S字状口縁台付甕	淡水成	△		◎	◎	△	○	Cd	△		◎	○	△		△		△	◎	○	○	沼沢湿地成
4	S字状口縁台付甕	淡水成	△	△	○	◎	△	○	Cd	△		◎	○	△		△		△	◎	○	○	沼沢湿地成、植物遺体
5	S字状口縁台付甕	淡水成	△		○	◎	△	○	Cd	△		◎	○	△		△		△	◎	○	○	沼沢湿地成

ii) 胎土中の砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的な特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第77表）。岩石の推定は、片理複合石英類が片岩類、複合石英類（微細）や砂岩質などが堆積岩類、複合石英類が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、斑晶質が火山岩類、流紋岩質が流紋岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）である。さらに、推定した起源岩石は、第78表の組み合わせに従って分類した。

分類した結果、No.1の胎土中の砂粒組成が堆積岩類を主として片岩類を伴うCa群、No.2～No.5の胎土中の砂粒組成が堆積岩類を主として火山岩類を伴うCd群であった。

iii) 胎土材料の特徴

以上をまとめると、S字甕の粘土材料は、試料No.1およびNo.2が骨針化石や珪藻化石（不明種）を少量含む水成粘土であり、試料No.3～No.5が淡水種珪藻化石を多く含む沼沢湿地成粘土であった。

一方、混和材の砂粒組成は、No.1が堆積岩類を主として片岩類を伴う砂粒組成、No.2～No.5が堆積岩類を主として火山岩類を伴う砂粒組成であった。

第78表 試料中の岩石片の分類と組み合わせ

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

試料No.3～No.5のS字甕胎土中には、放散虫化石あるいは海水種珪藻化石が含まれているが、これらは中期中新世の海成層に由来する化石群と考えられる。また、砂粒組成は、堆積岩類のほかいずれも片岩類を含むことから、基盤層として片岩類が分布する地域の堆積層から採取されたと考えられる。

例えば、久下東遺跡の南側至近の位置にある浅見山丘陵を形成する地層は、第四紀に形成された高位段丘層の浅見山礫層であり、チャートと砂岩、粘板岩等の礫を主体としている。なお、新第三紀層の砂岩、泥岩、三波川結晶片岩の礫も少量含まれている（早稲田大学 1999）。現地調査では、礫層ではあるがくさり礫が多く、場所によっては比較的粘土化が進んだ地層も観察された。

一方、山地の群馬県藤岡から埼玉県児玉にかけての地域では、中期中新世の海成層や中・古生界の三波川帯の片岩類（結晶片岩）が分布する（日本の地質『関東地方』編集委員会編 1988）。

S字甕のNo.1およびNo.2の粘土材料は、少なくとも堆積岩類あるいは片岩類が基盤層として分布し、比較的新しい時代に堆積したと考えられる水成堆積物を利用している。一方、S字甕のNo.3～No.5の粘土材料は、海成層あるいは堆積岩類が基盤層として分布し、比較的新しい時代に堆積したと考えられる沼沢湿地成の堆積物を利用している。また、いずれも火山岩類からなる砂粒を伴うことから、火山岩類が分布する地域でもある。

こうした特徴を持つ地域は、遺跡周辺を含めた埼玉県北部地域から群馬県藤岡地域にかけてと考えられ、在地あるいは比較的近隣の地域の材料を利用して製作されたと推定される。

(5) おわりに

S字甕の胎土薄片を作製し観察した結果、粘土材料には2種類の粘土があり、珪藻化石などを含む水成または沼沢湿地成粘土を利用していることが確認された。また、混和材の砂粒には堆積岩類や片岩類、あるいは火山岩類を含む遺跡周辺の比較的隣接した地域の砂粒組成であり、在地あるいは比較的近隣地域の材料を利用して製作された土器と理解された。

今後は、周辺地域において土器材料に適した粘土層の調査を行って、土器胎土と比較することにより具体的に土器作りについて検討することが可能と考えられる。

引用・参考文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標种群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42,2 : 73-88.
- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編 1981 『増補改訂 地学事典』: 1612, 平凡社.
- 藤根 久 1998 「東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料」『第6回東海考古学フォーラム岐阜大会, 土器・墓が語る』: 108-117.
- 藤根 久・今村美智子 2001 「土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」『波志江中宿遺跡』: 262-277, 日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標种群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 : 1-20.
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子 1996 「土器胎土の材料—粘土の起源を中心に—」『日本考古学協会第62回大会研究発表要旨』: 153-156.
- 日本の地質『関東地方』編集委員会編 1988 『日本の地質3 関東地方』: 335, 共立出版.
- 早稲田大学 1999 『大久保山V』: 176, 早稲田大学.

第Ⅷ章 発掘調査の成果と課題

第1節 浅見山Ⅰ遺跡Ⅲ次調査の成果と課題

1 旧石器時代の石器について

(1) 旧石器時代の石器

今回の発掘では、7箇所のトレンチで旧石器時代の調査を行っている。その結果、トレンチ6から54点、トレンチ7から1点の石器がローム層中から検出された。また、表採および、他の時代の遺構の覆土などからも、旧石器時代に属すると判断できる石器62点が見つかり、計117点の石器が発掘されるにいたった。

ローム層から見つかった石器は、Ⅳ a・b層下部～Ⅴ層を中心に、Ⅲ b層～Ⅵ層までの出土の幅を持って出土している。炭化物によるAMS法を用いて¹⁴C年代測定や、火山灰などの分析も行っているが、調査区が傾斜地にあたるため、その結果のみから石器群の年代的な位置づけはできないようである。

ここでは、出土した石器群を、定形的な石器や剥片剥離技術などからみて、その年代的な位置づけを述べるとともに、周辺の地域で出土している資料群もあわせ、考えてみたい。

(2) 出土した石器群の様相

出土した石器は、定形石器の形態や剥片剥離技術などから、いくつかの異なる時期に属すると考えられる。

まず、トレンチ出土のものは、形態的には、背面の剥離方向が、多くは腹面と同方向となる縦長のものが多く、中には、両側縁が平行するようなものも見られる(第14・15図)。形態は、完形を見るかぎり、やや寸詰まりであるが、第14図19のように長めで両側縁と稜が平行する優美な石刃もある。打面の調整はあまり顕著ではないが、行っているものも認められる。作業面に明確に調整を施して稜を作出しているものは、破損品が1点あるだけである。原石などの小口部分を剥離している縦長剥片が認められることから、あまり、作業面の調整を施すことなく、原石あるいは石核素材の特徴を生かし、剥離を行っていると考えられる。こうした特徴から、トレンチ出土の石器群では、打面をある程度固定し、連続して、縦長の剥片、あるいは石刃を目的的な剥片として剥離する技術が主に用いられていると考えてよいであろう。

製品としては、ナイフ形石器2点と二次加工を有する剥片(RF)、微細な剥離痕を有する剥片(UF)があるが、ともに上記の剥片剥離技術から得られた剥片を素材としており、同一の技術体系の中で残されたものであろう。ナイフ形石器の形態は、2点とも二側縁加工のもので、第14図1は「茂呂型ナイフ形石器」で、同図2は先端部に平坦な加工が施されるのが特徴の一つとしてあげられる。

トレンチ以外で出土した石器も、そのほとんどが、トレンチ6出土の石器群と同様の特徴をもつ(第16図)。トレンチ6出土の石器に比べ、背面の剥離方向が多方面から入っているものもいくつか見られるが、それほど顕著な差異とは捉えられない。石材も頁岩1点、チャート2点を除き、すべて透明感のある黒曜石で、トレンチ出土のものと同様の類似するものも多数認められる。

しかし、このような石器以外に定形的な石器として、8号周溝墓周溝内出土の荒屋型彫刻刀形石器（第16図37）と表採の有樋尖頭器（同図38）がある。また6号方形周溝墓の周溝内から出土している黒曜石製の二次加工を有する剥片（第16図39）は、平坦な二次加工の施し方や、礫面を裏面に置く素材の用い方などが有樋尖頭器（同図38）と類似しており、同じ段階においてもよいであろう。トレンチ外からはもう1点定形的な石器として、表採の搔器（第16図40）がみついているが、これに関しては厚手でやや軸がよじれるものの、背面に同方向の剥離痕の残る剥片を素材として用いており、使用石材もob2に類似していることから、トレンチから出土している石器群と同段階のものとして理解できる。

（3）小結

以上のことから、今回の調査で出土した旧石器時代の石器は、大きく以下の3つの石器群に分類することができる。

- ①：連続する縦長剥片の剥離を素材獲得の主な技術とするナイフ形石器石器群
- ②：有樋尖頭器をもつ石器群
- ③：荒屋型彫器をもつ石器群

このうち、①の石器群が今回の調査で出土した石器群の主体をなしており、他の2つの石器群は製品が単独に近い形で検出されたものである。

①の石器群に関しては、縦長剥片あるいは石刃を連続的に剥離し、それを素材とした二側縁加工のナイフ形石器を製作するといった特徴から「砂川期」、大宮台地の編年（田代 1997）や、本遺跡の浅見山丘陵や本庄台地のある埼玉県北部地域の編年（村松 1997、以下「埼玉編年」）ではV期にあたるものと考えられる。大久保山遺跡では、かつて、早稲田大学の調査地点から蛇紋岩製の石刃石核が1点出土しており、この時期に比定してもよいであろう（昆・佐々木・荒川他 1980）。石刃や縦長剥片を素材としたやや小型のナイフ形石器にスクレイパーが伴う石器群は、寄居町赤浜牛無具利遺跡（寄居町遺跡調査会 2006）をはじめ、埼玉県北部地域でも比較的まとまった資料があり、第16図40のスクレイパー（搔器）も含め、当該期の石器群が、本遺跡の主体であるといえるであろう。

②の石器群に関しては、有樋尖頭器という定形石器をメルクマークに中部から関東を中心に広い範囲で検出されているが、時期的には武蔵野台地のIV下段階から砂川期さらには尖頭器石器群、「埼玉編年」ではIV～VI期という広い幅が与えられている。有樋尖頭器の製作の痕跡を残す遺跡が偏在する傾向があり、単独出土の遺跡が多いため、共伴する石器群が未だ明確ではないため、議論の対象となっているのである。同一の遺跡で「砂川期」の二側縁加工のナイフ形石器とともに出土していても、使用石材や分布などで差異が見出せるなど共伴にいまひとつ不安がのこる例が多い。埼玉県内では、武蔵野台地に位置する西武蔵野遺跡において、まとまった出土が認められるが、同様の理由などから、「砂川期」よりも古い「IV下段階」に比定されている（西井 1996）。

当遺跡でも、第16図39のような類似した形態の石器が1点あるものの、ほぼ単独の出土で、さらに表採資料でもある（第16図38）。当遺跡の主体をなす、「砂川期」に比定される①の石器群との共伴は、明確には述べがたい。ただし、使用石材は、透明度が高くモヤ状の部分がある黒曜石で、①の石器群で主に使用されているものと類似している。

周辺では本庄市内の地神遺跡、滑川町の中村遺跡、熊谷市の籠原裏遺跡などで出土例があるが、いずれも単独出土である（村松 前掲）。ここでは、二側縁加工のナイフ形石器との共伴の可能性が高いが明確ではないということで保留しておきたい。近年、栃木県、群馬県など北関東地域での発見例も増加しており、この石器群の年代的な位置づけ、あるいは、「砂川期」と段階的には同じでも、併存する異なる石器群である可能性、中部と南関東を結ぶ分布や使用石材を通じた移動や領域の問題などこれからも議論すべき点を多くもつ石器群である。

③の石器群は、細石刃石器群に伴うもので、「埼玉編年」ではⅥ期にあたる。特に、荒屋型彫刻刀形石器は、湧別技法を含む削片系、いわゆる「北方系細石刃石器群」に特徴的なもので、使用石材に硬質頁岩を用いることもその特徴の一つである。同様の石器群は、当該地域では、江南台地に位置する白草遺跡で細石刃、細石刃核、彫器などまとまった資料が検出されている（川口 1993）。埼玉県北部地域は、円錐形の細石刃核を伴う石器群も検出され、両者の広がりや関係を考える上で興味深い地域の一つであるが、その中で白草遺跡は今のところ「北方系細石刃石器群」の分布の南縁とされている。近年、群馬県桐生市大祐雄院前遺跡（北関東細石器グループ 2006・2008）、前橋市鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡（前橋市埋蔵文化財発掘調査団編 1999、北関東細石器グループ 2007）など北関東でもまとまった資料が発見されており、「北方系細石刃石器群」の受容と定着の問題が改めて提起されている。今回の資料（第16図37）は単独出土ではあるが、こういった問題を考える上でも重要な資料であると考えてよいであろう。

以上、今回の調査で出土した旧石器時代の石器についてまとめた。当遺跡の位置する浅見山丘陵、本庄台地を含め、埼玉県北部地域ではまだまだ旧石器時代の石器の発見例は少ない。しかし、当該地域は、石器の材料となる優良な石材を産する「原産地」である中部や北関東地域と、そのような石材が少なく「消費地」と考えられる南関東平野部とを結ぶ地域ともいえる。今回の調査では、資料数はあまり多くはないものの、時期的に異なる複数の石器群の存在を確認することができ、それぞれの時期において提示されている問題点を考える上で貴重な情報を得ることができたといえる。今後の周辺地域での調査においても有意義なことであると考えている。（亀田 直美）

2 縄文時代の石器について

（1）遺跡の様相

今回の調査では大量の縄文時代の石器が検出された。遺構に伴うものは少量であったが、非常に貴重な石器群が検出された。主な石器としては、石鏃、磨製石斧、打製石斧、礫器、スクレイパー類、スタンプ形石器、敲石、特殊磨石、磨石、凹石などがあげられる。その他、今回は制約上報告し得なかったが、大量の剥片類が検出されている。これらの剥片類は本遺跡で石器製作が行われていたことを示しており、打製石斧、礫器、スクレイパー類の素材となる石材の剥片が多いことが注目される。通常打製石斧が多いとされる縄文時代中期の遺跡では、剥片石器の製作剥片は纏まって検出されることはあるが、打製石斧の製作剥片を大量に検出することはまれである。おそらく中期の打製石斧は重い石器石材を居住地内に搬入するコストを削減するために、河原で石器製作を行ったものと思われる。それは台石を用いた両極敲打技法（中島1985・久保田 2006）による打製石斧の製作が確立ないし普

及したために起きた現象と考えられよう。両極敲打技法による打製石斧製作では製作時間が5分程度であり、わざわざ原石の運搬という労働コストをかける必要がなかったと思われる。両極敲打技法は社会的要請によってか大量の打製石斧が必要であり、その中から確立普及した技法であるといえる。一方、今回の調査では製作剥片が大量に出土しているところから、中期的製作を本遺跡に照射し、本地点に素材となる礫床が露出している可能性を考えたが、チャートの礫が露出しているものの主な石器石材である凝灰岩、ホルンフェルス、安山岩などは認められなかった。また、石器群も両極敲打技法が一般的とはいいがたく量産技術は安定的ではない。この2点から素材原石は付近の河原等の礫床が露出している場所から本遺跡に搬入され石器製作が行われたと考えるのが妥当であると思われる(本遺跡が丘陵ごと削平されるため、削平時に現地で露出している礫層下にも礫層があるのではないかと考え立ち会ったものの、礫は存在するが非常に軟弱で石器製作は不能なものばかりであった)。石器群の中心的時期は早期前半と早期末から前期初頭であり、本遺跡の状況から考えると、当該期までは少なくとも中期的な打製石斧製作は行われていなかったといえよう。

(2) 打製石斧

今回の調査で注目される石器の一つとして打製石斧があげられる。検出された打製石斧はその大半が縄文時代早期末から前期初頭のものと考えられる。調整加工は両極敲打ではなく、一定の角度を与えた直接打撃による剥離が片面を中心に施される場合が多い。裏面は自然面を有する素材を用いており、その点ではそれ以降の打製石斧製作と同様であるが、中期以降の打製石斧と異なるのは、自然面部分に剥離面が明瞭に及ばないものが多い点である。これは台石を利用した両極敲打による調整加工が安定的に行われていないことと関連する。表裏両面に及ぶ剥離を持つ資料(第125図22~27)は、両極敲打技法の存在が確認できる資料である。それ以外の資料(第125図28~第128図61)には両極敲打技法は認められない。第125図28~第128図61に類似する資料としては、岩手県の小松I遺跡(吉田2004)などがあげられる。時期的には梨木畑式(早稲田5類)から上川名式にかけての資料であり、時期的には、本遺跡の花積下層直前段階とほぼ一致する。小松I遺跡の打製石斧も本遺跡と同様に基本的に片面加工の打製石斧で、第126図41・44・45、第127図49の様に原石の角を利用するタイプが存在する点でも類似性が高い。

今回の調査では、早期前半から前期にかけての良好な石器群が検出された。遺構に伴う石器は少量であったが、丘陵の傾斜部分に石器が広範に検出された。地形の傾斜によって拡散していった可能性があり、当時の状況を示してはいないことは容易に想像できるが、おそらく頂部に石器石材を搬入し、石器製作を集中的に行っていたと思われる。遺跡の広がりには不明瞭な部分もあり、本地点が当該期において本庄地域において特殊なのか否かは今後の課題となろう。(藤波 啓容)

3 方形周溝墓群について

(1) 方形周溝墓群出土土器の様相

Ⅲ次調査で調査した方形周溝墓は11基であり、早稲田大学がすでに調査した1基を含めた12基が、この墓域を構成する方形周溝墓の総数と見られる。12基の方形周溝墓は、ある特定の集団がそこに墓域を定め、累代の結果ではあろうが、さほど長期にわたることなく墓を造り続けた痕跡と見ることができる。

以下、方形周溝墓出土土器全体の特徴を、まず簡単に見ておきたい。

出土土器の多くは、出土位置から見て、方台部などに供献された土器が、周溝がある程度埋没した後、周溝内に転落したものと考えてよいであろう。方形周溝墓出土土器の第1の特徴としては、出土数が全体に少なく、多様な器種が見られることである。出土数が少ないことは、全長20m弱と本遺跡で最も規模の大きい3号方形周溝墓から、完形土器が1点しか出土していないことがよく示している。土器の出土数が最も多いのは、8号方形周溝墓であり、周溝から出土した土器は8個体（第56図1～8）である。内訳は、甕1個体、鉢3個体、壺3個体、高坏1個体で、しかも3個体ずつ出土した鉢、壺は、いずれも形態が大きく異なる。壺は、二重口縁壺、直口壺（大型の埴）、素口縁の壺と形態が異なり、胎土や器面調整なども区々で、大きさが同大である以外、共通点に乏しい。この傾向は、出土土器数が比較的多い6・7号方形周溝墓出土土器などにも当てはまるようである。

つまり、方形周溝墓群に関しては、全体的に土器の供献、配置行為自体低調であり、また供献形態として特化した、例えば同じような二重口縁壺を複数供献したり、配することもなかったかに見える。この土器供献、配置自体低調な傾向は、少なくとも古墳時代前期後葉以降、周辺では、諏訪遺跡（増田・柿沼他 1979）や飯玉東遺跡（増田・駒宮他 1979）の方形周溝墓群や前山2号墳（小久保・柿沼他 1978他）、旭・小島古墳群の一部（太田・松本・的野他 2006他）などにも見られる。なお、底部穿孔の土器が見られないことも、本遺跡の方形周溝墓出土土器の特徴の一つである。

次に土器の時期的な位置付けについてであるが、まず総じて精製の土器がほとんど見られないことが、出土土器全体の時期的特徴を如実に物語っている。堅い焼きの緻密精良な胎土の土器はごく少なく、またミガキの行届いた土器も多くはない。強いて精製の土器をあげれば、3号方形周溝墓の直口壺（第32図2）と7号方形周溝墓のやや小振りの直口壺と器台（第49図3・4）くらいであり、この3個体の土器のみが比較的明瞭なミガキにより滑沢に仕上げられていることもやはり時期的な特徴と見られる。

この3個体の土器を手掛かりとして、出土土器の推移および位置を考えてみよう。まず、3号方形周溝墓の直口壺（第32図2）は、東海西部系のヒサゴ壺に関連し類例の多い土器であるが、本例は頸部が太く、口縁部の開きの弱い特異な形態である。胴部形態はやや異なるが、美里町南志度川遺跡2号墓出土例（長滝・中沢 2005：第34図7）、深谷市石蒔B遺跡1号周溝墓出土例（佐藤・駒宮・鳥羽 2003：第7図3）など類例が指摘できる。南志度川遺跡例は、外面全面に丹念なミガキが加えられているらしく、本遺跡例は、器形に古い特徴を残すもののミガキが散漫であり（図版34）、後出する可能性がある。さらにミガキがほぼ見られなくなる段階があるようである。

南志渡川遺跡2号墓出土の土器群は、主に二重口縁壺の対比から報告者により「廻間Ⅲ式後半」との位置付けが与えられている（前掲）。本遺跡方形周溝墓出土土器も、二重口縁壺などをも勘案するならば、同様の時期に上限があると見て大きな誤りはないであろう。

7号方形周溝墓の直口壺（第49図3）も、類例が多い。やはりヒサゴ壺に由来し、時期的に古いものは頸部が鋭くくびれ、口縁部も独特の屈曲をもつ。近隣では、宥勝寺北裏遺跡で確認された1号周溝墓出土例（太田・松本他 2003：第55図2）が、7号方形周溝墓出土例に先行する好例である。7号方形周溝墓出土例の場合、外面端部付近は横ナデ、以下縦のケズリに近い調整が加えられ、胴部のミガキも不規則で所々砂粒移動の痕跡が認められる。硬い焼きの精製の土器ではあるが、宥勝寺北裏遺跡例のように全面ミガキ上げられた本来のあり方からは大きく逸脱している。

7号方形周溝墓の器台（第49図4）も、器受部の端部外面には強い横ナデにより細線が走り、以下ナデに近い弱いケズリが施されており、上記直口壺に似た調整手法である。脚部外面は磨かれているが、かなり幅のある工具による不規則な斜めのミガキである。ケズリが加わるなど調整に新しい要素が見られるものの、胎土は精製の、6号方形周溝墓出土の器台（第43図6）に先行することは間違いない。6号方形周溝墓出土例ではミガキがなされなくなり、器形的にも器受部の端部は軽くつまみ上げ突出させるだけとなるなど粗略化が著しい。

こうした整形・調整作手法に見られる粗略化や簡略化の傾向は、6号方形周溝墓出土土器全体に見られるようである（第43図）。6号方形周溝墓では、破片資料および異時期の土器（同図1・3・7）を除いて、4個体の土器が出土しているが、器面調整のミガキがまばらになった二重口縁壺（同図4）や外面調整がナデに代った小型高坏（同図5）と粗略化が明瞭である。6号方形周溝墓出土土器（第43図）と7号方形周溝墓出土土器（第49図）全体を比較するならば、後者では、ケズリなど新出の手法が加わりながらもミガキならミガキで器面の隅々にまで加えられており、前者では、調整がまばらになるとともに、例えば二重口縁壺（第43図4）では、肩部に比較的丹念なミガキが加えられるが、胴部中位～下半にはナデともミガキともつかない調整が加えられるなど粗略化が進行している。

調整の粗略化がある程度併行して進行したとすれば、同じような段階の土器として、後者には、9号方形周溝墓出土の壺（第60図1）、前者には、10号方形周溝墓出土の壺（第63図1）を加えることができる。また、この器面調整に見られる粗略化は、さらに進行したらしく、8号方形周溝墓出土の壺（第56図7）や11号方形周溝墓出土の壺（第65図1）のようにミガキが胴部上半に限られるようになり、最終的に12号方形周溝墓出土の壺（第68図1）のようにミガキが施されなくなるようである。12号方形周溝墓出土例は、摩耗により器面の調整痕が部分的にしか見えないが、橙色の色調の軟質の胎土で、前・中期いずれに帰属させるべきか判断に迷う土器である。

以上、今回調査した方形周溝墓出土土器の時期的な推移にある程度見通しを立てることができたかと思う。比較的硬質で胎土が精良な、ミガキがなお粗略化し切っていない精製の土器を含む3・7号方形周溝墓出土土器の段階（1期）、壺のミガキが粗略化し、部分的になるとともに、高坏・器台にミガキがなされない6号方形周溝墓出土土器の段階（2期）、さらにミガキが粗略化、簡略化され、ケズリが多用されはじめる8号方形周溝墓出土土器の段階（3期）の3つの段階をもって試案とする。また、9号方形周溝墓出土土器は1期に、11号方形周溝墓出土土器は2期に、10号方形周溝墓出土土器（第63図1）は3期に帰属する可能性があると考えられる。なお、12号方形周溝墓出土土器に関しては、

3期としておくが、ミガキが見られなくなる段階として4期を設ける必要があるのかもしれない。

小型の方形周溝墓である2・4・5号方形周溝墓は、出土遺物がないため帰属時期を明らかにし得ないが、近接した方形周溝墓は何かしら強い結び付きがあるとする見方に立てば、4号方形周溝墓を除き、隣り合う方形周溝墓の前後の時期に造られたとひとまず考えることができる。

8号方形周溝墓出土土器に関しては、今少し触れる必要があろうか（第56図、図版34）。

まず、小型のS字甕（第56図1）は、口縁部の屈曲は弱いものの比較的丹念な作りではあるが、胴部のハケメは所々省略され、下調整のケズリが顕わになっている（図版34）。S字甕の終末期に近い例と見られる。本庄市後張遺跡177号住居跡（増田・立石他 1982：第181図58）などハケメの省略、消去が極端な例も見られるが、ハケメがほぼ見られない例（同 1983：A-1溝、第341図27）を除いて、いずれもS字甕の終末段階、古墳時代前期末葉に限られると見てよい。

また、3個体の鉢（同図2・3・4）は、いずれもケズリが多用されている。3は口縁部の長い小さな平底の鉢で、本庄市下田遺跡5号住居跡出土例（増田・柿沼・小久保他 1979：図17-20~22）、諏訪遺跡50号方形周溝墓出土例（同書：図94-5・6）、同後張遺跡C地点第214号住居跡出土例（恋河内 2005：第72図13）などに器形が似る。前者5例の内4例は、明瞭なミガキがなされているとされ、本遺跡例に先行する可能性があり、後者後張遺跡例は、ケズリ痕が露出したS字甕やケズリを多用する複数器種とともに出土しており、古墳時代前期末葉に位置付けられる。4は口縁部が直立気味に立ち、外面に強い横ナデが加えられる特異な鉢である。山陰や北陸などの異地域の甕の特徴を取り込んだ鉢とも見える。

5の二重口縁壺は、口縁の屈曲も比較的明瞭で、全体に精巧な作りの土器であるが、胴部は新出的な調整手法である。6の直口壺（大型卍）は、南志度川遺跡2号墓出土例（長滝・中沢 2005：第34図5）など類例がある。端部内面の面取りなどに古い要素を残すが、南志度川遺跡例よりさらに大型化した例と見ることもできる。8の高坏はミガキも不明瞭となり（図版34）、この種の有段高坏の終末段階に置くことができる。

8号方形周溝墓出土土器に関しては、全体として古墳時代前期末葉に位置付けられることは間違いなく、また小型丸底鉢の系譜を引く鉢が加わり、器面調整にケズリが多用されはじめるなど新たな様相も見られる。この点を重視し、微妙ではあるが、6号方形周溝墓出土土器より後出する位置付けができると考える。

方形周溝墓出土土器全体の中心となる時期が、終末段階を含む古墳時代前期後葉、あるいは「新段階」（恋河内 1999）と見ることは問題ないであろう。東海地方西部の編年に対比すれば、赤塚次郎の「廻間Ⅲ式期3・4段階」から「松河戸Ⅰ式前半期」（赤塚 1990・1994）に、加納俊介の「岩倉城下層段階」から「西北出段階」（加納 2004）に、おおむね対応する時期と考えられる。

（2）方形周溝墓群の推移と特色

前項で示した方形周溝墓出土土器の時期区分に基づき、方形周溝墓群の時間的な推移を考えてみたい。

その前に、方形周溝墓群を構成する12基の方形周溝墓は、ある程度まとまりをもち、周溝の走向を同じくし列をなし造られているかに見えるため、以下の群別を導入する。なお、早稲田大学が調査し

た「1号方形周溝墓」は、他の方形周溝墓と距離を置き、またいずれの列にも入らない位置にあるため、別途考えることにしたい。

A群：2～4号方形周溝墓

B群：5～8号方形周溝墓

C群：9・10号方形周溝墓

D群：11・12号方形周溝墓

これを時期別に分けるなら、以下のようになる。

1期：3号方形周溝墓（A群）、7号方形周溝墓（B群）、9号方形周溝墓（C群）

2期：6号方形周溝墓（B群）、10号方形周溝墓（C群）

3期：8号方形周溝墓（B群）、11号方形周溝墓（D群）、12号方形周溝墓（D群）

上記のように群別、時期別に並べてみると、方形周溝墓群は、例えば丘陵高所から順番に下の方へと並べて展開したわけではなく、それぞれの群（列）ごとに順次造られ続けた可能性があることが判る。一方、群ごとの構築過程とは別に、群単位の推移には、丘陵斜面の高所から麓へ、上から下へという流れが読み取れる。時期限定できない小型の方形周溝墓、2・4・5号方形周溝墓があるため断定的な議論はできないが、時期の判る方形周溝墓に限れば、1期の方形周溝墓のみで構成されるA群から1～3期の方形周溝墓を含むB・C群へ、3期の方形周溝墓のみで構成されるD群へと、丘陵の中腹から丘陵裾部へ向かい、群は推移している。

この脈絡の中でこそ、墓域の中の最高所を占めるA群に方形周溝墓群中最大規模の3号方形周溝墓があり、丘陵裾部の最も低い位置に、出土土器から見て最も新しく造られたと考えられる12号方形周溝墓があることも、また意味をもつかに見える。3号方形周溝墓の周溝内からは、本来埋葬施設に伴ったと推定される長さが3.43cmの碧玉製管玉が出土しており（第32図3）、12号方形周溝墓は、「BⅡ型」（田中 1977・1984）の周溝墓である可能性があること（第Ⅲ章第2節3）にも留意したい。

不確実な点を残すものの、まず3号方形周溝墓が造られることで墓域の端緒が開かれ、以降暫時列状をなす形で、群ごとに方形周溝墓が造られ続け、最も低い位置に特異な形態の規模の大きな方形周溝墓あるいは前方後方形周溝墓である12号方形周溝墓が造られ、墓域が最終的に放棄された過程を推定しておきたい。

最後に周辺の墳墓との関係について簡単に触れようと思う。とくにここで問題にしたいのは、本遺跡の方形周溝墓群と前山2号墳（小久保・柿沼他 1978、松本・町田 2002b）との関係についてである。

本遺跡の方形周溝墓群と前山2号墳は、同じ浅見山丘陵の北縁の支丘上に位置し、直線距離にして400m前後離れている。指呼の間とまでは言えないが、丘の上で人が動くのが相互に判る距離にあり、谷を挟み視界を遮るものはない（第4図）。本遺跡の方形周溝墓群は、支丘の支谷に面する南斜面に、前山2号墳は、北側に広大な沖積地を望む北斜面に立地する。前山2号墳は長辺の全長が43m余の方墳とされ（同上）、その時期は、私見では、出土土器から見て古墳時代前期末葉である。

両者の墳墓に見られる共通点のひとつは、微地形的な占地のあり方を含む構築企図、構築法にある。前山2号墳の報告者が強調するように（小久保・柿沼他 1978）、前山2号墳は、丘陵斜面の肩から斜面にかけ構築されており、墳裾が丘陵斜面に連なることで「斜面側からの景観はかなりの規模のよ

うに見え、まさに仰ぎみるにふさわしい雄大なながめ」(同上：78頁)を造り出している。この下方からの眺望性を意識した丘陵斜面を取り込んだ占地は、本遺跡の方形周溝墓群にも同様に当てはまる。両墳墓は、ある面で同じ企図の下に設計されていると推察することができる。

この共通点に加え、いまひとつの共通点は、両者の高さにある。前山2号墳の調査時の墳頂は標高82.8m前後(同上)、本遺跡の方形周溝墓群の最高所にある2号方形周溝墓の西端は標高81.6mである(第Ⅲ章第2節3)。400mほど離れた丘の上の間では、ほぼ同じ高さに見える比高差であり、偶然とは思えない。前山2号墳の造営場所の選定に際し、本遺跡の方形周溝墓群が視界に入り、その高さが意識されたと推定してよいと思われる。この問題は、前山2号墳の背後の高所にある前方後円墳である前山1号墳をも視野に入れ、改めて検討すべき課題である。また、共通点として、総じて土器供献が両者で低調であることも付け加えておく。

以上、本遺跡の方形周溝墓群と前山2号墳の共通点を列記したが、両者には墳丘規模の違いのみならず、大きな違いが見られることもまた確かである。それは言うまでもなく、広義の立地、景観の違いである。同じように下方からの眺望性を強く意識し、丘陵斜面を巧妙に利用し造られてはいるが、前山2号墳は眼下に広大な沖積地や微高地を見下ろせる北向きの斜面に、本遺跡の方形周溝墓群は、狭長な支谷を臨む南向きの斜面に立地している。前山2号墳は、眼下に広がる沖積地や微高地からこの墳墓を仰ぎ見ることのできる不特定多数の多様な人々に見られるべくして造られ、方や広大な沖積地に背を向け支谷を見下ろす方形周溝墓群は、葬儀や埋葬、墓前の祭祀などに限定はできないまでも、少なくともこの谷間を訪れた特定の者のみが目にするところの眺望を企図し造られた。本遺跡の方形周溝墓群と前山2号墳の立地の違いは、この大きな変換点のひとつを示しているであろう。

第2節 まとめにかえて

まず、浅見山Ⅰ遺跡についてであるが、今回の調査では、周辺地域では調査例の乏しい旧石器時代の石器を、ローム層中を対象としたトレンチ調査により検出することができた。黄褐色のいわゆるハードローム層の下部から暗褐色シルト質土との漸移層である下位層（本遺跡の標準土層Ⅳ層下部からⅤ層にかけて）を中心に黒曜石製石器が出土したが、形態・技法的には、武蔵野台地のⅣ層上部、「砂川期」の石器に相当するとの同定結果を得ている（本章第1節1）。

石器が出土した大里ローム層（堀口・河原塚 1979、大森・端山・堀口編 1986）に関しては不明な点も多く、細かな層位的な対比が困難な状況が続いている。石器が出土したローム層のテフラ分析、炭化材の放射性炭素年代の測定など自然科学的手法による分析を行ったが、必ずしも検出した石器の時期特定に資する結果とは言い切れない。今後資料の増加を俟って検討すべき課題である。

縄文時代の遺物・遺構に関しては、縄文時代早期前葉～中葉の撚糸文系土器、押型文系土器、沈線文系土器や早期後葉～前期初頭の条痕文系土器、刺突文・圧痕文系土器、羽状縄文系土器がかなりの量出土している。遺構は土坑などわずかであるが、出土した縄文土器は、やはり周辺地域では類例の少ない時期の資料であり、他地域の資料との対比を進め、位置付けの問題等を考える必要があるであろう。また、遺構出土資料は少ないものの上記した縄文土器に伴う多量の石器が出土しており、とくに縄文時代早期末葉～前期初頭と思われる打製石斧の製作手法に、特徴的な手法が見られることが指摘されている（本章第1節2）。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、6基前後の土坑とわずかであり、大半の遺物は遺構外から出土している。弥生時代後期の土器は、多様な系統の土器を含み、思いの外複雑な同期の様相を垣間見せてくれている。

今回の調査で検出した古墳時代前期の11基の方形周溝墓は、出土土器の変化から見て、3段階ほどの推移の過程が考えられ、それぞれ列状をなす群ごとに展開、推移し、全体として丘陵中腹の3号方形周溝墓を起点として、丘陵麓の形態的にも特異な12号方形周溝墓をもって最終的に墓域が終焉する様相が推定できた（本章第1節3）。ただし、流域全体の同時期の墳墓との比較、それぞれの位置付け、あるいは墓域と集落の関係の問題など、今後に残された課題である。また、2基の円墳に関しても、周辺の同時期の墳墓との関係や埴輪の位置付けなど検討すべき点も多い。

久下東遺跡、北堀久下塚北遺跡に関しては、古墳時代前期から奈良・平安時代、中世にかけての規模の大きな集落跡であるが、今回報告したのは調査範囲のごく一部である。したがって、集落の変遷や特記すべき遺構・遺物などについても、全体の報告に委ねたいと思うが、とくに中世の遺構に関しては、濠状の遺構や井戸跡、地下式壙を検出しており、いわゆる居館跡の一角である可能性が高く、さらに周辺遺跡の資料を含め十分な資料の分析・比較が必要であろう。

以上、今回の3遺跡の調査により、様々な時期の多岐にわたる問題が浮き彫りになったとともに、向後に託された課題も多いように思われる。

末筆ながら、発掘調査および報告書の作成に当たり、多大なご協力、ご教示を賜った多くの方々に、心から御礼申し上げる次第である。

引用・参考文献

- 青山博樹 1998 「土器①東南北部」『第3回東北・関東前方後円墳研究会 大会《シンポジウム》 前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 赤塚次郎他 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集、愛知県埋蔵文化財センター
- 1994 『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集、愛知県埋蔵文化財センター
- 1997 『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第74集、愛知県埋蔵文化財センター
- 浅野一郎 1999 『大久保山Ⅴ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告5、早稲田大学
- 新井房夫 1962 「関東地域北西部の第四紀編年」『群馬大学紀要（自然科学編）』10（4）、群馬大学
- 荒川正夫 1998 『大久保山Ⅵ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告6、早稲田大学
- 1999 『大久保山Ⅶ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告7、早稲田大学
- 2000 『大久保山Ⅷ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告8、早稲田大学
- 2001 『大久保山Ⅸ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告9、早稲田大学
- 飯島克巳・若狭 徹 1988 「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第9号、信濃史学会
- 井口直司他 1982 『多聞寺前遺跡Ⅰ』多聞寺前遺跡調査会
- 石川日出志 2003 「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号、土曜考古学研究会
- 石坂俊郎 2006 「南関東の様相」『第11回東北・関東前方後円墳研究会 大会《シンポジウム》 前方後方墳とその周辺 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 2008 「中耕・広面墳墓群と供献土器(1)」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第2号、埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館
- 石塚和則 1986 『将監塚－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩瀬 譲 1998 『地神／塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩田明広 1998 『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梅沢重昭 1994 a 「“毛野” 形成期の地域相－前方後方墳及び周溝墓の分布を中心に－」『駿台史学』第91号、駿台史学会
- 1994 b 「毛野の周溝墓と前方後方形周溝墓」『駿台史学』第92号、駿台史学会
- 梅沢太久夫・石岡憲雄・浅野晴樹他 1981 『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会
- 海老原郁雄 2004 「アメリカ式石鏃とその周辺」『唐澤考古』第23号、唐澤考古会
- 太田博之 2002 『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
- 2007 a 『西五十子古墳群』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集、本庄市教育委員会
- 2007 b 「武蔵北部の首長墓」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学・別冊15、雄山閣
- 2008 『雌濠遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第12集、本庄市教育委員会
- ・佐藤好司 1991 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ－公卿塚古墳』本庄市埋蔵文化財調査報告第19集、本庄市教育委員会

- ・松本 完他 2003 『宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告第26集、本庄市教育委員会
- ・———— 2005 『四方田（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査）・久下東（Ⅱ次調査）』本庄市埋蔵文化財調査報告第31集、本庄市教育委員会
- ・————・的野善行 2006 『旭・小島古墳群－林地区Ⅰ』本庄市埋蔵文化財調査報告書第3集、本庄市教育委員会
- 大木紳一郎 2007 「岩鼻式と樽式土器」『埼玉の弥生時代』六一書房
- 2008 「群馬県南西部鐮川下流域における後期弥生土器編年について」『研究紀要』26、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大谷 徹 1998 「埼玉県 前期古墳から中期古墳へ」『第3回東北・関東前方後円墳研究会 大会《シンポジウム》前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 大村 直 1995 「東国における古墳の出現」『展望考古学 考古学研究会40周年記念論集』考古学研究会
- 大森昌衛・端山好和・堀口万吉編 1986 『日本の地質 関東地方』共立出版
- 小澤正人 1996 『大久保山Ⅳ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4、早稲田大学
- 小野和之 1993 『神保富士塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第154集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 書上元博 1994 『稻荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 柿沼幹夫 1996 「北関東① 埼玉県」『関東の方形周溝墓』同成社
- 金子直行他 1993 『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 加納俊介 2004 「屈折脚高杯出現期の編年の位置」『安城市史だより』安城市教育委員会市史編さん室
- 神川町教育委員会編 1989 『神川町誌』神川町
- 上里町史編集専門委員会編 1992 『上里町史 資料編』上里町
- 川口 潤 1993 『白草遺跡Ⅰ / 北篠場遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 北関東細旧石器グループ 2006 「大雄院前遺跡」『第11回石器文化研究交流会 発表要旨』石器文化研究会
- 2007 「鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡」『第12回石器文化研究交流会 発表要旨』石器文化研究会
- 2008 「大雄院前遺跡の発掘調査」『旧石器研究』第4号、日本旧石器学会
- 久保田正寿 2006 「両極敲打技法について－打製石斧の製作技術と新たな視点」『考古学の諸相』
- 劔持和夫・村田章人他 1995 『森下・戸森松原・起会』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第148集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 恋河内昭彦 1990 a 『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集、児玉町教育委員会
- 1990 b 『根田遺跡』児玉町文化財調査報告書第12集、児玉町教育委員会
- 1990 c 『雷電下遺跡－B・C地点－』児玉町文化財調査報告書第13集、児玉町教育委員会
- 1992 「児玉地方における弥生時代の概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と課題－平成3年度後期埋蔵文化財担当者会議資料－』埼玉県教育局文化財保護課・児玉郡市文化財担当社会
- 1993 『川越田遺跡Ⅱ』児玉町遺跡調査会報告書第5集、児玉町遺跡調査会
- 1995 a 『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財

調査報告書第17集、児玉町教育委員会

- 1995 b 『南共和・新宮遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第6・7集、児玉町遺跡調査会
- 1996 『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集、児玉町教育委員会
- 1997 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集、児玉町教育委員会
- 1999 『日延Ⅱ・児玉条理遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集、児玉町教育委員会
- 2002 『児玉地方の弥生土器』埼玉土器観会第20回資料、埼玉土器観会
- 2005 『後張遺跡Ⅲ（C地点の調査）』児玉町遺跡調査会報告書第20集、児玉町遺跡調査会
- 2008 『七色塚遺跡-B1地点-・北堀新田前遺跡-A1地点-』本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集、本庄市教育委員会
- ・松澤浩一 2006 『金屋下別所遺跡B地点 塩谷平氏ノ宮遺跡 塩谷下大塚遺跡E地点』本庄市埋蔵文化財調査報告書第1集、本庄市教育委員会
- 江南町史編さん委員会編 1995 『江南町史 資料編1 考古』江南町
- 小久保徹・柿沼幹夫他 1978 『東谷・前山・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会
- 小島敦子 1986 「群馬県の方形周溝墓-群在のパターン分類を通して-」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 児玉町史教育委員会・児玉町史編さん委員会 1993 『児玉町史 自然編』児玉町
- 小林達雄 1966 『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』多摩ニュータウン遺跡調査会
- 駒見佳容子 1985 「葬送祭祀の一検討-関東地方を中心として-」『土曜考古』第10号、土曜考古学会
- 昆 彭生・佐々木幹雄・荒川正夫他 1980 『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告1、早稲田大学
- ・————— ・————— 1993 『大久保山Ⅱ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告2、早稲田大学
- ・————— ・————— 1995 『大久保山Ⅲ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告3、早稲田大学
- ・細田 勝 2001 『大久保山Ⅳ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告9、早稲田大学
- 埼玉県史編さん室編 1982 『新編埼玉県史 資料編2（原始・古代）』埼玉県
- 齋藤瑞穂 2007 「埼玉の二軒屋式土器の位置と意義」『埼玉の弥生時代』六一書房
- 坂本和俊 1990 「東京・埼玉・神奈川」『古墳時代の研究 第11巻 地域の古墳Ⅱ 東日本』雄山閣
- 佐々木幹雄・橋本博文・高橋龍三郎他 1980 『宥勝寺北裏遺跡』宥勝寺北裏遺跡調査会
- 笹森紀己子 1989 「小型器台形土器に関する覚書」『古代』第87号、早稲田大学考古学会
- 佐藤好司・増田一裕 1989 『諏訪遺跡（B地点）・久城前（B地点）発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第15集、本庄市教育委員会
- 佐藤忠雄・駒宮史朗・鳥羽政之 2003 『石蒔B遺跡』岡部町史料調査報告書第1集、岡部町教育委員会
- 塩谷 修 1992 「壺形埴輪の性格」『博古研究』第2号、博古研究会
- 菅谷浩之 1984 『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町史料調査報告古代第1集、児玉町教育委員会
- ・駒宮史朗・山川守男他 1991 『万吉下原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第18集、埼玉県教育委員会
- 他 1975 「美里村長坂聖天塚古墳の調査」『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 1978 『日の森遺跡発掘調査概報』埼玉県児玉郡美里町教育委員会

- 杉崎茂樹 1993 『中耕遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木徳雄・西口正純 1980 『深町・城の内遺跡』 深町遺跡調査会
- 他 1997 『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』 児玉町文化財調査報告書第26集、児玉町教育委員会
- 芹沢長介 1956 「神奈川県大丸遺跡の調査」『駿台史学』第7号、駿台史学会
- 杉原荘介・芹沢長介 1958 『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』 明治大学研究報告第2冊、明治大学
文学部考古学研究室
- 大工原 豊 2008 『縄文石器研究序論』 六一書房
- 高崎市史編さん委員会編 1999 『新編 高崎市史 資料編1 原始古代1』 高崎市
- 高橋 和 1985 「東北地方南部の古墳時代前期高坏に関する一視点－中実柱状部を持つ脚部形態について－」
『法政史論』第13号、法政大学大学院日本史学会
- 田口一郎 1981 『元島名将軍塚古墳』 高崎市文化財調査報告書第22集、高崎市教育委員会
- 竹本弘幸・久保誠二 1995 『群馬の火山灰』 みやま文庫140、みやま文庫
- 田代 治 1997 「大宮台地の概要」『埼玉考古』別冊第5号（特集号 埼玉の旧石器時代）、埼玉考古学会
- 田中耕作 2007 『狐森B遺跡発掘調査報告書』 新発田市埋蔵文化財調査報告第34集、新発田市教育委員会
- 田中新史 1977 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号、早稲田大学考古学会
- 1984 「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号、早稲田大学考古学会
- 徳山寿樹他 1994 『平塚・左口・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第16集、児玉町教育委員会
- 1995 『堀向・藤塚A・柿島・内出B・C・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第18集、児玉
町教育委員会
- 1997 『金佐奈遺跡－A1地点の調査－』 児玉町文化財調査報告書第24集、児玉町教育委員会
- 1998 『金佐奈遺跡I－B地点の調査－』 児玉町文化財調査報告書第30集、児玉町教育委員会
- ・大熊季広 1998 『金佐奈遺跡－A2地点の調査－』 児玉町文化財調査報告書第29集、児玉町教育委
員会
- ・——— 1999 『金佐奈遺跡II－B地点の調査－』 児玉町文化財調査報告書第33集、児玉町教育委
員会
- 利根川章彦 1993・1994 「二重口縁壺小考（上・下）」『調査研究報告』第6・7号、埼玉県立さきたま資料館
- 1998 『西富田・四方田条里遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集、埼玉県埋蔵文化財
調査事業団
- 富田和夫 1994 『稻荷前遺跡（B・C）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集、埼玉県埋蔵文化財調査
事業団
- ・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県
埋蔵文化財調査事業団報告書第46集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鳥羽政之・今村直樹 2003 『四十坂遺跡』 岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第11集、岡部町遺跡調査会
- 中島庄一 1985 「石器について」『和田／百草遺跡群／落川遺跡』 多摩市遺跡調査会
- 長滝歳康・中沢良一 2005 『南志渡川遺跡 志渡川古墳・志渡川遺跡』 美里町発掘調査報告書第16集、美里町
教育委会
- 中村倉司他 1990 『東川端遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 新山保和 2008 「群馬県出土の二重口縁壺」『研究紀要』26、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 西井幸雄 1996 『丸山／青梅道南／十文字原／東武蔵野／西武蔵野』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第164集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 他 1999 『城見上／末野Ⅲ／花園城跡／箱石』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西村正衛・芹沢長介他 1955 「千葉県西之城貝塚－関東縄文式早期文化の研究－」『石器時代』第2号、石器時代文化研究会
- 野々口陽子 1996 「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集、京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 巾 隆之他 1980 『下郷』群馬県教育委員会
- 原田昌幸 1991 『撚糸文土器様式』ニューサイエンス社
- 坂野和信 1987 『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 比田井克仁 1995 「二重口縁壺の東国波及」『古代』第100号、早稲田大学考古学会
- 深澤敦仁 1998 「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』XVI、庄内式土器研究会
- 2004 「北関東」『第9回東北・関東前方後円墳研究会 大会 《シンポジウム》東日本における古墳の出現について 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 福田 聖 2007 a 「方形周溝墓の土器使用と群構成」『原始・古代日本の祭祀』同成社
- 2007 b 「井沼方遺跡における方形周溝墓の土器配置と群構成」『埼玉の弥生時代』六一書房
- 藤巻幸男 1992 「群馬県における縄文時代早期末葉から前期初頭土器群の様相－縄文系土器群を中心として－」『研究紀要』10、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 古屋紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義－東日本の古墳時代の開始－」『駿台史学』第104号、駿台史学会
- 細田 勝・富田和夫・利根川章彦 1984『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 堀口万吉・河原塚順司 1979 「大宮台地南部の大里ローム層について」『埼玉大学紀要』自然科学篇第15巻、埼玉大学
- 本庄市史編集室編 1976 『本庄市史 資料編』本庄市
- 1986 『本庄市史 通史編Ⅰ』本庄市
- 1989 『本庄市史 通史編Ⅱ』本庄市
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団編 1999 『鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 増田逸郎・柿沼幹夫・小久保 徹他 1979 『下田・諏訪』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、埼玉県教育委員会
- ・小久保 徹他 1977 『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集、埼玉県教育委員会
- ・駒宮史朗他 1979 『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集、埼玉県教育委員会
- ・坂本和俊他 1986『埼玉古式古墳調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室
- ・立石盛詞他 1982・1983 『後張 本文編・図版編Ⅰ・Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15・26集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 他 1975 『千光寺』 埼玉県遺跡調査会報告第27集、埼玉県遺跡調査会
- 他 1981 『清水谷・安光寺・北坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田一裕 1985 『本庄遺跡群発掘調査報告書－久下東遺跡・遺構編－』 本庄市埋蔵文化財調査報告第7集、本庄市教育委員会
- 1987 a 『南大通線内遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集、本庄市教育委員会
- 1987 b 『東富田遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第10集、本庄市教育委員会
- 1989 a 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
- 1990 a 『諏訪・久城前・久城往来北遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第17集、本庄市教育委員会
- 1990 b 『山根遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第18集、本庄市教育委員会
- 1992 『今井諏訪遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第21集、本庄市教育委員会
- ・太田博之・松本 完 2001 『本庄市域における古式古墳の調査成果と課題』 群馬古墳文化研究会・南毛古墳文化研究会第5回合同史料検討会資料、南毛古墳文化研究会
- 町田 洋・新井房夫 2003 『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』 東京大学出版会
- 松本 完 2004 『九反田（Ⅲ次調査）・観音塚（Ⅲ次調査）』 本庄市埋蔵文化財調査報告第28集、本庄市教育委員会
- ・町田奈緒子 2002 a 『久下前遺跡第3地点発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第25集、本庄市教育委員会
- ・—— 2002 b 『大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第2次）・北堀前山古墳群（第2・3次）発掘調査報告書』 本庄市遺跡調査会報告第6集、本庄市遺跡調査会
- ・—— 2004 『東本庄』 本庄市埋蔵文化財調査報告第29集、本庄市教育委員会
- 美里町史編纂委員会 1986 『美里町史 通史編』 美里町
- 峰村 篤 1999 「上和田城山遺跡の燃糸文土器－多摩 JY 型と夏島式土器の成立－」 『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2－上和田城山遺跡篇－』 大和市教育委員会
- 2002 「『夏島式古段階』考（1）」 『日々の考古学』 東海大学考古学教室開設20周年記念論文集編集委員会
- 宮崎朝雄 1986 「関東地方における縄文早期終末の土器群について」 『埼玉の考古学』 埼玉考古学会
- 1991 「夏島式土器及び稲荷台式土器について」 『埼玉考古学論集－設立10周年記念論文集－』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ・金子直行 1989 「井草式土器及びその周辺の土器について」 『研究紀要』 第5号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村田健二 1990 『広面遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村田章人他 2003 『原ヶ谷戸・滝下』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村松 篤 1997 「埼玉県北部地域の様相」 『埼玉考古』 別冊第5号（特集号 埼玉の旧石器時代）、埼玉考古学

会

- 2006 「弥生時代の打製石鏃」『埼玉の考古学Ⅱ』六一書房
- 山川守男・福田 聖・石坂俊郎 1998 「北武蔵における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』XⅧ、庄内式土器研究会
- 山岸良二編 1996 『関東の方形周溝墓』同成社
- 山本 靖 1993 「埼玉領域の出現期古墳における土器祭式の様相」『研究紀要』第10号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 吉田 充 2004 『小松Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第433集、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 寄居町遺跡調査会 2006 『赤浜牛無具利遺跡』寄居町遺跡調査会
- 若狭 徹 1990 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』Vol.1、群馬土器観会
- 1992 「北西関東における弥生土器の成立と展開」『駿台史学』第84号、駿台史学会

圖 版



浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景 (南西より)



浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 東半全景 (上空より)

図版2 浅見山 I 遺跡



浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 調査前遠景 (南より)



浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景(1) (南西より)



浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景(2) (南より)



浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次) 遠景(3) (南西より)



旧石器時代調査風景 (南より)



トレンチ 5 完掘状態 (東より)



トレンチ6完掘状態（南西より）



トレンチ6石器出土状態（北より）



トレンチ6 石器出土状態(1)(北西より)



トレンチ6 石器出土状態(2)(南東より)



トレンチ6 石器出土状態 (北より)



トレンチ6 石器出土状態 (東より)



トレンチ6 サンプルポイント (東より)



トレンチ6 ナイフ形石器出土状態 (東より)



トレンチ6 石器出土状態 (東より)



トレンチ6 サブトレンチ1 (東より)



1・2号住居跡（上空より）



1号住居跡（南より）



1号住居跡紡錘車出土状態（東より）



1号住居跡石鏃出土状態（北より）



2号住居跡 (南西より)



2号住居跡土層断面 (南東より)



3号住居跡 (西より)



3号住居跡土層断面 (南より)



3号住居跡炉跡 (西より)



2・3号方形周溝墓（上空より）



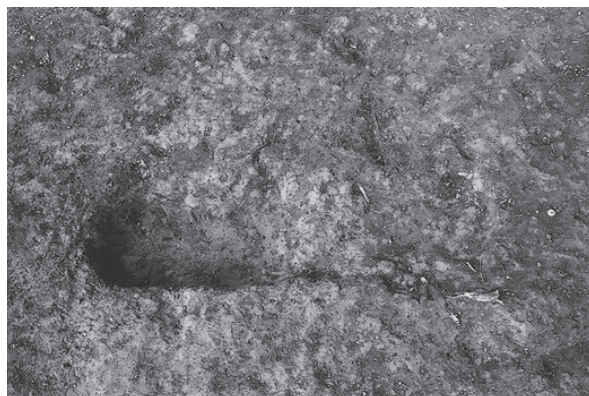
2号方形周溝墓（北東より）



2号方形周溝墓（南東より）



2号方形周溝墓B-B' 西溝土層断面（南より）



2号方形周溝墓主体部（南より）



3号方形周溝墓（北東より）



3号方形周溝墓陸橋部（東より）



3号方形周溝墓南西隅（南より）



3号方形周溝墓陸橋部（南より）



3号方形周溝墓D-D'東溝土層断面（南より）



3号方形周溝墓土器出土状態（東より）



3号方形周溝墓管玉出土状態（南東より）



4号方形周溝墓（南より）



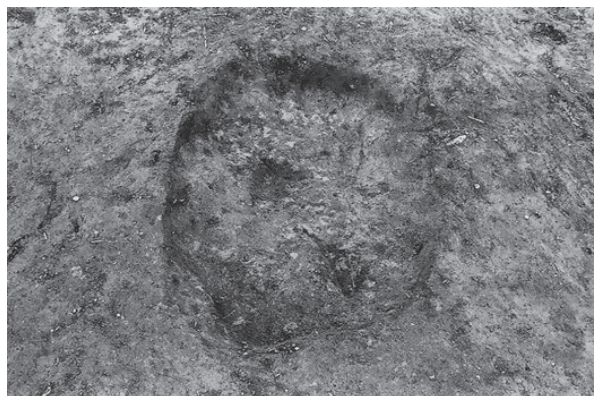
4号方形周溝墓（北東より）



4号方形周溝墓A-A' 東溝土層断面（南より）



4号方形周溝墓主体部土層断面（東より）



4号方形周溝墓主体部（南より）



5～7号方形周溝墓（上空より）



5号方形周溝墓（南より）



5号方形周溝墓A-A'北東溝土層断面（南より）



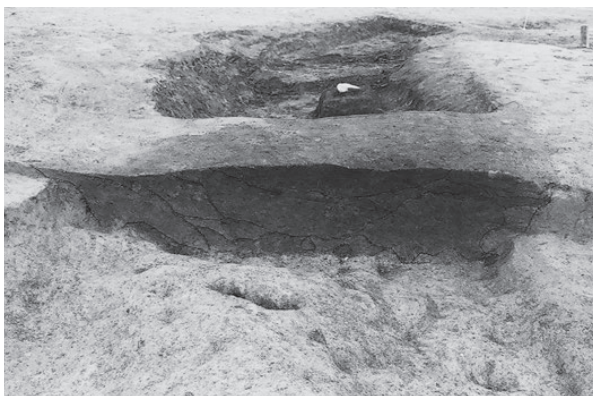
6号方形周溝墓（南東より）



6号方形周溝墓北西溝（東より）



6号方形周溝墓A - A' 北東溝土層断面（北より）



6号方形周溝墓C - C' 北西溝土層断面（西より）



6号方形周溝墓H - H' 北西溝土層断面（北東より）



6号方形周溝墓G - G' 北隅土層断面 (北西より)

6号方形周溝墓F - F' 南東溝土層断面 (南西より)



7号方形周溝墓 (上空より)



7号方形周溝墓 (北より)



7号方形周溝墓北東溝（北より）



7号方形周溝墓北西溝（北より）



7号方形周溝墓A-A' 南西溝土層断面（南より）



7号方形周溝墓主体部（南東より）



7号方形周溝墓G-G' 北西溝土層断面（南西より）



7号方形周溝墓北西溝遺物出土状態（北西より）



7号方形周溝墓北東溝土層断面（南東より）



7号方形周溝墓A-A' 北東溝土層断面（南東より）



8号方形周溝墓（北東より）



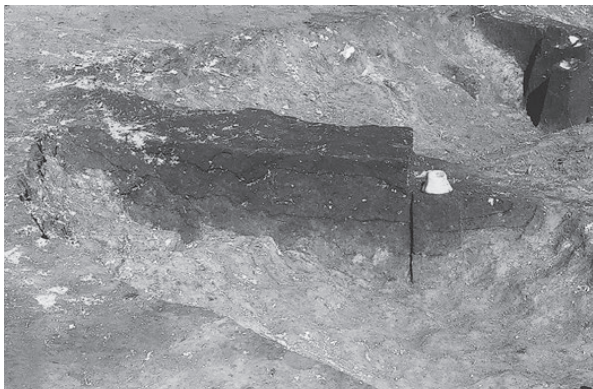
8号方形周溝墓（南東より）



8号方形周溝墓A-A' 北東溝土層断面（南より）



8号方形周溝墓C-C' 北西溝土層断面（東より）



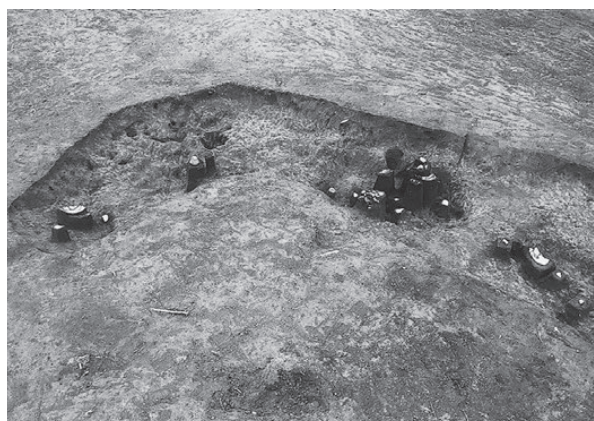
8号方形周溝墓F - F' 西隅土層断面 (南より)



8号方形周溝墓西隅遺物出土状態 (西より)



8号方形周溝墓遺物出土状態 (東より)



8号方形周溝墓遺物出土状態 (東より)



8号方形周溝墓北西溝 (北より)



8号方形周溝墓G - G' 南西溝土層断面 (南東より)



8号方形周溝墓G - G' 南西溝土層断面 (南東より)



8号方形周溝墓A - A' 南西溝土層断面 (南より)



9号方形周溝墓（南東より）



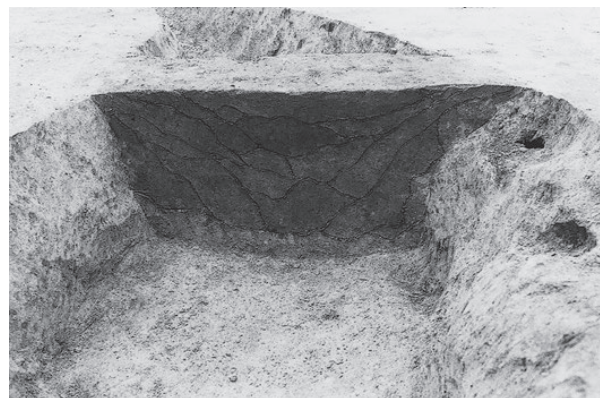
9号方形周溝墓北西溝（東より）



9号方形周溝墓南西溝（北より）



9号方形周溝墓D-D'北西溝土層断面（南西より）



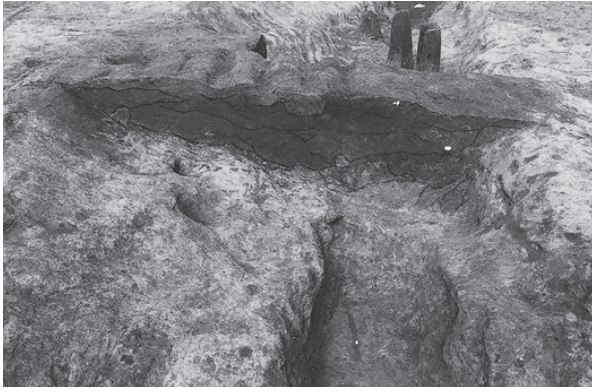
9号方形周溝墓F-F'北東溝土層断面（南東より）



10号方形周溝墓（北西より）



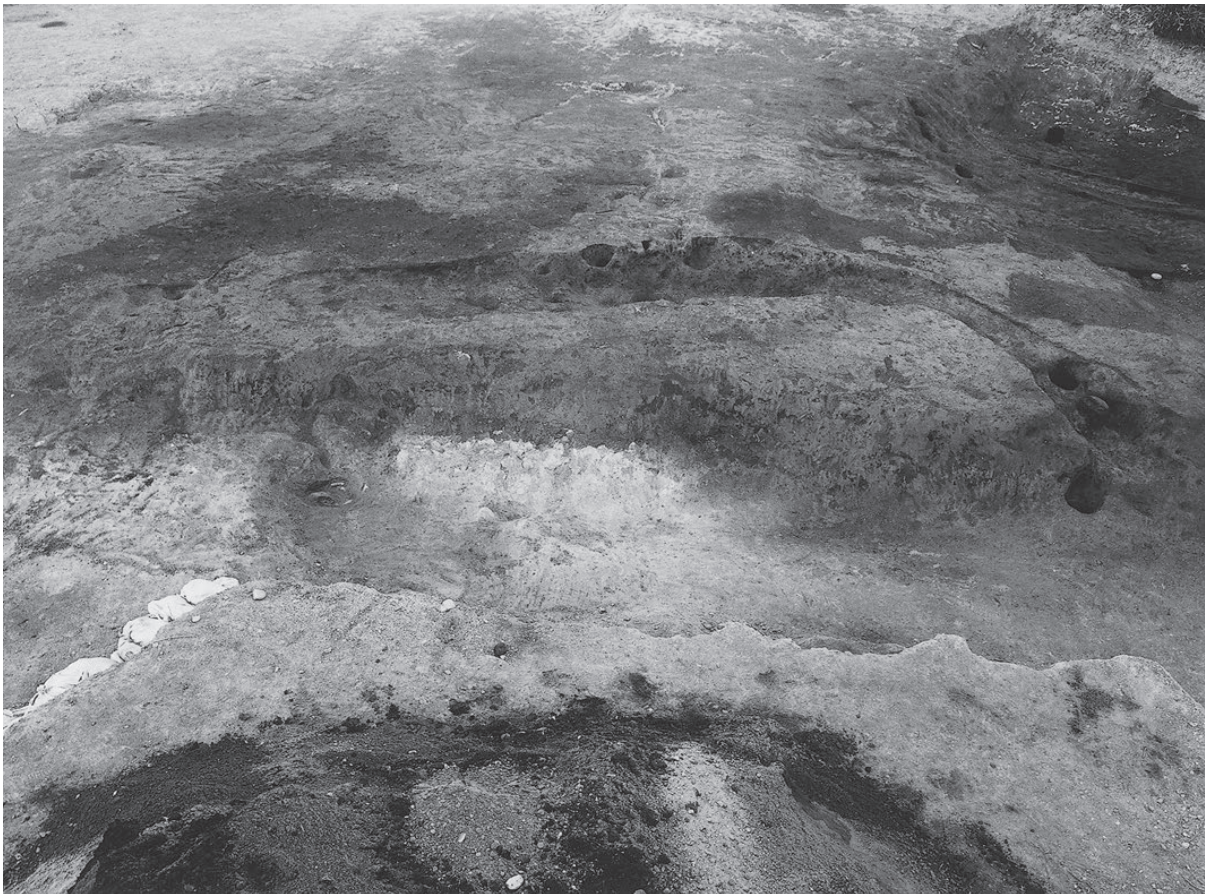
10号方形周溝墓（東より）



10号方形周溝墓A-A' 南西溝土層断面 (南より)



10号方形周溝墓遺物出土状態 (東より)



11号方形周溝墓 (南西より)



11号方形周溝墓遺物出土状態 (東より)



11号方形周溝墓赤色顔料出土状態 (北より)



12号方形周溝墓（南より）



12号方形周溝墓A - A' - A''北壁土層断面（南西より）



12号方形周溝墓C - C' 北西溝土層断面（南西より）



1号円墳（東より）



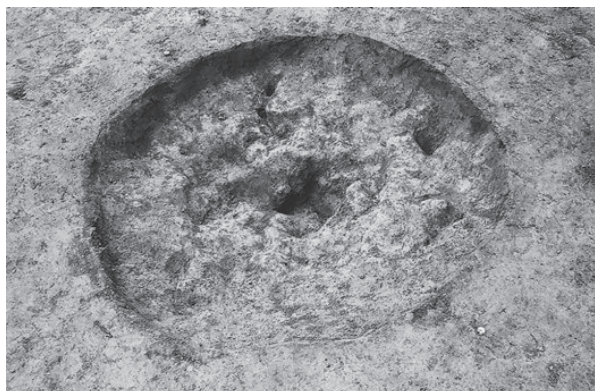
1号円墳周溝（東より）



2号円墳（東より）



2号円墳（東より）



1号土坑（西より）



2号土坑（東より）



3・4号土坑（西より）



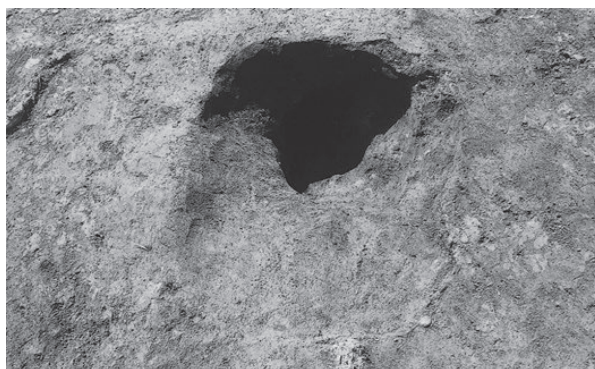
3号土坑土層断面（東より）



4号土坑（北西より）



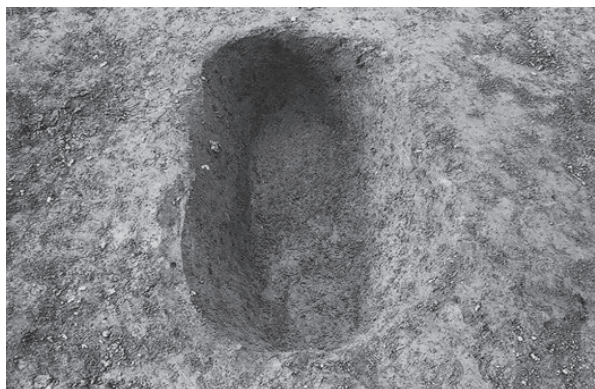
5号土坑（北より）



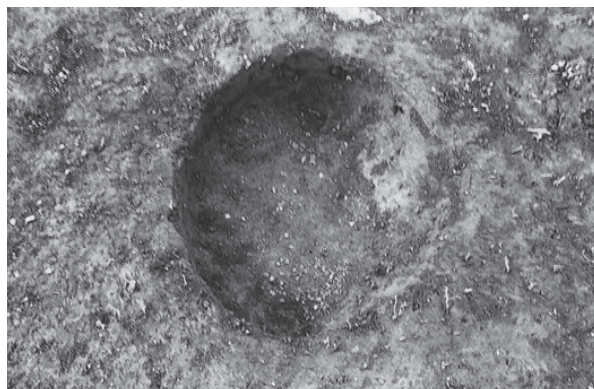
6号土坑（北東より）



7号土坑（北東より）



8号土坑（南東より）



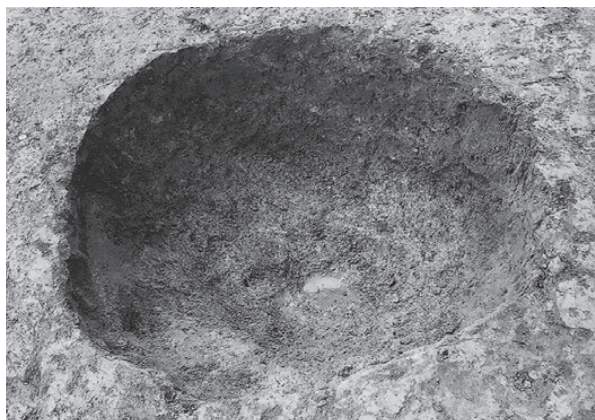
9号土坑（南東より）



10号土坑（北東より）



10号土坑土層断面（東より）



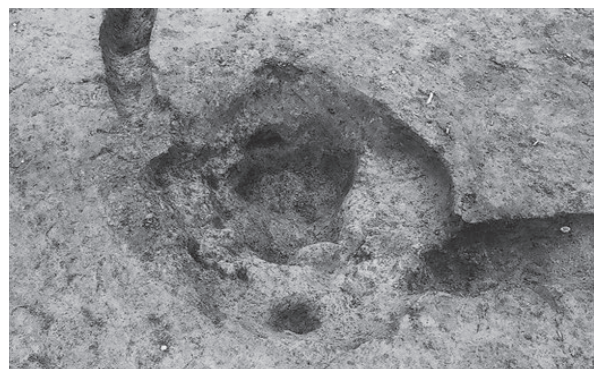
12号土坑（東より）



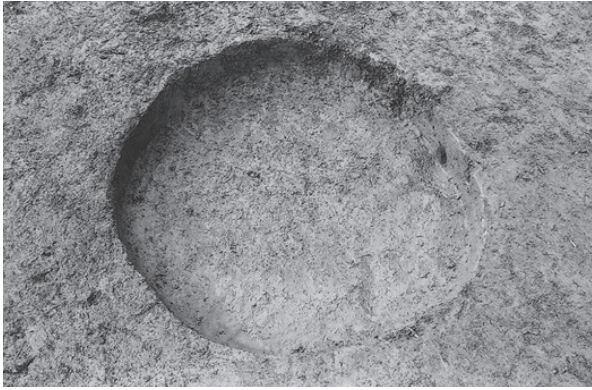
13号土坑（東より）



14号土坑（北西より）



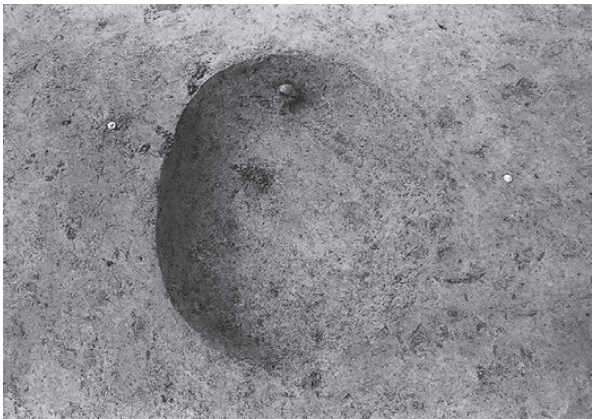
15号土坑（南東より）



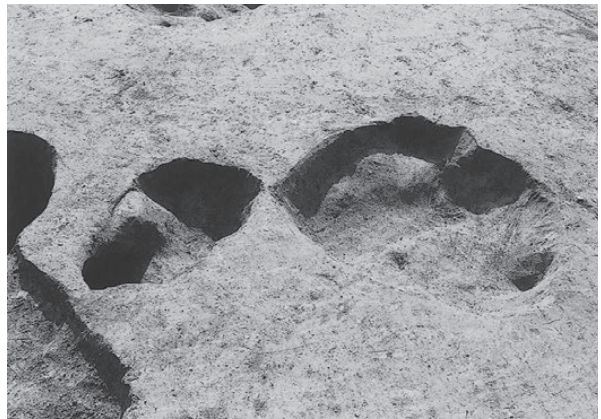
16号土坑（南より）



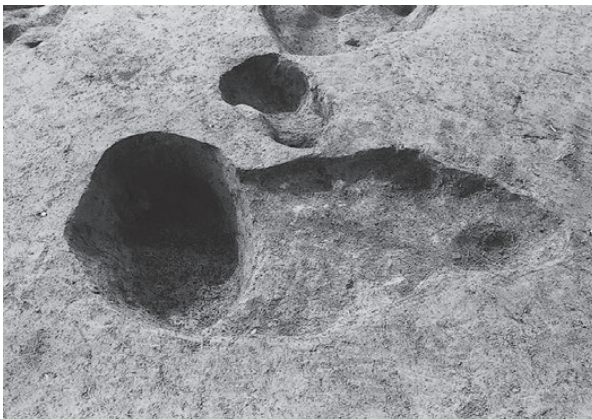
17号土坑（北東より）



18号土坑（南より）



19号土坑（北より）



20号土坑（東より）



21号土坑（東より）



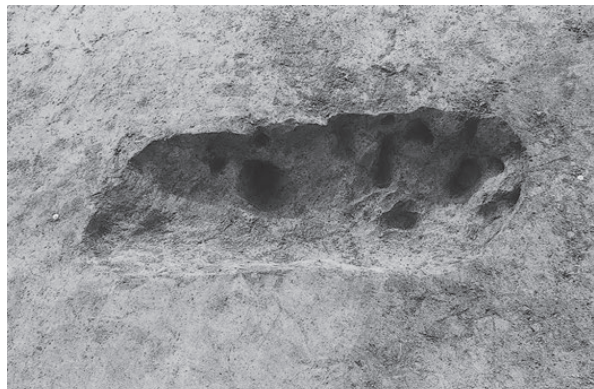
22号土坑（南東より）



22号土坑遺物出土状態（東より）



23号土坑（東南より）



24号土坑（北東より）



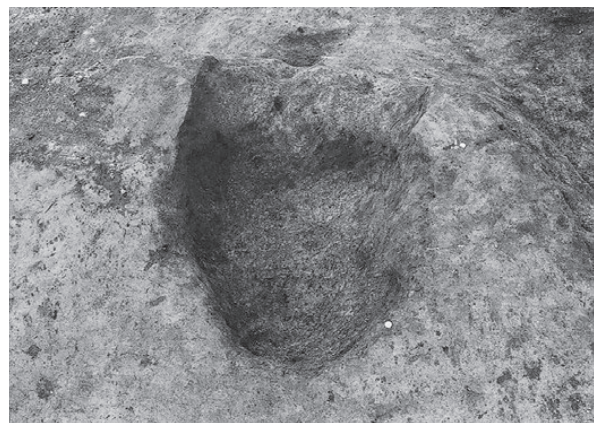
25号土坑（東より）



26号土坑（東南より）



27号土坑（南東より）



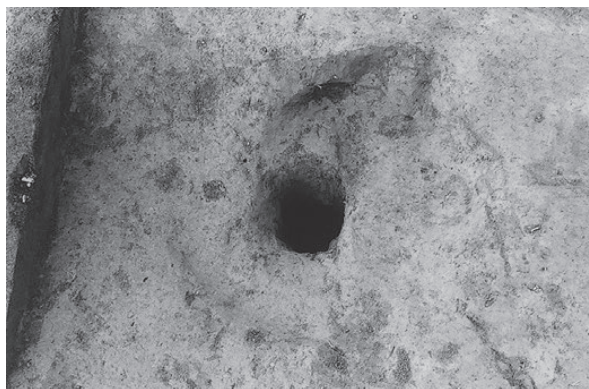
28号土坑（南東より）



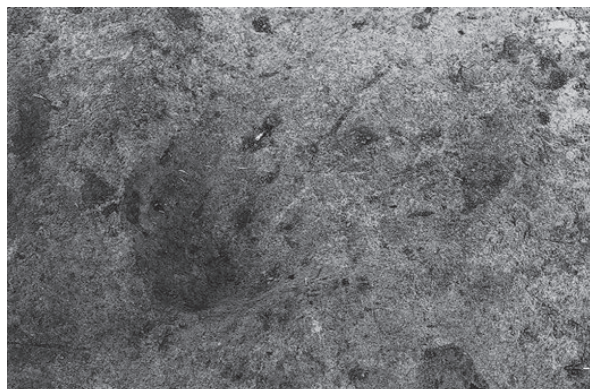
29号土坑（南より）



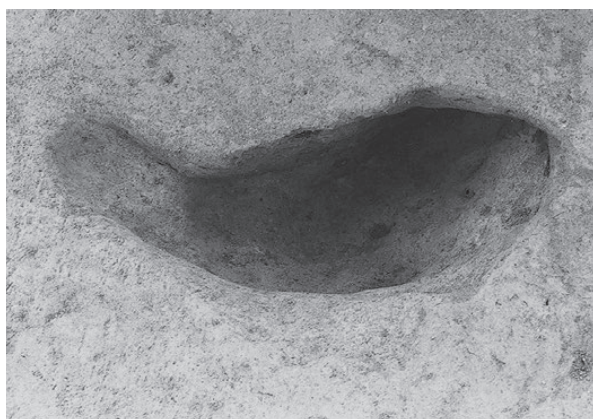
30号土坑（南東より）



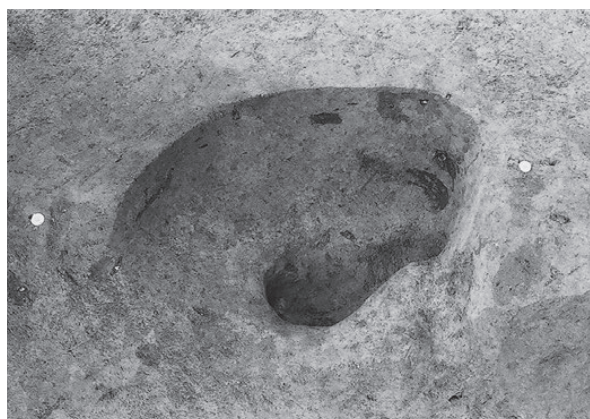
31号土坑 (南東より)



32号土坑 (南西より)



33号土坑 (東より)



34号土坑 (南より)



35号土坑 (東より)



36号土坑 (南より)



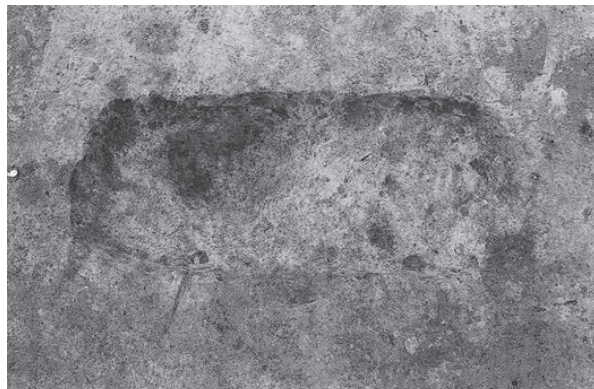
37号土坑、1号溝跡土層断面 (西より)



39~44号土坑 (南東より)



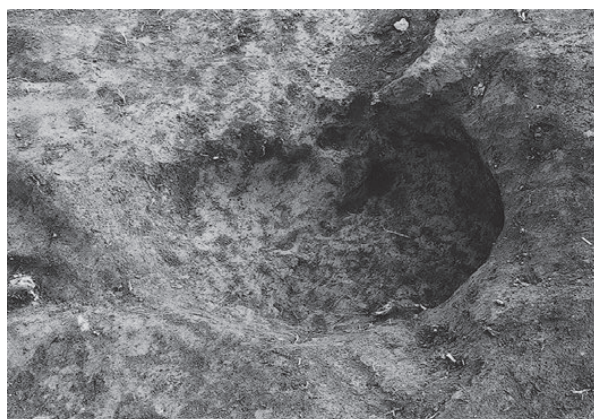
45号土坑（東より）



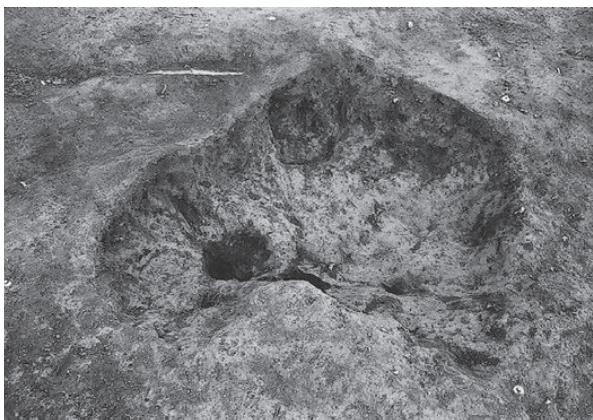
46号土坑（南より）



47号土坑（南東より）



48号土坑（北より）



49号土坑（北西より）



50号土坑（南より）



50号土坑C - C' 土層断面（南より）



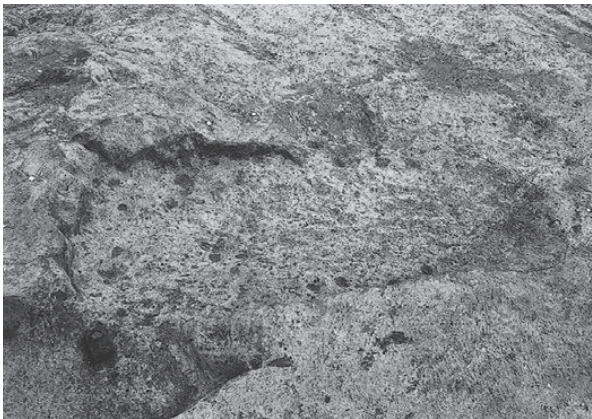
51号土坑、3号溝跡（東より）



52号土坑、3号溝跡（南より）



53号土坑（東より）



54~56号土坑（西より）



57号土坑、4号溝跡（北西より）



58号土坑（東より）



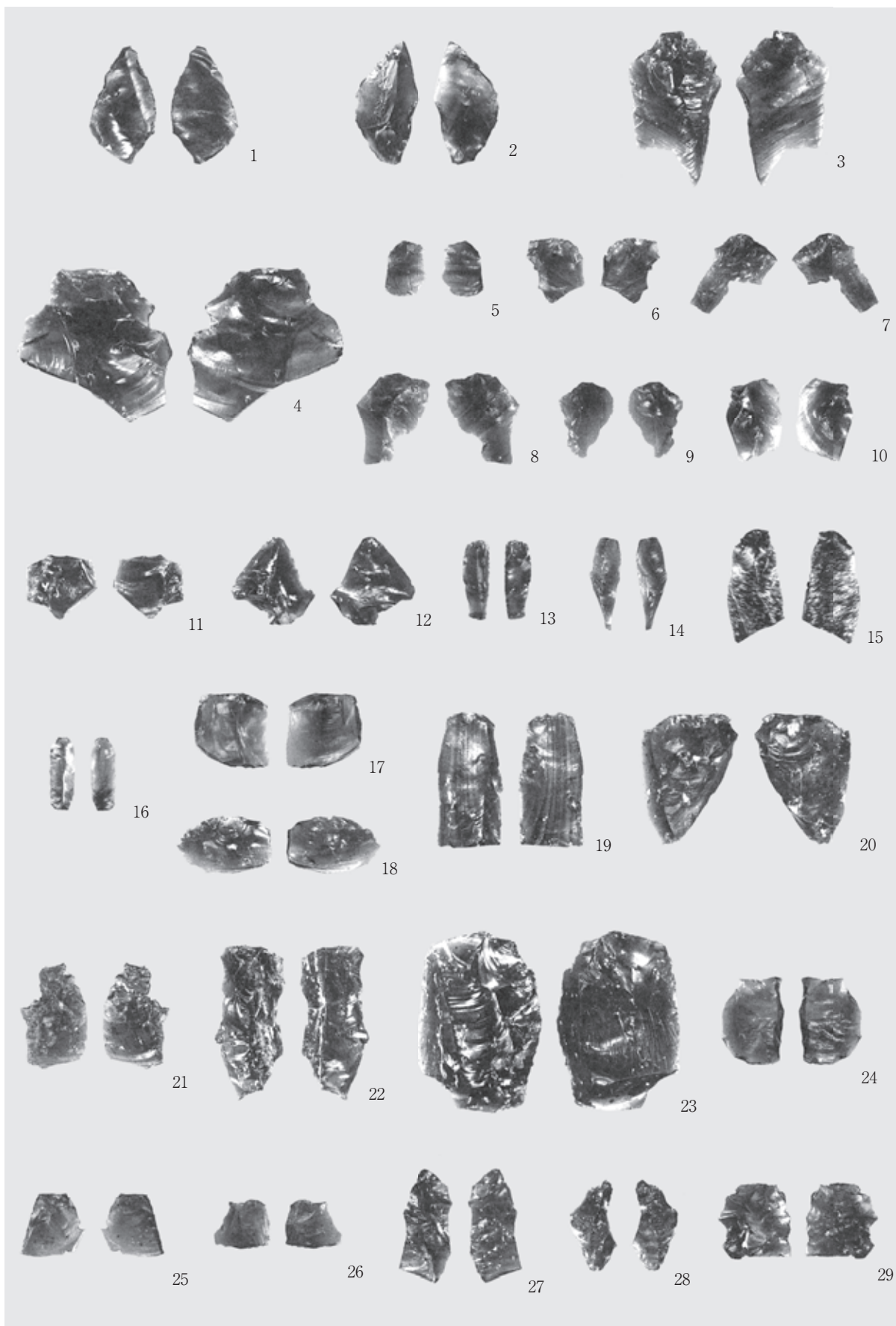
59号土坑（北より）



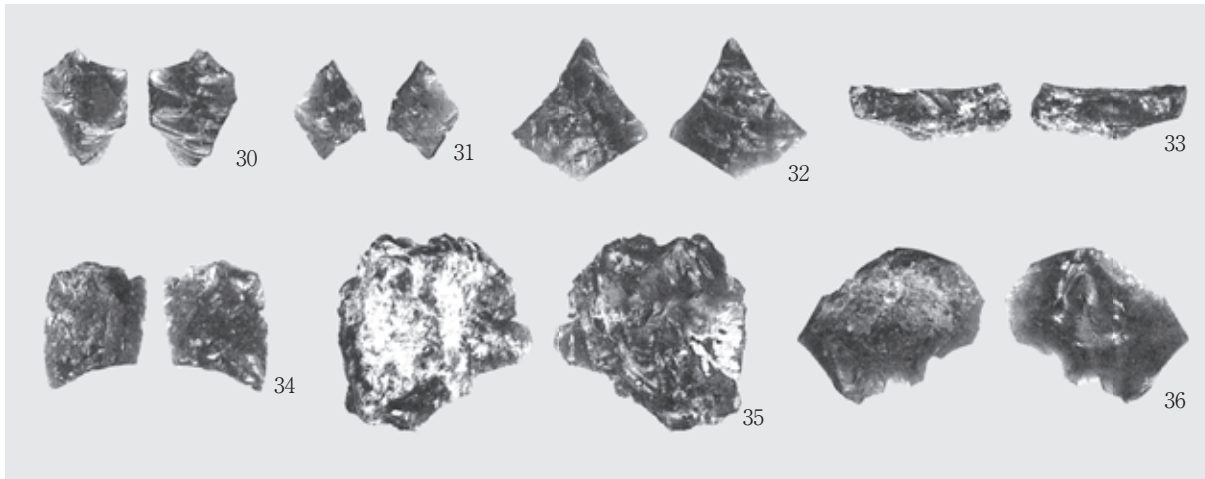
60・61号土坑（東より）



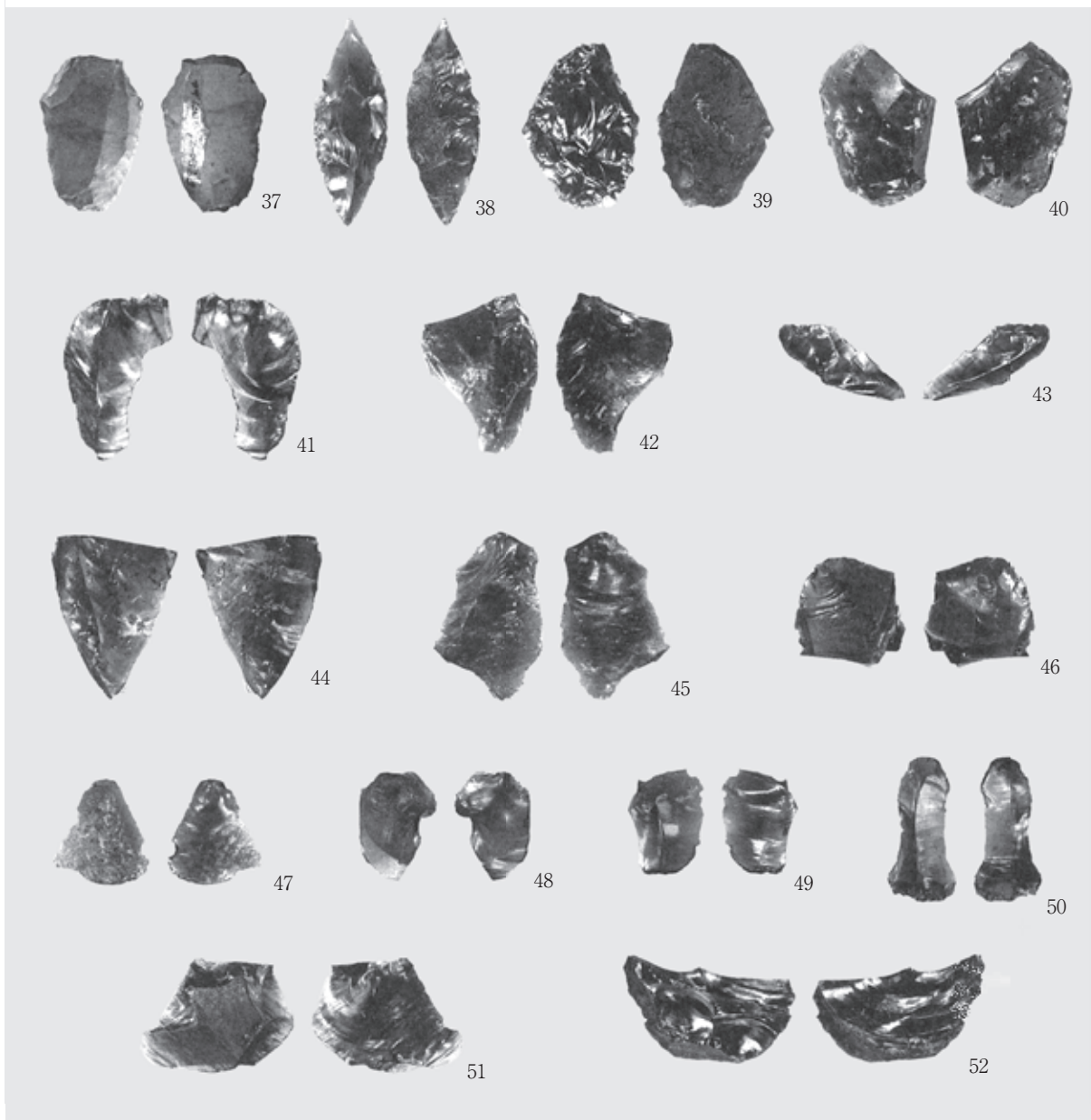
62号土坑（南西より）



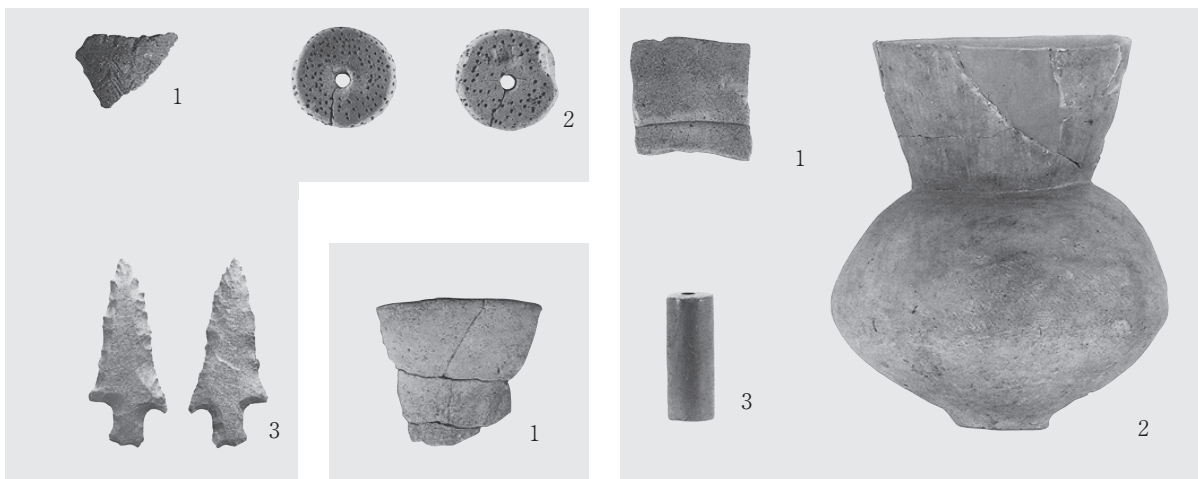
旧石器時代トレンチ 6 出土遺物(1)



旧石器時代トレンチ 6 出土遺物(2)



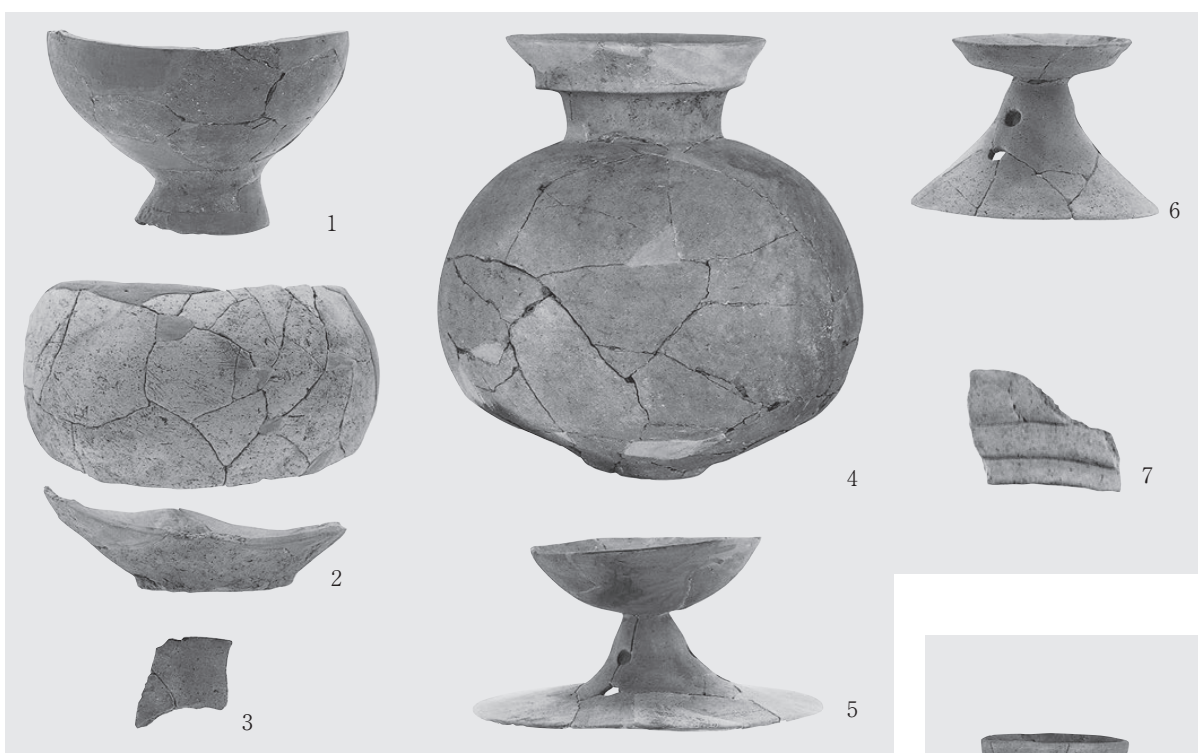
旧石器時代トレンチ外出土遺物



1号住居跡出土遺物

3号住居跡出土遺物

3号方形周溝墓出土遺物



6号方形周溝墓出土遺物



7号方形周溝墓出土遺物



8号方形周溝墓出土遺物

9号方形周溝墓出土遺物



3号方形周溝墓土器2 (口縁部)



3号方形周溝墓土器2 (胴部)



8号方形周溝墓土器1



3号方形周溝墓土器3



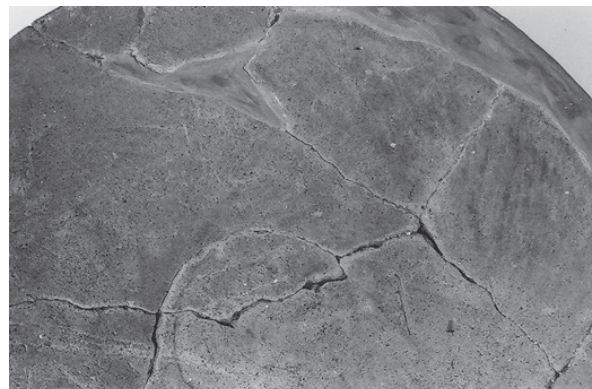
8号方形周溝墓土器4



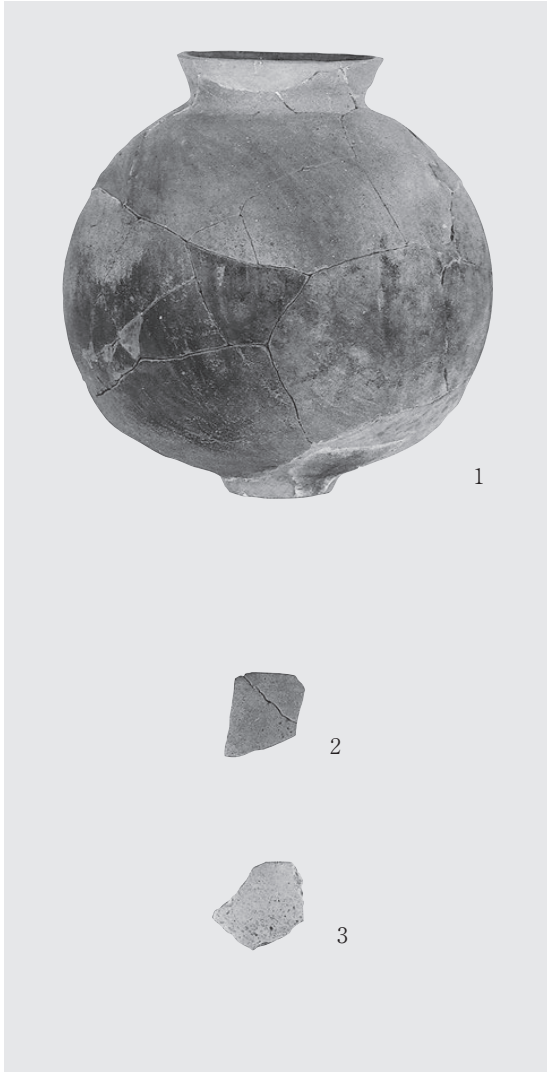
8号方形周溝墓土器6 (口縁部外面)



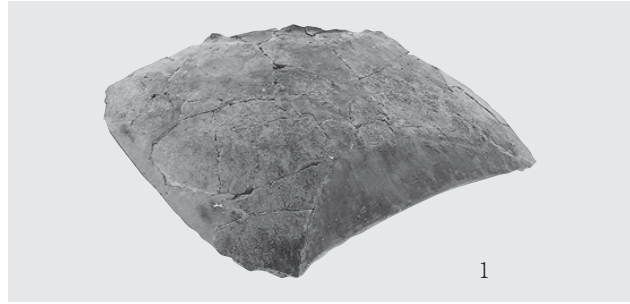
8号方形周溝墓土器6 (口縁部内面)



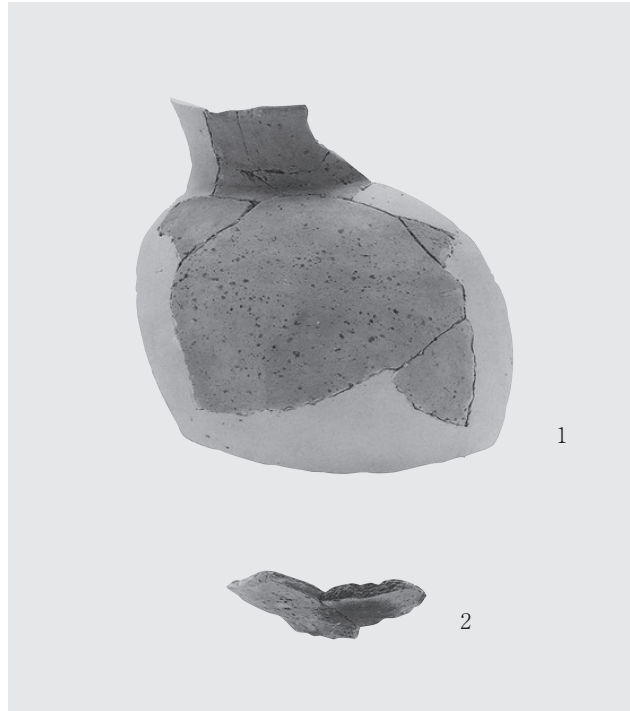
8号方形周溝墓土器8



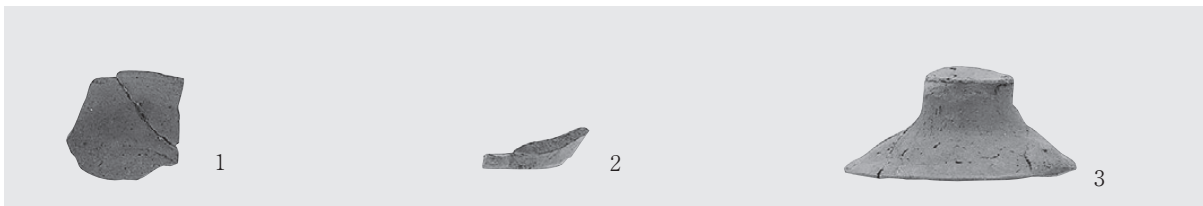
10号方形周溝墓出土遺物



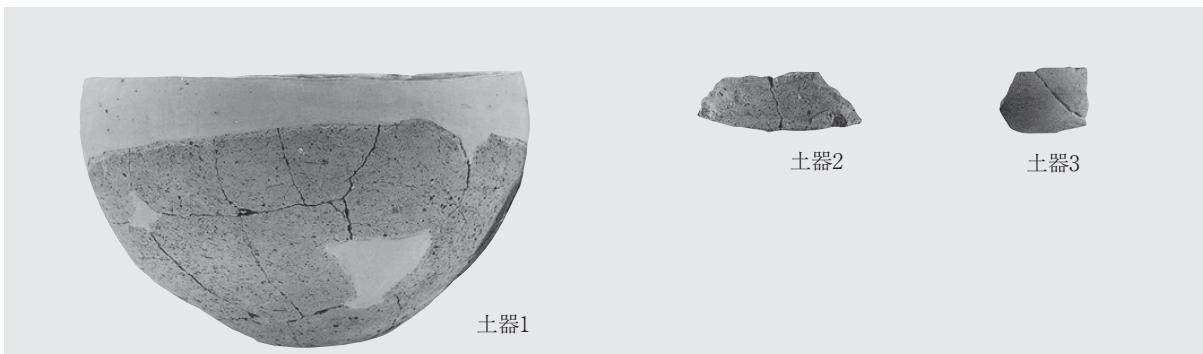
11号方形周溝墓出土遺物



12号方形周溝墓出土遺物



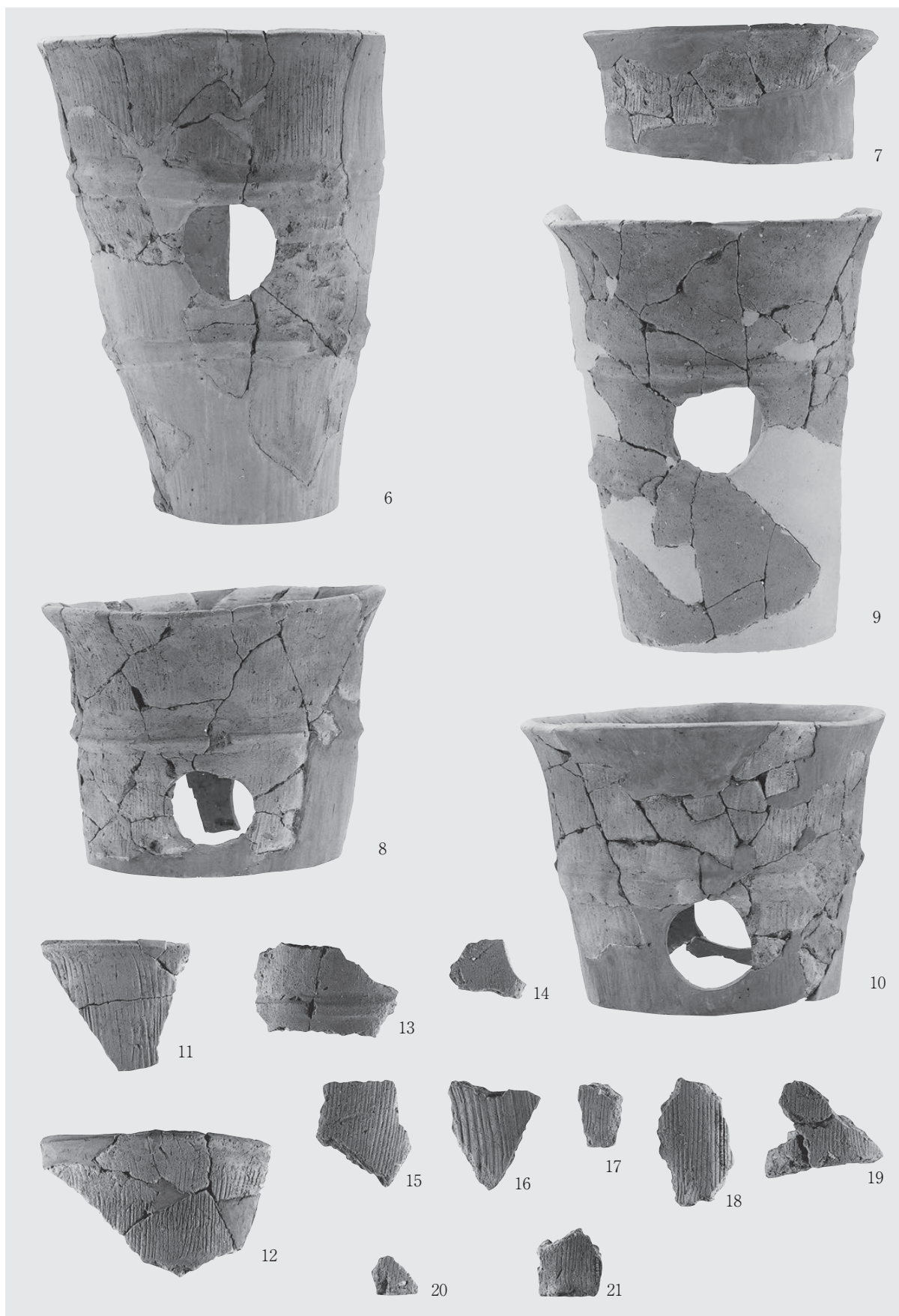
1号円墳出土遺物



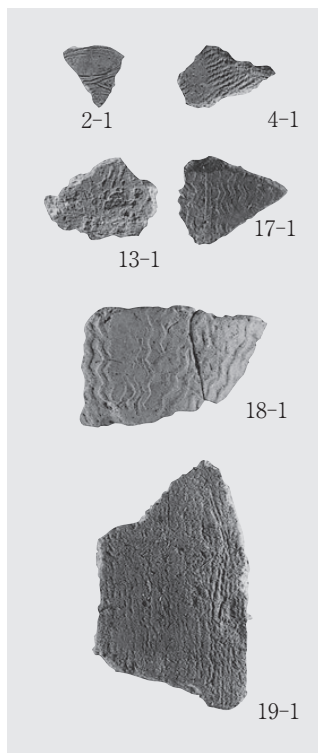
2号円墳出土遺物(1)



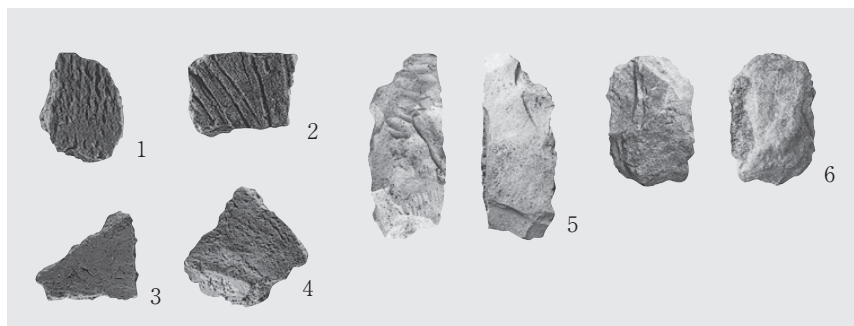
2号円墳出土遺物(2)



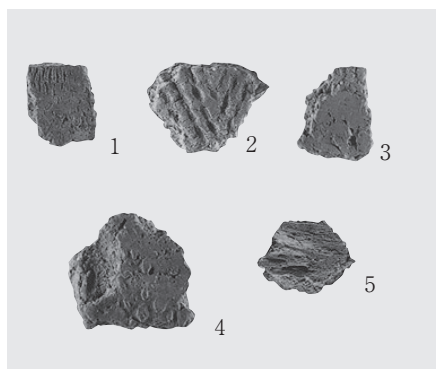
2号円墳出土遺物(3)



2・4・13・17~19号
土坑出土遺物



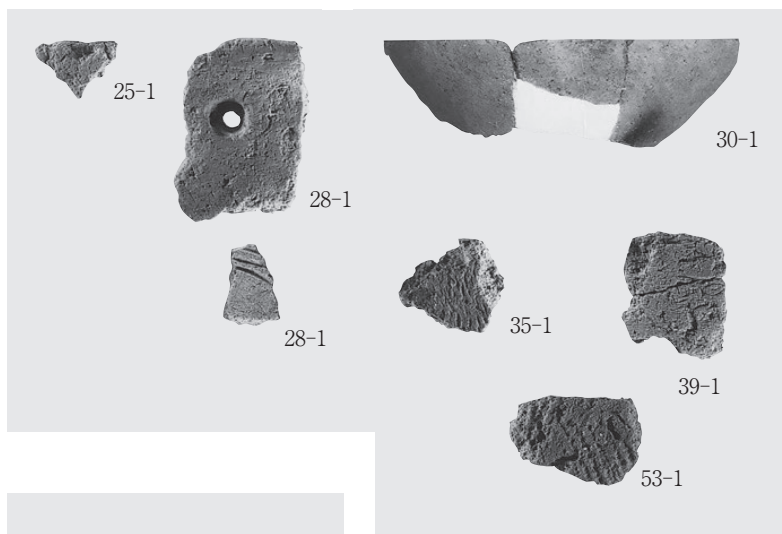
10号土坑出土遺物



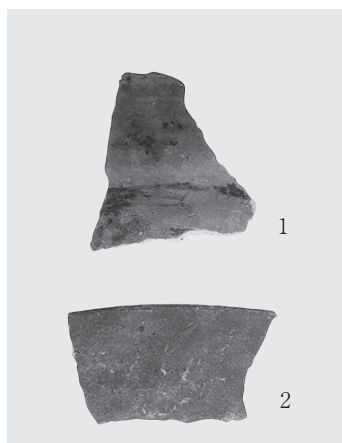
21号土坑出土遺物



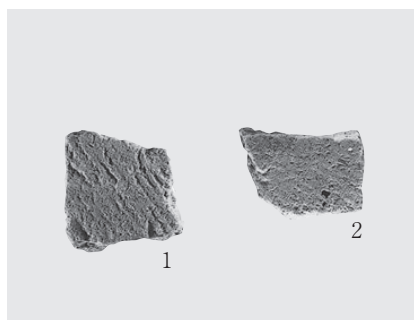
22号土坑出土遺物



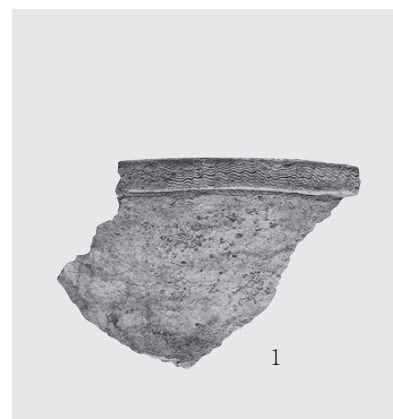
25・28・30・35・39・53号
土坑出土遺物



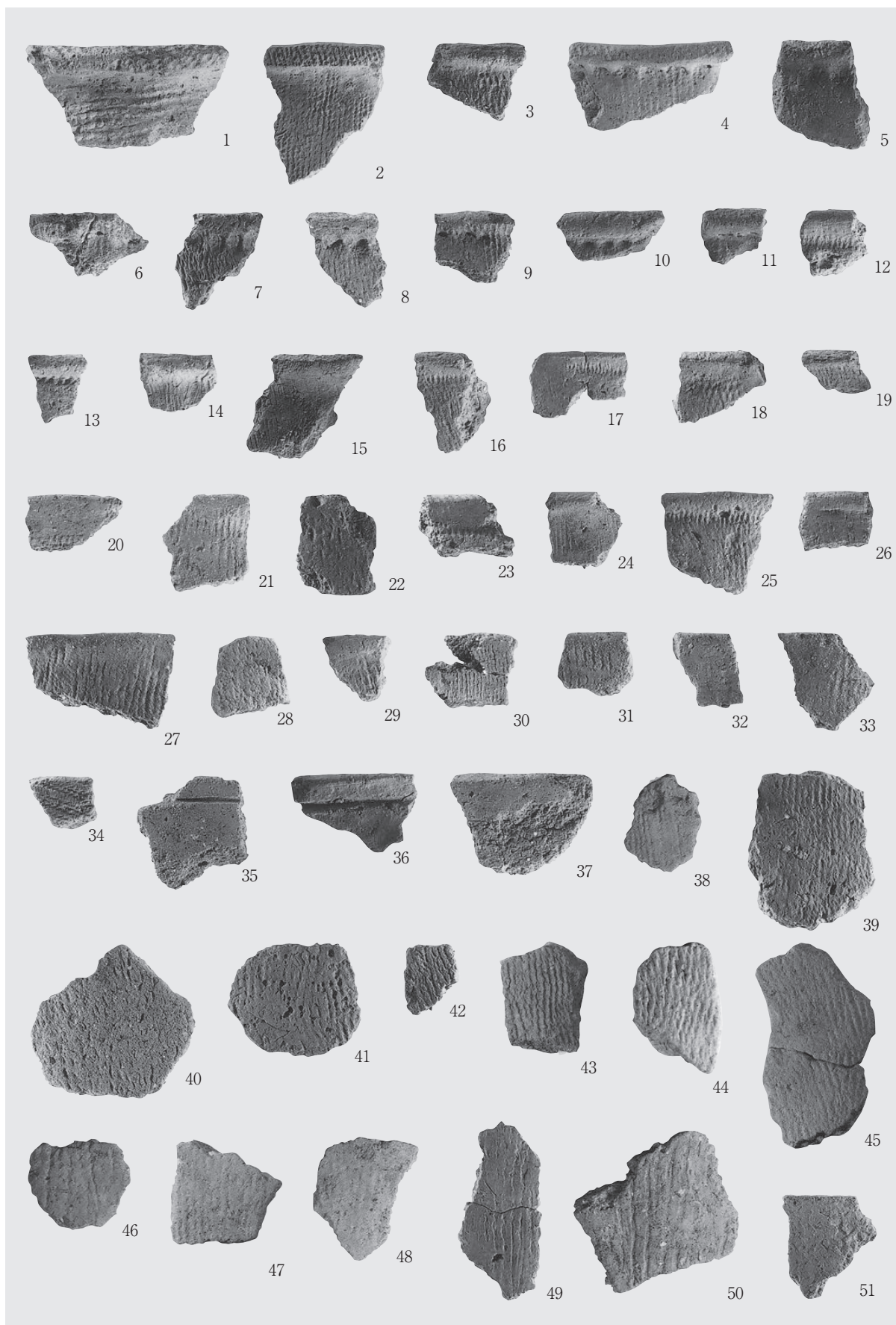
57号土坑出土遺物



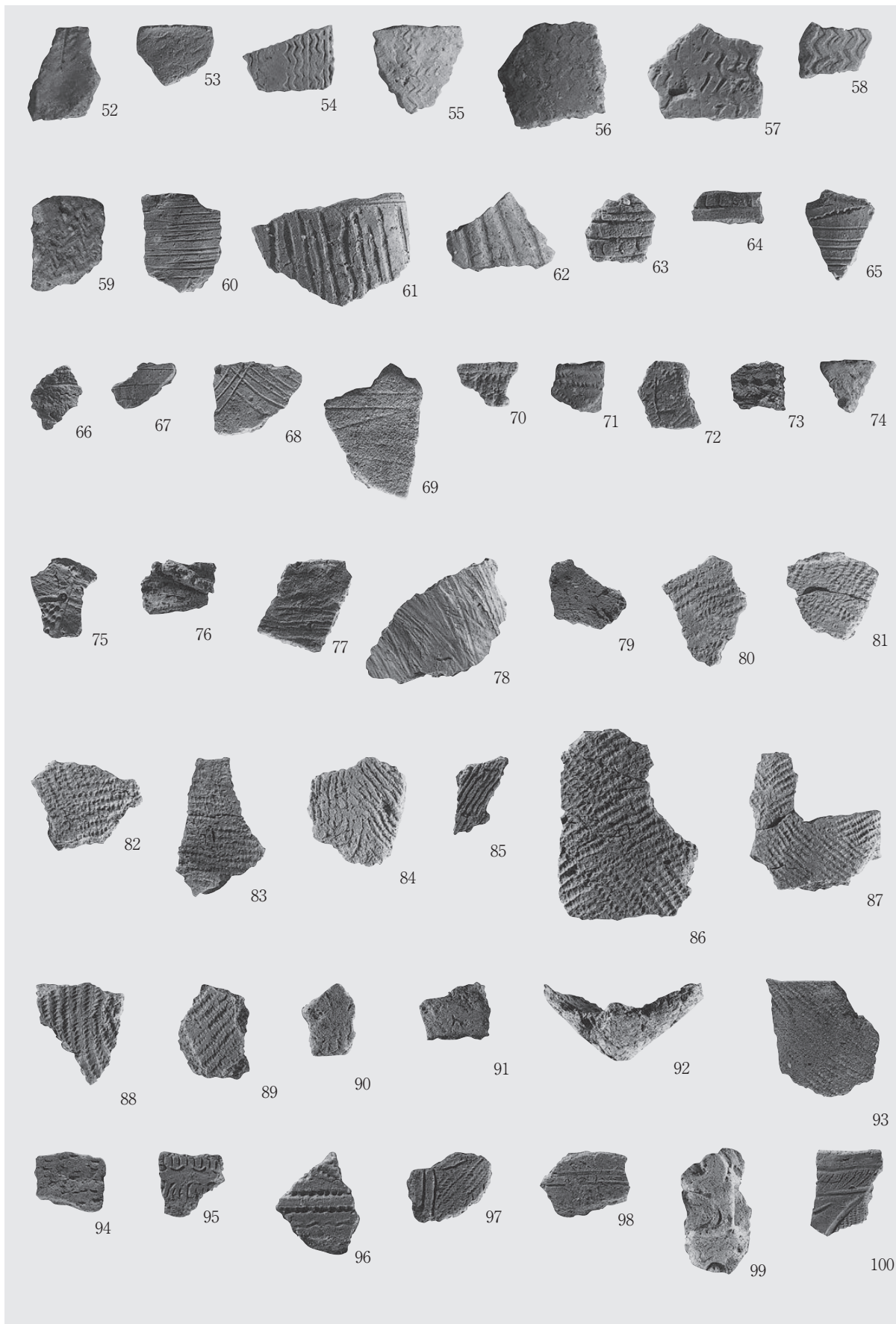
59号土坑出土遺物



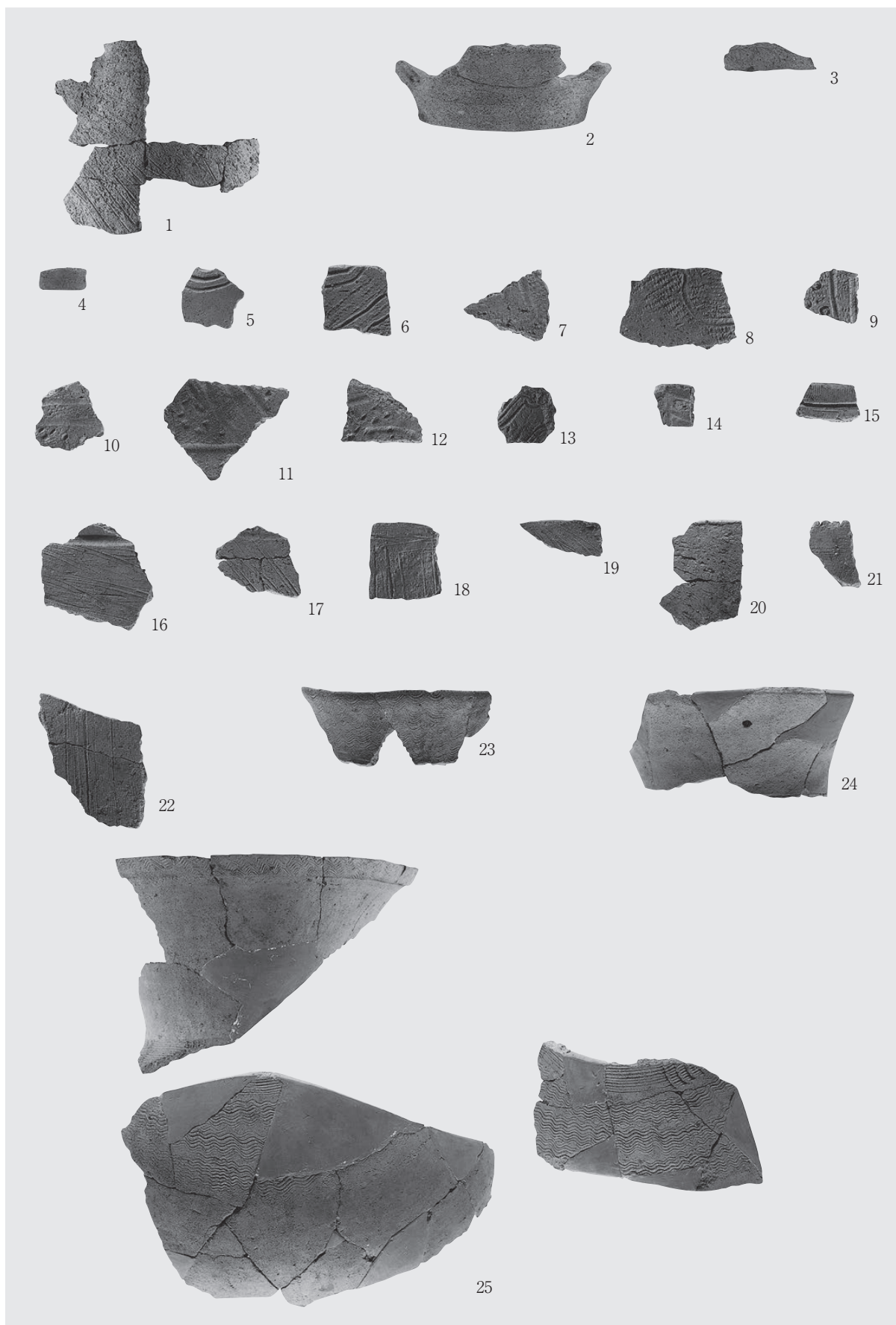
62号土坑出土遺物



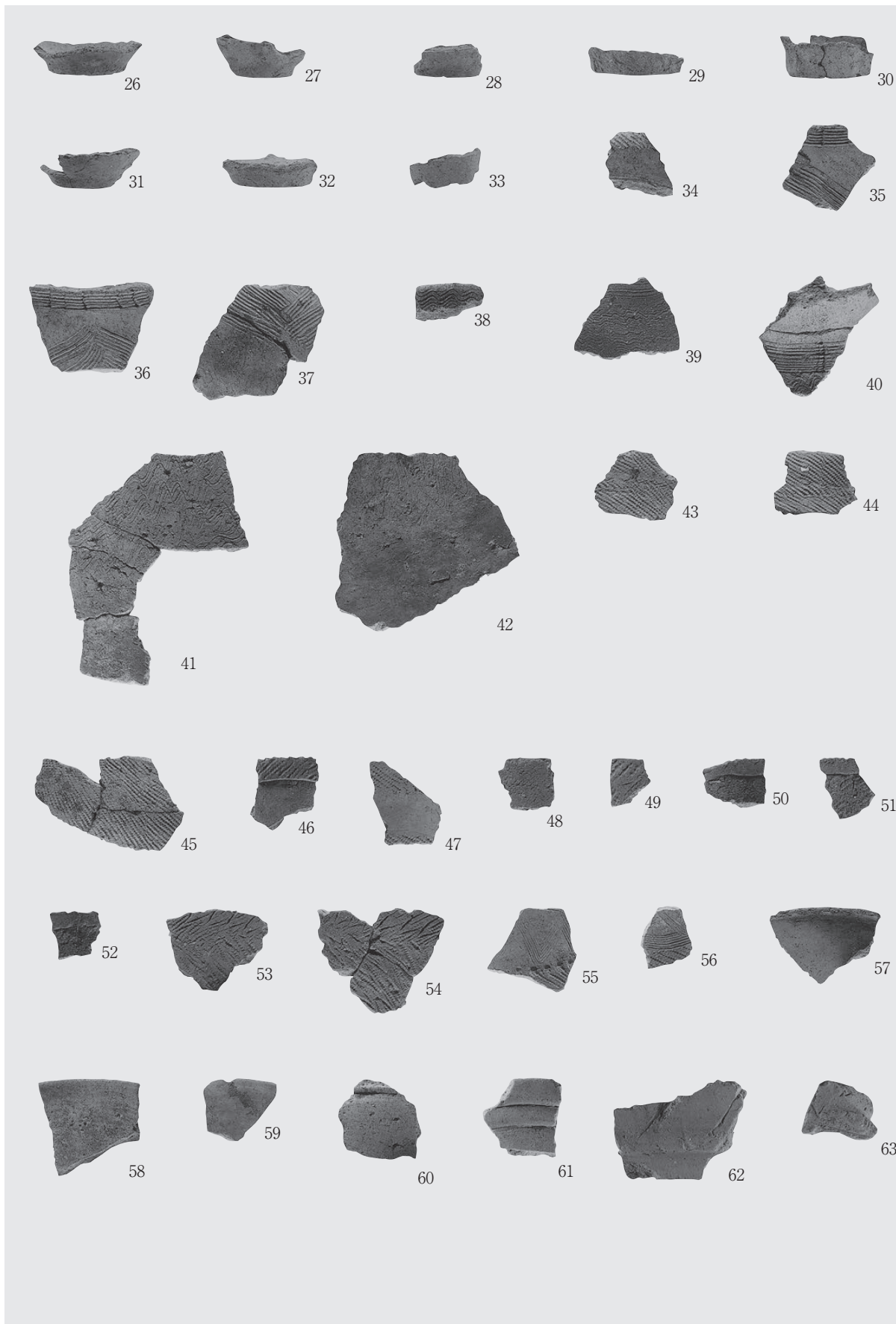
遺構外出土縄文土器(1)



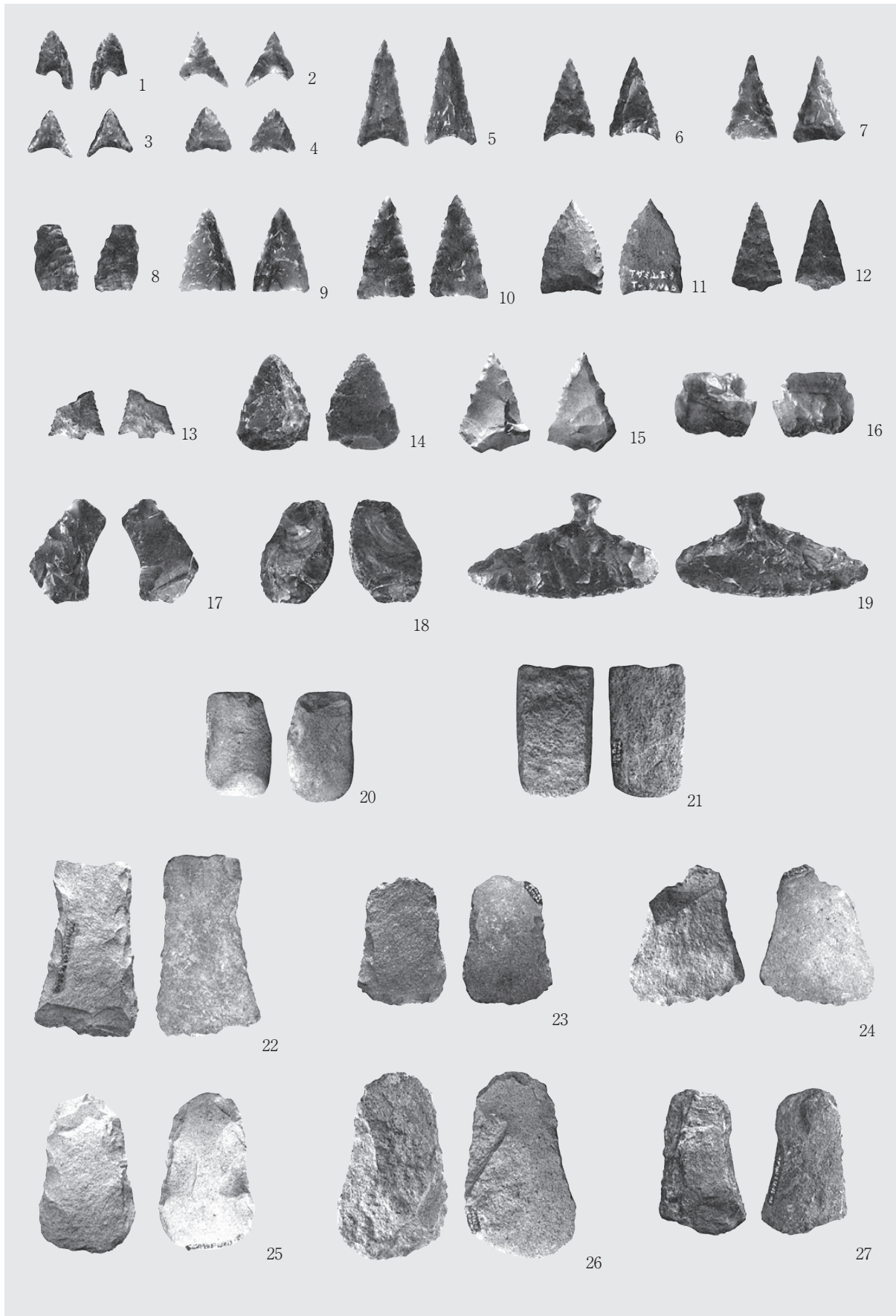
遺構外出土縄文土器(2)



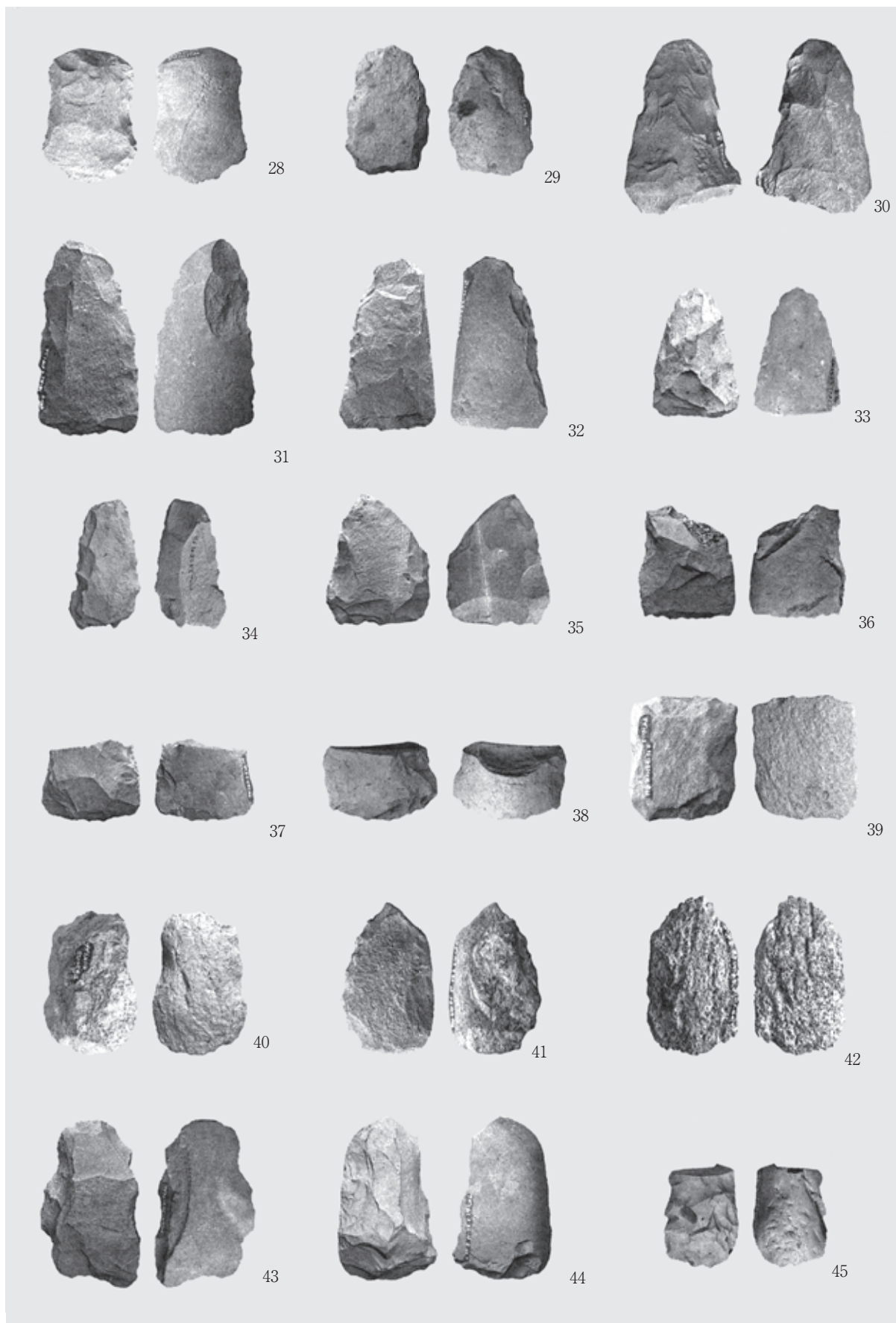
遺構外出土弥生土器



遺構外出土弥生土器・土師器・埴輪



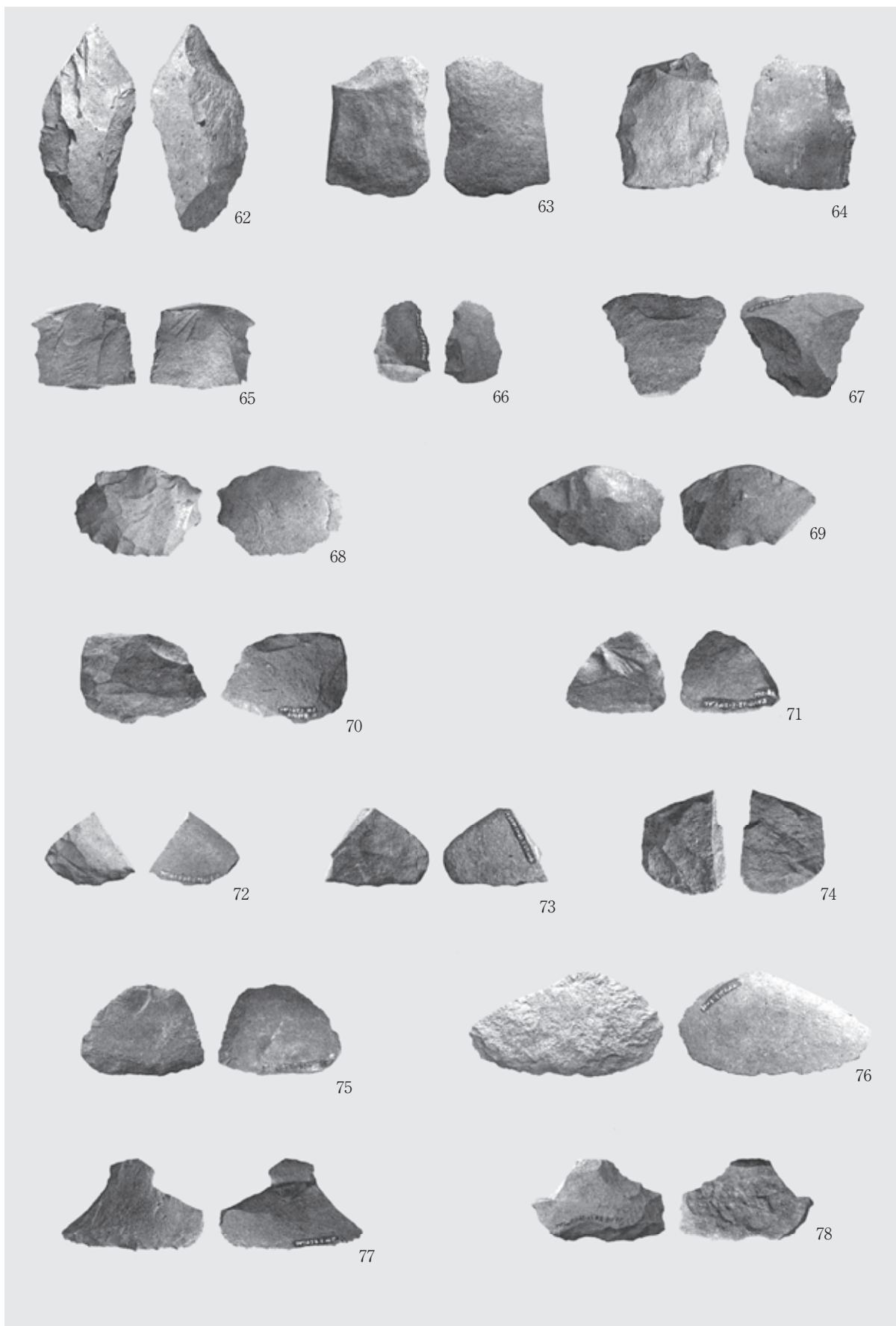
遺構外出土石器・石製品(1)



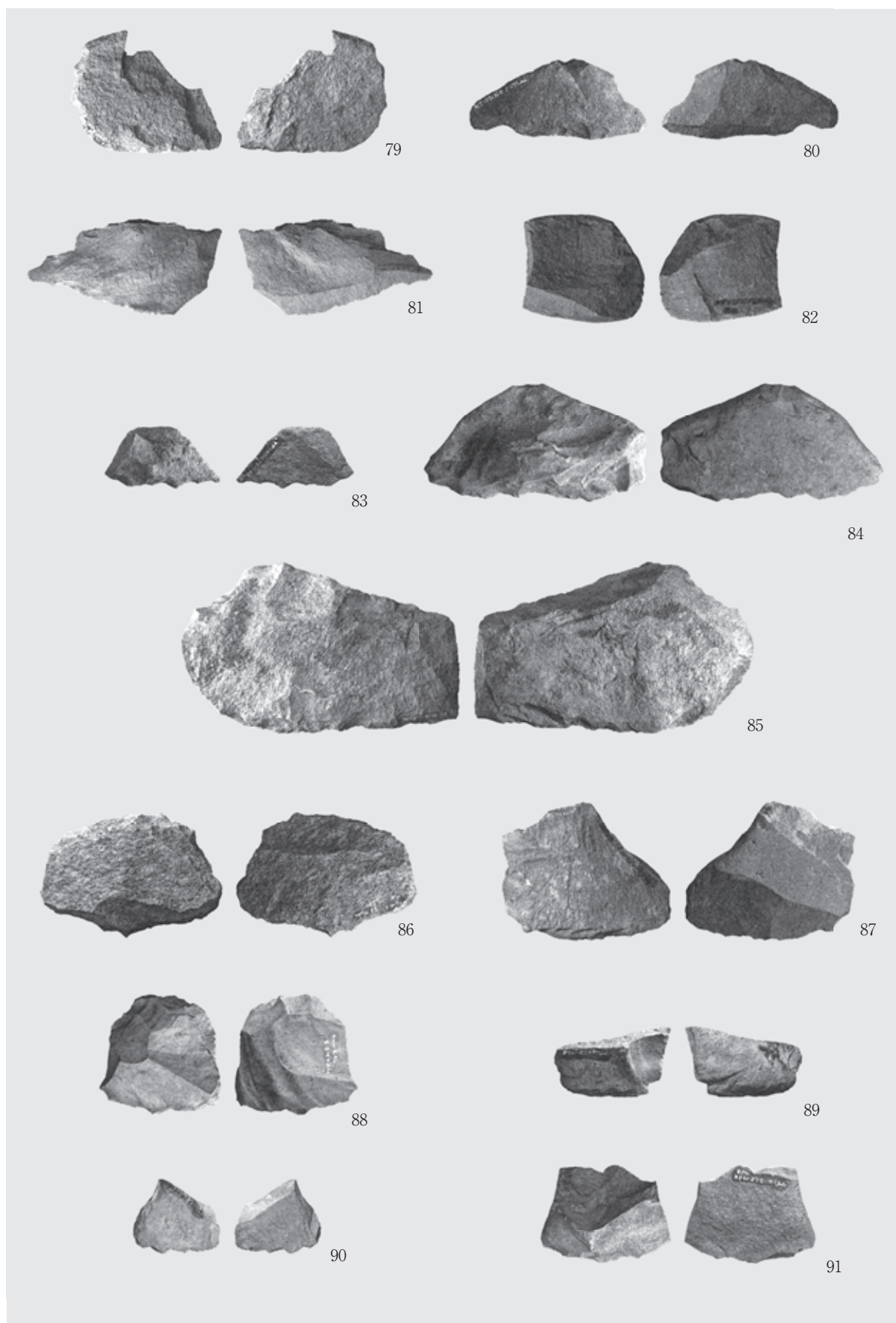
遺構外出土石器・石製品(2)



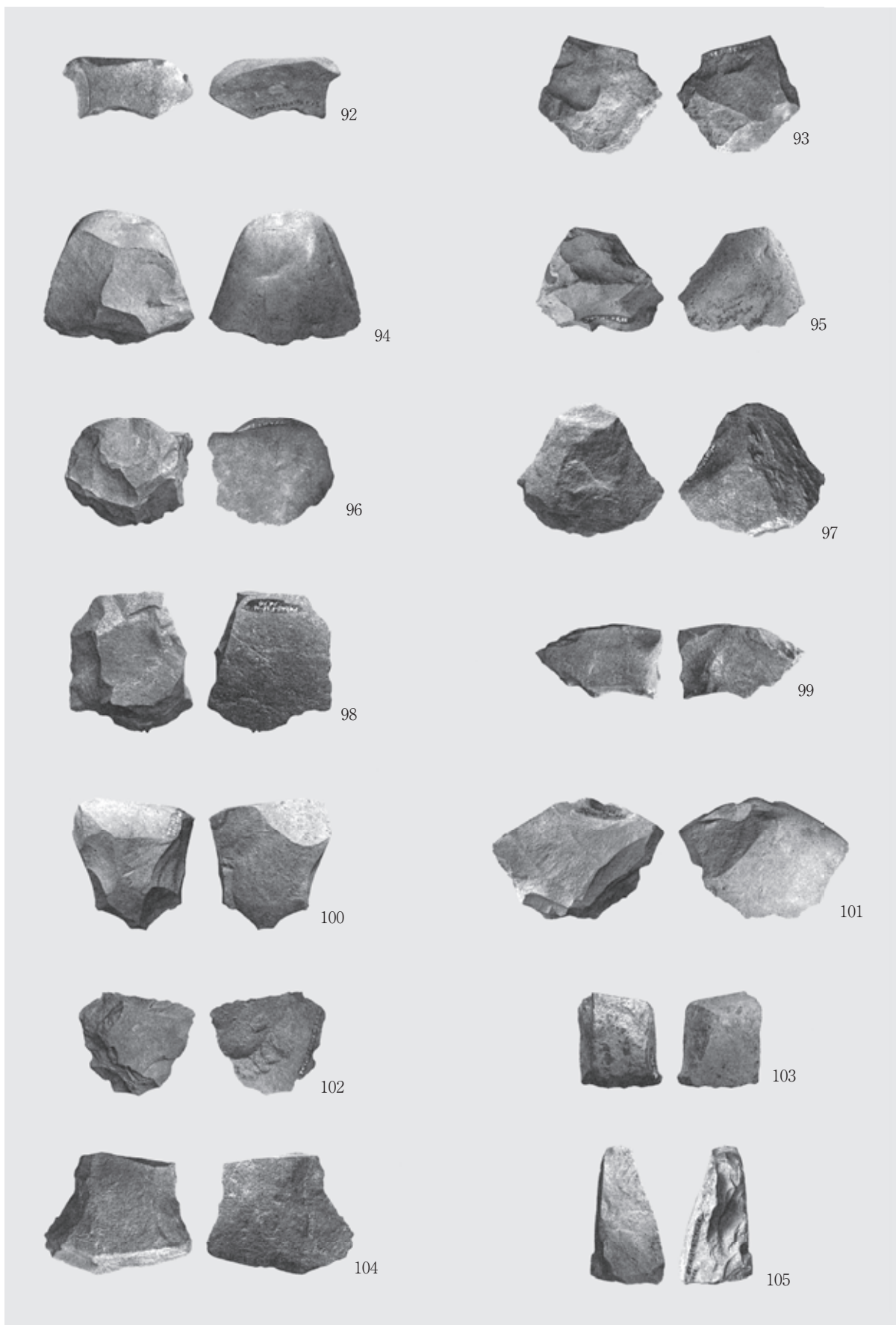
遺構外出土石器・石製品(3)



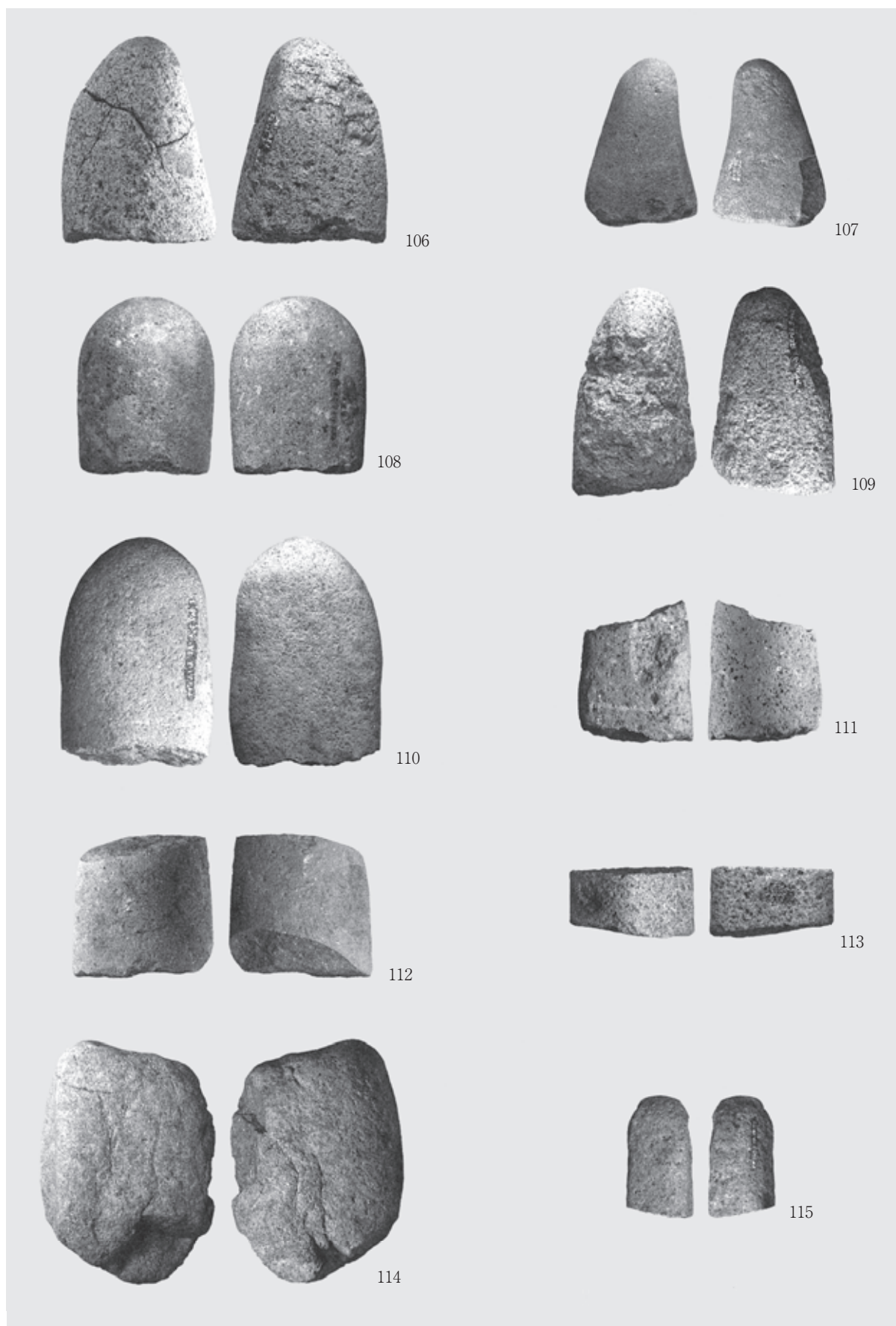
遺構外出土石器・石製品(4)



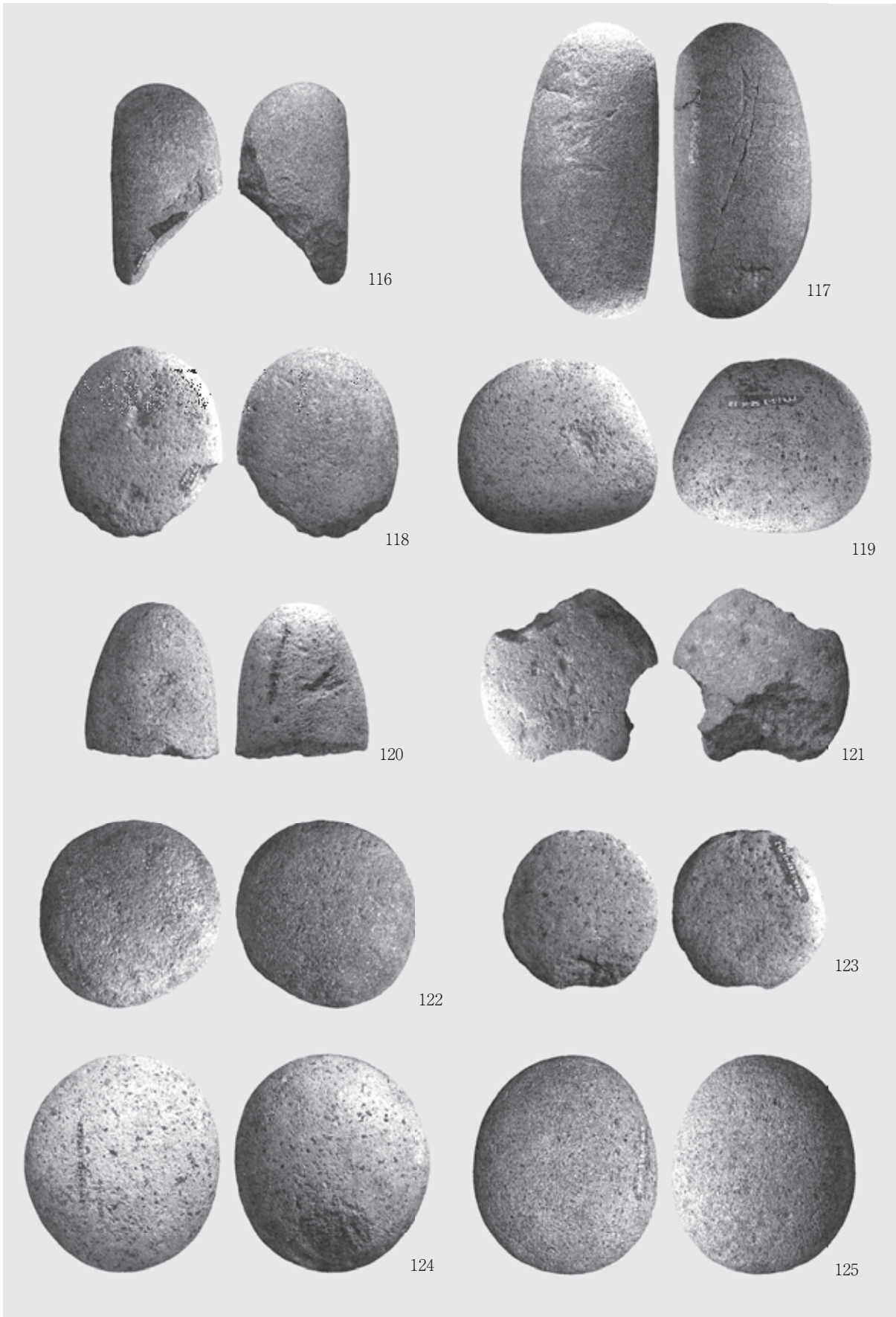
遺構外出土石器・石製品(5)



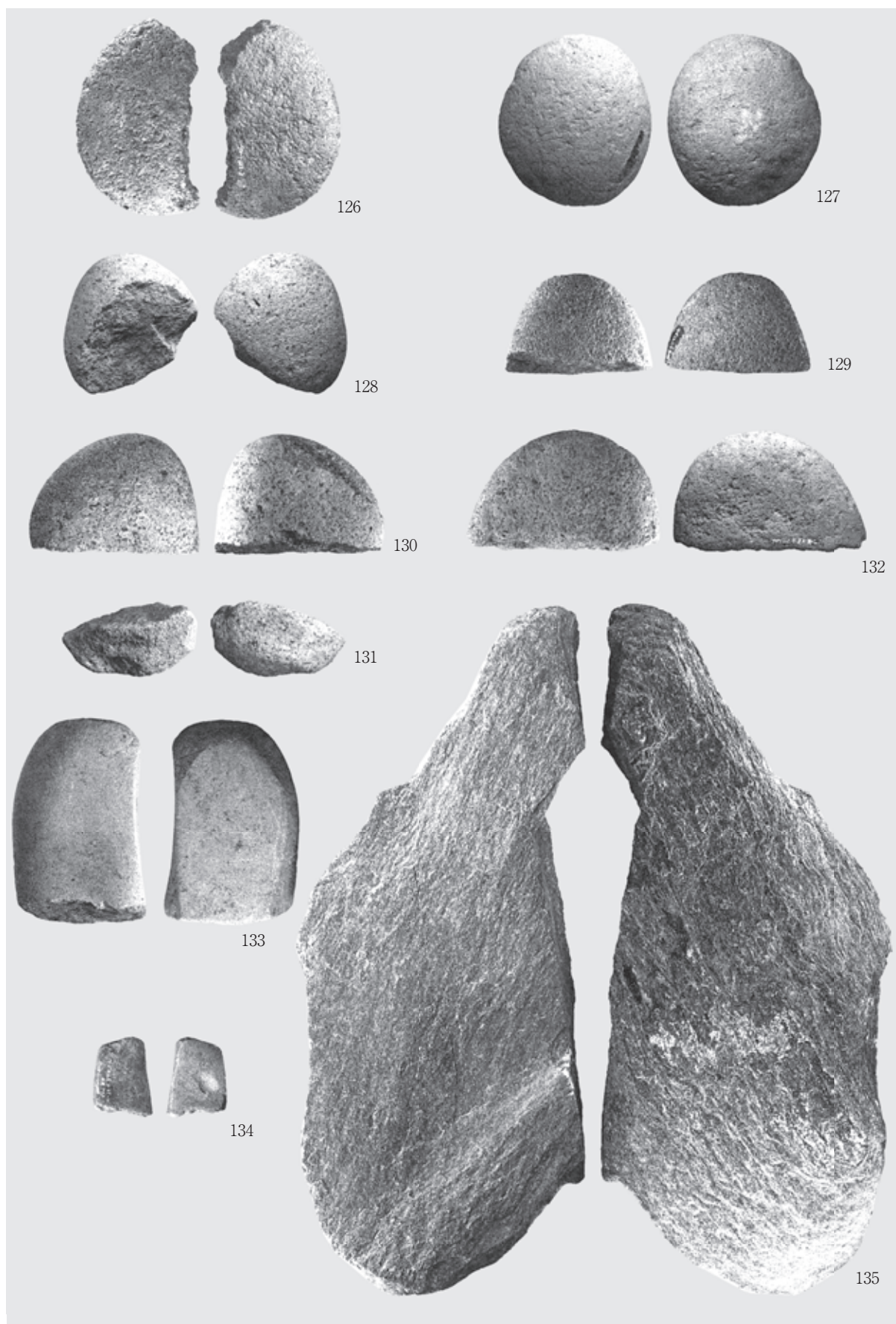
遺構外出土石器・石製品(6)



遺構外出土石器・石製品(7)



遺構外出土石器・石製品(8)



遺構外出土石器・石製品(9)



久下東遺跡（Ⅲ次）A地点全景（北より）



久下東遺跡（Ⅲ次）A地点全景（西より）



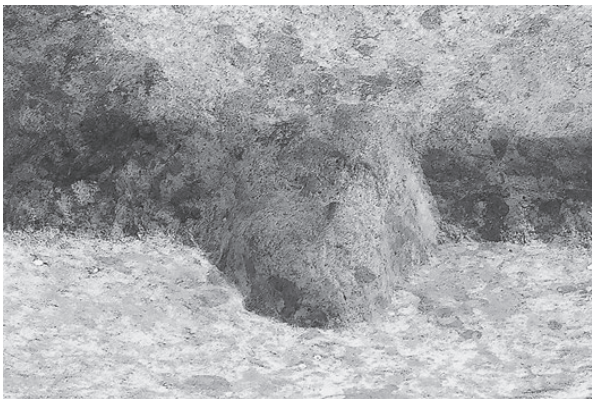
1号住居跡（西より）



1号住居跡（西より）



1号住居跡カマド土層断面（西より）



1号住居跡カマド（西より）



1号溝（西より）



久下東遺跡（Ⅲ次）B地点南半全景（北より）



久下東遺跡（Ⅲ次）B1地点全景（上空より）



31号住居跡（南西より）



31号住居跡東西土層断面（南東より）



31号住居跡遺物出土状態（南より）



31号住居跡カマド土層断面（南西より）



31号住居跡貯蔵穴土層断面（南西より）



43号住居跡（西より）



43号住居跡遺物出土状態（西より）



43号住居跡カマド遺物出土状態（西より）



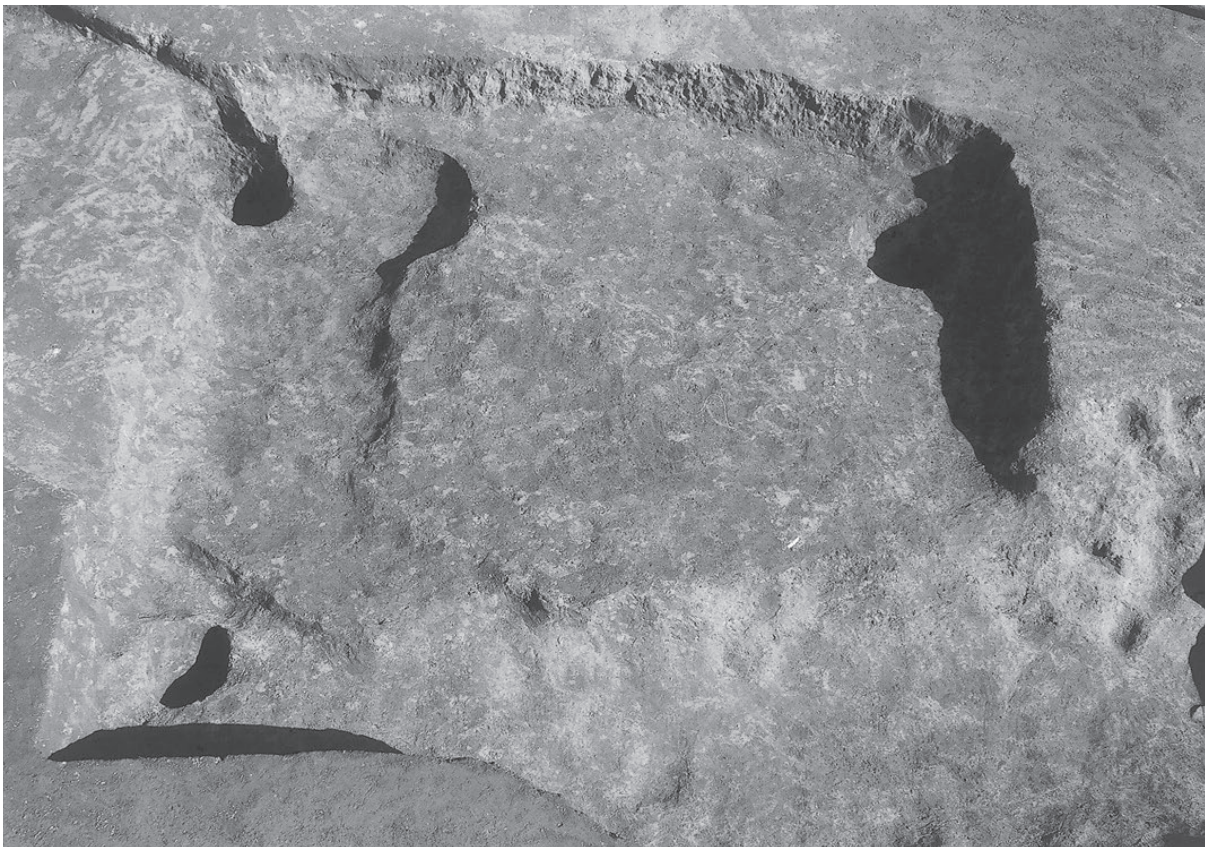
43号住居跡北側貯蔵穴土層断面（西より）



43号住居跡掘り方東西土層断面（南より）



45号住居跡（西より）



61号住居跡（西より）



62号住居跡（西より）



62号住居跡遺物出土状態（西より）



62号住居跡カマド土層断面（南より）



62号住居跡カマド（西より）



62号住居跡掘り方（西より）



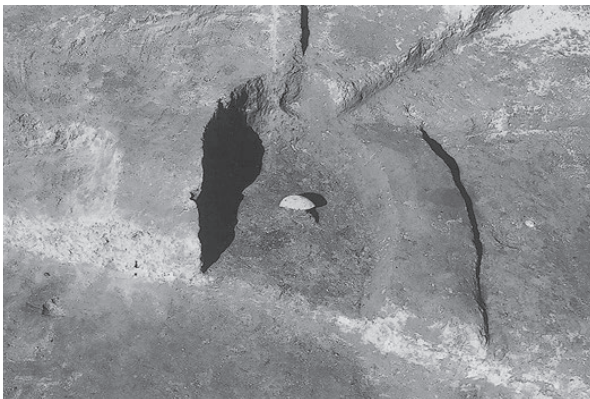
65号住居跡（南東より）



65号住居跡遺物出土状態（西より）



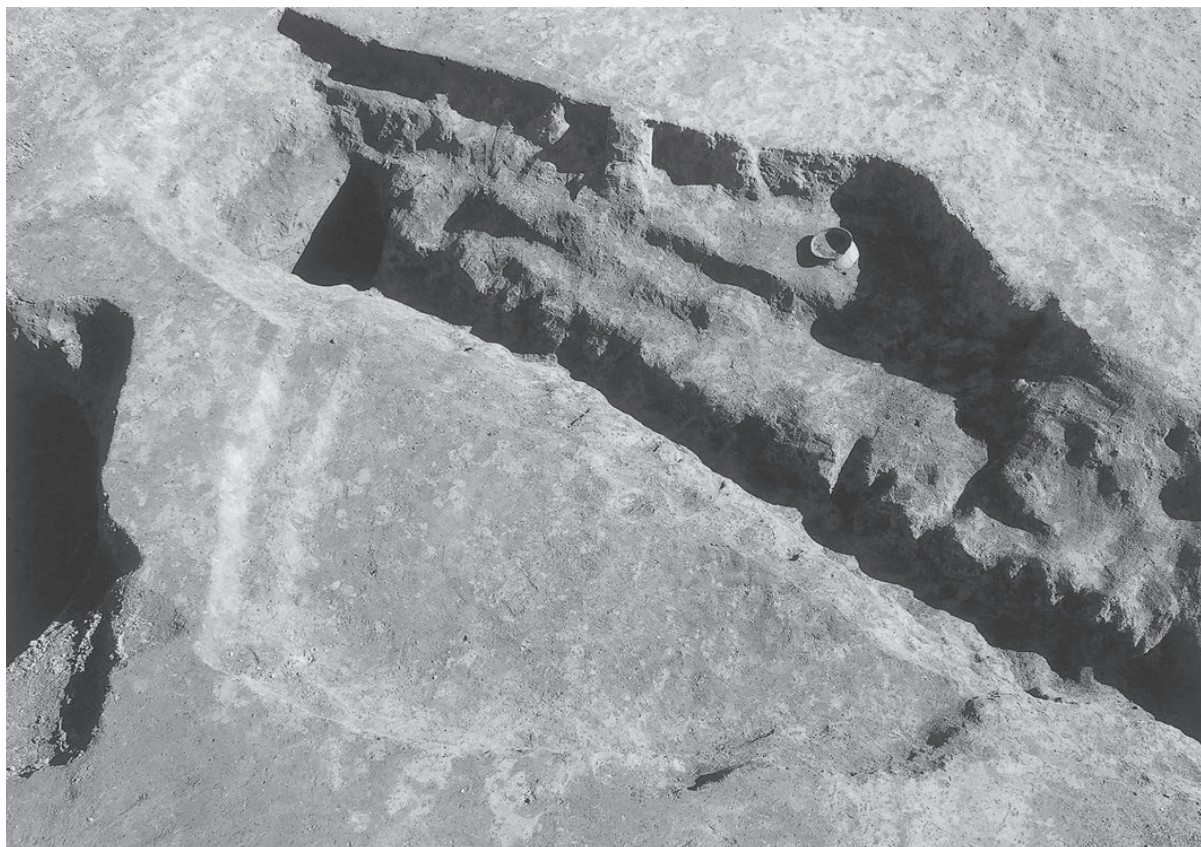
65号住居跡カマド南北土層断面（東より）



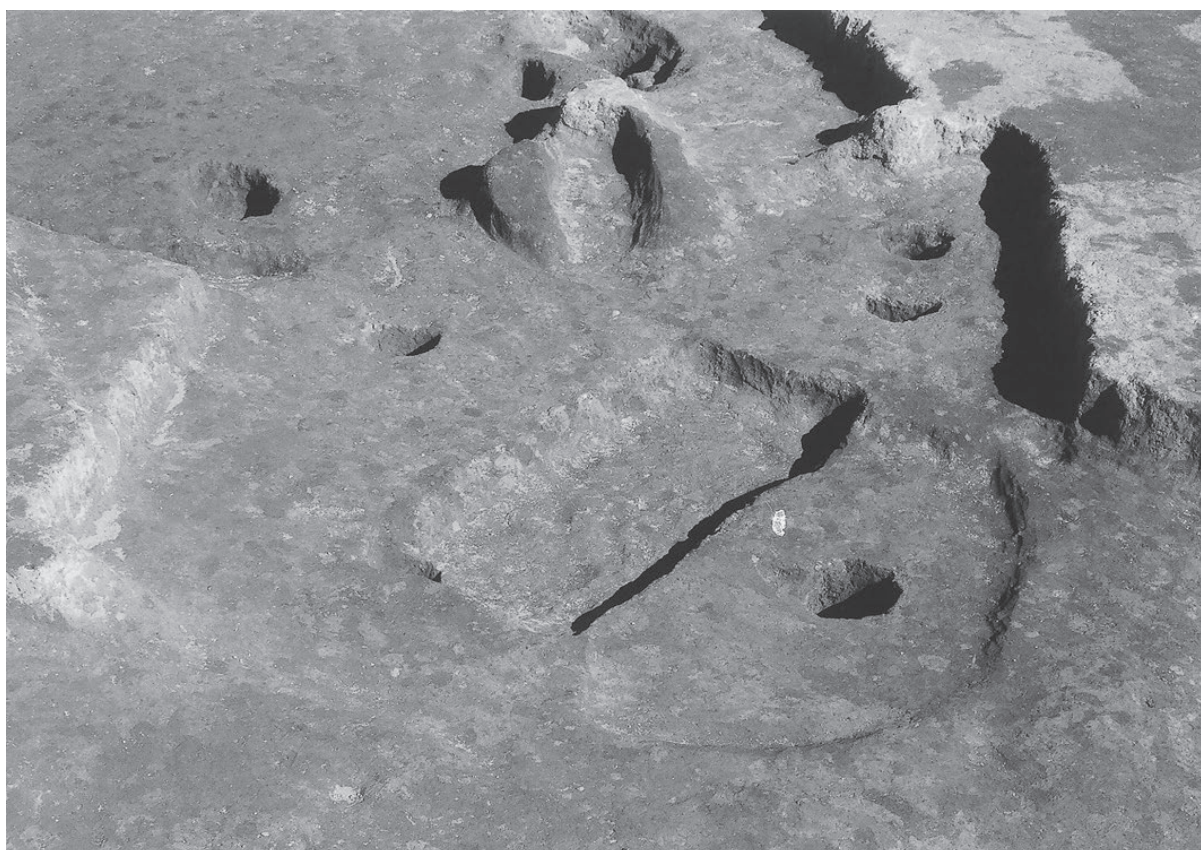
65号住居跡カマド（南東より）



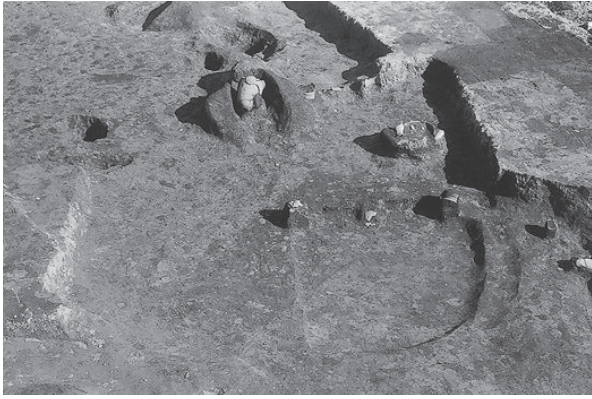
65号住居跡貯蔵穴土層断面（南東より）



66号住居跡（西より）



67号住居跡（南西より）



67号住居跡遺物出土状態（南西より）



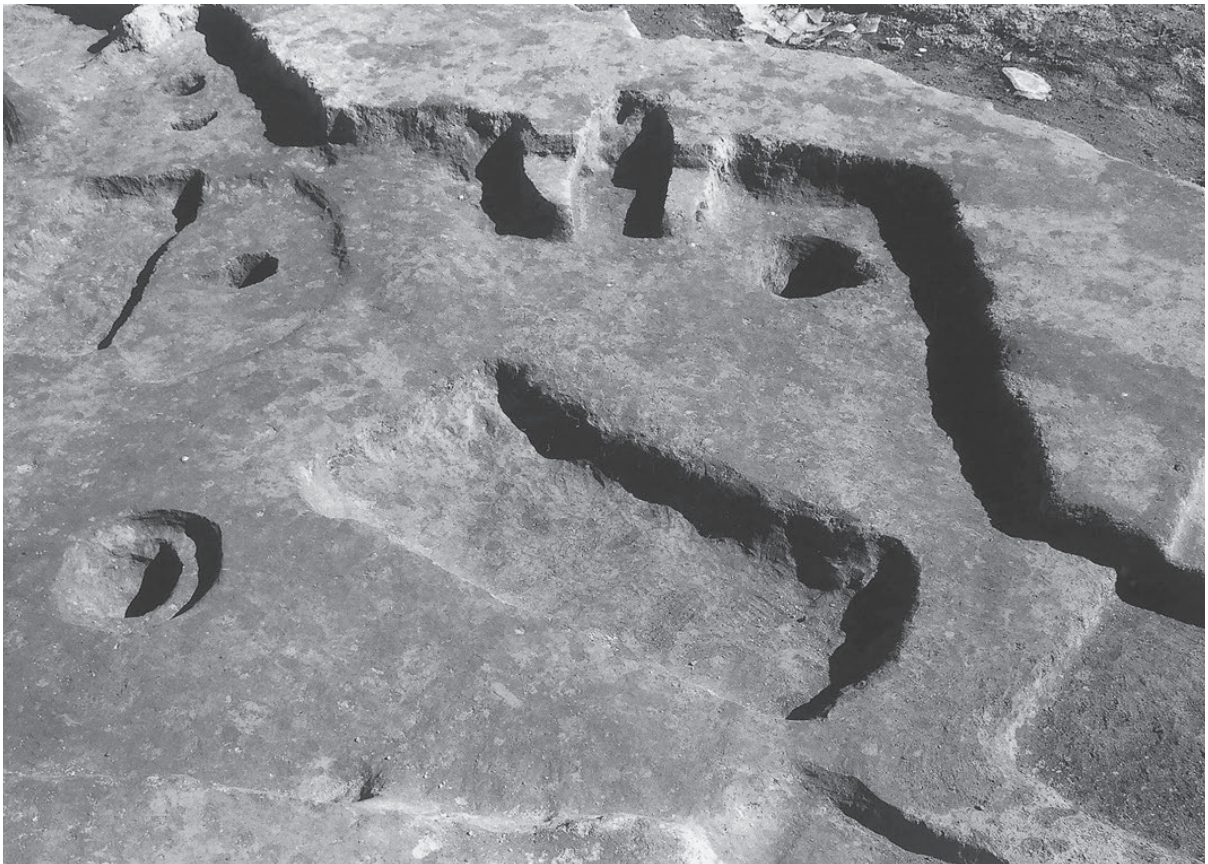
67号住居跡遺物出土状態（南西より）



67号住居跡カマド東西土層断面（南西より）



67号住居跡カマド遺物出土状態（南西より）



68号住居跡（西より）



68号住居跡南北土層断面（西より）



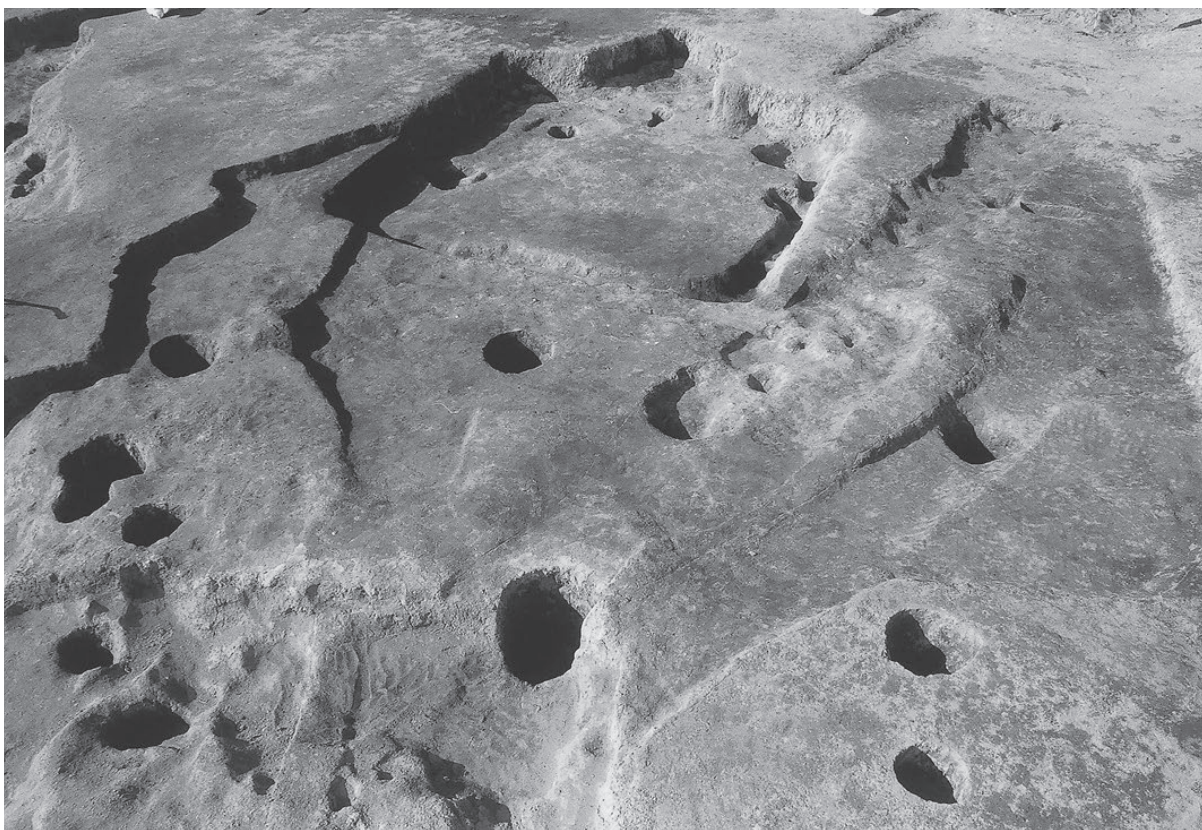
68号住居跡カマド南北土層断面（西より）



68号住居跡カマド（西より）



68号住居跡掘り方東西土層断面（南より）



71～73号住居跡（南東より）



74号住居跡掘り方土層断面（北東より）



74号住居跡掘り方（西より）



76号住居跡（北西より）



76号住居跡遺物出土状態（北西より）



76号住居跡掘り方（北西より）



1号掘立柱建物跡（西より）



1号掘立柱建物跡P 1土層断面（西より）



1号掘立柱建物跡P 2土層断面（北より）



1号掘立柱建物跡P 3土層断面（南より）



1号地下式壙（西より）



1号地下式壙土層断面（西より）



2号地下式壙（北より）



2号地下式壙東西土層断面（北より）



2号地下式壙南北土層断面（東より）



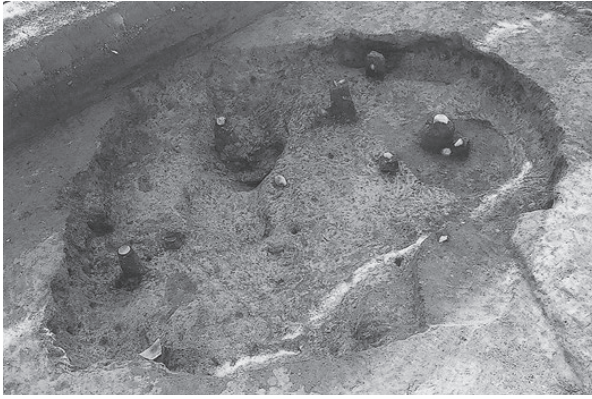
3号地下式壙（北東より）



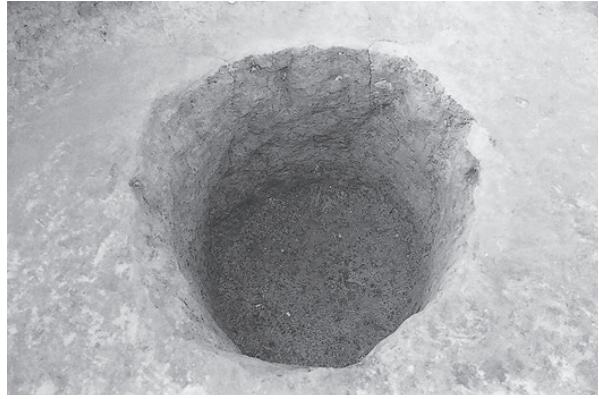
3号地下式壙B-B'土層断面（南東より）



3号地下式壙A-A'土層断面（北東より）



3号地下式壙遺物出土状態（北東より）



3号地下式壙北西床面（南より）



3号井戸跡（北より）



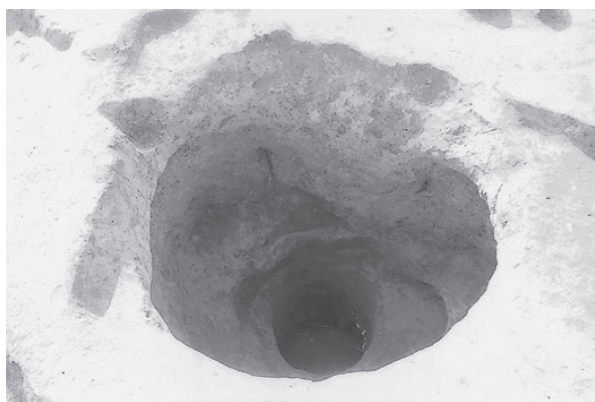
3号井戸跡土層断面（南より）



4号井戸跡（北東より）



4号井戸跡土層断面（北より）



5号井戸跡（南より）



6号井戸跡（北より）



10号土坑（西より）



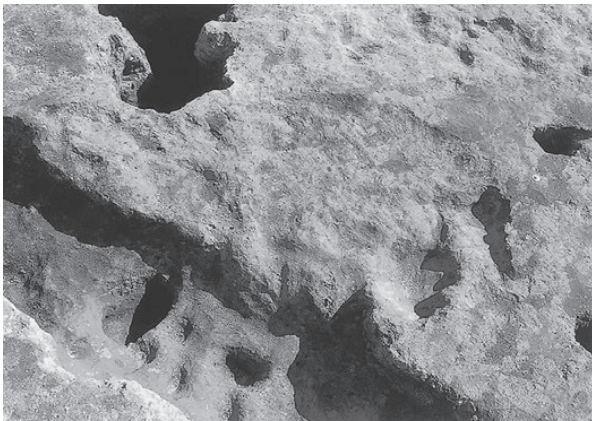
16号土坑（南より）



17号土坑（南より）



18号土坑（北より）



19号土坑（西より）



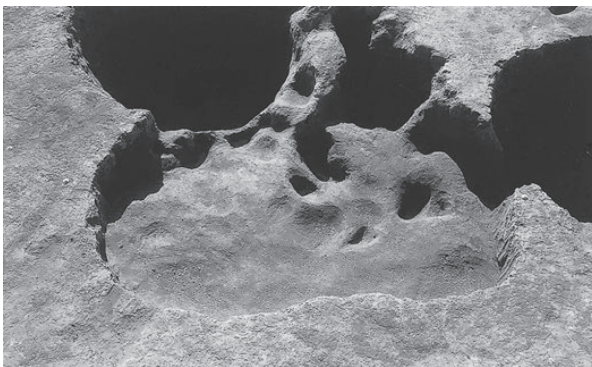
20号土坑（北より）



21号土坑（北より）



22号土坑（西より）



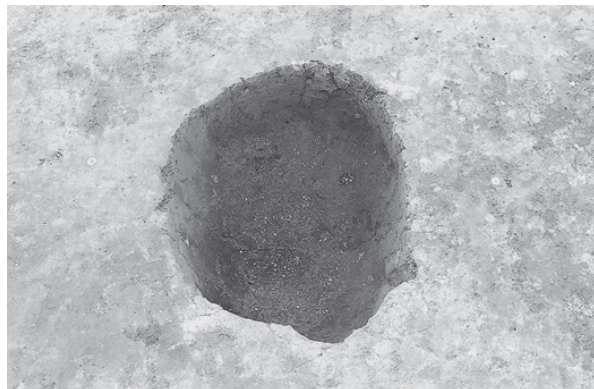
23号土坑（北より）



24号土坑（北より）



25号土坑（西より）



26号土坑（南より）



27号土坑（東より）



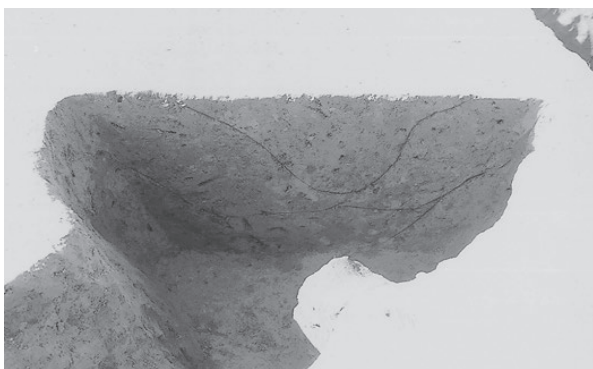
28号土坑（北より）



29号土坑（東より）



30号土坑（西より）



30号土坑土層断面（東より）



40号土坑（北東より）



1・2号溝跡（北西より）



1・2号溝跡（北より）



1・2号溝跡（北東より）



1・2号溝跡（東より）



1号溝跡全景（西より）



1号溝跡礫出土状態（北より）



1・2号溝跡連結部土層断面（西より）



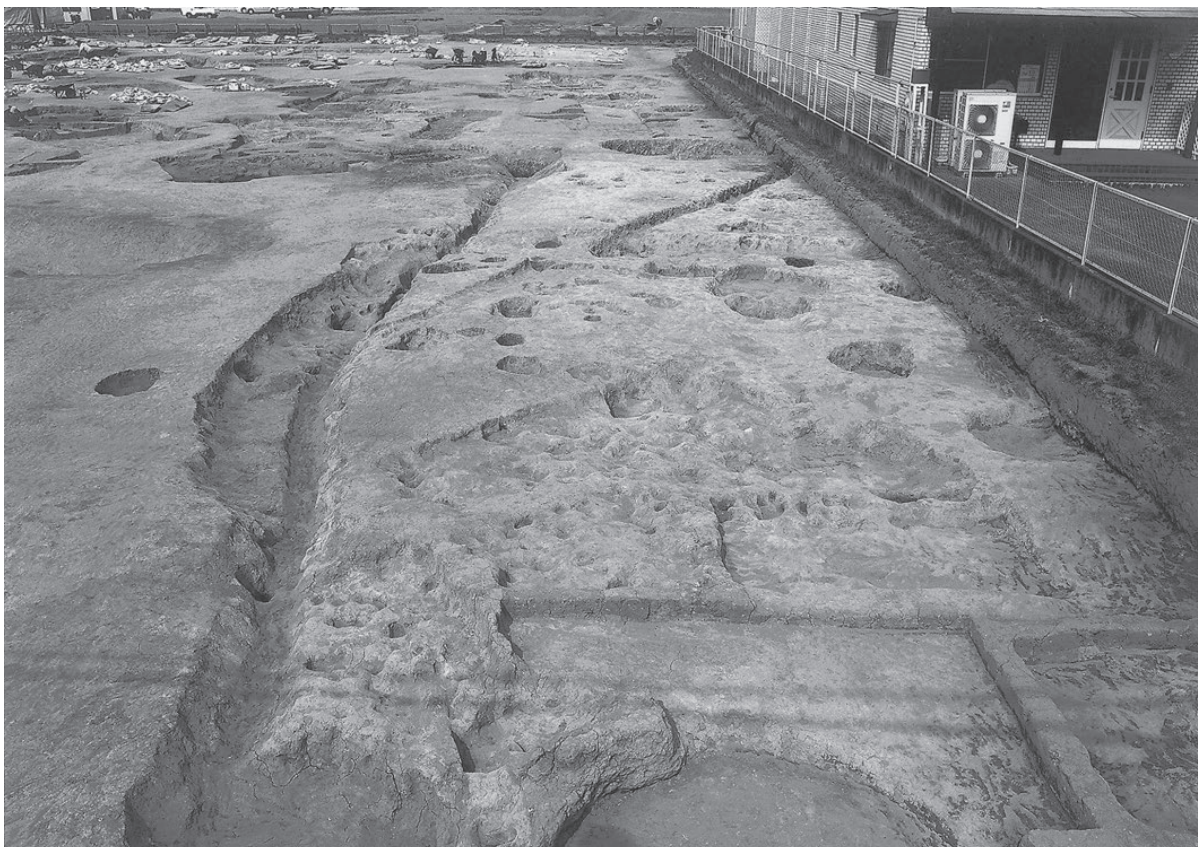
2号溝跡遺物出土状態（北より）



2号溝跡D-D'土層断面（南より）



2号溝跡C-C'土層断面（南より）



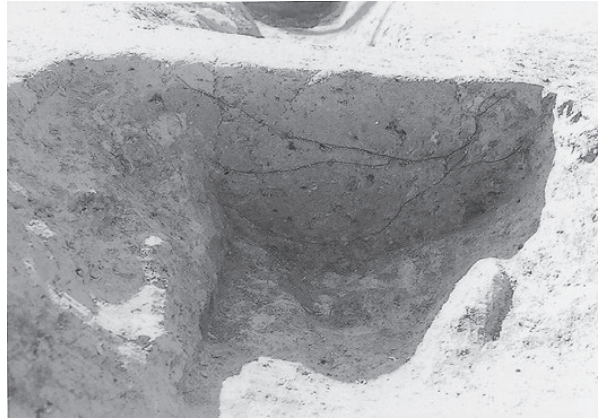
3・4号溝跡（南より）



3・4号溝跡（東より）



3号溝跡土層断面（北より）



3号溝跡土層断面（北より）



3号溝跡先端部土層断面（南より）



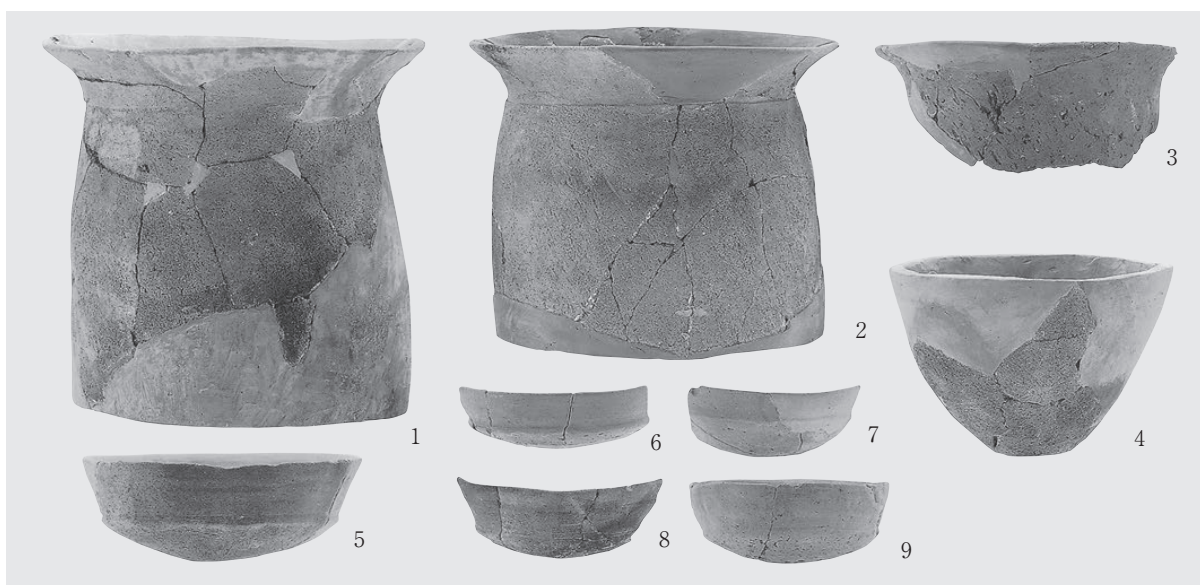
3号溝跡先端部（南より）



8号溝跡（南より）



31号住居跡出土遺物



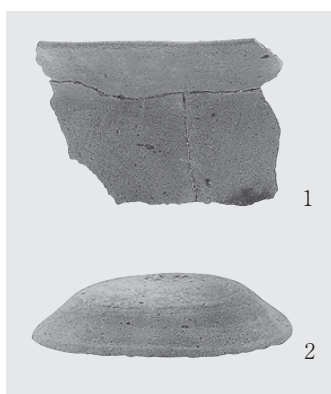
43号住居跡出土遺物



45号住居跡出土遺物



61号住居跡出土遺物



62号住居跡出土遺物



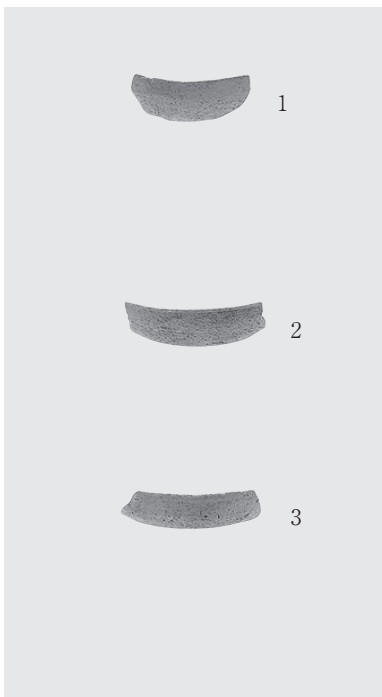
65号住居跡出土遺物



66号住居跡出土遺物



67号住居跡出土遺物



68号住居跡出土遺物



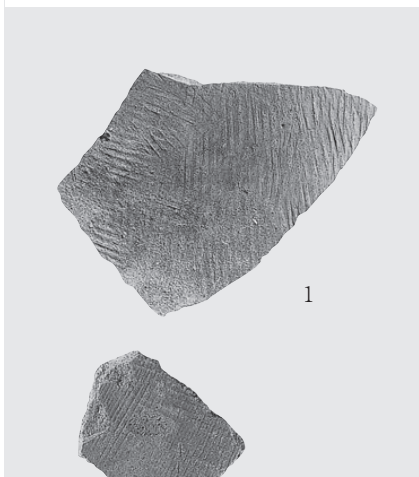
73号住居跡出土遺物



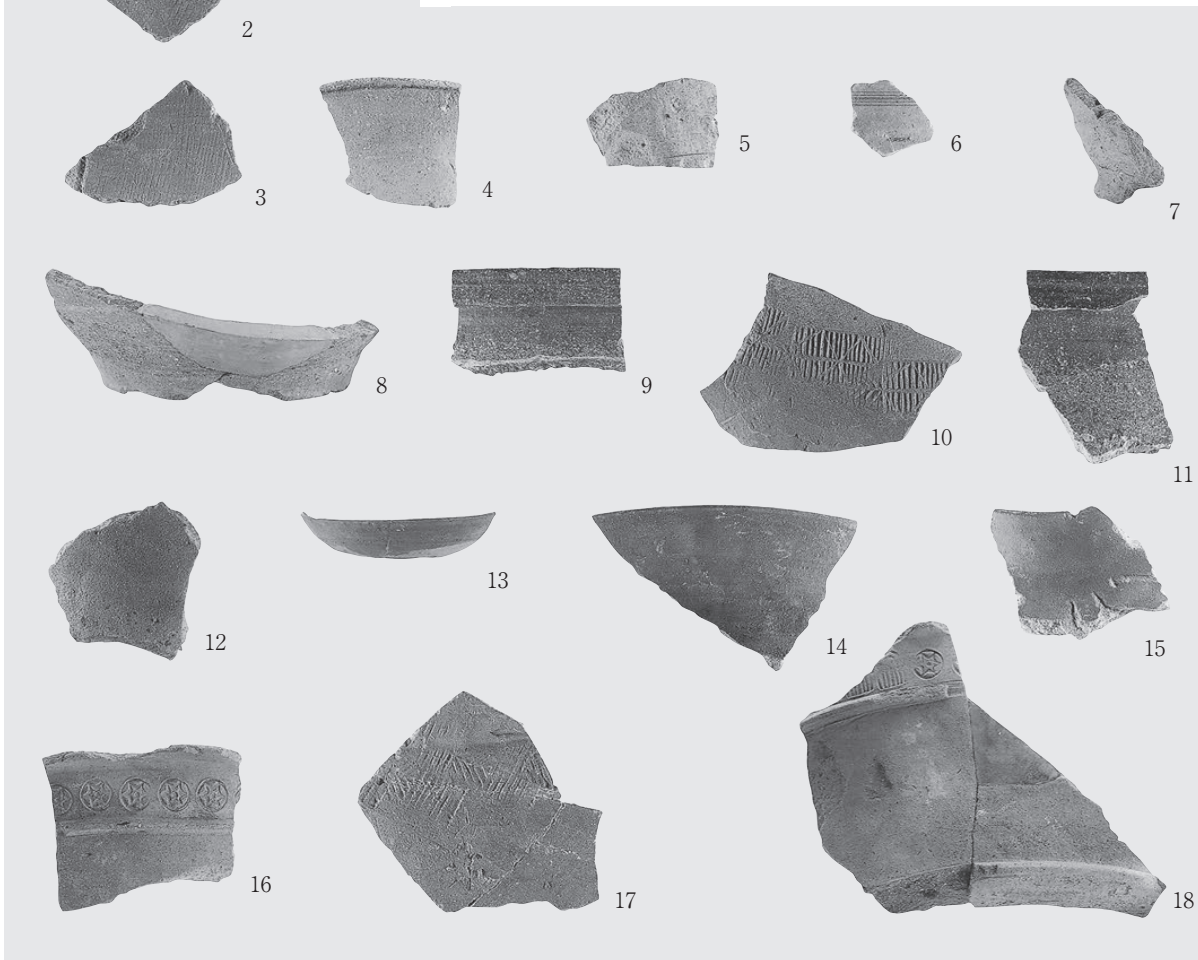
76号住居跡出土遺物



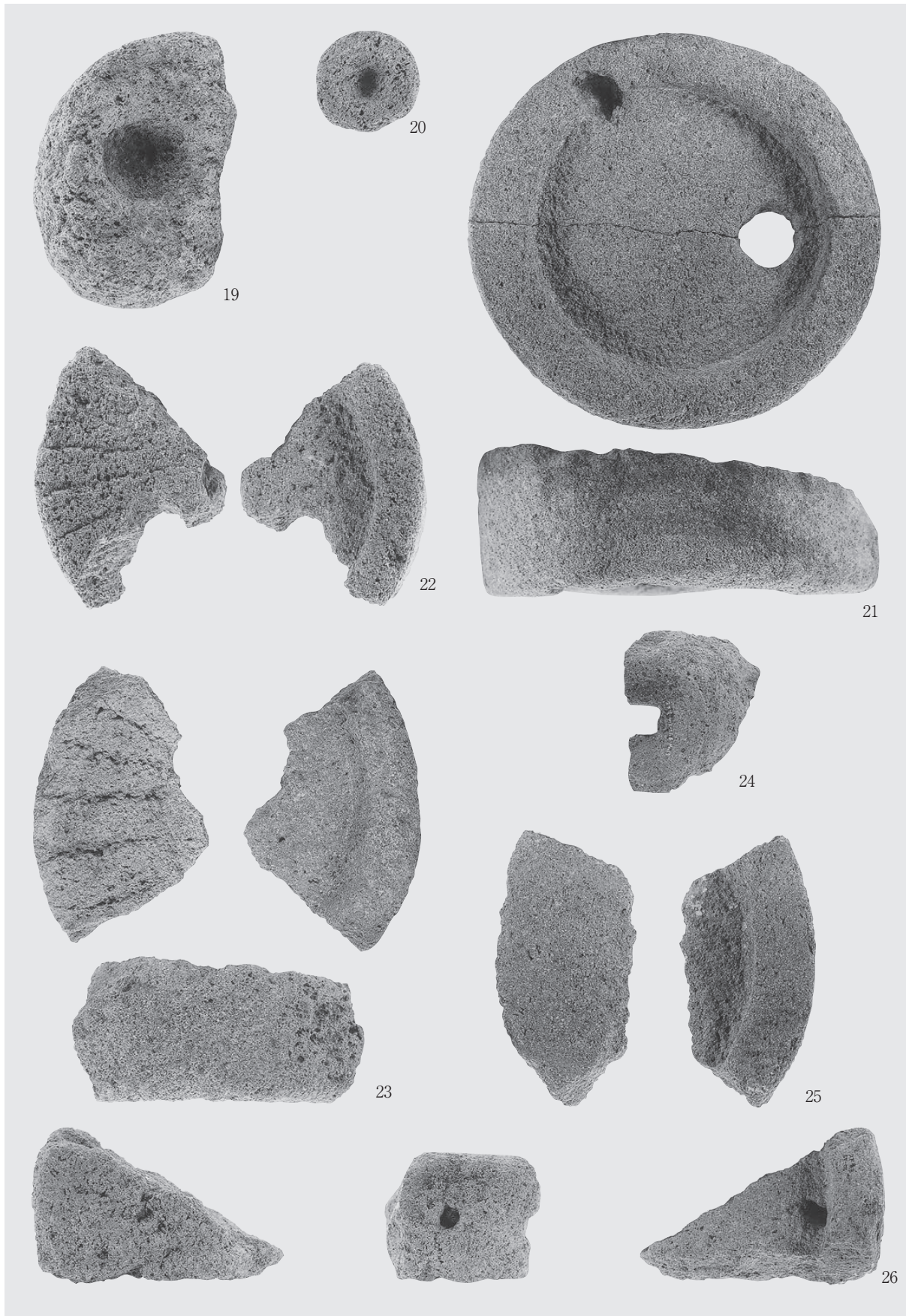
2号地下式壙出土遺物



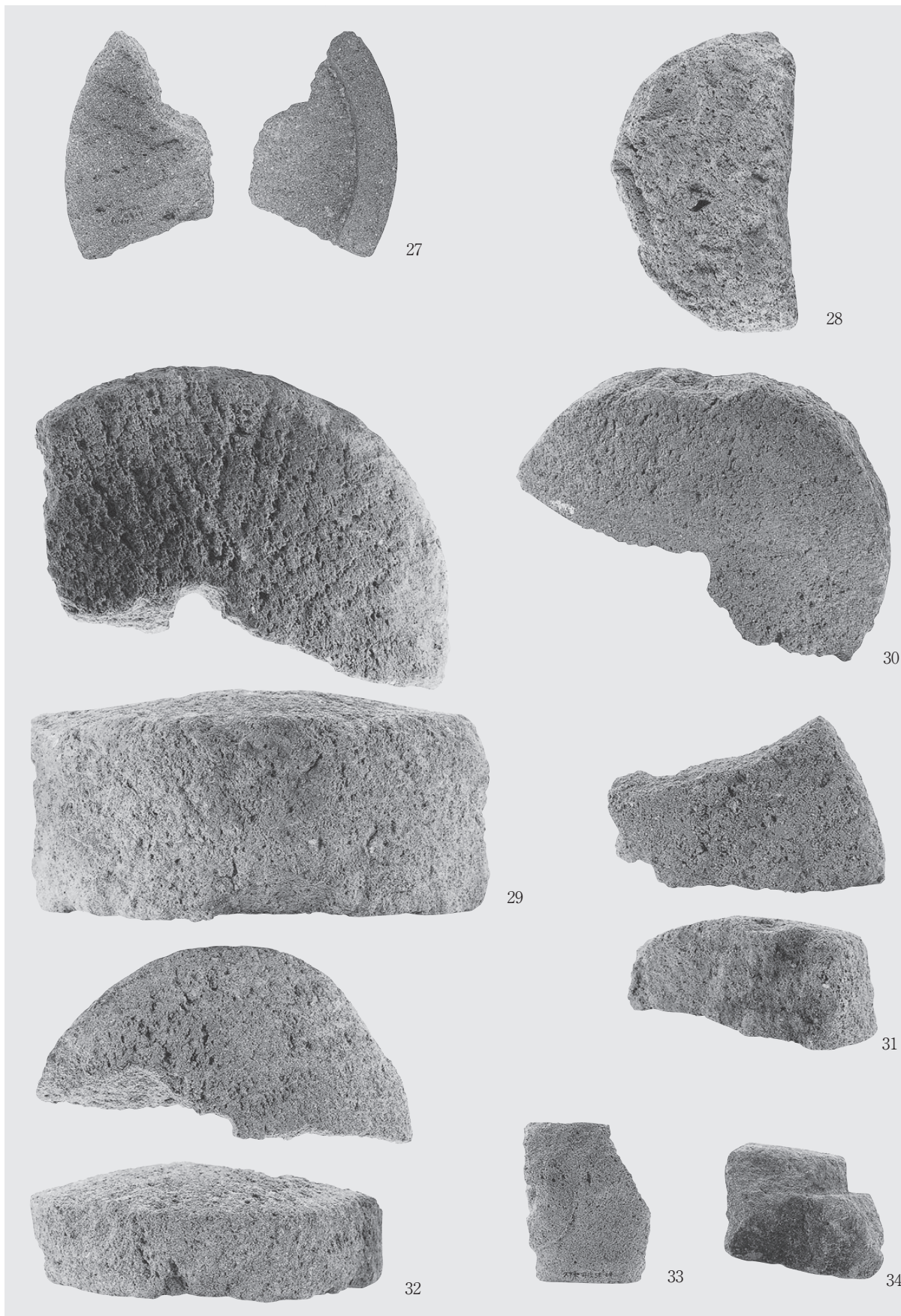
3号地下式壙出土遺物



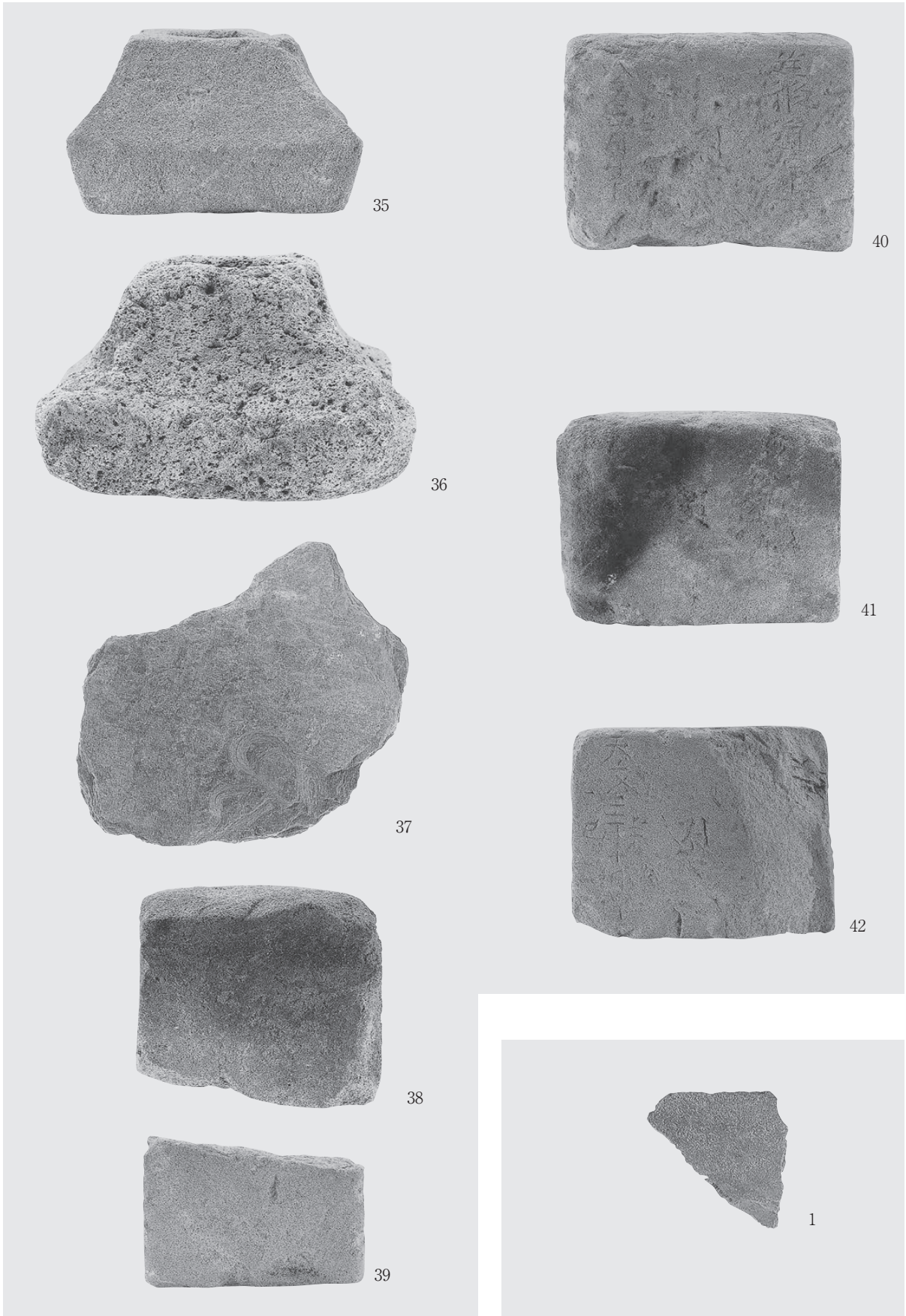
4号井戸跡出土遺物(1)



4号井戸跡出土遺物(2)



4号井戸跡出土遺物(3)

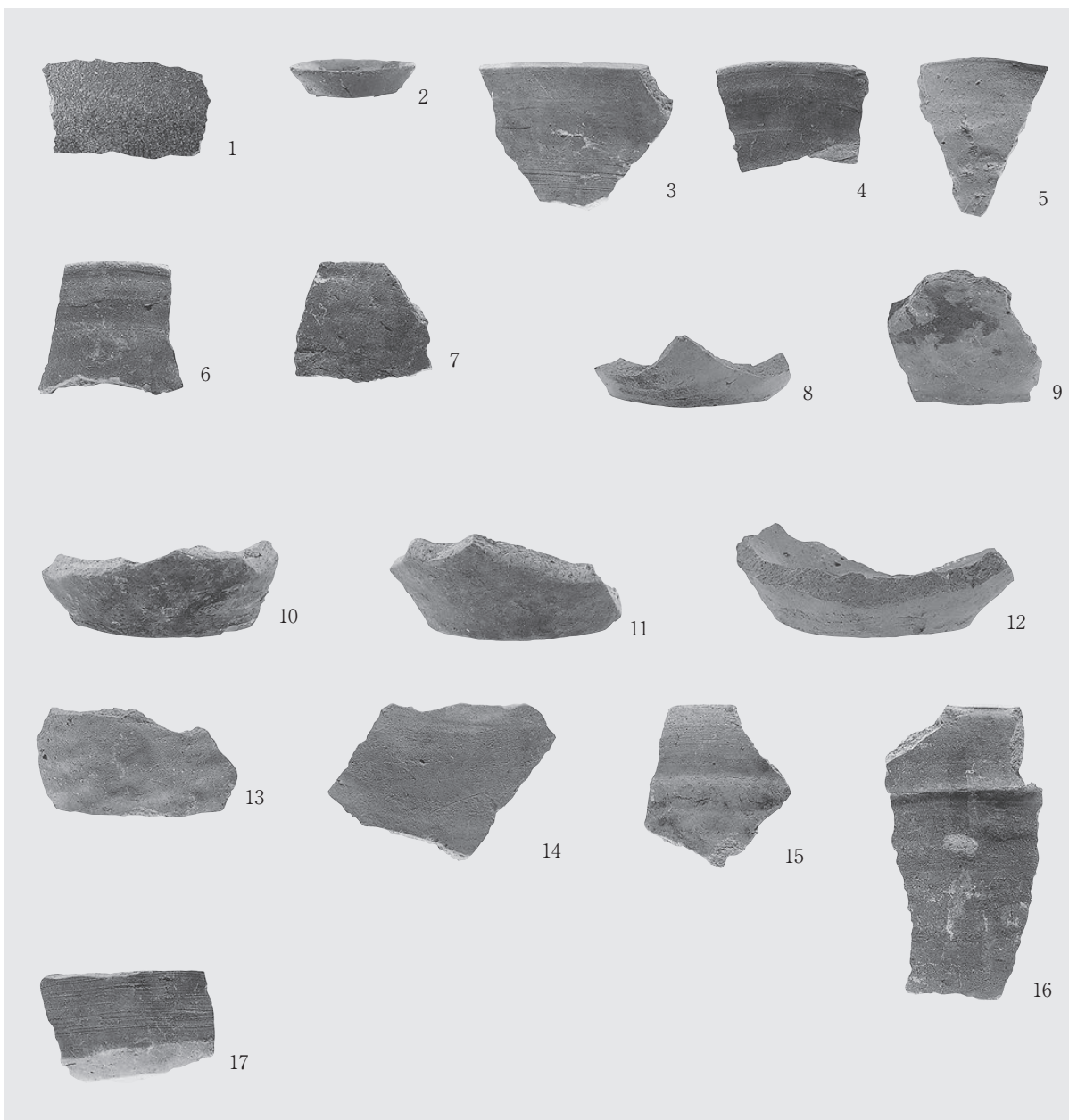


4号井戸跡出土遺物(4)

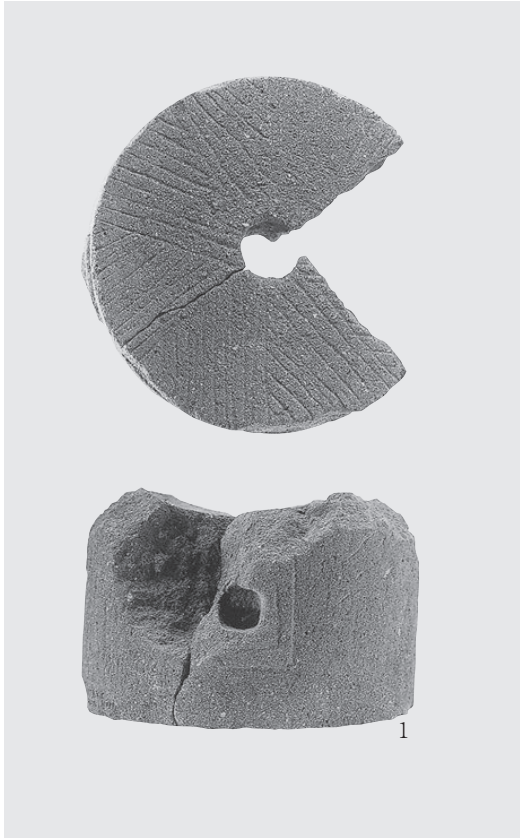
5号井戸跡出土遺物



1号溝跡出土遺物



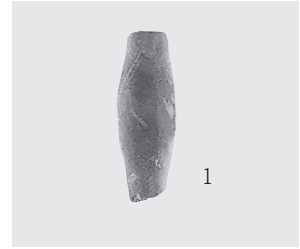
2号溝跡出土遺物



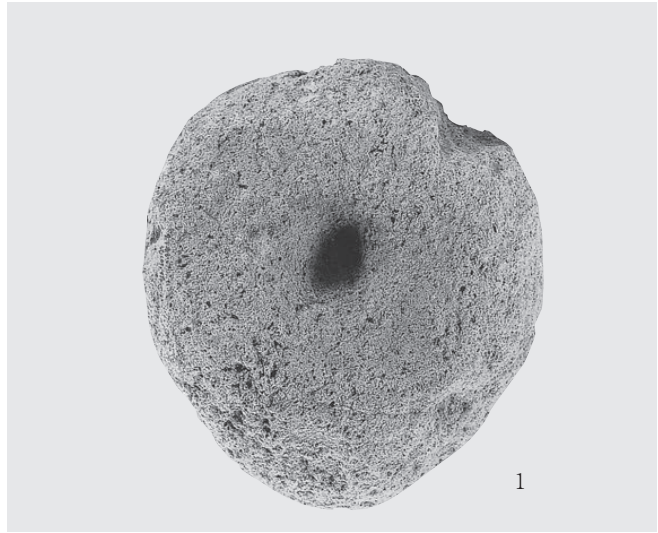
1・2号溝跡出土遺物



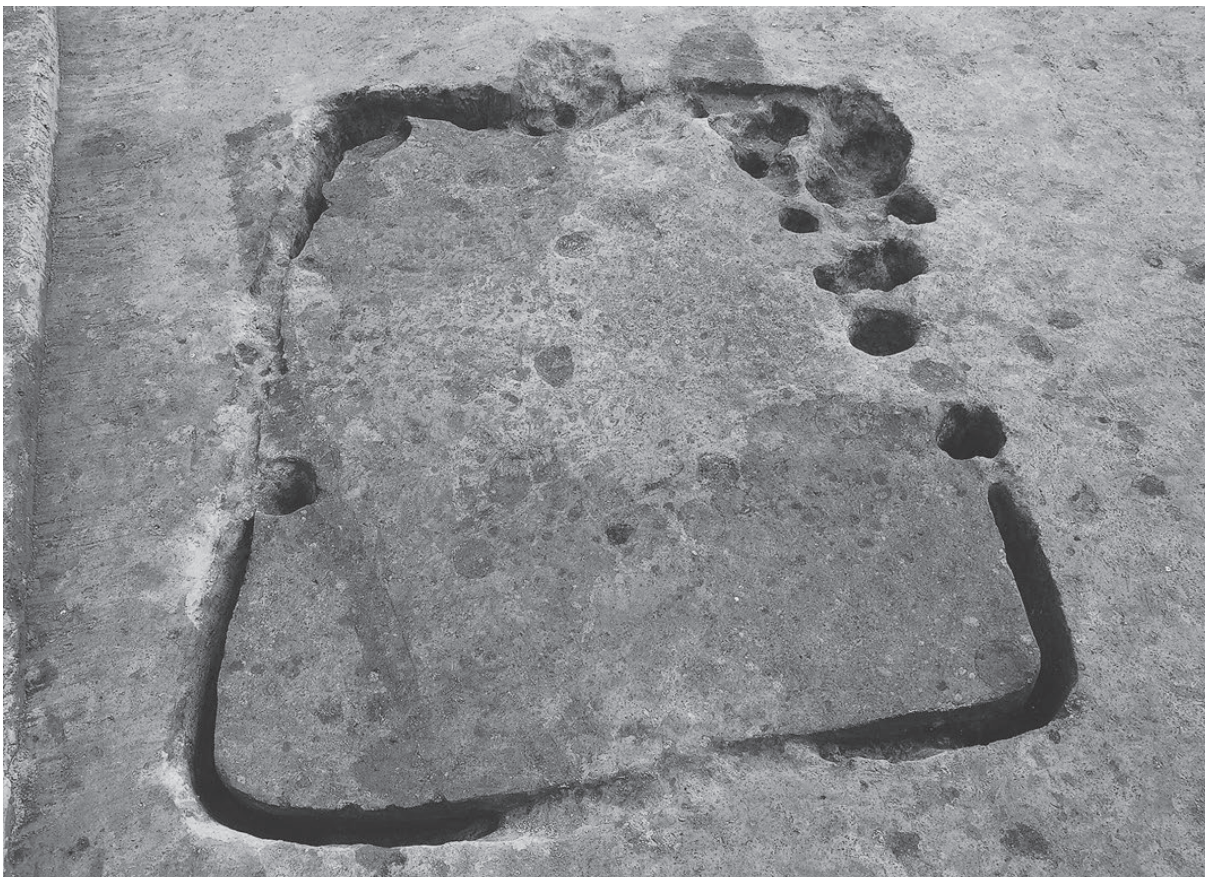
3号溝跡出土遺物



4号溝跡出土遺物



7号溝跡出土遺物



北堀久下塚北遺跡1号住居跡（北西より）



1号住居跡検出状態（南西より）



1号住居跡（南西より）



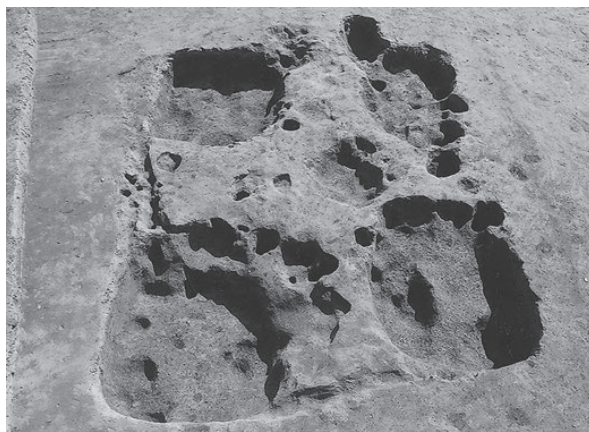
1号住居跡カマド遺物出土状態（北西より）



1号住居跡カマド（北西より）



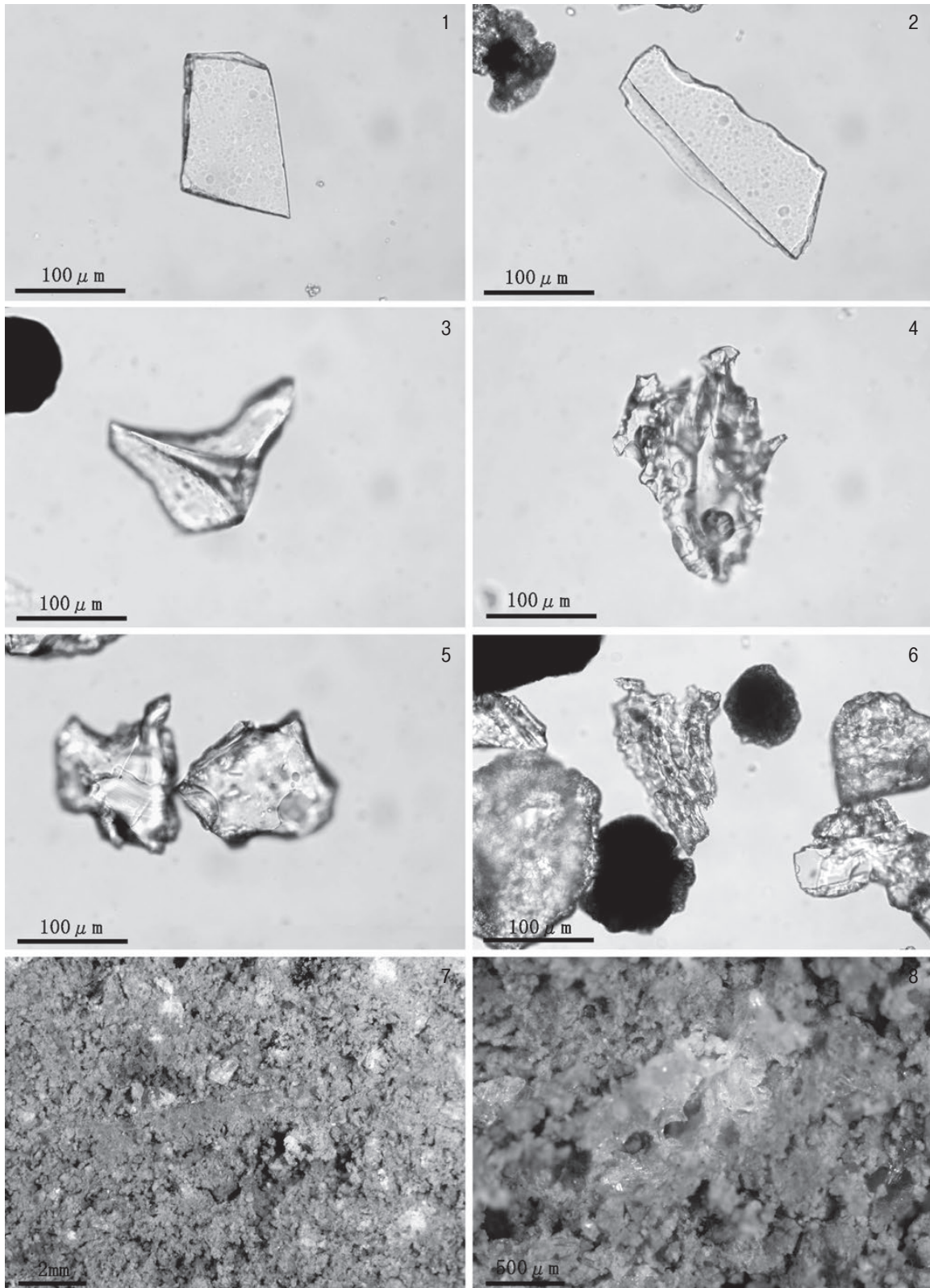
1号住居跡貯蔵穴（西より）



1号住居跡掘り方（北西より）

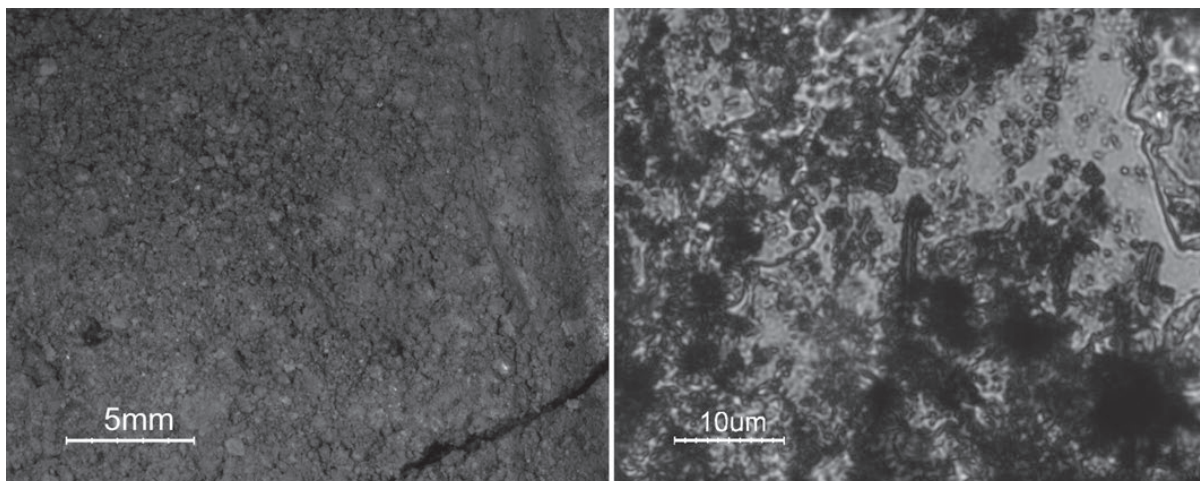


1号住居跡出土遺物

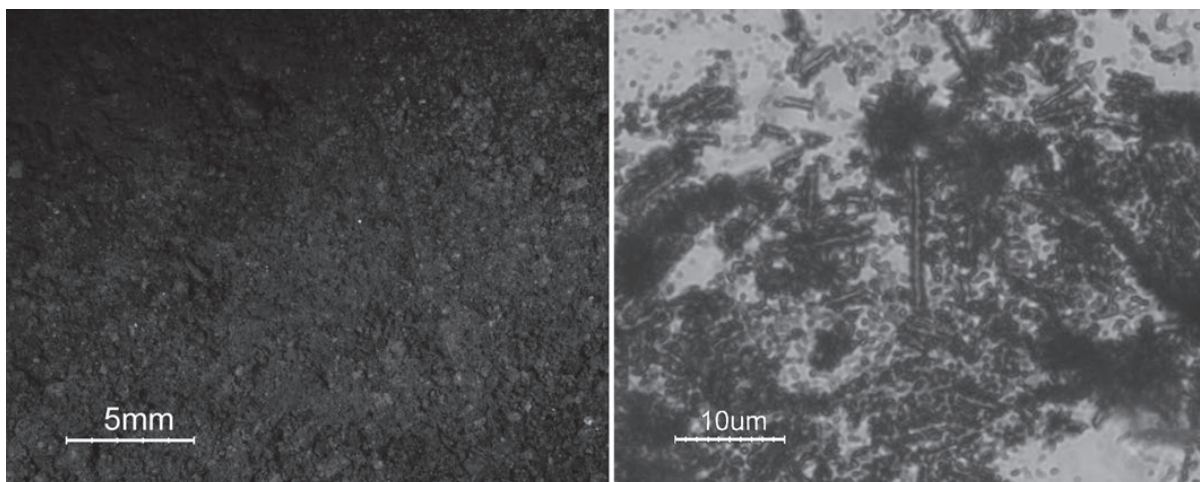


火山ガラス・軽石の顕微鏡写真

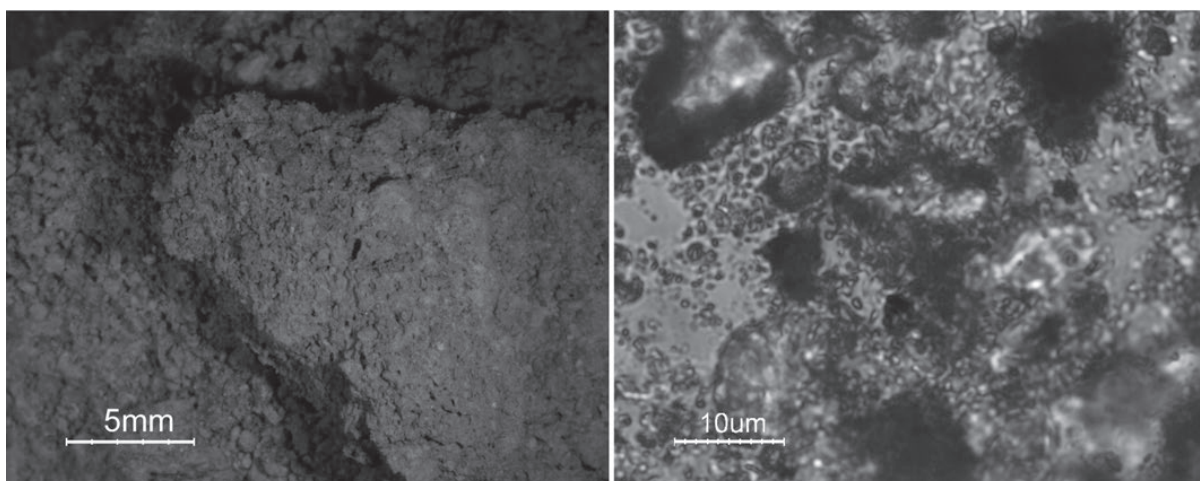
1. 板状ガラス (Tr. 6-9) 2. Y字状ガラス (Tr. 6-9) 3. Y字状ガラス (Tr. 6-9)
4. 塊状ガラス (Tr. 5-1) 5. 塊状ガラス (Tr. 6-10) 6. 繊維状ガラス (Tr. 6-9)
7. IV層中軽石 (Tr. 6) 8. IV層中軽石の拡大 (Tr. 6)



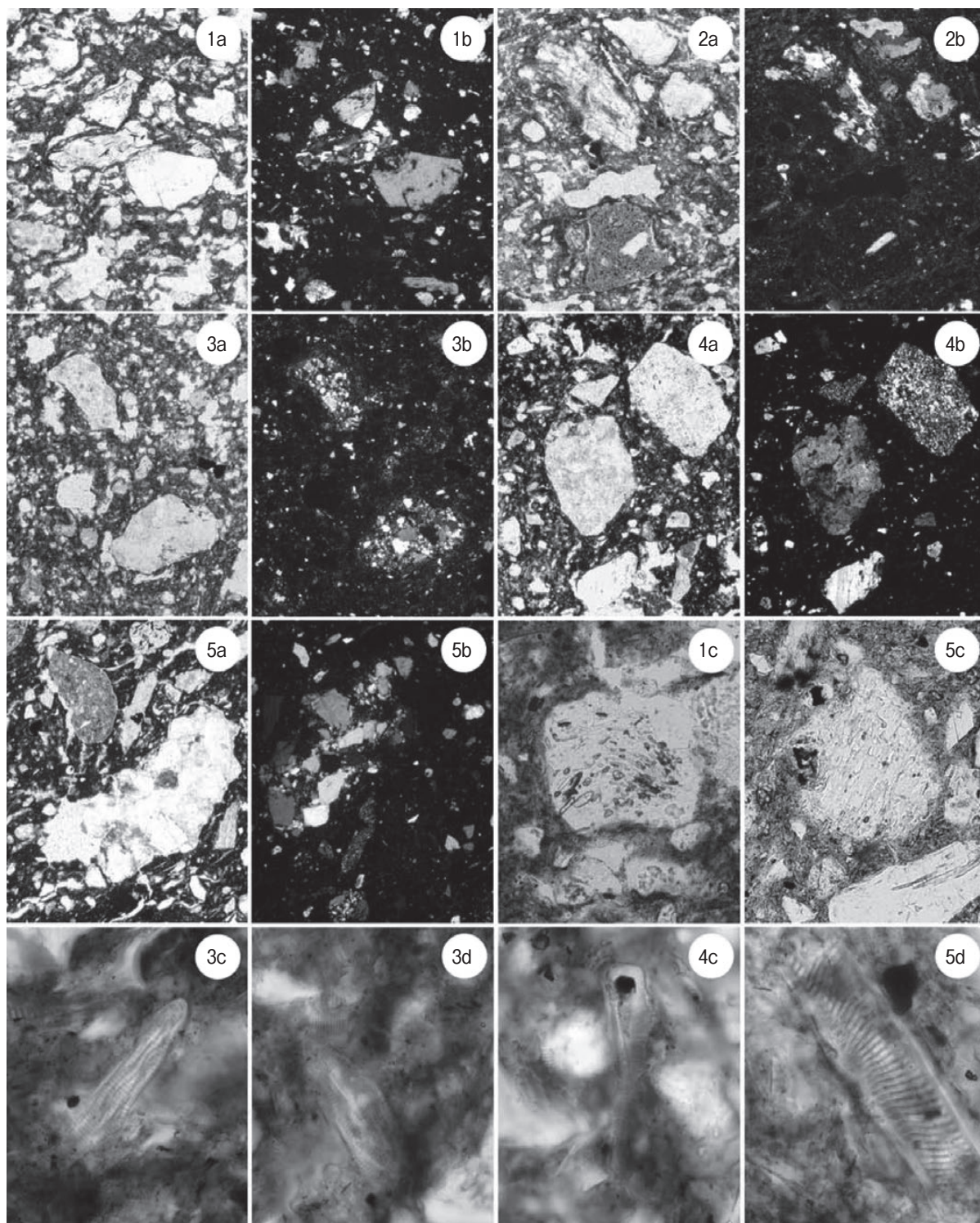
7号方形周溝墓出土試料



11号方形周溝墓出土試料



2号円墳出土試料
赤色顔料および光学顕微鏡写真



土器胎土の偏光顕微鏡写真 (1 a-5 b:500 μ m, 1 c・5 c:100 μ m, 3 c-5 d:20 μ m)

1 a. No. 1 (開放ニコル) 1 b. No. 1 (直交ニコル) 2 a. No. 2 (開放ニコル) 2 b. No. 2 (直交ニコル)
 3 a. No. 3 (開放ニコル) 3 b. No. 3 (直交ニコル) 4 a. No. 4 (開放ニコル) 4 b. No. 4 (直交ニコル)
 5 a. No. 5 (開放ニコル) 5 b. No. 5 (直交ニコル) 1 c. 石英類 (重鉍物含む: No. 1)
 5 c. ガラス質 (No. 5) 3 c. 珪藻化石 *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (No. 3)
 3 d. 珪藻化石 *Cymbella* 属 (No. 3) 4 c. 珪藻化石 *Eunotia praeupta* var. *bidens* (No. 4)
 5 d. 珪藻化石 *Pinnularia* 属 (No. 5)

報告書抄録

フリガナ	アザミヤマイセキ(Ⅲジ)・クゲヒガシイセキ(Ⅲジ) A1・B1 チテン・キタボリクゲヅカキタイセキ							
書名	浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次) A1・B1 地点・北堀久下塚北遺跡							
副書名	本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2							
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書					巻次	第13集	
編著者	松本 完・大熊 季広・藤波 啓容・亀田 直美・藤根 久・米田 恭子・伊藤 茂・丹生 越子・廣田 正史・瀬谷 薫・小林 紘一・Zaur Lomatidze・Ineza Jorjoliani・竹原 弘展							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行日	西暦2009年(平成21年)3月12日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡	(°'")	(°'")			
浅見山Ⅰ遺跡 (Ⅲ次)	本庄市西富田 字大久保山 1011-9他	112119	53-114	36°13'07"	139°10'38"	20070820~ 20080208	6522㎡	土地 区画 整理
久下東遺跡 (Ⅲ次) A1・B1地点	本庄市北堀 1280他	112119	53-064	36°13'20"	139°10'54"	20070903~ 20080314	1269㎡	〃
北堀久下塚北遺跡	本庄市北堀 1293	112119	53-066	36°13'25"	139°10'49"	20070903~ 20071109	164㎡	〃
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浅見山Ⅰ遺跡 (Ⅲ次)	集落 墳墓 古墳	旧石器時代	石器集中部1箇所		旧石器			
		弥生時代後期	竪穴住居跡3軒		弥生土器・石器・土製品(紡錘車)			
		古墳時代前期	方形周溝墓11基		土師器・石製品(管玉)			
		古墳時代中期	円墳2基		円筒埴輪・土師器・須恵器			
		縄文時代早期~近世	土坑62基 焼土跡2基		縄文土器・石器・弥生土器・内耳鍋			
		中・近世	溝跡4条					
久下東遺跡 (Ⅲ次) A1・B1地点	集落	古墳時代前期	竪穴住居跡3軒・溝1条		土師器・石製品(管玉)			
		古墳時代後期	竪穴住居跡7軒・土坑1基		土師器			
		古墳時代末~奈良時代初頭	竪穴住居跡5軒		土師器・須恵器・石製品(紡錘車)			
	集落 屋敷	中世	掘立柱建物跡1軒・地下式壙3基・井戸跡4基・土坑11基・溝跡3条		常滑系・山茶碗系・在地産土器石製品(石臼・茶臼・五輪塔・板碑)			
		中・近世	土坑6基・溝跡2条					
北堀久下塚北遺跡	集落	平安時代	竪穴住居跡1軒		土師器			

本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集

浅見山 I 遺跡（Ⅲ次）

久下東遺跡（Ⅲ次）

A1・B1地点

北堀久下塚北遺跡

一本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2-

平成 21 年 3 月 12 日 印刷

平成 21 年 3 月 12 日 発行

発行 / 本庄市教育員会

埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号

印刷 / 株式会社ぎょうせい